
神様機構

～悠久なる歯車～

某 柳風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様機構

〜悠久なる歯車〜

【Nコード】

N3696L

【作者名】

某 柳風

【あらすじ】

一体、俺の身になにが起こった！？

ある日、俺の前に現れた女は絶世の美女で暴君でそして天使だった。そこまでは良かったんだが、なんだって俺まで美女になってんだよ！！

は？世界の主人公の夢や願いを叶える？じゃないと元の姿に戻れないって？

なんの嫌がらせだよ！

え？なに？深く考えるだけ無駄だって？

……そうかい、そうかい、わかったよ！やればいいんだろ！や・れ・ば！

こんな感じのお話です（・（作者はファンタジーのつもりですが『お前のは異世界コメディだよっ！』とのツッコミを多々頂いております。

お？読んでやってもいいぜ？という方、いらっしやいましたら是非ともご一読くださいませ。

ご都合主義強めです。

挿絵が掲載されている話数には題名の後ろに と記入しています。

現在、大幅改稿中です。

改稿が終了した話にはタイトルに で目印をつけています。

すべて現時点で納得できるように修正を終えた後、印は削除致します。

プロローグ (前書き)

初投稿です。生暖かい目で見守ってやってください！

プロローグ

> i 1 5 4 6 5 | 2 1 5 1 <

平凡であること。

気が付いた時には無意識にそれを望むようになっていた。

くだらない？

そうは思わない。

思わない……

思わない？

高校を卒業し、社会に出て三年。必死に打ち込んだ武道を通して育んだ情熱も、いつしか失っていた。

心が乾いていく……

昔の自分が、今の自分を見れば間違いなく『くだらない大人になってしまった』と嘆くことだろう。

何事にも情熱を傾けられることが幼いと感じ始めたのはいつの頃だっただろうか。それに気が付いた時、自分の中の大切な何かが急激に色褪せたのを今でも覚えている。不思議とそれを幼かったのだと理解している自分に満足していた。

大人になっていく……

毎日繰り返されていく変化のない日々。

くるくる　くるくる

歯車の様に社会というシステムに組み込まれ回っている自分。

くるくる　くるくると……

ピピピピッ

朝六時半。購入した次の日からフル活動で主に付き従っている、頼りになるあいつの騒音が1LDKの我が家に響き渡る。文明の利器、目覚まし時計。素晴らしい。

しかし起きがけの脳内は動作不良を起こし、そいつを怨敵と認識する。必要以上の力で理不尽に殴り飛ばされる、あいつの同胞は全国に何人いるだろうか。種の裏表紙を飾れそうな勢いだ。などとくだらない事を考えつつ起床。

寝ぼけ眼を右手でこすりながら洗顔。歯磨きを済ませトーストを焼きながら、作業着へと着替えていく。

俺、川篠定臣かわしのさだおみは一人暮らしだ。

両親は幼い頃に交通事故で死亡している …… などという、どこかの主人公チックなエピソードは一切無く、就職の折りに職場近くのアパートへと引越しただけという、世間一般的に大多数を占めているであろう事情から…… まあそんなことになっている。

そんな俺の就職先はというと、これまた体育界系高卒男子にありがちな工場勤めだったりする。

低賃金ながらも必要最低限の安定収入。夏と冬には？賞与？とい

う名の、ナスが棒に刺さったような二つ名の彼をもたらしてくれる
その？会社？というコミュを、俺はそれなりに気に入っていた。

職場での人間関係は極めて良好。このまま歳食って人生を謳歌する
のも悪くはないなあなんて思ったりもしてはいるんだが……まあ
なんというか我ながら

平凡だと思う。

「ふう……朝からテンション下がりがくりなんですが！ 変な夢見
たせいですかね!？」

その日、俺の朝はそんな独り言から始まった。

くるくる　くるくる

今朝の夢は覚えていた。どこか知らない色褪せた場所、そこには
大きな機械があつて、俺はその機械の歯車の一部となって回ってい
る。そんな夢だった。

夢の中の自分の姿を思い出しただけで萎えてくる。？その俺？は
虚ろな瞳で、ただ無機質に同じ動作を繰り返していた。

夢は現実で自分が体験したことや考えていたことを軸に形成され

る。すぐに俺は今朝の夢のきっかけを作った犯人に思い当たった。

「間違いなくこれ芳原さんのせい！」

芳原さんは俺の会社の先輩で、入社して以来、俺のことを弟のように可愛がってくれている。

そう、犯人は間違いなく芳原さんだ。

ようやくハッキリしはじめた頭で俺が思いだしたのは、昨日の職場での彼との他愛もない会話だった。

回想

「定臣もようやく一人前で数えられるようになったよな」

缶コーヒーをぼんとこちらに投げつつ、芳原さんがそう言ってくれた。普段おちゃらけてはいても、仕事に関しては厳しいこの先輩のことを俺は尊敬していた。それだけにそんな些細な言葉が嬉しかった。

「ありがとうございます！」

若干の照れを隠しつつ、即答した俺の声は自然と大声になってい

た。

「うっせーよ！ 体育会系うっせーよ！」

「すみません！ 珍しすぎてつい」

「まあ礼儀正しいのは結構なことだけどな定臣よ？ あんまり気張るなって。今時、先輩は神様とか流行らないぞっと」
カンツ 「あ”っ”」

空缶をごみ箱へシュート。案の定、束の間のフライハイを強要された彼はゴミ箱の外へと旅立っていった。

「プークスクス」

「前言撤回！ 礼儀正しい撤回！」

「それにしても入ったの見た事ないっすねえ……芳原さんが缶入れたとこと、彼女できたとこだけは見た事ないっす」

「ちょ！ おまつ！ 彼女関係なくね？ 話題無理からすぎね？ イケメン死ねよ！」

休み時間の軽い会話のキャッチボール。 不意に芳原さんが真顔になった。
タバコをふかしつつ軽いため息つく。

「なあ定臣 お前、俺みたいにはなるなよな」

「……ちよっと言ってる意味が」

「んー、まあ肩の力いれすぎるなってこった。お前見ると自分が若かった頃、見てるみたいない気分になってな。必死に働いて働いて、気がつくともう周りは敵だらけよ」

「なんかあつたんすか？」

芳原さんがタバコの灰を灰皿にトントンと落とした。

「まあ愚痴もはいるけどな。本気で仕事やりすぎると、やってねー連中から無駄に妬みつらみを買っわけよ」

「どうやらまたスイッチが入ったようだ。仕事態度を語りだすと、この先輩は妙にくどくなる。俺は繰り返し使ってきた魔法の言葉で会話を繋ぐことにした。」

「言う奴には言わせておけばいいんすよ」

「まあそうなんだがな。お前にはうまくやって欲しいわけよ、優しい先輩としては。別に仕事を手抜きしろってわけじゃね

ーんだがな。出る杭は打たれる……… うんたらかいたら………

「……… まあ、お前には器用に生きて欲しい。言いたい事はわかったか………？ まあ聞き流せ」

相変わらず長かった。もちろん言うまでもなく、聞き流している。俺は話題と場の空気を換えようと、わざとふざけて返事を見せた。

「自分、不器用ですから（目を細めて）」

「キヤー！ けんさくん……っって言っかつ！」

相変わらず神速を凌駕する速度でノリツツコミが返ってきた。俺の目論見を看破しつつも、ノツてくれる。俺はそんな芳原さんのことを会社の先輩である以上に兄のように思っていた。

「ご忠告感謝っす！ でも俺は芳原さんかっけーと思ってるんで、今更考え方は変えないと思います」

我ながら臭い台詞である。

本音を口にするのはどうしてこうも恥かしいものなのだろうか。俺は照れ隠しから視線を天井へと逃がした。

薄暗い天井には等間隔で水銀灯がぶら下がっていて、休み時間にも関わらずクレーンの振動を与えられた彼らはゆらゆらと揺れていた。

なに笑ってんだこらあああ！

笑われている気がしたのでとりあえずガンを飛ばしてみた。

無機質な物に対して自身の感情をぶつけるのは如何なものか。内心で自問自答するも、すぐにその馬鹿らしさに脱力する。そもそも水銀灯を？彼？とするならば？彼？はクレーンに振動を与えられ、強制的に揺らされていただけの被害者なのである。ならば先程の非礼を詫びる必要があるのではないか。

妄想から暴走に移行した俺はしかめっ面から一転、慈しむような視線を水銀灯に向け始めていた。そんな俺に一切、気付かずに芳原さんは先程の会話を続けている。

「まあなんだかんだで俺はお前のことが気に入ってるんだけどな」

そう言った後、芳原さんは俺の肩をぽんと叩いてこう続けた。

「誰にも言わなくていい。心の奥底の奥の方にしまい込んで置けばそれなりに役にたつ事、教えといてやる……」

肩を叩かれ反射的に芳原さんに視線を戻した俺は、その真顔に思わず息をのんだ。

「立派な社会人と世間で呼ばれる連中は如何に組織の歯車に徹せられるかだ。

何も考えないで忠実に同じ動作を延々と繰り返せる人間。

悪く言えば機械により近づける人間の事だ。ドライに笑顔と反省顔以外の顔を封印して、それを実行できる人間が出世していくわけだ……」

まあコーヒで酔っ払った先輩の戯言だけだな」

必ず最後に話を茶化して終わらせるあたりが、如何にもこの人らしいなと思いつながら、相槌を打ったところで休憩時間の終わりをチャイムが告げた。

回想終了

ジリリリリ!!

出勤時間を知らせる二度目の目覚まし時計が鳴った。
俺はテンションが上がらないまま朝食を済ませてしまい、仕方なく出勤する。

その日もいつも通りに就業し、帰路につく。帰宅すると適当な時間に家の用事をこなして、趣味のネットゲームで束の間の疲れを癒し、眠る。

くるくる　くるくる

それが続くはずだった。

何がきっかけだったのだろうか？　わからない。

今になって思い返してみてもわからない。

あえて挙げるなら　　仕事中に機械の歯車が欠けた。
それはとるに足らない些細な出来事だった。

小さな異音はするものの、機械機構はそのままに、何の支障も無く作業できる。

大きな機構の一部でありながら、支障が出ればいつでも交換できる歯車。

見えて

つまらない。くだらない。

そう思った。

そして

置き換えてしまった。

歯車と自分を……

気持ちが沈んでいる。別に不満があるわけでもなく、疲れているわけでもない。

ただ虚しくなってくる。

社会に出て数ヶ月に一度、こういつ状態に陥ることは自覚している。

その日は仕事の効率が悪く、定時前に体調を心配してくれた芳原さんを苦笑いでやり過ごし、十七時のチャイムで家路についた。

自宅は会社から徒歩十五分程の距離だ。いつもは少し遠回りになるが、百円で買える自動販売機に寄ってコーヒーを買って帰る事を日課としている。しかしその日は近道である高架下のトンネルを通って帰ることにした。

「歯車くだらねー」

声に出してみたものの、予想した通り沈んだ気持ちが浮かぶことはなかった。

俺は何やってるんだ……無駄に笑ってテンション上げてみるか？

「……フハハハハハ！」

どこかで見えたアニメの中の登場人物よろしく笑ってみた。もちろん恥ずかしいので、前後に人がいないのは確認済だ。

『いきなり思い出し笑いとは気持ち悪い奴だな。定臣は』

突然、背後から女の声がした。俺は思わずびくつと震えた。

「びくつたあ……」

腰が抜けそうになりながら、慌てて振り向いた先で俺は見た。そう、見てしまった。絶世の美女を。

恐ろしいほど美しいその姿からは、綺麗という印象よりも先に恐怖を感じた。

鮮やかな黒髪を足元まで伸ばし、肌は透き通る様な白。身に纏った黒いドレスは一目では日本の物とも外国の物とも思えなかったが、胸元や袖口から覗く肌を一層、白く際立たせている。

その女は口元を若干歪ませながら、尊大に　　そして不満そうに、腕を組んで俺の事をじっと見ていた。

思わず一步後ずさる。

「……」

何なんだこの人……

それにしても無茶苦茶、綺麗だな……

その時、その女に抱いた感覚。それは幼い頃に初めて感じたもので、それが芸術作品だと知らずに感動したあの時の感覚に近かった。そしてそれと同時に、俺は底冷えするような恐怖を再確認していた。女のワインレッドの瞳は明らかに強者のものであり、捕食者の威圧感を放っていた。

『なんだ、私に惚れたのか？　定臣は』

女のその言葉に、美しさと同時に感じていた恐怖を忘れ、見惚れていたことに気付かされた。

それにしても見ていただけで自分に惚れたのかとは随分と自信過剰な女だな。

そもそもこの女は何故、俺の名前を知っているのだろう。俺の知り合いにこんな美女はいない。記憶を探ってみたものの脳内ググ様にヒットはなかった。

「えー……どちら様でしょ？」

とりあえず会話してみることにした。

『私は天使だ』

無理だった。

即座に、訓練された兵士よろしく綺麗な回れ右を披露し、後方への進軍を試みる。

『どこへいく』

『まだ話は終わっていないぞ』

どうやら逃がしてはくれないらしい。

その一言と同時に俺の後髪は意味不明な女の怪力によって引っ張られた。というか痛い。すごい痛いです。

「わ、わかった！ 聞く！ 聞くから！ まず離せ！」

とりあえず痛いので離してください。

それから数秒後、正確には俺が半泣きになった頃、ようやくその女は謎力を僅かに緩めた。とはいえ解放してくれる気は毛頭無いらしく、俺の後髪はいまだにぐわっしりと掴まれたままだった。

後ろ髪を引かれるとはこんなことを言うんじゃないなどと、妙な間を取り繕うべく無駄なことを考えてみる。じつとこちらを見上げている無機質な瞳に糾弾されたような錯覚を覚えた。

「え〜と……俺の名前は川篠^{かわしのさだおみ}定臣。確か初対面だと思ったけど……
そっちは？」

埒が明かないのでとりあえず名乗ってみる。

『天使だと言ったはずだ。……定臣は人の話を聞いていないな』

名乗っても埒が明かなかった。

とはいえ、再び会話を試みたことで逃走を諦めたと思ってくれたらしく、ようやく俺の後髪は解放された。

「じゃー！（ゴゴゴ）」

千載一遇のチャンス此処に在りとはかりに、心の中で拳を握り締めて逃走を謀る。

痛い。無理だった。

即座に引かれた後頭部が再び悲鳴を上げるはめになった。

そもそも相手が男ならば、それなりに腕に覚えがあるので軽く逃げ果せるのだが、相手が女とあっては力尽くというわけにもいかない。

仕方がないか……

諦めて、降参とばかりに軽く両手を挙げる。すると女は軽く鼻を鳴らし、俺の後髪を再び解放した。

「はあ……どうやら聞き方が悪かったようだ。

……あなたの名前は？」

俺がそう聞くと女は再び鼻を鳴らし、やれやれといった様子で答えた。

『小波透哩。天使だ』

意地でも天使らしい。

俺は再びため息をつくとき、この苦行のような会話を続けた。

「OK、天使は置いておこう。

それで小波さんは何用で？」

『……透哩でいい』

会話のキャッチボールはなんとかできるみたいだな。ここは適当に誤魔化して逃げよう。とりあえず逃げよう。とはいえ、うまく逃げる自信が無い。まずは指示に従っておいて様子を見るべきか。

愛想笑いは得意中の得意だ。俺は日本人の基礎アビリティでもある？それ？を見事に発動させて、この場を切り抜けることにした。

シャキーン！ 定臣は笑顔を装備した！

効果音とログを脳内で妄想しつつ、会心の笑顔を披露する。

次の瞬間

「わかったよ透哩！ それd『バキッ』」

俺が台詞を言い終える前に鈍い音が耳に届いた。それと同時に俺の世界は暗転した。

なにやら綺麗な右ストレートが顔面に飛んできていた気がするのだが……

「ハッ!？」

目を覚ました俺を迎えたのは見慣れたいつもの天井だった。

ここは紛れもない我が城。つまるところの自宅である。

上半身を起こし、時計を見て時刻を確認する。現在の時刻は十八時前。どうやら帰宅早々に居眠りをしたようだ。

「なんだ夢か……にしては妙にリアルだった」

肉体的な疲労よりも精神的な疲労の方が、肉体的に疲れているように感じることもある。一見して矛盾しているようで実際にそういう場合があることは今までの経験で学習していた。

悪夢から始まった今日は？そういう日？だったのだろうと、先程の奇妙な夢にそう中りをつけ、自分を納得させた。

その時

『人間は目覚めるとそう言うのがシキタリなのか定臣』

視界の外から声が聞こえた。

慌てて起き上がり振り向く。視線の先には夢そのままに、偉そうに腕を組んでいる？あの女？

小波透哩こなみとうりがいた。

「おいおいマジかよ……」

『どうかしたのか？ 定臣』

なんでこいつは俺の自宅を知っているのか。そもそも初対面で名前を知っていたのもおかしい。

いや待て、それよりも尋ねるべきことがある!!

思考を巡らせ、疑問がそこに到達すると俺は透哩に詰め寄るようにして尋ねた。

「お前さっき俺のこと殴った!？」

『……ああそのことが。』

いきなり名前を呼び捨てにされて反射的に殴った。まあよくあることだ定臣』

……それだけ？ねえそれだけ？

「ねえーよ！ というかお前がそう呼べって言ったんだろっが！不意打ちでも女の子に殴られて気絶とかショックだよ！ というかなんで名前と家知ってるんだよ！」

『五月蠅い黙れ。お前が情けないことに気絶などするから自宅まで運んできてやったんだ。私に落ち度は無い。むしろ感謝しろ定臣』

なんか無茶苦茶偉そうだ……こっちが悪いことした気がしてきた。

いや待て、それはない！

……ん？ それよりも膝の辺りがスーッスーする……って待て！
なんだってズボンの両膝が破けてるんだよ！ って血出てるよ！そ
れもかなり出てるよ！ 目覚めて早々に気付けよ俺！

というか……

殴られて気絶した。

うん、わかる。

そのまま前のめりに地面に倒れこんだ。

うん、わかる。

その時の衝撃でズボンの両膝が破けて大量に出血した。

うん、わかんない。

「ない！ これはない！ ……透哩！」

『……なんだ？』

「お前、どうやって俺をここまで運んだ？」

俺がそう尋ねると透哩はあからさまに面倒臭そうにため息をつい
た。そして徐に組んでいた腕をほどくと俺の頭を鷲掴みし、ずりず
りと引きずり始めた。

「ちよ！ 痛いって！ 痛い！！」

『男の子の癖に五月蠅い奴だな定臣は。お前が尋ねるから心優しい

透哩さんがわざわざ実演してやったというのに』

よーし俺が悪かった。全部俺が悪かった。

「ってないわ！」

嘆きの呪詛を口から吐き出しつつ、数分前に我が身に起こっていたであろう状況を想像してみる。

夕暮れ時、場所はトンネルを抜けた先の通り。人通りは少ないとはいえ帰宅途中の学生や仕事を終えた人達。犬の散歩をしているいつものお爺ちゃんも歩いていただけだろう。

そこをてくてくと歩く一人の美女。もちろんすれ違う人達は振り返っただろう。ああ、さぞ振り返っただろうさ！ なんとたってその美女の手には頭がぶら下がっていたんだもん！ はい俺です！それが俺です！

泣きたくなってきた。

『……………』

俺がショックで頭を抱えているのを透哩は相変わらず静かに見守っていた。

「……………で？ 結局、お前は俺になにか用があるのか？」

すべてを見透かすようなその瞳に俺は忘れていた恐怖を思い出した。

『…………』

沈黙が続く中、怪しく光るワインレッドの瞳は瞬きすらせずに俺を標的としている。値踏みでもしているのだろうか。嫌な沈黙に耐え切れず俺は更に尋ねた。

「人の家まで押し入ってるくらいだ。なにか用があるんじゃないのか？」

この状況で無視され続けるのはさすがに理解できない。俺は少しムツとした表情を作ると責めるように透哩を睨みつけた。

圧倒的な捕食者を前にした時、獲物は為す術無く蹂躪されるしかない。それからの数秒はそんな当たり前の事実を本当の意味で理解させられる時間となった。

俺はなにをされたのか。透哩はただこちらを見ているだけだ。息が詰まる。喉が渇く。顔からは一気に汗が噴出しているのがわかる。蛇に睨まれた蛙とはこのことか。透哩を睨みつけた瞬間から俺は金縛りにでもあったかのように身動き一つとれなくなっていた。

永遠に続くとも思えた金縛りは、透哩が大きく瞬きすることによって終わりを迎えた。

どうやら品定めは終わったらしい。

それから一つ、ふんつと鼻を鳴らすとようやく透哩は口を開いた。

『お前の願いは矛盾している』

意味がわからない。天使の次は願いときた。俺はなるべく透哩の瞳を見ないようにして、しかめっ面を透哩に向けた。

殴った上に自宅まで押しかけての電波発言。普通に考えれば傷害に不法侵入。更には薬物使用の疑いもある。これは警察に突き出した方がいいのかもしれない。さすがに事なかれ主義を押し通すにも限界を感じ始めていた。

「……………」

思考を巡らし、押し黙っていた俺を透哩は観察するように覗き込んでいた。

『私が派遣されたんだ。無いはずはないのだが…………… この世界の？ 主人公？は川篠定臣。お前だ』

これはさすがに無理だろう。尚も続く電波発言に俺は遂に痺れを切らした。

「待った！ 悪いけど通報する！ 女の子に暴力とか振るいたくないけど…………… また危害を加えてくるなら…………… 反撃するから」

俺のその言葉を聞いた透哩は少し驚いたような顔をした。あえて言わせてもらう。驚きたいのは俺の方だ！

俺の判断は間違っていないはずだ。客観的に見ても冷静に対応出来ていると思う。俺は透哩に背中を見せない様にして電話の方へと近づいた。そんな俺を気にも留めず、透哩は更に話を続けた。

『定臣、お前には夢がない』

俺は透哩のその言葉に思わず動きを止めた。

確かに透哩が言うように俺には幼い頃から夢がなかった。

そう、確かに夢はない。しかしそれをこの女にどうこう言われる筋合いがあるのだろうか。

「……言いたいことがよくわからないし、目的もわからない」

俺は憤っている自分を隠すことなく透哩にそう告げた。そんな俺の感情など自分には関係無いとばかりに透哩は更に話を続けた。

『夢が無いなら願いを叶える。だが、その夢さえ矛盾している。』

定臣は厄介者だな』

! ! ?

がんばれ俺！ 冷静になれ俺！ 相手は女の子だ！！

必死に怒りを押さえ込んだ自分を内心で褒めつつ、俺はできる限

り陽気に切り返した。

「OK、認めよう！ 確かに俺には夢がない。さらに残念ながら願
いもないんだよ。平穩無事に暮らしていければそれでいい。良く言
えば現状維持。悪く言えば向上心なし。自分で言ってる若干、虚し
くなくなってきたが これでいいか？」

『ふう……定臣はどうしようもない馬鹿だな。』

ため息をついた透哩は、まるで可哀想なものでも見る様な目で俺
をみつめた。

その目は無いだろう。やばい、さすがに我慢の限界っぽい。

「……とりあえず出ていけ！」

自然と大声が出た。

今までの人生の中で、女の子相手にここまでの大声を出したのは
これが初めてかもしれない。

俺には一つの制約があった。

それは十歳の頃に亡くなった祖母との約束だった。

ありがちな話だが？女の子に優しくすること？

俺は幼い頃に交わした拙いその約束を徹底遵守していた。
それだけに怒り心頭していても即座に後悔がやってきた。

熱い中で妙に冷めた心を自覚する。それは不思議な感覚だった。

まるでもう一人の自分が遠巻きに自分を見ているようなそんな感覚だった。

俺もまだまだだな。自分にそう言い聞かせることでようやく冷静になれた。

「悪い。今は俺が良く無かった。まあなんだ……今は空気が悪い。とりあえず今日は帰ってくれ。話があるならまた今度聞くからさ」

俺は最大限に譲歩したつもりだった。場の空気を取り繕い、愛想笑いで付けて次に会う約束まで提示した。だというのに無言の女帝、小波透哩さんは例のごとく

『……………』

これである。

取り付く島が無いとはこの女のためにある言葉ではなかるうか。あまりの話の通じ無さにそんなことに思考を費やし始める。

世の中にはアイコンタクトなる素晴らしいコミュニケーションが存在する。それに派生するのが無言の肯定などの素晴らしい文化である。人は目を見、空気を読み、相手との距離を測っていく。その積み重ねが人間関係を築いていくのだと少なくとも俺はそう思っている。

では透哩は俺に無言で何かを訴えかけているのだろうか。俺は断言できる。こいつは俺に何も訴えてなんかいない。何故ならこいつは無言ではなく無視だからだ。

意思疎通が不可能な相手に対してどう対処したもののか。先程の大声で怒鳴るといふ手段は全くもって意味を成さなかった。つまり命令という手段は失敗したのである。ならば他の有効な手段を選ぶのが効果的だろう。俺は再び笑顔を装着すると次なる手段を講じた。

「なあ頼む！ 今日には帰ってくれ……」

ザ・懇願。押して駄目なら引いてみるの精神である。
顔の前で両手を合わせる。そして流れるように玄関を指差す。
そんな俺に面倒臭そうな視線を浴びせると透哩は一言呟いた。

『歯車』

！？

その一言に俺の心は激震した。俺は思わず目を見開いた。

？歯車？

その単語が朝からやけに引っかかる。

「……………歯車？」

無意識にそう聞き返した俺に透哩はにやりと嗤い、そして判決を下すように告げた。

『お前がなりたいたのになりたくない物。大きな機構の一部』

芳原さんの話が脳裏に蘇る。

組織の中の歯車。俺はそれをくだらないと思った。だがそれと同じに、このまま平穏無事に歳をとり、何事もなく死んでいくことを満足だとも思っていた。

「……………」

『だから定臣は矛盾している』

透哩が言っている意味が理解できてしまった。くだらないけど満足している。確かにそうだ。

そう、俺は満足している……………

いや

満足している？

『　　そうか定臣……　　？わかった？』

？わかった？　確かに透哩はそう言った。

そう……　　？わかった？　と。

ズドンッ

いつの間にか暗くなっていった部屋に鈍い音が響いた。

「うあ………」

今の音はなんだろう。　といつかなんか変な声がでた。

それより透哩はなんであんなに血だらけなんだろう？

あれ？ 目の前にいたはずの透哩を俺はなんで横から見てるんだろっ。

透哩の正面にいるのは……？

心臓を透哩の左手で貫かれた……

俺だった。

世界が暗転する。

沈んでいく。

それでようやく、自分が殺されたのだと理解した。

死ぬと天に昇るとかよく言うけど、ほんとは沈むのか。
我ながら最後に考えることがしようもないな。

遠ざかる意識の中、俺は最後にそう呟いた。

天界 I ・ 前編

> i 1 5 6 5 7 — 2 1 5 1 <

暗闇の中で音が聞こえた。それはどこかで聞いた懐かしい音だった。

その音が聞えた時、不思議と心に暖かい火が灯った。

それから幾多の水泡が頭上に向けて駆け抜けていった。暗闇の中だというのにそれが水泡だと理解できた。

どれくらいの時間が過ぎ去ったのだろうか。

よくわからない。

暗闇は不安だ。感覚にそう訴えられ、思考が蘇った。

暗いな、目を開けよう。

眩い光が差し込む。俺は眩しさに目を細めながら記憶を探った。確か今日は定時で仕事をあがって家路に着いた。それから……

そうだ。

早く家に帰りたかった俺はコーヒーを買うのを止めて、近道して帰ろうとして……

そこで美女に出会った。

で、殴られた。ってのは夢だったんだっけ……

えっと、目が覚めたら家で、そこには夢で俺を殴ってきた女がいて、その女は意味不明なことばかり言っていて……

?わかった?

そうだ。そんなことを言われた。

その直後に俺はその女に殺されたんだ。

え?

俺、殺されたんだよな?

「

!?!」

そこに思い当たった時、ぼやけていた景色が色を帯び始めた。
俺は明るい世界にいた。

眩しすぎて視界がはつきりしない中、俺は自分が死んだことを理解した。

「……死んだってことは、ここは天国か？ にしても、我ながらいきなり死んだもんだな」

そう呟いた後、俺は目を閉じて自分が殺された理由を考えてみた。

女……

小波透理こなみとつりは俺の願いは矛盾していると言った。その示すところに気付いた俺に向って今度は？わかった？と言った。その直後に俺はざっくりと殺された。

なにが？わかった？だ。俺はまったくもってなにもわからん。

そもそもあいつの目的は口ぶりから察するに、俺の夢や願いを叶えることじゃなかったのか？ で、夢が無いなら願いを叶えるとか言ったくせに俺を殺しやがった。

脳内で再現VTRを再生する。

『私、小波透哩』 天使な私があなたの夢や願いを叶えにきたよ
』

「え、意味不」

『あ、夢が無いんだ？ そっか、それじゃ願いを叶えちゃうね』

「だから意味不」

『わかった』 あなたの願いは……』

「話きけよ」これだー！』ズブー！

だいたいこんな感じである。

待て。脳内VTRの通りだとするなら、あいつは俺の願いが死ぬことだと勘違いしたってことにならないか？ いや待て！ ちよつと待て！ 勘違いで殺されてたまるか！ 頼むから勘違いで殺されたとか無しの方向で！ 待て待て落ち着け俺！！ まずは冷静に考えろ！ 言いたいことは山程あるが、まず言うべきことがある！！！！

「透哩、意味がわからない」

俺は目を開くと同時に、軽い抗議の意味も兼ねてそう言い放った。
なんと目の前には透哩がいた！

『意味がわからないとは失礼な奴だな。定臣は』

血しぶき（俺の）を浴びて血みどろになっていたはずの透哩は、何事も無かったかの様にそこに佇んでいて、偉そうに腕を組んで俺を見ていた。

「!?!」

息を飲む。透哩に驚かされるのは何回目だろうか。

驚く俺をニヤニヤと眺めながら、透哩は満足そうに言い放った。

『転生おめでとう。定臣、お前の願いを叶えてやったぞ』

相変わらず意味がわからない。眉間にしわを寄せ、首を傾げそうになったその時、俺は透哩の変化に気付き、驚愕させられた。

それも無理の無い話である。

なんと透哩の背中には白い翼が生えていたのだ。

ちよっと待ってくれ！ 冗談にもなっていない！！ あれ

完全に翼じゃん！ しかも天使っぽい翼じゃん！ まて冷静になれ俺！

……無理無理！！ 冷静無理！！ とりあえず口を開けてみようそうしよう。

「ないわあああああああああああああ！！」

パニックに陥っている俺を見て、透哩は意地悪く笑った。

『定臣、お前はおもしろいな。在るものは在るんだ。』

『そうだな。ついてこい』

少し考える仕草を見せた後、そう言って透哩は俺とすれ違い、歩き始めた。

「待ってくれ！ マジで待ってくれ！ 全然ついていけてない！」

俺は必死にそう訴えながら透哩を追いかける。そんな俺などお構いなしに、透哩はひたすらに歩みを進めていった。

しばらく言われるがまま、透哩の背中を追いかけた。

その背中にはやはり白い翼が生えていて、その翼はじっくりと観察したもの、とても造り物には見えなかった。

自称・天使は自称じゃないってことなのだろうか。だとするならば、何だかってこいつは俺を殺したのだろうか。

透哩との会話が難しいことは既に学習している。こいつが俺の質問に全部答えてくれるはずがない。

俺は自分の中に浮かんだ様々な疑問に優先順位をつけ、やはり一番聞きたかったそのことについて尋ねることにした。

「聞きたい事がありすぎるんだが、とりあえずなんで殺『転生だ』」

？殺した？と言いかけた俺の声を上書きして透哩がそう答える。その間も、もちろん歩みを止めてはくれない。どうやらこいつは俺が選抜した、唯一の質問にも答えてくれる気は無いらしい。H A H A H A H A！ 上等じゃないか！ こちとら諦めの悪さには定評があるんだ。答えるまで聞いてやるさ！ と、いうことでリトライ！ いてみようか俺！

「いやいやいや！ 明らかにあれ殺『転生』」

再び声を上書きされた。

おかしい。もしかしたら俺の勘違いなのだろうか。

……ってないわー！ それはないわー！ 普通、心臓貫かれれば

死にますよね！ この人、俺の心臓貫きましたよね！？ それ殺人ですね！？ つまりやっぱり俺は殺されてますよね！？ 待て待て！ 理不尽だとは思ってたが、ここまでか！？ ここまで理不尽なのか！？

いや待て。冷静になれ俺。もしかしたらこれは透哩なりのドッキリなのかもしれない。

「わかった。転生、把握」

これは『転生です』って言うておいて、後からやっぱり『殺しました』って明かすのかも…って

「……把握できるか！ やっぱり殺『転生だ。』」

またまた上書きされた。今度はこっちに振り返ってじっと見つめてきた。

目は口ほどにものを言うとはよく言ったものだ。なるほど、理解した。これ以上言うともた殺される破目になる。

「ふう……」

そう深くため息をつくとは結局、俺は観念して透哩についていくことにした。

サンタクロースが好きだった。

クリスマスイヴからクリスマスにかけた夜、人知れず枕元に訪れ、欲しがっていたおもちゃをプレゼントしてくれる白髪白髭の赤い服を着たお爺さん。彼は不思議な空飛ぶ鹿にソリを引かせ、全世界の子供の元に訪れていく。

そんな夢物語をもの見事に崩壊させたのは、どこぞの老人に自分の手柄を横取りされることに腹を立てた父親の突然の暴露だった。

『そもそもうちは仏教じゃ！ クリスマスの時だけ宗教変えんなっ
』！』

「ごもつともすぎるお言葉だった。でもお父様よ。サンタクロースを信じるように育てたのは、そもそもあなたではなかったのか。」

心の中でそんな苦情を訴えつつも、幼い自分はクリスマスの意味を知る前に、サンタクロースの正体を知った。

幼い俺の身に起こったその珍事は、我が国、日本ではありがちな笑い話の一つだと思う。俺は外国の人に日本とはどういう国かと尋

ねられれば、自信を持ってこう答えるだろう。

『日本とは楽しけりやOKな国です』

と。

まあ実際に初めて外国の人に話しかけられた時には『This is a pen.』としか言えなかつたわけではあるが。それはおいておくとして。

日本人は超がつくほど祭り好きな種族なのである。もちろん嫌いな人もいるが大抵の人が、行事に籠められた真の意味などそつちのけ、お祭り騒ぎだわっしょいわっしょい！ 大人も子供もわっしょいわっしょい！ そんな感じである。

そんなわけで、我が国？日本？では宗派に関係無くクリスマスを祝い、元旦には神社に出かけるといった、宗派よりも行事を優先する人が大多数を占めている。

そのせいかな？天使？と言われれば大抵の人がどういったものか想像できると言っても過言ではない。

もちろん俺、川篠定臣もその大多数を占める人間の一人である。だから？天使？と聞けば曖昧には想像できるのだが……

にしても天使って。

目の前を歩く、自称・天使さんをもう一度、観察する。やっぱり翼があった。

俺は別に信心深いわけじゃない。それでも天使が神の使いであるとされているくらい知識はある。でもそれは、あくまで人間が勝手に想像して創り上げただけのものだと思っていた。

それが……

いるよ！？　ここにいるよ！？

俺は、再びパニックに陥りそうになった心を落ち着かせるため、透哩から視線を逃がし景色を見回した。

まず視線を足元に落とす。そこには、大地の代わりに薄い桃色の雲のような地面が広がっていた。質感が土と大差が無いせいで、今までそれに気が付かなかったとは我ながらまぬけな話である。

続いて視線を上へと向ける。目に差し込む光の眩しさから、青空が広がっていると思われた空はしかし、石ころ一つ転がっていない砂浜のように白一面だった。太陽が無いというのに明るさ三割増しといったところだろうか。その白い空には幾百ものシャボン玉が浮遊していて、その向こうには虹とオーロラが輝いているのが見えた。

あまりの美しさに、しばらくその光景に目を奪われていたが、不意にどこかから懐かしいオルゴールの音色が響きわたり、今度はその音色に耳を奪われた。しばらく聞き入っていると、その音色に合わせて小鳥達がハーモニーを奏で始めた。

道端には見たこともない鮮やかな花が咲き乱れ、針の無い蜂と虹色の羽のチヨウチヨウが楽しげにワルツを躍っている。

なるほど…… やっぱり俺は死んで、ここは天国みたいだ……

天使の翼にこの風景を足して見せつけられた俺は、嫌でもそれを認めるしかなかった。

『あそこだ』

しばらく透哩についていくと白い城が視界に現れた。城門に辿り着き、透哩が軽く手を上げると門は勝手に開き、その中から小さな女の子が慌てた様子で駆けつけてきた。

「小波さん！ 大問題ですよおお！！！」

突然の咆哮。

その少女は、こちらに駆けつけるや否や大音量の罵声を透哩に浴びせた。対する透哩は変わらず腕組みをし、さも不満気に少女を見下ろしていた。

『五月蠅い。黙れ小娘』

どうやらこの女の傍若無人さが適応されるのは、俺にだけでは無かったらしい。圧倒的な透哩。対して既に半泣きの少女。

哀れ少女。気持ちはすぐわかる。

俺は透哩の背後で目を瞑ると一つ頷き、内心で小波透哩とはこういう生物なのだと理解した。

「小波さん……」

『……』

無言の威圧。

『……』

威圧。威圧。威圧。

「わかりました…… 後はなんとかします…… うう……」

決着はあっさりとついたらしい。少女はがっくりと頭を垂らし、小さな身体を更にコンパクトに纏めている。まあ、なんというか……

… 可哀想に……

透哩の威圧感を既に経験している。俺は慈しむような視線を少女に向けた。そんな俺に気付くことなく少女はうな垂れている。そんな少女を再起させたのは透哩のこんな言葉だった。

『そうか。理由くらいは考えてやる』

「はあ…… どうしましょうか？」

恐る恐るといった様子でそう尋ねた少女に、透哩は俺を指刺さすとニヤリと嗤い、そしてこう続けた。

『そこにいる定臣は？ ツン？ と？ デレ？ を見事に使い分けた私にデレデレだ』

ポカ〜ンとする俺。苦笑いの少女。

一瞬、石化した俺は次の瞬間には内心で透哩の発言にツッコミをいれた。

ツンデレ…… だ…… と？

透哩、お前は大きな勘違いをしている。確かにお前の？ ツン？ は世界レベルだ。なんせ俺を殺したくらいだからな！ もはや？ ツン？ を越えて？ ツン？ もしくは？ ズン？ だろうさ！ しかしな透哩よ

……？デレ？はどこかなー！ あれー！ どこかなー！ ないな
ー！ どこにもないなー！

泣きそうになった。

哀しみのツツコミを内心で披露していると少女と目が合った。その時の俺の顔は相当、面白いことになっていたらしく、少女はなんともいえない顔つきになると小声で俺にぼつりと呟いた。

「……あ……はは（胸中お察しします）」

もちろん少女の小声は、俺と少女の間に立っている透哩には丸聞こえだ。その直後、周囲の温度が一気に下がった気がした。

そんなに怒るようなことでもないだろうに……哀れ、少女。

『私は寛大だ。大宮なにか言ったか？』

「いいえなにも！ 言ってますん！ 言ってますん！」

必死に弁解する少女を満足そうに見ると、透哩はニヤリと嗤った。どうやら断罪されずに済んだようだ。

にしても透哩…… お前ちょっと短気すぎやしないか？ カルシウムが足りてないに違いないなこれは。

『そうか？わかった？』

反射的に体が強張った。どうやら透哩の？わかった？は、俺のト
ラウマになった様だ。

「……」

『定臣』

「!？」

びつくりした!! 心臓が口から飛び出しかけた!

「な、なに？」

なんとか声を出した俺に透哩は淡々と告げた。

『ふむ、後はこの大宮が説明してくれるだろう』

「了解」

ニヤリと透哩が嗤う。

『聞きわけがいい犬だな定臣は』

恐らくこれが褒め言葉なのだろう。？デレ？たつもりか透哩よ。
よしわかった、把握……したことにしよう。

ここでいらぬことを言えばまた一悶着あるだろう。俺は得意の
愛想笑いを駆使し、透哩をやり過ごした。そんな俺に透哩は目を細
めると、又しても謎発言を言い放ってきた。

『学園で待っている』

また電波なことを…… まあいいや、ここは受け流すところなのだろう。

俺は頭の中で『理解しろ理解しろ』と呪文のように繰り返して、そして

「わかった」

そう答えた。

俺の返答に満足したのか透哩は背を向けると、振り返ることも無く去っていった。

あつげにとられながらも、その背中に『交通事故みたいな女だったな』という感想を投げかける。

透哩の背中が視界から消えると先程、『大宮』と呼ばれていた少女が話しかけてきた。

「えつとお…… あなたは誰さん？」

慌てて視線を下に向ける。そして自己紹介を始めた。

「あ、俺、川篠定臣っていいます。定臣って呼んでください。……正直、自分の置かれている状況がわかってないです」

「はい、でしょうね…… 私は大宮るるか（おおみやるるか）と申します。

？るるか？と呼んでももらえれば嬉しいです。よろしくお願いしますね」

るるかさんは、にこりと笑うと手を差し出してきた。

ビバ、コミュニケーション！ 素晴らしい！ 普通って素敵！！

「……？ どうかしましたか？」

口を真一文字に縛って涙を流す。不思議そうにるるかさんが見上げていた。

「いえ！ よろしくですー！」

必要以上にがっしりと堅い握手を交わし、改めてるるかさんを見る。

身長は俺の肩くらいかな。にしても小さいなあこの子。

最初に目に飛び込んできたのは彼女の頭だった。身長差から自然と見下ろす形となっているため、彼女の頭はつむじまだがはつきりと見えている。

髪は濃い水色…… 普通に日本を歩いていればかなり目立つだろうなあこれ

基本的に、人の目を見て話すことを信条としている。るるかさんと視線を合わせるため、その場に屈みこんだ。

目線の高さを合わせたことで彼女の顔がはつきりと見えた。

顔は綺麗と言うより可愛い感じで、レンズの大きいメガネが特徴的だ。

天使にも近視とかあるのだろうか。

そんなつまらないことを考えながら、次に気になった服装をチェックする。

ぱつと見て思った通り、やっぱりるるかさんが着ているのはブレザータイプの学生服だった。さっき透哩が学園とか言ってたし、天国にも学園とかあるのだろうか。

にしてもブレザータイプか…… もしかして私立？ だとしたら公立もあるのか？ まあなんにせよ、透哩にしてもるるかさんにしてても異常なほどに美形だな…… 天使ってそういうものなんだろうか？

そんなことを考えていると、ロリ系まっしぐらな声色が響いた。

「え〜っと定臣さん？ 残念ながらあなたは特別すぎますので、いくつか講義を聞いて頂く必要があるのですが……」

願ってもない申し出だった。もちろん飛びつくように返事した。

「あ、超助かります」

食いつき具合が可笑しかったのか、るるかさんはクスクスと笑っていた。その後、るるかさんに奥の部屋へと案内された。

前を歩いていた彼女の背中には、やはり透哩と同じように大きな白い翼が生えていた。

こんな見た目でもやっぱりこの子も天使なのか。

少し緊張しながら、るるかさんと向かい合う形で差し出された椅子に腰かける。

「えっと、そう緊張なさらずに」

そう言つとるるかさんは、朗らかな笑顔を向けてくれる。その笑顔は正に？天使？と呼んで相違無いものだった。

天使ってこうだよね！？　こうだよね！？

目を瞑って数回頷いた。

るるかさんのエンジェルスマイルのお陰で、緊張は知らない間に解れていた。

「えっと、きつと驚くと思うので1つずつ片付けていきしょうか」

そう言つと、るるかさんはどこからともなく学者のような帽子を取り出し、頭に被せた。それから輪ゴムのようなもので肩まで伸びた髪を後ろで結び、真剣な面持ちで俺を見上げてきた。なんともわかりやすい講義開始の合図である。

るるかさんに応えるように少し気合いを入れて返事をする。

「大丈夫っす！　いきなり心臓貫かれてここに連れてこられた地点で開き直ってますんで」

「　　そうですか。　　……心中お察しします。それではまず……」

そう前置きすると、るるかさんは俺に自分の背中を触るようにつてきた。俺は指示されたままに背中に手をまわした。

「はいはい、次いきますよ。はいこれ」

にこりと微笑みながら手鏡を手渡される。反射的にその中を覗き込む。

目を背ける。

見る。

背ける。

見る。

また背ける。

るるかさんが両手を耳に当てた。そんなるるかさんの足元に手鏡を置く。今度はそれをるるかさんがそつと退避させた。それを確認すると頭を抱えて椅子から後ろ向きに転がり落ちる。

そして

「ふあああああああああああああああああああああああああああああ！

「……！」

叫びに叫んだ。

どれくらい転がっただろうか。叫びながら左右に転がり続ける間、
るかさんは哀れむ様な瞳を向け続けていた。

ゴンッ！　ぴたっ

ゴロゴロと左右に転がり続けることで少しずつ移動していた俺は、
遂に部屋の壁に頭をぶつけて停止した。

自分のまぬけな姿に我に返る。そこでようやく思考を再起させた。

待て待て待て待て待て！　無理！！　なにこれ？　なにこれ？

翼があった。

OKそこまではわかった。

死んでここは天国。

なるほど、俺もここにいる以上は天使になっ
ていても不思議じやない。

わかった。把握。次だ次。

手鑑を渡された。

覗いた。

美女がいた。

離れた。

消えた。

また見た。

いた。

俺だった。

無理だった。

転がった。

無理だった。

また転がった。

そういえばこっちに来てから頭一つ分ほど目線が低いなあと思
ってたんだよ！ 声も妙に鼻がかかった感じで高かった気がするしさ
！ 頭も心ばかり重かったんだよ！！ 風邪かと思ってたら髪の毛
が増えた重さだったのか！？

結論。

俺、美女。

頭の中で木魚の音がぼくぼくと聞こえる。しばらくその音が続い
た後、お鈴の心地よい音色が

チーン…… 合掌。

パンパンッ

室内にゐるかさんの拍手が響く。絶叫から数分、俺は真っ白に燃え尽きて放心していた。

「驚き、意気消沈なところ申し訳ないのですが…… 説明…… 聞けますでしょうか？」

シーーン……

「ですよー」

シーーン……

「き、聞けます……」

「お、よく立ち直りました！それでは続けます」

るるかさんの説明によると、どうやら俺が天使になったというのは正解だったようだ。その天使になったというのが曲者で、この女性化に大いに関係してきているらしかった。

「エンジェルフォーム。天使が別世界での任務遂行時に着替えるユニフォームの様なものだと思って頂ければ結構です。ただしエンジェルフォームは物理的に干渉してきますので、任務遂行時に元の姿に戻ることは絶対に無いのですが」

るるかさんの説明を受けた俺は思考を巡らせた。

なるほど、確かに天使が男とか物語の中でもそう無かった気がする。それは理解できた。

「と、いうことは任務がなにかはわかりませんが、それ以外の時は元の姿に戻るってことです？」

「はい、ただしモデルチェンジは学園入学が叶った後からしか使用できません」

「その学園というのは……？ さっき透哩も言っていましたか」

「すべての世界から神が適合者を選出して天界任務を与え、その任務の中で様々なスキルを身につけ、大天使への資格有りと認められた者だけが入学を許可される特別な施設ですね」

「つまりハードル高めと？」

「えっと、ちょっと失礼します。定臣さんの世界とリンクしますの
で」

そう言うのと、るるかさんは俺の額に手を当てて目を閉じる。俺は
手が顔に伸びてきたことで一瞬、目を瞑る。そして次に目を開いた
時には？それ？は終わっていた。

「把握しました。定臣さんのいた世界で例えるなら、オリンピック
の金メダルを六つ獲得するくらいの難易度ですね」

この時ばかりはるるかさんのエンジェルスマイルが意地悪く見え
た。そりゃそうだろ。オリンピックだぞ？ つまり世界一だ。要す
るに俺は……

…… はい、消えたー！ 俺終わった！ …… オワターー！！
…… っつてことだよな？ …… ん？

「あ

そこで気が付いた。俺はるるかさんの先程の言葉を脳内で復唱す
る。

神が適合者を選出……

？神？が。

「俺って神様が選出したわけじゃない……ですよね？」

そう言いつとるるかさんは一瞬、悲しそうな顔をした。そして言い難そうに

「……です……なので……ちよつと困ったことに……」

そう告げた。それから、るるかさんは俺がここに存在する理由が必要だと言った。それにいくつかの説明もしてくれた。

神以外が天使を創った事が前代未聞であること。

天使を創るだけの神力を一介の天使が持つことがありえないこと。

小波透哩の異常性。（ここは小声で）

天使は任務遂行世界の主人公の夢や願いを叶える。その存在理由から無資格者である俺が生き残れる可能性がある事。

ん？ 今なんか変なこと言わなかったか？ …… 生き残れる可能性？

「ちよ、ちよつと待って！ るるかさん！ 今の！ 生き残れる可能性って？」

「はい…… 通常、ここに存在しないはずの定臣さんがいるっていうことはその…… つまり」

「…… もしかして俺、死亡？」

「高確率で消滅DEATH！」

「…… 待つて！ 最後のデスのスペルおかしいよね！？ 発音変だつたよ！？」

「あはは、まあたぶん大丈夫ですよ。小波さんが回答を置いていてくれてますので」

意外だった。あの透哩が俺の身を案じている。俺は驚きを隠しながら、次のるるかさんの言葉に耳を傾けた。

るるかさんは優しく微笑むと、軽く両手を合わせ小首を傾げた。ずり落ちかけた帽子を手で直すと咳払いをする。そして丁寧に透哩の回答とやらを説明してくれた。

「えっと、透哩さんにデレデレになっちゃった定臣さんは、透哩さんと永遠を共にしたいと願った。天使の透哩さんと永遠を共にするには自らも天使化するしかなかった。もしも定臣さんの天使化が認められなかった場合。それは神が選出した主人公の願いが叶わないということになる。だからこそ私は人事長として定臣さんの天使化の認可を正式に申請する。」

こんな感じですが、よろしいでしょうか？」

あの馬鹿が最後に言ってたあれか！！ にしてもツンデレ透哩に

デレデレて。これは言うべきなのだろうか。いや、言うべきだろう。つつこみどころが多すぎるがとりあえず一つだけは言っておいてやる！

透哩！ お前はツンしかねーんだよ！…！

魂の叫びを内心で終わらせた俺は半ば諦めながら、とりあえずの確認をるるかさんに求めた。

「その通りですって…… それ認めないとDEATH？」

「DEATHです。（キツパリ）」

やっぱりなー！ 提案したのが透哩って地点でそうだと思ったんだよ！

はあ…… ったく。俺がなにしたらって言うんだよ。

「…………… OK、認めます」

なげやり気味だった俺にるるかさんは優しく微笑むと

「それでは…… 承認します」

改めてそう宣言した。そして、身の丈程もある輝く印鑑の様なものをどこからともなく取り出すと、大きく掲げ地面に押し付けた。

るるかさんがそれを地面から離す。するとそこから光が溢れ出し、見た事もない文字が空中に浮かび上がった。るるかさんはそれを認めした後、穏やかな笑顔を浮かべ、そっと目を閉じた。そしてゆっくりと祈る様に言葉を紡ぎ始めた。

「この者が悠久なる時を越える事をお許しください。大いなる神の代行者となる事をお許しください。いざ!」

そう言うとするるかさんは先程の穏やかな表情から一転、目を開き真顔になった。そして空中の文字に手を這わせると、そのまま俺の胸に押し付けた。

リイイイイイン!!!

辺りに鈴の音が鳴り響く。

俺は突然の出来事に、呆然としていた。

るるかさんの視線は俺の頭上に向けられていた。それに気が付いた俺は自分の頭上に視線を送る。そこには光輝く輪が現れていて、それはそのまま降りてきて俺の中へと消えていった。それと同時に俺は、自分の中に暖かい力が流れ込んでくるのを感じていた。

心地よさに意識が朦おぼ朧ろくになっていく……

パンパンッ

そこにいるかさんの拍手が響いた。

「定臣さん、良かったです！ 無事に承認されましたよ！」

嬉しそうにいるかさんがそんなことを言っていた。

「………… え？ 承認？ …… え？」

「はい！ 失敗したらどうしようって思いながらだったので緊張しましたよお」

「あれ？ 承認ってるかさんがOKだせば終わりじゃなかったんですか？」

「あ、私は人事長なので承認申請までは出せるのですが。許可は神様しか出せないですよ？」

あの印鑑みたいなのが申請なのかな？

ん？

それならばあの文字は神が出現させたってことなのか？

「えーと、さっきの変な文字みたいなのを俺の胸に当てたやつ……？」

「はい、あれが神様の審議でした」

るるかさんの安堵したような笑顔に俺は嫌な予感を覚えた。恐る恐る尋ねてみる。

「……………失敗してたら？」

「DETH」

悪魔の笑顔に嫌な予感を肯定された。

って待って待って待て！ 自然の流れで命賭けられてたぞ？！ やっぱるるかさんも相当こえーよ！ 天使こえーよ！！ みんなこえーよ！…！

「……………ははは」

「フフフフ」

それからるるかさんは青褪めていた俺に、神力の行使の仕方などの様々な知識を与えてくれた。

天使は死なないこと。

任務遂行世界の主人公は天使の力によって、夢や願いが叶うまで不老不死になること。

天界での過ごし方。

天界は正確には死後の世界などではなく、あくまで世界の集結点であり、その呼称にすぎないということ。

色んなことがありすぎた。ここは自分なりに整理すべきだろう。

まずは現状からだ。透哩が本物の天使だと知った今ならわかるが、あの時、透哩は神力やらなにやらという謎力を使って俺の夢を探った。

在るものは在る。

透哩がそう言ったように確かに在るものは在る。ならば無いものは無い。そういうことも言えるだろう。

俺には夢が無かった。

天使の任務は対象者の夢を叶えることだ。そして夢が無い場合は願いを叶える。俺の思考を読んだ透哩はらしくも無く悩んだ（2秒くらい）。何故なら俺の願いは変化と不変だったからだ。

矛盾していた。

そのどちらも叶えるために透哩はとんでもない答えを出した。

それが天使化である。

悠久なる時を越えて決して綻ぶことの無い歯車。
壊された日常。これから続くであろう永遠なる日常。

なるほど、確かにどちらとも叶えられている。でもまず確認とつてくれ！　そして説明してからにしてくれ！！　お前は突拍子もないんだよ馬鹿透哩！！！！

などと苦情を訴えたところであいつはもういない。まあいたとしても無視されるだけだろうが。

学園で待っている。

そう言い残してあいつはあっさりと去っていった。　簡単
に言ってくれる……　別に会いたいわけじゃないが俺には学園に入らないといかん理由ができた。

この見た目だ。

天使ですよーなローブに大人しい金色の髪。その長さは透哩と同じく膝下まで伸びていて、背丈は平均的な一般女子の身長より少し高めといったところだろうか。きめ細かな肌は雪のように白く水々しい。そして瞳はブルーダイヤのような綺麗な水色に輝いている。はっきり言って無茶苦茶に美人だ。

ありえない

「こんな容姿の女性が近くを歩いているなら、是非ともお近づきになりたいものだが、何が哀しいかなこれは自分だ！」

「るかさんはモデルチェンジは学園生限定だと言った。その学園に入学するには異常な難易度の任務をこなす必要があるという。異常だよ異常！オリンピックで金メダル6つだぞ？無理すぎるだろ。」

正直、絶望的に思えたが、天使になった俺は無限の時間を手にいれた。

「時間さえあればいけるんじゃない？ と、半ばなげやりな感じでそう弾け始めた。」

強引に前向きに思考を傾けたそこで俺はあることに気が付いた。学園生とやらは任務遂行時以外はエンジェルフォーム（美女）を解除できる。そして俺が見た透哩は任務遂行時だった。

つまり……

「あいつ実は男だったんじゃないか？ そんな疑問が浮かんだ。もし男だったとするならば一発ぶん殴ってやらないと気がすまない！」

……どつやら学園に辿りつく理由がもう一つできたようだ。

「とりあえず自分の中で整理できました。なんでこんな目にあってるのか納得できない所が多々、多々！ ありますが…… 学園目指して任務を遂行していくことにします」

結局、俺が三十分程、唸って出した答えはこれだった。

「そうですか、思ったより理解が早くて助かります」

待たされていたというのに、るるかさんは嫌な顔一つせず、そう言いながら微笑んでくれた。俺はそんな彼女にお礼を言っと、当面の質問を投げかけた。

「それで、具体的に俺はなにをすればいいんでしょうか？」

それに答えるには部屋を移す必要がある。るるかさんはそう言つと俺を手招きし、部屋を出て行った。講義を受けていた部屋の右手、廊下のつき当たりの大きな扉をくぐった先にその部屋はあった。

「ここが世界の集結点、研修レベルのカテゴリーに属している部屋です」

その言葉を聞きながら部屋の中に招き入れられる。思わず部屋の暗さに驚かされた。

真つ暗なその世界には上も下も関係なく、星々が幻想的に浮かび上がっていた。

その光景に子供の頃に見たプラネタリウムを連想する。

その中をソフトボール大の水晶玉が、所狭しと上下に移動しながら浮かんでいる。よくよく見るとその中には1つ1つに違う風景が見てとれた。

『ありやりや、ここであるかさん以外と会ったの初めてだわ』

幻想的なその光景に呆けていると背後から急に声が聞こえた。

「あ、小早川さん、おかえりなさいです」

俺はるるかさんの声と同時に振り返り、その声の主を見た。

……
ものすごい美女がいました。

同じ目線で最初に目立ったのは、やはり一目見て天使とわかる大きな白い翼だった。それから茶髪の頭髪に目が移った。髪型はポニーテールだろうか。しかし後ろで一点に縛られているポニテの象徴であるそれよりも、長く左右均等に分けられて顎下まで垂らしている前髪の方が特徴的だった。

そんな特徴的な前髪に挟まれているのは誰もが振り返りそうな美

顔であり、その下地である茶褐色の肌からは快活な印象を受けた。

なるほど、美女はデフォ。それは理解できた。ここにいるってことは、この人も自分と似たような境遇に置かれているのだろうか？

「ただいまー！　るるかさん。いや〜初任務にすげ〜時間がかつちやっただよー！」

じつくりと観察する俺をよそに、その人はるるかさんに陽気に話しかけた。

「いえいえ、かなり優秀な遂行速度かと！　えっと、こちら小早川こはやか一樹いちつきさんです。こちらは川篠定臣さんです」

「あ、ども。俺、川篠定臣っていいいます。」

「どもども！　俺は小早川一樹っていいいます！　海里とるるかさん以外の天使初めて見ました！　良かったら友達になっってください！」

これが俺と一樹との出会いだった。

なかなかいい奴っぽい。俺は差し出された手を握り返しながら笑顔を返す。恐らくこの人もエンジェルフォームとやらの餌食になったに違いない。それにしても美女二人の呼称が？俺？って言うの

もなかなかシユールな絵柄だ。

「あ、俺、今こっちに着たばかりで……友達歓迎す！ よろしく
！」

「んじゃ堅苦しいのは無しで！ よろしくな！ 定臣！」

「ああ、よろしく一樹」

そこにいるかさんが痺れを切らして口を開いた。

「いいなあ、私も友達になってくださいよお」

『るるかさんは友達っていうより先生なので！』

一樹と声がハモる。るかさんは『ガーン』という効果音でも付きそうな顔で半泣きになると、慌てて口を開いた。

「私もただの一人の学園生ですよ！いずれは同席するんですし、先生とかじゃないです〜」

なにそれ初耳。人事長とかやってて学園生なのか。もしかしたら天界での役割分担って学園での委員会みたいなものなのか？

俺がそんなことを考えていると、なかなか面白い顔になった一樹が口を開いた。

「なにそれ初耳！」

ですよー。

「どうやらこいつも、俺と同じ程度の知識しか与えられていないらしい。仲良くやっていけそうだ。」

それからしばらく会話を交わした後、互いに慣れあつた所で一樹がこんなことを切り出した。

「んー、すぐに次の任務いこうと思ってたけど。せつかくだし、ちよつと三人で話しませんか？」

「いいですね！ いい茶葉が手にはいったんですよお！ 私の部屋にいきましょう」

そんな一樹の提案にるるかが直ぐに食いついた。

にしても仲良くお茶会って…… どうやら任務に強制力は無いらしい。天使の自主性にお任せってことなのだろうか。早速、るるかに聞いてみるか。……にしてもさっきまで？さん？付けて呼んでた人をいきなり呼び捨てって難しいな。

先程の会話の最中、俺と一樹はるるかさんに異常なまでにため口を要求されていた。それと同時に目を輝かせて『なにかわからないことがあれば私に聞いて下さいねっ！』と、何度も詰め寄られていた。このタイプの人には逆らわない方が良い。俺はここで今までの人生の教訓を活かすことにした。

「任務とかがつてすぐいなくなっていくのか？」

「気がむいた時にやればいいんですよ 私達の時間は無限。天使は悠久の時を越えられますから」

軽く返答したるかとそれに頷いている一樹。なんともまあお気楽なものである。

「天使っていい加減なんだなあ」

二人の緩い空気に思わず口元を緩めた俺はそんなことを呟いた。

るるかを先頭に部屋を出て少し歩く。しばらくして不意に立ち止まったるるかは、頭上に向かって手を伸ばした。

「初めてだろうからちっとビックリすんぜ？」

と一樹。

頭上に『？』『マークを点灯させている俺をよそに、るるかは何も無い空間から突然、光る梯子を引きずり降ろした。

「!? …… なんでもありだな」

「だなー」

「はい、準備完了です！ この梯子を昇れば私の部屋に通じてます。ちなみにこの建物は学園寮となっております。入学した際には一人一部屋支給されますので、お二人が入学された際には是非、利用して下さいね」

軽く説明をしてくれた後、るるかは梯子を昇っていった。俺達もそれに続いていく。

「もっと女の子の子した部屋を想像したんだが……」

俺達を出迎えた部屋には、真っ白な机が一つあるだけで他には何も無かった。

「まあ天使って部屋あっても、任務で出てることが多いからなあ。実際、使ってる連中も少ないって話だしな」

と一樹。

「ですねえ、学園に入っちゃえば校舎から離れる事の方が珍しいですし。私が人事長の仕事でこの建物に来たのも、実は一樹さんの時以来なんですよお」

「そもそも寮いらないんじゃないのかそれ」

即座につっこんだ。

「いえいえ、中にはお部屋が大好きで出てこない方もいらっしゃるすし。あまりに部屋から出てこなくて、風紀長から任務にいけて催促されてるくらいです」

「あー、それ聞きたかったんですが、いつ任務に就いてもいいって言っ割りに催促とかあるんですか？」

「一樹さん、畏まらずに話してくださいさって結構だと…… えっと前回の達成時から次の開始までが千年開いちゃうと神力が剥奪されちゃうんですよお。つまり消滅です。それを予防するために学園では風紀委員を結成して、達成時から五百年経過した天使には催促がいくよつになってるんです」

「五百年て!？」

「なるほどなるほど！ わかりました！ ありがとう!!」

驚く俺をよそに一樹は得心がいった様子で頷いた。それから意地の悪い笑みを浮かべると、こんなことを言ってきた。

「最初はびっくりするわな！ 定臣、ちなみに俺が初めてここに来たのは三十年前だぜ？」

いちいち桁が違うな。というか実はこう見えておっさんなのかー
樹。いや待て、いちいち驚いてるとキリがない。そもそも天使なん
てものがいたんだ。これ以上なにを驚くことがあるか。

俺は深く考えることを放棄した。

「ふう…… OK、把握した」

そんな俺を見た二人は満足した様子で頷きあっている。

「うははは、慣れてきたな？定臣」

「いいことです」

「さすがにな……ところで一樹」

「ん〜？」

「お前って神様に選ばれたわけだよな？神様見たの？」

「いや、見てないぜ？」

「あ、それは」

俺の質問に一樹が答える前にるるかが説明を始めた。やはりこの

子は説明が大好きな様だ。俺は脳内のるるかメモにそう書き記した。

「えっと、神様から選出された方には学園から使者が送られるようになってるんです」

「ほ〜」

唸る俺に不思議そうに一樹が聞いてきた。

「ん？ お前にはお迎えがこなかったのか？」

一樹の質問に黒い影が脳裏を過ぎる。その影は過ぎ去るところか俺の思考のど真ん中で停止すると、偉そうに腕組みをしてこちらを睨みつけてきた。言うまでも無い。ミス・ダークネス！ 小波透哩、その人である。

断じて言わせてもらおう！ お前はお迎えなんかじゃない！！

俺は？あの時？のことを思い出しながら一樹に向って質問した。

「……なあ一樹、お前って天使化する時に殺された？」

そんな俺に驚いた顔を見せながら、一樹は自分が天界に来た時のことを話してくれた。

「はあ？！ 殺されるわけねーじゃん！ ……俺の時はお迎えが来て、天使について軽く説明された後に同意求められて、それからOKだして、手を繋いでワープして天界まで来たぜ？」

俺の時とは随分と扱いが違う。どうやらこれが普通の天使化というやつなのだろう。駄目だ俺！考えるな！感じる！よし！透哩はやっぱり異常だ！ちくしょー！ついてねえな俺！

一人ぶつぶつと呟いていた俺をよそに、るるかは俺達にどこからともなく取り出した紅茶を差し出しながらこう言った。

「海里さんは真面目な方ですからねえ。マニュアル通りの勧誘をして頂いてるみたいで助かりますう」

「ありがと！……あ、海里つてのは俺を案内してくれた天使ね」

紅茶を受け取りながら一樹がそう付け加える。

「どども。……随分と優しい天使様だったんだな？俺なんかいきなり説明もなく殺されたんだぜ？」

同じく、紅茶を受け取った俺はそう話を続けた。

「ぶつ！ ちょ！マジかよ！？」

一樹が紅茶を吹きながら、信じられないといった表情でるるかに目配せをして確認をとる。るるかはそれに苦笑いで頷いて答えた。

「殺されたって…… ああ…… わかったかも…… お前を連れてきた天使って小波透哩？」

「正解。知ってるのか？」

「見たことないけど、天使化されて最初に説明される悪魔な天使だよそいつ」

「……悪魔な……確かに」

「ちよっと！ ちよっとちよっと！ 駄目ですってば！ 危険です！」

俺達の会話をるかが大慌てでシャットアウトした。透哩の怖さを同じく知る身としてはそれも納得できることだ。

「ああ、まあ一樹。透哩の悪口は危険なんでやめておこう……ダメ！ 絶対！」

俺達の表情を見た一樹は、容易に想像がついたと頷くのだった。

それからしばらくして、ようやく会話も一段落ついたところで一樹が改めてまじまじと俺を見てきた。

「ん？ どうした？」

「いや、名前から察するに男だと思うんだが…… お前可愛すぎるよな」

そう言いつと一樹は頬を染めて俯いた。

……なにこの空気？　なにこの空気！？

いや待て！　俺にそっちの気はない！　こいつは何言ってるんだ？
？？

お前可愛すぎるよな

……はあ？

……あ。

そうか見た目があれか！　そうか思い出した！！　ないわ！！
これだけは言わせてくれ！　これだけは言わせてくれ！！

俺は一樹に詰め寄るように訴えた。

「俺は男だぜ！！　俺は男だぜ！！　大事なことなので二回言いました！！！！」

悲しすぎる現実を拒否するように叫んだ俺の声は、自然と大声になっただけだった。

「まあまあ。学園に入れば二人とも戻れますのでえ」

そんな俺をるるかはころころと笑いながら見ている。まったく笑い事じゃないっての。

「わりいわりい。そういや、るるかさんってその見た目デフォなの？　るるかさんもかなり可愛いよね？」

こいつはこいつで反省の色がまったくないしな。

「私はこの見た目が元ですね〜」

「元の見た目のままで天使として通用するってどんだけ美人なんですか！　素晴らしい！」

案外、こいつは軟派な奴なのかもしれん。俺は嬉しそうにるるかに粉をかけ始めた一樹にじと目を送った。

それにしてもこの見た目はなかなか厄介だ。こいつが男の姿ならただの軟派野郎な印象を受けるのだろうが、美女だけに一樹がるるかを口説く絵柄は見ていてなかなか面白い。先程、るるかが俺と一樹のやりとりを見て笑っていたのはこういうことなのかもしれない。まあ口説かれていたとはいえ、肝心のるるかが

「実はエンジェルフォームって元の見た目がある程度、反映されるんですよ〜　多少の上方修正は含まれますけどね」

こんな感じで取り付く島も無いわけではあるが。まあ相手にされていない一樹は一樹で気にしてる様子もないか。

俺の観察をよそに、るるかは一樹を置き去りにして一人でテンションを上げていった。

「なのでお二人がかなり可愛いので、今から学園入学を楽しみにしてウキウキしちゃってますぅ〜」

そう言うとするかは両手を合わせ、ポワンとした表情でどこか遠くを見つめ始めた。

どうやらエンジェルフォーム時に可愛い♡ナイスガイ。この構図が彼女の中で出来上がっているらしい。

るるかが逃避行に出かけてしまったために、話し相手がいなくなった一樹はすぐに俺に話題を振ってきた。出会った時からうるさい奴だったが、こいつはかなりの話好きらしい。

「俺も人間の時の見た目には結構、自信あったんだけどなあ……
こりゃあ定臣の方がモテそうだな」

よりによってくだらない内容の話だった。俺は適当に流そうと話を合わせた。その適当さが俺と一樹との長い戦いの火蓋を切って落とすことになるうとは思いいにもよらなかつた。

「あー、俺の場合、天使化が特殊だから元から上方修正された姿がこれとも限らないぜ？すげー不男かもしれねえ」

「そう言われると元の姿も早く見たくなくなるな！ どっちが先に学園に辿りつくか勝負しようぜ！」

ノリ良く挑まれればつい受けてしまう。自分のその悪癖を自覚しつつも

「お、それ面白そうだな！ ノツた！」

気がつくともう答えていた。それを聞いた一樹は

「よし！ るるかさんご馳走様！ よーいドン！」

などとのたまうと、ものの見事にロケットスタートを決めたのである。完全に釣られた俺は慌てて紅茶を飲み干すと

「ちょ！ 待てって！ るるかさんご馳走様！」

そう言って一樹の背中を追い、部屋を出たのだった。

到着したのは一樹と出会ったあの部屋だった。

「俺、ここにするわ！」

一樹はそう言うと俺に振り返り、手に取った水晶玉を見せてきた。そしてにかつと笑うと

「んじゃまたいつか会おうぜ！定臣！」

間髪入れずに水晶玉を胸元に当てがった。

水晶玉から一気に光が溢れ出し、辺り一面を覆いつくす。俺は眩しさに目を閉じた。

「まぶしっ……」

光が納まりようやく視界が晴れた時には一樹の姿は消えていた。

「なるほど…… 任務に出かけたってことか…… ったく…… 競争になっちまったし俺もいくかな」 競

俺は見よう見真似で任務に出かけることにした。

まずは水晶玉をじっと見る。そこには色んな世界が見えた。そしてその中に1つだけオレンジ色の水晶玉を見つけた。

「なんか色違うし、これにしてみようかな？」

正直もう少し、るるかの説明を受けてからの方が良かった気がするが……

まあ天使は死なないらしいし、どうにかなるだろ！

水晶玉を胸元に押し当てる。

世界が輝き始める。

眩しさに目を閉じ、次に俺が目を開いた時には世界の景色は変わっていた。

その頃、るるかは

いずれ入学してくる二人のイケメン ……

「イイ！」

すでに友達な私は皆から羨ましがられ ……

「イイ！！」

「……………はっ！？」

妄想の旅から不意に帰還したるかは部屋に一人残されていた。

「あ、あれ？ 二人共どこに……………」

辺りをきよろきよろ見回するるか。

そこに足元から慌てた様子の声が聞こえてきた。

『るるか————！！ 大変なんだ！！ るるか————！！』

「この声…………… 海里さんでしょうか……………？」

るるかは少し急いで部屋から下の階へと降りた。

そこに慌てた様子で先程の声の主が駆けつける。

「るるか！ 選別当番の手違いで任務水晶に別のカテゴリーのものが入ってる！ 直ぐに外さないと大変だ！」

「え…… そんなことって過去に一度も……」

「呆けている場合か！ 研修レベルの天使がああクラスの任務など…… 手遅れになるといけない！ 急いで！」

るるかは海里のあまりの勢いに押されて、慌てて奥の部屋へと駆けだした。

「昨日から今日までに任務に就きそうな初級天使はいたか!？」

部屋に入るなり海里はるるかに詰め寄る。

「は、はい…… 一樹さんと今日こちらに透哩さんが連れてきた方が一名……」

それを聞いた海里は目を見開いた。

「なんてことだ……」

呆然と立ち尽くす海里を見て、
るるかは理解した。

「手違いでこっちに流れて来た任務のカテゴリーって……?」

「上級 …… オレンジ色の ……」

邂逅・前編

「うわあああああああああああ」

俺はひたすら森の中を逃げていた。

天界の異様なまでの明るさから一転した暗闇。

降りた世界は運の悪いことに夜だった。

そもそもなんでこんな目にあっているのか。

俺は全速力で走りながら我が身に降りかかった不幸を思い出した。

回想

「お、翼消えてるなあ。へえ、服装は勝手に変わるのかあ」

そう、確か転移が終わった俺は、自分の格好を見てそんなことを
呟いていた。

値踏みするように自分の格好を確認する。

ゆったりとしたその服装は、TVの時代劇で見た剣客さながらのものになっていた。

「ちよつとサイズが大きい気がするなあ……にしてもいつ着替えただんだ？ ……まあどういふ仕組みになつてるかとか考えるだけ無駄か」

俺は軽く駄目出しをすると、るるかに教えられた通り？この世界の主人公？を確認するべく目を瞑った。

……主人公の名前は鞆野小夜子^{たづのこよこ}。

名前が浮かぶと同時に鮮明にイメージが広がる。映し出されたのは一人の美しい少女だった。

これが鞆野小夜子か。

俺はその姿を記憶するべくゆつくりと確認していく。印象的な大きな瞳からはどこか陰りが感じられた。

まるで人形みたいだ。

その表情と綺麗に整えられた黒髪が相まってそんなことを連想した。前髪がぱつっつんなあたり、差し詰め日本人形といったところだろうか。

居場所は……ここから結構近いな。

るるかの話によると、研修レベルである俺の神力はかなり制限されているらしい。

自分なりに纏めてみると

- 1、主人公の顔、名前、居場所が感覚でわかる。
- 2、任務遂行世界の言語対応。
- 3、神力によつて主人公を不老不死化できる。
- 4、主人公の夢、願いに虚偽がないか感覚でわかる。

だいたいこんな感じである。

つまり、透哩の様に夢やら願いやらを言い当てられるわけでもなく、るるかの様に額に手を当てただけで対象者の世界の知識を得られるわけでもない。

えつと…… なにこれ。

ぶつちやけ主人公を不老不死にする以外に特別なことできねーじやん！！

こんなんでやっていけるのか！？

わしやわしやと頭をかきまわす。

この時、俺はようやく自分の身に起つた不幸を理解していた。

その時だった。

「おい姉ちゃん！」

世の中には不幸中の幸いなる前向きな言葉が存在する。

しかしそれと同時に泣きっ面に蜂という反対の意味を指す言葉も存在する。

俺はどつちに転んでもいいように予め逃げ道を作っておく

そんな日本人が大好きだ。

だからいいだろ？

この出来事を不幸中に幸いにしてくれないか。

怒気を孕んだ男の野太い声に、俺はそんな希望的観測を抱いた。

希望的という地点でわかるだろ？　これは恐らく俺にとって不幸なんだろうさ。

だから俺の選択は一つだった。

聞こえない。なにも聞こえない。俺は兄ちゃんだ。

てくてくと歩き去ろうとする。そんな俺を逃がすまいと山賊風の男達を取り囲む。

げっ！　なんかいつぱいできたし……

闇の相乗効果で男達は余計に不気味に見えた。

俺は内心で焦りながらも男達を観察する。

男達の手には青龍刀の様な物が握られており、中にはそれを振り上げ威嚇している者や、舌を這わせながら意地の悪い笑みを浮かべている者まで見受けられた。

うわー。どっかで見たB級映画の世界だなー！

あまりの現実感の無さにそんな感想を内心で述べる。

「うえっへっへ、こりゃ上玉だぜ」

やっぱりB級映画な悪役の方ですか。

使い古され過ぎて今や聞かなくなつたその名台詞に感動する。

とはいえ我が身に起こっているこの事態は紛れもない現実である。ならばこの先に『カット!』の掛け声がかかることは当然ないだろう。

できることならゴングに救われたいものではあるが……

俺は臨戦態勢を取るべく男達を再度見回した。

さてさてこの人数を相手にやれるだろうか。

……ん〜親分ばい奴はちよつと奥の方が。

手前に居てくれれば楽だったんだけどな。

まあ大体、親分つて奥の安全なところにいるよな。

俺は一番手前の男に対して斜に構えた。

透哩にはやられ続きだが、男を相手にした喧嘩では負けたことが無い。

格闘技の有段者を相手に数十人抜きを達成できる者が、素人を相手に負けるはずが無いのは道理である。

男達の間だらけの構えに、俺は忘れかけていた確固たる自信を思い出した。

「やろつってのかい姉ちゃん!」

俺が怯えて逃げ惑う姿を期待していたのか。

そりゃ大勢で取り囲んで怒鳴りながら刃物を見せられりゃ

大抵の人は怯えてくれるだろうよ。

俺の行動に予想を裏切られた男達は、安っぽい脅迫に磨きをかけて詰め寄ろうとする。

一番近くの男の一步。

俺はそれにタイミングを合わせ、大きく踏み込んだ。

「……先手必勝!!!」

過去の経験上、十人以上を相手にする場合に強そうな相手から二人倒せば他は戦意を喪失することは知っている。

しかしそれには急ぐ必要があった。

多勢に無勢という言葉が示すように、一人を相手に全員が同時にかければ、一溜りも無いのは明らかだからだ。

だからこそスピードは命だった。

バキッ!

鈍い音が響く。

俺に顎先を打ち抜かれた男は白目を剥いてその場に崩れ落ちた。

ふう……女になっても腕力は変わらずか。

これならうまく捌けば逃げきれるかな。

自分の身体を確かめながらも、体は次の敵に向かって斜に構える。無意識に行われたその動作は過去の鍛錬の賜物だった。

「てめえ!!! やりやがったな!!!」

先手をとられた男達が、怒りを爆発させて前後から二人同時に斬

りかかってくる。

それを目で見るより先に前方に飛び出し、手前の敵に拳を打ち込む。

昏倒する敵を確認しながら、背後に脚を蹴り上げる。

蹴り上げた脚は見事に背後から斬りかかっていたもう一人の顔面を捉えた。

どさりとさりと男達が倒れる音が闇に響く。

仲間の身に起きた事態を把握した男達から、次第に怯える声が出る始める。

こうなればこっちのものである。

俺は内心でほくそ笑んだ。

その時

俺の耳に思いもよらない言葉が飛び込んできた。

「……殺せ！」

その男の指示を聞いて、俺の背後から木の葉が揺れる音がする。

「!?!」

しまったと思った時にはもう遅かった。

ズブッ!

闇を裂くようにして飛んできたそれは、音を置き去りにして俺の

太ももを買っていた。

「つつうー!!」

なんだこれは。

あまりに現実味が無さ過ぎる。

売られた喧嘩を買って、矢で射られる破目になるとは誰が想像できようか。

俺は痛みから反射的に蹲った。

それにしても痛い。

有無を言わさぬ痛みは、嫌でもこれが現実であることを伝えてくる。

そもそも話が違うじゃないか。

天使は死なないんじゃないのか？

……無茶苦茶いてーよ！

普通にいてーよ！

……にしてもまずい。

ぱっと見でもまだ十人以上残っている。

しかも俺に怪我を負わせたことで意気を盛り返してやがる。

これは…… 逃げるしかないか……

いや、逃げれるのかこれ。

とりあえずは……

「ああああああああ！！ 脚が…… 脚が！！」

一度、逆転された形勢を取り戻すには油断を誘うしか無い。
俺は大袈裟に声を上げて痛がって見せた。
余裕の薄ら笑いを浮かべていた男達の瞳に黒い光が灯る。

「待て！ 殺すな！」

とりあえずの射撃停止命令が下る。
俺は突き刺さった矢を抜くと、大袈裟な演技を続けた。

「ぐっ！ …… 脚が …… 脚があ ……」

怯えたフリをしながらそう呟く。
矢を抜いた痛みから、都合よく涙声になった声色が演技に拍車をかける。

そんな俺をニヤリと見下ろしながら、一番偉そうにしていた男が近付いて来た。

「へっへっへ、最初から大人しくしてりゃ痛い目に会わなくて済んだのによお」

ここにきて、またしてもお決まりの台詞を炸裂させたそいつは、舌なめずりをしながら腕をまくり、更に俺との距離を縮めた。

俺はタイミングを計りながら演技を続ける。
不思議とその時には脚の痛みは消えていた。

「脚が…… 脚があ ……」

足の速さには自信があった。

運動会ではいつも一番だったし、地区の代表選手なんかには選ばれたこともあった。

でもそれは舗装された道路や整備された運動場での話だった。

ここは慣れない山道で、少し前には雨が降っていたらしく、足元はぬかるんでいた。

「くるなあああああああ！ バーカバーカ！」

餅は餅屋とはよく言ったものである。

山での略奪を生業としている男達にとって、この足場は大した弊害にはならないようだった。

男達は最短の距離で移動し、俺との差を少しずつ詰めてくる。

焦った俺が思わず幼稚なことを叫んだのも無理の無い話だろう。

いや、やっぱり恥かしいから気のせいだったってことにしてくれ。

そんなことを思っていたのも束の間。

……………ボテッ！

こけた。この窮地にこけた。

ありえない

いやいやこけるなよ俺！！！！

まじでやべーって！！！！

そこに、ここぞとばかりに男が飛びかかってきた。

妙にスローモーションに見える男の動きに

『これが噂に名高い走馬灯というやつか』などと感想を述べながら

俺は

自分の短い生涯を諦めた。

勢いのままに男が刀を持った手に力を加える。

そのまま片手の腹を刀の底に据えると、先端を真っ直ぐ俺の身体に

！？

咄嗟に目を瞑る。

そこに生暖かい雫が降り注いできた。

「……ぎゃあああああああ」

……ん？

俺は声なんて上げちゃいない。

だとすると今の声は誰の声か。

恐る恐る目を開いて確認する。

そこには

俺に飛びかかったはずの男が、両手を掲げたままの姿で目を見開いていた。

「……あれ？」

不思議に思い自分の身体を確認する。

突き立てられたはずの刃はそこには無く、代わりに何かがぼたぼたと降り注いでいた。

なんだこれ？

べつたりと衣服に張り付いた粘着質のそれは嫌な匂いを漂わせていた。

俺はそれが降ってくる方を見上げた。

そこにはやはり先程の男がいて

その男が大きく振りかぶっていたはずの両手は

どこかへと斬り飛ばされていた。

なにこれ？ なにこれ？

目の前で人が両手を失った。

その事実には啞然とする。

そこに

「ああああ！！ ……うあ」

絶叫を上げていた男が僅かに呻き、沈黙する。

次の瞬間、それが男の断末魔だったと知った。

ずるりと嫌な音がした。

見上げていたせいで、小さく見えていたはずの男の顔が大きく見えた。

男の体は後ろに倒れているのに顔だけはゆっくりと迫ってくる。

胴と頭が斬り離されている。

それを見て理解した。

男の頭は落下途中で輪切り裂け、肉片となり覆いかぶさってきた。

「……………え？」

人が…………… 死んだ？

その事実茫然とする。

どろりどろり。

周辺では先程の嫌な音が繰り返されていた。

辺りは静寂に包まれていた。

周囲には肉片がばら撒かれている。

そんな中、一人佇む長身の男がいた。

男は身の丈程もある日本刀のような武器をじっと見つめている。

『血だらけにしまったな…………… まあ命が助かったんだ。許せ』

男のその声に俺はようやく我に返った。
そして、この人に助けられたのだと理解した。

命の恩人という言葉はよく耳にする。

でも俺にとってその言葉はどこか現実味の無いものだった。

耳にしていたのはドラマの中か、はたまたドキュメンタリー番組
の中でのことか。

いずれにせよ、そんなドラマチックな事態が自分の身に起ころう
などとは……

まあ思いもしていなかったのである。

そんな命の恩人さんは突然現れた。そりゃもう颯爽と現れて俺を
救ってくれた。

人間、自分勝手なものである。

自分にとって都合が良ければ不都合なところなんて見えやしない。

この人はなにをやらかした？大量殺人だ。

普通なら恐怖に慄いて目を合わすこともできなかつただろうさ。

それをどうだ。俺は目を逸らすどころかキラキラと輝かせながら、
その人のことをじつと見ていた。

もちろんそこに恐怖の感情なんて一つもなかった。

銀色の長髪が月夜に揺れる。

その人は切れ長な目を細めながらゆっくりと近付いてきた。

先程の返り血のせいだろうか。その人の衣服は真っ赤に染まっ
ていた。

それにしても半端じゃない。気配が違う。所作が違う。

一挙一動のすべてが只者ではないと伝えてくる。

こんな人がいるなんて……

ずっと鞘に納められる大太刀を眺めながら、俺は無意識に姿勢を正していた。

「……あ、あ、あの、ありがとうございます」

『なに…… 女に死なれるのが嫌いな性分だな』

そう言うとその人は俺の足元を一瞥し、目を瞑ってからこう続けた。

『立てるか？』

「はい、もう大丈夫です。」

そうかと頷き、顎に手を当てる。少し考えた後、その人はこんなことを言ってきた。

『近くに家がある。風呂と着物を用意しよう。来るといい』

一瞬、躊躇する。しかし直ぐに『助けてもらって疑うのも悪い』と結論付けて

「ありがとうございます……」

俺はその人の言葉に甘えることにした。

『礼には及ばんよ。ついてこい』

案内されながらその人の後を追う。

その人は道中、よたよたと歩く俺をマメに振り返り、気にかけてくれていた。

……なんかいい人そー

先程助けられたこともあり、その背中が果てしなく頼りに見えた。

しばらく歩くと視界が開けた。

そこには昔話にでも出てきそうな藁作りの屋根の家が一軒あった。

『ここだ』

戸を開き視線で入るように示される。

そういえば自己紹介がまだだった。

お邪魔する前に名乗るのが筋というものだろう。

俺は改まって姿勢を正した。

「お邪魔します…… えつと俺の名前は……」

『まずは風呂に入れ』

言葉を遮られてよくよく自分の格好を見る。

泥と返り血だらけになったその姿は、とてもじゃないが他人様の家に入りにできるものではなかった。

『風呂の支度をしてくる。中で寛くわんいでいるといい』

そう言い残し、家の裏手へと向かっていく。俺は慌てて呼びとめた。

「あ、あの！ 自分ちよつと汚過ぎるんで！ お風呂の用意できるまで外で待ってます！」

『かまわん。中に入っている』

一瞬、足を止めたその人は、振り返らずにそう言つと姿を消した。

「……さすがにこんなじゃ人様の家にあがねえよ」

そう呟いてはみたものの……

「ハックション！」

水分を含んだ泥に塗れた体は冷えきっていた。

俺はぶるつと身震いした後、申し訳ないと思いつつも家の中へと入っていくのだった。

家の中は綺麗に整理整頓されていた。

棚に陳列された食器類は1組ずつしか見当たらない。

どうやらあの人は一人暮らしのようだ。

「男の一人暮らしでこれはなかなかすげーな」

自分の部屋と見比べてぼやく。それから一通り家の中を見回すと、部屋の片隅に移動してちょこんと座り込んだ。

にしても

ようやく一息ついた俺は先刻の出来事を思い出した。

ひどい目にあつたな…… 山賊とか初めて見たし。

いきなり殺されかけるわ、矢で脚打ち抜かれるわで……

つつか天使は死なないんじゃないの間違いだら！

無茶苦茶痛かつたぞ！！

すぐ治ったけど！！！！

あの人いなかったら……

まじでやばかつたな……

そこで思い出したのは目の前で輪切りにされた男の姿だった。

「……………」

すぐに立ち上がり慌てて戸を開く。そのまま近くの草むらへと走った。

「うええええええええ」

吐く。吐く。吐く。

外から声。

「い、いえ！ なんでもないれしゅー！」

完全に忘れてた！

完全に！！忘れてた！！！

無いものがあつてあるものが無いぞおい！
それにしてもこの身体……

……ごちそうさまでした！！！！

つてあかああああああん！ 見るな俺！ 見るな俺！！

平常心だ！！

そう！！！！ 平常心！！！！

目を瞑って身体を一気に洗い湯船へと浸かる。

「目を瞑ってましたよ？ 目を瞑ってましたよ？ 大事なことなの

で二回言いました！」

『どうした？ まだ焚き足りないか？』

外から声。

「い、いえ！ 最高です！！！」

『そうか、布巾は戸の向こう側においておく。俺はしばらく外にいる。あがったら声をかけてくれ』

「はい！ 何から何まですいません！！！」

それからしばらく、俺は湯船を堪能した。

風呂をあがると、用意されてあった着物を借り受け、声をかける。

ガラガラ。

しばらくしてから家の主が戻ってきた。

『!?!』

その人は俺を見るや否やものの見事に硬直した。顔は若干赤みがかっている。

「え、えーと」

先程、自分の現状をまじまじと確認させられた俺には、その反応の意味が理解できていた。

はいはい、湯上り美人湯上り美人。すいませんねっと。
え？投げやりじゃない投げやりじゃないですよーっと。

「あ、自分、男ですよ?」

『……………』

無言で目を瞑り、ふるふると首を横に振られた。

ですよねー。

まあそれは置いておくとして。

「えーっと申し遅れました。俺の名前は川篠定臣っつていいます。助けてもらった上に、色々とお世話して頂いて感謝してます！」

目を開きこちらを見る。ふっと笑みを浮かべる。

『川篠定臣か……いい名だ。俺の名は轟劉生とらいゅうせいという。なに、たまたま気が向いただけだ。気にする必要はない』

「いえ！ そういうわけにもいきません！ 何か恩返しさせてください！ 肩叩きでも薪割りでも何でもします！！」

劉生さんはまた目を瞑ると顎に手を当て、少し考えるような仕草を見せてから、不思議そうに俺に尋ねてきた。

「俺の名は轟劉生だが……？」

知らないのか？ といった様子。

まずいな…… たぶん有名な人なんだろうな……
つつつても俺が知るわけねーしなあ。

でもこれ、知らないとか言うとか失礼かもしれないしな……
……しょうがないか！ ここは正直に言うしかない！

「すみません！ 俺こっちに來たばかりで有名人とか知らなくて！」

「……ふむ。俺もまだまだということだな」

気まづくなるかと思ったりもしたが、劉生さんはどこか楽しそう

に目を瞑って頷いていた。

それからしばらく他愛もない会話を交わしていく内に、劉生さんの口数は少しずつ増えていった

「そつだ、川篠。貴様、酒は飲めるか？」

「えつと飲めますけど」

「ふむ。秘蔵の酒がある。飲ませてやるつ」

「まじつすか！」

「ああ、貴様を気にいった。一晚泊まってい方がいい」

「あざーっす！」

そんな感じで二人だけの宴会は始まった。

秘蔵の酒は無茶苦茶おいしかった。

俺はあつという間に泥酔い状態になり記憶を手放した。

記憶を手放す寸前、そんな俺を劉生さんは楽しそうに眺めていたように思う。

なかなか楽しい酒だ。たまにはこつこつのも悪くはない。

「さて、俺は外で寝る。貴様はその布団でも使って寝ろ」

珍客は床に平伏し、先程から訳のわからぬくだを撒いている。
俺は呂律が回らなくなつた定臣から、酒瓶を取り上げた。

「らから透哩意味わからんのらって」

「やれやれ、その話はもう聞き飽きたぞ。

貴様の酒癖の悪さはなかなか面倒だな」

「……ZZZ」

「……ふう」

まったく……世話の焼ける奴だ。

俺は定臣を布団に包むと外へと出た。

チュンチュン チュンチュン

翌朝。

小鳥のさえずりが高らかに聞こえ、外は快晴。

そんな中、俺は絶望していた。

そう、二日酔いである。

「調子に乗って飲みすぎたあ…… うぶっ」

昨日から吐いてばかりだと思いながら、ここで吐くわけにもいかず、重い身体に鞭を打って外へと這い出していく。

ガラガラ

戸を開けた先には一人の少女がいた。

あちらも戸を開けようと手を伸ばしたところらしく、驚いた顔でこちらの様子を伺っている。

一瞬、顔を見合わせた俺と少女は同時に口を開いた。

「轟劉生殿とお見受けする！ 我が名は」

「あ、鞘野小夜子」

再び顔を見合わせる。

すぐにはっとした様子で小夜子が口を開いた。

「お、おみそれしました！ 一目で名前まで看破されるとは……
噂にたく」

「ちよつとごめん……」

口上を遮って小夜子とすれ違い外へと出ていく。限界が迫っていた。

よたよたと歩く俺を必死な様子で小夜子が追いかけてきた。

そこに劉生の声。

小夜子が顔を上げると、そこには桶に水を汲んできた劉生がいた。劉生は訝しげな顔で定臣のことを見下ろしている。

「連れが世話になったようだな」

劉生は小夜子にそう告げると、定臣に水を手渡し、ゆっくりと飲ませた。

「やれやれ…… 定臣。貴様はもう少し家で寝ている」

劉生は小夜子を一瞥し、顎に手を当てて目を瞑る。それから一つ頷くと小夜子に向ってこう言った。

「その、悪いがこいつを家まで運んでやってくれんか。男の手で女に触れるのも気が引けるのでな」

「は、はい！」

小夜子におんぶされて運ばれていく定臣は、何やら不満気に『俺は男だ』などと呟いていた。

劉生はそれを一笑に伏し、小夜子に次いで家へと向かった。

家に着くと、二人は定臣を布団に寝かしつけ、今更ながらに自己紹介を交わした。

「あなたが轟劉生殿でしたか!? 私はてっきりこちらの方が……」

定臣を見て小夜子が言う。

「そいつは川篠定臣といってな。昨日、意気投合して飲み交わした仲だ」

「失礼しました！ 初見で名前を言い当てる程の読心術を使われていましたので…… てっきり私は…… 勘違いしておりました！」

そう言うと小夜子は深く腰を折った。

それを聞いた劉生は目を瞑り、顎に手を当て思案する。

「こいつにそんな術は無い。鞘野といったか…… 定臣が知っているか。余程に名が知れていると見える。俺を名指しで会いに来る輩は、果し合いか弟子入りと相場は決まっている。 貴様は果し合いかな？」

劉生のその問いに小夜子が慌てて返事する。

「め、滅相もございません！ 私は轟殿に弟子入りしたく！」

「俺は弟子はとらん。ここを探し当てるくらいならば既に知っているよ」

即答。

しかしその答えを予想していたのか、小夜子は動じる様子もなく劉生の目を真っ直ぐに見つめていた。そしてその場に両膝をつくと

「そこをどうかお願いします……！」

腰を深く折り、土下座した。

部屋の中を静寂が支配する。

二人の間に緊張した空気が張り詰めていく。
そんな二人の緊張をぶち壊しにしたのは

「う……だ、だれか……みずうう」

定臣のそんな間抜けな声だった。

しばらく小夜子を見ていた劉生が短くため息をつく。

そして定臣の方を一瞥した。

「頭を上げる。本来なら追い返すところだが……定臣が世話にな
ったのでな。話くらいは聞いてやる」

小夜子の顔がぱあっと明るくなる。

「ありがとうございます!!」

劉生は小夜子の正面にどっかりと腰を降ろすと、顎に手を当てて
話の続きを促した。

「それで……何故に力を欲する？」

小夜子は真顔になり少し俯き、ぎゅっと手を握りしめた。
しばらくの沈黙の後、決意した様に顔を上げる。

「父の仇を討つためです……」

それを聞いた劉生は顎から手を離すと、無表情に小夜子を見据え

た。

「つまらん理由だ」

「なっ!？」

「そんなくだらんことに俺の刀を使わせるわけにはいかん。仇が討ちたいのならば闇討ちでもなんでもすればよい」

小夜子は歯を食い縛って押し黙った。
再び部屋の中を静寂が支配する。

「ふむ。……危ういな」

しばらく小夜子を見ていた劉生が異変に気づき、そう呟いた。

「わた、私が、やらなきゃ…… わた、わたしが……」

小夜子の瞳からは光が消え、涙が溢れ出していた。

「あ…… あ… ああああ」

ガタガタと震えながら頭を抱え、蹲る。

呼吸が明らかにおかしくなっていく。
ガリガリと頭を掻き毟る。

その手を離れたかと思うと、今度は両腕を抱き締め肩口に爪を立てる。

白い肌にしわりと血が滲み始めたその時

小夜子の首筋に劉生の手刀がすとんと落ちた。

朝のことはよく覚えていない。
意識がはつきりしたのは昼をまわってからだった。

「おはようございます！ 昨日はどうも！」

がばつと起き上がると、隣に寝転んでいた劉生さんに声をかける。

……女だった。

「……えーとエンジェルフォーム？」

なわけないかと、よくよく確認する。

「あれ？ この子、鞘野小夜子？ ……あぁ、朝いた気がするなあ」

俺は事情を尋ねようと劉生さんを探した。
しかし家の中に劉生さんの姿は無かった。

「劉生さん外かなあ」

玄関口まで出ると、空気を連続で裂く様な音が聞こえてきた。

ヒュン！ ヒュン！

「す、すげ……」

俺を出迎えたのは大太刀を持ち、鍛錬に励む劉生さんの姿だった。

流れる様な太刀筋。

めりはりのついた静と動。

一連の動作を締める凜とした残心。

他人の鍛錬姿にここまで心奪われたことがあっただろうか。

俺は無意識にその場に立ち尽くして見惚れていた。

しばらくして俺に気付いた劉生さんが手を止めた。

「起きたか」

「あっ」

動きが止まると自然と声が漏れていた。

もう少し見ていたかった。

俺はそのステージにアンコールが無いことを残念に思った。

「なんだまだ二日酔いが抜けきっていないのか」

「い、いえ…… 綺麗だったなあって」

劉生さんが少し驚いた様な顔をした。

「ほお…… 定臣、貴様は刀を持ったことがあるのか？」

確かにあるにはある。

しかしそれと劉生さんのそれとは次元が違う。

俺は少し慌てて早口になっていた。

「ないないです！」

そんな俺を劉生さんはじっと見据えていた。

それから不意に顔を綻ばせたかと思うと、こんなことを言ってきた。

「定臣…… 貴様はおもしろい。命を落とすまで実力の差がわからん輩も多いのだ。誇っていいぞ」

ぶんぶんと首を振る。

「劉生さんの剣技を見て実力の違いがわからないとか、ただの強がりっすよ」

「ほお…… おもしろい。……くくっ、ふ、ふはは、ふははははは」

俺の言葉を聞いた劉生さんは突然笑いだした。

この人ってこんなに笑うんだ。

俺はあっけにとられながら劉生さんが笑い終わるのを待った。

不意に劉生さんが真顔になり、姿勢を正す。
俺はがらりと変わった雰囲気に息を飲んだ。

何が彼の琴線に触れたのかはわからない。

「定臣」

ただ、振り返って1つ言えることは

「お前を俺の」

轟劉生という男が頑なに守ってきた聖域への侵入を

「弟子に迎えたい」

この日、初めて許したということだった。

邂逅・後編

目が覚めると知らない天井だった。

「私は……」

空気を手で掴みながら記憶を紡いでいく。

轟劉生は礼節を重んじていると聞いて一生懸命に話し方を学んだ。必死に探して、ようやく轟劉生の家に辿りついた。皆が口を揃えて言うように、やっぱり弟子入りを断られた。

その後……

その後

「……あゝあ、またやつちやつたよ」

過去の出来事は時間の経過と共に際立っていく。良い思い出はより良いものに、その逆もしかり。

父の敵討ち。

幼い頃からずっとそれだけを生き甲斐として育てられた。

でも私は、仇の名前しか知らなかった。
顔も知らない相手に怒りを抱き続けるには糧が必要だった。
だから私は両親の最後の姿を思い出し続けた。

お父様は苦しそうな顔をして死んだ。

お母様は最期までお父様の仇を討てと呟いていた。

仇のことを考えると両親の最期の姿が浮かぶようになっていた。
その重責が辛かった。

でもそれを口にするには絶対にしちゃいけないことだと思った。
それは歳を重ねるごとに、どんどん、どんどん、私の中
で重みを増していった。

いつの頃からか、私は仇のことを考えるだけで錯乱するようにな
っていた。

「せっかく言われた通りに話せてたのに……」

がつくりと肩を落とす。

それからもう一度、奮起して轟劉生を探すことにした。

するとそこに話し声が聞こえてきた。

？弟子に迎え入れたい？

劉生さんは俺にそう言った。
突然のことに、あっけにとられていた俺はようやく言葉の意味を
飲み込んだ。

「弟子つて……」

脳裏に先程の舞うような剣技が蘇る。

心底、綺麗だと思った。

できる事ならこの人に教えを乞いたいと思った。

うっかりと即答で承諾しかけた。

返事をする寸前、俺は自分がここにいる理由を思い出した。

危ない危ない。うっかり忘れてたけど俺、任務の途中じゃん。

そこで思いだしたのは鞘野小夜子。

その時、背後からものすごい視線を感じた。

慌てて振り返った俺は、なにやらカワイイ生物を目撃すること
になった。

そこには戸から顔半分だけを出して、じーっとこちらを見据える
視線が1つ。

鞘野小夜子だった。

「えーっと」

視線が合う。

「目が覚めたのか」

劉生が言う。

「じーっ」

なんだったつけな！。あれ。

あの可愛い妖怪なんだったつけ。え〜と

「座敷童子みたいだな…… あ！」

「じーっ」

見てくる。超見てくる。

「あ、あの」

「じーっ」

家の造りに風呂の形式、武器の種類までが日本と似通ったこの世界である。

もしかしたら妖怪の伝承なども、似たようなものがあつたのかも
しれない。

だとしたら初対面で妖怪似などと言われて気分が良いはずがない。
俺は慌てて鞆野小夜子に向つて謝罪した。

「じ、ごめん！」

「朝と全然違う」

ぼそつと呟く。

「え？」

「綺麗な人」

その言葉にフリーズする。

鞘野小夜子の指先は間違い無く俺を指しており、？綺麗？などという言葉は女性を形容する言葉であり、俺は男なわけであり、鞘野小夜子の指先は俺であるからして……

つまりは……

「あゝ…… はは……」

哀しすぎるので俺はとりあえずの愛想笑いを繰り出した。
そこに一言。

「いいなあ」

「え？」

「弟子いいなあ」

俺と鞘野小夜子のやりとりをじっと見ている劉生さんは、なにやら難しい顔で鞘野小夜子の方を見ている。そして鞘野小夜子はそれに気付きもせず、ひたすら俺のことを凝視していた。

「じーっ」

「え、えっと…… 劉生さん？」

「ふむ」

「弟子いいなあ」

尚もじーつと俺を見続ける鞘野小夜子。

それを完全に放置して劉生さんがKYすぎる発言をした。

「それで定臣よ、返事はどうした？」

「これ放置！？ねえ放置するの！？」

即座につっこむ。

「じーつ」

見てくる。見てくる。超見てくる。

もう俺、穴が開きそうです。

「轟殿、私も弟子入りしたいです」

口調が変わる。

ものすごい違和感だった。

「弟子はとらん」

「説得力ないって！」

俺に指摘された劉生さんが腕を組む。

「じーつ」

えーっと…… これどうすればいいんだ。
なんかこの子、可哀想になってきたんだが……

鞘野小夜子はこの世界の主人公で……

そんな鞘野小夜子は劉生さんの弟子になりたがって……

鞘野小夜子の手助けをするために、この世界に来た俺は劉生さんに弟子に誘われて……

これはややこしいことになったな。

いつそ自分の正体を明かして鞘野小夜子を弟子にしてくれるように頼んでみるか？

いや…… でもいきなり天使とか言われて信じるだろうか……

俺なら絶対信じない。というか信じる前に心臓グツサリやられてた。

うーむ。

言うべきか否か。どちらにせよこのままでは埒が明かない。

俺は覚悟を決めて自分の正体を明かすことした。

「んー困ったなあ、劉生さん少し聞いてもらいたい話があるんですが」

俺は劉生さんにそう言うと、鞘野小夜子の方へと向き直り続けた。

「鞘野小夜子さん、初めまして川篠定臣っていいいます。

君にも関係ある話だから一緒に聞いてもらえるかな？」

「じーっ」

じつと見つめたまま頷く。

「……とりあえず出てこない？」

俺の言葉に無言で頷くと小夜子が外に出てきた。

にしても超見られた。まじで顔に穴が開いてそつだ。

まあそれは置いておいて。まずは何から話そう……

透哩みたいな説明じゃ絶対理解できないだろうしなあ、理解できてない前例がここにいるしなあ。はい俺ですー、それが俺ですー。つと……

どうしたものかな……

しばらく考えてはみたものの良さそうな案は浮かばなかった。

こうなれば当たって砕けるである。いや、実際砕けると困るわけではあるが。

誠心誠意、目を見て話せばわかってもらえるは……ずず？

俺は結局、偽ることなくありのままを話すことにした。

「えっと、信じてもらえないと思いますが…… 実は俺、天使なんです」

はい無理ー！ 自分が聞いても何言ってるのこいつ？ って感じだわ。

「はあ……」

案の定、ぼーっとこつちを見ている鞆野小夜子。

「ふむ……」

無表情の劉生さん。

痛い！ 沈黙が痛いよ！

「えーっと…… それで任務でこっちの世界に来てまして」

その言葉に劉生さんがぴくつと反応する。

「任務…… 羅刹の差し金か？ すると？ 天使？ というのは火の国の新たな組織ないし構成員の名称か」

羅刹に火の国。なにそれ知らない。

「ん…… 羅刹も火の国も初めて聞く単語です。信じてもらえないでしょうが俺は昨日、この世界に来たばかりなので」

「ふむ…… それでは定臣よ。天使とは何なのだ？」

へ？ 天使って何なの？ そんなの俺も知らないよ？

なぐんて言える雰囲気じゃないな。

これは真面目に考える必要があるそうか。

正直、急展開すぎて自分でも考えたことは無かった。

幾つもある世界の主人公をサポートすることを任務としている存在。それは理解した。

でも何のために？

そもそも俺が任務なんて得体の知れないものをやるかと決意したのは、学園と呼ばれる施設に辿りつくためだった。

入学すればモデルチェンジが使えるようになり、任務時以外はこの憎たらしいエンジェルフォームとおさらばできる。

るるかの話によると学園とは大天使養成施設のような所だった。

じゃあ大天使って何だ？

そもそも任務なんてものをなんで遂行しないとイケない？
達成した先に何かあるのか？

疑問を挙げればきりが無い。

その時、透哩の言葉が脳裏の蘇った。

在るものは在る。

あいつは俺がこの疑問にぶつかると知っていたのか？

だからあの時、その解答としてあんなことを言ったのか？

あいつなら何でもありな気がしてきた。

まあ要訳すると……

深く考えるだけ無駄なこと…… だよな？ これって。

「えーと…… 天使ってというのは……」

言葉を選ぶ。出来るだけわかりやすく伝えないと意味がない。

「神に選ばれた者を助ける役割を担って世界に光臨する者です」

「貴様、いきなり俺に助けられておいてよくもぬけぬけと」

劉生さんにツッコまれた。この人、ツッコんだりするんだな。

「ですよー ……でも」

俺は真っ直ぐに劉生さんの目を見据えた。

「俺、天使になったばかりで全然未熟だけど嘘だけは言っていないで」

しばらく俺の目をじっと覗き込んでいた劉生さんが大きく頷いた。

「いいだろう …… 信じよう。 …… で？ それをどうして話した」

「その神に選ばれた者がその鞘野小夜子だからです」

俺は鞘野小夜子の方を向いてそう告げた。

「 …… えー」

鞘野小夜子は全く信じた様子がない。

「なるほど」

対して劉生さんは何やら納得してくれている。

「ようやく理解した。俺を知らないのに鞘野を知っていた。鞘野は読心術だと言ったが、貴様からは術を扱う者の持つ気配が感じとれなかった。 先程の言の通りならば納得のいくことだ」

思ったよりも頭がやらかいなあこの人。

「それで…… 助けるとは具体的に何をするのだ？」

「天使の任務は選ばれた者の夢や願いを叶える事です」

「ふむ…… 夢や願いとはまた曖昧なのだな」

「そーなんすよー。天使ってかなりいい加減みたいで俺もびっくりしてます」

「自分で言う奴があるか愚か者め」

笑みを浮かべながらに劉生さんがそう言った。

人はわからないものには恐怖を感じる。

俺は正体を明かして、この人に距離を置かれることを恐れていた。俺はこの人の懐の深さを見誤っていた。

「ごめんなさい！ 轟劉生をなめてました！」

俺はそう言うと深々と頭を下げた。

劉生さんは少し驚いていたけど、すぐに俺の言いたいことを察してくれたらしく、ゆっくりと頷いた。

「じーっ」

そんなやりとりを鞘野小夜子は、いまだに無言で見つめていた。

「それで、鞘野さん」

「小夜子でいい。私も定臣って呼ぶ」

「わかった、それじゃ小夜子。君の夢ってなにかな？」

しばらくの無言。熱視線を俺に浴びせたまま、小夜子が口を開く。

「夢なんて…… 無い」

ピンポン！

不意に俺の脳内にクイズ番組さながらな効果音が流れた。

主人公の夢や願いに虚偽がないか感覚でわかる。

「ってこれの事かよ！ わかりやすすぎだろ！ ピンポンって何だよ！！！」

「そ、それじゃ願いは……？」

若干の引き笑いを浮かべながら尋ねた。

「……願い」

元々無表情だった小夜子の顔から表情が消える。

そこにはイメージで見たままの人形のような顔があった。

小夜子は声のトーンを落としてぽつりと呟く。

その声色の温度の低さに俺はなんとも言えない気持ちにさせられた。

「……火の国、国王

神王羅刹しんおうしやくを殺すこと」

ブッブー！

嘘らしい。

「本当は？」

「なっ！？ 嘘じゃない！ 私はお父様の仇を討つんだ！！」

嘘だということはわかる。

でも本人にそのつもりが無いことも充分に理解できる。

実際に殺される寸前まで自分の本当の願いに気付けなかった奴がここにいるしな。

はい俺ですー、それが俺ですよーだ。

にしてもこれは思ったより厄介かもしれない。

必死に自分に言い聞かせてるんだよなこれ？

……なんかこの子ほっとけないわ俺。

「なあ小夜子、俺はお前の味方だから」

とりあえず仲良くなるところからかな。

正直、こっちの世界のこともわかってないのに人助けなんてままならないだろうし。

「えっと……それで小夜子は、そいつを殺すために劉生さんに弟子入りに？」

「そう。……でも断られた」

「だめなの？ 劉生さん」

「だめだ」

うわ、即答かよ。

「えーなんでー」

「仇討ちなどくだらん。それに相手が羅刹なら尚更だめだ。仇を討った奴は新たな仇になる。羅刹を討てば世界の仇になるぞ」

「羅刹どんだけー」

「それに鞘野よ、貴様が討たればまた誰かが貴様の仇を討つだろう」

あつ小夜子泣きそう

「……もん……いないもん！ 私の仇を討つ人なんか！！ もういいよ！！！！ 轟劉生の馬鹿！！！！」

そう言うつと小夜子はその場を走り去ってしまった。でも走り去った先は劉生さんの家の中だった。

い、意味ねー！

唾然と小夜子を見送った俺は、劉生さんがおもしろい顔になっているのに気が付いた。

「ば、ばかだと……」

ショックだったらしい。

「えっと劉生さん。落ち込んでるとこ、申し訳ないんですが」

「落ち込んでなどおらんわ！」

あ、赤くなった。

「うん、まあそうですね」

「落ち込んだらん」

「はい、そうですね」

「……それで　　なんだ？」

「えつとですね。天使だからわかるんですが、さっきの小夜子の願
いなんです、あれ嘘です」

「ふむ」

天使だからわかる、のくだりツッコまないんだなこの人。

「でも本人に自覚は無いみたいだから、本当の願いがわかるまでは
さっき言ってたことを信じてるフリして様子を見たいんです」

「ふむ」

「えつとだから小夜子を弟子にしてもらっ
断る！」

あゝ……もしかしてスネてる？

「一度、断った手前、承諾しにくいとか……です？」
スネてるとか言うともっとスネそうだしなこの人。

「……そんなところだ」

「俺なら弟子にしてもらえるんですよね？」

「うむ」

「えっと。それじゃ俺が弟子にもらって、俺が小夜子を弟子に
します」

「なっ！？」

さらりと言い切きると、劉生さんはなかなかにおもしろい顔にな
っていた。

「あの子に仇討ちとか絶対させないって約束しますんで 許可
してもらえないでしょうか？」

「……うーむ」

おっ脈あり。

「あの子に教えるために弟子入りするんじゃない、俺自身、劉生さんの剣に惚れたんです」

「!?!」

あつ顎に手を当てた、もう一押しかな？

「だめでしょうか……」

「……いいだろう。約束は必ず守れよ？」

きたこれ。

「はい！ それじゃ小夜子に伝えてきますね！」

こんな感じで劉生さんの弟子になった俺は、弟子になった直後に弟子をとるといふ何とも奇妙な状況に陥ったのだった。

師、轟劉生の家で小夜子と共に暮らし始めた俺は、稽古の合間や飯の最中、はたまた就寝前の短い時間に、近隣の村に食料の買出しに出た時など、様々な人々からこの世界のことを学んでいった。

この世界は既に天下統一が成されており、それを成しえた神王？ 羅刹？という人物が王として君臨している。その王はかつてない善政を敷いており、民からの信頼も厚く、聞いた限りでは非の打ち所が無かった。

小夜子は何故、その？ 羅刹？を殺したがっているのか。

その疑問にぶつかった俺はこの世界の歴史を紐解くこととなった。

かつてこの世界にも戦乱と呼ばれた時代があった。

後に？ 四国時代？と呼ばれるその時代、世界には四つの大国が君臨し、覇権を争いながらも均衡を保っていた。

世界王？羅刹？が治めていた？火の国？

最古の歴史を持つ？白蓮？
ひゃくれん

商業の？黒曜？
こくよう

そして死の狂国として悪名高かった？尊迺栄？
そんじえい

驚いたことに小夜子は商業国家？黒曜？の姫だったらしい。

四国時代末期、火の国は急激に勢力を広げていた。

それを脅威に感じた隣国？白蓮？は自国の勢力拡大を図るため、同じく隣国に脅かされていた？黒曜？に同盟を求めた。

こうして長年いがみ合ってきた両国は、奇しくも利害の一致という形で同盟を果たすこととなる。

国と国の約束には形が必要だった。都合の良いことに両国には年頃の王子と姫がいた。

両国は二人の婚姻を同盟の調印とすることに決定した。

？黒曜？は焦っていた。

隣国の？尊迺栄？は好戦的な女王が統べる狂国であり、いつ攻め入ってくるかも知れない。冷徹無比なその支配にあえば民が絶望することは目に見えている。そのことは様々な国を滅亡させてきた？尊迺栄？の歴史が証明していた。

？黒曜？に急かされる形で婚礼の日取りは早々に決定された。

そしていよいよ同盟が成されようとしたその前日

その事件は起きた。

？尊迺栄？の不意打ちにより、僅か一夜にして？黒曜？はこの世

から姿を消すこととなる。

辛くも母と二人で逃げ延びた小夜子が後になって知らされたのは、国が滅んだという事実と、滅ぼした国が？火の国？の属国になったと宣言されたことだったという。

完全に意表を衝かれる形で当てを失った？白蓮？は、一夜にして世界最大の大国となった？火の国？に無条件降伏を余儀なくされた。これによって火の国の天下統一は成されたのである。

轟劉生を知らない者はいない。

これは本人による誇張などでは無かった。

当時、轟劉生は？尊遼栄？の將軍職に就いており、武力面での要だった。

世界最強の呼び声は当時から高く、中でも？尊遼栄？が世界にその名を知らしめた？漢遼途かんりょうじの落日事件？での活躍ぶりは後世に語り継がれていた。

？漢遼途？は当時、天下統一に最も近い国だった。

その武力面での要であった？緒方刀座おがたとうざ？を決闘により打ち破ったのが轟劉生、その人である。

自軍最強の男が打ち破られたことにより？漢遼途？は動揺した。そこから始まったのは女王による手段を選ばぬ一方的な殺戮だった。

女王の殺戮が終わりを迎えた時、？漢遼途？という国はこの世から姿を消していた。

轟劉生の名高さはその強さと残虐さ故なのか。
それは少し違っていた。

そこには？尊迺栄？の戦略が関係していた。

劉生は將軍職でありながら、あくまで女王個人の懐刀とし、出陣するのは国を賭けた決闘、もしくは女王に直接危害が及びそうになった時のみとしていた。

『虐殺行為はすべて女王の所業であり、轟劉生には関係なし』

この噂は？尊迺栄？が敵国を滅ぼす度に、周辺諸国では不自然な程に流れていたという。

？尊迺栄？が？火の国？の属国となったことで劉生は女王の下を離れた。

女王との確執が誠しやかに囁かれる中、劉生は頑なに口を閉ざしたという。

とはいえ諸悪の根源である女王から離反したことにより、轟劉生の名は一気に昇華された。

本人が望む望まぬをよそに、そのことは劉生に幸いした。

そして極めつけとなったのは？羅刹？のあまりの人気の高さから発刊が始まったという『神王通信』なる読み物の中で？羅刹？本人の口から『最も強く、人格者であったのは轟劉生だった』と語られたことだった。

それにより今では劉生のコーナーまで設けられ、毎号ごとに伝説や裏話が語られている。

当然ながら本人はそれを公認していない。

でも師匠…… 取材の人が来ると明らかに嬉しそうなんだよなあ
言っと斬られるから言わないけどな！

「ん…… でも小夜子、よく師匠に弟子入りする気になったね？
直接の仇の国の大将だったわけでしょ？」

風呂に入っている小夜子のために俺は薪をくべていた。

「轟劉生は違うもん、国の名前が変わってるんだし仇は羅刹だよ！
通信にも轟劉生は黒曜を滅ぼした尊途栄を見限ったって書いてあ
ったもん！」

そもそもそれ羅刹の本じゃん。

弟子入りから半年が過ぎ去っていた。
はじめは、時々錯乱する小夜子の姿に驚かされたりもしたが、今
ではそれもすっかりと無くなっていた。

「その師匠をフルネームで轟劉生って呼ぶの、いい加減やめような
小夜子？」

「やだもん！ 私の師匠は定臣でしょ！ あの人は関係ないんだから！」

「いあいあ師匠の師匠は大師匠だから！ 敬意払えよ！ それに家に住ませてもらってお世話になってるだろ！」

「ぶ〜！」

それにしても……

あのウルトラ無口がよくここまで話してくれるようになったもんだよなあ

感慨深さに思わず空を見上げる。そこには綺麗な星々が輝いていて、俺は思わずそれに目を奪われた。

「なあ小夜子、いい国だよな」

この半年間、小夜子の口から羅刹の悪口は聞かされても、火の国の悪口を聞かされることは無かった。むしろ他愛もない会話から耳にするのは、黒曜と比べてここがいいといった内容ばかりだった。

小夜子はたぶん、この国が好きなんだろうな……

事情が事情だけに、それを認めるわけにはいかないんだろうな

……

俺はこの子のために何をしてやれるのだろうか。最近は二人になるとそんなことばかり考えていた。

「なあ小夜子」

「俺だ」

師匠の声だった。

「入れ替わってるし!？」

「先程な……」

「えっと湯加減いかがでしょう？ 小夜子はぬる目じゃないとダメだから加減してるんですが」

「ふむ…… このままでかまわん」

「わかりました」

ぱちぱちと薪の爆ぜる音がする。俺はしばらく師匠との無言の間を楽しむことにした。

しばらく橙色に揺らめく炎を眺めていると、生温い風が前髪を撫でた。それをきっかけに俺は何度目かの決意を固めた。

「師匠」

「む？」

「尊途栄がどうして火の国の属国になったのか…… そろそろ教えてもらえないでしょうか？」

この話になるといつも師匠は機嫌が悪くなり、話をはぐらかしていた。俺にはどうしても尊途栄が黒曜を滅亡させたことが羅刹の指しだとは思えなかった。

「……………」

「小夜子は…………… たぶん火の国が好きなんですよ」

「……………」

「これは俺の独り言です」

「……………」

「黒曜を滅亡させたのは、尊途栄の女王の独断だったんじゃないでしょうか…………… 羅刹はそれを庇^{かば}っている気がしています」

火の国は後の裁判で女王に死刑を宣告し、既に刑は執行されたと発表していた。しかし俺は、羅刹が噂通りの人物ならば、その発表は偽りのものだろうと思っていた。

「すまない定臣、その話はそこまでだ」

その声を残して風呂場から人の気配が消えた。

「ふう…………… 今日もだめかあ」

再び空を見上げ、大きく伸びをする。そして

「なぐに、時間はあるんだし！ のんびりやるさっ」

そう星空に宣言した。

明らかな矛盾点。それに誰も異を唱えてはいなかった。人は現状に満足していると無駄な詮索はしなくなる。それはどこの世界でも同じことなのだろう。

尊途栄が火の国の属国になった理由。

公には羅刹が単身で尊途栄に乗り込み、女王を攫い従わせたことになっている。しかしあの師匠が易々と主を攫わせるだろうか。

さらには黒曜を滅亡させたのはあくまで自分の指示としておきながら、後になって裁判にかけ、女王を死刑にした理由。

黒曜の生き残りに配慮してのことなのか？ それならば、最初から女王の独断であったと発表した方が都合が良かったのではないのか。

そして女王が処刑されたにも拘らず、尚も羅刹を支持する元尊途栄の民達。

女王に愛想が尽きていた？ それならば、攫われた女王のために火の国に降ったそれ自体に矛盾が生じている。

一番納得いかないのが、あの師匠が攫われた主を追うどころか放置し、国の名前が変わるや否や見捨てるようにして国を離れたことだった。

すべてが公表されている通りなら、羅刹は女王を利用するだけ利用し、自らの罪を擦り付ける形で処刑したことになる。

今の暮らしが豊かになったからといって、そんなことをする王がここまで民衆に愛されるだろうか？ 少なくとも俺にはそうは思えない。

んゝ頭痛くなってきたな……

とりあえずこれは確定だけど…… 師匠は絶対に女王を庇^{かば}ってる。確執うんぬんで離れたわけじゃない。

まあ俺がどうこう考えても、結局は師匠が本当のことを話してくれない限り、なんとも言えないしなあ……

修行も面白くなってきたしことだし、師匠の気が変わるまで、まったりと修行に励みますかねっと

肉体の限界は精神の限界より先に訪れる。そのことは最後の大会を怪我で見送った時に理解させられた。

しかし今の俺には幾らでも無理が利いた。
それに加えて、共に切磋琢磨する小夜子という存在もいる。

フリとはいえ、師匠は刀に一切の妥協は許さない。俺達は来る日も来る日も、朝から晩まで徹底的に鍛錬に励んだ。

三年が過ぎた頃、俺達は師匠に『二人には天賦の才有り』と言わしめるまでに実力を伸ばしていた。

カコンッ

「ふう」

その日は俺が薪割り当番だった。そんな俺の傍らには、いつものように小夜子の姿があった。

カコンッ

「よいしょっと」

「小夜子は休んでいいよ」

「やだよーだ！ 少しでも鍛錬して早く定臣に追いつくんだから！」

「そんなに差ないって」

「まだ私、一本もとったことないでしょ！」

「それはリーチの差だと思っ……」

「もう身長もほとんど変わらないでしょ！」

言われて気付かされた。ここ三年、小夜子はそれこそ章のごとく、
よきによきと身長を伸ばし、遂には俺と背丈が変わらないままでに
なっていた。

「あ……」

そこで気が付いた。

「？……どうしたの面白い顔して」

完全に忘れてた！！

身長が伸びる＝成長している＝老化している。

つまりは……

俺って小夜子を不老不死にしてねーじゃん！！

「小夜子ごめん！ まじで忘れてた」

「え？」

「俺って天使だから不老不死なんだよね」

「 ああ、なんか出会った頃にそんなこと言ってたね」

「信じてないな！」

「うん」

「そんなはつきりと言わなくても」

おいおいと泣き真似をして見せる俺をよそに、小夜子はサクサクと片手で薪を割っていく。

にしてもすげー腕力だよなあ、男の俺と大差ねーんだもん。

「ふっふっふ」力だけなら定臣と大差ないもんねーだ」

じつと見ているとニヤリと笑いかけられた。

「だな、それで小夜子。信じなくてもいいんだけど、俺って小夜子のことも不老不死にできるんだよね」

「へえ」

「ほんとは出会ってすぐにやらないとだっただけどき、正直忘れてた……ごめん」

「定臣まぬけだもんね」

「グサつときたよ！今のグサつときた！」

「あはははは」

ころころと笑う小夜子は出会った頃とは別人のようだった。

本当によく笑うようになったよなあ……

「ん、それで行使しちゃっていいかな？」

「いいよ、定臣の気が済むならそれで」

全然信じた様子もなく小夜子が適当に返事をする。俺は少し悲しくなりつつも小夜子に向って手をかざした。

「了解はとつたからな！」

眩い光が小夜子を包み込む。光は激しさを増したかと思うと、一瞬にして消え失せた。

「え!？」

「ん、できた」

驚いたような顔で自分の体を見回した小夜子だったが、しばらくしてお得意のじと目を俺に向けると

「特に変化なし」

そう呟いたのだった。

小夜子を不老不死にしてから数日後のこと、その日は近くの村まで食料の買出しに来ていた。

食料の買出しは月に一度で、買出しといっても代金のすべては『神王通信』の出演料から算出され、後ほど国に請求される仕組みになっているので、実質は食料を店に貰いに行くだけの行為である。

ちなみに俺と小夜子も『あの轟劉生が弟子を！？』などとスクープされて以来、半強制的に紙面を彩らされている。

村までは師匠の家から一時間程度の距離だった。弟子入り当初は極端に人見知りの激しい小夜子を置いて一人で来ていたものの、『定臣と一緒がいい』などと可愛い駄々をこね始めたので、いつからか二人で通うようになっていた。

『神王通信』の効果は絶大で、俺達が買出しに来る日は見物客が多く、村の人口は三倍に膨れ上がっていたらしい。

村人の間では月に一度の？轟祭？などと謳われていたのだが、俺達がこのことを知ったのは随分と後になってからのことだった。

「ふう……いつ来てもすごい賑わいだなあこの村」

「だね」

村に入ると我先にと店の主達が俺達の元に駆け寄り、自分の店をアピールする。商売の神様よりも神王通信様々といったところなのだろうか。俺達が利用した店は必ず神王通信で紹介されるため、CM効果絶大とあって店主達は毎度、必死の形相で詰め寄っていた。

そんな店主達を愛想笑いでやり過ごし、お目当ての物を購入していく。

轟流剣術、独特の舞うような足運びはやはり誰が見ても美しいらしく、修行の一環としてそれを駆使しつつ、買い物を済ませていく俺達を村の人達は歓声を上げながら拍手で見守っていた。

「今日はいなかったね」

買い物を終わらせた頃、小夜子がそんなことを呟いた。

「そりゃ先月が先月だったからね」

師匠に果し合いを挑む輩は後を絶たない。しかし挑んだ者は必ず絶命する。この暗黒の方程式は二人の弟子……つまり俺達が公表されて以来、曲がりにも曲がって……まあなんと迷惑なことなっていた。

要はあれだ。血の気の多い連中は、自分の腕を試したくて師匠に挑んでいたわけで……でも命は大事なわけで……わかるだろ？死なずに腕試しができるならそれに越したことは無い。そんなわけでお鉢が俺達に回ってきたわけだ。

で、山から降りてこない俺達に確実に会えるのが月に一度の買出しの日ってことで、買物物の後はかなりの確立で果し合いを申し込まれていた。そしてそのすべては孫弟子である小夜子がるんと率先して受け持っていたのだが…… いやはや、先月は間が悪かった。

先月、俺と小夜子は珍しく口喧嘩した。そしてそこに、なんとも言葉使いの悪い大男が挑んできたのである。なんというか……

手とか足とかありえない方向に曲がって不憫でした！

そんなわけで今日は果し合いも無しか、と二人で家路につきかけたんだが……

そんな時、村長から声をかけられ自宅へと招かれた。

いつもなら丁寧にお断りして家路を急ぐところだが、その時の村長はどこか焦っているように見えた。気になった俺達は後で師匠に帰りが遅いと怒鳴られる覚悟を決め、その招待を受けることにした。

村長宅に入った俺は思わず小夜子と顔を見合わせた。そこには大怪我を負い瀕死の状態の男が寝かされており、室内には血液が醸し出すなんともいえない匂いが漂っていた。

「村長これどうしたの!？」

慌てて尋ねた俺に村長は悲痛な表情で事情を説明し始めた。

「実はですな……」

村長の話によると、男はこの村から二時間程歩いた先にある別の村の住人で、村が山賊の襲撃を受け、命からがらこの村に逃げ延びたのだという。

火の国の天下統一によつて山賊被害は激減していた。しかしながら国の警備が行き届いていない土地は必ずどこかに出てくる。

羅刹の命により迅速な対応はされるだろう。しかしそれでも間に合わないことは多々ある。国からの討伐隊を待つていれば、隣の村の住人達は皆殺しにされるだろう。しかし今すぐにこの村から駆けつけば間に合うかもしれない。

そこまで説明すると村長は、賊の討伐を俺達に依頼したいと深くと頭を下げた。

「俺でよければ喜んで！」

考える前に即答していた。

「私もいく」

案の定そう言ってきた小夜子の両肩に手を添える。

「悪いけど小夜子は師匠に連絡してくれない？ 敵の規模がわからないし怪我人の治療も必要だろうから」

「……わかった」

小夜子はただの我が儘な娘ではない。人命がかかっている今の状況をよく理解していた。

それから軽く打ち合わせを済ませると小夜子と別れ、村を出発した。

山賊にはこの世界に来て早々に襲われた。あの時は成す術も無く殺されかけたが、今の自分ならば対処できる自信がある。俺は力強く拳を握ると足を速めた。

山賊行為を行う輩には二種類の人種がいる。一つは生活が苦しく、仕方が無く山賊に堕ちた類で、もう一つは己の欲を満たすためにより楽な方法を選んだ類の人種だ。

火の国は民の生活を第一に考えており、生活が苦しい者には国が援助を施している。

恐らく村を襲撃している山賊は後者なのだろう。

普通に生活していきなり略奪されて殺されるってふざけてるよなあ

頭の中でそう呟いた俺は、さらにスピードを上げていった。

村には三十分程で辿りついた。

パチパチとなにかが爆ぜる音が耳に届く。それは家が燃えている音だった。

女性の叫び声が聞こえる。視線を送るよりも早く、それは断末魔と成り果てた。

鼻につく死臭。ここは本当に村なのだろうか？

思わず呆然とする。

そんな俺の意識を引き戻したのは、少年の助けを乞う、か細い声だった。遠目に見えたその少年の背後には、今にも斬りつけようとする山賊とおもしき男が見えていた。

危ないなあ

そんな小さな子、斬りつけると死んじゃうじゃん。

そう思った瞬間

男は輪切りになり事切れた。

あれ？ 今斬ったの俺？……

「なんだてめえ！」

背後から声が聞こえた気がした。

振り向くと山賊が三人ほど死んでいた。

あれ？ また死んでる？

「ば、化け物だ！」

また声？ ってまた死んでるよ。

「か、囲め！一斉に斬りかかれ！」

あ、刀に血がついてる、やっぱり斬ったの俺だ。

「い、いけ！」

まあしょうがないよね、こいつらが村に攻め入ったのが悪いんだ
しって……俺、妙に冷静だなあ

「ぎゃああああ」

血が冷めていく。

「う、うわああああ」

怖がるくらいなら最初からやるなよなあ

「ひ、ひいいいい」

遠くから自分を見てるような感覚。

「た、助けてくれ！」

そう言ってた人をさっき斬り捨ててたよなあ

「ぎゃああああ」

その男の断末魔と同時に自分の中で何かかひび割れる音が聞こえた。

そしてその音を最後に俺の中の

時が止まった。

辺りは耳鳴りが聞こえるほど静かだった。
気が付くと俺は、死体の山の中に腰を降ろし、刀身を眺めていた。

「あ、あれ？」

「怪我人の処置は終えた」

不意に声がかかる。

「あれ？ 師匠？」

「貴様がやらねば村人は間違はなく皆殺しだった」

「あ……これ俺がやったのかあ」

血に染まった愛弟子をじっと見据える。

刀はどこまでいっても人を殺すための道具だ。それを使う剣術に明確な一線を引くとすれば、それは人を殺した事があるかどうかということだろう。

俺は見極めようとした。

今回、定臣は初めて人を殺した。

その一線をどんな感情をもってして越えるか。喜びをもって越えた者は狂心の道を歩むだろう。怒りをもって越えた者は修羅の道を歩むだろう。哀しみをもって越えた者は更なる哀しみを生むだろう。楽しみをもって越えた者は殺戮の道を歩むだろう。

しかし定臣は…… 定臣からは何の感情も読みとれなかった。

「定臣…… 貴様が斬ったのは何だ？」

本能的に危険だと感じた。

「え？」

だからこそ俺は

「もう1度言う、貴様が斬ったのは何だ？」

この愛弟子に

「俺が斬ったのは…… 山賊です」

後悔させなければいけないと思った。

「決して忘れるな、貴様が斬ったのは人間だ」

「人間……」

「死んだ人間はもう戻らん、だからこそ殺した人間は、摘んだその命の重みを背負って生きて行かねばならん」

俺は間違っていたんだろうか？

人を殺した人間が殺された。

それだけのことじゃないのか？

殺さないと守れない命があった。その命を守るために殺した。

ああ守るために殺すって矛盾してるなあ

師匠の言葉が心に響かない。正論だとは思った。しかし自分のや

ったことが間違っているとは思えなかった。

？あなたも人殺しでしょうに？

自分の中でどす黒い感情が蠢いているのがわかった。驚くほど冷めた目をしている自覚がある。俺はその目のまま師匠を見やる。その時、師匠の背後に小夜子の姿が見えた。

あれ？ 小夜子が泣いてる……

目が合った小夜子は泣きながら俺に抱きついてきた。

「ごめん…… ごめんなさい！ 定臣だけにこんな辛いことさせて！ 私がいけばよかった！」

ああそうか…… 俺が小夜子を泣かせちゃったんだな……

小夜子をそつと抱きしめる。不思議とどす黒い感情が消え失せていく。それを自覚した時、視界が歪んで見えた。

あれ？ 俺泣いてる？

「い、ごめんな小夜子」

うまく喋れない。

俺は何をやってんだよ！ 小夜子の仇討ちを諦めさせるんだろ！ その俺が人を殺して何とも思わなくてどうすんだよ！

心の中でそう叫んだ時、ガタガタと震えはじめた。押し寄せて来

た感情は恐怖。そして後悔。その場で泣き崩れた俺を小夜子は
と抱きしめてくれていた。

「…………ふむ」

二人の様子を無言で見っていた劉生はその手に握る刀を鞘に納めた。

小夜子がいなければ自分は間違いなく川篠定臣をこの場で
斬り捨てていただろう。

小夜子が定臣を人としての瀬戸際で踏み留まらせた。

「先に家に戻る。…………小夜子、すまんが定臣が落ち着くまでついて
やってくれ」

「…………わかった」

ますますこの娘に、仇討ちなどどくだらんことをさせるわ
けにはいかな。

そう心の中で呟きながら劉生は去っていくのだった。

生き残った村人達は定臣を救世主とし、少しでも落ち着くようにと空き家を提供してくれた。村人達の好意に甘えることにした小夜子は、定臣を空き家まで連れ添い、眠るようにと促した。肉体的にも精神的にも疲労困憊だった定臣は幼子のようにすぐに眠りへと堕ちていった。

「ぼろぼろじゃん……」

定臣の寝顔を見ながら頭を撫でる。出会ってから数年、小夜子にとって定臣は姉のような存在になっていた。

自分の前ではいつも笑顔だった。こんな自分が明るく振舞えるようになったのも、すべて定臣のお陰だった。

「こんな定臣見るの辛いよ……」

自然と涙が零れる。しかしすぐに、今は自分が泣いている場合ではないと立ち上がる。

「私がしっかりしなきゃ」

ふるふると顔を左右に振る。それから涙を拭って外に出た。

村の被害は定臣が迅速に対応したお陰でそこまで深刻なものではなかった。とはいえ、それでも救えなかった命があった。そして今まさに消えかけている命もある。

小夜子の手に力がはいる。定臣が繋いだ命の灯火を消させるわけにはいかない。

重傷者や自宅が被害にあった村人達は、幸いにも焼けずに済んだ大きな建物に避難していた。

村人達の結束は硬く、余裕のある者は有志で怪我人の世話や復興作業をあたってはいるものの、それでも人手は足りてはいない。

そんな中、疲れた様子一つ見せずに駆け回る小夜子の姿が、どれだけ村人達を励ましたらうか。少なくともその日のことをこの村の住人達が忘れることはないだろう。

ああ……今寝てて、夢の中だなと自覚できる瞬間がある。目はまだ覚めていない。しかし思考することができる。

『死んだ人間はもう戻らん、だからこそ殺した人間は摘んだその命の重みを背負って生きて行かねばならん』

自覚はあったけど俺ってやっぱりまぬけだなあ……今頃、師匠の言葉が心に響いてきた……

あの時……あの時、俺は恐ろしいことを考えてた気がする。

?あなたも人殺しでしょうに?

!?

馬鹿か俺は!俺のことを考えて言ってくれた言葉に対してそれはないだろ!

たまに自分がどうしようもなく冷たい人間なんじゃないかと思う時がある。

血が冷めていく感覚……

『そつちにいつちゃダメだ!』

あの時、小夜子がそう言ってくれた気がする。

もし小夜子がいなければ……

いや、よそつ…… 考えるだけで怖い。

起きよう…… もう充分に落ち込んだらろう? 自分のしたこと
から逃げている場合じゃない。

向き合おう……

ゆっくりと目を開けていく、それから跳ねるようにして飛び起き、
顔を思いつきり両手で叩いた。

「うしっ! とりあえず復興作業のお手伝いだ!」

力いっぱい戸を開いて飛び出す。驚いた村の人が『もう大丈夫な

のかい?』と声をかけてくれる。それに言葉よりも行動で示すと云わんばかりに片手で挨拶を返し、縦横無尽に村中を駆け回った。

昔から悩んだり落ち込んだりした時は、とりあえず身体を動かして汗を流して忘れてきた。しかしながら今回、自分がやったことは忘れるわけにはいかない。だからこそこの行動は忘れるための逃げではなく、自分のとった行動に最後まで責任を持つという想いからくる行動だった。

一頻り人手が足りていないところを手助けし終えた頃には、日が傾きかけていた。

村人の話によると一連の件での被害者、加害者の遺体はまだ埋葬されておらず、村外れの森に近い箇所に集められているらしい。

俺は重い足を引きずりながらそこへ向かっていく。

見なければならぬ。自分が殺した人間を、自分が守れなかつた人間を。

俺は拳を力一杯に握り締め、覚悟を決めると、大きく息を吸って

目的地へと続く最後の角を曲がった。

暗くなり始めた辺りよりもその一角は暗く見えた。

遺体安置所と化したその場所は一目で二つに別れているとわかる。一つは救えなかった村人達。そしてもう一つは自らが手にかけて山賊達。

ござの上に無造作に安置されている遺体を見るだけで、心臓を鷲掴みにされたような気分になる。　　苦しい。それでも目をそらすわけにはいかない。

震える指先で遺体の顔にかけられた安物の布きれをそつととる。

苦しそつに目を見開いたままの顔がこちらを覗きこんできた。

？どうして助けてくれなかったんだ？

声が聞こえた気がした。

涙を流すことは許されない。そしてこの苦しそつな顔を忘れることも決して許されない。

俺は遺体をじつと見据えた後、深々と頭を下げた。

計十二人。件の被害にあった人達の顔を一人一人覚えながら謝罪していく。握りすぎた手の平から血が滴っているのに気付いたのは、

被害者全員に謝罪を終えた後のことだった。

自分のしたことが間違っていたとは今も思っていない。

『死んだ人間はもう戻らん。だからこそ殺した人間は摘んだその命の重みを背負って生きて行かねばならん』

摘んだ責任。俺の出した答えはやはり忘れないことだった。

山賊達の死体はバラバラになっており、どこが誰の一部か判別がつきにくい状態だった。それをパズルのようにして紡いでいく。途中、何度も嘔吐しそうになりながらも決して手を止めず、目をそらさずにそれを続けていく。

許せないのは、この山賊達をこんな状態にした自分の行動自体を覚えていないことだった。

それは忘れないことを責任のとり方を選んだ自分にとって最悪の責任逃れだった。だからこそ遺体の斬り口に尋ねるように紡いでいく。

自己満足にすぎないその行動は、計二十八人分の遺体を並べ終えるまで続けられた。

見ていて痛々しかった…… それでも私は目をそらすわけにはい
かなかった。定臣が必死だから……

危篤状態だった歳の変わらない女の子の手を握って、励ましてい
る途中に私はうたた寝してしまっていた。目を覚ますと女の子は峠
を越え、容態は安定していた。

外が暗くなり始めているのに気が付いた私は定臣の様子を見に戻
った。その途中で、村人から定臣がここに向かったと教えられた。

「小夜子。 ありがとうな」

振り返らずに定臣はそう言った。

いつから気が付いていたんだろう。

「……うん」

「ついててくれて助かったよ、ほんとありがとう」

「……うん」

「一人じゃやばかったかもしねーわ」

そう言つと定臣はこちらを振り返つて穏やかな笑顔を見せた。

無理に笑わなくていいよ。

元気だしてね？

私がついてるから。

色々と声をかけたかったけど、その言葉が声となって喉をついて出ることは無かった。

あんなに悲しい笑顔があるんだ……

私は呆然と定臣を見続けることしか出来なかった。

しばらく互いに見合っていた二人だったが、日が完全に暮れる前に山賊達の亡骸を埋葬しようと、どちらからでもなく動き始めた。

被害にあつた村人達には遺族がいるかもしれない。この場はもう一日、このまま安置することにしておこうと、手を合わせてその場を去つた。

二人だけの作業はなかなか抄はかどらず、数時間かけてなんとか山賊達を埋葬し終えた二人は、ようやく空き家に戻ると泥のように眠りへと堕ちていった。

翌朝。

昨日の疲労感もどこへやら、ほぼ同時に目覚めた定臣と小夜子の二人は、すぐ様に村の復興の手伝いへ向かおうと戸を開く。

昨日の時点で目につく瓦礫などは大方、片付けられていたので今日は夕方に届くと国から連絡のあつた物資の搬入を待ちつつ、細かい清掃などをしていく予定だ。

「なあ小夜子、昨日は」

「言わな〜い」

「ん、ありがとう」

空き家を出て、村を見回した二人だったが自分達が手伝えそうなことはほぼ終わっている様子だった。それならば遺族と連絡をとって被害者の埋葬を手伝おうと二人は意見を交わした。

病院代わりに使われていた建物に行き、村長にその旨を伝えると遺体はすでに埋葬したと教えられた。二人で墓に手を合わせに行きたいと場所を聞いた二人に、村長は涙を流しながら感謝した。

村長から聞いた通りの場所に墓はあった。墓といっても大きな石が一つ置かれているだけの簡単なものだった。あの石の下に十二人もの人達が眠っている。

謝罪は昨日済ませた。後は願うだけだった。

せめて安らかにと……

二人並んで目を瞑り、合掌する。
不意に着物の裾が引っ張られた。

「ん？」

振り返るとそこには一人の少年がいた。

「おいらも」

少年はそう言うと、定臣達の横に並び合掌を始める。恐らくは遺族の子なのだろう。しばらく三人で黙祷を捧げた後、村に戻るうかと言った定臣に少年が話しかけた。

「お姉ちゃん」

「小夜子、呼んでるぞ〜…… 痛い」

痛い。無言でスネを蹴られた…… 空気読めってことですね、わかります。

「な、なにかな？」

「助けてくれてありがとう!」

助けられたのかな…… ここにいるってことは家族の誰か亡くなったんだろうし……

「いだっ!」

痛い。また無言キックですか小夜子さん。

「無粋ってことだな? 小夜子」

知くらないといった顔で小夜子は、後ろ手を組み先に歩いていっ

た。

「言葉の意味のままで受け取るよ。どういたしまして！少年」

定臣のその一言に、不安そうな少年の顔に笑顔が咲いた。

村に戻った定臣達を村人達は入り口で待ち構えていた。入り口に辿りつくと村長が前に歩み出て定臣達に感謝の言葉を述べる。それを皮切りに次々と感謝の声が聞こえてきた。

一瞬、ぼかんとした二人だったが、顔を見合わせた後に笑顔でそれに応えた。

まだ昼と呼ぶには早い時間、やっと落ち着きを取り戻し始めた村の中央では、炊き出しが振舞われていた。村人達に勧められ、二人もご馳走になることにした。

そういえば隣村に買い物に出かける前に食事をとって以来、何も食べていなかったと、頂いた炊き出しを満足気な顔で食べている二人の周りには、いつしか若い男達の人だかりが出来ていた。

「二人並んでいると絵になりやすねえ」

それをきっかけに我先にと次々と話しかけられる。

「お二人は姉妹ですか？」

「神王通信読んでます」

「綺麗な方達ですね」

いつもの愛想笑いかわして定臣の横で、いつもの人見知りを発揮して無言でぼーっとしている小夜子。自分を女呼ばわりされることだけは絶対に認めない定臣ではあったが、小夜子を妹と間違われるのはまんざらでもなかった。

ようやく質問攻めを回避し、食事を終えた頃になって、急に村の入り口の方が騒がしくなった。耳に届く村人の声から、どうやら国からの物資が届いたらしいと判断する。

確か物資が届くのは夕方だと聞いたと、首を傾げながらも定臣と小夜子の二人も物資の搬入を手伝おうと入り口の方へと向かう。

村の入り口には一個小隊ほどの武装した集団が来ていた。皆一様に息を乱し、げっそりとした様子で目の下にクマを作っていた。

到着予定時刻を聞いた時に村人達は「そんなに早く来てくれるとは」と感嘆の声をあげていた。その予定時刻よりも半日も早い到着である。恐らくは寝ずの強行軍だったのだろう。

村長が前に出ると、部隊の隊長らしき男が同じく前に出てきた。

『火の国より物資の搬入にきましたあ、受け入れの許可をお願いします〜』

すぐ様に村長が感謝の意を述べ、物資の搬入が開始された。

『川篠定臣殿、鞘野小夜子殿はいらっしゃいますか〜？』

搬入の手伝いをしていると、後ろから先程の隊長の声が聞こえてきた。

にしても隊長の声かるっ！

「あ、はい。俺ですけど」

振り返って返事をした俺の横で小夜子は無言で挙手していた。
いい子なんだけど慣れるまでいつもこうだよなあ

俺達を見た隊長はあからさまに不思議そうな顔をしている。

「えっと何でしょう?」

「いえいえ失礼しましたあ。隣村の村長から通報の際に事情は聞いています。この度はあなた達に助けられました。感謝します」

さっきの顔は何だったんだと、小夜子ばりにじーっと見つめてみる。

「あゝいえいえ、その美貌は噂に違わぬものですが、その体格でこの二人は本当にそこまで強いのかなあと」

そう言うと隊長は申し訳なさそうに「疑ってるわけじゃないんです」と付け足した。

確かに天使である自分とはもかく、小夜子は体格からは想像もつかない力の持ち主だ。?これが主人公補正というやつか?と説明を求められても困る単語を思い浮かべながら、なるほどと相槌をうつ。

「轟劉生の剣は力の剣ではないので」

得意の愛想笑いを浮かべながらにもっともらしいことを言っ述べる。隊長は納得したと頷くと、次に山賊達の遺体を回収したいと申し出てきた。

「遺体は丁重に埋葬しました」

言われたままに顔を上げる。視線の先には物資を分け合い、笑い合う村人達の姿が見えた。

『あなたが守った笑顔です』

「俺が守った笑顔…… 守れなかった笑顔もあります」

『すべてを救いたかった…… ですか』

「そうです」

『では…… 救えない者がいたからといって救った者の笑顔を否定しますか』

「……」

『意地悪を言いましたね。ですが胸を張ってください。あなたの行いは最善だったのです』 あ

「ありがとうございます…… それでも俺はすべてを救いたかったんだと思います」

隊長は俺をじっと見るとにっこりと笑い

『肯定しますよ』

と、そう言ってくれた。

？肯定します？か…… 少し楽になった気がする。

物資の搬入を終えた部隊は休むことも無く、すぐに帰路についた。

見送りに村の外まで出ていた俺達に『機会があればまたどこかでと短く別れを告げると隊長は悠然と去っていった。その後ろ姿をいつものようにぼーっと見ていた小夜子が、不意に衝撃的な一言を呟いた。

「かつこいい人だったあ」

「なん……だ……と？」

待て待て今、小夜子はなんと言った？

『かつこいい人だったあ』

はああああああ？？？

そりゃ長髪栗毛で綺麗な顔立ちしてたけどよおおお！ 若作りしてたけど結構歳いつてたぞあいつ！ でも話し方とか穏やかで好感は持てたな。それに俺の事、気遣ってくれてたな……
あつ！ かつこいいわあいつつてちがあああああう！ 小夜子がかつこいい人とか言う？ 言う？ ねえ言う？

そんなことを考えていた俺の顔は、なかなかにもしろい顔になっていたらしく、それを直視した小夜子は思いつきり吹き出した。

「あははは、どくしたの定臣いおもしろい顔〜」

「……はっ、現実逃避してました！ 父さん、現実逃避してました！」

「？」

「あんな男、父さん許さんぞ！」

「定臣はお父さんじゃなくてお姉さんでしょ」

「何度も言ってるけど兄さんで！」

「もうそれいい加減やめればいいのに」

そう言うと隊長が去っていった方角を小夜子はじっと見つめた。

「あの隊長さん、私が定臣に言いたかったこと、全部言ってくれた」

そういついことか。

救えなかった命より救えた命を……

後ろを見るより前を見ろってことか……

ずっと傍にいてくれたもんな……

小夜子が笑っていてくれるなら、自分のやったことを誇ろつと、
そう思えた。

心に暖かい感情が流れてくる。

人を殺した時に伴った恐怖は救うための勇気へと

後悔は後ろを振り返らない決意へと変わっていく

ありがとな…… 小夜子。

物資の搬入部隊を見送った二人は、その日の夕方には帰路についた。動ける村人達は全員、村の外まで見送りにきて、二人の姿が見えなくなるまでずっと手を振り続けていた。

こうして長かった買出しはようやく終わりを迎えた。

余談ではあるが後日、あの時の隊長の計らいで村の近くに駐在所が設けられ、その後、あの村が山賊被害に遭うことは無くなったという。

家に戻り、いつもの生活を送っていく。半年があっという間に過ぎ去っていた。

自身の実力が上がるにつれ、相手の剣筋から色々読めるようになってきた。

小夜子の剣は父の仇を討つために習い始めたものだ。それにしては邪念のようなものが一切感じとれない。小夜子の剣からはもっとう澄み切った感じの……

「それまで」

練習試合の決着を師匠が宣言する。週に一度行われるこの練習試合の勝敗は、俺に軍配が上がり続けていた。

「ふう…… 小夜子また強くなったなあ」

「差…… またひらいた」

ぼそつとそう呟くと小夜子は家の中へ入っていった。週に一度の不機嫌タイムである。

わざと負けると怒るしなあ小夜子……

やれやれと小夜子の後ろ姿を見送る。そこを師匠に話しかけられた。もちろん言うまでもなく顎にはいつものように手が添えられている。

「澄んだ良い剣になった」

「ああ小夜子ですね」

「うむ…… で、約束は果たせそうか？」

「今夜、説得してみます」

師匠との約束。

それは弟子入りの際に交わされた、小夜子に仇討ちを諦めさせるというもの。もちろんそれは俺の願いでもあった。

今の小夜子なら諦めてくれるかもしれない。この四年で小夜子は見違えた。錯乱することは無くなり、笑うようになりそして強くなった。

小夜子には前を向いて明るく生きていって欲しい。正面から向き合って自分の想いを誠心誠意伝えようと決意した。

試合が終わったのは昼前。昼食、夕食を挟んでようやく小夜子の機嫌が直ったのを見計らって俺は小夜子を外に呼び出した。

「なあに？ あらたまって」

「大事な話だから」

俺の雰囲気を感じとった小夜子が真顔になる。

「ここは言葉を選んで慎重に言わないとな…… よく考え
る俺！ ここ大事！」

「小夜子、仇討ち諦めて」

はっと目を見開いた小夜子が拳を握り、ものすごい剣幕で睨みつけてくる。

「……しまったあああああああああああああ！ 単刀
直入すぎるだろ俺！」

「なんで…… なんで定臣がそんなこと言っの！？ 定臣は私の味
方なんでしょ！」

「味方だよ、そんなの当然じゃん」

なるべく感情を煽らないように即答する。

「だったらなんで……」

その言葉に毒気を抜かれたのか、小夜子から怒気が消え失せていったのがわかった。俺はそれを見計らい、ゆっくりと伝えていく。

「ごめんな小夜子……俺って言葉にして伝えるの苦手だから、上手く言えないかもしれないけど」

「……」

「俺は小夜子に人殺しになって欲しくない。これは最初に出会った頃から思ってたんだけど、半年前にもっと思うようになった」

その言葉に小夜子は考えるような仕草を見せる。そしてすぐに何かに思い当たり、小さく声を出した。

「あ……」

「うん……それにさ、小夜子って剣好きじゃん？ 仇討つためにその剣を振るって欲しくないかも」

「剣は人を殺めるためのものだよ……」

「そうなんだけどね……俺の元いた世界の話ってしたこと無かったよね」

そう前置きすると俺は伝える。自分のいた世界での剣術は剣道と名を改め、殺人の術から己を高める道へと進化していったのだと。そして小夜子には剣術ではなく剣道として剣に携わって欲しいと。

「剣道……」

「そう、術^{すべ}じゃなく道^{みち}」

小夜子は聞く。殺人の術^{すべ}じゃなくなった剣は弱くなったんじゃないのかと。

「何をもって弱くなったって言うのかは人それぞれだと思うけど、俺はそうは思わないかなあ」

人は殺さないに越したことはないし、それに殺人の術^{すべ}じゃ道で鍛えられた人の精神^{こころ}までは斬れないと思うからと続けた。

「剣術じゃなくて剣道をして欲しいって…… だから…… だから定臣は私に仇討ちやめて欲しいって言うの？」

「ん、もつと簡単な理由かな」

それって？ という表情を小夜子がする。

「俺って小夜子のこと、本当の妹だと思ってるから」

「あ……」

目を見開いた小夜子の頭を撫でながら「家族に人殺しなんてして欲しいわけないじゃん」と続けた。

「仇を討ってって言って死んだ母ちゃん言葉は、小夜子にとって重いものなんだと思う。だから同じ家族としてお願い。仇討

ち諦めて？」

心の奥深くにずっとのかかっていたオモリがスツと取り除かれた気がした。

諦めていいんだ…… 両親の代わりに定臣が許してくれた……

自然と涙が溢れてくる。声が出ない。でも伝えないと。

「あ”り”がどう”」

喋れてねーよ！ と心の中でツッコミながら定臣は小夜子が落ちて着くまでずっとその頭を撫で続けていた。しばらくして落ち着きを取り戻した小夜子が改まって定臣に向き合い、深々と頭を下げた。

「ありがとう！ お姉ちゃん！」

「ちよ！ 兄ちゃんだから！！ そこ大事だから！」

空気読めと、じと目を披露しかけた小夜子だったが言葉を続ける。

「お陰でなんかすつきりしたあ…… 私ずっと仇討ちを諦めたかったのかもしれない」

ピンポン！

『そっか』と、笑顔で頷いた定臣の頭の中に突然、あの冗談のようなくイズ番組さながらの効果音が鳴り響いた。

龍虎相打つ

ピンポンって相変わらずわかりやすすぎだろ！

え？……ピンポン？

思考が停止する。

「どうしたの？定臣」

笑顔から一転して真顔になっていた定臣を、小夜子が不思議そうに覗き込みながらそう言った。

「い、いや、なんでもない」

慌てて笑顔を取り繕った定臣を不思議に思い、首を傾げながらも、定臣に頭を撫でられてあっさりといごまかされる小夜子だった。

そのまま今日は寝ようかと顔を見合わせた二人は家に戻っていく。その二人の背中を息を殺して見守っていた影が一つ。視線の主はもちろん劉生である。

「約束は果たしたか……」

そう言つと劉生は、いつもの様に顎に手を添え、すつと空を仰いだ。

「剣術より剣道か……定臣、貴様は本当におもしろい……
どれ その刀に真相に迫る機会を与えてやるとするか」

そう言つた劉生の顔には穏やかな笑顔が浮かべられていた。

今日は一緒に寝ようと、共に布団に入った二人だったが定臣が眠れる事は無かつた。頭の中には先程鳴り響いた効果音がいまだに鳴り響いている気がする。

正解つて事だよな……仇討ちをあきらめたいつて事が……

俺は 小夜子の願いがそれなら叶えるために協力しないと

……

天井をじつと見つめながら定臣はそんな事を考えていた。不意に定臣の顔に『でも』と影が落ちる。

でも 願いを叶えるつて事は任務が達成されて俺が天界に戻るつて事なんだよな……

小夜子との絆が深まる度に不意に寂しくなり、胸を掻き毟る思いをした事は一度や二度ではない。できるだけ考えないようにしてきた。しかし、いつかは訪れるその別れが現実味を帯びてきた。

天界に戻ったらもう小夜子とは二度と会えないのかな……
あゝだめだ凹む！とりあえず寝る！それから考える！

その日、ようやく定臣が寝つけたのは、雨が降り始めた夜明け前の事だった。

あまり寝ていないにもかかわらず、朝になると定臣はすぐに目覚めた。隣ではまだ小夜子が眠っている。起こさないようにそつと布団から這い出し定臣はそのまま息を殺して屋外へと出ていった。

「今朝は早いな」

外に出るといきなり劉生から声をかけられた。一瞬、驚いた定臣だったが劉生が自分達よりも先に起きている事は珍しくない、すぐに挨拶を返す。

にしても……雨降ってるのに外で何やってるんだろこの人……

「おはようございます師匠。相変わらず早いですね」

「うむ」

そう短く返すと劉生はスツと切れ長の目を見開き、定臣の前に姿勢を正した。

なにやら様子がおかしい。

いつもの劉生とは明らかに、雰囲気違って見えると定臣はゴクリと喉を鳴らす。

「貴様が知りたがっていた事に答えようと思う」

俺が知りたがっていた事。

それは、尊途栄が火の国の属国になった理由と黒曜滅亡の真相。そしてそれは、小夜子に仇討ちをあきらめさせるために必要だと思っていた事。

定臣の顔つきが変わったのを確認すると、劉生はそれに答えるには条件があると告げた。

「俺はこの事実を墓場まで持っていくつもりだった」

だからと劉生は続ける。

「俺を殺せ」

「

え〜と……死んだら喋れね〜だろ！とかっつこんでいい空気じゃないよな……？

「無敗の剣聖、轟劉生に黒星をつけるという事だ」

「……師匠に勝って事ですか」

「やってみるか？」

それに定臣は『応』とにやりと笑いながら剣気で応えた。それを確認すると劉生もにやりと笑い返す。そして　無言で抜刀した二人が対峙した。

今日の目覚めは金属音による睡眠妨害だった。いつもは笑顔で定臣が起こしてくれていたのに　私は朝が弱い。

「な、なあにい？この五月蠅い音」

起きがけの頭に欠伸をしながら酸素を供給する。目ボケ眼をこすりながら隣にいるはずの定臣に視線を送る。

「あれ？定臣？」

ようやく頭がはつきりした小夜子は、きよろきよろと部屋の中を見回した後、先程から音が聞こえてきている家の外へと歩いていった。

「き、綺麗……」

思わず目を奪われる。

外に出た小夜子が見たものは 師匠である定臣と、その師匠である劉生の試合う姿だった。

かろうじて目で追えるその剣捌きは剣筋までが美しく、互いに綺麗な曲線を描いている。

その二人の戦う姿からは試合しているというよりも、どちらの舞が綺麗であるかを魅せあっているように感じられた。

「やっぱり私と試合してる時、全然本気じゃなかったんじゃない！」
心を奪われながらも、小夜子の表情は不機嫌さを訴えていた。

強くなった分わかる。肌で感じる。 この轟劉生という男と

自分の実力の差を。

本気で撃ちあった事は弟子入りから数年、一度も無かった。初めて出会った時は助けられた。次の日にはただ、ただその美しい剣技に魅せられた。

孤高の頂きに一人、鎮座していたその男の背中をずっと追ってきた。明確な実力差がある。しかしながらその背中が見える所までは辿りつけた。

背中は見える　見えるがその差が詰まらない。

零から今の自分までの距離よりも、この差は大きく感じられた。

遅れる　こちらが十撃てば劉生が十一返してくる。

おもしろい！

身体が熱くなる。こんなに楽しいのはいつぶりだろう？楽しい！楽しい！

想いを刀に乗せ、定臣の剣速が増していく。

俺にここまでついてこられる奴はいなかった。漢遼迤の緒

方刀座、火の国の羅刹でもここまでの剣速はなかった。

初めて出会った時は興味本位で助けただけだった。話してみても人の柄が気にいった。次の日には謙虚さが気にいっていた。気がつくや弟子に誘っていた。

俺の打診を妙に引つ張った拳句、いらぬ弟子までとる破目になるとはな……まったく、ふざけた奴だ……

増したはずの定臣の剣速。それにすら劉生は、にやりと笑みを浮かべながらついていく。

その刹那。不意に定臣の視線が横に流れた事に劉生は気づいた。

小夜子……起きてたのか。

真相がわかれば小夜子は仇討ちを完全にあきらめられるかもしれない

つまりそれは……

ガッ

周囲に鈍い音が響き渡る。鈍い痛みが自身を襲った気がついた

時には、定臣は意識を手放していた。

「愚か者が！試合の最中に集中を乱すとは」

「さ、定臣！！」

「峰打ちだ。中に運んで寝かせてやってくれ」

「……うん」

意識を失った定臣を小夜子が家の中へと運んでいく。劉生はその背中をじっと見据えていた。

しばらくその場にじっとしていた劉生だったが、不意に先程から妙に耳につく雨音が気になり、不機嫌そうに空を見上げながらぼつりと呟いた。

「たわけが……」

目覚めは最悪だった。

意識の覚醒と同時に頭の芯を刺すような痛みが走った。それに加え、なにやら左肩がズキズキする。

「う……」

「あ！まだ起きちゃだめだよ！」

起き上がろうとした定臣を慌てて小夜子が制した。

何だこれ？頭がククラクラすると、無意識に右手を自分の額に押し当てた定臣は驚いた。

なにこれ？……熱？天使って風邪ひくのか？

「痛っ」

左肩が痛む。

ああそういえば師匠と試合して打ち込まれたのか……

ぼーっとする頭でなんとかそこに思考が及ぶ。

「雨降ってたし、左肩の腫れからきてるのもあるかも、熱」
なるほどと目配せで答える。

「ほら、もう少し寝て？今冷たい布巾に取り替えるから」

そう言っつて小夜子はいそいそと布巾を取り替えて定臣の額に当てる。心地良い冷たさが定臣を眠りへと誘っていった。

ありがとな、小夜子。

翌日、熱は尚も下がらないものの、定臣の肩は完治していた。

天使すげ〜など肩をくるくると回している定臣に小夜子が怒鳴りつけたりもしたが、小夜子が一先ずは一安心と内心でほっとしていたのは言うまでもない。

「まだ寝てないとだめだからね！」

「はいはい、わかりましたよ〜だ」

「ってわかってないでしょ！なんで外にいこうとしてるのよー！」

寝てなさいとずるずると定臣を引きずって布団にまで引きずり戻す。まだ熱が下がりきっていない定臣に抗う術は無かった。

しばらく『むう』だの『あ〜』だのと言ってごろごろと、ふてくされていた定臣だったが不意にぴたりと止まり、天井を眺め始めた。やっと大人しく寝る気になったかと、やれやれと肩をすくめていた小夜子に定臣が話しかけた。

「なあ小夜子」

「ん〜？寝てないとだめだからね〜」

「あゝうん、それはあきらめた。小夜子、力強すぎね」

「うんうん、今の定臣抑えるのくらい余裕なんだからね」

これ聞いたら寝るからと定臣が前置きする。

「もしだけど　もし俺がいなくなったら小夜子どう思う？」

一瞬、目を見開いた小夜子がすぐに口を開く。

「……それって死んじゃったらって事？」

あ、やべえ……すでに声が潤んでる。

「違う！違う！もしどこか遠くにいつちゃったらって事ね！俺は死
なないから！」

慌てて定臣が誤解を解く。

なあゝんだと途端に明るい表情になった小夜子が続ける。

「死なないならどこにいても一緒でしょ？私達の繋がって少し会
えないくらいでどうにかなるのかな？」

やばい、泣きそう

慌てて小夜子に顔を見られないようにと、ごろんと反対側に向い
た定臣を不思議そうに小夜子が眺めた。

「そ、そくだよな！俺と小夜子だもんな！」

なんか声、潤んでるなあと小首を傾げながらもあえてつつこまずに小夜子は続ける。

「変々な定臣い」

「悪い！ちょっと熱のせいでネガってたのかも」

そくだよな。

そう小声で再度呟いた後、定臣は眠りへ落ちていった。

【わかった】よ。小夜子。

翌日には熱も下がり、怪我も完治していた。こきこきと身体をならした後、定臣は自身の刀をじっと見つめながら隣にいる小夜子に話しかける。

「小夜子、ありがとな。お陰でよくなったよ」

「ん」

そう短く返した小夜子の頭をいつもの様に自然と撫でる。その定臣の手にいつも以上に想いが籠められている事に小夜子は気づかなかった。

「小夜子、今からもう一度、師匠に試合を申し込む……何があっても絶対に目を離さないで欲しい。俺は絶対に死なないから」

何があってもともう一度。真剣な眼差しで念を押す定臣に、少し怖い気配を感じとった小夜子が息を飲む。その気配は定臣の不退転の決意の表れだった。

「それじゃいつてくるな小夜子」

最後にもう一度、ぽんぽんと小夜子の頭を軽く叩き、定臣は外へ出ていった。それを慌てて小夜子が追い駆けていく。

外に出るとすでに劉生は刀を抜いていた。

「半年はかかる怪我だったと思ったが？」

「もう治りました。俺、天使ですから」

そう返すと定臣がにやりと笑う。

「ふむ……家の外まで剣気を飛ばしてきおってからに」

どこか嬉しそうな声で劉生が言う。

「用件は言わなくてもわかってくれている様ですが、あえて言います！」

今一度、果し合いを申し込みます！」

「よかるうー！」

劉生がにやりと笑ってそれに応じた。

互いに構えをとる。じりじりと歩みより始めたその時に定臣が刀を降ろした。

「む？」

「あゝいいところだったけどすみません」

一つだけ言い忘れた事がありますと前置きをした後に定臣はこう続けた。

「俺、死なない身体なので。先にこれ言っていないと反則になっちゃうから」

ふむ、と短く呟くと劉生は再度、刀を構え直した。

「構わん　いくぞー！」

「　はいー！」

舞う。舞う。舞う。

二人の剣筋はもはや小夜子ですら追えなくなっていた。辺りには二人が切り結ぶ金属音だけが響き渡る。

傍目に見れば二人が優雅に舞い比べをしている様にしか見えない。しかしながら無数の剣技が交わされている。

舞い落ちた葉が一瞬で微塵と化す。

剣圧で吹き荒れる風が小夜子の頬を撫で続ける。

どれくらい時間がたっただろうか？不意に小夜子は呼吸を忘れていた自分に気がついた。

昔から実力が均衡している試合で勝った事は無かった。別に勝ちたいと思わなかったし、いい勝負をしているだけでどこか満足している自分がいた。

しかしながら今日、この時だけは負けるわけにはいかない。

勝ちたい。自分のためではなく小夜子のために勝ちたい。

定臣の剣速が一瞬、劉生のそれを凌駕する。

「むう！？」

やはりこやつには天賦の才がある。自分が十年かかった道のりに
わずか四年で到達している。師匠として嬉しくもあるが、一人の剣
士としては嫉妬する部分もある。故に負けるわけにはいかない。

出直してこい！貴様はまだ俺には届かん！

二人にしか理解できない領域で、僅かながら圧され始めた劉生は
不意に身体を深く沈めた。

途端に空気が変わる。

その身体から一気に放たれた殺気は、必殺の一撃を予感させた。

覚悟！

まるで死刑宣告でも告げる様に、切れ長の目を一層、見開きそ
うにした劉生であったが、次の瞬間、思わず息を飲んだ。

正面にはまるで映し鏡のごとく、自分と同じ構えをとる定臣の姿
同じく身に纏う殺気からは、その構えが真似事の兇戯ではない事が

容易に伺えた。

「この技は教えてなかったはずだが？」

にやりと笑いながら劉生が問う。

「突き詰めれば行き着く所は同じって事でっ」

不適に笑いながら定臣がそう返答した。

「よかろう！参る！」

ザッ

勝負は一瞬だった。

瞬間移動でもしたかのごとく、劉生が定臣の背後へと現れる。それと同時に定臣の全身から鮮血の色が吹き出した。

「……いやあああああああ！……！」

ああ小夜子すまん、びっくりさせちゃったな……

「貴様、何故打たなかつ」

「俺の勝ちです師匠」

ゴッ

劉生の声を上書きする様にそう制した定臣は、自身の持つ刀の柄で劉生の後頭部を強打した。

「なっ!?!」

一瞬、驚きの声を上げた劉生だったが、そのまま地面に昏倒する。それを確認すると定臣はその場に両膝から崩れ落ちた。

血は止まらない。それどころか口からも溢れてきた。小夜子の声
が遠くに聞こえる。視界が歪む。意識が遠のく……

こりや死んだわ……

肉を斬らせて骨を絶つとか格好をつけたつもりはない。最初から
骨まで斬られる覚悟でいかないとあの人には届かない。

それにしても痛え!深い傷は痛くないと言ったのどこの誰だよ!

今際の際で定臣はそうぼやいていた。
いまわのきわ

『何があっても絶対に目を離さないで欲しい。俺は絶対に死なな
いから』そう定臣は言った。だから決して目を離さなかった。その
定臣から嘘の様に血が吹き出し続け、横たわったその身体からは生
命の熱が目に見えて抜け落ちていた。

「なんで……なんでそこまでして勝たないといけないの?こんな

……」

死んでしまう。最愛の姉までも死んでしまう。

思考がそこに到達するともうダメだった。身体が震える。心臓が苦しい。呼吸ができなくなってきた。視界が徐々に白くなっていく。

「あ……あ……死なないって……死なないって言ったのに……あああああああああ！」

こんなの嘘だ。こんなのは嫌だ！

その場で蹲り、自身の身体を抱く様にしてがたがたと震え始めた小夜子の頭に、何事も無かったかの様にそつと定臣の手が置かれた。

「え？」

「わりい、びっくりさせちゃったか」

これは幻覚だろうか？

顔を上げた先には横たわったままではあるが、いつもの定臣の笑顔があつた。止め処なく溢れていた大量の血液もどこへやら、その衣服には血痕の一つも無くなっていた。

「え？え？」

「言ったじゃん、俺は死なないからって」

まだ困惑している小夜子にそう言うのにやりと笑いかける定臣。

その顔を見てようやく定臣の無事を確信した小夜子が泣きながら定臣に抱きついた。

「馬鹿――！――！」

「ごめんごめんとしばらく小夜子の頭を撫でていた定臣だったが、小夜子の足元を見て青ざめた。

「小夜子！師匠踏んでる！踏んでるから――！」

「え？……きゃあああああああ――！」

意識を失っている劉生を、家の中に担ぎこもうと手を伸ばしたその瞬間、劉生はその場に幽鬼の様に立ち上がった。

回復早すぎだろ！この人は化け物か！？

手を伸ばしたまま、硬直している定臣をじっと見ながら劉生が口を開く。

「……斬ったはずだが……ふむ、定臣め、謀りおつたな？」

そう問われると定臣は、頭を右手で掻きながら左目を閉じてにやりと答えた。

「謀りました」

定臣のその言葉を聞くと劉生は嬉しそうに笑い始めた。しばらく笑い続けた劉生だったが『貴様の勝ちだ』と定臣に告げた後、二人に先に家の中に入っているよう促すと家の裏手にある納屋の方へと姿を消した。

敗れはしたものの、その背中からは変わらず貫禄が滲み出ていた。

そう　その背に小夜子の足跡さえなければ……

「あれどーすんの!？」

劉生が姿を消すと同時に定臣がそう口を開くと、その隣でふるふると目を瞑って、ただ首を振り続ける小夜子だった。

家の中に速やかに移動した二人は作戦会議の結果、『風呂入つてる間に服の処理しちやええばねんじゃね?』という結論に達した。作戦が決まると決行のために小夜子はそそくさと風呂の準備をしに外へと出ていった。

しばらくして片手に風呂敷に包まれた刀の様な物を携えて劉生が戻ってきた。

劉生は、おもむろに手に持つ物を定臣の前につきだすと目を閉じてどこか感慨深気に頷いた。

「定臣　　免許皆伝だ。」

「え？」

一瞬、理解が遅れた定臣だったが言葉の意味をすぐに飲み込んだ。

「ありがとうございます！」

そう言うと劉生の差し出した風呂敷を受け取る。

「開いても？」

劉生がうむと頷くのを確認した後、定臣が風呂敷を開くと、中から見事なまでに真紅の鞘に納められた大太刀が出てきた。鞘には見た事もない旗印の様な刻印が無数に刻み込まれていた。そつと鞘から刀を少しだけ引き抜くと漆黒の刀身が顔を出す、それを見た瞬間に定臣に悪寒が走った。

「ふむ、わかるか」

劉生はそう確認する様に言うつと続いて、抜刀してみると定臣に促した。

言われて抜刀しようとした定臣だったが何分、刀の丈がありすぎて鞘から抜けきらない。仕方がないので刀の柄を持ち、鞘を投げ飛ばして抜刀しようと気合いの入った面持ちで降りかぶり掛け声をかけた。

「ちよえ！」　ゴソッ

電光石火のゴンケツが頭に降り注いだ。痛い。

「鞘を投げようとする者があるかっ！愚か者めっ」

「いあいあいあいあ、でもこれじゃあど〜やって抜刀すんのよ！と心の中でつつこみつつも頭をすりすりしと撫でながら涙を堪える。

見たところ刀は刀身だけで定臣の今の背丈、160cm前後より遙かに長く、柄まで合わせると劉生の背丈と大差ない。

これを今の自分でどうやって抜刀するのか。しばらく劉生よろしく顎に手を当てて考えた定臣が出した結論は、その刀を背中に背負ってみるといふものだった。

劉生に手助けを得て、なんとか背中に背負ってみる。刀は斜めに背負ってやっと地面に着かない長さだった。

あ、これなんかかけ〜かもと刀を背負った自分の姿を想像してにやにやしている定臣を早くしろと劉生が急かした。

それじゃいきますよと目で合図した後、気合いの入った掛け声と共に定臣が前かがみになり抜刀しようとする。

「とおおおおおー！」

しばしの沈黙。劉生が頬をぼりぼりと掻く音だけが辺りに響いた。

ぬけない

劉生の眼前には、綺麗なお辞儀体勢のまま両手で柄をもったままの姿でぶるぶると震える定臣の姿があった。

「う、うむ……まあ慣れれば抜けるようになるだろう」

しくしく……

哀しみを拭い去る様に定臣は刀の事を色々と劉生に尋ねていくのだった。

劉生曰く、この刀は尊途栄に古くから伝わる宝刀だったのだとか。

元の名を『飛鳥』といい、人を殺す事を究極にまで突き詰められた刀であったにも関わらずただの一度も振るわれる事無く、代々装飾の類として王家に継承されていた物だとか。

「？飛鳥？ですか……なんかかつこいいっすね！大事にします！」

そう言った定臣に劉生はその名でその刀を呼ぶなと言った。劉生いわく一度も振るわれる事が無かったからこそその？飛鳥？だったのだとか。

人の血を覚えたその刀はもはや飛鳥にあらず、あえて名をつけるのであれば……

「轟劉生と呼べ」

「ぶっ」

思わず吹き出した定臣に真顔で劉生がこう告げた。

「その刀は俺と剣の道を共に歩んできた物だ。この意味、貴様なら

わかると思うが？」

なるほど……一心同体って事ですか……ってちょっと師匠、かつこいいけど背中こっちに向けないで！足跡！足跡見えてるから！

必死に笑いを堪え、俯き加減で了承した旨を伝えようと頷く。なんとかがまかせたみたいだ。

そこに外にいる小夜子から風呂の準備ができたと声がかかった。

「あ、師匠、お背中流しますよ」

すかさず定臣が劉生に入浴を促す、「背中は流さなくてよい」と念を押して入浴しにいった劉生を確かめた後、慌てて戻ってきた小夜子に服の洗濯を任せ、時間稼ぎに定臣は劉生のいる風呂場へと突撃した。

外でいそいそと洗濯していた小夜子の耳には「ば、ばかもんが！とか『服を着んか！』とか『背中流しますからいい加減、湯船から上がってくださいよ』とか他にも劉生が焦る様子と、定臣がからかっている様子が伺える単語が飛び込んできていた。

小夜子はそれを肴に作戦の成功を確信しつつ、くすくすと笑いながら洗濯を終えるのだった。

結局、劉生はのぼせて失神するまで頑なに背を向けて湯船から上がる事はなかった。

意識が戻ると『一日に二度も同じ相手に不覚をとるとは』とその日はすぐにふて寝してしまったので、定臣との約束であった件の真相が語られたのはこの次の日の事だった。

真相

翌朝。

ようやく機嫌の直った劉生の前に定臣と小夜子が正座する。

二人の約束の内容を知らされていない小夜子の頭上には『？』が点灯していたが、二人の醸し出す雰囲気から自然と姿勢を正していた。

まずは　と前置きした後に、定臣が小夜子に果し合いの裏にあった約束の内容を告げた。私のためにあんな無茶をしたのかと、涙ぐむ小夜子の頭を定臣がいつものように撫でて落ち着かせた後、それを見計らって劉生が徐おもむきに口を開いた。

「まず始めに言っておくが　俺はこの事を墓場まで持っていくつもりだった。だから今まで隠していたのは小夜子が黒曜の姫であった事には関係ない」

何を知っても気に病む必要は無い　と小夜子に前置きをした後に劉生は記憶を語る。

轟劉生は昨日の果し合いで死んだ。だから今から語られる事は尊

迎春の將軍の言ではなく、ただ真実を知る者の言だということ……

尊迎春という国の印象は、誰に聞いても冷酷な女王が統べる極めて好戦的な国家というものだろう。それは他国の情報操作もあつたが、自衛のために女王自らが広めた噂のせいでもあつたのだ。

尊迎春は侵略行為を行った事は過去に一度も無く、尊迎春に滅ぼされた国家は、尊迎春に攻め入って返り討ちにあつた国家ばかりだ。

それを頭に置いてこれからの話を聞け　　そう劉生は告げた。

俺と尊迎春の女王、雪乃ゆきのは幼馴染だつた。

俺の父が先代尊迎春王の近衛隊長をしていたせいもあつて、幼い頃から多くの時間を共に過ごしていた。

俺と雪乃の間にはある約束があつた。約束が交わされたのは互いに十歳になつた年の事だつた。

当時の尊迎春は弱小国家で、周辺諸国の侵略にいつも脅かされていた。そんな中でも雪乃の父である、先代王は雪乃をよく可愛がつていて月に一度は時間を作り、城の近くの山まで近衛隊を引き連れ雪乃を遊びに連れていつていた。

そこを狙われたのだ。狙った国の名は塞泰^{そくたいし}迓。後にわかった事だが、影で糸を引いていたのは漢遼迓だった。

尊迓栄、漢遼迓、塞泰迓の三国は刀の原産国として名を馳せており、中でも尊迓栄の刀は世界最高として名高かった。

事情がわかれば話しは簡単だ。三国の内、軍事力が群を抜いていた漢遼迓は塞泰迓が自国に降る条件として、尊迓栄の首を差し出せと指示していたのだ。

刀の益を手中に治めれば軍事面でも生産面でも天下統一により一層近くなる。塞泰迓が尊迓栄に返り討ちにあい、滅亡するならばそれも良し。その後、改めて尊迓栄を滅ぼせば済むだけの話。

どちらに転んでも漢遼迓の思いのままだった。例え、両国が手を組んで敵に回ったとしても、圧倒できるだけの軍事力を当時の漢遼迓は持っていた。

暗殺と呼ぶにはあまりに目立つ人数だった。

多勢に無勢……近衛隊は壊滅。俺の父もその時に王と雪乃を逃がして死んだ。王の護衛はもはや俺だけだった。

年齢を言い訳にするつもりは無い。敵の最後の一人を仕留め損なったのだ。

その一人が王に致命傷を負わせた。

絶命する前になんとか城に辿りついた王は、俺に『飛鳥』を授け

るところ言った。

雪乃を頼む…… 尊途栄を頼む……と。

俺が頷くと、王は安らかな笑顔を浮かべたまま逝った。

互いに父親を無くした俺と雪乃だったが、絶望している時間は与えられなかった。

王がない国は滅亡の一途を辿る。

自分達がなんとかしなければならぬと。だから約束した。

俺がお前を守る。

わらわがお主を守る。

と

そして

二人で尊途栄を守る。

と

約束を交わした後、俺は飛鳥に雪乃は父の王冠にそれぞれ誓いあった。

そこまで話すと劉生は『まだ10歳だった雪乃は父の王冠が頭に合わず、鼻まで降りてきてしまっていたな』と目を瞑り微笑んでいた。

しばらく話しを止めていた劉生だったが、二人が無言で続きを促していたのでぼつりぼつりと、その先を語り始めた。

ここから先は修羅の道だ。

だから涙を流すわけにはいかないと、刀と王冠に誓いあった後、互いの涙を溜めて交換して飲み干した。

それで覚悟が決まった。

雪乃の判断は迅速かつ正しいものだった。

翌日には王が病気で急死したとおふれを出し、自らが女王に即位した事を周辺諸国に伝えた。

そして俺は……

塞泰迹の民を一人残らず殺した。

塞泰迹という国をこの世から消した。

言い訳はしない。それが俺なりの雪乃を守るという事だった。尊
迹栄を守るという事だった。

当時から情報操作の才が秀でていた雪乃は、すぐ様にそれを女王の凶行として広めた。

それが雪乃なりの俺を守るという事だった。尊途栄の守り方だった。

王が交代して突然、好戦的になった尊途栄を他の周辺諸国も恐れた。

故に侵攻する。

そこからは侵攻される度に国を一つ消していった。

四つ目の国を消した辺りで軍事力が安定した尊途栄は、俺の単独での活躍を必要としなくなった。俺は雪乃の指示で戦線から遠ざけられた。それが雪乃なりの俺を守るといふことなのだ、理解した俺はその指示に従った。

そこからの俺の立場は周知の通りだ。女王に害が及びそうな時と国を賭けた決闘にのみ出陣する女王の懐刀。それに相違はない。

だが俺が戦線を離脱する事によって雪乃に変化が訪れた。俺の凶行を自らが被るのでは無く、自らの指示で凶行を起さなければならなくなったからだ。

俺はあの時　　雪乃の指示に従った事を今でも後悔している。
優しい彼女がそんな事に耐えられるはずが無かったのだ。

雪乃は自らが作り上げた俺を守るための虚像を、一つの人格とし

て持つようになってしまった。

尊に違わぬ残酷な女王の人格は、尊と栄の民が傷つけられる事によって発現する。

雪乃を守ると言った俺がその人格に気がついたのは、当面の敵国を残す所、漢遼迩のみとした段階だった。

責任はとらなければならない。俺は漢遼迩を尊と栄の民を傷つける事なく、降伏させるしかないと思った。

そして選んだ手段が国を賭けた決闘だった。

漢遼迩の緒方刀座は素晴らしい人格者だった。自身の国の民が傷つく事を憂い、上層部を説得して俺との一騎打ちに応じたのだ。

当時、今の高みまで届いていなかった俺にとって緒方刀座は強敵だった。しかし負けるわけにはいかなかった。あの時、勝てたのは今でも運が良かったとしか思えない。

勝負は紙一重だった。勝ちしたものの俺は傷つき、その場で動けなくなってしまった。

その姿を雪乃が見てしまったのだ。雪乃にとっては俺もまた尊と栄の民の一人だったのだ。そして漢遼迩がどうなったかは 周知の通りだ。

漢遼迺が滅亡した事により、尊迺栄、火の国、白蓮、黒曜の四つ巴状態に突入した世界は、互いに睨みを効かせつつも一様の平静が保たれていた。

民さえ傷つかなければ雪乃は変貌しない。ずっと走り続けてきた俺達は初めて安らぎの時間を手にいれた。こんな時間がずっと続けばいい……心の底からそう思った。

そんな矢先、俺を暗殺しようとする事件が多発した。

いくら情報操作で『虐殺に轟劉生は関係なし』と謳ったところで、所詮は尊迺栄の將軍。流言だけで俺を守るなど不可能だった。もはや限界だったのだ。

滅ぼされた国の生き残りの怒りの矛先が、雪乃より届きやすい俺に向かうのは当然の事だった。

暗殺を阻止する度に『構わない』と言う俺に、雪乃はいつも申し訳なさそうにしていた。

そこにあいつが現れた。

たった一人で国境を三つも越え　　当時、虐殺の大国として名を馳せていた尊迺栄の城にまで、まるで世間話でもしに来たかの様な態度で、平然と現れたその男の名は……

羅刹。火の国の王だった。

取り囲む兵達を一人も殺す事無く薙倒し、俺と雪乃の前に現れたあいつはこう言った。

四つ巴の均衡が近い内に崩れると

話しを続けようとした羅刹に、俺は迷う事無く斬りかかった。

応じた羅刹と数合斬りあった後、雪乃が二人に話を聞きたいと待ったをかけた。

羅刹の話しによれば白蓮と黒曜との間に婚礼が設けられ、近々に同盟が組まれるとの事だった。

同盟が成されれば、どちらが先にせよ間違いなくいずれは尊途栄に侵攻してくる事は言われるまでもなく理解できた。

顔を見合わせた俺と雪乃に羅刹はこう話した。

先に私達で同盟組んじやいましょう……と

何を馬鹿など、再び羅刹を斬り伏せようと構え直した俺に対して、雪乃はその妙案に乗ると申し出た。

驚いた俺に対してすまないと言断りを入れた後、羅刹に対して同盟を組む条件を告げた。それを聞いた俺は我が耳を疑った。

一つに 尊途栄を属国とし、名を火の国に統一する事。

そしてもう一つに 轟劉生を追放し、今後一切の軍事関与を

認めない事。

雪乃、お前は尊途栄を捨てるつもりか！？そして俺はもうお前にとって用済みなのか？

雪乃の肩を揺らしながら問いただした俺に、雪乃は涙を流しながら答えた。

国とは民じゃ……民さえ守れるのならば名などどうでもよい……
それに劉生……そなたを守るにはもうこうするしかないのじゃ

と

この時には俺はまだ、雪乃が何を考えているのか理解できていなかった。

ただ その言葉には想いが籠められていた。頭の良い彼女の事だ。俺の考えが及ばない所でなにか閃いたのだろうと、必死に自分を納得させた。

後になってわかった事だが、雪乃は国の名を火の国と統一する事によって一つの大国を作り上げ、他の二国と争う事無く、平穩を勝ちとる事を狙っていた。

白蓮、黒曜が同盟を組んだ所で大国となった火の国の戦力には遙かに届かず、戦うまでもなく結果は見えていたからだ。そして羅刹の思惑もそこにあった。

そしてもう一つの思惑は、尊途栄の民から尊途栄の国民であるという事実を無くしたかったのだ。もはや尊途栄という名は、恨みの

対象を示すと言っても過言でない程に当時は忌み嫌われていた。

現尊迹栄の民と元尊迹栄の民とでは勝手が違ってくる。今のまま尊迹栄を名乗り続ければ、いらぬ弊害が民に及ぶ事は目に見えて明らかだったのだ。

俺の追放もそれと同義だった。もはや尊迹栄に轟劉生有りと世界中が知っていた。国の名が変わっても轟劉生と尊迹栄の関係を絶つ手段にはならない。だからこそその追放だった。

後の公表では、あくまで俺が女王を見限った事になっていた。情けない事に俺が雪乃の真意に気がついたのは、その公表があつてからの事だった。

だが 雪乃と羅刹の思惑であつた無血解決はこの日の夜に早々に頓挫した。

同盟の約束を取り付け、早々に他の二国に発表しようと羅刹は帰国していった。事件はその日の夜に起こった。

同盟を組むなり、尊迹栄に仕掛けようと国境に配置されていた黒曜の兵が、勇み足のせいか命令系統が疎かだったのか、同盟締結の前日に事を起してしまつたのだ。

黒曜の兵によって国境付近の尊迹栄の村が一つ襲撃され

そして皆殺しにされた。

報告を受けた雪乃は変貌した。そうになると、もはや誰も彼女を止められなかった。

翌朝には黒曜という国が世界から消滅していた。

そこで劉生は話をきって、小夜子の様子を伺う様に見ていた。
小夜子は視線を落とすと一言

「それが真実……」

と呟き、劉生に大丈夫ですと目配せをして続きを促した。

黒曜が滅んだ事により白蓮が無条件降伏を余儀なくされ、世界は統一された。それぞれが望んだ結果と異なっただとしてもそれは事実だ。

羅刹が黒曜を滅ぼしたのは、あくまで自分の指示だったと言い放ったのは同盟を組んだ女王を守るためと、自らの罪滅ぼしのつもりだったのだろう。

後数日早ければこんな事は起させていなかったと。

統一された世界で、雪乃は余すところ無く己の才を發揮していった。

神王通信を考えついたのも雪乃だった。しかし神王通信が今ほど浸透するよりも早く、民の間では女王に責任を問えという声が高まっていた。

羅刹が最初に訪れた時にそこまで予測していた雪乃は、当初の予定通りに裁判にかかり、そして処刑された。しかしそれはあくまで表向きの話だ。羅刹が人気程に顔が知れていない様に、雪乃の顔を知る者も他国にはいなかった。

尊迦栄の民は雪乃の顔を知っている。だからこそ雪乃は名を改め、民に見える位置で活躍を続けた。元尊迦栄の民達が雪乃の生存を密かに確認し、怒りで内乱を起さないためにと

そして雪乃は神王通信を通じて今も俺を守っている。

> i 1 6 3 2 2 — 2 1 5 1 <

もっ取り乱すかと思っていた。話を聞き終えた私は自分でも驚くくらい冷静だった。

黒曜は自らの過ちを償って滅んだだけだったのだ。

定臣に許されたお陰で前向きになれてはいたものの、やはり心のどこかで後ろめたさを感じていた小夜子にとって、この事実は何よりの救いとなった。

目を瞑りスツと息を吸う　　うん、私は大丈夫。それよりも今は轟劉生の話しを聞いて気になった事があった。

これで話しは終わりだと告げた劉生に、小夜子の手をすつと握りながら定臣が聞いた。

「それで雪乃さんは今はなんと名乗ってるんです？」

「今は舞まいと名乗っている」

「それって!？」

劉生の言葉を聞いて小夜子が即座に反応した。

火の国の神王羅刹の正室　舞。

神王通信に羅刹、劉生の二人と肩を並べる程によく出てくる人物

の名だった。

一夫多妻を王に望む民衆の声は強いものの、羅刹は頑なにそれを拒み続け、正室の舞に一途に振舞っている事は火の国の民ならば誰もが知っていた。その舞が元尊迩栄女王、雪乃だと劉生は言った。

ああ、なんか納得できた。だから師匠は雪乃さんから離れたままなのか。結婚して大事にされている。だから自分は近くにいるべきではないと……

そう考えた定臣だったが『さてよ?』と自身の頭の中を整理する。

劉生が女王の真意に気がついたのは女王が処刑され、神王通信が普及してからだと言った。

確かその頃にはもう、羅刹と舞は結婚していたはず。処刑されて神王通信が普及した地点で、女王と距離を置いた目的は達成されるわけだから、師匠が火の国と距離を置く必要ってないよな?

話を聞いた感じだと明らかに師匠は雪乃の事を愛していた。何か裏にあると思いつつも劉生は、半ば捨てられるような形で雪乃の元から引き離された。そこに追い討ちの様に結婚の知らせ。

ああ……もしかして師匠……すねた?しかも事の真相がわかった

後も、意地張って会いにいかずにタイミング逃した？

妙に子供っぽいところのあるこの人ならありえると、定臣はなんとも言えない顔で劉生を見ていた。ふと隣を見ると、小夜子も自分と同じような顔をしているのに気がついた。

「む？どうした貴様ら」

定臣はやれやれと無言で小夜子とアイコンタクトをとると、劉生に向かって一つの提案をした。

「えっと、師匠が話してくれた内容のお陰で小夜子も随分と楽になれたと思います。ありがとうございます。」

それですと、一呼吸置いた定臣の隣で小夜子も頭を下げていた。

成長したなあ

「小夜子ってほら……長年、羅刹を恨んできたわけですから、簡単には許せないと思うんですね。だから一度会いにいつてその人柄に触れてみようかな」って

劉生はそれを聞くといつもの様に顎に手をあて、ふむと一度頷く。

「で やっぱり俺らって羅刹と面識ないし、ここは一つ弟子を助けると思って師匠にも同行お願いしたいのですが」

「断る」

「ですよー……はい、確定。やっぱりすねてますこの人。」

その時 定臣が握っていた小夜子の手に力が入ったのがわかった。

待て小夜子、何を言うつもりだ？

手で小夜子の言を制しようとした定臣だったが一步遅かった。

「馬鹿じゃないの轟劉生！」

孫弟子の突然の下克上に一瞬、驚いた表情になった劉生だったが切れ長の眼を見開くと、じっと小夜子を見据えた。

「なんだと？」

「まあまあ師匠。小夜子もほら謝って」

即座に間に割って入った定臣をよそに、小夜子が珍しく流暢に口を開き続けた。

「あっさらに雪乃さん轟劉生の事待ってるじゃん！なんですぐに会いにいつてあげないの？轟劉生自身も雪乃さんが羅刹と結婚した事にした方が轟劉生を守りやすいからだってわかってるんでしょ？自分の強さには自信あるのに雪乃さんが自分を想ってくれてる事に對して自信ないの？馬鹿なの？死ぬの？」

ちょ！小夜子言い過ぎ！！

小夜子のあまりの勢いに、定臣と劉生は口をあんぐりと開けて硬直していた。

「お互いにそこまで想ってて……少し離れたくらいでどうにかなっちゃうの？」

一気に喋って呼吸を荒げていた小夜子だったが、一呼吸置き、自身を落ち着かせた後に哀しそうにそう呟いた。

「あ……」

定臣の頭の中には、あの時の小夜子の言葉が蘇っていた。

『死なないならどこにいても一緒にしょ？ 私達の繋がりって少し会えないくらいでどうにかなるのかな？』

あの時　小夜子はまだ俺が天使だという事を信じてはいなかった。

その後、師匠との果し合いを経て、瀕死の状態から即座に回復した俺を目の当たりにして、信じざるを得ない状況に陥った。

小夜子はあの時の俺の様に『別れ』を予感したんだ……だからこそ今の師匠を見て憤ったのか。

「小夜子、大丈夫だ。俺の師匠は言葉に籠められた想いを読めない程、鈍感な人じゃないんだ」

すっかり俯いてしまった小夜子の頭を撫でながら定臣が劉生の方に『ね？そうでしょ？』と目配せを送る。

「むう……」

しかしなと腕を組み、目を瞑ってしまった劉生に思わず定臣が一喝した。

「轟劉生！いつもの切れ味はどうしたんだ！」

一瞬、びくりと身体を振るわせた劉生だったが、目を見開くと即座に定臣にゴンケツを見舞う。

「貴様もか！定臣！」

予想済みとばかりに、その拳をひらりとかわした定臣は劉生の前に大太刀『轟劉生』を突き出した。そして調子の良い笑顔を作ると一言。

「やだなあ師匠。俺はこの刀に対して言ったんですよ？そう言えば名前同じでしたな」

それを聞いて一瞬、表情が消えた劉生だったが　すぐに満面の笑みを浮かべて笑い始めた。

「定臣、貴様はやはりおもしろい！　良かろう……俺もついでいくとしよう」

しばらく笑い続けた劉生は、一頻り笑い終わると嬉しそうにそう告げた。そして若干照れた様子で頬をぽりぽりと掻きながら

「ふむ……小夜子。まあその……なんだ……悪かった。そして礼を言おう　感謝する！」

そう言っただった。

約束

そう言えば俺は自分がどの辺りに数年、住んでいたのか知らなかった。それを嫌という程、思い知らされる旅になった。

四国時代 領土が一番大きかったのは当然ながら、漢遼迤を飲み込んだ尊迺栄だった。劉生の自宅はよりもよって、その尊迺栄の最果てに位置していたのだ。

天下統一が成され、情勢が落ち着いてから火の国の城は当時の白蓮と黒曜の国境付近に移されてはいたものの、途方もない距離を旅するはめになった。

轟劉生の剣術の真骨頂はその機動力にある。その機動力を支えるために編み出されたのがこの舞う様な足運びだ。それを駆使して三人はただひたすら走っていた。

そういえば、この世界に来てから乗り物の類は見た事が無かった。刀剣が主流の戦闘方法であった事もあり、定臣は先入観で？当然、長距離移動には馬か何かを用いて移動するのだろうか？と思っていたのだが……

「何だそれは」

と一言で捻じ伏せた劉生に

「動物に乗るの!？」

と小夜子が続き、そういう概念が無い世界なのだと理解した。

そうですかRUNですか……

そもそも負けん気の強い三人である。『最初に休憩をしようと言
い出したら負け』という謎の暗黙のルールが出来上がってしまった
いたらしく、互いに意地を張り合い、気がつけば出発から丸二日間、
走り続けていた。

正直辛いです。三つ目の村を無言で通過した辺りから休憩したか
つたです。

意地を張るのが馬鹿らしくなってきた所で、ようやく定臣は自ら
折れる事にした。

「二人とも！俺ちよつと疲れました！」

『しょうがないなあ』とか『未熟者め』とか言われた気がするけど
気にしない！お前から自分の顔が嬉しそうになってるの気がついてな
いだろ！

そう心の中でつつこみながらも、適当に愛想笑いで受け流しつつ、
この先も自分が折れようと心に誓う定臣だった。

ああだこうだと言いながらも、次に辿り着いた村で三人は休憩していた。思えばずっと三人一緒にいたものの、旅の様な事はしたことが無かった。

恐らくは最初で最後になるであろうこの二人との旅を、定臣は決して忘れないようにと記憶に刻み込んでいった。

更に二十日程走り、ようやく城に辿りつく。

『あの轟劉生が登城した』とあって門兵達が一時騒然としたりもしたが、すぐに羅刹の許可が下り謁見が叶う事となった。

通された部屋の先に大きな扉が見える。あの先が謁見の間になっているのだろう。心なしか先程から劉生が落ち着かない様子で、うるうるとしている気がするがあえてつつこまない。

おそらく雪乃はまだ劉生の事を想っている。しかしながら過ぎ去った年月は嫌でもその心を不安にさせているのだろう。人の想いは風化するものなのだから。

「大丈夫ですよ、きっと」

珍しく小さく見えた劉生の背中に、定臣がそっと声をかける。そ

れに無言で頷くと、いよいよと劉生が扉に向かって歩いていった。

定臣は『少し、時間を開けてから入室しようか？』と小夜子とアイコンタクト交わし、二人で劉生の背中を見送った。

ドゴンッ

不意に大音響が響き渡り、扉と共に劉生が吹っ飛んできた。

定臣と小夜子は啞然とそれを見て

『え〜……』

と声を揃える。

呆然としている二人をよそに、その劉生を吹っ飛ばしたと思われる女性が、ものすごい勢いでそのまま劉生に飛びかかり殴り続けている。

えーと……世界最強の男？ですよねあのボコボコにされてる人……
…というか顔が嬉しそうだよ怖いよ！

しばらく殴られ続けていた劉生だったが、女性がフーツフーツと肩で息をし始めたのを見るとむくりと起き上がり、声をかけた。

「久しいな、雪乃」

それを聞くや否や女性が劉生に抱きつく。

「……そのじゃ……遅いのじゃ！もう来てくれぬのかと思った！」

あゝ……空気読む！さすがに空気読む！

小夜子の手をとり、そそくさと定臣は謁見の間へと消えていく。その背後には、互いの空白の時間を埋めあう様に抱き合い続ける二人の姿あった。

謁見の間に入室した二人を本日二度目の衝撃が襲う。

「やあやあいらっしやい！お待ちしておりましたよ、二人共」

軽い調子の声。

神王羅刹としてそこにいた人物は、あの時あの村に駆けつけてきた隊長だった。

最初から驚かせるつもりだった人に、わざわざ驚いて見せるのも何か負けた気がするのと、瞬時にシンクロした定臣と小夜子が平静を装って返答する。

「やあ隊長、久しぶり。羅刹って名前だったんだ？」

「よお」

『よお』て小夜子……何も言つまい……

シユタつと手を挙げて挨拶をする小夜子を、何とも言えない顔で定臣が見つめる。そこに残念がったフリをしながら羅刹が話しかけてきた。

「おやおや、残念ですねえ。もう少し驚いてもらえと思ったのですがあ」

やれやれと肩をすくめながら扉の方を一瞥すると、定臣は羅刹に質問した。

「それで羅刹さん、あなたの奥さんが、そっちでうちの師匠と抱き合ってるんだけど。いいのかな？」

大丈夫だと確信してはいたものの形式上、尋ねておかなければいけない。

手違いで打ち首とかになるとたまつたもんじゃないしな。

「いえいえ、むしろやっと肩の荷が降りましたよお」

だつてほら、と付け加えた後、羅刹はこう続けた。

「轟さん迎えにこないって事は、私と雪乃さんがラブラブだと思つてたつて事でしょう？他の人と結婚とかしちゃうと、ぶつた斬られ

「ちやうじやないですかあ」

軽い調子でさらりと述べる。

良かった　　これでもし雪乃の思いがとつくに冷めてて、羅刹と仲睦ましくしてたら師匠に立つ瀬無かったしなあ

内心でほっと一息ついていた定臣に、羅刹が尚も軽い調子で突然の爆弾発言を投下した。

「実は私、好きな人ができたんですよ。だからいい加減、轟さんに迎えにきてもらえないかと悩んでたところだったんですよ」

『へえ』とどうでもいいやといった感じで、それを聞き流していた定臣の手をしっかりと握ると、じっと目を見つめながら羅刹はこう続けた。

「あなたです」

……は？

定臣は無表情で握られている反対側の手でがっしりと羅刹の手を握り、自分の手を解放した。そして背を向けて足早に去ろうとする。

その定臣の服の裾を何故か小夜子が引いた。

「……小夜子？」

「定臣、ちゃんと返事する」

……なんか怒ってる？

仕方なく足を止めた定臣の前に、羅刹が姿勢を正して立つとその想いを告げ始めた。

「あなたの行いに感嘆しました　あなたの信念に共感しました。あなたをずっと見ていたいと思ってしまった」

先程までの軽い様子はその言葉からは感じられなかった。恐らくは本心からの言葉なのだろう。

すっかり誤解解いて諦めてもらうしかないか。

『結婚してください』と言った羅刹にしっかりと向かい会つと、定臣は顔の前に両手を綺麗に合わせて

「すみません！こう見えて俺、男なんです！」

と頭を下げた。

今まで何度もその言葉を言ってきた。もちろん信じてもらえた事は無かった。

だが

「はい、結構です。問題ありません」

なん、だと……？

こいつはなんか違う！今の絶対信じた上で言ってたぞ！？

『むしろ好都合です』とにこやかに手を差し伸べてくる羅刹からズザーっと後ずさる

……そういうことなのか!? こいつが一夫多妻を嫌がってたのはそういうことなのか!?

「ま、待ってくれ! ほら! よく見ろ! 俺の見た目! どう見ても女だぜ?」

「なら周囲の目を気にしなくてもよくなりますね」

こい……つは……

「で、でも俺は男だからさ!」

「はい、結構ですよ」

なんて爽やかな笑顔をしゃがるんだこいつは!

「ちょっと待て! 俺の気持ちを尊重しようぜ!」

「はい、私を愛してくれるように努力しますので」

『まずは結婚しましょうそれから』

……いかん、これは夢に出るわ

それから小一時間程、押し問答を繰り返した二人を小夜子はぼつと眺めていた。

神王羅刹。

戦乱の世を平定した英雄にして、その統治は国民から愛され？羅刹の前に羅刹無く、羅刹の後に羅刹無し？とまで言わしめる程の人氣を誇っている。またその武勇は世界最強の男『轟劉生』に勝るも劣らないとまで称されている。

それが……

これである。

定臣は思考を巡らせた後、ため息を吐きながら背後霊の様に付きまとっている羅刹を一瞥した。するとその視線に気がついた羅刹が両手を組み、顔の前を左右にぶんぶんと揺らしながら、更に距離を詰めてきた。

「今の視線は結婚いよいよOKってことですね〜」

断じて違う。

「嫌よ嫌よも好きの内と言いますし〜、そろそろ首を縦に振っていただけませんか〜？」

寄るな！息を耳に吹きかけるな！

登城から一週間。城に一部屋提供された定臣達はそこに滞在していた。その間、羅刹の猛アプローチは延々と続いていた。

いい加減あきらめてくれないかと、うんざりし始めた定臣だったが、本来の目的を達成していないのでここを去るわけにはいかなかった。

困る弟子を助けるためにと、師匠の一喝を期待したりした時代が俺にもありました。

そう心の中で呟きながら、どこか遠い目で先程から部屋の隅の椅子に、雪乃の膝枕つきで横たわっている劉生に視線を送る。
更に深いため息がでた。

デレを知らない人間が一度デレると歯止めがかからないらしい。

雪乃の想いを知ってからというもの、劉生は文字通りに骨抜きにされ軟体動物さながらに、日中からふにゃふにゃと雪乃につきつきりになっている。

そして小夜子はというと さつきから俺の左手にぶら下がっている。その無表情な顔には『これは私のだ』と大きく書かれてあった。

小夜子の願い ? 仇をあきらめること?。

城に来てからの小夜子を見ている限り、仇の事を考えた時に出現していた危うい影は、そのなりを潜めていた。

というか仇討ち自体はとくにやめてるんだよなあ……小夜子。
やっぱり後は羅刹の人となりを見極めるって事なのかなあ……

その人となりが……

こ・れ・か!!

我慢の限界に達した定臣は、振り返るや否や羅刹の額を右手の指
先でゴスゴスと連打した。

ああああもうこいつはああああ!! 『あははは痛いですよ』
じゃねーよ! って小夜子さんなんであなたおでこを俺に差し出して
るんですか! ?

「……私毛」

「なんで! ? なんで小夜子も! ?」

「最近、羅刹にかまっただけか。」

「かまってないよ? 憑かれてるんですよ? 除霊して?」

そう言いつつ小夜子の頭を撫でる。

これでいつもは機嫌がよくなってくれるのだが……

「おやおや、鞘野さんやきもちですか?」

貴様なぜ煽る。

な・ぜ・あ・お・る。

「定臣、私こいつ嫌い」

こりゃ前途多難だなあとぼりぼりと頭を掻く定臣をよそに、仏頂面に磨きをかけつつ羅刹を睨む小夜子と、それをにこにここと笑顔で眺める羅刹だった。

そんな感じの生活を繰り返して一ヶ月が過ぎ去っていった。その間、羅刹は増々と除霊が困難になっていき、小夜子は常時、頬を膨らませ、劉生は寝転んでいるか抱きついていたりかしている姿しか見えない。

問おう 国は大丈夫なのか羅刹と。

問おう いい加減ほっぺ疲れないか小夜子と。

問おう あんた誰ですか師匠と。

それからしばらくたったある日の事 既に日課となっていた、羅刹による朝の目覚めのhugをいつもは殴り倒して回避していた定臣だったが、その日は寸での所までかわす事ができなかった。

『ようやく心の距離が縮まった様です』とさらに抱きついてこようとしていた羅刹を小夜子が蹴飛ばす。いつも無表情に近い小夜子だが、その時の表情からは明らかに怒りが見てとれた。

あゝ小夜子、怒ってるなあ……どうしたんだろ？いつもの事なのに今日に限って……

……って……あれ？

床から起きあがるうとした定臣だったが、その場に尻もちをついてしまった。

なにやら頭がぼーっとしている。

「大嫌いな羅刹に抱きつかれるの、かわせなかった地点で体調不良。それに気がつかなかった羅刹の気持ちも疑わしい」

小夜子はそう言い放つと、定臣に手を差し伸べながらに羅刹をギリと睨んだ。

目が怖かったです。

朦朧とする意識の中で定臣はただ、ただそう思った。

そのまま軽々と小夜子にお姫様抱っこされつつ、布団に戻された定臣は眠りへと堕ちていった。

天使のくせに風邪ひくなよな俺。

目が覚めた定臣は目の前の光景に我が眼を疑った。なんと小夜子と羅刹がにこやかに会話していたのだ。

この一ヶ月間でそんな光景を見た事は、俺が知る限り一度も無い。主ににこやかな羅刹に小夜子がプンプンとからんでいただけなわけだが

二人の中でうまく折り合いがついたのだろうと、胸をほっと一撫でしつっ声をかける。

「おはよ、看病ありがとね」

「あ……定臣！おはよー！」

「おはようございます〜それと結婚してください〜」

もはやそれは挨拶の一部なのか羅刹。

「随分と楽しそうに話してたけど、少しは仲良くなったの？」

と小夜子に目配せ。すると小夜子の顔が突如
頂面！
で、でたく仏

「そんなわけないじゃん。羅刹は大嫌い」

「い、いあでも今さ、仲良さそうに話してたから」

思わず気圧され、後ずさりながら定臣が小夜子に聞く。

「あ、それはですね」

答えようとした羅刹を、小夜子が一瞥して眼で殺した。

世界の王を眼で殺すな小夜子。

「定臣には教えない」

「え？」

小夜子にしてはそっけないなあと少しばかり、違和感を感じた定臣だったが、そんなこともあるかといつもの愛想笑いで受け流すのだった。

小夜子から違和感を感じてから数日後のこと、その日、定臣は珍しく一人で城の窓際に立ち、空を眺めながらぼくっと思考を巡らせていた。

最初は小さな違和感だった。それが日を重ねる度に強くなっていく。

小夜子は相変わらず定臣になついている。羅刹の鬱陶しさも変わらずなのだが、二人の間に妙な空気が流れている気がする。

小夜子は相変わらず羅刹の事を嫌いだと言う。しかしながら二人で笑い合いながら話している所を何度か目撃している。その度小夜子はとり繕った様に慌てて仏頂面になっていた。

自分が近づくと、途端に空気を変えられるのはなかなか居心地が悪い。かといって避けられているわけでもない。

羅刹と仲良くしている所を隠す理由。そんなものは一つしか思い当たらない。

思考がそこに辿りつくると定臣は大きく息を一つ吐いた。

小夜子が羅刹を許すと俺が天界に帰るから……か。

あのなあ小夜子、俺だって自分の意思でこの世界に留まれるならお前から離れたりしないさ……

そもそも天界に帰るトリガーとなる『主人公の夢や願いを叶える』が達成されたかどうかの判断は誰がするのだろう。

少なくとも俺の目には、小夜子はもう羅刹を許しているようにし

が見えない。小夜子自身も許してしまっている自覚があるのだろう。でなければ俺から隠す必要がない。

口上で嘘を言い続ければそれで回避できるのだろうか？俺自身、天界に帰った事が一度もないのでなんととも言えないなあ

「 いちいちいい加減なんだよなあ天使って」

思わず口に出して言ってみる。

しばらく腕を組んで眉間にシワを寄せながら ああでもない
こうでもない、ぶつぶつ言っていた定臣だったが、考えても仕方ないかと開きなおり小夜子達の元へ戻ろうかと振り返ったその時 声と共に小夜子が抱き着いてきた。

「さくさくおみい〜！」

小夜子のボディアタックは俺が気がついているのを前提とした勢いだ。そして俺は不覚にも全く気配を感じていなかった。

勢いを殺しきれなかった定臣が窓の外へと飛んでいく。

「ちょ！小夜子おまつ！」

「ええええええ！？」

慌てて小夜子を窓の内側に戻した定臣は、そのまま小夜子の視界から姿を消した。

ちなみにここは五階である。

「ああああああああああ」

断末魔である。

先程から目の前でずっと小夜子が泣いている。どうしたもののか。

数十回目の『もういいから』でなんとか土下座状態からは立ち上がってくれたものの、小夜子はいまだに泣きじゃくりながら謝り続けていた。

しばらく悩みながら小夜子の頭を撫で続けていた定臣だったが、交換条件でもつけければ満足してくれるかな？と思いたち一つ提案を試みることにした。

「よし、小夜子それじゃ一つお願い聞いてくれれば許してあげる」

ヒックヒック言いながら、目で先を促してくる小夜子に笑顔で定臣がこう言った。

「羅刹と仲良いの隠すのやめてくれる？」

小夜子はそれを聞くや否や目を見開き息を飲んだ。なんてわかりやすい反応なんだ小夜子。

「わ、私は羅刹嫌いだよ？」

「あのなあ小夜子、仲良いの俺が知ってるのに口上でごまかしても意味ないから。しかも知ってるのに帰ってないだろ？俺」

認めても帰らないのかと聞いてきた小夜子に、定臣は自分の意思では絶対に帰らないと約束した。するとそこに笑顔で羅刹が入ってきた。

なに盗み聴きしてやがるんだこの野郎。

「よかったです〜お姉さんからお許しができましたよ〜小夜子さん」

鞘野じゃなく小夜子。 いつの間にか仲良くなったものだ。

「ってというか俺はお兄さんだ！」

いつもの様につっこみを入れた後、視線を小夜子に戻した定臣だったがなにやら赤くなり、俯いてもじもじしているその姿に首を傾げた。その小夜子をにこやかな笑顔で羅刹が見ている。

なにこの空気。

しばらくの間を置いて小夜子がぼつりと口を開いた。

「あ、あのね定臣」

「うん」

「わ、私、羅刹と結婚する！」

「……は？」

待て待て待て待ていやいやいやいや……ないわああああ
！……！

あ……視界が……暗く……

観客動員数歴代第一位！

ダダダッ

全国興行成績歴代一位！

ダダダッ

全俺が泣いた！

「……だおみ！定臣！！」

ガクンガクンと肩を揺すられてやっと我に返る。

「……はっ！？思わずブラックアウトしてた！なんか変なテロップ
見えた気がする！」

それからしばらく混乱し続けた定臣だったが、ようやく落ち着い
たところで二人から話を聞いた。

話しによると小夜子は、あの村の一件ですでに羅刹に一目惚れしていたそうだ。そして羅刹が俺にちょっかいをだすものだから、姉をとられる危機感やら嫉妬やらかまって欲しさやらで、ああいう態度になっていたのだという。

しばらく腕を組んでうんうん唸っていた定臣だったが『小夜子の気持ちはわかった』と一言置き、般若の形相で羅刹へと視線を振った。

「おやおや、せつかくの美人が台無しですよ」

「へらへらしてんなこら！……で？お前は小夜子の事、本気で好きなんだろうな？」

「さ、定臣！そんな怒らなくても！」

「小夜子は黙ってなさい」

その一言に小夜子は消沈する。それを見た羅刹はやれやれといった様子で肩をすくめながら定臣に向き直り、にこやかに宣言した。

「もちろん好きですよ」

「そっかあ…… なら反対はしないよ小夜子」

そう言い放つと定臣はどこか悟ったような顔で羅刹を見る。

「にしてもやられたなあ……俺の小夜子を口説くために、わざと俺を好きなふりするとかさあ……羅刹の作戦勝ちだなあ」

「え？私の一番は定臣さんですよ？」

「……は？」

「ですから私が一番愛しているのは定臣さんです」

待て待てこいつは今なんと言った？……俺を一番愛している？小夜子と結婚するのに？……俺の小夜子と結婚するのに？……

血が冷めていく。

遠くから自分を見てるような感覚。

時がとまっ

「待って定臣！！そのレベルでキレないで！！」

「はっ！？俺はいつたい……」

いいから聞いてと小夜子に両肩をがっしりとホールドされる。ふりほどく事は可能だが、いかんせん小夜子の真顔に毒気を抜かれる。

仕方がないかため息を一つ吐いた定臣はその場に座りこみ、あぐらをかいて二人に視線で話しを聞く意思を示した。

「私の一番も定臣だから」

「そもそもそれが馴れ初めだったので」

ああ、羅刹殴りたい。でも今はちゃんと聞こう。

二人は話す。あの俺が熱で倒れた日、その日が二人が和解した日だったのだと。

それまでの二人はどこか折り合いがついていなかった。原因はいたって単純。どちらが定臣の事をより愛しているかと無意識に意地になって競いあっていたからだだった。

あの日、定臣の体調不良に気がつかなかった羅刹は初めて小夜子に謝罪し、負けを認めた。

一度、和解してしまえばそこからはお互いに好きな物が一致する二人。二人で定臣のいい所を延々と挙げ合う内に会話する機会が増えていったそうだ。

なにそのむずがゆい理由。

しかめっつらでなんとも言えない表情で定臣がフリーズしている。その背中に小夜子がそっと抱きつきながら言葉をかける。

「だからね……羅刹の一番が定臣で私の一番も定臣……二人ですつと定臣を見ていようって決めたの」

その小夜子の言葉に、すっかり照れた定臣は俯きながら小声で咳く。

「……返答に困るんだけど」

そこに爆弾発言が投下された。

「ずっと近くにいて欲しいの……だから私と一緒に羅刹と結婚しよう？」

「……はあああああああああ！？」

衝撃の告白から数日が過ぎ去っていた。

定臣は小夜子の提案を当然ながら全力で、文字通り全力で拒み続けた。

羅刹には正室に雪乃がいる。しかしながらこの二人は形式上そうなっているだけ、でそこに特別な感情などは一切無かった。

天下統一以降、民達は王の世継ぎの誕生を待ち望んでいた。一夫多妻を望む民が多い中での側室を迎えるとの発表。当然の様に国は湧いた。

本来、簡単な発表だけで済まされるはずであったが、民からの要望も強く、何よりも定臣が『ちゃんと結婚式挙げないと殺す』とトスを効かせて羅刹を締め上げた事によって、側室を迎えるに当たっては異例となる盛大な結婚式が行われる運びとなった。

定臣と一緒に結婚してくれないと落胆していた小夜子だったが、

式の日取りが近づくにつれて、その顔からは喜びが満ち溢れていくのが見て取れた。そんな小夜子の傍らにはいつも定臣の笑顔があった。小夜子と定臣、それが二人の形だった。

ずっとこうしていたい。心の底からそう思った。

本当は心の底では理解していた。この時間には終わりが近づいていると。生まれてからこの方、この手の予感がはずれた例ためしが無かった。

ただ……認めたくなかったんだ……

式の日が近づくにつれ、定臣と小夜子は前にも増して共に過ごす時間が増えていた。

いつもは寄ってくる小夜子の相手をしていただけの定臣だったが、結婚が決まってからは努めて自分から近くにいるように心がけていた。

少しでも同じ時間をと……

そしてついに結婚式が前日まで迫ってきた。その日は式の打ち合わせがあると、朝から小夜子と羅刹は王の間に缶詰状態だった。

結婚の発表から式までの半年間、定臣と小夜子と離れたのが初めての事だった。

その日の夕方に定臣は、劉生を城の一角にある中庭へと呼び出した。

「すみません、わざわざこんな所まで来ていただいて」

雪乃と再開して以来、何かと角がとれて冴えが無くなっていった劉生だったが、定臣が纏っている雰囲気に、はっとなり背筋に芯を入れると顎に手をあてて少し考える仕草を見せ、口を開いた。

「ふむ…行くのか…」

「……恐らくは」

短くそう返答すると、定臣は劉生の前に正座した。

「師匠　あなたに出会えて本当に良かったです！　俺をここまで育てていただいて本当に感謝してます！」

そう言い終わると定臣は両手を地面に着き、深々と頭を下げた。

しばしの静寂。

二人の脳裏には出会ってから、今日のこの日までの出来事が走馬灯の様に駆け巡っていた。

恐らく定臣のその言葉は、鈍り始めていた劉生の心を震わせるには十分に事足りたのだろう。　それを証拠に

泣いている。

あの轟劉生が泣いている。

隠そうともせず、涙でしわくちやになった顔を定臣に晒し続けている。

「お、お前は、最高の弟子だっ、だった」

涙でかすれたその声を聞くともうだめだった。

最後は絶対に泣かないと心に決めていた定臣だったが、我慢できずにその場に崩れ落ちて号泣してしまった。

「
抜け」

しばらく定臣の様子を見ていた劉生が言葉を投げる。その言葉に顔を上げると、涙を流したその姿のままに劉生は刀を構えていた。

「ありがとうございます！」

そう言うと定臣は即座に『大太刀・轟劉生』を抜刀する。スムーズに抜刀できる様に右手で柄を引きずり上げ、左腕で逆刃部分をな

ぞる様に振り上げる。長すぎるその刀はそこで右手の柄を一度離してようやく抜ける。半円を描きながら落下していくその刀を右手で掴むとやっとな準備が整った。

「やっとな抜ける様になったか……おもしろい」

泣きながら笑う。

恐らくは俺も同じ顔をしているのだろう。

どちらからでもなく始められたその舞比べは、劉生の刀が折れるその時まで続いた。

息をきらしながら地面に腰を降ろした二人の顔は、先程の涙もどこへやら清々しいものだった。

しばらくしてようやく落ち着いた二人は、最後にと劉生秘蔵の酒を軽く飲み交わす。

明日は定臣にとっての弟子と劉生にとっての孫弟子の晴れ舞台だ。明日に響かない程度にしよう。

劉生と別れた後

定臣は小夜子の部屋へと向かった。

ようやく辿りつくという所まで来た時、正面から羅刹が歩いてくるのが見えた。

「やあやあ定臣さん、やっぱり明日一緒に結婚しちゃいましょう」
相変わらずに軽い調子。

「新郎が結婚前夜に他の女口説いてんなよ。俺は男だけだな」

「ふふふ、まあ小夜子さんについてあげてくださいよ」

そう言いながら羅刹は定臣とすれ違い、背を向けて去っていく。
その背中に定臣は話しかけた。

「今日は珍しくすぐに引き下がるんだな？」

「今のお二人の時間を邪魔する程、無粋じゃありませんよ」

笑顔で軽く振り返ると右手の人差し指を軽く立ててウィンクした後、羅刹は去っていった。

「あいっ……」

恐らくは勘づいているのだろう。声には出さずに定臣はそう思った。

部屋に入るなり定臣を衝撃が襲つ。もう何度くらったかわからないこの衝撃。間違えるはずもない。小夜子だ

「おっそいよ！定臣い！！」

『ごめん、ごめん』と笑顔で小夜子の頭を撫でながらそつと離す。

俺はいつからこの動作を自然とできるようになっていたんだろう。そんな事を思うと自然と笑みがこぼれる。

微笑ながら小夜子の頭を撫でつつ、慈しむ様にそつとその姿を眺めていると 途端に小夜子の表情が沈んだのがわかった。

「ん？どうした？小夜子」

「……やだ……やだよ！定臣！」

「え？」

「隠しててもわかるよ！私と定臣だよ！？わからないわけないじゃん！」

今にも泣き出しそうなその表情から小夜子がこの先、何を言おうとしているか理解できた。

「明日で定臣いな」

そつと右手の人差し指を立てて小夜子の口にあてがう。すると小夜子の目から涙が零れ落ちた。

「なあ小夜子。生きてるならどこにいても一緒だよな？俺達は少し会えないくらいでどうにかなる程度の繋がりがりじゃないよな？」

「で、でもお……」

肩を震わせながら必死に泣くのを堪えている。本当にいい子だなあ。そつと頭を撫でる。

「小夜子」

なんとか顔を上げた小夜子に、定臣は右手で自分の胸をとんとんと軽く叩いて見せた。

「ここにいるからさ、いつでも」

とんとんともう一度。

小夜子は俯き、目を瞑って顔をふるふると左右に振る。納得はしてくれない様だ。

「……やだ」

それを定臣は優しい笑顔で、困った顔をしながらずっと見ていた。

「俺の意思では絶対に帰らないからさ。まあ保険みたいなものなんだけど」

できれば約束して欲しいと定臣は告げる。

約束？

そう、約束。

どんな？

俺ってさ、小夜子の笑顔が一番好きなんだよね、だから。

だから？

俺が小夜子の目の前からもし……いなくなるなら最後のその瞬間は小夜子の笑顔を見たいな……だめか？

……がんばる。

そっか、ありがとな小夜子

でも肝心の俺が泣き崩れそうだなあ……正直、自信ないわ……

結局その日は小夜子の頭を撫でながら二人で一緒に就寝した。翌朝、羅刹の hug を顔に傷が残らない程度に蹴り倒してかわし、それから小夜子を送り出した。

式の誓いは城の王の間で行われる。その前に城下町を、お披露目のために一周り歩いてくる段取りだ。

主な重鎮や主賓達は予め用意された席に腰掛、新郎新婦が戻るまで王の間で待つ事になっている。当然の様にお披露目の段階から、小夜子の側についてまわる事になっている定臣の席は必然的に最後尾となる。

そして遂に式が始まる。

町では色々な人の笑顔を見た。惜し気もなく贈られる拍手喝采。こんなに大勢の人が小夜子の事を祝ってくれてるのかと思うと自然と笑顔になれた。

そう　　例え両腕に小夜子と羅刹が抱きついていたらとしても……

小夜子、新郎の前で俺にくっつくな！そりゃ見た目は女同士だから仲がいい姉妹にしか見えないだろうけど式の最中にそれはまずい
だろ！

羅刹、お前は後で殺す。民衆の前でさすがに王様ぶっ飛ばすわけにはいかねーからな。

そんなこんなで滞り無くお披露目は終わった。最後の方に定臣の笑顔が若干引きつっていたのは気のせいだろう。

余談だが、この後　数ヶ月の間、国民達は定臣の事を鞘野小夜子

だと勘違いしていたらしい。

王の間に入室すると途端にお祭り騒ぎから厳正なものへと雰囲気は変わる。部屋の中央の花道を囲んで左右に客席が用意されている。羅刹と小夜子はその中央の花道を歩いていく。

祭壇の正面、入り口に入ってすぐの位置に二人が通過した後すぐに定臣の席が用意された。一番最後の入室でも小夜子と互いに見える位置になるようにと羅刹が配慮してくれたのだ。羅刹自身も定臣が見たかったただけな気もしなくもないが、ここはあえてつつこまないでおこう。

ゆっくり、ゆっくりと小夜子は進んでいく。着席した定臣はその背中を優しく見守りながら思いだしていく。

初めて出会った時は二日酔いで俺、死んでたなあ……目が覚めると隣に何故か小夜子が寝てたんだよな。

敬語なんて使えないくせに無理して喋ってたよな。見ててほっとけなかったぜ。

……小夜子

小夜子、今……お前は幸せだよな？

もう仇討ちなんてする必要ないもんな？

羅刹はあんなだけど押さえるところは押さえてる奴だから

……

小夜子……

気がつくのと定臣は涙を流していた。二人が祭壇につく前になんとかしようとして両手でごしごしと必死に取り繕う。

そこに祭司の祝辞が聞こえてきた。

？永遠なる愛を誓うか？の問いに小夜子と羅刹が口を開く。

ああもうすぐ小夜子がかっち向く。早く涙をなんとかしな

いと……

若干、焦り始めた定臣の耳にとんでもない言葉が飛び込んできた。

『はい、永遠なる定臣との愛をここに誓います！』

小夜子と羅刹だ。

「……なんじゃそりゃあああああああああああ……！」

会場が騒然とする。涙が止まる。

別の涙が出た気がするが気にしない！

思わず大声でつつこみを入れた定臣に、小夜子が最高の笑顔で手

を振った。

「定臣い〜!」

『定臣い〜!』じゃありません!まったくあいつは……

なんだよ……あの笑顔は……

本当……

いい顔するようになったよな……

定臣は軽く手を振り返しながら、やれやれと困り顔で小夜子に笑顔を送った。その時 小夜子の表情が一変した。

突然、真剣な面持ちで花道を逆走して定臣の方へと向かってくる。

「おいおい小夜子、幾らなんでもそれは羅刹そっちのけにしすぎだろっ」

小声でそう呟いた定臣に小夜子が叫ぶ。

「だめだよ!だめだから定臣!」

『何が?』と一瞬首を捻った定臣だったが、周りの視線が自分の足元に集中しているのに気がついた。

!?

視線を足元に落とした定臣が驚愕する。なんと足元が透けて見え

るのだ。薄く、透明に徐々に上半身に向かって侵食するように透明は広がってきていた。

「おいおい」

そう言いつつも落ち着いた様子で自身の透明になっている足先に触れてみる。そこには何もなにかの様に触れる事が出来なかった。

すでに消えてるな……足無いのに空中に浮いてる姿って他から見ると不気味だろうな　とか冷静に考えてる場合じゃないか……

小夜子に視線を戻すと、やれやれと手でジェスチャーして見せる。そこに勢いを殺さずに小夜子が抱きついてきた。

「つとと、足無くても踏ん張れるんだなあ」

「定臣！だめだから！」

「ん〜、そうは言ってもこれ、止まってくれそうにないよ小夜子」

「やだ！」

「まいったな。もう太股まで消えてる」

「やだよー！ー！」

「小夜子お」

「帰らないって言ったじゃん！」

「あのなあ」

「やだよー！」

「俺だつて帰りたくねーよ！でもしょうがないだろ！」

「定臣い……………」

「わりい、約束破つちまった……………ほら　だからもう1つ約束」

「ううう」

「泣くなって、絶対に帰ってくるから」

「……………ほんとに？」

「ああ……………手、まだ残つててよかったよ」

そう言つと定臣は小夜子の頭をそつと撫でる。そしてその手を離すと自分の胸をぼんぽんと叩いた。

「ここ、だろ？」

「……………うん」

「小夜子、絶対に幸せになれよ！」

「……………うんー！」

そう言った後、小夜子は最高の笑顔而定臣に向けた。

「さすが俺の妹だ！約束ちゃんと守ってくれたな！」

小夜子の前では絶対に泣かないって決めてたんだ。

「お姉ちゃんは破ったけどね！」

でも

「ば〜か。俺はおにい……」

無理だったな。

最後の言葉を言い終える前に定臣を眩い光が包み込む。

やがて光が収まると、まるで最初から存在しなかったかのように定臣の姿は消え去っていた。

「定臣いいいいいいいい！！！！」

その後、私は羅刹に『式をやりきらないと定臣が悲しむから』と檄を飛ばされ、なんとか持ち直してその場を乗り切った。

最愛の姉がいなくなってしまった

覚悟は決めていたつもりだったけど実際は全然だめだった。

しばらくは無気力にただ、ただ時間を過ごしていった。その間も羅刹はずっと私を気遣ってくれていた。

半年が過ぎ去った頃、劉生の家に三人で暮らしていた頃に、食料の買出しによくいつていた村から小包が届いた。

中を開けると定臣が修行の際にずっと愛用していた大太刀が入っていた。それを見た途端に泣き崩れた私に宅配人が戸惑いながらに告げる。

定臣からの伝言。それは短かったけれど、私を勇気づけるには充分だった。

？俺は小夜子に何か残せたかな？

定臣が私に残してくれたもの　そんなものは言葉では言い表せない。あえて言うなら私のすべてだ。

でも定臣が言いたかったのはそんな事じゃない。大太刀と共にその伝言。定臣の言葉が蘇ってくる。

剣道。

そう術すべじゃなく道みち

人は殺さないに越した事はないし、それに殺人の術じゃ道

で鍛えられた人の精神^{こころ}までは斬れないと思うから

小夜子には剣術ではなく剣道として剣に携わって欲しい

……わかったよ……定臣……

それから二ヶ月後。

私は急造された『道場』の中にいた。大体の造りは定臣から聞いていたので、教えられた通りに依頼して内装を整えた。

「いやはや、やっと立ち直ってくれてよかったです」

羅刹だ。

「ごめんね……迷惑かけた上に　　こんな我が儘まで聞いてもら
っちゃって」

それを聞いた羅刹が驚いた顔をして小夜子を見た。

「え？」

「い、いえ、あの小夜子さんがお礼を言うなんてと」

「ちょっと!」

「あはは、冗談です」

『まったくもう』と小声で言いながら小夜子は筆を執る。書き出した文字は

心・技・体

それは定臣に習った道を進む上での三大要素。聞いた時にこれだと思った。

自分でも上手く書けたと うん、うん とその場で目を瞑って頷く。

「そういう所、定臣さんとそっくりですね」

「それは素直に感謝。」

「見てもいいですか?」

そう言いながら羅刹は小夜子が書き出した文字を見る。

「心・技・体ですかあ、いい言葉だと思います。定臣さんの直伝ですか?」

「うん!」

しばらくの沈黙。

どうしたの？と小夜子が羅刹に視線を向ける。すると羅刹は満面の笑みでこう答えた。

「でもこれ、技わざが枝えだになってますっ〜」

「……きゃあああああああああああああああああああああ」

約束（後書き）

これにて、火の国編は終了です。ここまで読んで頂いて感無量です。

書き始めは自己満足のために適当に始めたのですがお気に入りも頂いたり、感想を頂いたりとしている内にどんどん楽しくなってきました。

できればこの先もお付き合い頂ければ幸福の到りであります！

天界 II

あゝ格好悪いゝ、最後はもつと格好良く去りたかつたぜ……

眩しすぎる。目を開けているか閉じているかさえもわからない。

帰ってるんだよな？

どれくらい時間が経ったかわからない。視界がはつきりしない中、不意にオルゴールの音色が聞こえてきた。

あ この音色は天界の……

脳が切り替わる感覚。五年前にわずかに滞在しただけの天界の記憶が鮮明に蘇ってくる。

小波透哩、大宮るるか、小早川一樹。

つい数分前に話していたような感覚。なるほど、時間の概念が曖昧な天使にはうってつけか。

思考がそこに到達した時に視界が晴れる。記憶のままの風景、定

臣は天界に帰還していた。

「 ちゃんだ」

「口ずさんだのは最後のセリフの続き。はっとなり頬を伝う涙を拭く。」

「今の一瞬の出来事だったのだろうか。やれやれと空を見上げ大きく息を吐いた。」

戻ってきちまったかあ……

「ちゃんだとはまた理解の出来ない事を言うんだな定臣は」

背後から声。記憶が鮮明になる前から忘れるはずもない 小波透哩だ。

「 悪い、透哩……今はお前のツンに付き合ってる余裕ねーわ」
そう言つと定臣は後ろを振り返る事無く、左手を挙げその場にとどかりと座りこんだ。

『……………』

無言。この私を無視かと殺気で言われた気がするが今はどうでもいい。煮るなり焼くなり好きにしる。めんどくさい。

大きくため息を吐いて更に頭を垂れる。不意にその背中にとんと軽く何かが触れた。

何かと思ひ、顔を上げて軽く振り返ると透哩が背中をもたれさせ目を瞑り、腕を組んで座っていた。

「　　なんだよ……」

返事は無かった。どこか気遣われている気がして一瞬戸惑った定臣だったが、あの透哩に限ってそれはないかと視線を地面へと戻す。

しばらく二人でもたれ合う形で座り続ける。　　穏やかな時間だった。

思えば透哩と一緒にいて落ち着いたのはこれが初めてだろう。

「　　なあ透哩」

「ん？」

「まさかとは思っけど気遣ってる？」

「さあな」

「……勝手に人の心の中、覗くなよなあ」

そういえばこいつは心が読める。思いだした定臣はそうこちった。

「天使の心は読めんさ」

不服そうに鼻を鳴らすと透哩がそう答える。覚悟していた鉄拳制裁は飛んでこなかった。

どうやら機嫌が良さそうだなと、確認事項と質問を投げかけてみる事にする。

「透哩」

「ん？」

「答えて欲しい事が二つ程あるんだけどいいか？」

無言の返答。それを勝手に了承と解釈する。

「任務遂行が終わった世界にもう一度行く事ってできるのか？」

小夜子との約束「絶対に帰る事」。

無責任に約束したつもりは無いが、戻れる確証など無かった。それを確認する必要がある。

「そんな事をした天使は過去にいない」

淡々と、あくまで淡々と透哩はそう告げる。

「いないだけでもう一度行く事ができないわけじゃないのか？」

『……………』

「透哩？」

相変わらずに会話が難しい。答えてくれそうにないかと思いはじめた頃に、ようやく透哩が口を開いた。

『そんな方法が存在する世界もどこかにあるかもしれない』

つまりは知らないという事。小波透哩が知らない。本当にそんな方法がどこかの世界にあるのだろうかと不安が過ぎる。

『 そうすればいい。』

表情を曇らせ俯いた定臣に透哩が告げる。

「 え？ 」

『 無駄と言つてもどうせ探すのだから？馬鹿な定臣は何も考えずにその方法を探せばいい』

なんか透哩に励まされた？今日、変じゃね？

「 あ、ありがと。そうするよ。 」

ふんと鼻を鳴らすと透哩は立ち上がり、その場を去ろうとする。その後ろ姿を定臣は慌てて呼びとめた。

「 あゝもうーっ 」

『 なんだ？ 』

こちらを振り向かずに透哩が立ち止まった。どうやら答えてくれるようだ。

「 任務対象者の夢や願いを叶えたって判断は誰がするんだ？戻るタ イミングが良くわからなかったんだが 」

『 そういうのは答えるのが好きな奴がいるだろう 』

そう言いながらちらつとこちらを振り返った透哩の顔は

あゝすっげえめんどくさそ〜

今を思えば調子に乗りすぎていた。珍しく会話をしてくれた事で、小波透哩がどついう奴かを一瞬忘れていたんだ。

昔の人は本当にうまく言ったものだ 『口は災いの元』と。

「わりい最後にもう一つ」

『……なんだ？』

「お前つて実は男？ほら、エンジェルフォームのせいで性別がよくわか……」

身の毛がよだちました。

完全にこちらに向き直った透哩の顔には『殺す』とデカデカと書かれてあり、昔やったRPGのラスボスのBGMが聞こえてきそうな勢いだった。

「わるかつゴフッ！」

音速で謝ろうとした定臣の身体が宙に浮いた。

殴られた。あ 透哩がどんどん小さく……っでどんだけ飛んでるんだよ俺！あ 意識が遠く……

定臣は墓地の中にいた。なんだここに一番手前の墓へと視線を向ける。

川篠定臣、ここに眠る。

目の前に見えた墓にはそう刻まれていた。

「って死んでねーよ！」　ゴンッ
「あだっ！」

慌てて起きあがった定臣は額に何かをぶつけた。額を押さえつつ、視線を足元で蹲っている少女へと落とす。見覚えのある姿だった。大宮るるかだ。

見れば彼女も額を押さええて『~~~~~！~~~~~！』と痛みを堪えている様だった。

「あ、るるかさんちわっす」

「ちわっすじゃないですよ〜！いきなり起き上がらないでくださいよ〜！」

るるかの話によると、空から意識を失った俺が城壁を破って降ってきたそうなの。

そりゃあ変な夢も見るわ！どんだけ殴り飛ばしてんだよ透哩！

その心の中でつつこみつつも、るるかに説明する。

「そうですか……小波さんが……ご愁傷様です」

突然の頭突きをくらって憤慨していたはずのるるかが、哀れむ様に微笑を浮かべつつ慰めてくる。小波透哩恐るべし。

「まあ俺も調子に乗りすぎました、なんか珍しく会話してくれてたから」

「定臣さん敬語はいいですってばあ」

「ああそうだった、わりい」

「いえいえ、あまり言つと怖いので一つだけいい事、お教えします」

そう言うとするかは、にこりと定臣に笑いかけ右手の人差し指をぴっと立てる。

「帰還した天使を迎えるのは私の役割でしてえ、その私より先に他の天使が会つて事は通常ありえないんです」

「それってつまり」

会いにきた？あの透哩がわざわざ？

「ふふふ、ご想像にお任せします」

本当は五年間ずっと待ってたんですけどね。ふふふ、言つと怒られるので

あの定臣さんが出発したあの日

「じよ、上級つて!?!」

「まずい事になったまずい事になった……」

目の前で海里さんががうろたえています。挫折を知らない彼女はイレギュラーな自体にとことん弱い様でした。

「わ、私が行って連れ戻してくる!」

「ちょ、ちょっと落ち着いてくださいよお。そんなの認可が下りるわけないじゃないですかあ」

「そ、そうか……そうだったな」

落ち着かない様子でうろつくと、その場を行ったり来たりする様

は普段、冷静沈着な彼女からは想像もつかない姿でした。

『定臣はもう任務に就いたのか』

そこに声。

私と海里さんでも、気配を捉えられない程に消せるのは天界広しといえどそうはいません。小波透哩さんです。

「さ、小波さん……戻ってらっしゃったんですか？」

ああなんか睨まれていますう

「小波！貴様、わざわざ気配を消して近づく必要がどこにある！」

海里さんがまた喧嘩売ってます（涙）この二人は犬猿の仲というやつでして、会う度に口喧嘩に……板挟みになる私の身にもなっってくださいよお

「ちよつと海里さん〜」

『なんだ君島、いたのか』

「むむむむ！貴様またそうやって私を愚弄する気か！」

普段は冷静沈着な方なんですよ？小波さんの存在自体がイレギュラーって事で理解していただければ……

『五月蠅い。黙れ』

ああまた絶対零度の視線を……

「むう……だめだ！今は貴様にかまっている場合じゃないんだ！」

「そ、そうです！大変なんですよ小波さん！」

無言で言えと促されたので答えました。もちろん腕を組んで絶対零度の視線です。

『で？選別当番は誰だ』

「ロ、ロミオだが……」

ま、まあ間違いは誰にでもあるだろう　今はミスを指摘する

よりも起こってしまった事態にどう対応するかが先だ。

ってちよつと小波どこへいく!？」

『そんなものは決まっているだろう。　あれは私の所有物だ。

私の物へ害を与えた者には、それなりの罰を与えなければならぬ』

それなりの罰というのを想像するだけで恐ろしいですう

「所有物だと?……」

む　　そういえば貴様が連れてきたとか聞いたが……

そもそも最近神の選定が行われていなかったらどう?それなのはどうして天使が増える?」

やっぱり気がつきましたか……さてさてどう言い訳しましょう。

『承認されたものにケチをつけるとはお前の忠誠心も疑わしいもの

だな』

一瞬、悩んで返答が遅れた私より先に小波さんが口を開きました。

「な！？私は素朴な疑問を口にしたまでだ！私の忠誠心には一片の揺らぎもない！」

「まあまあお二人とも」

普段の小波さんなら、海里さんを無視してあのままロミオさんの所へ行っていたでしょうが……これは定臣さんの事、かばってますね。ふふふ、珍しい事もあるものです。ここは微力ながら協力させていただきますよ。

「えっと、海里さん。結局の所ですね、一度、任務に出かけちゃった天使をどうこうする事ってなかなか難しいので」

「……ふむ。」

達成される事はまずないだろうが……救援に向かう事も難しいか。

「って小波どこへ行く!？」

またしてもその場を去ろうとしていた小波さんに、海里さんが声をかけました。もちろん小波さんはこちらを振り返る事もなく……

『帰還ポイントへ行く』

「え？」

「ふえ？」

この返答は予想外でした。私も海里さんも、てつきりロミオさんを折檻していくものだとばかり……

『大宮　先に言うておくが。

私の定臣が戻った時に、その任務が上級であったなどと
い
らぬ知識は与えるな』

「わ、わかりましたあ……でも帰還した際には私から連絡さしあげ
ますよ?」

ふん、と鼻を鳴らしてそのまま小波さんは去っていきました。あ
つけにとられました。が本当に今日のこの日まで、そのまま待ってい
ると思いませんでしたよ。

それにしてもあの時の海里さんの顔ったら……ふふふ

「わ、私は夢でも見ているのか??小波透哩が他人を待ったと??」

「
るるかさん?」

またこの人はトリップしてるよ。そういえば最初に会った時も、
最後はどこか遠い世界に旅立っていったんだっけ……

「 あっ……はい！すいません！」

「 えっと、透哩の事は置いておくとして」

五年待つて置いておかれました（涙）あれでも定臣さんの事、心配してらしたんですよお。 言うて怖いから言わないですけどお

「 るるかさん？」

「 あっ、はい」

「 その……透哩に質問はるかさんに聞けって言われて」

それを聞いた後るかは心底嬉しそうな顔で定臣に『どうぞ！』と告げる。本当に説明とか好きな人なんだなあと思いつつ定臣は透哩が答えてくれなかった質問をぶつけてみた。

「 あゝそれは、任務遂行対象に感情移入しすぎですね。

定臣さんは任務遂行対象の事をどう思われてましたか？」

「 愛すべき妹！」

即答した俺をるかさんが、若干引き気味の笑いで眺めてくる。気にしない！気にならない！

「 あ、あはは、えーとまあそれが任務達成後も、定臣さんがその世界に縛られていた原因ですね」

るかの説明によると、心の底から任務遂行対象にしてあげたいと天使が願った場合にのみ、それが達成条件として追加されるとい

う事だった。

俺が心の底から小夜子にしてあげたいと願った事

『小夜子には幸せになつて欲しい』

ああなるほど

あの時の笑顔で俺が満足しちまったのか……じゃあ俺が満足しなければ、あの世界にずっと居続けられたって事なのか？

違うよな。

小夜子が幸せになれたから俺が天界に戻ったんだし。それならこれで良かったんだよな……

「感情移入する事を効率が悪くなると嫌う方もいらっしやいますが……
定臣さんのその顔を見ればわかります。

あなたにとってそれは悪い事じゃなかったんですね」

満面の笑みでるかがそう言ってくれた。

「そう　　だな……ありがとう」

「いえ、中には世界を旅する事に心が壊れちゃう方もいらっしやいますので……

ケアとして、記憶の忘却などのお手伝いもしてるのですが」

「俺は絶対に忘れないので必要ないっす」

「はい」

どれだけ効率が悪くなくても、どれだけ別れが辛くなくても、やるからには徹底的にその世界の主人公に関わっていつてやるさ
その上で小夜子にもう一度会いに行く方法を探していこう。

自分と小夜子の別れが、小夜子にとって良いものだったとわかった途端に前向きになった。

待つてろよ！小夜子！俺、頑張るから！

ノリと勢いだけに任せて任務に就くとか馬鹿すぎた。前は正直、勉強不足すぎた

と猛反省し、次の任務に向けてもう少し知識をつけていこうと判断した定臣は、るるかに願い出てささやかな講習会を開いてもらった。願い出た時のるるかの顔はもちろん満面の笑みである。

「
すう」という事で覚えていれば便利な天界知識の講習は終わりで

「ありがとう！すげーためになったよ！」

忘れない間に自分の中で整理しておこう。

学園への入学条件として任務遂行世界で様々なスキルを身につけるといったものがあつた。

今回の俺の場合はそのスキルというのは間違いなく『轟流剣術』の事だろう。

もつとこう　世界を一つクリアする度に、ペアつと神力が解放されて不思議能力が使えるようになるとか……そういうのを期待していたんだが。

スキルの一つ一つの習得には弛まぬ努力が必要なわけだ。天使つてもつとこう神々しいイメージがあつたんだが……

脳筋　すぎる

相変わらずに便利能力は不老不死くらいなものだった。

不老不死といえば、主人公に対して行使した分は、主人公の夢や願いが叶った地点で解除されるんだつたよな。

小夜子の不老不死が解けたタイミングがわからなかつた。

これから先、その世界の主人公にも行使していくに当たつて、予め宣言してから行使するのをやめようと心に決めた。解けるタイミングがわからない以上、不老不死に慣れてもらつては困る。

俺が師匠に勝つた時みたいな戦闘手段に慣れた場合、仮にその時に不老不死が解除されていれば即死するからだ。　まああんな

痛い慣れようがないと思うが……

習得スキルに関してだが、初級カテゴリーの任務の中では基本的な戦闘術ばかりの習得になるらしい。習得スキルに予め目安をつけられるのは大きい。行った方がいいが何を覚えればいいのか見当がつかないのでは大違いだ。

任務に就いた方がいいが、何のスキルも習得せずに主人公の夢や願いを叶えて戻ってくるだけなら、いつまで経っても学園とやらへは辿り着けない。

正直、学園とかもうどうでもいいが、スキルを習得する事は小夜子と再会する事へ直接繋がっている。

かといって主人公をそっちのけでスキルの習得に従事するわけにもいかない。難しい所だがどっちも頑張るしかないか。

あと特筆すべきなのは遂行世界の概念によるスキル干渉か。

例えば魔法を習得しているとして、その天使が魔法という概念が存在しない世界での任務についた場合、その力は激減ないし、行使不可な域にまで制限されるというもの。

なにこれ？せつかく覚えても使えない場合があるって……
こりゃ任務選びってかなり重要になってくるなあ……

あとそれを逆に応用して、天使翼を発動してみればその世界に『天使』という概念があるかどうかかわかるのだそうな。

要は翼だせれば概念有りって事だな。天使って概念が、その世界にあるなら主人公に対しての任務の説明がかなり楽になる。前回は

信じてもらうのに正直苦労した。

小夜子なんか最後の方まで全く信じてなかったしなあ

思わず笑みが零れる。そこではつとなり、正面で朗らかな笑みを浮かべていたるかに気がついた。

「わ、わりい、ちょっと自分の中で整理してた」

「いえいえ、難しい顔したかと思えば急に笑顔になったりと、見ていてあきませんでしたよお」

その笑顔を見つつ『ほんと良く笑うよなあ』と思いながらも、この小さな天界での師匠に心の中でお辞儀する。本人は断じて友達と主張するだろうけども。

「それで、任務遂行世界って外から見た感じでどんなスキルがある世界かわかるの？」

「いえ、運ですね」

なん……だと？

「あははは、定臣さんその顔！」

「いちいちいい加減すぎるだろおお天使いいいい！！」

思わず絶叫する。『そういうものなんです』とにこやかに返されて毒気を抜かれた定臣は、それならばすぐに任務に就いてやると息を巻いた。

「ふ、ふえ、ふええええええん」

るるかの泣き声に我を取り戻した定臣は慌てて謝罪した。しばらくぴーぴー泣き続けたるかだったが、ようやく落ち着きを取り戻したのを見計らってもう一度、謝罪する。

「ほんつとつにごめん！」

両手を顔の前に合わせて深々と頭を下げる。

「も、もういいです、ヒック、か、刀、ヒック」

うわゝよくなさそう。

「まじでごめん！ちょっと混乱した！」

「か、刀は、ヒック、ぶ、武器は、ヒック、天界には、ヒック」

なかなか会話が難しいので要約すると、天界に武器は持ち込めな
いらしく、帰還の際にゲート（出入り口的なもの）で強制的に一時
預かりになるそう。次の任務の際にそこで返却される事になって
いるらしい。

ちなみにこのゲート、天界から出る時は任務水晶経由した先、天
界に戻る時は遂行世界で姿が消えて天界に出現するまでの間となん
とも曖昧な位置にあるらしい。

そして何より納得したのはそのゲートを視認した者が一人もいな
いという事。天界と遂行世界の狭間で起こるその武器預かり現象を
総じてそう呼んでいるだけらしく、たぶんそこにそんなのがあるの
だろうと、なんとも曖昧な認識な所が如何にも天使らしかった。

「それじゃ任務に出かければ勝手に戻ってくるんですね？」

「は、はい、ヒック」

ありがとつと言いながらるるかの頭をぼんぼんと撫でる。自分のその行動に気がつくつと定臣は慌ててその手を引つ込めた。

何やってんだ俺！相手はるるかさんだぞ！？癖つてこえくなおい！

「わ、わりい！」

慌ててそう言った定臣にるるかが返事をする事は無かった。怒ったのかと思ひ恐る恐る、るるかの顔を覗きこむと

「はにゃ〜……」

なにやらとろけていらつしゃいました！

しばらく顔の前で手をぱたぱたしてみたり、再び頭を撫でてみたりした定臣だったが、一向に戻つてくる気配がないるるかに困り果ててしまった。

更に待つ事、数分

尚も帰還する兆しを見せないるるかさん。 ん〜……今回は

ちゃんとお別れ言いたかつただけだなあ……仕方ないかあ

いよいよ挨拶を諦めた定臣は、るるかにやれやれとジェスチャーして見せた後、ようやく任務へと出かけようとした。

その時。

「貴様！るるかに何をした！」

突然、背後から怒声を浴びせられた。

「いいえ！なにも！」

そう反射的に返答しながら振り返った定臣が見たものは　　ま
たしても美女だった。

薄い紫色の髪を背中程にまで伸ばし、その毛先は一点に縛りこみ
純白のリボンで結ばれている。

小さく作られた無数の三つ編みと右側に一際大きく作られ、こめ
かみの辺りからうなじを隠すように垂らされた三つ編みが特徴的だ。
瞳の色は綺麗な紫、その服装はるるか同様に制服の様なものを着
ていた。

腰に手を当て、こちらを見降ろす様な威圧感を醸し出してはいる
ものの、透哩のそれよりはまだ友好的に感じられた。

「初めまして！俺の名前は川篠定臣っていいいます！」

さすがに美女耐性がついてきたらしい。昔の俺なら間違いなく見
とれていただろう。

「あつ、これはご丁寧に。私は君島海里と申します……ってちがあ
ああつ！るるかに何をしたと聞いているんだ！」

なかなか愉快的らしい。

「海里つて、ああ、一樹を案内した天使さんかあ……何をしたと言われてもな」

そう言いながら定臣は海里の方へとてくてくと歩み寄る。

「な、なんだ貴様！」

「だからこつ、な？」

定臣はそう言つと海里の頭をなでなでと撫で始めた。

「なっ！？なななな！？」

あゝこの人おもしろいかも。なんとというか　いじり甲斐がある？

内心でそう思いながら、にこにこ笑顔で頭を撫で続ける。そこによつやく、るるかが帰還してきた。

「はっ！？……あ、あれ？海里さん、いらしてたんですか？」

「るるか」

海里はそう言いながら、そそくさと復活したるかの背後へと回り込むと顔を半分だけ出し、定臣の事を威嚇する様に睨みつけてくる。何この小動物。

「どうかしましたか？海里さん」

「じ、じじじじいつ、何なんだ!」

そう言いながら定臣をぴっと指差す。

おもしろいので近づいてみる事にしよう、そうしよう

ものすごい笑顔を浮かべながらてくてくとわざとらしく、ゆっく
りと二人へと近づいてみる。

「わー!わー!くるなー!」

定臣が目の前まで迫ってきたその時に、海里は叫びながら部屋を
出て行ってしまった。

「逃げられたか、残念」

その背中を見送りながら定臣はやれやれと、るるかに肩を竦めて
ジェスチャーして見せた。

「ふ、普段は冷静沈着な方なんですよ?」

いやいやいやいや、今を見てそれを信じるとか!そのフォロー
無理すぎですよるかさん!という心の中のつつこみを定臣は一言
で表した。

「えー」

「あ……ははは」

苦笑いでそれに応えたるかは、何をどうすればあの海里があらなつたのかと説明を求めてきた。

「だから、こつ、ね？」

なでなでと

「はにゃ〜……」

何このループ何このループ！

いい加減、面倒になった定臣は遠い世界に旅立つたるかに『じやあいつてきます！』と軽く別れを告げて、いよいよ任務に就こうと部屋を後にするのだった。

「確かこの部屋から出て右手の……あゝあった、あのでかい扉の先だ」

扉の先で定臣を迎えたのは記憶にあったその景色。

上も下も無く、一面を覆う星空の中に浮かぶ無数の水晶玉は今も尚、五年前と変わらずそこに存在し続け、あらゆる天使を迎え続けている。

「さ〜てどれにしようかな〜」

水晶玉の中に浮かび上がった小さな景色をまじまじと見ていく。その先の世界で習得できるスキルは運次第。その話を聞いた今となっては嫌でも慎重になつてしまう。

しばらく、うん、うんと悩んでいた定臣を不意に既視感が襲った。

「なんかこの感覚　　何かに似てるよな？」

首を傾げた定臣だったが、既視感の正体に気づくとぼんっと手を打った。

ああ、これ　　新作のRPGゲームがやる時間無い間に大量にたまった時だ。どのゲームからやろうか。それを選んでる時に似てる。

バシッ！

周囲に突然、鈍い音が響く。

音の正体は定臣が自身の顔を、思いっきり両手で平手打ちしたものだつた。

「ゲーム感覚じゃダメだる俺！一世界入魂！今考えた俺的、造語！」
一人で仕切り直した定臣はもう一度、入念に任務水晶を眺めていく。

前回みたいに色の違う水晶は無いんだな。小夜子と出会えたんだ

し色つきは大当たりなのかな？

ん〜無いものは仕方ないか。

更に顎に手を当てて考える。すっかりと劉生の癖がうつっている事に本人は気がついていない様だった。

火の国の世界に再び行くには……

聞いた話しによると一度、遂行された任務水晶は消滅してしまうそうだ。

水晶経由以外で別世界に移動する方法。

そんな魔法みたいな方法がありそうな世界……ん？魔法？

魔法と言えばRPG？我ながら思考が単純すぎて嫌になる。

ふるふると首を振った定臣だったが、他にあても無さそうなので本人的にRPGっぽい見た目の水晶を探す事にした。

いくつかの候補の内、触った感じで一番しっくりきた水晶を選ぶ。

「さてさて、行きますかっ！次はどんな出会いが待ってるかなっ」と！

水晶を胸に当てがう。定臣を眩い光が包み込んだ。

あれ？ 今、水晶の色が一瞬変わった気が……

姿が消える瞬間に定臣は首を傾げるのだった。

「あ、あいつは行ったか？」

妄想から戻った私が見たものは扉から半分だけ顔を出して、そう聞いてくる海里さんの姿でした。

「何やら珍しく動揺してらっしゃいましたね」

できるだけ刺激しない様にそう質問してみる。

「あいつなんか苦手なんだ！」

「怒らないでくださいよお」

「川篠定臣といったか。最近、天界に来た天使なのか？私はあるの知らないぞ」

「あ、彼が小波さんが連れて来た方ですよ？」

「なっ！？ふ、二人揃って私を愚弄しおって！！」

「そんなつもりは無いと思いますけどお」

「いいや！あれは絶対に私を愚弄していた！」

「まあまあ、そう怒らずに……とりあえず」

「ん？」

「入ってらっしゃいませんか？」

「……そうです。」

新たなる出会い

定臣がRPGっぽいと表現した世界。その世界には確かに魔法が存在していた。望んだ神秘は確かに存在していた。しかしながらその世界には望まれぬ神秘も存在していた。

そこに住む人々は世界を『ラナクロア』と呼び、世界統一国家『エドラルザ王国』のもと日々、魔族との戦闘を繰り返していた。結束させた人類の力で抗うも、魔族との戦闘は苛烈を極める。劣勢にたたされた人類は魔術の粋を結集して絶対防御の城壁を作りあげた。

エドラルザは城壁によって国を囲む。囲まれた土地には仮初ではあるが、平和が約束される。城壁が完成してから十余年、城壁の内と外、明確な違いが現れるには十分な時間が過ぎ去っていた。

定臣が降り立ったのはその外側の世界だった。

周囲の景色は又しても山、山、山。まずは大きく深呼吸する。

「あゝやっぱこのいきなり世界が変わる感覚だけは慣れそうにね、なあ」

そう呟きながら自身の格好を確認する。予想通りのRPG初期装備、あえて言うなら旅人の服といった感じだ。ただしその背中には大太刀『轟劉生』がしっかりと背負われていた。

「いやゝ刀戻ってきてよかったあゝまじで焦ったぜ！」

もう一度、自身の格好をまじまじと見てみる。

「なんでこう毎回、少しだけサイズでかいんだよ」

やれやれと服をばたばたと振った後に確認事項を頭に浮かべる。

えっと、主人公の名前はポレフ・レイヴァルヴァンってカタカナかよ！頭の中に浮かんだその姿はボサボサな茶髪になんとも冴えない顔つきの小学生くらいの少年だった。

こんなので大丈夫かよと思いつつも居場所を確認する。またしても現在地からかなり近い位置にいる模様。どうやら主人公の近くに降り立つ様になっているらしい。

次の確認事項、『天使』という概念の存在……って翼ってどうやって出すんだよ！そんなの知るかよ！

「ノリででるかな？」

しばらく顎に手を当てて考えた定臣だったが、そう呟いた後に何か忍法さながらに両手の人差し指をぴつと立てて胸の前で組むと掛け声をかけた。

「ちよえ！」

バリッ

よしっ！翼生えた！そして服もげた！

「よくねえええよおおおお！！」

思わず頭を抱える。背中が思いつきりスーする。後ろから見た自分の姿を想像すると泣きたくなってきた。

「結構この服、気に入ってたんだけどなあ……」

そういえば前回も来て早々に服がダメになったなあ……そういう仕様か？何かといい加減な天使ならそれもありえそうだなと思考を巡らせてはみたものの、結局のところ破れたものは仕方ないかとあきらめるしかなかった。

さすがに人前で上半身をはだけさすのはまずいかと、首の後ろで破れた服をしつかりと結ぶ。応急処置としてはこれでいいだろう。

「代えの服探さないとなあ」

とりあえず主人公に会えばなんとかしてもらえるかもしれないと、感覚を頼りに山の中を進んでいく。鬱蒼と覆い茂る草木を掻き分け

てひたすら直進し続けると不意に視界が開けた。

「たっけえ〜！」

眼の前には断崖絶壁、その下には村が見えた。その村は遠目に見ても賑わっている様子が見てとれる。

「あの村に住んでるのかな？」

周囲を見渡して降りれそうな場所を探してみたものの発見できない。

「むう」

困り果てて来た道を引き返そうかと後ろを振り返った定臣の目に先程、出現させた翼が映りこんだ。

翼が生えたって事は『天使』って概念が存在する世界なんだよなあ

概念があるからといって昔の自分とこの世界の住人が同じ認識だとは限らない。定臣が昔いた世界では天使とは神秘的な想像上のものだった。果たしてこの世界ではどういうものとされているのか。

「珍獣の類だと思われてるなら捕獲されかねないしなあ」

翼をもう一度、眺めてみる。

「生えろって念じれば生えたって事は結構、自由に動かせるのか？
これ」

そのレイフキツザからはずれて更に南に一軒の家が建っていた。

「姉ちゃん姉ちゃん！なんかおもしろいの拾ったぞ！」

「あらあら、今日は何を拾ったの？ポレフ」

私はそう言いながら愛しい弟に視線を向けました。弟、ポレフの背には女性が背負われていました。

確か今日はカダの木を削りに行っていたはず。カダの木はライマ山、南部に群生していて靴の材料には欠かせないものです。

そう、南部に群生しているのです。ライマ山を南に越えた先は魔族の支配下。数年前の大侵攻で切り崩された崖があるので弟が必要以上に南に行く事は無いと思ったのですが・・・

「ポレフ、その人を離しなさい。魔族かもしれないです」

「違っつて！空から降ってきたんだって『これ』！」

空から？それに『これ』？

幼い頃から言葉遣いには特に厳しく育ててきました。その弟が見ず知らずの他人を指して『これ』よばわり。少し躰げが必要な様で

す。

「ポレフ、人様を指して『これ』はないでしょうか？」

「わっ！わわわ！違うんだって！姉ちゃん！包丁降ろして！違うんだって！『これ』人間じゃないんだって！」

人間ではない。

「やはり魔族……」

「待って！謝るから待って！包丁やめて！」

「ポレフ、魔族は危険だと何度も教えたでしょう？」

「魔族じゃないってば！翼！翼生えてたから綺麗な！」

翼？……翼を持った魔族は存在します。しかし綺麗な翼と表現するにはおぞましいものばかり……

「ポレフ、詳しく話してください」

そうやって私はポレフを家の中へ入れ、背中の女性を奥のベットへ寝かしつけてからリビングでテーブルを挟みポレフと向き合つと詳しく話しを聞きだしました。

話しによるとカダ削りに出かけたポレフは夢中になる内にうつかりと崖の手前まで進んでしまったらしく、そこで天から声が聞こえてきたそうです。それにポレフはこの女性をどこかで見かけた事があるとも言いました。

「うん、どこだったかなあ」

「しっかりと思いだしてください。初対面ではないのなら覚えていないのは失礼ですよ」

「会った事はないと思うんだけどな……あ！」

片手でぽんと手のひらを打つその仕草に思わず笑みがこぼれました。私の弟はなんと可愛いのでしょうか。

「思い出しましたか？」

「教会！教会の壁に描いてあった絵の人だこれ！」

教会の壁画？……綺麗な翼……天使？

そこに思い至った私は思わず気持ちが高揚しました。古くからの言い伝えで天使が舞い降りた者には幸福が訪れると言われています。その天使が愛しの弟に舞い降りた。こんな幸せな事はありません。

「ポ、ポレフ、それでその天使様は何と仰られていたのですか？」

「どうしたの？姉ちゃん急に早口になって……天使ってこれの事？」

小刻みに首を縦に振られたので思いだして見る。ポレフが思いだしたのは必死の形相で翼をばたつかせながら空から降ってくる定臣の姿だった。

「え〜と確か……」

頭を少し掻いてみてやっと思いついた。

『俺はペンギンかああああああああ』

「って言ってた」

「オレワペンギンかアア？天の国の言葉でしょうか？」

「さあ？」

「ポレフの前に舞い降りた時にそう仰られたのなら、きっと天の国の挨拶なのでしょう」

「う〜ん……」

舞い降りたというよりは落下してきたって感じだった。それに半泣きでそう叫んでたんだから挨拶じゃないと思うんだけどなあ……

そう思いながらもポレフは正面でにこにここと笑いかけてくる姉の顔を見ると何も言う気になれなかった。

「まっいつか！たぶんそうだよ姉ちゃん！」

あゝ……死んだ。確実に死んだわ俺。

意識が戻り、目覚めるまでの僅かな時間に定臣は思考を巡らせていた。

まさか飛べないと思わねゝよ普通！なんのための翼だよ！

……いや、まあ確認しなかった俺が悪いんだけどな

我ながらまぬけすぎた。誰にも見られてなくてよかったなあ……

「それいいね！そうしよう姉ちゃん！」

あれ？なんか誰かの声が聞こえる。

「ええ、ええ、きつと天使様も喜んでくださいますよ」

「天使……なんで正体知ってるの！？」

「早く目、覚まさないかなゝ天使」

なんか覗きこまれてる。目開けて大丈夫なのか？これ

一瞬、躊躇した定臣だったが仕方がないかとあきらめて目を開く。
そこへ

「あ！起きたよ！姉ちゃん！」

覗き込んでいたのは少年。この世界の主人公『ポレフ・レイヴァルヴァン』だった。

何このデジャヴ。小夜子の時もそうだった気がする。

とりあえず寝転んだままでは状況がわからないと起きあがる。目の前にはポレフ、その少し奥には女性が一人いる。

その女性は驚く程に綺麗なストレートの銀髪を地面に着きそうなまでに伸ばし、天使顔負けな美しい顔立に金色と翠色のオッドアイを浮かべ、るるかばりの笑顔でこちらを見ていた。

透哩とどつちが綺麗だろう？そう思わず見とれてしまっていた定臣にポレフが声をかける。

「天使！天使！」

何かと視線を戻すとポレフは満面の笑顔で定臣に右手を挙げながら大きく口を開くと

「オレワペンギンカアアアア！」

と言ってきた。

なん……だ……と？

見られていた。思わず涙がでそうになる。

頭を抱えて首を左右にふるふると振っていた定臣に更に声がかかる。

「天使様、私も」

顔を上げた定臣に更なる追い討ちがかかる。

「オレワペンギンカアア」

これはいじめなのだろうか。それにしても笑顔に悪意が全く感じられない。

正面の二人は先程から満面の笑顔でこちらに手を振ってきている。とりあえずはと定臣は得意の愛想笑いを浮かべながら軽く手を振り返してみた。

「おお！通じた！オレワペンギンカアアアア！」

ポレフ・レイヴァルヴァン、それにしても元気がいいな。ついでうか俺はペンギンか言うな！

どうやら挨拶か何かと勘違いしているらしい。見た所、この世界の住人は天使に悪意はもっていない様だ。それならばと定臣は口を開いた。

「初めまして、俺の名前は川篠定臣といます。もうわかってるみ

ただけど天使です」

「うおっ！同じ言葉喋ってる！」

「まあ、まあ」

二人が声を揃えて驚いた。

うーん、いまいち天使の事をどう思ってるのかわからないなあ

「えっと、普通に会話できるんで」

そう一言、前置きを入れた後に確認する。

「まず、この世界で天使ってどういうものなのか教えてもらえないかな？」

その言葉を聞くとポレフの背後にいた女性がすつと歩み出て定臣の前まで来ると一礼した。

「申し遅れました。私はエレシ・レイヴァルヴァンと申します。このポレフの姉でございます」

あまりに丁寧な挨拶に釣られてお辞儀する。エレシは頭を上げた定臣に満面の笑顔を見せながらポレフの背中をぼんと叩き、挨拶を促した。

「俺はポレフ・レイヴァルヴァン！ポレフって呼んでいいぜ！」

「ああ、よろしくなポレフ」

そこで気がついた。

「あゝごめん、名前逆だった。サダオミ・カワシノでよろしく」

細かい所が今までの自分が経験した世界と色々違う。これは覚える事が多そうだなと覚悟した所に一言、了解をいれるとエレシが先程の質問に答え始めた。

話によるとこの世界での天使の認識は概ね、定臣が元いた世界と変わらないものだった。まずは一安心と胸を撫で下ろす。

天の国にいたと言い伝えられている。神秘的なもの。この辺りはほぼ変わらないな。

『舞い降りた者』に『幸福を訪らせる』

天使は主人公の夢や願いを叶える……うん、大方同じ感じだろうとその場で頷く。

しばらく顎に手を当ててうん、うんと頷いていた定臣だったがエレシが何かを言いたそうな顔でこちらを見ているのに気がついた。

「えつと、何かな？」

「申し訳ありません、サダオミ・カワシノ様……お恥ずかしながら私共は天使様を実際にこの目でお見受けするのが初めてなものでして……」

ああ、なるほどなるほど。そりゃいきなり天使ですって言われても信用できねーわなあ

どうしたものかと少し考えた定臣だったが、これならば信じてもらえるだろうと1つの方法に思い至った。

「ポレフ、ちょっといいか？」

「おう！」

ポレフの確認をとった後に定臣は天使翼を出現させた。もちろんここは信じてもらうためなのでできるだけ格好をつけておこうと両手を優しく開いてそっと目を瞑る。

さすがに忍法どろんどろんじゃ風情がねーしな。

「うお！羽生えた！」

「まあまあ」

驚く二人の声を無視してそのままポレフを両翼で包み込むと、不老不死を行使する。するとポレフを眩い光が一瞬包み込んだ。

「ん、これで信じてもらえるかな？」

翼を消してエレシの方に視線を送りながら確認するとエレシは定臣などお構いなしといった感じでポレフを凝視していた。

「ポレフ！」

呆然としていたポレフだったがエレシのその声で我を取り戻した。

「あ、大丈夫だよ姉ちゃん！なんか暖かかった！」

「そうですか……それでサダオミ・カワシノ様、今のはいったい？」
ポレフの声に安堵の表情を浮かべるも、エレシは不安気に定臣に
そう言ってきた。

不老不死の存在は隠しておこうと決めている。ここはそれっぽく
聞こえて嘘ではない言葉を選んで伝えよう。

ポレフ・レイヴァルヴァンは神に選ばれた存在。だからこそ神の
加護を得られる。天使は神の加護を代行できる。そう説明した後
に
「今はその加護とやらを行使しただけだよ」

と付け加えてめる。すると途端にエレシの笑顔が弾けた。

「やはりポレフは……なんと嬉しい事でしょう、こんな幸せな事は
ありません。ありがとうございます！サダオミ・カワシノ様！」

深々と頭を下げられた。なんとつかいちち丁寧すぎて肩が凝
りそうだ。

「え〜と、あのエレシさん？」

「エレシとお呼びくださいませ、サダオミ・カワシノ様」

「わかったよエレシ、んじや俺の事も定臣でよろしく」

「そんな！滅相もございません！」

「わかったぜ！定臣！」

ポレフ、元気いいな

正直これくらいの方が親しみやすいとぼんぼんと頭を撫でるとポレフは『やめるよ！子供じゃねーんだぞお！』などと照れ隠して頭をぶんぶんと振ってくる。それを『いけませんよポレフ！』などとエレシが笑顔で戒めている。

二人のやりとりを見ていると無性に小夜子に会いたくなってきた。本当に仲がいい姉弟なんだなあ

穏やかな笑顔で二人を見ているとポレフが満面の笑顔で右手を拳げながら話しかけてきた。

「定臣！お前の靴、捨てといてやったからな！」

やっぱりいじめられてたのか？言われて気がついたが確かに靴が無くなっている。悪ふざけを戒めてくれお姉ちゃんとエレシに視線を送ってみる。

「はい 丁重に埋葬してさしあげました」

待て待て待て、いくら世界が違つと言っても他人の靴をいきなり埋葬するとかどうなんだろう。この世界ではこれが普通なのか？

なかなかにおもしろい顔で定臣が首を傾げていると、エレシが慌てて説明を始めた。

「申し訳ありません定臣様！光臨されたばかりでこのラナクロアの事をまだ……」

様とか肩凝る！というか光臨って言わないで！泣きたくなる！

ラナクロア……この世界の名前らしい。エレシの説明を聞き終えた後に整理してみる。

エドラルザ王国、城壁、魔族にレイフキツザの村にライマ山……そりゃそうだよなあ、普通に考えて町や山にも名前はあある。カタカナ覚えるの苦手なんだよなあと口ずさみながらも思いだしたのは火の国で初めて劉生と共に食料の買出しに出かけた時の事だった。

「師匠、今向かってる村ってなんていう名前の村なんですか？」

「知らん。近くの村だ」

え〜……

「そ、それじゃその隣の村はなんと……」

「隣の村は隣の村だ」

「え〜……」

「む？どうした？」

「い、いえ、それじゃあその山は……」

「あの山はあの山だろう」

「わかりました……」

近くの村、隣の村、あっちの山、その山。こんなので大丈夫かと思っていたが実際、五年近く住んでいてなんの問題も無く過ごしてしまった。

まあ羅刹に会いに行く時に住んでいた場所が超ど田舎だったって事が発覚したんだけど。

いやぁ田舎っていいね！

師匠、元氣かなあなどと軽く笑みを浮かべながらも教えられた事を更に整理していく。

エドラルザ王国は世界統一国家ですべての人類が属している。人類は魔族に日々脅かされながら生きていた。その魔族から人々を守るために絶対防壁の『エドラルザの城壁』を完成させた。

城壁の内側には平和が約束される。エドラルザは完成した城壁を

城から少しずつ広げていき、国を囲み始めた。囲まれた土地と未だ囲まれていない土地。当然ながら城壁の外側には常に死が身近にある。

同じ国に属しながらも明確に別れた生と死。当然ながら不満はでる。それを解消するために国の法律で城壁の外側の特産品には魔法の行使が禁止されているのだとエレシは言った。更に特産品はその村や町以外の物の使用が固く禁じられているのだそう。

何を言っているのかわからないといった感じで首を傾げる定臣に微笑みかけながらエレシが続ける。

「要するにこういう事です」

そう言ってエレシが手をかざすと定臣の衣服が綺麗に修復された。

「これが魔法……？」

「はい 回復魔法の一種で物体の耐久力を人の生命力に置き換えて回復させるというものです」

衣服の町『ルツセブルフ』は数年前に城壁に囲まれたので魔法の行使が解禁されたのだという。

物体の耐久力を回復できるなら買い換える必要が無い。それを禁止する事で買い換える必要性を設けている。更に特産品として作られたもの以外の使用を禁止する事で城壁の外側の利益を確保しているのだという。

要するにあれか！金稼ぎやすくしてやるから城壁届くまでお前ら

我慢しろ！つて事なのか。

「なるほどな……それじゃ靴は城壁の外の特産品なんだ？」

「はい レイフキツザの特産品です」

「ちなみに特産地以外のを使うとなんか罰則あるの？」

「死刑です」

「埋葬していただいてありがとうございます！」

埋葬された天界産？な靴の代わりにエレシが靴を作ってくれらというので採寸してもらった。採寸が終わるとエレシはすぐに作業にかかる。家の脇に構えている工房へと向かって行った。

エレシを見送り家の中に残された二人は会話を繰り返して行く。まずはと、レイフキツザの住人ならば誰でも靴を作れるのかと聞いた定臣にポレフが誇らし気に答えた。

「そんなわけねーじゃん！特産品作れるのはマイスターだけだぜ！姉ちゃんはずげ〜んだぞ！」

マイスターとは特産品製作資格免許を所持している者の事らしく、

資格は国家資格とされ、非常に厳しい試験を通過する必要があるそう
だ。ちなみに資格所持者は特産品を製作できるが、完成した特産
品をそのまま一般人に販売する事はできない。

ならば特産品をどうやって手にいれるのか。それにはその専門
職があるそうだ。

エドラルザ王国の三大国家資格、特産品を作り出す『マイスター』
それを購入し、運ぶ事を許された『ポーター』さらに運び屋から購
入して販売する事を許されている『マーケットター』

その中でもマイスターの資格は群を抜いて取得が難しいらしい。

「へえ、エレシすげーんだなあ」

そう言うとポレフは満面の笑顔で大きく頷いた。本当に姉ちゃん
好きなんだなあ

ちなみに作られた特産品を指定の町や村の中で売る分には資格は
いらず、現地の販売者ならば誰でも可能らしい。そのためマイスタ
ーの作品は店を構える者とポーターとの間でいつも競争が行われて
いる。

特産地でしか買えない上に現地で競争負けると数割り増しで現地
の販売者から買わないといけないのか……それでポーターに旨み
があるのだろうか。

ポーターは他の地の特産品も所持している。城壁の外とはいえ他
の地の特産品を手に入れるにはマーケットターの資格を所持した上で
ポーターから買うしかない。

そのため、ポーターと現地のマーケットは予め会議を行い、相場をある程度決めた上で現地のマーケットから無資格販売者へと競り価格の交渉が成される。もし、この交渉が決裂しようものならば他の地の特産品の価格が軒並みに高騰する。

「うまくできてるんだなあ、でも他所の特産品を買って来て転売するのって別に資格無くても黙ってりゃわからないんじゃないのか？」

そこで力を発揮するのが『魔法』らしい。マイスター資格の取得難易度が高いと言われる所以は製作技術もさることながら、完成直後に行使が義務づけられている契約魔法の取得の難しさからなのだという。

「魔法には色々種類があるのはわかったけどさ、魔法見るの初めてだからいまいちピンとこないなあ」

マイスターが契約魔法を作品にかけると魔術刻印が浮かびあがるのだそうだ。契約魔法を行使した作品は正規のルートで販売されなかった場合、その場で消滅するらしい。

契約魔法をマーケット販売用書き換えられるポーター。その書き換えた魔法を一般人用書き換えられるマーケット。更にマイスターの契約魔法を直接、一般人用書き換えられる現地の無資格販売者。ちなみに無資格販売者の行使する魔法はその作品の作者であるマイスター立会いの元、専用魔法を行使しないと効果が現れないそうだ。

無資格とはいえマイスター立会いの元で行使されるその魔法を最低限、使えないと店を構えられないという。

「んじゃマイスターと無資格の販売者が組んで特産地外で作れば儲け放題じゃないのか？」

「定臣お前、天使のくせにせこい事、考えるんだな」

せこいって言われた。

マイスターが特産地外で製作する事は許されていない。マイスターは誇り高い職業でその誇りの元に絶対に不正なんてしないと前置きした後ポレフは言う。

「もし、違反したら即死刑だぞ！」

エドラルザ王国、何かと物騒な国だなと思いつつもとりあえずは特産品の仕組みは理解できた。

「ん？そういやさつき服を魔法で直してくれたけど、あれはよかったのか？」

「服のルツセブルフは城壁の内側だろおお！」

いやいや、だろおおと言われても困る。

城壁に囲まれた土地の特産品は指定解除されて誰でも作っていいし魔法をかけてもいいらしい。

誰でも知っているラナクロアの常識は俺にはハードル高いなあ

少しずつ覚えていくしかないかと頷いていた定臣に声がかかった。

「定臣様、完成しましたので一度、おめしになってください」

そういったエレシの手には濃い木目の上に綺麗な翼が彫り込まれている靴が一对。この短時間でそれを作ったのかと驚きながらも合わせてみる。

なにこの靴？

履いてみると吸い着く様に足にフィットする。その上に木製だといふ事を忘れさせるほどに軽い。

「すげーだろ！これがマイスターの仕事だぜ！」

誇らし気に鼻をこすりながらそう言ったポレフに頷いて応えると再度、エレシ方を向き改めてお礼を言う。

「ありがとうエレシ！これすげーいいよ！」

「気にいっていただいてよかったです。それでは契約魔法をかけますのでこちらへ」

定臣から靴を受け取ったエレシが手をかざす。すると眩い光が靴を包み込んだかと思うと真ん中に大きな文字が浮かび上がった。

ロゴみただいなあと違ってそれを見ていた定臣にエレシが説明を付け加える。

「この刻印はマイスターによってそれぞれ違うものが浮かび上がるのです」

ロゴだった。

エレシ作は特に人気が高いらしく、かなりの値段がつくとポレフが自慢気に言ってきた。

ブランド物か……

そんな高価な物をもらっていいのかと思いつながらも受け取ろうとするとスツと離された。

一瞬、おもしろい顔になった定臣にエレシが慌てて説明を加える。

「契約魔法を行使した後は正規ルートを経由した後にお渡ししないと消滅してしまいますので」

そういえばさっきそんな事を聞いた。今からレイフキツザの村へ行ってお得意様に受け渡し用の魔法をもらってきますと一言告げた後にエレシは家を出て行った。

自作できても正規のルート踏まないと他人に渡せないとか不便だなあと思いつながらも、定臣は会って間もない自分のためにその手間を惜しむ事なく買ってでてくれたエレシの背中を感謝しながら見送るのだった。

願い

一般人向けの魔法を行使された靴をエレシから受け取って上機嫌だった定臣だったが、不意に何かを忘れているのに気がついた。

何かを忘れていている気がするんだよなあ、覚える事が多すぎて少し混乱してるなあ

ラナクロア、エドラルザ王国、レイフキツザの村にライマ山、ルツセブルフ、それに城壁やら魔法やら魔族やら更にはマイスター、ポーター、マーケットに各免許ごとに行使される魔法……うん、うんと悩んでいると不意にポレフが話しかけてきた。

「なあ定臣！それで天使ってどうやって幸福を訪れさせるんだ？」

ソレダ

「ポレフ？先程、加護を頂いたでしょう？あなたはもう幸せなのよ？そうですよね定臣様？」

「ごめんなさい！忘れてました！その笑顔にごめんなさい！

「定臣様？」

「そ、そうだな！うん！そうなんだよそ、そ、そうなんだけどな？」
「？」

うつ……笑顔で首傾げないで……

「よ、よおし！靴ももらっちゃった事だし！ここは大サービスだ！ポレフ、お前の夢か願いを叶えてやるよ！」

強引すぎたか……？

これはさすがに怪しすぎるかとちらりと二人を見た定臣だったが

「まあ！まあまあまあ！」

「おお！お前いい奴だな定臣！」

声を揃えて喜ばれた。

まあ嘘じゃないからいいだろうと話を進める事にした定臣は、心の底から叶えたいと願っている夢や願いではないと駄目だと前置きした後ポレフに尋ねる。するとポレフは満面の笑顔で右手を挙げながら即答してきた。

「おう！んじゃ俺、自分の手で魔王倒してみたいぜ！」

ピンポン！

何言ってるのこいつ？と思った直後に脳内に効果音が流れた。

魔王で……魔族がいればその王様もいるって事かよ

心の中で軽くつつこみをいれつつエレシに確認の視線を送ってみるとエレシは両手を口に当てて涙を流していた。どうしたお姉ちゃん

「ポ、ポレフ、り……立派になって……」

だろ？などと自身満々で胸を張っているポレフにいささか不安を感じながらも、一応なんでそう思ったたのかを聞いてみる。

するとポレフは急に真顔になり、思いの丈を話し始めた。

城壁の中には仮初ではあるが平和がもたらされている。外にも各特産地には騎士団が派遣され警備はされている。それでも魔族の放った魔獣によって旅人やポーターの間では死人が絶えないのだという。

「そういうの嫌なんだ！皆が安全に暮らしたり旅したりできるようにしたい！」

この思いは本物だ。その瞳に宿る力を見てそう確信した定臣は改めて協力する事を心に誓うのだった。

さてさて、魔王を倒すと言ってもそんな簡単な事ではない。このポレフ・レイヴァルヴァンにそれが可能なのか。

改めてポレフを見てみる。ボサボサな茶髪に冴えない顔つき、前髪少し切れよというつつこみは置いておくとして歳の頃は大きく見積もっても十二歳前後といった所か。

？無理じゃねこのこれ？一瞬、そう思った定臣であつたが脳裏に小夜子の姿が過ぎる。

その見た目からは想像もつかない怪力少女。そして恵まれた天賦の才。

そう　人はそれを主人公補正と呼ぶ。

ポレフ・レイヴァルヴァンはラナクロアの主人公だ。そしてそのポレフは魔王を倒したいと言った。魔王を倒す存在は勇者と相場は決まっている。そこに思考が到達した定臣は口を開いた。

「って事はポレフは勇者になりたいのか？」

「勇者！それいいな！それになる！」

ここに、ラナクロアの勇者が誕生した。

「ってそんな簡単になれるかよ！」

じゃあどうやって勇者になるんだよと聞かれた定臣だったが正直、勇者など見た事はない。ここはRPGの知識で返答するしかないかと口を開く。

「そりゃあれだよあれ、王様に認められるしかないんじゃないの？」

「お前、頭いいな！」

素直すぎるだろうポレフ・レイヴァルヴァン。

「そうなんですよお」

エレシさん心の中を読まないでください。

そもそも騎士団などというものが組織されているエドラルザ王国である。そのエドラルザが勇者などを求めるだろうか。もう少し、エドラルザについて知識が必要だと判断した定臣はエレシに色々と質問してみる事にした。

「でさ、エレシ。騎士団って特産地の防衛してるって言うってたけど、魔王討伐とかには出かけないの？」

「……現状では難しいかと」

表情に影を落としながらエレシは説明していく。

数年前の大侵攻以来、魔族は南の崖より北へは攻めて来ていないものの、放たれた魔獣が城壁の外を今も闊歩し特産地の防衛と城壁拡大の護衛で騎士団は手一杯なのだという。

防戦一方か……それなら勇者の存在を認めてもらえるかもしれないなあ

組織ではなく単独でしかも有志で魔族と戦ってくれる存在は王国にとって利はあっても害はないだろう。

っていうかわざわざ王様に認めてもらってから勇者やる必要自体

が無いんだけどな。正直、適当に提案したらあっさりOKだされちゃった感が……

若干の後ろめたさを覚えつつも、それじゃエドラルザに行ってみようかと提案しようとした定臣だったが、入り口の方から聞こえてきた男の声によってその提案は阻まれた。

『エレシ殿〜！エレシ殿はおられるか〜！』

「あらあら、この声はドナポス様ですね……どうぞ、お入りください〜」

エレシのその声を聞いたドナポスが扉を開いて入ってきた。一目見た印象は大男。先程聞こえた野太い声に、掘りの深い顔立ち。モヒカンを短く切り揃えた髪形に、鎧に包まれた岩の様に屈強なその身体は茶褐色に染まっていた。なんというかイカツイです。

「お久しぶりです、ドナポス様」

「いやいや、やっと会いにこれましたぞ！エレシ殿！」

エレシに満面の笑顔を見せつつそう言ったドナポスが定臣に気がつき視線を送ってきた。それに気がついたエレシが笑顔で口を開く。

「ドナポス様、こちらはサダオミ・カワシノ様です。そして定臣様、こちらはエドラルザ王国、騎士団団長をされておられるドナポス・ニ―ゼルフ様です」

いきなり騎士団団長でできたよおい

心の中でつつこみをいれつつ慌てて挨拶する。

「初めまして！サダオミ・カワシノと申します！」

「これはこれはご丁寧に。ワシの名はドナポス・ニーゼルフと申す……それにしても美しい……いや！しかしワシにはエレシ殿が」

最後の方に何か聞こえたけど気にしない！

わかりやすい程にエレシに惚れている団長殿とエレシの会話を邪魔しない様にしばらく空気に徹していた定臣だったが、不意に真顔になったドナポスに思わず息を飲んだ。

「それで今回、遠征公布にワシが同行したのには理由がありましたな……」

ドナポス・ニーゼルフ。エドラルザ王国、守備の要にして騎士団団長。人は彼を『鉄壁のドナポス』と呼ぶ。

数年前の大侵攻を防ぎきった立役者にしてその後も数々の功績を収めた英雄。気取らないその人柄から民からの信頼も絶大らしい。

普段、エドラルザ城にて国王警備に就いている彼が城を離れる事は滅多にないのだという。

「エドラルザは打ってでる」

しばらくの間を置いてドナポスがそう言い放つ。その言葉の通りなら騎士団が動くのか？なら特産地の警護やら城壁拡大の防衛はどうするんだらう？首を傾げていた定臣をよそにドナポスが続けた。

「情けない事に今の騎士団にはそれだけの余力が残されておらん。それ故にエドラルザは勇者を募る事にした」

せめてもの誠意を見せるためにその公布に自分がついて回っているのだという。

勇者になりたい！そう言った直後に騎士団団長直々に勇者公募とか……ポレフってもしかして強運の持ち主か？

そう思いながらも、これでエドラルザに行く明確な理由が出来たと自分の言葉に後付けながらも意味がもたらされた事に胸を撫で下ろす定臣だった。

「俺もそれに応募するよ！」

しばらくエレシとドナポスの会話を聞いていたポレフだったが、痺れを切らして会話に割って入ってきた。

いきなり会話を切られて驚いたドナポスだったが、すぐに笑顔を作り、ポレフに視線を向けるとと大きく口を開く。

「それはありがたいな！ポレフ、しかし無理はするなよ？逃げる事も立派な戦略だ」

勇者を目指すのはいい事だが命だけは落としてはいかんと更に付け加える。そのドナポスの言葉からはポレフを馬鹿にした様な空気は全く感じられなかった。

この若い少年を一人の男として扱っている。これが英雄か……感嘆した定臣は思わず口を開いた。

「ドナポスさん格好いいですね！」

いや、本当に思った事を口走っただけだったんだが……

「な！？なななな！これがモテ期というやつか！いや！しかしワシには心に決めた人が！」

モテ期で……

危うく告白した事にされそうなので慌てて話を進める事にした。

「それでドナポスさん、どうすればポレフは勇者になれるのでしょうか？」

「いや……しかしな……うむ……これ程に美しい方がこの先ワシに……うむ……」

き、聞いてねー！

「ドナポス様？」

頭を抱えて困り始めた定臣に見兼ねてエレシがドナポスに声をかけた。

「は、はいいい！エレシ殿！これはその浮気などでは！」

都合の良い耳をしていらっしやる。

これは面倒だとエレシにその後の対応を丸投げした定臣は空気に徹することにした。

傍聴した話によると、次の雷の日より正式に勇者の公募が王城より開始されるそうだ。

って待て！雷の日ってなんだ！……まあ、話が進まないの、一先ずそのつつこみは置いておくことにする。

公募が開始されてから発表される王からの条件をクリアすれば晴れて勇者として認められるのだという。正式に勇者になればエドラルザ王国からの様々な支援が約束される。

とりあえずその雷の日までにエドラルザに辿り着いておいた方が良さそうだなあ

雷の日まであと何日あるのか。エドラルザの王城までここから何日でいけるのか。まだまだ知識が足りないと言に手を当てていた定臣をよそにエレシが口を開いた。

「すぐに向かいます」

すぐっすかエレシさん

マイスターであるエレシには仕事があるはずだ。自身の作品がブ

ランド化する程なのだから、作品を待ち焦がれている人も多いだろう。それを放置して良いものだろうか。そう考えを巡らせた定臣は口を開く。

「エレシ、仕事大丈夫なのか？ 依頼たまってるならポレフの同行は俺だけでもいいけど」

「依頼はすべて終わっています　それに……」

ポレフの同行者に私がいなかったかありえませんが。そう続けたエレシの目は笑っていなかった。

正直、怖かったです。エレシとポレフを引き離すような発言は禁句だなこりゃ

「エ、エレシも一緒に行こうな！」

「もちろんです」

すぐに出発するならレイフキツザの村までは一緒に行くと申し出たドナポスを少し待たせ、エレシとポレフは工房の方へと消えた。しばらくして背中に大きなリュックを背負って戻ってくるとエレシの前にポレフが歩み出て

「待たせたな！ 早速いこうぜ！」

と言い放つ。

その言葉遣いを笑顔で注意したエレシに『元気があって良いですなあ』と大らかな笑顔でドナポスが話しかける。そんなやり取りを

かわした後、それではと全員で家を出発した。

幸せな事にドナポスは言葉遣いを注意した時の、エレシの笑顔の奥の目が全く笑ってなかった事に気がついていないようだった。

俺とポレフは冷や汗流してたけどなー。

一行は他愛もない会話を交わしながら目的地を目指す。レイフキツザの村までは歩いて20分程の距離があるらしい。何だってこんな村はずれに家を建てたのかと尋ねた定臣にエレシがにこやかに答えた。

「カダの木の群生地が近いものだから」

カダの木の採集はポレフのお仕事ですから、近い方がいいですと付け加えたエレシの顔はものすごく幸せそうだった。利便性そっちのけでポレフ重視な所が如何にもエレシらしくった。ちなみにレイフキツザの村より南側のライマ山一帯はエレシの所有物なのだそうだ。

さすがは有名なマイスターってところなのか……実は金持ちだったのかこの家族。

そこで思いだした。

「なあエレシ、雷の日って何日後なんだ？」

ラナクロアの月齢曜日は地球とは若干異なるらしい。1日が24時間というのが同じなだけにものすごい違和感を感じる。

1年の始まりの月が火の月、次いで水、風、雷、氷、土と続き、二週目の火の月、二の火の月へと戻りそれが土まで巡って1年となる。1月は4週で月の流れと同じ順で曜日が巡る。ちなみに今日は水の月、二の氷の日らしい。なんとというか慣れのせいもあるんだろうけどわかりにくいです。

1年は12月、月は4週だが1週が6日か。若干、地球より月日が経つのが早いのかあ……次の雷の日から公募開始って事は今日から五日後だな。

「だからすぐに出発したわけか、納得した。ありがとな！エレシ」

「いえいえ、お安い御用です」

相変わらずに見てるこっちまで思わず笑顔になりそんな顔で微笑まれた。

それにしてもあと五日でエドラルザまで辿り着けるのだろうか。ちょっと知らせに来るの遅いんじゃないのドナポスさん！でもまあ公募の開始が雷の日からってだけで最悪、その日に現地になくても応募はできるのかなあ……

などと思考を巡らせていた定臣の視線の先にレイフキツザの村が見えてきた。

靴の特産指定地『レイフキツザの村』。なるほど、確かにここは靴の町だ。そもそもなんで『村』と呼ばれているのかという程に広い。そしてその広い町並みに所狭しと市が立っている。

ラナクロアの文字など当然、読めるはずもない定臣だったが、一見して靴屋だとわかる店が視界の範囲だけでもかなりの数あった。建物の造りはレンガ造りだろうか。どうせ違う名前の素材だろうけどまあそんな感じだ。

にしてもすごかった。

到着するなりに目の前にできた人ばかり。恐らくはエレシとの個人契約を望むポーターと無資格の販売者達が九割、残りの一割はエレシを口説こうとする男達だった。それだけならまだ良かったのだがその一割の一部が定臣にも流れてきたのだ。

ドナポスに会って少し思っていたが、このせいで自分の美女設定を完全に思いださせられた……やれやれと肩を竦めながら振り返る。

それにしてもエレシのぶった斬り具合がすごかった……

並み居る人だかりに満面の笑みを浮かべたまま

『嫌です』

の一言。

断られ慣れているのか、はたまたエレシの笑顔の奥の怖い瞳の存在に皆、気づいているのかはわからないがそれで一同は散っていった。

エレシにぞつこんなドナポスが怒ったりもするかと思っただが終始、笑顔で皆を見ていた。さすがは英雄と言いたい所だが先程の自分に対する発言の数々を見た後では、あれは自分の所有物を褒められた時のドナポスなりのどや顔なんじゃないかという気がしてきた。

そもそもポレフ以外、全く見えていないエレシである。ドナポスには一縷の望みすら存在しないと思うのだが。

『離れていてもワシの想いはいつもエレシ殿の側に』と、どこからその自信は湧いてくるんだという発言を残してドナポスは去っていった。次に会うのは恐らくは王城になるだろう。にしてもなかなか豪快なおっさんだった。

ドナポスを見送った三人は、そういえばお腹がすいたと食事をとる事にした。当然ながら手持ちがない定臣はエレシにおごられる事になる。申し訳ないと思いつながら異世界での食事は定臣にとって数少ない楽しみの一つでもあった。

「それで定臣様、どれを注文致しましょう？」

エレシのオススメ店へと入店した三人は椅子に腰掛け、テーブルを挟んで向かい合う。もちろんポレフの隣はエレシである。

文字が読めないからと代わりにエレシに音読してもらった定臣だったが、案の定、聞いた事もない謎の料理名ばかりだったので結局、注文はエレシに丸投げする事になった。

既にエレシに頼り慣れ始めている自分に内心で苦笑しながらも、料理が運ばれてくるのを待つ間にこれからの経路を知りたいと説明を求めることにする。ちなみにポレフは口をあんぐり開けてポツツと天井を見ている。大丈夫かこの勇者候補。

話によるとレイフキツザで護衛を雇い、ライマ山北側の麓にある装飾品の町『ミッサメイヤ』を経由し、そこから魔獣の巣窟『メイヨー平原』をずっと北に抜けた後、城壁を潜りエドラルザへと入るらしい。

魔獣って見た事もないけど結構、手ごわいのかな？

自身の実力を過信するわけではないが、さすがにそれなりに自信はある。内心で護衛など雇う必要がないのではと思っていた定臣だったが、まずはラナクロアの常識に合わせるべきかと発言を控えた。

しばらくして見た事も無い料理が運ばれてきた。火の国の料理は比較的、自分がいた世界に近いものだったのだがこれは……

伊勢海老の様な上半身から鶏の腿肉の様なものによきつと生えた、所々に黄緑色と桃色の水玉模様が浮かび上がっている謎の物体が目の前に3セット。

「それではいただきますしょう」

コレイタダクンデスカ

目の前にはナイフとフォークを上手く使い綺麗に食していくエレシと、そんな道具はいらぬと言わんばかりに手で豪快にちぎりながらむしゃむしゃと頬張るポレフの姿。何と言っかとてもおいしそうであります。

昔の人は言いました。郷に入れば郷に従えと！

「いただきますー！」

意を決して一口食べてみる。やだなにこれおいしい。

人間、現金なもので味さえ良ければ気になっていた見た目などどうでもよくなるものらしい。あつという間にすっかりと平らげってしまった定臣にエレシが笑顔で告げた。

「気に入って頂いて嬉しいです。これからの旅用にもう少し買っていきますね」

皿に盛られた料理を旅に持参するって……エレシならなんとかするのだからと根拠はないがその場合は納得する事にする。後で代金を支払う段階になってその答えは明らかになった。

代金と引き換えにエレシにビー玉の様なものが複数個、手渡される。何かと聞いた定臣にエレシは先程の料理を詰めてもらいましたと答えた。

話によると先程の料理に『保存圧縮』の魔法を行使してもらったのだという。それならばその背中に背負っている大きなリュックはなんとかならないのかと即座につっこんだ定臣だったが、案の定その魔法は料理以外には行使が禁止されているとのことだった。

利便性だけを追求すると、それにより需要が無くなる分野が出てくる。だからこそその制約。どこの世界でもそれは変わらないかと思考しながらも定臣は説明してくれたエレシに礼を述べた。

店を出るともう少し食料を買い込みますと、二人を残してエレシは他の店を巡り始めた。少し時間が出来たので早速、ポレフに今から行く傭兵雇用所の事を聞いてみる。

ラナクロアを旅するポーターや旅人にとって傭兵は必須の存在である。だからこそ長年、一つの職業として成り立っていたのだが、近年大きな動きがあったそうだ。

ポーターはそもそも生粋の商人である。その商人が命のためとはいえ多額の人件費を傭兵に払い続ける現状にいつまでも甘んじているわけがない。しかしながらその武力を誇示できるポーターは存在しなかった。

ポーターの誰もが待ち望んでいたその存在は突然現れた。

『クレハ・ラナトス』。ルツセブルフが城壁に囲まれるまではそこで服のマイスターしていたその男は、ルツセブルフが城壁に囲まれるや否やすぐにポーターに転職する。

何故、稼ぎが落ちるポーターにわざわざ転職するんだと当時は皆首を傾げたそうだ。酒の肴にされていた一人のマイスターの転職劇は後にポーターの在り方を大きく変える事となる。

初めは傭兵を必要としないポーターが存在するという噂からだった。傭兵を必要としないならば当然、他のポーターより格安でマイスターの品を提供できる。眉唾だったその噂は市場に出回る格安のマイスター品の存在が知れ渡るにつれて真実味を増していった。

そもそも金の匂いに敏感なポーター達である。噂を遡り出元があるクレハ・ラナトスであると突き止めたポーター達はこぞってクレハの元へと集まってきた。

始めからそのつもりだったのか、はたまた祭り上げられたのかはわからないがクレハは自分に着き従うポーター達を束ね、元々、自

分の配下にいた傭兵達を軸に結社を立ち上げた。

ポーター結社「サキュリアス」。ポーターと傭兵を社員として迎え続け、今でも巨大化し続けるその1企業に護衛を依頼する事がラナクロアの常識となるまでそう時間はかからなかった。

「それじゃ傭兵に依頼するんじゃないかって、そのサキュリアスってとこに依頼する感じかあ」

「そうだけ!……でも」

珍しく暗い表情を見せたポレフが続けて口を開く。

「あいつ嫌いなんだよなあ」

真っ赤なその人

何も考えてなさそうな……もとい、嫌いなものなど無さそうなポレフに嫌いと言わしめる人物。一帯どんな人なんだと想像してみる。

1、テンションがおかしい

2、なんか格好が変だ。

3、超偉そうだ。

どれもろくでもなかった。

しばらくして戻ってきたエレシと合流し、目的の建物を目指す。市が立ち並ぶ大通りを通過した先にその建物はあった。それも二つも。

見た感じには木造だろうか。どうせ建物限定で許されている都合の良い魔法が行使されているに違いない。そう思いながらもまじまじと建物を観察する。

右手に見える建物からは同じ造りながら年季を感じさせられる。対して左手に見える建物は造られて間もない感じだ。

エレシいわく右手が旧傭兵雇用所で左手がサキュリアスの支社になるそうだ。

にしても旧傭兵雇用所って閑古鳥鳴いてるなあ

「あれって営業してんの？」

「してますよ」

サキュリアスに大半の依頼がいく中でも、サキュリアスの営業範囲外へ赴きたい者は今でも傭兵雇用所を利用しているらしい。

大きな組織に属すの嫌う傭兵もいるだろうしなあ、上手く住み分けるのかあ……ってというか営業してるのに『旧』とかつけてやるなよなあ

それにしても見るからに流行っていない。サキュリアスの営業範囲とやらがラナクロア全土に及ぶのもそう遠くない時代のことだろう。そうなればラナクロアの古き良きかはわからないが伝統が一つ失われる事になる。

そついうのはどこの世界でもあるんだなあ

そう思いながらも定臣は昔、住んでいた世界での出来事。大手に需要を奪われて廃れていった近所の商店街の事を思いだしていた。

そんな定臣を他所にエレシはなんの迷いも無く左手のサキユリアス支社の扉をノックする。そもそも最初からその予定だったので迷う必要すら無かったのだが、定臣はそのエレシの背中をどこか切ない気な表情で見送っていた。

「ほら！定臣いくぞ！」

「あ、ああ」

ポレフにせかされてエレシの後続く。扉が開くとすぐに明るい男の声がかかった。

「いやっほおっう！エレシちゃん来たね！？来たよ来たよ！」

なにそのテンション。

うわ〜という顔で定臣は男に視線を送る。第一印象はちゃらそうなおっさん。ド派手な金髪にリーゼント、あきらかに他の人と違う赤色のスーツをはおり、その中にはシャツ的な何かは着込まれていない。そして何より目立つのはそのもみあげだった。

なにその格好。

思わず男を凝視したまま声を失っていた定臣に男が気付き声をかけてきた。

「なになになににこの美女！エレシちゃんの何？妹なんていたっ

「け？ははあん、俺様に惚れたな？」

俺様で……なるほどわかったよポレフ。最初に想像したポレフが嫌う人物像。すべてに合致したこの男こそが恐らくはクレハ・ラナトスその人なのであろう。

得意の愛想笑いでスルーしようとした定臣だったが笑顔がもの見事に引きつっていた。

「クレハ様」

困った様子の定臣を見兼ねてエレシが声をかける。するとクレハは瞬時に硬直した。

「あ、あゝはあゝ。ごめんごめん、俺様ちょっと調子にノリすぎた」

「はい」

クレハ・ラナトスも笑顔の奥の絶対零度の瞳の存在を知る一人らしい。

エレシはなんともいえない顔で二人のやりとりを見ていた定臣の方に振り返ると紹介を始めた。

「定臣様、こちらサキュリアス社長のクレハ・ラナトス様です。そしてこちらはサダオミ・カワシノ様です」

「ども」

「どもども、それでそのサダオミちゃんはエレシちゃんのお知

り合いの方かな？美女は決して忘れない俺様が見た事ないんだけど」
自分の正体を明かすべきか否か、一瞬、口をつぐんだ定臣を他所にエレシが即座に答える。

「私の従姉妹になります。珍しく遊びにいらしたんです」

俺の正体は秘密って事か。軽くエレシとアイコンタクトを交わした定臣はすぐにエレシに話を合わせた。

「小さい頃にちらつと会っただけだったから近くに寄った際に会いに来たんだよ」

あれ？今、クレハの笑顔が一瞬消えたような……

「そ〜かそ〜かあ！エレシちゃんの親戚って事はいずれは俺様の親族ってことだあ、困った事があつたら相談にのるよあ！」

気のせいか？

「ども」

クレハは短く返事を返した定臣に笑顔で答えた後に、真剣な面持ちでエレシの方へと振り向く。

「さてさて、挨拶はここまでだ。ここに来たって事はお仕事のお話かい？」

「はい 珍しくクレハ様がいらしたので助かりました」

「俺様、金の匂いには敏感でねえ、俺様の嗅覚がレイフキツザに行けと叫んでたのよ」

その嗅覚は見事に的中したとクレハは続けた。名マイスターであるエレシ・レイヴァルヴァンがレイフキツザを離れる。それはつまり、エレシ産の靴の生産が止まるという事。

ポーターの所属に関係無く、均等に販売する事を信条としているエレシの作品はサキュリアスといえど独占できない。生産が止まる事を事前に知っていれば儲け放題だとクレハは言った。

「なんだか私に靴を造って欲しくないように聞こえました……」

ずっと視線を落としてそう呟いたエレシをギョっとした顔で見たクレハは慌てて口を開く。

「ないないな、いよ！エレシちゃんの新作がでなくなるとか俺様、超苦痛！」

超とか言っなおっさん。

「知ってるでしょ？俺様、エレシ作品しか履いてないの！ラナクロアで一番、エレシ作品持ってるよ！？」

「それは存じておりますが……」

尚も俯くエレシを見て、クレハが更に焦る。

「かあ！このクレハ・ラナトス一生の不覚！いやいや！これマジな話しなだけどさあ、俺様、マイスターエレシに心酔してんの

「！」

両手を顔の前で合わせながらクレハは更に続けた。

「ほらほらおおーら！俺様のサクキュリアス相手に専属契約を完全拒否するマイスター魂とか！金であっさり堕ちるその辺のマイスターとは気概が違うじゃん！その美貌よりも俺様、そっちに惚れこんでるのよ！」

そういえばこのおっさん、元マイスターっていつてたなあ

だからこそ先程の失言を即座に認めての謝罪なのか。ふーんと納得している定臣を他所に二人のやりとりは続いた。

「本当！この通り！悪かった！」

そう謝り続けるクレハにちらつと視線を上げてはまた降ろすを繰り返していたエレシはクレハにいい加減、泣きはいつてきた頃合を見計らって口を開いた。

「私達、エドラルザ王国まで行く予定なのです」

ぼそつと呟いたエレシのその言葉に、一言一句聞き逃すまいと集音機のごとく耳を傾けていたクレハが即座に反応した。

「エドラルザ！エドラルザね！任せてよ任せて！代金とかもちろんとらないから！俺様のせめてもの謝罪！」

もしかしてエレシの奴……

「はい ありがとうございます」

そう言いながら顔を上げたエレシの顔は満面の笑顔だった。それを見た定臣は確信する。

全部、演技でしたね！エレシさん！

「いや〜！いやいやいや〜！機嫌なおしてくれてよかったよお！」

謀られた事に気づけよおっさん……

哀れむ様な目でクレハを見ていた定臣を他所に本人はひたすらに上機嫌だった。そこに扉をノックする音が響き渡る。

「どうぞ！」

上機嫌なままの声でクレハが入室を許可すると部下らしき女性が入室してきた。

「クレハ様」

「どうしたライアット、お前は若についていると言ったはずだが」

「はい、ですがその若様より至急、クレハ様へとお手紙を預かって

「俺は影俺は影姉ちゃんの影だからあいつには見つからないバレない影影影」

「どんだけクレハのこと嫌いなんだよポレフ！」

「思わず心の中でそうつつこんだ。」

「事情が変わった。エレシちゃん達、いつ出発だい？」

急に笑うのをやめたかと思うと声色を変えてクレハがそう口にする。ポレフの様子を見て思わず吹きだしかけた定臣だったがクレハのその声でなんとか堪えることができた。

「できればすぐがいいです」

エレシにどうするのかと視線を送る前にエレシはそう答えた。

それを聞いてにやりと笑ったクレハは、それならば好都合だとすぐに出発したい旨を申し出てきた。それにしても移動手段はどういうものを使うのだろうか。火の国の世界には乗り物という概念が存在しなかった。

「また走りとか嫌だなあと思いながらもクレハに促され、カウンターの脇から奥の扉の前へと歩く。」

「ちよつと待ったあ！」

そこで何やら呼び止められた。今のクレハの位置からはこちらの背中が見える。さすがにポレフの存在に気がついたようだと言ったと苦笑い

を浮かべながら振り返るとクレハは少し興奮した様子で口を開いた。

「サダオミちゃんサダオミちゃんサダオミちゃん！その背中の剣！それよそれそれ！」

剣の方かよ。ポレフ放置かよ。

「剣がどうかしたか？ポレフならそこにいるぞ〜」

これ以上この世界の主人公様を放置するとなにかとやばい気がしたので、とりあえず名前を口に出してその存在を確かめてみる。

「わ〜！わ〜！俺はいない！いないんだぞ〜！」

おもしろかった。

そのやり取りでやっとポレフの存在に気がついたクレハは『なんだ弟よ！いたのかあ〜！』と熱い抱擁をお見舞いする。

『だから嫌なんだよこいつ！』とか聞こえた気がするけどきつと俺のせいじゃない。気にしない、気にならない！

しばらく、ぶんぶんと頭を揺すられたり高い高いされたりと、おもちゃにされていたポレフだったが隙をついてクレハの手を振り解くとエレシの背後へと避難した。

よく逃げられたなあと関心しながら再度、視線を送るとポレフはエレシの背後で魂が抜けた状態で力尽きてぐったりとしていた。その口元からは念仏の様に『サダオミメサダオミメ』と謎の言葉が咳かかっている。

何言ってるかわからないなあ

今後の趣味になりそうなポレフいじりを終えて、満足顔になっていた定臣にクレハが再び剣の話しを振ってきた。

「その剣！いくらなら売ってくれる？」

さすが商人、見る目はかなりあるなと思いつつも絶対に手放せない旨を伝えると少し残念がった仕草を見せた後、クレハは感嘆の声を上げた。

「やっぱり！そうかそうかそうかあ！」

イチイチ暑苦しい。

この後、何に感動したのかを聞いてもいないのにひたすら聞かされた。

まず、定臣がエレシの家の近くに來たついでに会いに來たと言った事がひっかかったそうだ。当然ながらレイフキツザはサキュリアスの営業範囲内になる。そのレイフキツザの近くまで旅して來たという定臣がサキュリアスを利用していなかった。

傭兵なしでラナクロアを旅できる強者もいるにはいる。しかしながらこの女性にそれだけの事をやってのける事ができるのか。サキュリアスに所属してない傭兵を雇ったのかとも思ったが、傭兵に知り合いでもない限りそうするメリットが無い。

そこに思いが至った時、定臣の背中の大太刀に気がついた。

やはりこの女性は一人でラナクロアを旅していたのか……にわかには信じられないと先程の話を持ちかけたのだという。

そして定臣の武器への愛着を確認した。

職人にしろ武人にしろ一定の領域に辿りついた者からは必ずそういったこだわりが感じられるのだという。

なんとというか、このおっさんなかなかの職人氣質だなあ

正直、そういった気質が嫌いではない定臣はクレハのその言葉を褒め言葉として受け取る事にした。

「それはそうとおっさん、先を急ぐんじやなかったのか？」

『おっさんはないよお〜！』などとおどけて抗議して見せたクレハだったが、それもそうだと苦笑いを浮かべると奥の扉を開いた。

しばらく室内にいたために日差しが眩しい。少し目を細めた定臣だったが、すぐに大きく目を見開く事になった。

「なんじゃこりゃああああー！」

目の前には白い毛で全身を覆われた獣が三匹。体型は馬の様にも見えるがその大きさがとんでもなかった。

これは恐竜か？

定臣の第一印象である。

「なにつてメヘメヘだぜ」

「メヘメヘですね」

「メツヘメヘだぞ〜！サダオミちゃん〜」

そうかメヘメヘか……つて知るかよ！心の中でそうつつこみながらも恐らくはラナクロアの常識の1つなのだろうと納得する。

小声で説明してくれたエレシの話によると、ラナクロアの長距離移動はこのメヘメヘに車を引かせた移動方法をとる事が多いらしい。なるほど、この世界の馬的存在か。それにしても目が可愛いなメヘメヘ。

元々、動物好きな定臣は興味津々にメヘメヘを観察する。それを見たクレハが『俺様のメヘメヘは特別仕様なんだぜ！』と自慢話を始めたためにここでも数分の足止めをくらうはめになった。

「クレハ様、準備が整いました」

その女性の声でクレハの自慢話はやっと打ち切られた。振り返ると先程、ライアットと呼ばれていた女性とその背後には鎧に身を包んだ大柄な男が二名控えていた。

「ご苦労！それじゃ出発といきますか！」

そう言つとクレハはメヘメヘの背後に設置されている車の扉を開くと紳士的にすつと手を差し出して乗車を促す。さすがに大会社の社長だけあってその様はなかなか板についたものだった。

それにしてもその社長が慌ててエドラルザへ向かう理由が少し気になる。

「なあ、クレハ……でいい？」

「お〜け〜お〜け〜！そう呼んでくれると嬉しいぞおサダオミちゃん〜」

「ん、じゃクレハ、答えられるならでいいんだけど、エドラルザに何しにいくんだ？」

その定臣の言葉を聞くとクレハは満面の笑みを浮かべ、右手の親指をぐつとたてると大きく口を開いた。

「なあ〜に、少しばかり歴史を動かしていくのさー！」

レイフキツザの北、装飾品の町『ミツサメイヤ』を目指して定臣達はメヘメヘの引く車に揺られながらひた走る。話によるとレイフキツザからミツサメイヤまでの道中は山道ながら比較的整備されており、魔獣などの襲撃も稀なのだという。

なるほど、エンカウント率低めかななどと説明を求められても困る内容を思い浮かべながらも、先程から両脇を併走している二台のメヘメヘ車へと視線を向ける。

両脇の車には出発前にライアットの背後に控えていた鎧の大男が、二手に別れて乗り込んでいた。そしてライアットは……

なんのために車の真上に乗っかってるんだらうあの堅そうな人。

自身の頭上へと視線を向けた定臣に気がつき、先程から真横で謎の鼻歌を口ずさんでいたクレハが話しかけてきた。

「この布陣が護送の依頼には最適でねえ〜！」

『布陣』という単語に興味を惹かれた定臣は詳しい説明を求める。

ポーター結社『サキュリアス』。ラナクロアで最も信頼を獲得している大会社である。提供されるマイスター品は格安。護衛を依頼すれば成功率ほぼ100%。顧客のニーズに親切対応。お客様の安全第一ないつものにこにこにこりの親切花丸優良企業！

そこまで聞くと定臣はそれはもう何度も聞かされたと話をつた。事実、クレハが隣に乘車してきてからここまでの道のりはクレハの愛社精神の深さとつぎさを思い知らされるには充分な時間だった。

「つれないねえ」

おどけた仕草でそう言ったクレハに無表情で定臣が告げる。

「布陣と関係ねーじゃん、その話」

「あるよあるあるあるよ！」

「じゃ、聞くよ」

『無表情でも可愛いねえ』などと謎の呪文を呟きながらクレハは説明を始める。

何度も聞かされた護衛の高い成功率。その高い成功率をどうやって叩きだしているのか。それを知るにはまず、従来の傭兵達の手法を学ぶ必要があるという。

サキユリアスが設立されるまで人々は町を離れる時には雇用所で傭兵を雇っていた。その雇用方法がなかなか杜撰なものだったらしい。

予め傭兵登録さえ済ませていけばいつ、どの町の雇用所でも依頼を受ける事ができる。一見、便利な様に見えるこのシステムには穴があつた。依頼を受けたい傭兵は予め最寄の雇用所に待機している。そこへ依頼者が来店し、受付を済ませ護送が始まる。

その時、その場において依頼料に納得した傭兵が護衛に参加してくる。それはつまり、自身の実力に関係無く任務につけるといふ事。サキュリアスはまず、所属傭兵を各ランクで分ける事によって自身の実力に適した任務だけを遂行できるようにしたという。

傭兵と一口に言っても各傭兵にはそれぞれに得意分野というものがある。剣が得意な者、弓が得意な者、魔法が得意な者、体術が得意な者。それぞれの得意分野には当然ながら相性というものが存在する。

従来の雇用方法はその相性を完全に無視していた。相性を完全に無視されたバランスの悪いPT構成、実力の半分も発揮できずに何人も傭兵達が死んでいった。

サキュリアスはこれを徹底して見直し、各支部ごとに最適なPT構成の傭兵を常時配置しているのだという。

そして話の内容はようやく布陣の説明へと及ぶ。

従来の傭兵達の護送方法はメヘ車1台による単騎移動が主流だった。その1台に構成や実力を無視された傭兵達が詰め込まれていたのだという。身動きしにくい状況な上に単騎移動のため当然ながら魔獣の攻撃は集中する。

サキュリアスはこれを見直し、各任務に最適な布陣を敷き、傭兵の力を思う存分発揮できるようにしたのだという。

ちなみに護送に最適だという今回の布陣は、両脇に別の車を走らせその車には防御のスペシャリストを乗せ、攻撃を散らせた上で中

央の護送車の天井から魔術で敵を殲滅するというものだった。

そしてライトアット含め、他二名はエドラルザ行きの護送任務ではまず出勤する事がない破格のAランク傭兵なのだと言いながらクレハは自慢気に話をめた。

ん〜……偉そうに自慢気に話されたものの、要は適材適所な人材配置と利に叶った移動方法を確立したってだけ……だよな？

定臣は説明してくれたクレハに礼を述べつつもどこか納得しない表情を浮かべる。するとそれに気づいたクレハが口を開いた。

「簡単な事だよなあ〜！」

「え？」

心の中を読まれた気がして思わず声が漏れた定臣にクレハは続けた。

「傭兵側は皆、気がついてたんだよ。昔っからな」

しかしながら依頼者は素人ばかりだ。プロである傭兵達が自分達が便利だからと、そんな利に叶ってない手法を公然と行使しているなど思いもよらなかったのだとクレハは続けた。

「だから俺様を変えたんだよ。プロはプロの仕事をしなとねえ〜」

そう言ったもみあげは、もみあげの癖にちよつと格好良く見えた。

確かに、明らかにおかしい事がまかり通る事など世の中にはよく

ある事だ。

傭兵の昔の手法もその1つにすぎなかったのだろう。大手を振って当たり前の事と位置づけられていたその手法に異議を唱えて改革したこの男はやはりすごい人物なのだ。

おかしい事に気がつくだけの人間はどこにでもいる。しかしながらそのおかしい事に異議を唱え、行動できる人間はそうはいない。そう思いなおした定臣は自身の先程の安易な考えを戒めた。

「悪い、クレハ。あんたとサキュリアスは確かにすげ〜よ」

「だろうだろうだろう！俺様を愛してもいいんだぜ？」

こいつめんどくせー！

『急に無表情になって無視しないでよ！』などと聞こえてきている気がするが気にしない。とりあえずはそのサキュリアス自慢の布陣とPT構成とやらを見てみる。

右に大男、左に大男、そして頭上に堅そうなお姉さん、それに戦闘に参加するかは不明だがクレハ。

肉肉堅もみあげ

あほか俺は！役割で見ろ役割で！

盾盾魔もみあげ……

ふみふむ、確かにそれなりの速度で走るメヘメヘに襲いかかって

くる魔獣を振り払うには向いてる構成かな。にしてもライトさんのMPがきれたらどうするんだろ。というかMPってあるんだろ。うか。

クレハが面倒くさいので乗車以来、定臣そっちのけでポレフと戯れているエレシに聞いてみる。

「エレシ、楽しんでる所、申し訳ないんだけどまた質問いいか？」

「あつ……はい、なんなりと」

一瞬、ものすごく哀しい顔をされました。

「魔術って1日当たりに使える回数とか制限あるの？」

「個人差はありますが、何度も行使していると疲労が溜まってしまつて休むまで使えなくなりますね」

MPありました。

「そっかあ、ありがと。ポレフとどうぞ」

「はい」

そしてその日、一行はコトコトとメへ車に揺られながら特に魔獣の襲来も無く歩みを進め、日も落ちかかった頃に装飾の町『ミツサメイヤ』に辿りついた。

勇者の公募まで明日をあわせて後四日、先を急ぐ旅なので早朝にはすぐに出発する事にした一行は、クレハの計らいで支社の客室を借り受け、そこで一泊する事になった。

ラナクロア暦635年 水の月二の土の日

勇者の公募開始まであと四日

翌朝早朝、支社の前に集合した一行は軽く挨拶を交わした後、周囲の住人を起さないよう気を配りながら静かにミツサメイヤを出発する。

俺も朝、弱いんだがポレフのこれは……

視線の先には先程からずっとエレシに背負われてすやすやと眠っているポレフの姿。そういえば昨日は一人一部屋与えられていたにも関わらずエレシと同室していた。むしろエレシが同室していた。

勇者を目指すとか言ってもまだまだ子供だなあと軽く笑顔を投げかけ、ポレフの事は目が覚めるまでそつとしておく事にした定臣はこの先の旅路へと思いを馳せる。

ミッサメイヤを通過したって事は次は魔獣の巣窟とか言ってた『メイヨー平原』か。ここからが傭兵の本領発揮って事なのかなあ

恐らくはラナクロアの戦闘を初めてこの目で見る事ができると不謹慎だと思いながらも、若干、楽しみな定臣だった。

機会があれば俺も戦闘に参加しようかなあ。そういえばクレハって戦えるんだるか……

定臣の隣には昨日と同様にクレハが座っている。視線に気づかれるとなかなかにうざいので、小刻みに目だけを動かしてちら見する。

昨日はもみあげとど派手な格好に気をとられて気がつかなかったが、よく見ればその腰にはレイピアの様な細身の剣がしっかりと帯剣されていた。というかその謎の鼻歌なんなんだよ。

突き主体のフェンシングの様な剣術なのかなあ……

想像を巡らせる。思い浮かんだのは謎のテンションで敵をつつくクレハの姿。思わず吹き出しかけた定臣は慌てて視線を背後に送った。

その先には視界から消えかかってはいたもののミツサメイヤの町がまだ僅かに見えた。

危ない危ない……そういえば装飾の町とか言ってたなあ。通過するだけになっちまったけど機会があればゆっくり見て回りたいもんだなあ

恐らくは店の外壁を飾っていたモチーフの装飾品達が街頭に照らされて反射しているのだろう。遠目に見えたミツサメイヤはテラテラと輝いていてなかなか幻想的なものだった。

それから数時間、メへ車を走らせた定臣達を『あ、これは平原だわ』と一目でわかる風景が迎えた。

『ギョウウエエエ！』

魔獣達も迎えた。

先程から幾度も頭上から放たれる魔術によって魔獣達の断末魔が聞こえてくる。窓越しに見たその姿は狼を大きくした様なのから、どこに手足があるかわからない様なものなど多種多様だった。恐らくは一匹一匹に名前があるのだろう。当然ながら面倒なので定臣にそれらを覚えるつもりはない。

……それにしても

ゴウウウン！

魔術ってうっさいなあ

しかめっつらで天井に視線を送った定臣にクレハが気づき『ライアットは雷属性の魔術が得意だからねえ』。強いけどうっさいのと軽く説明をする。

納得した旨と説明してくれたお礼を述べつつも、定臣は自身の脳内メモに『雷はうっさい』と付け加えるのだった。

それにしてもこの轟音の中、未だに眠り続けているポレフはなかなか肝が座っている。

「にしてもエレシ、幸せそうだなあ」

半ばあきれながらもそう口にした定臣に対して、エレシは極上の笑顔を浮かべながら口を開いた。

「はい」

エレシがこの幸せそうな顔をしている時は、なるべくそっとしておいた方が良く既に学んでいた定臣はその先の会話を諦める事にした。

それから更に数時間、メヘ車は北へ北へとひた走る。さすがはサキュリアスA級傭兵といったところなのだろうか。メヘ車には既に百を超える魔獣が襲いかかった様に思うが、未だに接近は一度も許していないかった。

結局、その日は辺りを夜の闇が覆い始めるまで安定した旅路を進める事が出来た。この分だと何事も起こらずに目的地であるエドラルザまで到着しそうだ。そう安心し始めたその時にクレハがぼつりと呟いた。

「多いな……先で何かあったみたいだ」

そう呟いたクレハの視線の先には幾つもの明かりが見えた。

「あの明かりは今日、休む予定のサキュリアスの野営地なんだよお」

首を傾げた定臣にさり気なくクレハが説明をする。自分にはいちいち説明が必要なのだと理解し始めているクレハに内心で苦笑しながらもお礼を言う。そんな定臣に得意気な笑顔で頷きながらクレハは更に説明を続けた。

話によるとメイヨー平原にはサキュリアスが魔獣との激戦の末に建設した野営地が複数、存在するそうだ。その野営地を照らす灯りの数が想定していたよりも遥かに多いのだという。

「ありゃうちに所属してないポーターもかなり滞在してるなあ」

メイヨー平原で束の間の安息を得られる重要な拠点とあって、サキユリアスに所属していないポーター達の間でもサキユリアスの野営地はありがたいものだった。そのため、多少のぼったくり価格でも喜んで支払って休憩していくのだという。

「上手い事やってんなあ〜」

「だってあれ造るの大変だったんだよあ〜！」

それもそうかと頷いた定臣とクレハは互いに軽く笑顔を交わす、その後、真顔になりしばらく野営地の方角をじっと見ていたクレハが再び口を開いた。

「嫌な予感がするなあ〜」

『嫌な予感がするなあ〜』 そう言ったクレハの予感もどこへやら、強固な警備と柵を越えた先、野営地に到着した一行を迎えたのは灯りの数からさしずめ予想されていた賑やかな風景だった。

サキユリアスの社員と見られる男がクレハに気付くなり慌てた様子で駆け寄り、奥の一番大きなテントへとクレハ達を案内していく。

『ちょっと重要な会議しなきゃいけなくなっただんで〜』と定臣達と

一度別れる旨を伝えた後、去り際にクレハは空いているテントを指差して使うように言ってきた。

しばらくテントに滞在していた三人だったが、エレシがポレフを激愛な眼差しで見つめ始めたので邪魔するのも悪いと、定臣は野営地見学へと繰り出す事にした。ちなみにポレフはまだ眠っている。いい加減起きろ！馬鹿勇者候補！

テントを出た定臣の視線の先にはポーターと思しき男や、見るからに傭兵な格好をしている男が入り混じり、わいわいと酒を飲み交わしている姿。皆、一様に旅の疲れを労いあっている。

「うまそお〜！俺も飲んで〜！」

弱い癖に酒好きな定臣にはなかなかにたまらない光景だっただけに、思わずそう口をついて言葉が漏れる。

『おつ、姉ちゃんも一杯やるかい？』

不意に声がかかる。どうやら今の言葉が聞こえていたようだ。視線を送ると顔に赤みがかかったいい感じに酔っている恰幅のいいおっさんがこちらに声をかけてきていた。

「あ〜、飲みたいけど俺、金持ってないんだよね〜」

ぷらぷらと手を振って残念と肩を竦めて見せた定臣におっさんにはかつと笑いかけるとその大きな口を開いた。

「かつかつかつ！城壁の外で生きて出会えた仲だ！俺のおごりでないぜ兄弟！つと美女に兄弟つても変か！かつかつかつ！」

一見、馴れ馴れしいとも思えるおっさんの態度であったが、そういうノリが大好きな定臣はその申し出を喜んで受ける事にした。

「いいねえ、おっちゃんありがと！兄弟でいいよ兄弟で！」

そう言った定臣におっさんは例のビー玉の様な物を手渡すとぱちんと指を鳴らす、すると玉は一瞬、光を放ちその姿を変える。なにかと目を凝らした定臣のその手には冷えたビールジョッキが握られていた。

これが『保存圧縮』の魔法かあ、便利なもんだなあ

そう心の中で感想を述べた後、軽く一杯、飲み交わす。定臣の飲みっぷりが気にいったと、もう一杯よこしてくれたおっさんに定臣はお礼にと酌を買って出る。それに上機嫌な様子でおっさんが応える。そんなやり取りを交わしていた二人の周囲にはいつの間にか人だかりが出来ていた。

そもそも黙っていれば絶世の美女にしか見えない定臣である。遠目に見たその姿に自然と他の男達が群がって来るのも不思議な事ではない。

「姉ちゃん、俺にも酌お願いできないかい？」

「俺も俺も！」

「にしても美人さんだねえ」

男達は口々に定臣に話しかけてくる。これは酔っ払いのおっさん共が巻き起こす安易なトラブルでも発生しかねないと構えていた定臣だったが、口調は荒いものの、男達は最低限のマナーを弁えた綺麗な酒の飲み方のできる者達だった。

そして皆、一様に『城壁の外で生きて出会えた兄弟達』という単語を口にしていった。

一人のポーターと思しき男がこう言った。

「俺達や商売の上ではお互い容赦しね〜けどよお、商売抜きじゃ皆、同胞よつ。サキュリアスも野良も関係ね〜んだ」

一人の傭兵と思しき男がこう言った。

「明日もわからねえ命だ！はしゃげる時にはしゃごつやー！」

ああ、なんかこいつら好きだ。

ノリがいい中でも各々からは暖かさや確かな誇りが感じられる。ポレフが守りたいと言った笑顔。クレハが愛してやまない誇り。この時、定臣は任務ではなく心の底からポレフに協力したいと思った。

宴もたけなわ、いつの間にか仕切り始めていた一人の男の号令でその日はお開きとなった。皆、各々に明日の再会を約束し、自身のテントへと帰っていく。

いつもなら次の日は二日酔いで絶望する定臣であったが、解散前に二日酔い防止などという神魔法をかけてもらったため、明日への憂いは無かった。

定臣が気分良くテントに帰っていったその頃、サキュリアスの駐屯場となっている野营地の一番奥のテントでは神妙な面持ちで唸り続けているクレハの姿があった。

「それでクレハ様、どうなさいましょう?」

「わかってるわかってるって〜! せかすなよおライアット」

「ですがクレハ様」

「かあ〜! なんぞ俺様の嫌な予感はこのも当たるとかねえ〜! …この時期に横断とか今までに無かったっしょ〜!」

「ですが現実問題、マノフが横断中であるとの報告が入っています」

「わかってるわかってるって〜！滞在してる野良ポーターの異常な多さはそのせいだろうよ〜」

「間違いないかと」

クレハはふう〜と深い溜め息を吐いた後、天井を見上げる。そのまま目を瞑ってしばらく何かを考えていたが、目を見開き、視線を目の前のライアットへと戻すと何かを決意した様な顔つきになった。

その場に同席していたサキュリアスの社員一同はそのクレハの顔をよく知っている。一代にして世界一の大企業を創り上げたこの男がここ一番の時にだけ見せる顔。一同はクレハの次の言葉を固唾を飲んで待った。

「ラナクロアの常識をまた一つ変えるってのはどうよ？」

聖獣

ラナクロア暦635年 水の月三の火の日

勇者の公募開始まであと三日

「起つきろ〜〜！定臣い〜！」

翌朝の目覚めは最悪なものだった。二日酔いは魔法の効果とやらで一切ない。では何故、最悪なのか

「起きろっての！」

先程からポレフが起きろ起きるとやかましいのだ。ちなみにそのポレフは結局、昨日丸一日眠りこけていた。

聞こえない聞こえない。むしろ寝起きうつんぬんをこいつにとやかく言われる筋合いが無い。

「オレワペンギンカアアア！」

ポレフのその声とともに定臣はベットから叩き落とされた。

ええい！あえてシカトしてたのに実力行使かこのクソガキ！というか俺はペンギンか言うな！

定臣は心の中でそう叫びながらも子供に怒るのも大人気ないかと自制しつつ、むくりと起き上がるとぶすつとした顔でポレフをじっと見つめる。

「起きたか！天使って寝ばすけなんだな！」

ものすごい笑顔で見られた。お前が言うなというつつこみはとりあえず置いておくとして、まずはと定臣は口を開く。

「…………おはよつ、今日は元気なんだなポレフ」

「おう！元気だぜ！」

元気なのはわかったが挨拶には挨拶で返せよと心の中で呟いては見たものの、その笑顔に毒気を抜かれた定臣は指摘する気にはなれなかった。

「ポレフ」

背後から聞こえてきたのはエレシの声。

そう、俺は指摘する気は無かったんだが……

「ね、姉ちゃんおはよー!」

そう言ったポレフの声は既に上擦っている。これは振り向くまでもなく安易に想像できるなと思いつつも定臣はそお〜と振り向いた。

なんとというか怖かったです。

「定臣様、おはようございます」

ポレフに奥技『にっこり絶対零度』を見舞っていたエレシだったが、うっかりそれを直視して硬直してしまっている定臣に視線を戻すと、いつもの笑顔で挨拶を投げかけてきた。

「お、おはよっ」

「すぐに朝食の用意を致しますね ……ですがその前に少々お時間を頂いてよろしいでしょうか？」

背後から小声で『駄目って言うてくれ!すぐに飯食べたいって言うてくれ!』と懇願する声が聞こえてきているが気にしない!

定臣はにこやかな笑顔を作るとエレシに向かって口を開いた。

「いいよー!」

「ちょおおお!」

「ありがとうございます」

「ああああああああああ」

室内にポレフの悲痛な叫ぶ声が木霊する。定臣に礼を述べた後、即座にエレシはどこから取り出したのか包丁を6本ポレフに投げつけ、壁に張り付けにした。そこから始まったのは躑け（しつけ）という名の人間ダーツ。

「ポレフ、挨拶はきちんと」

「ああああ！ごめんごめん！ごめんなさい！」

「しなさいと」

「ぎゃああああ！」

「前々から言い聞かせて」

「はい！はい！聞いておりました！」

「いましたよね」

「ああああ！今かすったって！痛かったし俺！」

当然ながらポレフを溺愛するエレシが包丁を命中させる事は無かったのだが、あの笑顔から一言事に包丁を射出するその姿に定臣は戦慄させられた。

「それではいただきますしよう」

「いただきます！」

「うっひっく、うう、いただきますまずひっく」

あの惨劇から数分後、定臣の目の前にはまたしても得体の知れない料理、そして笑顔のエレシとその横にるるゝと涙を流し続けているポレフの姿。

「ほら、ポレフ！いい加減、泣きやめよ、な？」

あまりに可愛そうなので軽く慰めてみる。

「な……うっ、泣いてないやい！」

思いつきり泣いてんじゃん！

「ポレフ？」

エレシがまたしても咎める様にポレフの名前を呼ぶと小声で『ひっ』と声を上げた後、ポレフは硬直してしまった。そして涙を拭うとキリッとした顔を作り口を開く。ちなみにその時の目は死んだ魚の様だった。

「はははっ、泣いてました。すいません定臣さん。それとおはようございます。今日はいい天気ですね」

誰だよ！っていうかどこ見てるかわかんないよ！

大いにつっこみたかった定臣だったが隣のエレシが『まあまあ！なんていい子なのでしょう！』とか言っちゃってるのであえて黙っておく事にした。

朝の一騒動を終えた定臣達は、クレハ達と合流しようとテントを出る。

「ありゃ」

思わず声がでた。定臣達を出迎えたのはなにやら神妙な面持ちで集まっている昨日、同席した男達の姿。陽気な昨日の空気もどこへやら皆、一様に落ち込んでいるのが見て取れた。

「おはよっ！おっちゃん達」

「ああ姉ちゃんか、おはよう。昨日は楽しかったねえ」

「だね！無料酒飲ませてくれてありがとねっ！……でせ」

「ん？なんだい？」

「なんか皆、凹んでない？」

「ああ、その事かい……」

そう言っつて視線を足元に落とした後、おっさんはぼそつと呟いた。

「マノフの横断が今日も終わってなくてねえ……こつ、連日ここに足止めくらくとさすがに商売あがったりなんだわ」

マノフ？なにそれわかんない。

顎に手を当て首を傾げていた定臣を他所に男達の視線は奥のテントの方へと向いていく。そこに聞きなれた声が鳴り響いた。

『やあやあ諸君！ご機嫌いかがかな？なに？いいわけないって？そりゃ〜そうだ！未だにマノフの横断は続いでるんだしなあ〜！』

視線の先には真っ赤なスーツのもみあげのその人、クレハ・ラナトスの姿。野良のポーター達がいる手前なのかいつも以上にオーバードなパフォーマンスで手を動かしながら話している。

『そ・こ・で！この度、我がサキュリアスはラナクロアの常識をまた1つ変える事にした！』

周囲がざわめく。有言実行の男クレハ・ラナトス。それはもはや、ポーター達の間ではラナクロアの常識の1つと化していた。その男のその言葉は嫌でも注目を集める。一同の視線を一身に集めたクレハはにやりと笑みを浮かべると次の言葉を紡いだ。

『マノフっちをちよっくら走らそうと思つたのよ』

周囲がざわめく。皆、口々に『不可能だ！』とか『無茶だ！』とか言っているが、マノフがなんなのか知らない定臣にはそれがどういふ事か理解できていなかった。

『でさ、ここに駐在してるうちの戦力だけじゃちつと心もとないのよお！有志の参加者募集！』

軽い調子で続け様に放たれたクレハのその言葉に傭兵と思しき男達は皆、足元に視線を落とした。周囲を静寂が包む。

『はあ〜……やっぱりねえ』

予めこうなる事を予想していたのか、クレハはオーバーリアクションで肩を竦めて見せた。

「あ、俺それ参加するよ」

最初に静寂を破ったのは定臣のその言葉だった。恐らく定臣はマノフがなんなのか理解していてもそう言っていただろう。自分の事を兄弟とまで言ってくれた者達が困っている。それだけで自分が剣が振るうには充分な理由だった。

「ずっりい〜ぞ！定臣！俺が今それ言おうと思ってたんだぞ！」

次に続いたのはポレフだった。ポレフが来るといふ事は当然ながら

「私も参ります ポレフ、まるで勇者みたいで格好良かったですよ

「そう言ったエレシの顔は幸せそのものだった。」

『かあ〜！さすがエレシPT！器量が違うねえ！』

「クレハ様、エレシPTではございません。勇者ポレフとその一行でございます。お間違いない様お願い致します。」

『こりゃ悪かった！さあさあ！勇者ポレフに続く他の者はいないかい！』

またしても静寂。それ程にマノフというのは厄介事なのだろうと思いつながら定臣はぼ〜と視線を男達に送っていた。そこで一人の男と目が合う。昨日は話す機会こそ無かったが遠巻きにこちらをずっと見ていた片腕のその男に定臣は見覚えがあった。

『わかった……わかったぜ！俺も参加だクレハ！』

『お〜いえええ！隻腕の剛剣マリダリフが参加表明だ！他はいないかい！』

その後、しばらく募集し続けたクレハだったが他に参加者はいなかった。そして募集を締め切る旨を一同に伝えると皆は散り散りに自身のテントへと帰っていく。募集を締め切った後に『思った以上に集まった』というクレハの呟きを定臣は聞き逃さなかった。

その後、作戦会議を開きたいのでサキュリアスのテントへと指示された一行は歩みをそちらへと向ける。

にしても相当に厄介事なんだなあ、マノフってなんなんだ。

『な、なああんた』

ぼーと思考を巡らせていた定臣だったが不意に自身に投げかけられた男の声で意識を引き戻された。振り返った先には先程、参加表明してきた隻腕のマリダリフとか呼ばれていたおっさんの姿。

「ん〜？」

「お、俺の名はマリダリフ・ゼノビアっつんだ！あんたなんて名前なんだ？」

「あ、わりい。俺の名前はサダオミ・カワシノ。この先は同じPTなんだし、よろしくな！」

そう答えた定臣に赤面しながらも男は話を始める。主に自分の武勇伝を。話によると自分は今ここに滞在している傭兵の中では圧倒的な実力者なのだと言う。

なるほどなあ、クレハが名前を知ってたって事はそれなりに名を馳せた傭兵なんだろうなあ

得意の愛想笑いでその自慢話を華麗に受け流しながらも、定臣はそんな事を思っていた。

「そ、それでさ！あんた見たところ旦那も彼氏もないんだろ！」

そのマリダリフの声にまたしても意識を引き戻された定臣の顔は完全に引きつっていた。

待て待て待て！こいつは何を言おうとしてる！？その先は駄目だ！
言うな！

心の中でそう叫んだ定臣だったが既に遅かった。

「お、俺、この戦いが終わったらあんたと結婚したいんだ！」

「お前それ死亡ふ……」

そう言いかけて口をつぐんだ定臣は哀し気な表情のまま空を見上げる。そこには朝だというのに流れ星が流れていくのが見えた気がした。

ラナクロア最大生物『マノフ』。太古の昔より人々と共生してきたその生物は魔獣の巣窟と化したメイヨー平原で唯一、その個体数を減少させなかった種族でもあった。基本的に温厚な彼らだが自身の種に害を為す存在には種をもつての返礼が成される。

マノフが人に見せた初めての『返礼』。それは一匹のマノフを殺した魔獣という種に対して行われた。その事件は長い人の歴史の中でずっと草食動物であると位置付けられていたマノフに対する認識を大きく覆す事となる。

種をもつての返礼。マノフは決して魔獣を許さない。

それまで草木を主食としていたマノフはその食欲を魔獣へと向ける事となる。食欲の的からはずれた草木はその数を増やし、空気は澄み、大地は潤った。

魔獣を排除するマノフ。人にとっての益獣と化した彼らを聖獣と称える人々が増え、太古より守られてきたマノフ不可侵思想は近年、より一層高まってきている。

その不可侵の領域の1つに二の氷の月のマノフの横断が含まれているのだという。年に一度のマノフの大移動。一月かけてマノフはゆっくりゆっくりとメイヨー平原を横断していく。それはポーター達にとっての営業停止期間を意味する。

「でー！その横断が何故か水の月である今起こっちゃってるわけよー！」

軽く説明を終えたクレハはオーバーに両手を開くと、そうごちった。

「で？クレハよ、どうやってあの化け物を走らそうってんだ？」

「それなんだがな隻腕の」

マリダリフの質問に表情を硬くしたクレハは、一呼吸おいて今回のミッション内容を説明する。

「まずはこれを見てくれ」

クレハがそう言うと脇に控えていたライトアットが手をかざす。すると何も無い空間にモニターのように映像が浮かびあがった。

「できました便利魔法！」

いい加減、慣れ始めた定臣は特に驚く様子もなくそれをぼつと眺める。

「すっげ〜な！それどうやってだしてんだ！」

クレハの話に子供らしく、はしゃいで割って入ったポレフだったがエレシに『後で教えてあげますからね』と軽く戒められ悪びれた様子も無く、謝ると元の位置に戻った。

一同は押し黙って映し出された映像を見る。中には茶褐色の山が映し出されていた。

「山？」

思わず口を開いた定臣にクレハが軽く笑いかけると

「それが山じゃね〜んだよお〜！サダオミちゃん！」

そう口にする。

マノフの管理は国務であり、常に記録されていると前置きしたクレハは再度、映像へと視線を向ける。映し出された画面は丁度、アングルが切り替わり、先程、山にしか見えなかったものの全貌が映し出された所だった。

ただひたすらに大きなその姿は一面の茶褐色。自身の記憶にある生物に例えるならサイに似たようなフォルムに見える。ただしその目はクレーターの様に陥没し、首は異様に長く尻尾と同じ丈程もあった。

「これがマノフ……」

思わず絶句する。よく見てみるとマノフの足元に見えていた緑は山だった。

草むらだと思ってた……

考えが甘かった。凶暴なだけの生物ならば実力で軽く捻じ伏せる自信があった。しかしながらこの巨大さ・・・個人の實力等、無に等しい。例えば大人数で立ち向かったとして太刀打ちできるだろうか・・・

無言のままに顎に手を当て、思考を巡らせた定臣だったが、自身の中で何よりも譲れなかった感想をまずは口にする。

「可愛くねえええええ！なにその目！主にそこが特に可愛くねえええええ！」

「そこかよー！」

つつこんだのはポレフだった。

「いや〜いやいやいや、怖気ずかれるかとも思ったんだ・け・ど！
いいね〜、いいよいいよ、いいね〜」

拍手しながら嬉しそうにクレハがそう続く。

「んんう！クレハ様。作戦の説明をお願いします。」

咳払いと共に釘を刺してきたのはライトアットだった。

「すみません、どおおおおしても譲れなかったもので」

顔が怖いのでとりあえず謝ってみました。

「結構です。」

相変わらずに鉄仮面でした。

「サダオミちゃんからも笑顔を勧めてあげてよ〜」

「結構です。」

軽くおどけて見せたクレハに短くそう告げると、ライトアットは映像に向かって軽く手をかざした。

「あ〜、はいはい！説明しますよあ〜」

クレハのその声と同時に映像はモノフの足元へとズームアップし

ていく。

足元の山から黒い点が無数に飛び出している様子が伺えるところまで映像が拡大されると、一度ズームアップが停止される。

なんだろあれ

首を傾げた定臣を他所に更にズームアップ。

あ……

山の中から飛び出していた黒い点は魔獣の大群だった。その大群は止め処なくマノフに襲いかかっている様に見える。

「ご覧の通りこの映像は魔獣がマノフを襲っているところ」

確かに襲いかかっている。襲いかかっているのだが……

「びくともしてない？」

「そお〜そお〜そお〜なのよ！」

そう言うところクレハはマノフの外皮は鉄のごとく頑丈で更に遠目に見ると風景と同化して見える擬態効果も保有していると付け加える。

そのクレハの説明に『でけ〜カメレオンだなあ』と感想を抱いた定臣だったが、カメレオンがなんなのか説明を求められても面倒なのでここは口をつぐむ事にする。

映像は更に時を刻む。

マノフは相変わらず微動だにしない。しかしながらその足元には確かな変化が現れていた。

死屍累々。その生命力のすべてを攻撃に費やした魔獣の群れが次々に屍と化してマノフの足元に積もっていた。

巨大すぎるマノフも怖いけど死ぬまで攻撃をやめない魔獣も怖いなあ

定臣の素直な感想だった。

「マノフの堅強さは理解していただけだと思います。」

「ようし！いいぞライト。次だ」

「はい。」

そう言つとライトは再び映像にむかって手をかざす。

「魔獣の攻撃開始から三日後の映像です。」

さすがにあの猛攻を三日も受け続ければダメージは受けるらしい。映像に再度、映し出されたマノフの足元の外皮は剥がれ落ち、緑色の血液の様なものが流れだしていた。そこをここぞとばかりに魔獣が攻め続けている。

「性格わりいな魔獣」

率直な感想が思わず口をついてでる。

「魔獣の性格とか新しいねえ」

おどけた様子で定臣に答えて見せたクレハだったが真顔を作ると再度、映像へと視線を送る。

動かない。確かなダメージは受けているもののマノフは一行に動く様子がない。

「なあ、クレハよ……これを俺達に見せてもマノフを走らせる活路が見出せないのだが」

代わり映えしない映像に耐え切れず、最初に口を開いたのはマリダリフだった。

「もうちよい、も〜ちよっとだ……ようし！ストップ！」

マリダリフに軽くウィンクを送りながら映像を横目で確認していたクレハがそう告げると、ライアットが映像に手を添えて画面を停止させた。

「ほづら！ここ見てよここ！」

クレハが指差した先にはマノフの尻尾の先端部分に魔獣が飛びかかっているところが映し出されていた。

「ライアット」

「はい。」

ようやく耳鳴りがやんできたので目を開く、軽い抗議も混めて映像に再度、視線を送った定臣は驚愕して思わず目を見開いた。

「立った！マノフが立った！」

とりあえず言わないといけない気がしたので言ってみました！

画面の中のマノフは定臣が思わずそう叫ぶ程に立ち上がっていた。元が巨大なだけに立ち上がったその背丈は想像を絶するものがある。

先程の咆哮に加えてこの巨大さ、さすがの魔獣達も恐怖したのか攻撃の手を休め、一様に視線を頭上のマノフへと送っている。そんな魔獣達などお構いなしにマノフはゆっくりとその歩を進め始めた。

まさかの二足歩行……今、俺の目の前の画面の中でマノフがゆっくりゆっくりと歩……

ドシーン

けんのかいっ！

優雅に二足歩行を始めたと思われたマノフだったが、わずか三歩目にはその前足を地面へと降ろした。

一瞬、わくわくした自分が悲しかったよ！歩くならそのまま歩けよマノフ！

定臣の心の叫びをよそにそこで映像は一度、停止させられた。

「今の一連の流れでマノフが移動した距離は自然移動距離の三倍に値します。」

ライトがそう説明を加える。

「さてさてさうて！もう想像ついたらろう！今回の作戦はこれよ！こ・れ！」

「作戦もなにも尻つついて早く歩かせるだけだろ！」

思わずつつこむ。定臣のその言葉ににやりと笑い返すとクレハが口を開いた。

「そう言ってくれると気が楽なんだけどねえ……？だけ？とは言うがサダオミちゃん、マノフっちの巨大さを考慮しないといけないよお」

確かにそうかともう一度、映像に視線を送る。？それ？に気がついた定臣の背筋を冷たい汗が伝った。

マノフが先程歩いたわずか三步の足跡。その足跡は鮮明な藍色で彩られていた。その藍色から目を離せずにいる定臣にクレハが告げる。

「正解！魔獣の血の色は藍色」

あの巨大な足跡に何百の魔獣が潰されたのだろう。今回の作戦、一歩間違えれば自分達もあの彩りの中に加えられるはめになる。

「悪い、簡単じゃないわな………続けてくれクレハ」

軽く謝罪をいれた定臣に再度、にやりと笑いかけるとクレハは説明を始める。

絶対条件としてマノフの前方には布陣しない事。

マノフの擬態には二段階あり、1つは近寄れば視認できるものでもう1つは近寄っても視認できないものである事。

マノフは群れで移動しているが、先導役を一匹に定め、視認可能な一匹がその役目を担っている事。

マノフの歩みはクレハ専用メヘメヘよりも少し遅いのでいざとなれば逃げ切れる事。

マノフの敵として認識されてはいけない事。そして説明はどんなれば敵として認識されるのかという内容へと及ぶ。

「ライアット、最後まで一気に飛ばしてくれ」

「承知しました。」

ライアットが手をかざすと映像は一度、点滅中の時を進めた。

尻尾に攻撃を受けてからどれくらい時間が経過したのだろう。マノフの外皮はほぼ剥がれ落ち、辺りにはその血液がばら撒かれ、長かった尻尾はその丈を半分ほどまで短くしていた。

えぐ……

「ここまでされてマノフはまだ魔獣を敵として認識していない」

クレハは冷たい声でそう言い放つ。

「生物が死ぬ瞬間はいつ見ても気分が良いもんじゃないねえ……
ライアット」

「はい。」

クレハの指示で再びライアットが映像を止める。

「全員、耳に手を当ててくれ。あゝそれと目は絶対にそらさないで
やってくれ」

全員の無言の承諾を受け取るとクレハはライアットに目配せをする。

し、その死骸を食していると付け加える。

正直、びびった……とりあえず確認してみる。マノフを殺さない限り敵として認識される事は無い。加えてあの頑丈さ、殺意をもつて攻撃さえしなければまず絶命させる事は無いだろう。

後は……あの大きすぎる一步には要注意だなあ。下敷きになれば俺は兎も角、皆は即死だ。

そこで気がついた。

マノフは群れで移動している。視認不可な擬態中のマノフの一步は回避のしようがない。これはやばいなと記憶を探った定臣を違和感が襲う。

先程の映像で視認不可な擬態を解いたマノフ達は殺されたマノフの間近に出現した。つまり、殺されたマノフの間近にずっといた事になる。それなのに姿が見えない他のマノフの足跡が擬態を解くまで一切、確認できなかった。

これはどういう事だ……？

「視認不可な擬態中のマノフは物理干渉が一切無くなります。その特性から移動中の自然破壊を最小限に留めています。マノフが聖獣

と言われる由縁の一つでもありますね」「

質問しようとした定臣にエレシが小声でそう説明する。

エレシ……本気で心、読めるんじゃないのか……

「あ、ありがとう」

「いえ」

にしても物理干渉が無くなるって……まあ便利魔法が横行するこのラナクロアならばそれも納得するしかないかあ……

苦笑いを浮かべつつ顎に手を当てた定臣だったが、相手にするマノフが一匹だけでよいならばと、ほっと胸を撫で下ろすのだった。

その後、定臣達はクレハの指示でレイフキツザから乗車して来たクレハ専用のメヘ車へと、予め決められた組み合わせで乗り込んでいく。

ちなみに作戦の概要から乗車スタイルは、ここまでのライアットさながらに車の天井に乗るといったものになった。

右手のメヘ車へはクレハとライアットが、左手のメヘ車へはポレフとエレシがにこにここと乗り込んでいった。そして俺は……

「よ、よろしく頼む！」

NGワードを先程言っちゃったこの人、マリダリフ・ゼノビアとの乗り合わせだ。

『これはポーター結社サキュリアスによる社命を賭した作戦である！』 出発前にそう宣言したクレハの言葉に嘘は無かった様だ。

自分達の他に用意されたメヘ車は計十台。クレハはそれに野営地に駐屯していたサキュリアスの全戦力を的確に分散させ、乗車させていた。

野営地の防衛どうすんだろ……

後ろを振り返りながらそう心配した定臣は、クレハと今回の作戦に参加しなかったサキュリアスに所属していない傭兵達との間で交わされた『約束』など知る由しもなかった。

サキュリアスが少しでも力を発揮できる様、せめてものと野営地の防衛を買ってでた傭兵達とそれを快諾し、マノフを無事に歩かせる事と城壁の外で再び生きて再会する事を誓ったクレハとの兄弟の『約束』を。

それから半日程、北上し一行はマノフを目指す。道中、定臣の目の前には常時赤面なマリダリフがずっと黙って俯いていた。

話題を探した定臣はなんとなしに先程ついていけなかった『マノフの碧眼伝説』をマリダリフに尋ねる。それにマリダリフはどもりながらも丁寧^{ていねい}に答えてくれた。

【大いなる者の秘めたる碧眼現われし時、大地が激震し、大いなる災いをもたらせるだろう】

いつ、どの時代に作られた伝説かは知られていないと締めくくったマリダリフに軽く礼を述べた定臣だったが、その伝説に何やら嫌な予感を感じずにはいられなかった。

こつこつ予感って昔からはずれた例ためしがないんだよなあ……

半日後、クレハが乗車するメヘ車を先頭に部隊は目的地付近まで辿り着いていた。

『はいはいはい！皆、一旦ストップ！』

クレハのその声に各メへ車は一様に停止を始める。各メへ車は等間隔の距離を保ちながら移動していたのだが、全員が車外に待機しているために大声を出せば聞き取れるのだ。

それを証拠に道中、隣を併走していたポレフの車からは『わ！姉ちゃんやめろおお！』だの『皆見てるだろおお！』だのといったポレフの絶叫が木霊し、常に耳に入ってきていた。

『皆聞いてくれ！マノフっちの背後に布陣すればまず間違いなく安全に作戦を遂行できるだろう！で・も！マノフっちはあくまで生き物だ』

だから予想外の動きをするかもしれないと肝に命じておいてくれとクレハは締めくくる。そのクレハの言葉に全員が雄叫びで返事をし、いよいよ部隊は臨戦体勢へと突入していった。

再び進軍を開始した部隊の先頭はもちろんクレハのメへ車。そのクレハの傍らには当然の様にライアットの姿があった。マノフに遭遇する数分前、二人は軽く会話を交わす。

「なあにか言いたそうだなあ？ライアット」

「はい。」

「言いたい事があるなら言えよ、らしくねえなあ」

「では」

「おう」

「先程の事ですが、作戦開始前にわざわざ部隊を停止させてまで傭兵達の不安を煽るような忠告をされた事が気になりました。クレハ様は過去にその様な事をされた事が一度もございません。私が思うに」

『嫌な予感。まあ、だ治まってないなあ、いんだよなあ』

ライアットの声を遮る様にクレハがそう言い放つ。それに手馴れた様子で軽く目を閉じるとライアットは

「やはりそうですか。」

と続いた。

「まあなんだ、いつでも出れるようにだけはしといてくれ」

「言われるまでもありません。」

「まあ〜ねえ」

「……………」

「なあライト」

「はい。」

「たまには笑えよお」

「結構です。」

その頃、クレハのメヘ車から後方、最後尾寄りを定臣とマリダリフを乗せるメヘ車は走っていた。

あのクレハの言い様だとそろそろマノフと遭遇するんだろうなあ

……………

ぼんやりと空を見上げながら定臣は作戦行動前に見せられたマノフの映像を思いだしていた。

マノフかあ……………

どうにもあの青い瞳が頭から離れてくれない。

「にしてもざわざわするなあ」

「あんたもかい？」

定臣のその言葉に急に真顔になったマリダリフがそう聞き返す。

「なんか落ち着かないっていつか……嫌な予感がするんだよなあ」

「俺もそうだ。死線を越えてきた者だけが持ちあわせる勘ってやつだな」

「え？俺、死線なんて越えてないけど」

「……………」

急に黙り込んだマリダリフを定臣が不思議そうに眺める。するとマリダリフはみるみる内に真っ赤になって俯いてしまった。

ええいまたか！面倒くさいおっさんだな！

心の中でしみじみそう思いながらも仕方ないかと定臣は口を開く。

「どした〜マリダリフ〜（超棒読み）」

定臣の上辺だけの心配を受け、マリダリフは晴れやかな表情で顔を上げると拳を前に突き出して宣言する。

「サダオミ！お、おおお前は俺が命にかえても守る！！」

こいつはどれだけフラグ立てれば気がすむんだ……

思わず頭を抱えた定臣だったがマリダリフが『て、て、照れるなよ』などと言っちゃってるのでとりあえずは軽く手をあげてそれに応えるのだった。

定臣が頭を抱えていたその隣にはポレフとエレシを乗せたメヘ車が走っていた。

「姉ちゃん離せつてええええ！」

「まあまあまあまあ」

「もおおおお！」

「ふふふ、ポレフ？マノフに踏まれてはいけませんよっ。」

「わかってるよもう！」

「ふふふ」

そしていよいよ一行はマノフと遭遇する。近寄る事で視認可能なマノフを最初に発見したのは当然ながらクレハだった。

「おいおい……冗談だろお」

「これはまずいですね……」

『異常事態だ！全軍ストオオオッ！』

事態を把握したクレハが絶叫する。

なにやら異常事態らしい。クレハの叫びに即座に身構える。前方から順に急停止を始めた各メヘ車からは驚愕する声が各々聞こえてきていた。

自分のメヘ車が停止するまでのわずかな時間、定臣は思考を巡らせていた。

ゾクゾクするなあ……

背中に背負う大太刀『轟劉生』の柄をしっかりと右手で掴む、そういえばラナクロアに来てから初めて抜刀するなあなどと考える余裕くらいはあるらしい。それにしてもあの碧眼が頭から離れない。

「なんなんだよったく！」

定臣が思わずそう口にした時、定臣が乗車するメヘ車はマノフの擬態をかい潜り、遂に視認可能な領域へと侵入を果たした。

遙か前方、先程までただの景色にしか見えなかった空間に突如にして巨大すぎるその姿が出現した。

「!?!?……で、でけ〜！」

映像で見るのと実際に目の当たりにするとではやはり勝手が違う。首が痛くなる程にマノフを見上げる。ここにきて定臣の胸騒ぎは最高潮に達していた。

でかいでかいでかい！

脳内に道中にマリダリフから教えられたマノフの伝説が木霊する。

【大いなる者の秘めたる碧眼現われし時、大地が激震し、大いなる災いをもたらせるだろう】

後になってあの時のあの感覚は虫の知らせってやつだったんだと理解した。

すべてのメヘ車が停止する。辺りを静寂が包み込む。時間の流れが妙に遅く感じる。

目の前の巨大生物がゆっくりゆっくりとこちらを振り返る。頭上にそびえるその巨顔には

そこにあってはならない青色があった。

『……』

聖獣
II

遂にマノフに遭遇した一行。振り返ったマノフのその巨顔には、既に秘めたる碧眼が浮かび上がっていた。

待て待て待て待て！なんでいきなり戦闘モードはいつてんだよマノフ！

とりあえず心の中でつつこむ。思考は巡る。しかしながら肝心の身体が脳の命令を受け付けてくれない。恐らくは部隊全体がその状態に陥っているのだろう。マノフが振り返ったその瞬間、誰一人として動ける者はいなかった。

『……』

二度目の咆哮。ようやくマノフの呪縛から解き放たれた定臣は慌てて先頭のクレハへと視線を送る。それとほぼ同時にマノフは巨大すぎるその後ろ足を天空へと掲げた。

時の流れが妙に遅く感じる。これが噂に名高い走馬灯ってやつなのだろうか。

思わず視線を引き戻された定臣は、ゆっくりと振り下ろされるマノフの後ろ足を見上げながらそんな事を思っていた。

人はあまりに絶望的な状況に陥ると身動きすらとれなくなってしまふ。そんな中、即座に行動をおこせる人間に定臣はなりたかった。しかしながら確固たる実力を手にいれた今でも身動きをとれずにいる。

あほか俺は！ぼけ〜と見てる場合じゃないだろ！

「なんとかしなきゃな！」

そう口にするのと定臣は軽く笑みを浮かべながら剣気を身に纏う。魔法が存在するこの世界の住人は目に見えない力を敏感に感じとる事ができるらしく、定臣が発する剣気は周囲の注目を集めた。

大きく息を吸う。集中力を高めていく。

「よし！」

その声と同時に定臣は先程からしつかりと柄を握り絞めていた右手を引きずり上げる。定臣のその姿に周囲から感嘆の声が漏れた。

そうか！あれで足の裏ぐっさりと！

ドゴオオオオン！

定臣がそう結論づけたその時、周囲に轟音が響き渡る。

ありえない

手に持つその細剣を突き刺すかと思われたクレハは、事もあるうにマノフの足を殴り飛ばした。そう、突ではなく打で。

ああ、理由は簡単に想像できる……『このほうが格好いいだろう？』とか言うに違いない。頭痛くなってきた。

『なあにやってんのお！もって二十秒！すぐに他のマノフが出てくるぞお！全軍散開！野営地方面にはいくなよ！』

思わず頭に手を当てた定臣だったがすぐにクレハの声が耳に入り、我に返った。

あまりにクレハすぎて状況を一瞬忘れてた。

既に散り始めた他のメヘ車となるべく車間を開き、自分達も発進する。一瞬、出遅れた定臣を制し、メヘ車を発進させたのはマリダリフだった。

振り下ろされるマノフの足をじっと見据えながら定臣は覚悟を決めた。

「なあ、マリダリフ」

「な、なんだサダオミ」

数分後、何とかマノフの初撃を掻い潜る事に成功した定臣達は、野営地から遙かに西のメイヨー平原をひた走っていた。

「マノフってさ」

「あ、ああ」

「全部、俺らについて来てない？」

そう呟いた定臣達の背後には今も尚、幾数もの眩い碧眼が追跡して来ていた。

「言っなああああああああ！」

定臣とマリダリフがマノフに追われているその頃、ラナクロアの
主役ことポレフ・レイヴアルヴァンは泣いていた。

「だから勝てると思ったんだってええええ」

「黙りなさい。マノフに踏まれてはいけませんよと言いました。」

ポレフの正面には包丁を構えたエレシの姿があった。もちろん瞳
の奥には般若の形相を携えている。

「ちょっと踏まれただけじゃなか〜」

「……私が怒っているのは踏まれた事、それ自体ではありません」

「うっ……」

「ポレフ、あなたは先程……」

そう呟きながらエレシが思い出したのは、マノフに遭遇してから
今までの一連の出来事だった。

回想

目の前には予期せぬマノフの碧眼、これにはさすがに驚きを隠せ
ませんでした。しかしながら私達の前方にいらっしやるお方はあの

クレハ・ラナトス様です。

『クレハストラアアアアアアイク!!』

お見事なお手並みです。さてさて、のんびりしている時間はありません。マノフの次の一撃が来る前に愛しの弟、ポレフを安全な所まで避難させなければ……

「おおおおお！おっさんすげ〜な姉ちゃん！すっげ〜すっげ〜！」

「はい すごいですね」

不安にさせてはいけません。弟には常に笑顔を見せる様に心がけます。

弟に軽く笑顔で返事をした後、私はすぐにメヘメヘを操り、マノフの一撃を回避しようと思いました。

前方を走っていたサキュリアスの部隊はさすがと言えるでしょう。見事に統制の整った撤退をみせています。

定臣様の安否は心配するだけ失礼にあたるでしょう。あの方は天使様なのですから。

数秒後、遂にマノフの大群が姿を現しました。あまりの数にその初撃を回避できるか不安を覚えましたが、マノフの一撃は予想外の方向へと伸びていきました。

私はてつきり、初撃を回避したクレハ様の元へと降り注ぐものと思っていたのですが……

その時、エレシは散開しながらも精錬された動きをしていたサキユリアスの部隊とはあきらかに違う動きをし、部隊から大きく離れていった一台のメヘ車へと視線を送っていた。

視線の先のメヘ車に乗車しているのは定臣とマリダリフである。

あの動き……メヘメヘを操っているのはマリダリフさんですね。

荒さの中に確かな技術が光るその操作は部隊として訓練を受けた者とは異なるものの、幾つもの修羅場から生還し続けた彼、マリダリフ・ゼノビアの実力の程が伺えるものだった。

……お見事ですな

「ポレフ？メヘメヘはああやって操作するのですよ？」

その技術に感動した私は弟に見せようと呼びかけました。しかし、いつもはすぐに返事をする弟から返事がありません。

「……ポレフ？」

手綱に手を添えたまま、後ろを振り返った私は思わず目眩を覚えました。後ろに乗車していたはずのポレフの姿がありません。

『ねえちゃあああああああああん!』

そこにポレフの声が聞こえてきました。慌てて声のした方を振り向いた私を更に頭痛が襲いました。

「ポレフ！何をしているのですか！」

あの子はいつの間にメヘ車を降りたのでしょうか。私の戸惑いなど知る由もないといった具合に満面の笑顔を浮かべ

『ちよつとさつきクレハがやってたやつやってみる〜〜!』

と大声で叫ぶと一番近くにいたマノフへと向かって駆け出し出てきました。

当然ながら魔法を一切、学んでいないあの子に先程のクレハ様の真似事ができるはずがありません。

マノフの碧眼の矛先は定臣様の乗るメヘ車へと向かってはいます、しかしながらマノフには攻撃に使用している前足の他に定臣様を追跡している後ろ足もありますのです。

マノフにとつてはただの歩みに過ぎないその後ろ足の一撃だけでも十分に危険なのです。

それなのに……それなのに……そこに勇敢にも自ら飛び込んでいく我が愛しの弟ポレフ……

(注：馬鹿姉視点です)

先程までの心配もどこへやら、ポレフの後ろ姿を見つめながらエ

レシは恍惚な表情を浮かべていた。

そんなエレシなどお構いなしにポレフ・レイヴァルヴァンはただひたすらに猛進する。

ああ……なんて……なんて素敵なのでしょう……

(注：馬鹿姉です)

『いくぞおおおお！』

ポレフは雄たけびをあげながら遂に一番近くに見えるマノフの足へと追いつき、そして斬りかかった。素手なのに。

『ポオオレフウウウー！』

格好良いですよ！ポレフ！

『ストラア……』
ぷちっ

踏まれました。あの子、踏まれました。

必殺技？がいよいよ炸裂しようかという寸前に別のマノフの後ろ足が頭上から降り注ぎ、ポレフはもの見事に踏み潰されてしまい

ました。

回想終了

「自ら踏まれにいつてどうするのですか!」

「あれにはびっくりした!」

「びっくりしたのはこちらです!」

「さすがにちょっと痛かった!」

「当たり前です」

そう釘を刺すとエレシは懐に包丁をしまいこんだ。

「……あれ?」

てつきりいつもの人間ダーツが始まると身構えていたポレフは、
思わず拍子抜けした声を上げた。

「……結果的には残念でしたが、少し格好良かったですよ ポレフ」

(注：馬鹿姉です)

「だ、だろ?」

(注：馬鹿弟です)

「ええ、ええ でも危ないのでもうしちやいけませんよ?」

「男が負けたままで終われるかってんだ！次はちゃんと成功させるよー！」

優しいエレシの声色に安堵したポレフは思わずそう口にする。

「……………次？」

なあ定臣……………お前だけはわかってきてくれると思うんだ……………

エレシの声を聞いた後、突然、空を見上げたポレフは心の中でそう呟いた。

この……………

「姉ちゃんの花顔の裏に隠された鬼の形相をおおお！！あああああ！かすった！今かすったって！」

「ポレフ？」

「あつ！あああ！包丁やめて！やめてえええ！」

「花顔の裏が……………なんですって？」

「ぎゃあああああああああ！！！！！」

ラナクロア暦635年 水の月 三の火の日。

この日、ポーター結社サキュリアスによって行われた大々的な作戦の中、メイヨー平原に響き渡った絶叫はマノフによるものではな

かった。

何故かマノフに追跡され続ける定臣達。マリダリフの絶妙なメヘメへ捌きで回避し、一度は逃げきれぬかに思えたものの、定臣達とマノフの群れとの距離は徐々に狭まってきていた。

「まずいな……」

後方をちらちらと振り返りながらマリダリフがそう呟く。

作戦の大前提として乗車するメヘメヘの速度は、マノフの進行速度よりも速いというものがあつた。しかしながらその大前提はあくまでマノフの『進行速度』と比較した場合である。

後方のマノフが行っているのは『進行』ではなく『追跡』だつた。振り下ろされる前足にはすべてに殺意が込められ、通常の歩みよりも力強く地面に叩きつけられている。

轟音と共に振動する大地。並々ならぬ恐怖を覚えたのは人間だけではなかった。

当然ながら定臣は知る由もないのだが本来、メヘメヘとは温厚な草食動物であり、その性格は極めて臆病なものである。戦闘に不向きなそのメヘメヘにサキュリアスは徹底的な訓練を施し、如何なる事態にも対処できる様に鍛え上げ、様々な作戦に投与してきたのだ。

そして現在、背後で起こっている事態はサキュリアスが想定していた如何なる事態にも当てはまるものではなかった。

『ピュイイイイイイ！』

従順にマリダリフが操る手綱に従っていたメヘメヘが突然、声を上げながら走り乱す。一気に速度が落ちた事により、これまで懸命に凌いできたマノフとの距離が更に狭まった。

「やっぱりこうなったか！？……ちい！」

事態が更に悪化した事に苛立ち、思わずマリダリフが舌打ちする。そこに定臣が声をかけた。

「マリダリフ！」

「なんだ！ちょっと手綱に集中させてくれ！」

「それどころじゃないんだ！」

「どうしたー！」

「いいから見てみるって！」

そう言いながら定臣が指した指先は、先程からマリダリフが制するのにも悪戦苦闘しているメヘメヘへと向けられていた。

「わかってる！それを今、落ち着かせてるんだ！」

「だからそうじゃなくって」

「なんだ！」

「耳だよ！耳！」

定臣のその言葉に仕方なくもう一度、マリダリフはメヘメヘへと視線を送る。メヘメヘは恐怖から耳を伏せ、その身体をぶるぶると震わせていた。

「な？」

「わからん！耳がどうかしたのか！」

「どうかしたのかってお前……無茶苦茶可愛いじゃね〜かあああ！」

「……………しるかあああああああああ……！」

なにやら怒られた。この可愛さがわからんとは残念な奴だな……
まあ状況はかなり悪いか……しかし、なんだって全部こっちに来たんだ？

後方を振り返る。マノフとの距離は狭まっではいるものの、もうしばらくは保ちそうだった。

どうしたものかな……俺はともかく踏まれるとマリダリフは確実に死ぬよな？

いくらフラグを立てまくったからといって目の前で人が死ぬのは我慢できない。そう考えを巡らせると定臣は現状を打破しようと思考を加速させた。

マノフ、マノフ……碧眼……

背後に輝く複数の碧眼を見上げながら、定臣が思い出したのは作戦前のクレハの言葉だった。

『自身の種に害を為す存在には種をもつての返礼が成される』

害を為す存在……存在……一匹のマノフを殺した魔獣という存在を永遠の敵とみなしたマノフ……種族を敵としてみなす？

そこに考えが至った定臣はマリダリフを見た。

こいつは人間……俺は天使……マノフは全部、俺達のメヘメヘに向かって来た……

!?

まさか!

「どうした!なんか喋ってくれ!そっちの方が落ち着くんだ!」

「……わりいマリダリフ」

「なんだ!」

「俺は大丈夫だからこのメヘメヘ守ってやってもらえるか?」

そう言つと定臣は身を乗り出し、メヘメヘの頭を軽く撫でた。それを見ながら怪訝な顔を浮かべマリダリフが口を開く。

「意味がわからん!」

「マリダリフ、1つ質問いいか?」

「なんだ!」

「ここから一番近い町は?」

「……北にずっといけば鞆の町『シイラ』がある!」

「OK、んじゃその酒場集合でよろしく!」

「なに?」

「頼んだぞ！」

そう言うと定臣はメヘ車を飛び降りていった。

「ちょ！何やってんだサダオミ！」

マリダリフは慌てて後方に遠ざかっていった定臣のその姿を目で追った。

「あいつ……」

ただ者ではないとは思っていた。しかしながらこれ程とは……

視線の先には定臣の後ろ姿。大太刀を構えたその背中からは強者だけが放つ、独特の雰囲気を感じられた。それを感じる事ができるこの男もまた強者である。

放っておいても大丈夫そうだと判断したマリダリフは天を仰ぐと

「ふう……シイラの酒場集合だったな……」

そう呟くのがあった。

マノフの標的が自分である事に気がついた定臣は同乗するマリダリフを守るため、意を決してメヘ車を飛び降りた。迫り来るマノフ

の群れをじつと見据えたまま、定臣は大太刀『轟劉生』を持つその手に力を込める。

さてさて　　勢いで飛び降りてはみたものの正直、どうすりゃ
いいか検討もつかないなあ

「にしてもでけえ……」

頭上にそびえる幾数もの碧眼は只々、無慈悲にその距離を詰めて
きていた。

「にしてもなんだって俺なんだよ……」

思わず「」ちる。

俺が敵……天使が敵……

昔、天使がマノフを殺したって事だよなあ……

「知るかつ！俺には関係無さすぎるだろ！どっかの馬鹿天使がやら
かした事の責任を同種族だからって俺がとらんとならん理屈はない
だろ！」

そう口にした後、できる事なら話し合いで争いを回避したいもの

だ などと肩をすくめながら思いつつも、尚も一定のリズムを刻みながら迫り来るマノフを見上げる。

「まあ無理なんだけどね……」

大きすぎるその身体に思わずため息が出た。

そして、いよいよあと一步でマノフの巨足が定臣に届く距離まで迫る。その時になってようやく定臣は『殺す』覚悟を決めた。

師『轟劉生』の剣を扱う上での教えである『覚悟』。

それは殺す覚悟と殺される覚悟であり、敵が賭けた想いに対価を以って応じるといふ礼儀でもあった。

定臣はその教えの危うさも十分に理解した上で遵守しようとして心に決めていた。

だからこそ構える。殺す覚悟と殺される覚悟を胸に秘めたまま構える。

「碧眼は結構、可愛いぜ！マノフ！」

頭上に降り注ぐ最初の巨足に飛びかかりながら定臣はそう口にするのだった。

「ライアット！隊の調整にはあとどれくらいかかる！」

「はっ、もう三十分は必要かと」

「ちっ」

珍しく苛立った様子でクレハは天を仰いだ。遭遇から数分後、サキュリアスの部隊は野営地から北部に位置する所まで無事に逃げ果せていた。

確かに予想外の事態は起こった。しかしそれすらも彼の中では想定内のことだった。

「サダオミちゃん……」

そう呟きながらクレハが思い出していたのは、その目に焼きついた定臣達を乗せたメヘ車の後ろ姿と、それを真っ先に追っていたマノフ達の姿だった。

「くっそ……」

確かに初撃でマノフの敵意を自分へと引きつけたはずだった。

「はずだった……じゃねえんだよお！何やってんだ俺様！」

「クレハ様」

「なんだ」

「エレシ様とポレフ様はどうなさいましょう?」

「ああ　あの二人は放っておいても大丈夫だ」

「え?」

クレハの予想外の切り返しに思わずライアットが声を上げる。

「エレシちゃん達は放っておいても後で野営地で合流できる

それよりも早く隊を整えてマノフを追うぞお!」

「……了解しました。」

辺りには轟音が断続的に響き渡る。わずか一蹴で文字通りに終わると思われた定臣とマノフ達との闘いは今も尚続き、その色を死闘へと変えようとしていた。

最初に斬り抜いたのは円柱形。自身の頭上へと降り注いだマノフの足裏をくり抜く様にえぐりると、その肉片を微塵に分断する。

賭けは定臣の勝ちだった。

自らがくり抜いたその空間に入り込む事によってマノフの初撃を

た。そしてようやく外周まで山一つ分程の距離まで移動する事に成功すると、その身を大きく沈ませる。

それは師『轟劉生』との決闘の際に自らの意思で不発に終わらせた轟流剣術の奥義を放つ構え。

「まさか移動するのに、この技使うとは思わなかったなあ」

そう呟いた定臣の姿はその音声だけをその場に残し、遙か前方へと移動していた。

「成功、成功」

にしても身体にかかる負担が半端ない。足が悲鳴を上げているのがわかる。

『……』

どうやら足の心配をしている余裕は与えてくれないらしい。先程のマノフとは別のマノフにすぐ様、発見されたようだ。

「きりがねえ〜な」

再び降り注ぐ巨足を同じ様に回避する。そこでマノフの弱点に気がついた。

「こいつら群れで攻撃してる意味ね〜！」

巨大すぎるその身体に対して小さすぎる敵。攻撃できるマノフは

常に一匹だけだった。

定臣は劉生に教えられた事を思い出し、思わず笑みをこぼした。

かつて国斬りを果たした轟流剣術。

その際に複数の敵に同時に攻撃をされた場合、どう対処したのかと聞いた。定臣に劉生が示した答えはこうだった。

『む？敵とは常に一対一だろう。刹那に潜り込めぬ程、俺の剣は遅くない』

当時は無茶苦茶だと思ったその教えは、実力をつける度に納得できるものへと変わっていった。

気構えの話ではなく、実際にそうなのだとは理解できるようになった。

それを目の当たりにできた自分に思わず嬉しくなる。

「敵は巨大で複数　なれど闘いは常に一対一……轟流剣術・免許皆伝！川篠定臣！参る！」

無意識の内に定臣はそう口にしていた。

「嘘だろ……」

ようやく部隊を整え終え、急ぎ定臣達が逃げた先へ向かったクレハ達を迎えたのは一匹のモノフだった。

その身体には斬撃でつけられたと思われる刀傷が幾数も残され、その尻尾は中程で分断され、その歩みは通常よりも更に遅くなり、そしてその目に灯っていたはずの碧眼は鳴りを潜め、普段のクレーターの様なくぼみへと変化していた。

「くそつたれ！」

つまりそれは 標的である定臣達が殺されたという事を示していた。

「クレハ様……」

「作戦は成功した すぐに撤収だ。」

野営地に戻ってエレシちゃん達拾ってからエドラルザに向かうぞ
お

「……了解です。」

「あゝそれと」

指示をだそうとその場を去りかけていたライトアットをクレハが呼び止める。

「先に戻っています。」

「クレハ様はもうしばらく現状調査をお願いします。」

呼び止めたクレハの方を振り返る事なくライトはそう言い残すとその場を後にした。

「……………できた部下だねえ」

その背中を見送り、部隊が去っていったのを確認した後、クレハは天を仰ぎ絶叫した。

『ちつくしよおおおおおおおおお！！！！』

ロイエル・サーバトミン

サキュリアスによる作戦は一応の成功を収めた。奇跡的とも言えるわずか二名のみの犠牲者。賞賛に値するその結果すらもクレハ・ラナトスを満足させるものではなかった。

内心で打ちひしがれながらも代表を務めるクレハにそんな猶予は与えられない。湧き出した苦い後悔と屈辱を絶叫と共に吐き出すと、クレハはすぐ様にライアット達の後を追ってその場を去った。

「クレハ様、もうよろしいのですか？」

「OK、OK、……」

「はあ……全然よろしくないじゃないですか」

クレハの様子にライアットは思わず微笑を浮かべながらため息を

漏らした。

「……わりい、野营地までには」

「了解です。少し眠ってはいかがでしょうか？昨夜から一睡もされて
いないようですし」

「それはお前もだろお」

「クレ八様」

「……わあ〜ったよ、野营地まで隊を頼んだぞおライト」

「了解しました。」

その頃、野营地の入り口では作戦任務に出かけたサキュリアス所
属傭兵の代わりを買って出た野良の傭兵達が必死の形相で防衛にあ
たっていた。

「はあ……はあ……こんなきつかったんだな……」

「ああ……はあ……はあ……今、撃退したので何匹目だよったく！」

彼らとて魔獣との戦闘経験が豊富なプロの傭兵である。しかしな

がら彼らが経験してきた護衛と拠点防衛は勝手が違った。

「はあ……はあ……これあれだよあれ……精神的にきつい」

「はあ……はあ……ああ……っていつか……」

再び襲いかかってきた魔獣の群れを撃退し、傭兵達は顔を見合わせ声を揃えた。

『魔術師が一人もいね〜よ!!!』

拠点防衛の際、最も重要になってくるのは襲ってくる魔獣の陣形を如何に崩してから近接戦闘に持ち込むかという事だった。その点において魔術師を欠いた現状は圧倒的に不利なものと言えた。

「弓師はまだか!？」

「奥でまだ矢、作ってるよ!」

「なんで大量に作っておかね〜かなあ!」

「俺に言っつなよ!つてか魔術師ちゃんと雇えよなあ!」

「ば〜か!今時、野良ポーターやってる奴なんてドケチな奴ばっかだろ!」

「言ってるお前も野良傭兵だろ!」

「それはお前もだろ!」

「つたく！……ん？……なあ兄弟」

「どうした！」

「……あれ」

そう言った男の指差した先には一台のメヘ車。メヘ車は魔獣の巣窟であるメイヨー平原を走るには似つかわしくない、のんびりとした速度で野営地に向かってきていた。

「ありやあ……なんなんだ？」

「さあ……ん？あのメヘ車、サキュリアスの社章はいつてね〜か？」

あつげにとられて呆然としていた傭兵達を傍目に、メヘ車はとこと野営地入り口へと到着する。傭兵達の視線を一点に集める中、その扉を開くと中から一人の少年が出てきた。

『（……あのガキ確か昨日見たような？）』

傭兵達が首を傾げる中、少年ことポレフ・レイヴァルヴァンは後ろを振り返りながら口を開く。

「やっと戻ってこれたな！姉ちゃん」

「はい よく頑張れましたね ポレフ」

ポレフの声に優しい声色で応えながら銀髪笑顔のその人が下車する。その姿に傭兵達は表情を綻ばせながら声を揃えた。

『エレシ・レイヴァルヴァン!!!』

「あら……? 皆さんどうかなさいましたか?」

マイスター『エレシ・レイヴァルヴァン』。なにかと話題に上る事の多い彼女を知らない者は少ない。

マイスターはあくまで職人である。製作者に位置している彼女らだが、その職業柄、高度な魔法技術を要求されるため、必然的に戦闘魔術に優れた者が多く存在する。エレシ・レイヴァルヴァンがその最たるものである事は周知の事実だった。

『ということであって! エレシさん!』

「え〜と……何が『ということ』なのかわかりませんがお困りの様ですね」

エレシのその言葉を皮切りに傭兵達は自分達の置かれている状況を口々に説明し始める。一通りの説明を聞き終えるとエレシは笑顔で口を開いた。

「魔術師がいないって……わかりました もうすぐクレハ様達が帰還すると思います。それまで及ばずながら私が助力させて頂きます

」

『おおおおおおおおお！！！！』

エレシのその言葉に傭兵達は歓喜に沸いた。そんな傭兵達をよそにポレフは不機嫌そうに俯いていた。

姉、エレシ・レイヴァルヴァンが魔術を使う。それはポレフにとつて違えてはならない姉弟の約束を遵守しなければならないという事だった。

「ポレフ？」

「俺は見ちゃいけないんだろ、姉ちゃん」

「ポレフ……」

約束の内容は『エレシが戦闘魔術を行使する姿を決して見えない』というものだった。

「……ふふ、ポレフ？」

この時の姉ちゃんはなんか違ってた。今までどれだけ頼んでも戦闘魔術を使うところなんか見せてくれなかったのに……

「今日からは見てもいいです。そのかわり傭兵さん達をよ〜く見ているのですよ？後でちゃんと見ていたのか質問します。」

「…………え？」

エレシは驚いた顔で自分を見上げてきたポレフの頭にそつと手を添えると優しく撫でた。

ふふ…………驚いていますね。今まで見学を許可しなかった意味も、そして今、許可した事の意味もよく考えてください…………ふふ、すべては私のエゴですね…………

しかし

『来たぞ！構えろ！』

それでも私は

ゴウウウウン！

傭兵の合図に応える様にエレシの魔術が炸裂する。巻き上がった砂埃をぼ〜つと見つめながらポレフは心の中で先程のエレシの言葉を反芻していた。

姉ちゃんつえ〜……っっていうかなんで今日から見てもいいんだろ？

『傭兵さん達をよく見ているのですよ？後でちゃんと見ていたのか質問します』

脳内で姉の言葉を復唱する。傭兵を見る……うん、後で質問するって事は……

！？

答えられなかったら包丁飛んでくるじゃねえかああああ！！！

自分の置かれている状況に気が付いたポレフは大慌てで砂埃を再凝視した。

っっていうか姉ちゃんの魔術が発動した後に魔獣が生き残ってた事なんて一度もね〜じゃね〜かああああ！……っであれ？

砂埃が晴れるとそこには魔獣達の姿がそのままにあった。魔獣達は先程のエレシの魔術によって崩された陣形のままに勢いを殺さず入り口へと到達する。それに鮮やかな連携で傭兵達が応戦していた。

そっか……これを俺に見せるために……

「わかったよ！姉ちゃん！」

ポレフの瞳に力が宿る。言われた通りに傭兵を見る。過去にエレシが自分に与えた指示にはすべてに意味があった。それを考える。

考える俺！『ちゃんと見てた！うん！見てただけ！』じゃ後で確実に包丁が飛んでくる！

ない頭をフル回転する。傭兵を一人一人、目で追っていく。目の前では止む事なく近接戦闘が繰り広げられていた。それをただひたすらに見る。

傭兵と一括りに表されてはいるものの、当然ながら様々なタイプの傭兵がいる。ポレフはこの時、初めてそれに気が付いた。

あっちの奴は大柄で力押しタイプだな……俺の参考にはならないな。あつ、あっちの奴は小柄だけど、なんて言うか巧いなあ、参考にするならあっちの奴とそこの奴だなあ

気がつくともポレフはふむ、ふむと頷きながら必死に傭兵達を観察していた。そんなポレフの方を軽く振り向くとエレシは微笑みかける。

ポレフ……よくできました

「皆さん……次の群れから私がすべて引き受けます 手の空いた方から後方に下がってください」

透き通った声でそう宣言するとエレシの両手に光の粒が集まり始める。

ラナクロアの魔術師は詠唱時に想いを紡ぐ。エレシにとってその想いとはポレフへの愛だった。

ポレフ……あなたは進むべき道を定めました。後はその道をただひたすらに進んでください

「放ちます」

私はそれを全力でサポートしますから

カツー!!

メイヨー平原が輝いた。光源をエレシとしたその光が終息したその頃には、遠目に見えていた魔獣の一団は消滅していた。

「皆さん、お疲れ様でした」

『い……一発って……』

傭兵達が綺麗にドモリ具合までハモったその時、野营地の方から数人の傭兵が慌てた様子で駆け出てきた。

『待たせたな！矢！できたから！』

『遅すぎるだろおおおおおー！！』

慣れない拠点防衛に苦戦する傭兵達。悪戦苦闘する彼らを助けたのはマイスター『エレシ・レイヴァルヴァン』だった。エレシの放つ圧倒的な魔術。その威力に恐怖した魔獣達は退却を始める。

それから数刻後、野営地にはポレフ達と帰還したサキュリアス部隊の姿があった。

「エレシちゃんエレシちゃん助かったよお〜」

そう言ったのはクレハだった。

「いえ」

こちらとしてもポレフの良い勉強になりましたから

「にしてもまあさか魔術師いなかったとはなあ……うっかりうっかり、確認してなかったよお」

「それには私も驚きました……」

「申し訳ありませんでした！」

二人のやり取りにはとなった様子で口を開いたのはライアットだ。

「別に責めてるわけじゃねってライアット」

「ライアットさんが責任を感じる必要は無いかと」

「しかし……」

落ち込んだ様子のライアットの頭を軽くぽんぽんと叩くと、クレハは真顔になりエレシの方に振り返ると、深々と頭を下げた。

「言い訳はしない。エレシちゃん、すまない！」

「？」

小首を傾げるエレシを傍目に野営地内が騒然とする。野良のポーターや傭兵達をはじめ、サキュリアスの社員ですらクレハが人に頭を下げた姿を見るのはこれが初めての事だった。

クレハはそんな彼らを気にする事なく更に深く頭を下げると口を開く。

「……サダオミちゃんとマリダリフが……死んだ」

そのクレハの言葉に辺りは水を打ったように静まり返った。数秒後、一人の傭兵が涙ながらに口を開き、この静寂は破られる事となる。

『う……うそだろ……サダオミ……マリダリフ……』

クレハはそう言った傭兵の方に向き直り丁寧に頭を下げると口を開く。

「……すまない」

それは何よりも確かな肯定だった。重い沈黙が続く。数秒が数時間を感じる。耐え難いその静寂を打ち破ったのは一人の少年だった。

「定臣が死ぬわけね〜じゃんだってあいつは」

「ポレフ！」

天使だから。そう口にしようとしたポレフを制する様にエレシがその名を呼んだ。

純粹に皆を安心させたかったポレフと、愛しい弟が嘘つき呼ばわりされることを恐れたエレシ。二人は顔を見合わせるとエレシが首を横に振り、それにポレフが軽く頷くというやりとりを交わす。

二人のそんなやりとりをクレハはただじつと辛そうに眉をひそめて見守っていた。その胸中に秘められていたのは先程見たマノフの姿。背筋が凍りつく様な多数の斬撃痕に、ものの見事に切り落とさ

れた尻尾。そこに魔術を行使した後は一切、見られなかった。

斬撃の跡から察するにマノフと戦闘を繰り広げたのは恐らく定臣一人。あの化け物とあそこまで無魔で渡り合ったというのだ。親戚にあたるポレフがその実力を信じて疑いたくないのも頷けると内心で納得しつつも、クレハはその彼女を死なせてしまった申し訳無さに苛まれていた。

【すまない】

再びそう口にしようとしたクレハよりも先にエレシが声を発した。

「皆さん、定臣様もそしてマリダリフ様も城壁の外に生きる人間の一人です」

エレシのその言葉に皆が一樣にはっとした顔つきになる。

エドラルザの城壁の外の生きる者にとって死は身近な存在だ。明日をも知れぬ彼らにとって時間は常に濃密なものだった。それ故に感情はより深くより短く表現される。

出会えば家族の様にはしゃぎ、別れる時は再会を誓いつつも今生の別れである様に哀しむ。そして誰かに死が訪れたその時は……

『天を仰げ！』

クレハのその声を合図に全員が空を見上げた。

『俺様達はまたかけがえのない兄弟を失った。彼女らは俺様達の明日のためその身を犠牲にしてくれたのだ。哀しみ俯くのは終わりに

しなければならぬ。哀しみは今、この場をもって捨て去り、感謝はこの身が滅ぶその時まで胸に刻み込め！」

『おおおおー！』

クレハの呼びかけに全員が声を揃えて応じる。

『目は決して瞑るな！敬礼！』

じつと空を見据えたままに各自めいめに拳を軽く握り、その手を胸に添える。その胸中にあるのは昨夜の宴で見た二人の元気な姿。その敬礼は自然と流れ出た涙の乾いた者から解除され、一人、また一人とその場を去っていった。去り行く彼らは誰一人として決して後ろを振り返らない。それが城壁の外に生きる者達の礼儀だった。

クレハとライトを最後に野営地にいた者達は各自のテントへと帰っていった。マノフの移動に成功した事を知った彼らは明日の出発の準備に早速追われ始めたのだ。その背を見送り、その場に取り残されたポレフとエレシは会話を交わす。

「俺、こういうの嫌なんだよなあ」

「仕方がないです。皆いつまでも哀しみに囚われてはいられませんから」

「にしてももうちょっとこう……あゝっもう！うまく言えないや！」

「ふふ……ポレフは悲しい事を悲しむ時間と余裕を皆にあげたくて勇者になるのでしょっ？」

エレシのその言葉にポレフはわしゃわしゃと頭を掻いていた手を止めると、満面の笑顔を作り口を開いた。

「そう！それだよ！姉ちゃん！俺、がんばるよ！」

「はい」

ああ……ポレフ……なんて良い子なのでしょう……

激愛モードが発動仕掛けたエレシだったが、ぎりぎりで踏みとどまると軽く天を仰いだ。

「どうしたの？姉ちゃん」

「いえ……」

天使様な定臣様がまさか死ぬ事は無いと思えますが……大丈夫なのでしょう……

エレシが定臣の心配をしていたその頃、定臣とマノフの激戦が繰り広げられたその場所はようやく巻き起こった砂埃が納まり、視界が晴れつつあった。

その様子を近くの丘の上からじっと見据える少女の姿が一つ。砂

埃が完全に納まったその場所を見つめると少女は深くため息をついた。

少女の視線の先、つまりは定臣とマノフ達との決戦跡地には巨大なクレーターが複数残され、元が平原と山で織成されていた美しい景観であったとは到底思えないものへと変わり果てていた。

しかし、この少女のため息の原因は他にある。

「はあ……結局、しょうもない死に方しちゃって……」

野営地に戻ったクレハは皆に定臣とマリダリフの死を知らせた。深い哀しみに包まれつつも彼らは後ろを振り返らない。城壁の外に生きる者としての誇りと尊い犠牲への感謝を胸に彼らは明日に向かって歩き出す。

一方その頃、定臣とマノフ達との決戦跡地を見下ろせる小高い丘の上には一人の少女の姿があった。

「はあ……結局、しょうもない死に方しちゃって……」

つまらなそうな顔でそう呟いた少女が思い出していたのは、数刻前まで眼下で繰り広げられていた女性剣士とマノフの大群との壮絶な死闘だった。

眼下に広がる無数のクレーター。やはり先程まで自分の目の前で起こっていた出来事は夢ではなかったのだ。そう再認識すると少女は再び口を開いた。

「なんだったのよ……もう」

はじめは混乱した。知識の上でしか知らなかったマノフの碧眼が発現していた事も理解できなかったし、不可侵であると教えられていたマノフに対して部隊を展開している人間がいる事も理解できなかった。

次に驚愕した。咆哮と共に先制したのはマノフだったのだ。自分が知りうる知識の中で、マノフが人に害を加えた事など過去に一度も無かった。

その次は啞然とした。部隊を標的としていると思っていたマノフの大群は事もあろうに一台のメヘ車に執着し、その後を追っていたのだ。移動魔術を駆使しつつ必死に後を追った彼女は更に信じられないものを目の当たりにした。

それは一人の女性剣士の姿。

身の丈よりもある大太刀を携えたその女性は何を思ったのかメヘ

車から飛び降りるとマノフに向かって構えなおし、自ら飛び上がりその足に斬りかかった。

それを見て思わず息を飲んだ彼女だったが次の瞬間、その女性剣士はものの見事に踏み潰されてしまった。

これは見てはいけないものを見たと目を背けた彼女だったが、直後にマノフの悲鳴にも似た雄たけびによってその視線を引き戻された。

思わず目を疑う。

再び大きく振り上げられたマノフの足の下には、その全身を返り血で緑に染めながらも力強く剣を構えたままに女性剣士の姿があった。

驚いた彼女はすぐさまに自身に視覚強化の魔法を施し、見間違いでないかを確認した。疲労の度合いが高いために敬遠されがちなこの魔法を、惜しむことなく使った事からも彼女の混乱具合がみとれる。

『美しい』

それが視覚強化により、戦闘の様子が手の届く距離で観察できるようにになった彼女の最初の印象だった。

思わず目を奪われる。目の前の女性は確かに戦闘をしているはずなのだ。しかしながら彼女が抱いた印象はやはり『美しい』だった。

舞う様な剣技。その1つ1つの所作にはすべてに意味があり、そ

してそのすべてが美しかった。

気がついた頃には彼女の視線の色は『観察』から『観賞』へと変わり、そして遂には『鑑賞』へと変わっていった。

時を忘れひたすらに彼女は鑑賞する。無意識下で彼女はその女性剣士の剣技に恋をしていたのかもしれない。

それを証拠に鑑賞する瞳には熱がこもり、名前も知らないその女性剣士の事をすっかりと応援し、そして何よりも……一目に見て絶望的なその状況下で女性剣士の勝利を信じて疑わない様になってしまっていた。

恐らく彼女は勝つのだろう……

彼女はその希望的観測の更に先を妄想し始めた。

あの女性剣士はどれだけ鮮やかなとどめを披露してくれるのだろうと。

彼女の期待を裏切る形で事態は数分後に急転する。戦闘は必然であつた女性剣士の敗北で幕を閉じた。

「そんな事で……？」

死闘の顔末を見守つた彼女は思わずそう呟いた。

眼下では女性剣士の死を確かめるかの様にマノフがその巨足を振り下ろし続けている。巻き起こった砂埃をじつと見据えながら彼女は先程、起こつた事を確認する様に思い出していた。

それは女性剣士が死ぬ数秒前の出来事。一匹の幼いメヘメヘが山より駆け出してきた。

マノフが移動しているのだ。目に見えていないだけで山中では数多くの野生の動物が、その巨足に踏み潰されている事は容易に想像できる。別段、気にとめる必要もないと再び彼女は女性剣士の鑑賞へと意識を集中させた。

再び視界に捕らえたその女性剣士は明らかに狼狽していた。

その視線の先には先程、山中より飛び出してきた幼いメヘメヘの姿。女性剣士が次の回避行動に成功したところでそのメヘメヘは到底救えそうにはなかった。

むしろありえない。

自分の命が危ないその状況下でたかが一匹の野生動物を救おうとするなど、彼女には到底理解出来ない事だった。

しかしながらあの表情。

まさかと思った次の瞬間にはその女性剣士はそのメヘメヘへに向かって走りだしていた。

結果として自分の命と引き換えに女性剣士はそのメヘメへの救出に成功した。

「ふざけないでよ……」

認めたくない。認めない。

落胆した後に彼女が抱いた感情は怒りだった。少なくともこの短時間で彼女はあの女性剣士に魅入られていたのだ。

それが……

「たかがメヘメへじゃない……」

あんたの命とは釣り合わない。

そう言いかけて彼女は口をつぐむ。言葉に出せばあの女性剣士の死を認めてしまう気がしたからだ。もちろん生存しているとは到底思えない。しかしながら彼女はただただ認めたくなかった。

数刻後、砂埃が納まりようやく晴れた視界の中、彼女はあの女性剣士の最後の場所へと歩みより、そこにその姿が無いの確認すると今までで一番深い溜息をついた。

「はあ……さあ〜て帰ろうかしら」

名前も知らなかったのだ。いや、むしろ会話すら交わしていないし、あの女性剣士は自分の存在すら知らない。

見なかった事にすればいい。そうすればこの沈んだ気持ちも少しは楽になる。

そんな事を思いながら彼女はその後を後にしようとした。

その瞬間

ガラガラ。

背後で突然、音がする。

何かと思い振り返ろうとした彼女のその小さな背中を叫び声が襲った。

『野生のメヘメヘが山にいたりとか聞いてねええええええええええぞ
おおおおおおお！！！！』

「きゃああああああ！！」

なに？なに？なんなの？なんで生きてるの？

慌てふためく彼女をよそに復活した女性剣士はいきなりどんよりと地面に蹲って『の』の字を書き始めた。

「……………(なに?)」

俺は……あんなに可愛いメヘメヘ達を知らずとは言え巻き添えにして殺していたって事が……

思わず死にたくなる。いや、むしろ誰か俺を殺してくれ……ってさつき死んだか……あれ？なんで死んだんだっけ……

「……はっ！？さつきの子メヘメヘどうなったんだ!？」

そう言つと定臣は慌てて立ち上がり周囲をきよろきよろと見回した。……そこへ

『あなたのお陰で無事に山に帰ったわよ』

なにやら声がしました。まあとりあえずは

「そつかあゝ！誰かは存じませんがご親切にどう……も？」

お礼を言いつつ声のした方に振り返ってはみたものの声の主の姿が見当たらない。頭に疑問符を浮かべたままに、顎に手を当てた定臣に声の主はさらに語りかけてきた。

『ねえ、あなた何者なの？』

「それはこつちのセリフかな、姿見えないんだけどそれも魔法の一種かなにか？」

『……………』

「ん？」

突然、黙り込んだ声の主を不思議に思い、定臣は首を傾げながら再び顎に手を当てる。

ゴスツ！

「いったああああ！」

何やら脛を蹴られました。その痛みに一瞬、小夜子の顔を思い出す。

『だ・れ・が・姿消してんのよ！ここにいるでしょ！こ・こ・に！』

脛を押さえ蹲っている定臣に声の主が怒った様子でそう告げた。

その声に顔を上げた俺が見たものは

なにやらちんちくりんの可愛い生き物がいました！

身長はポレフと同じか少し低いくらいだろうか。真っ赤な髪を両サイドで結び、藍色の鮮やかなローブを身にまとった可愛らしい顔をした少女が偉そうに両腕を胸の前で組み、綺麗な黒い瞳でこちらを覗き込んでいた。

『まったく失礼しちゃうわ！戦う姿だけじゃなく見た目も綺麗な人とか思ってたこの僕に対してチビとかチビとかチビとか！！ど〜せ

チビよ！チビチビチビチビよ！』

まさかの僕っ娘。

「お………」

『チビの何が悪いのよ！っていうか僕はチビなんじゃなくて発展途上のよ！そのへん勘違いしないでよね！……お？』

「お前可愛いなあああ！そのそばかすとか最高に可愛いなあああ
！」

そう言つと定臣はその少女の頭をわしゃわしゃと撫で始めた。

『ちよおおお！！なにすんのよ！いきなり！ぎゃあああああああ
あああ！って言うか今、そばかす言つたなああああ！！離せ！は
な・せええええええ！』

数分後。

『はあ………はあ………はあ………は、禿げたらどうしてくれんのよう』

「うははは！禿げね〜って」

『も〜、お姉さまみたいな事しないでよね』

「わりいわりい、お姉さまが誰かは知らないけどちつと悪ふざけが
過ぎたわ」

『むう……』

「ん？」

『名前よ！な・ま・え！いい加減、名乗りなさいよね！』

「あゝ、そういえばまだだったなあ、俺の名前はサダオミ・カワシノ。サダオミって呼んでくれ」

『わかったわよサダオミ。僕の名前はロイエル・サーバトミン。皆はロイエって呼ぶわ』

「了解。よろしくなロイエ」

「何をよろしくかは知らないけどとりあえずは握手するわ」

そしてようやく名乗り終えた二人は軽く笑みを浮かべながら握手を交わす。

「ねえサダオミ」

「ん？」

「あんたこれから先、どこかの街へいくの？」

「ああ……うん、いくよ」

「まさかと思っけどその格好のままいくつもり？」

ロイエのその言葉に自分の今の格好を確認する。

なんとかというか涙が出ました。

お気に入りだった旅人の服（仮）はまたしても所々が破け、マノフの返り血で緑に染まり、なかなかエロティックなはだけ具合になっっていた。

「ぬああああ！またかあああ」

頭を抱えた定臣にロイエは笑顔で口を開く。

「ねえ、その服、直してあげましょうか？」

「お？」

その笑顔には一切の悪意が無いように思えたんだ。

「僕、こう見えても魔導師なんだよ？」

「まじで！？超助かる！頼むよ！」

回復魔法はエレシのそれを見た事がある。あの時、同様にこの状態からでも新品同然に修復してもらえるのだろうと定臣は期待した。

「よぉ〜し、それじゃいくよ〜」

「おう！」

ロイエの両手に光が収束する。暖かい光が俺を包み……暖かい……

…？

「あっつう！あっつい！あっついって！ロイエええええ！」

どんっ！

爆発しました。主に俺が。

もしかしてチビよばわりしたのとか、そばかすの事を言ったのとか頭撫でまわした事とか怒ってたのか？薄れゆく意識の中で定臣はそんな事を思っていた。

幼いメヘメヘの命を救うため、マノフにあえなく敗北した定臣。

絶叫と共に復活した定臣の前には一人の少女の姿があった。

少女の名はロイエル・サーバトミン。持ち前の可愛いもの好きを遺憾なく発揮した定臣はロイエルとすぐに打ち解けた。

定臣の格好に見かねたロイエルは服の修繕を申し出る。その申し出を喜んで受けた定臣だったのだが……

「はあ……また失敗しちゃったわ……」

ロイエルはそう呟きながら、ひらすら北へ向かいその歩みを進めていた。

「ああ……お姉さまに殺されるわ……！」

後ろをちらつと振り返り定臣の様子を再確認したロイエルは嘆く様にそう呟いた。

ロイエルの視線の先には真っ黒こげになり、口をあんぐりと開いたまま白目を剥いて気絶している定臣の姿。その身体は僅かに地面から浮き上がり、彼女の後を追う様についてきていた。

とりあえず吹き飛んだ服の代わりに僕のローブを着せといたけど

……

当然ながらサイズが合わないので切り裂き、面積を広げて定臣の裸体を隠す様に巻きつけていたただけなのだが、思考の中ですら『着せた』と表現するのは彼女なりのこだわりなのかもしれない。

「にしてもどうして爆発しちゃうのかしら……」

中指で口元をとんとんとしながらロイエルは思考を巡らせる。そこで思い出したのはある日の姉とのやりとりだった。

回想

『ロイ工。今後、回復魔法の使用を禁止する』

「ええええええええええ！？」

『ええじゃない！どうするんだこの有様を！？』

そう言ったお姉さまが指差した先は、さっき僕が回復……しようとした？校舎の外壁だった。ちょっとだけひびがはいつてたから補修しようと思ったのよね……

「ほ、ほら、前のデザインにも皆、飽きただろうなって思ったから……ね？」

『そうかそうかあ〜ロイ工は賢くて心優しいんだなあ〜』

そう言ったお姉さまの目はもちろん笑っていなかったわ。

『これは』

そう言いながらお姉さまは僕との距離を一步ずつ縮めると

『もはや校舎の外壁ではない！』

「あははははは！やめてえええ！お姉さまあああ！」

ものすごい、くすぐられたわ。

それから僕は気絶しては回復魔法で意識を強制的に戻され、また気絶するまでくすぐられるという地獄を味わった……お姉さまはその間ずっと高笑いし続けていたわ。

『まったく、私の言う事を聞かないならおしおきするぞ?』

何度目かの気絶から呼び戻された時にお姉さまはそんな事を言いやがりました……仰いました。でも僕は知っているわ、あの程度の事はこの人にとって他愛もないスキンシップに分類されるんだってことを……

「はあ……はあ……もう……十分よ……」

『ふふん……にしてもロイエよ。なんでお前の回復魔法は毎度毎度、爆発するのだ?』

「はあ……はあ……それは……僕が聞きたいよ……はあ……はあ……」

『まあいい。とりあえず私がたまたま居合わせたから良かったものの、下手をすれば怪我人……いや、死人も出ていたのかもしれないのだぞ?』

「うう……」

『ふふ……反省しているのなら良しとしよつ』

そう言つとお姉さまは軽く口元を緩め手をかざして回復魔法を使用する。すると先程、僕がありえない程に破壊した外壁が綺麗に修繕されていった。

なによもう……僕だつてあれくらいできるんだから！

『僕だつてあれくらいできるんだから！』

「え”？”

発音できない声が出たわ。

『まさかそんな世迷い事を考えてはいないだろうな？』

「なつ、なななないよ！ない！ないわよ！」

『ふふ……ならいい』

「ね、ねえお姉さま……も、もしだけどね？もし言いつけを守らずに回復魔法使つたら僕の事どうするの？」

『さあどうしような……次は何かいいかな……？ふふ……ふふふ……あつはつはつは』

殺されるわ……回復魔法を使えば間違いなく殺されるわ……

回想終了

それを……僕は使っちゃった……

何故だろう……？

やっぱりあの剣技に中てられたのかしら……

それにしても綺麗だったなあ……

にしても話してみるとあんなにがさつな人だったなんて意外だったわ。でもまあいい人そう……

そっかあ……僕はサダオミと少しでも仲良くなりたかったんだわ。

もう一度、後ろを振り返ってみる。

「あはははは！」

思わず噴出した。

「あははは！じ、自分でやっというんだけど、あはは！あの美女が、あはは！その顔！あははは！」

爆発させられた拳句に爆笑されているなどは露知らず、定臣は尚も白目を剥いてあんぐりと口を開いたまま気絶し続けていた。

「はあ……ごめんね、サダオミ」

一頻り（ひとしきり）笑い終わるとロイエルは一応の真顔を作り、定臣に軽く謝罪を済ませ、再び北へとその歩を進めていった。

「でもまあ……大丈夫よね！」

先程、一瞬見せた反省もどこへやら、そつ口ずさんだロイエルの顔は実に晴れやかなものだった。

ロイエル・サーバトミン（後書き）

さてさて、今日もここまで読んでいただきありがとうございます！ご意見ご感想じゃんじゃんお待ちしております！（・・・）

え〜と後書きが20000文字も書ける事に気がつきましたので、ちよつとした心境の変化など書いてみようかと思いましたが次第であります。

私は元々、読み専の人間でした。まさか自分が小説を執筆するなどは夢にも思っておらず、当時は自分なりの素人小説の楽しみ方など追求してみたりして一人できゃっきゃウフフと楽しんでいました。

これはあくまで私、個人の意見ですが素人小説の醍醐味は数万作もある作品の中から自分なりのスマッシュヒット作品を発掘した時の喜びだと思っておりますよ。

もちろんランキング上位の先生方の作品はどれもこれも素晴らしいものです。

ですが私は言わせてもらいます。

「あえて言おう！ランキング外からの発掘が好きであると！」

名作に出会えた時のあの喜びは癖になります。

そして読み専門だった頃の私は名作を発見してはこっそりと独占欲を満たす様にきゃっきゃウフフしていたわけですが、自ら下手く

そなりに執筆する様になり、心境に変化が起こりました。

やっぱり作品は色んな方に読んでもらいたいですよね。

もちろん中には発見してくれたファンの方だけを大事にしたい先生方もいらつしやると思います。しかし私はやはり名作には色んな方の目にとまって欲しいです。はい、得意の自己満足です。

という事で前振りが長くなりましたがここで私の宝石箱の中身を彩る名作を1つ紹介させて頂きます。 作者様には予め許可頂いています。

橘 太智 先生作

ふたつの月が代わる時

<http://ncode.syosetu.com/n98261/>

「活字の宝石箱や」

とか思わず言いたくなる創りこまれた名作です。

ああっ・・・穴場の名店を教えた気分・・・

だがしかし！名作にはやはり人の目に触れて欲しい！

という事で今日はここまででございます。長文失礼しました！

少女の過去

ロリエルの爆発魔法は故意によるものではなかった。気絶したままの定臣を連れ、ロリエルは北へと歩みを進める。彼女の目的地はどこなのか。自分が移動させられている事すら気がついていないはずもない定臣には知る由もなかった。

翌日

ラナクロア暦635年、水の月三の水の日 勇者の公募開始まであと二日。

早朝に野営地を出発したポレフ達一行はエドラルザ王国を目指し、北へとメヘ車を走らせる。その車中にはエレシの不意の告白により口をあんぐりと開いたクレハの姿があった。

「な……なに言ってるんのエレシちゃん……」

「はい ですから定臣様は生きてらっしゃいます」

「エレシ様……そう信じたい気持ちはお察ししますが……」

言いにくそうに話をきつたのはライアットだった。野営地までメ
へ車の天井に配備され護衛の任にしていた彼女であったが、野営
地で増員された護衛にその任を預け、現在は車中に待機している。

「姉ちゃんの言ってる事は本当だぜ！定臣は人間じゃね〜もん」

『……！？』

ポレフのその言葉にクレハとライアットは驚いた表情で顔を見合
わせた。

「……まさかエレシちゃん」

「いいえ」

慌ててエレシの方に向き直ったクレハに、エレシが軽く首を振る
という二人の間でしか理解できないやりとりが行われる。それにポ
レフは首を傾げ、ライアットは無表情で見守っていた。

「じゃあ……一体……」

困惑した表情でそう呟いたクレハに、エレシは優しく微笑みかけ
るとゆっくりとその口を開いた。

「あの方は……あの方は天使様なのです」

「ああ！天使だったのですか！天使だったのかあ！あはっあははは」

「……はあ　ライトアットお前」

壊れたのはライトアットだった。

「うははは！堅そうな姉ちゃんやっとな！な？姉ちゃん」

「はい　笑いましたね」

「……コホンツ、し、失礼しました」

「いや、まあ……でもエレシちゃんよお、さすがに天使なんて信じられね～よお」

「はい、私もはじめは信じられませんでした……ですが……
いえ、では一つお尋ねします」

話の途中でエレシから質問してくるなど珍しいと、クレハは両手を前で組むと前のめりになり、話を聞く体勢を整える。それを確認したエレシは更に優しく微笑むと続きを口にした。

「何故、マノフは定臣様だけを追っていったのでしょうか？」

マノフは種族を標的とする。

『……！？』

クレハとライトアットが再び顔を見合わせた。

「俺様とした事が……」

「私とした事が……」

「天使様だと信じられないとしても、少なくともあの方は人間では
ありません」

「ああ………違ういなえ………」

「だから天使だっつってんじゃんよ……！」

「ああ………そうだなあ弟あ………」

「わわっ！ちょ！頭触んなおっさん……！」

「ポレフ？その言葉遣いはいけませんよ……？」

「だっっておっさんがあ………わ………！姉ちゃんごめん！ごめん！包丁
やめてええええええ……！」

「エレシ様！車内で包丁はやめてください……！」

「まあまあ仲良くていいじゃねえ………かあ………」

慌てた様子で止めに入ったライトアットにそう言つと、クレハは軽
く目を瞑り口元を緩めた。

そうか………サダオミちゃん生きてるかあ………

その頃、野営地の遙か北西、エドラルザ王国から南西に位置する
鞆の町『シイラ』の酒場では隻腕の傭兵がただひたすらにグラスを
傾け続けていた。

「お客さん……昨日から飲み続けて……大丈夫ですかい？」

「ふう〜……なあ〜に、これくらいどうって事ね〜よ」

「お強いんですねえ」

「飲んでないと引き返しちまいそうだな」

「？」

「ここで待ってるって約束したんだよ」

「大事な人なんですねえ」

「ああ……俺の嫁候補だ」

「ほほお〜」

「まあまだOKもらってないんだけどな！がははは」

マリダリフのその言葉に酒場のマスターは皿を拭くその手を止め、ニカッと口を開いた。

「そいつあゝいい！一杯おごらせて頂きますよ」

「おっ、話のわかるマスターじゃね〜か！気に入ったぜ！」

マスターが差し出してきた一杯を豪快に飲み干すと、マリダリフは店の天井に視線を送り思いを馳せた。

まさかとは思うが……やられちゃいね〜だろうな？サダオミよお

エドラルザ王国にむけて野営地を出発したメヘ車の車中で、エレスの口から定臣の生存を知らされたクレハは密かに歓喜した。

一方その頃、マリダリフは定臣との約束の地、鞆の街『シイラ』の酒場にてただ、ひたすらにグラスを傾け続けていた。

一見、気分の良い酒を飲んでいる様にしか見えないマリダリフ。その胸中で定臣の安否を気遣っている事を知る者はいない。

翌日。

ラナクロア暦635年、水の月三の風の日 勇者の公募開始まで

あと一日。

「今日は姉ちゃん起きね〜ぞ」

勇者の公募開始を明日に控えたその日、ポレフの朝の第一声にクレハとライアットは首を傾げていた。事実、いつもは誰よりも起床が早いエレシは今も目の前で静かに寝息をたてている。

「そうかそうかあ〜！今日は風の日かあ」

一旦、首を傾げたクレハだったが、ぽんつと手を打つと何かを納得した様にそう口にした。

「そ〜なんだよ！」

「あ、あのクレハ様？私にも理解出来るように説明お願いします。」

一方のライアットは話に全くついてこれていない。

「ああ〜ライアット〜、気にしなくていい。問題ない」

説明を求めたライアットに向かってぴつと人差し指を立てるとクレハは『この話は終わりだ』と言わんばかりに感情のない声でそう言い放った。

「そう……ですか……」

クレハのその態度にライアットは肩を落として一瞬、俯くといつもの無表情を作る

……はずだった。

「クレハ、好きな人に冷たくされたら悲しいんだぞ！」

そう、ポレフのこの言葉を聞くまでは……

「なっ！？なななななななななななな」

「ほほお〜ライアットは俺様の事が好きで好きで仕方ないのかあ〜」
にやりと笑いながらそう言ったクレハはもちろんこの上ないどや顔だ。

「無いです。」

対するライアットはいつもにも増して鉄仮面を上塗りしている。

「またまたあ〜」

「無いですって！」

「よし！俺だって空気読めるぞ！姉ちゃん寝てるし、俺が外に出れば二人つきりだ！」

ポレフが回収されたその頃、定臣を背後に連れたロイエルは不眠不休で夜通し、北へと歩き続けていた。

「はあ〜……さすがに疲れたわね」

そう呟いたロイエルの表情は夜通し歩き続けた疲労以上にやつれたものになっていた。

その原因は……

「とっ」

「だあ〜！もう！魔力ぎれだわ」

背後から聞こえたその音にロイエルがごちる。音の発信源は定臣だった。ロイエルの移動補助魔法の効果が切れた事によって宙に浮いていた身体が地面へと落下したのだ。

魔力には自信がある彼女だったが、さすがに徹夜での移動補助魔法の行使は初めての経験だった。

「づ……づがれだわ〜」

その場にへなへたと座り込んだロイエルは定臣へと視線を送る。定臣は相変わらずに白目を剥いたまま口をあんぐりと開いていた。いや、よく見れば落下の衝撃でたんこぶまでできている。

「自分でやっといてなんだけど……そろそろ起きてくれないかしら」

思わず定臣が無意識下につっこみそうなセリフを呟くと、ロイエルはそのままその場に寝転んでしまった。

「むう〜りい〜！一時間だけ寝るわ」

そうぼつりと呟くと重くなった瞼をそっと落とし、眠りの世界へと誘われ……

『ギャオオオオ！』

なかった。

「あつぶなあ……メイヨー平原のご真ん中で何やってるのよ僕は」
ふるふると顔を左右に振ってなんとか眠気を飛ばそうとするものの、やはり眠いものは眠い。

「……仕方ないわ」

そう言うとロイエルはポケットをがさごそと漁り、ビー玉大な玉を一つ取り出した。

「最後の一個なのよねこれ……狭いけど我慢だわ」

ぱちんと指を鳴らし、保存圧縮の魔法を解除する。するとロイエルと定臣を不可視の空間が包み込んだ。

「お姉さま特製、絶対安全テント！マノフの不可視の擬態をヒントに作り出されたこのテントには、空間断絶の超高度魔法が施されて

いて安眠を約束してくれるわ！あまりに高度すぎてお姉さまにしか作れないのが玉に瑕……ってサダオミ聞いているの！？」

もちろん、聞いているはずもない。

「それにしても……ぜまいわ」

外からは見えないこの空間にロイエルと定臣（白目）はぎゅぎゅゆうに詰め込まれていた。

「うぐ……う……効果がきれるまでこのまま寝るわ」

最後にそう呟くとロイエルは体力の限界を迎えたらしく、そのまま深い眠りへと落ちていった。

勇者の公募開始をいよいよ明日に控えたその日、ポレフの宣言通りにエレシが目覚める事はなかった。

増員された護衛により更に安定した旅路に行くポレフPTに死角はない。その日の夕暮れ時、一行はいよいよエドラルザの城壁を目視できる所まで辿り着いた。

一方、体力の限界を迎えたロイエルは定臣と共に不可視＋空間断絶の効果が付与されたテントの中でその身体を休めていた。

……で目が覚めたら何やら狭い空間に閉じ込められていたわけだが。

外の景色は見える。しかしながら見えない壁の様なものが存在するらしく、目が覚めた定臣は全く身動きがとれない状況だった。

それにしても……

先程から自分の胸元にへばりつく様にして眠っている少女へと視線を落とす。

「気持ち良さそうに寝てんなあ……」

あまりに気持ち良さそうに眠っているので起こすのも悪いかと、定臣は声に出すのを控えながら思考を巡らせた。

確かこの子の名前はロイエル・サーバトミン……マノフにやられた後、起き上がったらいたんだっただけ……

！？

そうだ！ロイエに服を直してやるって言われて頼んだら爆発したんだっただけ……！……待って待って待って！気絶させられた上に何やら身動きがとれないこの状況……

まさか!?

これが拉致、監禁ってやつか……

そこに思考が到達した定臣は、青ざめた顔をしながらロイエに再び視線を落とす……

「ううん……お姉さま……」

うわ言の様にそう呟いたロイエルの目には薄く涙が浮かべられていた。

ないかあ……

恐らくはあの爆発も悪気があったわけではないだろう。ロイエルの無防備な寝顔を見ていると不思議とそういう気持ちにさせられた。

「……にしても狭いなあ」

目に見えない壁で仕切られた空間は、おおよそロイエルサイズと言ったところだろうか。そこに強引に二人で詰め込まれた様な形になっている。

「たぶん、これ外から見ると顔とかおもしろい事になってるんだらうなあ」

もちろん外部からは遮断されているので視認する事は出来ないのだが、当然ながら定臣がその事を知っているはずもなかった。

「……やれやれ、ロイエが目覚めるまではどうあがいてもこのままっばいな」

そう呟いた後、定臣は軽く天を仰ぎ大きなため息をついた。

白い世界。

夢の始まりはいつもそうだった。

「……夢ね」

その白い世界で僕は軽く呟いた。

今日は自覚のある夢……

あれは……

初めてお姉さまに学院に連れてこられた時の僕……

「夢って不思議なものよね……自分で自分の姿が見れるんだもの……
……またあの夢ね」

自覚のある夢の中でこの始まり方をする夢を彼女は何度も見てい

た。

エドラルザ王国国立魔科学専攻学院。それを主に置き、連なる街の名が『カルケイオス』

ラナクロアの魔術師の心臓部とも言われるこの学園からなるこの都市の長にして学院の長を務めているのが、ロイエル・サーバトミンの姉であるミレイナ・ルイファスだった。

「そのお姉さまに連れられて来たのが僕だもん……他の生徒達のあの視線も頷けるわ……」

気だるそうに呟いたロイエルの視線の先には、先生と思しき人物が今よりも幼いロイエルを同じ部屋にいる歳の近い子供達に紹介している所が、昔の映画さながらに映し出されていた。

「あの時は不安で一杯だったな……」

他の生徒達の視線の色……期待……不安……羨望……嫉妬……

不安に駆られながらも彼女の学院での日々は始まった。

それから早送りで視線の先の場面は時を刻む。

「あれは……数ヶ月経った後ね……」

そこにはロイエルが一人寂しくぼつんと机に向かう姿。遠巻きにロイエルの方を伺いながら、ヒソヒソと陰口を叩いている数人の生徒の姿が見えた。

周りのすべての人間がロイエルの事を特別扱いした。

「あの？ミレイナ・ルイファスが連れて来た人材であり、実の妹である。」

「ふう……ろくな事がなかったわ……僕はお姉さま程、優秀じゃないし」

はじめの内は良かった。元々、魔力が強い僕は攻撃魔術の授業では誰よりも優秀だったし、対抗試合でも負けなかった。

でもそれが災いした。

ある日の模擬戦で同じクラスのリーダー格の子を軽く倒してしまっただのだ。

「手加減なんてする方が失礼だと思っただもん……」

でもそれが彼女のプライドを傷つけた。

「数の暴利って怖いわね」

あつという間だった。その日を境にロイエルに話しかける生徒はいなくなった。

「まっ、独りは慣れてただけだね」

独りになったロイエルだったが、それでも彼女の魔術が強力な事には変わりなかった。

『ロイエル・サーバトミンは優秀である』

薄く張られた笑顔の裏に自己保身という理由を掲げ、教師達はロイエルの事を鼻屑し続けた。

「余計に浮くつてのよね」

『いじめ』は増々、加速した。強がってはいたものの辛くないはずがなかった……

唯一、信頼できる姉には相談する時間はない。なにせ彼女はカルケイオスの長である。彼女の一秒は凡人の数日分にも値するのだ。なによりもそんな事で姉に心配をかけたくなかった。

結果として僕は心を閉ざしていった。

最初の数ヶ月はただひたすらに俯いていた。しかし幸か不幸か僕には力があつた。

「あゝ……客観的に見ると相変わらずひどいわ」

なんだ。敵なら潰しちゃえばいいんだ……

ある日それに気がついた。気がついてしまった。

それからの数場面は自分でも目を覆いたくなる程、ひどいものだった。

例えば陰口を叩いた子にはその唇に手芸を施した。例えば靴を隠した子にはその両足の甲が砕けるまで土魔法を手加減して打ち込んだ。

何をやっても隠匿された。

もちろんお姉さまに知れる様な事があれば、その瞬間に僕は修正されていたと思う。

でもそれも計算づくだった。保身のためにあの馬鹿教師共はすべてを無かったことにするだろうと。

自分の恥部とも言えるこの夢だったがロイエルは繰り返しこの夢を見る事が嫌いではなかった。

「この先にあの子がでるから・・・ね」

ようやく意識が戻った定臣は、目に見えない結界の様な空間に閉じ込められていた。

身動きがとれない自分に戸惑うも、密着して眠るロイエルに気がついた定臣はその寝顔にどこか安堵させられた。

定臣が優しく見守る中、ロイエルは夢を見る。それは過去の記憶の欠片だった……

「自分で自分が怖いわ」

そう呟いたロイエルの視線の先には、ただひたすらに魔術という名の暴力を振りかざし、小さな世界を掌握している魔王の姿があった。

「なんて眼してるのよ……」

この夢の中で『この』過去の自分の姿を見る刻ときが一番辛かった。

渴いている。

暖かさを渴望しながらに渴いていく。

そこから色を失った幼い頃の自分は只々、返り血にその身を染めていった。

くだらない。許しを請うくらいなら始めから僕に刃向かうべきじゃないのに。

「ほら。そんなだから指が反対に向いちゃうのよ」

『ごめんなさい……ごめんなさ……も……うゆるし……』

パキリ

重症具合に見合わない軽い音が室内を奏でる。七本目の指をへし折った辺りから反応が小さくなって興味を失い始めていた。

先程から僕の足元で惨めに雑音を発している屑は、僕を中傷する内容の張り紙をしていた。

先日の回復魔法の学科で僕の魔法が爆発したのをいい事にやっつけ入る隙を見つけたとばかりに増々、僕への風当たりは強くなっていた。

でも何故だろう？

不意にロイエルの頭に疑問符が浮かぶ。

黙っていれば勢いを増して嫌な事をされてきた。逆らえば更に勢いを増した。仕方がないから潰した。

潰した。潰した。潰した。

「それなのに収まらないね」

感情の無い声でそう呟いたロイエルを見て、屑と称された少年が更なる恐怖に顔を染める。

なに？その顔。 なにか怖いことしたかしら……

「だったら……」

口元を吊り上げてそう呟いたロイエルを見上げ、少年は更に絶望にその表情を歪めた。ロイエルはその少年の表情を確認すると、更に口元を吊り上げ大きく口を開く。

「だったら！だったら！だったらさああ！」

踏む。踏む。踏む。

鈍い音は無情にもしばしの間、室内を支配し続けた。

その狂気に逆らえる者などこの場には存在しない。

恐れをなした他の生徒達は、少年が意識を失うまでその凶行を必死に見ないフリをしていた。

ああ……虚しいわ……不毛ってこの事なのかしら

潰せばその場は収まる。しかし数日もすれば泣きじゃくった涙もどこへやら文字通りに『懲りず』にいじめは再開される。

そっか……生かしてるから次があるんだわ

何かを考える様子で口元を指で撫でていたロイエルの仕草が止まる。

「ごめんね……」

不意に言葉上では謝罪を意味するその台詞を口走ったロイエルに、安堵した様に周囲がざわめいた。

先程のロイエルの仕草の結論が反省に至ったという勘違いから起こったそのざわめきは、次のロイエルの言葉で瞬時に凍りつく事となる。

「中途半端に生かしてごめんね。もう『次』なんて残してあげないから」

殺せばいい。

「生きてるからやめないんだもんね」

簡単な事だわ。

「どっちが悪いんだろうね？」

仕方ないじゃないの。

「とりあえずこの子、消すけど」

本当は……

「次も誰かが懲りずにやるのよね？」

辛いよ……

「先に決めといてもらえるかな？」

誰か……

「聞いているの！？ねえ！？」

助けてよ……

パシンッ

不意に魔術を行使しようとしていたロイエルの手が払われる。

「！？」

ロイエルは驚きながらも殺気に満ちた瞳で手を払った犯人を睨みつけた。

『キカ・サミアス』それが彼女の名前だった。目立たない地味な子。それが僕が彼女に持っていた印象。後で思い返してみても気がついたんだけど、あの子だけは僕に対して嫌がらせの類をしてきていなかったわ。

……でも当時の僕はすべてが敵だと思い込んでいた。

「なによ……次はあなたなわけ？」

だからそう言っちゃった……

『あなたを見誤っていたわ』

それなのにあの子は……

ぎゅっ

そつと抱きしめられた。意味がわからなかった。

『あなたはとても強いと思っていたから……』

「この子は何を言ってるの？何故、僕を抱きしめているの？」

『ごめんね……もっと早くこうするべきだった……』

「な……に……?」

声がでなかった。

『私はあなたの味方だから……信じてもらえないだろうけど、これから信じてもらえるようにするから』

代わりに涙がでた。

「……によ……なによ!」

なんでこんなに嬉しいのよ……今更じゃないのよ……

『大丈夫……私が傍にいるから……あなたを支えるから……』

「あ……ああ……あああああああああああ!」

あゝあゝ、相変わらずみつももない顔で泣いちゃってるなあ僕。

夢の終わりにはいつもキカが助けてくれる。彼女との友情を支えに僕は立ち直れた。一人でも味方がいてくれれば視界が、世界が変わるのよね……

変わった世界で僕は少し優しくなれた……と思う。

それからはキカに間をとってもらって他の生徒達ともなんとか和解したわ。ちょっといじめ返しすぎちゃった子からは『姐御』なんて呼ばれちゃってるけどそれもご愛嬌よね

……って夢の終わり!?

「!?!」

「おっ、やっと起きたかロイエ」

サダオミ……ってあれ?空間断絶効果がきれてる?

「って何時間、寝たのよ!?!僕は!?!」

「起きるなり元気だなあ」

そう言ったサダオミの周りには魔獣の死骸がたくさんあったわ。それを思わず凝視した僕に

「ああ、これか?気持ち良さそうに寝てるの起こすのも可哀想だから護ってた」

なんて軽く言っただもの。思わず笑っちゃったじゃない

「……………ぷっ、あははは」

「な、なんだよ？」

「うっん、護ってくれてありがとね」

「おう」

「……………って！」

「ん？」

「テントの効果がきれてから何時間くらい経った!？」

「テント?もしかしてあの見えない狭い空間の事か？」

「そう!それよそれ!あと狭いのは仕方ないでしょ?一人用だったんだから!」

一人用……………あれは俺、一人でも狭いぞ……………あえて言うならロイエ専用だろう。言つと怒るから言わないけど。

「ん、まあ昼前には開放されてたかなあ？ちなみにそれから半日経って今は夜ね」

「ちょおおおおお！！！まずいわ！！サダオミ！！すぐに出発よ！」

そう言つとロイエルはサダオミの手を引いて再び北へと歩き始めた。

『起きたら別れてシイラ目指すつもりだったんだけどなあ』などと
思いながらも仕方ないかと口元を緩め、定臣はそれについていくの
だった。

胎動

定臣に護られる中、ようやく夢見るロイエルは帰還を果たした。思った以上に寝過ごした事を知ったロイエルは、大慌てで定臣の手を引き再び北へと移動を始める。

一方その頃、ポレフPTはようやく城壁を越え、エドラルザ王国首都『エドラルザ』へと到着していた。その時になり、ようやくエレシは目を覚ます。

明日の勇者公募開始を城下町で待つ事にしたポレフとエレシの二人は、クレハ達にここまでの旅路の礼を述べ、再会を握手で約束する。しばしの別れを惜しむのだった。

「うちの支社で一泊すればいいのよ」

「いえ 二つまでして頂いて甘えるわけには」

「エレシちゃん！俺様達の仲間じゃないのぉ～！俺様に甘えるのに気を遣う必要なんてないんだぞ～」

「ありがとうございます では1つだけ……」

「なにになになによぉ～？」

「定臣様が城壁を通過できるように手続きをお願いしたいのですが……」

当然ながらエドラルザの城壁を通過するのは容易な事ではない。

通過するためには様々な手続きが必要となってくるのだが、最も重要なものの1つにエドラルザ王国国民として身分証明証を兼ねている『ファステル』と呼ばれる王国魔術刻印があった。

『ファステル』を持たない者は城壁の内側に存在できない。

その『ファステル』には様々な個人情報や魔法により細分化され記載されており、城壁を通過する際に担当官の特殊魔法により内容を確認され、問題が無ければ通行を許可される運びとなる。

当然ながら『ファステル』を持たない定臣は特例として認められない限り、通行許可が下りる事はない。

ではその『特例』とは何なのか。

実はエレシがサキユリアスを利用した理由の1つにはその『特例』を獲得しやすくするという心積もりがあった。

エドラルザ王国にとって社会的貢献度が高いと認められた者には名誉国民の証である『エドウナ』と呼ばれる地位が設けられている。この『エドウナ』の民に与えられている特権として、身元保証人となる事で『ファステル無し』の民を城壁の内側へ招き入れられるというものがあつた。

その社会的貢献度が高いと認められる基準というものもなかなか曖昧なもので、実際のところ『エドウナ』を与えられる民の大半は高貴な血筋の者達で占められていた。

貴族しか承る事の出来ない地位として民の常識となつていたこの『エドウナ』を異例が大好きなあの男、サキユリアス社長にして真っ赤な服のもみあげのその人『クレハ・ラナトス』は獲得しているのだ。

エレシのその言葉を聞くとクレハはにやりと笑いながらウィンクしつつ、絶大な信頼を置く部下のその名を口にした。

「ラ〜イアット〜」

「はい。既に手配済みです。」

「だそお〜だ」

「ありがとうございます」

「なあ〜に！頼まれなくてもサダオミちゃんには世話になりっぱなしだ〜！こっちから願いでるつもりだったとこよお〜」

クレハがそう言い終わったのを確認するとライトはクレハに歩みより、耳打ちする様に

「クレハ様。若がお待ちです。」

そう告げた。

「おっと〜！……それじゃそろそろ俺様はいくよ〜」

「はい お世話になりました」

「ありがとな！クレハ！」

「弟もしっかりやれよお〜！」

そう言うときクレハはポレフの頭をわしゃわしゃと撫で、軽く手を上げるとサキュリアス支社の方角へとその姿を消していった。傍に寄り添うライトと決して後ろを振り返らないクレハの二人の後姿を見送ると、ポレフはエレシに向かって嬉しそうに口を開いた。

「なんかサキユリアスってかっけ〜な！姉ちゃん！」

「ふふ、そうですね」

ポレフったら……あんなにクレハ様の事が苦手だったというのに

「良いことですよ ポレフ」

「ん？」

「いえ」

そう言つとエレシはどこか嬉しそうな面持ちでポレフの手を引き、城下町へと今日の宿を探しに行くのだった。

……で、何やらひたすら北に向かわされているわけだが

「なあロイエ」

「なによ？」

「俺、約束しててさあ。行かないといけないところあるんだけど」

「ちょっとあんた！いたいけな少女が魔力尽きて困ってるっていう

のに見捨てるつもり!？」

「いたいけな少女はこんな所に一人で来ないと思うんだが……だいたいあんな所で何やってたんだ？」

「うぐ……」

怪しい。

「だいたいあんな所で何やってたんだ？」

「お、同じテンポで聞かないでよ!」

「だいたいあんな所で何やってたんだ？」

「う、うるさいわね! 国家機密よ! 国家機密!」

なにその単語。言ってみたい。

「というか、あれだけガクガク寝ててまだ魔力、回復してないのか？」

「ちょ、ちょっと無理しすぎたのよ!」

「怒るなよ」

「いいから一緒に来てくれればいいの!」

どうやら解放してくれる気はないらしい。護衛するのは別に構わないんだが、マリダリフ待たせてるしなあ

「ん〜……ロイエ、目的地まではどれくらいある?」

「二日も歩けば着くわ」

「ん〜……よし!ロイエ、ちよつと抱っこするぞ!」

「え?……ええ!?!ええええええええええ!!」

そのロイエルの驚きの声もよそに定臣はロイエルをお姫様抱っこすると、じつと北を見据えながら走り始めた。

「ちょ!?!なに!?!なんでこんなに速く走れるのよおおお!」

「ん〜……人待たせてんだよ。とつと送るからちよつと黙ってるつて舌噛むぞ?」

「速いって!怖いから!怖いから〜ガッ!」

「だから舌噛むって言ったじゃん」

「い〜だ〜い〜」

遂にエドラルザに到着したポレフとエレシの二人は、明日の勇者

公募に備えて城下町で宿をとり旅の疲れを癒していた。

その頃、定臣は半泣き状態のロイエルを抱きかかえたまま、ひたすら北に向かって走り続けていた。

「なあ、そろそろ目的地くらい教えてくれって」

夜も更け、辺りを漆黒の闇が支配し始めたその頃になりようやく定臣とロイエルは一度、その走りを止め休憩をとっていた。

「……待って、本気で気分悪いの」

そう消えいる様な声で呟いたロイエルは、先程から顔面蒼白で蹲っている。

「吐く前に停まってって言えよな」

そんなに揺らしたかなあ

「言っただよ！ 散々言っただよおう！ うぶ……」

「うはは、無理に大声出すからそうなるんだよ」

「あんたが大声出させたんでしょうが！ うぶ……」

さすがにこれ以上からかうのは可哀想に思えてきた定臣は、とりあえずとロイエルの頭を軽く撫で、もう少し休憩しようと呼した後、間をとる様に夜空を見上げた。

そこにあつたのは無数の星々。満天の夜空とはこの事を言うのだろつ。

思えば天使になってからというもの、こつやって夜空を見上げる機会が増えた気がする。

しばらく吸い込まれそうなその星空を、瞳を輝かせながら見つめていた定臣に不意にロイエルが声を投げかけた。

「エドラルザ王国国立魔科学専攻学院」

「ん？」

「僕はそこに所属しているのよ」

「ふ〜ん」

「ふ〜んって！少しは驚きなさいよ！『カルケイオス民』でしかも学生の僕が城壁の外にいるのよ！？」

なにやら怒られた。驚けと言われてもそんな学校知らないしなあ

……

「悪いけどさ、まだラナクロアの事そんなに詳しくないから俺」

「……サダオミ、あなた何者なの？」

「何者と言われても返答に困るんだが……」

手を広げてオーバーにリアクションしてみる。ってクレハのが若干、感染してないか！？俺！

「ぶっなによそれ」

なにやら笑われた。

「うん！いいわ。お世話になってるし、いい人なのは間違いないと思うから教えてあげる」

「？」

「エドラルザ王国国立魔科学専攻学院は『カルケイオス』にある魔術師育成機関の名前。城壁に使われている素材が『カルケイオス』産なのはさすがに知ってるわよね？」

「わ、わりい」

「……じ、実はその城壁素材はエドラルザ王国国立魔科学専攻学院で作られてるのよ。学生を働かせると何かと面倒な事になるって理由で世間的には『カルケイオス』の住人が作ってる事にしてるって姉さまが言ってたけど」

「へえ」

「つまりエドラルザの城壁で世界で初めて護られた都市が『カルケイオス』ってことね」

「なのにエドラルザの城壁って名前なのか」

「世界最強の城壁だもの。王様が自国の名前を冠したかったのも無理ないわ……その方が国民もわかりやすいだろって事で姉さまも簡単に承諾しちゃったんだけどね」

まるでどこかのネズミの王国だなどと、危険すぎる思考を音速で弾き飛ばしながら定臣は続きを促した。

「聞いた感じだとロイエの姉ちゃんはかなりすごい人なのか？」

「僕のお姉さまはミレイナ・ルイファスだよ？」

軽くそう言ったロイエルの顔は『これを軽く言う僕ってすごいでしょ？』と言わんばかりのどや顔だ。

「わりい、知らん」

「……え」

あ、おもしろい顔になった。

「ないわ！ありえないわ！お姉さまを知らない人がラナクロアに存在してたなんて！」

これは面倒な事になった。おそらく師匠を知らないと言った時と同等の事をやらかしたのだらうと猛反省したのも束の間、ロイエルの怒涛の姉自慢が開始された。

曰く、エドラルザの城壁を完成させた張本人。曰く、世界最強の魔術師にして世紀の大天才。曰く、『カルケイオス』の長にしてエドラルザ王国国立魔科学専攻学院の学長。

「わ、わかった。ロイエの姉ちゃんはすごいんだな」

「はあ……はあ……そ、そうよ」

にしても相当、姉ちゃんの事、好きなんだなあ

思わず笑みがこぼれる。

「な、なににやけてんのよおー！」

「わりいわりい……で、ロイエは城壁素材をとりに来てたってわけか？」

「なっ!？」

うっわ、すげえびっくりされた。

「いや、さっき自分で説明してくれたじゃん」

「言っていないわ！言っていない！マノフの外皮が城壁素材の原材料だ
という事は国家機密なんだもの！言っわけないわ！」

「……そうなのか」

「……あ」

「いや……まあ秘密にしておくから」

「……いやあああああああああ……！」

ロイエルがうつかりあっさり国家機密を喋ったその頃、エドラル
ザ王国首都『エドラルザ』にあるサキュリアス支社の一室にはクレ
ハと一人の青年の姿があった。

「んで〜？若よお、なんだっていきなり仕掛けたんだ〜？」

「ふふ、ようやくミレイナさんの協力を得られる目処が立ちました
ので」

クレハの正面に机を挟んで椅子に腰を落とし、そう言って不敵な笑みを浮かべた青年のその表情は、見る者が思わず魅入られる不思議な魅力を兼ね備えていた。

「まじかよお！？あの頑固者をどうやって落としたんだ？」

「ふふ、目処が立っただけですよ。」

「目処ねえ……嫌な予感がするんだけどよお」

「ふふ、その予感的中していますよ」

「かあ〜！小ざかしいのは嫌いだっていつも言ってるだろうよお〜！」

クレハのその言葉を聞くと青年の顔から笑顔が消えた。一呼吸置いて真顔を作ると青年はクレハをじつと見据え諭す様にゆっくりとその口を動かし始めた。

「三年です。」

「……だなあ〜、よくまあ通い詰めたもんだ」

「ふふ、『私が欲しいのなら手段を選ばずに来い』と許可を頂きましたので」

「でもよお〜！仮にも勇者になるんだろうがよ〜若あ〜！」

クレハのその言葉を聞くと青年は朗らかな笑みを浮かべ、人差し

指をぴつと立てると

「ふふ、今はまだ職業『影の支配者』ですので」

そう冗談めかした口調で述べるのだった。

ロイエル・サーバトミン。カルケイオス『エドラルザ王国国立魔科学専攻学院』所属にしてミレイナ・ルイファスの実妹。

エドラルザ王国国立魔科学専攻学院はエドラルザの城壁材の製造に携わっており、選抜された学生がその原材料であるマノフの外皮の採取に国務として出陣している。

尚、上記の事項は国家機密とされ、カルケイオスの民以外に知られる事はあつてはならない。もう一度、記そう。上記の事項は国家機密とされ、カルケイオスの民以外に知られる事があつてはならない。

「そつよおおお！あつてはならないのよおおお！！」

「いや……なんというか……ごめん」

今のは俺が悪いんだろうか。いや、まあとりあえず謝っておかないとつるさいしなあロイエ。

困り顔の定臣を他所にロイエルは頭を抱えたまま蹲り続けている。しばらくそれをじっと見ていた定臣だったが不意になにやら重要な事を忘れていたような気がしてきたと、いつもの様に顎に手を当てて首を傾げ始めた。

なんだっけ……マリダリフとシイラで待ち合わせてる……うん、それは覚えてるんだが……なにか他に大事な……

ようやく大事ななにかを思い出しかけた定臣だったが、次の瞬間にロイエルの思いがけない台詞によって思考を遮られる事となった。

「あゝっもう！いい事ないわね！マノフは何故か横断してるし！緊急事態とかで姉さまは東に呼ばれちゃうし！そのせいで僕がマノフを追いかけたらサダオミだし！」

「サダオミだして！」

思わずつつこみが声にでた。見れば眼下で更にそのサイズを縮めていたチンチクリンが、勢い良く立ち上がりこちらを指差してきている。

やだなにこの子、可愛い。

「ロイエ可愛いなああああああ！！」

「ちょ！？なによ！頭なでるなああああああ！！」

「クレハ、それで確認なのですが」

「お〜けいお〜けい！」

「ニーゼルフさんは問題無し。エミドウェイさんは音沙汰なしですか」

「そお〜なんだよねえ〜。ラブコール送りまくってるんだけどよお〜」

クレハはそう言うといつものオーバーリアクションで手を広げて見せる。若と呼ばれた青年はそれを手馴れた様子で穏やかな笑顔で見守っていた。

一呼吸置き互いに視線を交わした二人は、会話の続きを自然と口にし始めた。

「フィオラルネさんは……」

「ありや無理だわ。絶対無理」

そう言ったクレハは相変わらずおどけた様子の雰囲気は纏っているものの、その表情には珍しく諦めの色が浮かんでいた。

「……ですか。それは残念です。それなら代わりに」

「ラ〜イアットは駄目だぞ〜?」

「え〜……」

「だ〜めっ！俺様の代役なんて、あいつにしか頼めね〜んだよ！社長が離れるのに副社長まで離れられるかよ〜」

「ふむ……それもそうですね。」

青年はしばらく考えた様子を見せた後、自分の中で納得のいく結論に辿りついたらしく、その朗らかな笑顔を更に緩めた。

「ご機嫌だねえ〜」

「はい。ご機嫌ですよ?」

「エミドウェイもフィオラルネも駄目だったのか〜?」

「ふふ、いいんですよ。既に僕には三つの生きる伝説が味方についてますので」

「1つは目処が立ったってだけだろお〜?」

「ええ、そうです。ですが僕は……クレハ、あなたが僕の味方でい

てくれる限り出来ない事は何も無いと思っています」

青年のその言葉にもみあげの白い歯が煌いた。

「はっはっはっは〜！それはそうともさあ！若よお、俺様はいつでもお前の味方だ・ぜ！」

「はい」

その日、エドラルザ王国首都『エドラルザ』に建つサキユリアス支社で交わされた会話と堅い握手は後のラナクロアの在り方に大きな影響を及ぼす事となる。

しかしながらまだこの時にそれを予測できた者は、そう多くは存在しなかった。

ラナクロアの物語はまだ序章。ようやく入り口に立ったポレフ・レイヴァルヴァンは何を見るのか。

そして、このラナクロアに派遣された天使『川篠定臣』はこの世界に何をもたらすのか。動きだした歯車はその回転速度を徐々に上げ始める……

「つと！ちよつと待ったあ〜！」

「突然どうしたんですか？クレハ」

「いやあ〜、今なんかめられてる気がしたんでな？」

「？」

「いやあ〜……こつちの話だあ。ところで若よ」

「はい?」

「フィオラルネの事なんだが本人の前で絶対にフィオラルネの名で呼ぶなよ〜?」

「……ああ!これは失礼。そういえば改名されたんでしたよね」

「そお〜そお〜!弟と同じ苗字で呼ばないと機嫌悪くなっちゃうからなあ〜!」

そう言つとクレハは軽く口元に笑みを作り、続きを口ずさんだ。

「エ・レ・シ・ちゃん」

エドラルザ王国首都『エドラルザ』サキュリアス支社の一室でクレハと若と呼ばれた青年は堅い握手を交わした。

互いの信頼関係を確かめあつた二人は明日の勇者公募にむけていくつかの事柄を確認する。その会話の中で挙げられた名はいずれもラナクロアの著名人達だった。

「にしても理解し難いですね……せつかくの『エドウナ』を蹴ってまで何故、改名されたんでしょうか」

「まあ普通に考えればありえねえ〜んだけだよ〜！弟と一緒にするのはエレシちゃんにとってそれ程に大事なことでしょ〜」

「エレシ・レイヴアルヴァンですか……響きに無理がありませんか？」

青年のその言葉を聞くとクレハはニヤリと笑い、得意気に人差し指を立てた。

「オルティス・クライシ〜ス！」

「な、なんですか突然、僕の名前なんて叫んで」

対するオルティスはたじたじになっている。

「ようするにそついう事だあ〜！」

「い、意味が……」

「名前なんてのは呼ぶ側と呼ばれる側がわかってりゃ何でもいってことよっ！若は若いのに頭が堅くていけないねえ〜、シキタリとかそついうのに拘りすぎなんだよあ〜」

「は、はあ」

「それに律儀にも代償支払ってまで公認で改名してるんだ。今はエレシ・レイヴアルヴァンよっ！」

「ですね」

穏やかな笑顔でそう答えたオルティスにクレハは『素直はいい事だあ』などと口ずさみながらその頭をわしゃわしゃと撫でまわした。対するオルティスは困り顔ながらも手馴れた様子で為すがままになっている。

しばらくクレハの暑苦しいスキンシップを受け続けていたオルティスだったが、不意にクレハが意地の悪い笑みを浮かべたのに気が付き、嫌な予感に身構えた。

「まああれだ」

「は、はい？」

「いくくらエレシ・フィオラルネの大ファンで、時間さえあれば魔示板にかじりついてたからっていつても今はレイヴアルヴァンなんだからなっ！」

嫌な予感の正体はこれだった。

「なっ！？ななななななんでクレハがその事を知ってるんですかああああ！」

「ああん？寝言でよく言ってるんだよお若が」

「え？」

不思議そうに首を傾げたオルティスを確認するとクレハは更に意地の悪い笑みに磨きをかけて、ゆっくりと口を開いた。

「フィオラルネちゅわ〜ん」

「……うそだあああああ！」

オルティスが悲痛な叫び声を上げていたその頃、定臣の眼下のチンチクリンことロイエル・サーバトミンは嘆いていた。

「ぐすっ……財布落としたわぁ……」

しらね〜よ！と激しくつつこみたいがとりあえずここは慰めておくべきだろう。

「どいっどいでんマイー！ロイエー！」

「ぐすっ……なにがということなのよう……」

やれやれ……すぐには立ち直りそうにないか

そのまま俺は身体の底から湧き上がる不思議な力に任せて、メイヨ一平原を北へと駆け抜けた。

明け方になり、ようやく疲れから我に返った俺が見たものは腕の中で小刻みに震えながら遠くを見つめているロイエの姿だった。

「ロ、ロイエ？」

「……あ、あ……あうあうあうあうあう」

「いや……はっはっ！朝日が眩しいぞ！ロイエ！」

「あうあうあうあうあう」

あ……こりや速く走りすぎたかあ……

可哀想なのでクールダウンも兼ねて走るペースを落としてみる。腕の中のロイエはまだしばらくは帰ってきそうになかった。

それにしても久しぶりにこんなに走ったなあ……羅刹に会いに行く時、以来かあ

空を見上げて大きく深呼吸してみる。

うん、やっぱり俺は身体を動かすのが好きらしい。

「うっし！もうひとつ走りいくかあ」

そう口にした定臣の顔は爽やかそのものだった。

「だったじゃなあああい！！」

余程、定臣の走りに恐怖を覚えたのだろう。帰還したロイエルはなにやら色々と超越したつつこみを披露した。

「すごいところにつつこんだなあ」

「サダオミ！ストップよ！ストップ！」

「お？停まるのか」

「ええ……あの距離を一晚でとかありえないんだけど」

「ん？」

「到着よ」

そう言ったロイエルの視線の先には、まだ遠目ではあるものの漆黒の壁の様に見える建造物が在った。

「あれが……『エドラルザの城壁』よ」

遂に勇者公募開始当日を迎えた。ポレフとはぐれたままに定臣はいつもの様に只々、状況に流されていく。

ロイエルの願いを聞き入れ、目的地に辿り着いたその頃には定臣の脳内にポレフの居場所はすっかりと無くなっていた。

ラナクロア暦635年、水の月三の雷の日 勇者公募開始当日
早朝。

「はあ！？『ファステル』持ってないの??」

ようやく城壁の前に辿りついた俺達だったが、門前でももの見事に立ち往生していた。

「ロイエさんや、それはなにかね」

「なんで老人口調……」

ロイエはしばらく頭を抱えていたけど、すぐに立ち直ると仕方ないかと肩を竦めながら色々と説明してくれた。どうでもいいが俺耐性ついてきてないか？ロイエ。

話によると城壁の内側に入るには『ファステル』とかいう王国魔術刻印つてのがいるらしい。

「なにそれ？印籠みたいなものか？」

そう尋ねた俺に『印籠つてなによ！』などと悪態をつきつつも、怒り口調のくせにやたら丁寧にロイエは説明を続けてくれた。

魔術刻印というのは目に見えない刺青のようなものらしく、その刻印には様々な個人情報記録されているらしい。

刻印を身体に刻む時に痛みの類は無いらしいが、宗教上の問題で身体に刻み込めない者には自らの所持品に転載する事が許可されている。もちろんその際には、様々な手続きやら手間賃やらをとられるそうだが、はっきり言つて俺には関係ないな。

『ファステル』を所持していない者は『ファステル無し』と呼ばれ、城壁の内側ではあまりいいように思われていないそうだ。意味がわからん。ただのパスポートみたいなもんだろ？

まあそれは置いておくとして、その『ファステル無し』の俺が城壁の内側に入るには『エドウナ』とかいう名前のおっさんに許可をもらわないといけないらしい……

「で、その『エドウナ』さんはどこにいらつしやるんだ？」

あ、なんかロイエがおもしろい顔になった。

「ぜんつつつつぜん話し聞いてなあああい！！！」

「え？」

「え？じゃありません！『エドウナ』は人の名前じゃなくて地位よ！ち・い！」

「なんだそうなのかあ」

「そうよ！……まったくもっ」

などと言いながらロイエは城門を潜っていく……って！待て待て待て！俺を見捨てるなよロイエ！

「おゝい」

ショックで声が小さくなったよ！

「あゝ………どンドン背中が小さくなって………」

「ないわよ！声かけられてから一步も進んでないわよ！」

ノリの良い子です。

「いや、まあロイエよ。俺は城壁の内側に入れなくてさっき説明してくれたじゃん」

「え？ここは入ってもいいのよ？僕が許可するもの」

なにそれ。さっきまでの『ファステル』うんぬんの説明はいかに

「だって、この先は『カルケイオス』だもの……って言ってもどうせ知らないのよね」

なにやら一人でぶつくさ言っただけであきれてやがります。

『しょうがないなあサダオミは』などと理不尽な前置きをされた後、またしてもロイエの怒り丁寧解説（命名）が始まった。

そもそもラナクロア初の『エドラルザの城壁』を創り出したのがこの『カルケイオス』である。ああ確かそんな事、言っただけなあ

エドラルザが壁で国を囲み始めたその頃にはカルケイオスは既にその外周を壁で囲み終えていたらしい。そこに後付けで『エドラルザの城壁』が到達し、そして連結した。

つまり、『カルケイオス』は城壁の内側に在りながらにして独立した城壁を持つ世界に類を見ない都市なのだという。

そしてその『カルケイオス』に入るのに必要なのは『ファステル』などではなく『カルケイオス民』の許しなのだそうだ。

「で……その許しって」

「許可するわ。ついてきて」

まさかの口頭。

「いや、まあそれでいいならいいんだけどな？」

そんなこんなでロイエの小さな小さな背中を追う形でてくてくと

城門を潜っていった。何故か心の声が聞こえたらしく、『誰がチビよ!』などと突然、振り返ってきたりもしたが適当に愛想笑いで受け流しておいた。

遠目に見た時は真っ黒な壁にしか見えなかった城壁だったが、城門内壁は何故か青く発光していた。まあどうせ変な魔法かかっているだろうけど。

五分程、歩いてようやく城壁を抜けると図書館の様な外観の建物が並んだ大通りがひよつこりと顔をだした。にしてもこのラナクロア。各街ごとに建物の種類が違いすぎる。

物珍しくてきよろきよろと田舎者よろしく辺りを見回していた俺の手を引き、ロイエはずんずんと大通りを歩いていった。

そうしてよ〜やくエドラルザ王国国立魔科学専攻学院とやらの前まで来たわけだが……

俺、なんでここ来たんだっけ？

ロイエは手続きがあるとか言っただけで俺にここで待ってるように言うて奥にいつちまったしなあ……というか……なんか……

眠い。

そういえば色々あって、野営地を出発してから寝てないもんなあ

……

「ちょっと寝るか……」

まあそんな感じで無事にロイ工を送り届けた俺は思いっきり眠りこけちまったわけだ……

起きた時にまた色々と慌しい事になるわけだが、それはまあ別の話だな。

最初の課題 I

定臣は突然、ロイエルに依頼された護衛を無事にやり遂げた。

本人の意思とは無関係に辿りついた先はラナクロアの魔術の心臓部と呼ばれる『カルケイオス』という都市だった。

エドラルザ王国国立魔科学専攻学院の校舎前、そこでロイエルを待つ間に定臣はゆっくりと眠りの世界へと堕ちていった。

その頃、エドラルザ王国首都『エドラルザ』サキュリアス支社に併設する、サキュリアス社員専用魔術訓練場では、一人の女性が魔術を行使し続けていた。

ゴウウウン！

防音の魔法が施されているはずの場内を雷属性の魔術が震わせる。

標的役を買ってでている魔法人形の損傷具合からは、彼女がどれだけの魔術を行使し続けているのかが容易に伺えた。

ライアット・サリス。

誰もが認めるクレハ・ラナトスの右腕にしてポーター結社『サキユリアス』副社長。

薄い緑色の髪を耳にかからない程度に切りそろえ、その前髪は右目だけを覆う様に垂らした彼女のその表情は相変わらずに無表情なものだった。しかしながらその額には汗が玉の様に広がり肩で大きく息をし、膝は笑い続けていた。

ゴウウウン！

そんな自身の状態に気がついていないかの様に彼女は魔術を行使し続ける。

「くっ……」

明らかな魔術過多。遂にライアットは膝を折り、その場に座り込んでしまった。

震える自らの手を哀しげな瞳で、しかし無表情なその顔でじっと見つめながら彼女は何を思うのか……

「私は……」

物心ついた頃には魔術を学んでいた。そして誰よりも努力してきた。

エドラルザ王国国立魔科学専攻学院を主席で卒業できた事は、それを裏づけする何よりの証拠であり、自らの誇りでもあった。

それが目に留まり、あの方に声をかけて頂いた……

とはいえ、『カルケイオス民』の私を国務ではなく個人で雇用するにはミレイナ様の許可が必要だった。

「ふふ……今でもたまたま悪夢を見ている様ですね」

許可を頂くまでにはそれはもう……それはもう……

エドラルザ王国国立魔科学専攻学院主席の個人雇用に成功した事は当然、ラナクロアを騒がせた。

私があの方から初めて与えられた仕事は『それ』を煽れ（あおれ）という内容だった。

怪訝な顔つきで首を傾げていた私にあの方は『俺様、目立つの好きな』などとおどけた様子で軽い口調で言ってきた。

散々、手を尽くさされ、ラナクロア中に噂を広め終えた時に『俺様、もっと目立ちたかった』と言われ、驚かされた事は今でも昨日の事のように覚えている。

不思議な人だった……

はじめはその軽い調子が嫌いで仕方無かった……

共に仕事をしていく内に自分でも気がつかない内に信頼してしまっていた……

『クレハ、好きな人に冷たくされたら悲しいんだぞ！』

不意に脳内にポレフ少年の言葉が蘇る。

「私はあの方を……？」

信頼している。

尊敬もしている。

ずっと傍で支えていたと思っていた……

「それはつまり……？」

……好き？

「い……いやいやいやいや……ないです！ありえないです！」

ゴウウウン！

ゴウウウン！

ゴウウウン！

「ハア、ハア、ハア……」

私は何をやってるんだろう……

自分の今の心情が理解できない。もやもやする何かを払拭しようと半ば自棄^{やひ}になりながら訓練に励んでみてはみたものの……

結論は出ない。

しかし

私はあの人を愛してはいない……何故なら、女性を見かける度に軽い調子で声をかけるあの方を見ても嫉妬の様な感情を抱く事は無かった。

人を愛した事はないが、知識の上では愛している人に対してそういった感情を抱くものだという。

「馬鹿馬鹿しい……そろそろ寝ましょう。」

思えば丸二日程、眠っていない。睡眠不足な上に魔力がきれるまで魔術を行使し続けるとはまったくもって自分らしくない……

苦笑いに軽く口元を緩めながら訓練場を後にしようとしたその時、思い出さない様に努めていたクレハ様のあの時の言葉が脳裏に蘇った。

『ああ　あの二人は放っておいても大丈夫だ』

それはマノフに襲撃された際に、エレシ様達をどうするのかと問
いただいた時のクレハ様の返答。

『エレシちゃん達は放っておいても後で野営地で合流できる
それよりも早く隊を整えてマノフを追うぞお！』

確かにエレシ様はこのラナクロアでも屈指の魔力量を誇っている。
しかしそれは、こう言っては失礼だが『マイスター』にしてはな
のだと私は思っていた。

しかしクレハ様はそのエレシ様の實力に絶大な信頼を寄せている

……

なんだ、それが悔しかったのか……

我ながら大人気ない……

「本当に馬鹿馬鹿しい……」

そう結論づけて今度こそ、その場を立ち去ろうとしたものの、や
はり心のもやもやが晴れない。

「……………これは何でしょう」

『エレシ・レイヴァルヴァン』その人物が自分の中で引っかかっ
ている。エレシ様とクレハ様の間にある独特の空気を思い出すと胸が
チクリと痛む。

その『なにか』を払拭する様に再び振り返ると私は魔術を行使した。

ゴウウウン！

ゴウウウン！

ゴウウウン！

こんな事は無意味だ。何故、私は力任せに魔力を行使し続けているのだろうか……

「わからない……」

ゴウウウン！

ゴウウウン！

ゴウウウン！

「わからない……」

ゴウウウン！

ゴウウウン！

ゴウウウン！

「ハア、ハア、ハア……」

『なあくに荒れてんだよあく、ライアットオ』

これはまいった。

いつからそこにいたのだろう。無様な今の自分の姿を人に見せるつもりは無かったのだが……

振り返った先には先程から私の思考を支配している『クレハ・ラナトス』その人が腕を組んで佇んでいた。

「寝てないだろあく？らしくねえくなあ、なあくに無理してんだよあ？」

相変わらず表情が読めない人だ。

まあ、いつもの事ですね。

「問題無いです。」

「こつ答えるのもいつもの事……」

「ライアット」

「はい？」

名前を呼んだクレハ様の表情は、重大な決断を下した後の『あの』顔つきになっていた。

「お前には常々言ってきたが……今日からしばらくサキュリアスを離れる」

「承知しております。」

そう答えるとあの人はいつも短くこう答えるのです『頼んだぞ』と……

短く淡白なやり取りだが私はそれを気に入っていた。だからその時もそう返事されるのを期待していた。

それなのに……

「俺様が一番、信頼しているのはお前だ。そしてその信頼に必ず結果で応えてくれるのがお前だ」

啞然とした。

私はクレハ様が部下を褒める所を見たことが無かった。

どうしてこの人は……

求めている答えはこうも的確に導きだせるのだろうか……

「頼んだぞ。ライアット」

私はやはり、この人を尊敬している。

「ひ、一言」

あれ？

「お、多いですよ……」

これは何だろう。

「お、おいおいおいおい！ラ～イアットオ～！泣くなよ！泣くな
つてえ～！」

泣いている？

「泣いてないです。」

「いやいやいやいや！涙流してるってばあ～」

「いえ。」

ぎゅっ

「ったくよお～！女の涙は卑怯だろうがよお～！ライアットオ～」

抱きしめられた。

そうやってこの人は……

「……」

「お～よしよし～！」

頭を撫でられた。

随分と手馴れていますね……

「何人の女性にこう接してきたのでしょうか」

この感情は何だろう。

「え？」

ゴウウウン！

「うっわ！いきなりなあにすんだよお！ライトアット！」

「わかりません。」

ゴウウウン！

ゴウウウン！

ゴウウウン！

「ちょ！撃つなって！意味がわかんねえぞおお！！」

「すみません。わかりません。」

ゴウウウン！

ゴウウウン！

ゴウウウン！

ゴウウウン！

ゴウウウン！

ゴウウウン！

「あぶね〜っておいしい！」

まったく、ふざけた人です。

その場を一步も動かずに軽くすべて捌かれるとは……

「サキユリアスはお任せください。留守は私が守ります」

「やれやれだぜ〜、それだけ元気なら大丈夫そうだなあ？」

私は……

「頼んだぞ？ラ・イ・ア・ツ・ト」

やはりこの人を……

「了解しました。」

いえ、やはり無いですね。

勇者公募開始当日の早朝。エドラルザ王国首都『エドラルザ』サキュリアス支社に併設されている『サキュリアス社員専用魔術訓練場』内でライアット・サリスは一人、思い悩んでいた。

不意に訪れたクレハとのやり取りの中、彼女は自身の心の在り方を再確認する。

一頻り（ひとしきり）クレハに魔術を行使し終えたライアットの表情は晴れやかなものになっていた。

エドラルザ王国首都『エドラルザ』城下町、ここには様々な市が立ち並んでいる。

開店時間の異なるそれぞれの店がようやく目を覚まし始めたその頃、各地に点在している王国公布の際に使用される放送装置から魔法で創られた特殊音が鳴り響いた。

通称『魔伝音』。

王国公布の中でも、特に重要度の高い内容を伝える際に流すその特殊音が一頻り鳴り響き、民の注目を集め終えた後に、誰もが知る

英雄の音声が流れた。

『え〜……オホンツ！む？これはもう繋がっているのか？（ド、ドナポス様！繋がってます！繋がってます！）む？そうか……オホンツ！……エドラルザ王国騎士団団長『ドナポス・ニーゼルフ』である。

いよいよ、先日よりワシが公布について回った勇者公募開始の期日を迎えた……すう〜……今！この時より城門を開放するー！！……（ドナポス様！まだ内容を伝え終えていません！満足な顔してないで続きを！）……む？あ〜そうか。志願者は次の魔伝音が鳴るまでに登城するように。以上だ』

こうして、いよいよ勇者の公募が開始された。

放送を聞き終えた志願者達は我先にと続々と足を連ね登城して行く。

傭兵として名を馳せた者。魔術師として名を馳せた者。そして中には普段、足を踏み入れる機会すら無い王城に入る絶好のチャンスだと物見遊山で参加する者の姿まであった。

様々な者が様々な思いを胸に秘め、エドラルザ王国、初の勇者を目指す。

多くの志願者が城へと続く城下町の大通りを闊歩して行くその中に、明らかに周りから浮いている二人組の姿があった。

姉と弟。

少なくとも志願者同士はライバルだと、殺伐な雰囲気醸し出す周囲をよそに、ポレフとエレシの二人はいつもの調子でとことこと登城して行く。

しかしながら姉の横を歩く、小さなこの少年の瞳には確かな決意を秘めた光が宿っていた。

「いよいよだ！今日から俺の時代が始まる！勇者『ポレフ・レイヴアルヴアン』出撃だ！」

「ふふ、ドナポス様は相変わらずですねポレフ」

俺の気合いもよそに姉ちゃんは、今日も相変わらずいつも通りだ。というかさっきの放送はドナポスのおっちゃんだったのか。

「おっちゃんと会えるのかあ〜！久しぶりだな！姉ちゃん！」

「ふふ、そうですねポレフ」

何が嬉しいのかわからないけど、姉ちゃんは昔っから俺が話しかけると嬉しそうな顔をする。

俺はそんな姉ちゃん的笑顔が好きだ。

俺が勇者のなりたい一番の理由……

『そういうの嫌なんだ！皆が安全に暮らしたり旅したりできるようにしたい！』

あの時、俺が定臣に言ったあの言葉は嘘じゃない。

でも一番の理由は他にある。

姉ちゃんは魔族が嫌いだ。

魔族は姉ちゃんから笑顔を奪うから俺も嫌いだ。

だから俺は魔族を……

「ポレフ？」

「うえ？」

なんか変な声が出た。

「なにか考え事ですか？ふふ、それとも緊張しているのですか？」

「なんでもないよ！姉ちゃん！」

「ふふ、そうですか」

姉ちゃんの観察眼は時々、心が読めるんじゃないかって勘違いさせられるくらいすごい。

だから隠し事なんてしようとするだけ無駄だし、すると包丁飛ん

でくるから昔から姉ちゃんには隠し事をしたことが無い。

だから……

「姉ちゃん」

俺は意を決して言った。

「何ですか？ポレフ」

「俺が勇者になるためにだされる課題に、なるべく姉ちゃんは手を出さないで欲しいんだ！姉ちゃんに頼ってばっかじゃ、いつまでたっても勇者になんかなれないと思うんだ」

「……」

まずい。これはまずい。

「ポ……ポレフ……立派になって！」

姉ちゃんは涙を流しながら俺に近づいてきて……

「ぎゃ~~~~！姉ちゃん抱きつくなあああー！」

人目も憚らず抱きしめられまくった。

「ね、姉ちゃんもういい？」

こつなつた姉ちゃんはしばらく放っておくしかない。

そう思って放っておいたんだけど……

周りを見てみると明らかに歩いていたら志願者達の姿が無くなっている。

「ね、姉ちゃん！」

「ふふ、もう少しだけ」

「締め切られるって！誰もいなくなってるって！」

俺のその言葉を聞くと姉ちゃんは

「あら？あらあらあら？……行きましようかポレフ」

なんて言いながらいつもの調子で微笑みながら頭を撫でてくる。

ほんと力抜けるよなあ……

そうして俺達はゆっくり急いでエドラルザ城に向かっていった。

大通りを抜けると視界の遙か彼方に、僅かにエドラルザ城の影が見えてきた。そこに繋がる一本道には、数々の勇者候補が様々の武器を携えて登城して行く後ろ姿が点々と見えた。

あれ皆、ライバルかあ……わくわくしてきた！

目を輝かせていた俺の頭に軽く手を添えると、姉ちゃんは珍しく真顔で俺にこう言ってきた。

「ポレフ、先程あなたは手をだすなと言いましたが……私の力はあるのためにあるのです……極力……極力！控えますが……どうしても我慢できない時は許してくださいね……ううっ」

これは頷いておかないと、えらい事になると本能的にそう感じた俺は即座に激しく首を縦に振りまくった。

「うんうんうんうんうん！その時は頼むよ！姉ちゃん！」

「はい」

そう言った姉ちゃんの顔は幸せそのものだった。

小さな頃から話には聞いていたけど、俺にとってこれが初めての登城だった。遠目に見てもかなり迫力があつたけど、近付いてみるとその迫力は……

「すつげえ〜な！姉ちゃん！これがエドラルザ城か！」

「ふふ、そうですよポレフ」

エドラルザ城の外壁は『エドラルザの城壁』と同じ素材を使っているなどという姉の解説を聞きつつ、見上げたそれは世界統一国家『エドラルザ王国』を体現したと言わんばかりの巨大さと、どこか悪寒すら感じる厳かな雰囲気兼ね備えていた。

「くりっ

思わず息を飲む。

俺の目にはこの時、エドラルザ城がマノフ以上に危険な怪物に見えていた。

「さあ、ポレフ行きますよ」

そんな俺なんてお構いなしに姉ちゃんはいつも通りだった。

いつもマイペースでおっとりした姉ちゃん。

俺はこの姉ちゃんに何度、拍子抜けさせられてきただろう。

でも……

姉ちゃんの手を見つめると何でもできる気がしてくる。

「やっつてやるぞ！」

「よし！行くぞ！姉ちゃん！」

「はい」

時はきた。エドラルザ王国全土に騎士団団長『ドナポス・ニーゼル』の音が響く。

勇者の公募を開始する旨を伝えたその放送の後、候補者達は各々の想いを胸に登城していった。

外から見たエドラルザ城は黒い大きな怪物に見えた。

城門を潜ってからというものの、ずっと悪寒が消えない。

中に入ってからは、その大きな黒い怪物の腹の中にいるような錯覚に捉われている。

俺は緊張しているのか？

にしても……

ここは世界統一国家『エドラルザ王国』の王城だったはずだ。厳かな雰囲気と他の面々の殺伐とした空気の中てられたのだろうか。

ここに来た者は夢や希望を抱いた者ばかりではない。それは理解していたつもりだった。

しかし……

ここには狂気と殺意が充満している。

これではまるで……

想像していた魔王城そのものではないか……

「こんにちは。初めまして」

吞まれかけていた俺に不意に声がかかった。

この空気の中、まさか姉ちゃん以外に声をかけてくる者がいるとは思っていなかった。

俺は思わず返事するのを戸惑った。

「なんだよお！緊張してんなあ〜！弟よあ〜！」

え？

声と共に頭をわしゃわしゃされる。

「ク、クレハ？」

振り向いた先には、真つ赤な服のみみあげのその人が、白い歯を輝かせながら親指を立てて佇んでいた。

「ほらほらあ〜！勇者になるんだろあ〜？弟よっ！」

「お、おうー！」

クレハはすごい。

この旅でその事は嫌というほど思い知らされたし、俺自身クレハの事をすっかりと尊敬し始めていた。

おどけたその様子に緊張が一気に緩和していくのを感じた。ようやく平常を取り戻した脳が正常に働き始める。

そういえばクレハに話かけられる前に見知らぬ兄ちゃんに挨拶さ

れた。

俺の背後には姉ちゃんがいる。

姉ちゃんは挨拶や言葉遣いには相当に厳しい。

もう一度言う、背後には姉ちゃんがいる。

そつと振り返った俺が見たものは……

「ポレフ？」

「わあ〜！わあ〜！遅れてすいません！初めまして！俺の名前はポレフ・レイヴァルヴァンです！！」

エドラルザ城が黒い怪物に見えたって？はっ！もつと怖い怪物を俺は姉ちゃんの瞳の中に見たぜ！

「ポレフ？私の方を向いて挨拶しても意味がありませんよ？」

「そうでした！そうでしたあああ！」

慌てて振り返る。だってしょうがないだろ？怖いし。

黒髪？

「ふふ、改めて初めまして。僕の名前はオルティス・クライシスと申します」

爽やかな笑顔のオルティスと名乗った兄ちゃんがすつと手を差し

出してくる。

慌ててその手を握り返した俺の第一印象は

すっげ〜〜〜いい人そう！

だった。

「君の事はクレハから伺っています。僕も君と同じく、勇者を目指す者です。お互い頑張りましょう」

そうか、それはそうだ。

ここにいる以上は当然、オルティスもライバルの一人だ。

でもなんでだろう。初対面のはずなのに俺はこの人と敵対したくない。

「どうかしましたか？」

黙りこんだ俺に不思議そうにオルティスがそう言ってきた。

「い、いや。あんたともライバルになるのか〜ってさ」

背後から殺気！

「ポレフ？初対面で『あんた』などという言葉遣いを教えたつもりはありませんよ？」

「い、いえいえいえ！いいんですよ〜！フィオラルネさん！」

「ば、馬鹿！若っ！」

俺が言葉を訂正する前にオルティスが口を挟む。それを慌ててクレハが制した。

にしてもフィオラルネって懐かしいなあ

それは姉ちゃんの昔の姓だ。ラナクロアでは同じ苗字をもつ者は存在しない。

それを……

姉ちゃんは、マイスターとしての貢献度の高さを評価されて『エドーナ』を授けられる時にそれを返上してまで俺と同じ姓を名乗る事を望んだ。

あの時は大騒ぎになったなあ

しばらくは自宅に押し寄せる魔法通信社の取材がすごすぎて仕事にならなかつたのを思い出した。

『だって弟と同じが良かったんです』

姉ちゃんのその一言に、取材陣は皆して啞然としながら首を傾げていた。

正直、あれには笑わされた。まあ……嬉しかったんだけどなっ！

それを思い出し、にやにやしていた俺の背後で若干、トーンを落

として姉ちゃんが口を開いた。

「フィオ……ラルネ？」

「あゝははあゝ！エレシちゃんエレシちゃん！怒んなんでやってくれってえゝ……若は昔からエレシちゃんのファンやってたからさあゝ、うつかりってやつだようつかりさん！……なあ？若」

「はっ、はいい！！すいません！レイヴァルヴァンさん！」

目の前の大の男、二人の顔が完全に引きつっている。どうやらオルティスも姉ちゃんの怖さはクレハから学習済みらしい。うん、予習は大事だね。

「オルティスさんごめん！俺が『あんた』なんて言ったせいだ！」

不憫なのでここは俺から謝っておこう。

「いえいえ、僕の事はオルティスと呼び捨てにしてもらっても。僕もポレフと呼び捨てにしていいますか？」

爽やかな笑顔。

「ああ！それでいいぜ！よろしくな！オルティス！」

「ふふ、よろしくお願ひしますね。ポレフ」

再び握手を交わす。っていつかよろしくしていいのか？ライバルなんだぞ、オルティスは。

うっんと首を傾げていた俺の横を通り抜け、オルティスは姉ちゃんの前まで歩み出た。

「エレシ・レイヴァルヴァンさん。初めまして、オルティス・クライスと申します。先程はほんつとうに！失礼しましたあ！」

相変わらずに爽やかな笑顔で手を差し出す。姉ちゃんは俺を一瞥した後いつもの営業スマイルを浮かべ、オルティスのその手をそっと握り返した。

「ふふ、私はエレシ・レイヴァルヴァンと申します。オルティス様ポレフと仲良くしてあげてくださいね」

「オ、オオオオオルティス様だなんて！様だなんてとんでもないです！あ、ああああ握手してもらっちゃった！握手してもらっちゃったよ！クレハ！」

なにやら突然、キャラが崩れた。相当、姉ちゃんの事が好きらしい。

まあそんな奴は見飽きる程、見てきたけど。

「おっおっ、よかつたなあ若あっ」

などと言いながらも、クレハはちゃっかりと姉ちゃんとオルティスが繋ぐ手に自分の手を乗せている。

にしても……

絵になる。

姉ちゃんとオルティス。

姉ちゃんの横に並んで似合うと思ったのは男ではオルティスが初めてだ。まあ本人には言っていないけど女なら定臣が見劣りしなかった。あいつも相当に美人だからなあ。

ちなみに横に割り込んでいるもみあげはもちろん脳内で削除している。

ぼけ〜っと二人（三人）を見ていた俺に気づき、オルティスが再び歩み寄って来た。

「ポレフ」

「うえ？」

変な声が出た。

「先程、君は僕の事をライバルと言いましたが……」

「ああ」

「お互いに切磋琢磨していく意味でのライバルなら大歓迎なのですが、勇者になるためのライバルという意味なのだとしたら……とても残念です」

こいつは何を言っているんだろう。

首を傾げる俺をよそにオルティスは更に続けた。

「勇者は平和を取り戻すために募集されています。志が同じ者達が争うなんて馬鹿馬鹿しい事、この上ないです」

「あっ」

思わず声が出た。顔から火がでる程、恥ずかしいとはこの事なのかと初めて知った。

なんで俺は競う気になっていたんだ？本気で自分が恥ずかしい。俺達は手を取り合うべきなんだ。

素直に感激した。

このオルティスという人物に益々、中てられた。この人は俺の数歩、先を歩いている。

「すげえ！」

「え？」

「オルティス！すげえ！かっけくな！お前！」

「い、いえ」

「俺もお前みたいになりたい！お互い頑張ろうな！」

「は、はは……頑張らしましょう！」

再び固い握手を交わした。

その時、にかつと笑い合っていた俺達の間を引き裂く様に独特の音が鳴り響いた。

「魔伝音きたねえ……もぉ〜締め切りかぁ？ちよつとせつかちすぎじゃねえの」

クレハのその言葉でようやく今の音が『魔伝音』だったと理解した。

それはつまり

『オホンツ！あゝあゝ、それでは、只今より勇者選考の課題を発表する。なんと、王から直々に発表されるようだ！』

いよいよか。

というか今の声、またドナポスのおちゃんか。

ごくりと生唾を飲む。

不意に背後から両肩にぼんと優しく手を置かれた。

わかってる。頑張るよ、姉ちゃん。

『エドラルザ王国、国王『エドラルザ・ゾルネバツハ・ドリヒルデ十四世』である。今より、候補者達には互いに武勇を競ってもらおう。候補者の残数が五名になった地点で一次選考は終了とする。尚、これは実戦を想定した試練である』

そこまで言うと王様は一呼吸おいた。

王様を初めて見る、俺は好奇心から目を凝らしながらその表情を伺った。

王冠がよく映える白髪に白髭。遠目でよくは見えないが彫りの深いその顔は青白く、とても健康的には見えなかった。

王様はその口元を不気味に歪めると

『敵を倒す手段は問わん。生死も問わん。最後に立っていた候補者五名を合格とする。それでは始める』

そう宣言した。

王様は確かに『敵』と言った。

オルティスの言葉に感激した俺の喜びを返せ！思わずそう言いたくなる。

にしても、あの英雄『ドナポス・ニーゼルフ』がよく課題の内容に殺し合いを入れるなんて許可したなあ。やっぱり王様の命令は聞くしかないのかなあ

少し残念だと視線をドナポスに振ってみる。

ドナポスは遠目に見てもはっきりとわかる程に口をあんぐり開いて驚いていた。

ああ……おっちゃん知らなかったのか。

ゴスツ

おっちゃんの方を振り向いていた俺を鈍い衝撃が襲った。

「ポレフ！」

あ、姉ちゃんの声が聞こえる。

姉ちゃんの驚いたその表情を見て、ようやく自分が鈍器で殴られた事に気がついた。

妙に時間がゆっくりと流れている気がする。とりあえずは誰が殴ったのかと確認してみる。

振り返った先では、大柄な野性味たっぷりと云った感じの大男が棍棒を振り下ろしていた。

「へへっ！まずは一匹。ガキのくせにこんな所に来るから死ぬはめになんだよ」

あれで殴られたのか。やれやれ、俺じゃなかったら死んでたぞ

「いきなり何すんだよおおお！」

冷静に分析していった割りに口をついて出た言葉は相変わらず幼稚なものだった。

「なっ！？」

大男があきらかに狼狽している。そりゃ普通に考えれば即死コ

スだもんな今の

でも……

俺は

最初の課題 I (後書き)

ご意見ご感想お待ちしております！(、・・・)(ゞ

さて、遂にお気に入りが100件突破しましたので改めてこの場を
使って御礼を！

書き始めた時の目標はお気に入り10件でした。

初めは全く、お気に入り頂けず、投稿をやめようと思った時もあり
ました。そんな矢先、初めて感想を頂いたのが からすけさん
です。

あの時のあの感想が無ければ神様機構はここまで続いていた
と思いません。本当にありがとうございます！

そして赤坂七夕さん！遂に100件突破しましたよおお！いつも
感想ありがとうございます！

他にも感想を頂いた方々、そしてお気に入りや評価を頂いた方々、
皆様のお陰でここまで頑張ってきたと思っています！本当にあり
がとうございました！

指摘頂いた点は少しでも良くなる様に精進し、また褒めて頂いた点
は少しでも伸ばしていければと思っております(、・・・)(ゞ

ストーリー展開が異様に遅い神様機構ですが、これからも見捨てず
に読んでいってもらえれば嬉しいです！

ではでは(、・・・)(ノシ

最初の課題 I I

エドラルザ王国王城の一角にある闘技場に集められた勇者候補達。王、直々に発表された最初の課題内容は、候補者全員による生き残りを賭けたバトルロワイアルだった。

殺し合いを視野に入れたその課題内容に驚きつつも、ポレフは確認する様にドナポスに視線を送る。刹那、ポレフの後頭部を大男が放った鈍器が弾き飛ばした。

小さな命を摘み取った事で悦に浸っていた大男であったが次の瞬間、驚愕する事となる。

確かに摘み取られた小さな命。大男の手をどう零れたのか、殴り飛ばされた少年ことポレフ・レイヴァルヴァンは何事も無かったかのように立ち上がった。

「なんなんだよ！？お前は……！？」

そう口ずさんだおっさんは俺をじっと見た後、急にはっとなった様子で視線を俺の背後へと送るとそのまま硬直してしまった。

俺と話してたんじゃないのかよこのおっさん。そう思いつつも気になったから俺も振り返った。

硬直した。ピシツと硬直した。

え？何に硬直したって？そりゃあ……

『どうしても我慢できそうにありません。ポレフ』

振り返った先には瞳になみなみと殺気を宿した姉ちゃんがいたんだよ！それも両手に魔力を集束済みで！

え？それからどうなったかって？

姉ちゃんを見た大男は悲鳴を上げて気絶したし、俺は俺で慌てて姉ちゃんを止めにかかったりもした。

魔術は詠唱する魔術師が優秀な程、集束から発動までの時間が速い。そして姉ちゃんは所謂、優秀な魔術師の部類だった。

だから間に合わない。

必死に声を上げて姉ちゃんを制止しようとしたものの、俺の声よりも先に姉ちゃんの魔術は炸裂してしまった。

視界いっぱい眩い光が広がり……

視力を奪われる最中に見た姉ちゃんの顔には明らかに『ぶっ殺』と書かれてあった。

そしてその怒りのままに集束した魔力の総量は、俺が今までに見た中でも屈指のものだったと思う。

まともに炸裂していたならば、その場に居合わせた他の候補者もろとも一掃していたかもしれない……

でも……

それよりも先に動いた奴がいたんだ。

「クレハ様？どうして邪魔をするのですか？」

姉ちゃんのその声に見えにくくなった目を凝らして、ようやく何が起こったのか理解した。

姉ちゃんの真正面には、両手を重ねて大きく前に突き出したクレハの姿があった。信じられない事に、このもみあげは姉ちゃんの魔術を防ぎやがったんだ。

啞然とする俺と不機嫌そうな姉ちゃん。

そんな俺達に対してクレハは、片目を閉じて軽い調子で手をぶらぶらとさせながら口を開いた。

「かぁ〜！さすがエレシちゃん！効いたぁ……まあ怒るのもわか

るんだけどよお」

そう言っているとクレハはいつもの様に右手の人差し指をぴっと立て、
ウィンクする。

それを見て『うえ』って感じになっていた俺を他所にクレハは更に言葉を続けた。

「エレシちゃん、わりい〜んだけど」

「……はい」

「ここは若のステージなんだわ」

オルティスの？

そう思いつつもクレハの視線の先へと意識を送る。

そこにオルティスはいたんだ。

いたにはいたんだ。

でも……

「なんつっつだあれえええ!!」

思わず叫んだ。

オルティスが一人……

二人……

三人……

ああっもう！いっぱい！

兄弟多いんだなあなどと一瞬、思ってしまった自分の馬鹿さ加減が嫌になる。

よく見ると一人一人のオルティスは、向こう側の景色が伺える程に薄い。

ってことはあれは……

残像って……おいおい、どんだけ動き速いんだよ！

最初はあるなに速く動いて何してんだらうと呑気に見守っていた。

でもすぐに気がついた。

俺はここに何をしに来ているのか……

考えるまでも無い。俺はここに勇者になるために来ている。そしてそれはオルティスも同じだ。

今の俺にはオルティスのあの動きを捉える事は出来ない。でもあれは戦っているのだらう。それだけは理解できた。

だから見よう。今の俺には無理でも明日の俺は追いつけるように。そして明後日には追い抜ける様に……

手には確かに剣が握られている。でも斬ってる様には見えない。他の候補者達は自分の目の前を瞬速で駆け抜けていくオルティスに様々な表情を送っている。

訝しげに視線を送る者。驚く者。身構える者。逃げようとする者。それぞれに違った反応を見せてはいるが皆、一様にオルティスのその動きに翻弄されていた。

にしても速い。なにをどうすればあんなに速く動けるのだろうか。

ようやく目が慣れてきて少し遅れながらもオルティスの動きを追える様になってきた。

ってあれ？

『すみません、レイヴァルヴァンさん。こうした方がポレフも納得がいくと思いますので』

その声は俺の背後から聞こえた。

正面からこっちに向かって来たオルティスが俺の背後にいる？

いつすれ違ったのかわからなかった。

バタッ

振り返ってオルティスの姿を確認していた俺の背後から音が聞こえた。

慌てて振り返った俺が見たものは……

次々に倒れていく候補者達の姿だった。

気絶している？にしても……

倒れていく候補者達の姿はまるで糸がきれた人形の様で……

あまりにあっけなく……

そしてその波は徐々にこっちに押し寄せて……

『やりすぎだ……若』

俺の視線がいつもの高さにある間に聞いた、その日最後の声はクレハの不機嫌そうなの声だった。

バタツ……

ポレフが殴打された事に我を忘れたエレシは、怒りのあまり膨大な魔力を込めた魔術を放った。

必死に制止しようとしたポレフの抵抗も虚しく、エレシの魔術は無情にも炸裂する。

他の候補者もろとも粉碎すると思われたその魔術であったが、その威力を発揮する事は無かった。

辺り一面を包み込んだ眩い光が納まるとほぼ同時に陽気な声が木霊する。

そこにはエレシの魔術を一身に受け止め、防ぎきったクレハ・ラナトスの姿があった。

時を同じくして、他の候補者達の合間を縫う様に一陣の風が吹き抜けていた。

オルティス・クライシス。

風となった彼がようやく立ち止まったその時には、彼以外の候補者達は皆、地面に突っ伏していた。

『最後に立っていた五名を合格とする』

それが王が提示した最初の課題をクリアする条件だった。

じゃあ……

最後に五人、残っていないなかったらどうなるんだろう……

『ポレフ、僕は全員に均等な力で攻撃を加えました』

頭上からオルティスの声が降り注ぐ。不覚にも俺はその声を聞いて、やっと自分が倒されている事に気がついた。

「なんつ……!?!」

景色が揺らぐ。声がでない。

思えば今までの人生で自分が地面を這わされた事など一度も無かった。

意味がわからない。一体、何が起こった……

……
いや、寝てる場合じゃない。今は課題の最中、起き上がらないと

慣れない事態に困惑する脳を気合いで制して、なんとか自分の身体を動かそうとしてみる。

『そうです。君なら起き上がれるはず』

思う様に動かない身体に手間取っていた俺の頭上からそう声が聞こえた。見上げると、そこには笑顔で俺を覗き込む様に見下ろして

いるオルティスの姿があった。

っってお前がやったんだろっがああああ!!

あゝなんか力湧いてきたわ、くっそオルティスくらあああ!

「ふらふらと立ち上がる。」

「ふふふ、やりますね〜」

あゝむかつく。なんだその爽やかな笑顔は!

バタッ

再び倒れた。

自分の意思とは反対に、身体が脳の指令を受け付けてくれるには、もうしばらく時間がかかりそうだった。

「つくしょう!」

とりあえずは一方的にやられたのが悔しいからオルティスを睨んでみる。すると再び視界に捉えたオルティスは先程の笑顔もどこへやら、何故か額に冷や汗を浮かべ狼狽した様子になっていた。

「これは……トラウマになりそうです」

そう言ったオルティスの視線は俺に向けられてはいない。

その視線の先には……

「鬼！？……じゃなくて姉ちゃん！？」

久しぶりに見たマジギレ姉ちゃんがいた。そして俺と姉ちゃんの間を阻む様にもみあげもいる。

「エレシちゃん、これマジでポレフのためなんだって！ここはほらっ！抑えて抑えて！ね？」

「そこをどいて下さいクレハ様」

「まあまあ……そう言わずにさあ」

「どいて下さい」

背筋が凍る様なその目がクレハを射抜く。姉ちゃんにはめっぼう弱いはずのクレハの返答は意外なものだった。

「……聞けないねえ」

「クレハ様？」

「悪いけどそれは聞けない。ここは弟が頑張らないといけないシーンなんだよあゝエレシちゃん」

「……」

カツ！

会話など必要なし。

それがいきなりクレハに向かって魔術を放った姉ちゃんの意味表
示だった。

でも……

「く〜……効いたあ」

クレハはそれを又しても受け止めた。

「ポレフ、まずいです。できるだけ早く立ち上がって下さい」

二人のその様子に焦ったオルティスが急かす様にそう言ってきた。

自分でやっというてよく言うなこの爽やか腹黒男!!

「くう……っそおおおお!!」

よし!いける!

視界は安定してきた。後はこの膝さえなんとかかなれば!

バタッ

くそ……いつまで笑ってんだよこの膝!

『がつ!?!』

え?

自分の膝を睨みつけていた俺の前を、呻く様な声を上げながら赤いなかが通過した。

慌てて視線で追いかける。

視線に捉えた赤はクレハの服の色だった。

さすがに防ぎきれなくなったのだろう。吹っ飛んだクレハは地面に突っ伏している。

そんなクレハに向かって姉ちゃんはコツコツと足音を鳴らし、一歩ずつ近づきながら口を開いた。

「クレハ様……あなたはいつまで私の邪魔をするつもりですか」

その時、聞こえてきた姉ちゃんの声は感情が欠落した様な声で……

俺はその声をいつか聞いた事があって……

！？

記憶の断片が脳裏を過ぎる。

一瞬、思い出した景色は一面の赤。緋。紅。

クレハの服の色なんかとは比べ物にならない深く生臭く、そして鮮やかな紅だった。

嫌だ。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。

俺は『これ』を思い出したくない。

やめてくれ。思い出したくないんだ!!

『弟が立ち上がるまで邪魔するぜ？エレシちゃん』

その声に意識を引き戻された。

今のは何だったんだ……

いや、それよりも

再び視線を二人に送る。先程、吹き飛ばされて地面に突っ伏していたクレハは、いつの間にか立ち上がり、服の汚れをぱんぱんと

手で叩きながら、いつもの軽い調子で姉ちゃんの事を見ている。

対する姉ちゃんは真顔でクレハをじっと見ていた。

姉ちゃんあの顔はまずい。俺は姉ちゃんあの顔を知っている。

あれは『敵』を認識した時の顔だ。

まずい。

まずい。まずい。まずい。

このままだとクレハが……

動け俺！

「……あ、あああああああ！……！」

膝を両手で思い切り叩きながら立ち上がる。気合いで足りない分は大声で補った。

背中は大きく曲がったまま。膝は今も笑っている。

それでも俺は

なんとか立ち上がる事ができた。

「姉ちゃん！……！」

とりあえず叫ぶ。

全力で叫ぶ。

もう俺は姉ちゃんに……あれ？なんだっけ
まあいいか。

「ポレフ？少し待っていて下さい。今こちらを終わらせますので」

ああ、終わらせるとか言っちゃってるよあの人。

止めさせないと。どうしよう。

……どうする。

「姉ちゃん！！大好きだあああああ！！！！」

何言ってるんだよ俺。

こんな事、言っても姉ちゃんが止まるわけ……

「私もです ポレフ 」

止まったーーーーー！！！！！！！！！！

先程の鬼の形相もどこへやら、最高のスマイルを浮かべた姉ちゃんが軽い足取りで俺の方へと走ってくる。

ガシッ！

ものっすごい抱きしめられました。

オルティスがとても爽やかな笑顔でこっちを見てやがる。恥ずかしいからあっちむけボケ。

姉ちゃん越しに見たクレハは『ああ……死ぬかと思ったあ』と愚痴る様に小声で呟くと、へなへなと地面に座り込んでいた。

っていつか課題の最中に抱きしめられ続けている今のこの状況はどうなんだろう。

そんな事を思いつつも結局、姉ちゃんが満足するまで抱きしめられ続けていた。

「ポレフ」

ようやく姉ちゃんから開放された俺に、オルティスが呼びかけてきた。振り返ってみるとオルティスは、またしても爽やかな笑顔を浮かべつつ、ずっと右手を差し出してきた。

ここにきて握手かよ。

さっき殴り倒した事、忘れてないかこいつ。

まあ……

この笑顔には毒気を抜かれるな。

仕方がないので握手しようとする。手を差し出そうとした俺とオルティスの間にずっと姉ちゃんが立ちはだかった。

「オルティス君」

珍しく姉ちゃんが人の名前を『君』付けで呼んだ。首を傾げていた俺を納得させる一言が次の瞬間、姉ちゃんの口から放たれた。

「私、あなた嫌いです」

姉ちゃんが人を嫌いって言うところ初めて見た！

って、あ、オルティス泣いた。

あ、オルティス地面に『』の字を書き始めた。

悪いけどおもしろすぎる。必死に笑いを堪えようとするフリをしていた（爆笑している）俺の耳に聞きなれない『あの』音が飛び込んできた。

『魔伝音』

それは何を意味するのか。答えはすぐに流れたドナポスのおつちやんの声で明らかになった。

『あ〜……あ〜……ふむ、現在立っている者の人数は六名か。内、エレシ殿……じゃなくてエレシ・レイヴァルヴァン。クレハ・ラナトスの両名は付き添いの者と聞いておる。よって他、四名を一次課題通過者とする！』

オルティスはエレシに嫌われた。

ちょっと待て！なんだよその前回のあらすじ！投げやりすぎるだろ！！

作者があほすぎるから俺が代わりに教えるぜ！

候補者達は全員、俺も含めてオルティスに倒されたんだ……

その後、オルティスは俺に立ち上がれと言ってきやがった。自分でやったくせにな！

でもそう簡単には立ち上がれない。悔しいけどあいつの攻撃は半端じゃなかった。

それでも必死に立ち上がるうとしていた俺の目に、マジギレしている姉ちゃんの姿が映りこんできた。

オルティスに一直線に向かっていく姉ちゃん。それを阻止したのがクレハだった。

正直、あの形相の姉ちゃんの前に立ちはだかるとか、さすがとか言い様がない。

俺だったら間違はなく『無かつた事』にするな！絶対！

しばらく姉ちゃんの魔術を受け止めていたクレハだったけど、遂に防ぎきれなくなつて俺の目の前を通過する様に吹っ飛ばされたんだ。その時に見えた眼下に伏せるクレハの服の色……赤。

俺はこの時、何かを思い出しかけていた。

でも……

珍しく余裕の無いクレハの声にすぐに意識を引き戻された。見るとそこには『スイッチ』が切り替わっている姉ちゃんがいた。

これはまじでやばい。咄嗟にそう思った。俺は『その』姉ちゃんを知っていたからだ。

だからかどうかはわからない。単純に時間が経ってオルティスから受けたダメージが回復してただけかも知れないけれど、そこで何とか俺は立ち上がる事ができた。

まあ姉ちゃんを止める時に、何か叫んだ気がするけど忘れた。うん、忘れた。

……忘れるよ？

立ち上がった俺の耳に、あの独特の音が飛び込んできた。

『魔伝音』

その後続いたのがドナポスのおっちゃんの声。内容は最初の課題の合格者を告げるものだった。

課題終了時に会場で立っていた人間は六人。内、姉ちゃんとクレハを除いた四人が合格したらしい。

俺とオルティス……ん？あと二人いる？……そんな事より前回までのあらずじ解説が長すぎるって？お前が短すぎるんだよ！だから俺が頑張ったんだよ！……あっ！なに勝手にフェードアウトしてんだよ！おい！礼くらい言え……あっ……

『これはまた一風、変わった世界に来た様だね姉さま』

『……？持つてる？人が二人いるよ……兄さま』

ポレフ達から少し距離を置いた位置から、あちらを観察する様に二人組の姿があった。この二人組こそが残りの二名の合格者だ。

二人組は男と女。いや、幼さの残るその見た目からは少年と少女と言ったところだろうか。

銀色にやや青みがかかったような光沢を携えたお揃いの髪に、似た容姿を持つ顔。大きな瞳の色は深い緑色をしている。

少年の方は自然なカールのかかったボブカット。少女の方は肩の所で毛先を軽くカールさせたベールカールといったところ。

そしてその服装は、真っ白な十二単を動きやすく改良した様なものだった。場違いすぎる二人のその服装が周りの景色から明らかに浮いているのは言うまでもない。

同じ服装に見間違える程によく似た容姿。二人が双子である事は容易に伺えた。

『僕は黒髪の人と一緒に行くのかな？』

少年の方が陽気な様子で少女の方にそう告げる。

『……変わり者』

対する少女はどこか無機質に短くそう切り返した。

『それはお互い様だよ姉さま。それじゃ王道の方は姉さまの担当って事で』

『……わかった』

『それにしても初めてだね？レア世界』

『……うん』

『気をつけなよ？何かあったらいつもの所にすぐにね』

『わかった……兄さま』

『ん？なんだい？姉さま』

『気をつけてね』

『うん、僕は大丈夫だよ』

『そう……私も大丈夫』

おかしいですね……

あそのこの二人は僕が攻撃している時には、あの場に『存在』して
いなかった。しかし……

そう思考を巡らせるとオルティス・クライシスは、先程までの哀
しみもどこへやら、笑顔のままにじつくりと二人を観察していった。
見るからに双子ですね。少年の方は少しお調子者なんでしょうか。
対する少女の方は感情の起伏があまりなさそうですね。

ここに現れたという事は彼らも勇者を目指すために来たのでしょ
うか。

それならば『敵』になる可能性があるという事。

骨格からして近接戦闘に特化しているわけではないですね。恐ら

くは魔術特化した戦闘スタイル……突然、出現したあたり……独自の魔法でも使いこなせるのでしょうか。

「ふむ」

脳内で決して過信していない自身の実力と、彼らの予想できる範囲での戦闘行動をシュミレートしていく。すべての工程を終えたオルティスは先程よりも更に軽やかな笑顔を浮かべた。

その笑顔が示すもの。観察から分析に移行し、オルティス・クライシスが最終的に出した結論は『支障無し』というものだった。

しかしながらエドラルザ王国の兵士にも困ったものです。後から侵入しただけの者をうっかり合格にしてしまうとは……

……まあいいでしょう。

そう心の中で呟いたオルティスは昨夜、クレハと交わした会話の内容を思い出していた。

『仲間ができないなら敵にしなければいい』

「えっ？」

突然、そう言ったクレハに思わず僕は聞き返しました。

「だ〜か〜ら〜、エレシちゃんだよエレシちゃ〜ん！」

「ああ、フィオラル……レイヴァルヴァンさんの話ですか」

「なんだよなんだよなあ〜！若が拘ってたから提案してやってんのにい！」

そういえば先程までその話をしていたのです。もっともクレハに『絶対無理』と言われた時点で僕の中でその話は終わっていたのですが……

「かあ〜！ま〜た若の悪い癖かよ！……切り捨ててただろ」

笑顔を取り繕いつつ、思考を巡らせていた僕の顔を覗き込む様に見ると、クレハは声のトーンを落としてそう言いました。

全くもってこの人には敵いませんね。

「その通りです」

確かに僕は切り捨てていた。そして先の事を考えていた。

この先、レイヴァルヴァンさんが僕の進む道の上に現れないのならよし、もし僕の歩みを阻む様な事があるのならば……

と

「ふい〜……若よお、笑顔がダークになっただろ〜？」

「おっと、これはいけません。職業『影の支配者』は今日付けで廃業にしたのでした」

「……俺様はその『影の支配者』の最後の仕事のツケが怖くて仕方ね〜よお」

「ふふ……すぐに返済しておきますよ」

「やれやれだ」

クレハはそう言うと、いつもの軽い調子で肩をすくめて見せた後、改まった様子で先程の続きを話し始めました。

「まあ……若よ、エレシちゃんはまじでやべ〜から……さ？」

「ふむ……あなたがそこまで言うのなら……少しプランを練り直してみます」

そして僕が導きだした答えは、エレシ・レイヴァルヴァンの最愛の弟と共同戦線を張るというものでした。僕としてもエレシ・レイヴァルヴァンを敵にまわすような真似はできる限り避けたいですね。

もっとも、その弟に資格がなければ別の方法を考えるつもりだったのですが……

ふふ、まあ及第点と言ったところでしょうか。

『兄さん、初対面でいきなりお願いして悪いんだけど』

やはり先に話しかけてきたのは少年の方ですか。おや？少女の方は僕に見向きもせずポレフの方へと向かって行きますね。

『兄さん？』

「ああ、これは失礼。あなたも合格されたのですね」

『合格？何かの試験かな？』

そう言う少年は不思議そうに小首を傾げました。

とぼけている様子はありませんね。ならばこの言……どう判断しましょうか？

そう問う様に僕はクレハに目配せしました。するとクレハはすぐに理解したと言わんばかりに自信満々に一つ頷くと少年に歩みより、その頭をわしつと掴み高らかに宣言しました。

「おゝけえ！おゝけえ！ファッションに無頓着な若でもこれには耐え切れなかつたらしい！俺様にまっかせる！素材がいいんだあ！この坊主はすぐに輝くぜ〜！」

ちがつ！

「ん？どうした若？顔がおもしろい事になってるぞ〜」

すっかり忘れがちですが、こう見えてクレハは元『服のトップマイスター』なのです。服装などには常々、口うるさく注意されたりしているわけですが……

服なんて着られればいいと思うのですが……

以前にすっかりそう呟いた時に、鬼と化したクレハによる説教が五時間にも渡って繰り広げられた事は今でも僕の軽いトラウマです。

こうなったクレハはできるだけ放置するに限る。

そう既に学習している僕は慌てて話題を戻しました。

「い、いえ、まあいいでしょう……ところで君の願いというのは何でしょうか？」

『兄さんがこの世界の中心だよね？』

軽い調子で言い放たれた突拍子の無い少年のその問い。普通の間ならば首を傾げるか、訝しげに睨みつけるかだったでしょう。

しかし僕はあえて、こう答えようとしました。

『その予定です。』

と

ところが僕が口を開くと同時にその声は遮られました。

「そのよ」

『ちっが〜う！俺様が世界の中心だああああ！』

クレハ……

『あはは、おじさんおもしろいね？でも僕が言っているのはそういう表面の事じゃないんだ』

その少年の言葉にクレハの表情が切り替わりました。察しの良い彼の事です、恐らくは僕と同じ違和感を少年から感じたのでしょう。

「なあ〜んか違うな？坊主」

『すごいなあ、たまにいるんだよね。少し話しただけで違う匂いを嗅ぎ分けれる人種って……あ、僕に攻撃とかしないでね？見た目の通り脆弱だから二秒で死ぬ自信あるし』

「そんなつもりはねえ〜よ！ガキをいじめる趣味はあっても痛ぶる趣味はね〜って」

よく言う。

そう言ったクレハの右手には既に膨大な魔力が集束していました。

「で？坊主のお願いってのは何なんだ？」

少年を観察していた僕を他所にクレハは話しを進めていきました。後は彼に任せておけば大丈夫でしょう。

『あは、兄さん達と行動を共にさせて欲しいんだ。邪魔はしないって約束するから』

「ん〜……だってよ？どうする若？」

「クレハはどう思いますか？」

その僕の言葉には『あなたの勘はどう告げていますか？』という副声音が込められていました。普通ならば読み違えてしまいそうなその僕の真意を、彼は事も無げに読み取ると

「俺様の勘は問題無しって告げてるよっ、それに外見を生かせば若にとつて悪くない働きを期待できそうだぜ？」

すぐにそう切り返してよこしてきました。

これだからクレハは頼りになる。

笑みが零れそうになるのを軽く抑えながら僕は話を続けました。

「ああ、そこまで気がまわっていませんでした……さすがです」

「だろお？」

「なるほど……ふふ、いいでしょう。同行を許可します。僕の名前はオルティス・クライシスです。あなたは？」

そう僕が言い終わると少年がとびきりの笑顔になりました。

弾ける様な笑顔とはこの事なのでしょうか。笑顔に定評のある僕ですが、幼さの残るこの少年の笑顔からは僕にはない魅力を感じさせられました。

『ありがと、僕の名前はセナキ。よろしくね!』

「俺様は誰もが知るクレハ・ラナトス! って坊主知らないのか!？」

「あゝ、うん知らない! ごめんね! クレハ」

「そりゃないぜ」

「まあまあ……それではこれからよろしくお願ひしますね。セナキ」

「あは、よろしくねオルティス」

こうして僕達と突然現れた少年『セナキ』は歩む道を共にする事にしました。

彼が何者なのか。目的は何なのか。正直、僕はそんな事には興味がありません。

僕が進むのは世界を救う勇者の道。そこに一人の仲間が加わった。敵は少ないに越した事はなく、仲間は多いに越した事はない。

ただそれだけの事です。

さてさて、前回までのあらすじです。

最初の課題をクリアした僕とポレフの前に、どこか不思議な雰囲気身をまとった男女の双子が現れました。

双子の片割れ、少年の方の名は『セナキ』というらしいです。

セナキはオルティス・クライシス……つまりは僕にこう言いました。

『兄さんがこの世界の中心だよね？』

と。

ふむ……この少年、なかなか人を見る目があるようです。

という事で、無事にクレハのお眼鏡にもかなくなったセナキは、僕達と行動を共にする事になりました。

今回のお話は、この僕を素通りしてポレフの元へと近づいていった少女のお話になるようですね。

納得いかない……

未だに笑い続ける膝を睨みつけながら俺はそう思っていた。

だってそうだろ？確かに最初の課題には合格した。だけど俺がした事といつたら、よくわからないうちに殴り倒されて、それから必死に起き上がったただけだ。

こんなのじゃだめだ……こんなのじゃ……

「つてうお！？」

思わず声が出た。

その声と同時に、膝を睨みつけていたはずの俺の視線は空へと向いていた。

要するに、また尻餅をついたわけだが……

『私……君についていくから』

今のは背後から膝を折られたのだと、その声でようやく気がついた。

「……誰……だ？」

そう言いつつ振り返った俺をそいつはぼくっと座った目で見下ろしていやがったんだ。

そしてそいつは俺をじっと見据えたまま再び口を開いて言い切りやがった。

『ついでいく』

なんの断定だよ！

思わずそうつつこみたくなる。

「ついでいくって……お前、誰なんだ」うちの弟に何をするのですか？」

ああ……また姉ちゃんできてきた……

もうあれだよ。俺が喋ると姉ちゃんもつと喋る。

……この構図やだあああああああ……！！

……ふう

とはいえ、こいつどうすんだろ。下手なこと言つと包丁飛ぶぞ。そう思いつつ、尻餅をついたままに、もう一度そいつを観察してみる。

するとそいつは一瞬、俯いたかと思うと先程までの『無』の顔もどこへやら、もの見事に变化しやがった。

なにその朗らかな笑顔。

というか可愛……なんでもない！なんでもない！

『お姉様……先程の素敵な弟君（おにいさま）の雄姿に、近い未来にこの世界を救う勇者の姿を垣間見ました……弟君が勇者になるその姿を、傍らで

見届ける事を許して頂けませんか……』

おいおい、キャラ変わりすぎだろ。

というかこいつ……

姉ちゃんの事よくわかってやがる……

「まあ…… まあ、まあ、まあ、まあ……許可します」

やっぱりな……!!!!

「姉ちゃんちょっと待って！まだこいつがどんな奴かも！」

「許可します」

「ねえ……ちゃん……」

「許可しますよ?」

だあゝ!もう!こつなったらもう駄目だ!

早々に諦めた俺は渋々、姉ちゃんの宣言を受け入れた。

「わかったたよったく」

その俺の声を聞くなり、そいつは姉ちゃんに見えない様に小さく胸元にガッツポーズを作ると

『よっっ』

と呟く様に口にした。

「なんか『よしっ！』とか言ったぞこいつ」

『言っていない』

「いや、今言っただって！」

『……言っていない』

そこ意地張るところかなあ！っていうか俺の周りの女はこんなのは
つまりなのか！なあ！？

思わず涙が出そうになった。

っていうか睨むな。『無』の顔で。お前そっちが素だろ。

「ところであなた、お名前は？」

正直、見てておもしろい。姉ちゃんの声が聞こえるなり、そいつ
はまた変化しやがった。

「シアと申します……お姉様」

改心の上目遣いとはこの事を言うのだろうか。薄っすらと浮かべ
た柔らかな笑顔で姉ちゃんを見上げたシアは……なんとというか可愛
……なんでもない！

そうか……シアっていうのか……

「私はエレシ。エレシ・レイヴァルヴァンと申します。これからよろしく願いますね。」

「はい お姉様」

「俺はポレフだ！よろしくな！シア」

「……呼び捨て。馴れ馴れしい(ぼそっ)」

なんか呟いたぞおおお！

「どうかしましたか？ポレフ」

「い、いや……今、シアが」

「え？シアさんどうかしましたか？」

また変化きた〜！！

「いいえ よろしくねポレフ君」

「……あ、ああよろしく」

「ちくるな(ぼそっ)」

「ちょおおおー！」

まあ、そんな感じで俺達はシアと旅を共にする事になったんだ。

にしてもなんでこいつ、俺についてくるって言ったんだろ……

まあいつか。

その後、姉ちゃんは肩の高さが合っつて事で渋々ながらに俺に肩をかす任務をシアに譲った。

そんな姉ちゃんにバレない様にシアは俺にぼそぼそと『体重かけるな馬鹿』とか『調子にのるな』とか呟いてきた。

ほんと、なんでこいつ俺についてくんの!?

先が思いやられるなあ……

そこにまた魔伝音が流れてきてドナポスのおっちゃんが大声で話し始めた。

その内容は『思ったよりも早く課題が終わっちゃったから次の発表は二日後。それまで城に部屋を用意するからそこで待ってる』って感じの内容だった。

まあオルティスの馬鹿が無茶苦茶したからな……

にしても

「姉ちゃん」

「何ですか？ポレフ」

「定臣いつくるんだろ？」

「……そろそろ来て頂けるんじゃないでしょうか？」

「だよなあ……」

カルケイオス I

……こんにちは。

……名前？……鞘野小夜子。

はあゝ……

じいゝ……

誰？知らない人。

……え？定臣見せてくれるの！？

どじじ？どじじ！？

……え？その前にこれ読めって？

……ふむふむ

ぼれふれいぶあるぶあん……ってこれ名前なの？嘘だあ……え？
この世界では皆そんな感じの名前なの？

うゝ定臣い……大丈夫なの？なんか変な世界にいつちゃってるみたいけど……

え？次、読めって？わかったよもう

その、ぼれふれいぶあるぶあんって子に『しあ』って子がついていく事になったみたい。

ん、ほらちゃんと読んだんだから早く、定臣見せてよ。

ふむふむ、ここを覗くと見えるのね。

おゝ！定臣いゝ！……ってあの子、誰？

……ろいえる・さゝばとみん？……ふうん……ろいえる・さゝばとみんねえ……ふうん……

……定臣のばかあああああああ！

ポレフが無事に最初の課題を通過したその頃、定臣はロイエルを待つ間にうつらうつらと眠りに落ちていた。

まあそれで……俺がようやく目を覚ましたのは昼を過ぎてからだったんだが……

「どうしてこうなった……」

目を覚ました俺の第一声はそれだった。

目の前には鉄格子。どう鼻肩目に見ても明らかに牢屋の中に入れてられている。

そもそも俺は寝起きは悪い方じゃない。

いくら疲れていたからとはいえ、誰かに移動させられて目が覚めなかったとは思えないんだが……

『ようやくお目覚めになりましたのね。侵入者さん』

顎に手を当てて『うーん』と唸っていた俺に声がかかった。

「侵入したわけじゃないんだけどな」

そう言いつつ、どうせ美女なんだろうか思いながら声の主を確認してみる。

まあ美女には美女だったんだが……

最初に目に飛び込んできたのは超ド派手なくりんくりんな金髪。そして次に『私は気が強いです』と言わんばかりに吊り上った鋭い眼と漆黒の瞳だった。

その女性は手の甲を顎に添えると軽くしなを作り、意地の悪い笑みを浮かべつつ俺に向かって口を開いた。

『さあ、尋問を始めますわ。出ていらっしやい』

きつと名前の後ろにつく愛称が『夫人』な方なのだろう。なにやら怖そうなので出来るだけ刺激しない様にしよう。

「って牢屋に入れてた意味は！？すぐに出すならなんで俺、なんで牢屋に入れられてたんだよ！」

ってつつこんじゃったよ！刺激しない様にするんじゃないのか俺！

心の中で猛反省するも時すでに遅し。目の前の女性は吊り上った鋭い眼を更に吊り上げると烈火のごとく怒りだした。

『なっ………なんですのなんですのなんですの！！あなたあなたあなた！！』

ってこれ怒ってんのか？

『ファステル無しの下民の分際で！！この私に口答えしようと言いますの！？』

一瞬なにを言ってるか把握できなかつたけれど、その女性の言ってる意味を頭の中でゆっくりと理解していった俺の感想は

ああ、そういえばロイエがそんな事言ってたなあ……

と実に淡白なものだった。

それにしてもファステル無し「下民とか……」

そういうのはどこの世界にもあるものなんだな。その土地のその人間にしか理解できない類の風習の様なものだろう。そういう類のものにはなるべく関わらないに越した事はない。

そう判断した俺は、得意の愛想笑いでなんとかこの場を切り抜けられないものかと、もう一度その女性に視線をやった。

うゝむ……相変わらずに『下民、下民』と連呼していやがります。というか下民とか言う人、初めて見たよ。なんというかそういうのって

「めんどくさ」

思わず声にでた。

『なっ!?!? ななななな!?!』

意地悪夫人の怒りのボルテージが加速した!

なんかログに見えた気がしたが……気のせいかな。

『だ、だ、誰が意地悪夫人ですよ!?!』

「ログじゃなくて俺が声に出してたのか……それは知らなかった」

『あなた、この私を馬鹿にしていらっしゃいますのね!?!』

「い、いあ、そんなつもりはないんだけど」

『いいえ！いいえいいえいいえ！許しませんわ！』

「どんだけ怒ってんだよこの人。というかこれは全く話が通じないタイプの人間だ。」

「あ〜……」

『あなた！この私がお話している最中だと言っのになんですの！？先程からのその態度！』

「ん〜……まあ、あんたみたいなタイプの人間とは久しく出会ってなかったからさ、ちよつとげんなり気味」

『なっ！？誰があんたですか！！』

「いや〜……名前知らないからさ、悪い」

『侵入者に名乗る名前などございませんわ！』

「こ、こいつめんどくせ〜！」

「あ〜……はは、ん、それで俺はどうすればいいのかな？」

『取調べを致しますわ！ついていらっしやい！』

「あ〜……はいはい、ついていきますよっつと」

『？はい？は一回です！』

「ここでお前はお母さんか！などとつつこめば更にややこしくなる
んだろうな。というか母さん元気にしてるかな？」

そう言えばいきなり天使にされて以来、元の世界で自分がどうい
う扱いになっているのか聞いた事がなかった。

よし今度、天界に戻ったら、るるかさんにも聞いてみよう。き
つと喜ぶだろうし……

「つと、手引つ張らなくてもついていくって」

『速く歩きなさい！』

「なんでそんなイライラしてるかなあ」

『イライラなどしておりませんわ！』

「してるじゃんってつつこみ待ち？」

『あ、あなたは少し黙りなさい！』

「へいへい〜つと」

定臣が何故か牢屋に入れられていたその頃、手続きを終わらせ定臣を迎えに戻ったロイエルは定臣がいなくなった事を知り、街中を探しまわっていた。

「まったくもう、どこいつちゃったのよ……」

ロイエル・サーバトミンが定臣のために済ませた手続き。それはこの『カルケイオス』での彼の生存権を獲得する内容のものだった。

『カルケイオス』はエドラルザにしてエドラルザに在らず。

『カルケイオス』はミレイナ・ルイファスを王とする小さな王国である。故に内部に存在する法も外部のものとは異なってくる。

それは門を通過する方法の違いであり、カルケイオス民を雇用する際の契約の違いであり、外部の人間に対しての考え方の違いでもあった。

特筆すべき例を挙げるならば、それは城壁の外側の人間に対しての捉え方の違いであろう。

そもそも、城壁の内側の人間に多く見られる傾向として外側の人間を見下しているというものがある。

では何故その様な考え方がまかり通っていたのか。
それは城壁設立当時、優先的に貴族や富裕層が内部に移動できた
事が起因している。

外部の人間は貧民である。我々は選ばれた人間なのだ。

実に簡素でわかりやすく、くだらない考え方であるが、得てして
人間という種が最も陥りやすい『下』に他人を作りたがるという理
解し難い現象なのである。

とはいえ昨今、制定された『特産品制度』により城壁の内と外を
行きかうポーター達を通し、その考え方を改める者も多く現れてき
た。しかし閉ざされた空間にはそんな明るい兆しは到底及ばない。

『カルケイオス』とはそんな閉ざされた空間なのだ。もっと言うな
らばカルケイオス民には城壁内部の人間すらをも見下している節が
見られる。

城壁を創りだせる自分達こそが選ばれた人間なのだ。

「手続きは済ませたけど、連絡が行き渡るまでに誰かに捕まっ
たりしたら危ないわ……まあ、サダオミがどうにかされるとは思わな
いけど……」

そういえば超強いよね……あいつ

「ん……探すのあほらしくなってきた！お礼くらい言っておけようと思ったけど……いなくなっちゃったんなら放っておいても大丈夫よね？」

そう言い放ったロイエル・サーバトミンの表情は実に晴れ晴れしいものだった。

思えば俺の人生、健やかな眠りの終わりにはいつも試練が待っていた気がする。とはいえ、起きたら牢屋の中でした！というような不思議体験をするのはこれが初めての事だった。

そう、牢屋の中にいたんだ。なのにいきなり出ると言われた挙句、散々に罵倒され、連行され、そして今は無駄に寒い密室で取り調べを受けている。

しかし、なんだってこんなに寒いんだ。また便利魔法で演出しているのかなのか？

そんな事を考えつつも、目の前の意地悪夫人様の小言を笑顔で華麗にスルーしながら部屋の中を見回してみる。

薄暗い何もない空間に机が一つ。この際、わざわざ魔法で薄暗く

演出するのはやめる！というつつこみはおいておく。

壁は薄汚れたねずみ色でそこに小石が無数に埋め込まれている。つてよく見れば血痕の様な跡が無数に見受けられるよ！暴力反対！

これは穏やかじゃないなと半ば頬を引きつらせながら、視線を意地悪夫人様に戻してみる。すると目の前のその人は既に穏やかではなくなっていた。

『あなたあなたあなた！！！！』

ああ、めんどくさい。なんだってこの人はこんなにイライラしているのか。

ここでお決まりの台詞で煽って遊んでみるとどうなるのかと、一瞬、好奇心に苛まれたけれどここは我慢しておこう。

にしても

ちらりと視線で確認する。俺の背には取り調べ中である今も大太刀『轟劉生』がしっかりと背負われている。仮にも侵入者扱いを受けて取り調べするくらいなのだから、武器くらいはきちんと取り上げるべきなんじゃないのか？

加えて牢屋から出す際もこの女性一人でしかも丸腰。そもそも牢屋に入れていた意味が全くない。更に手枷の類は一切されておらず、身体はフリーダム。

もしかしてこの人……

あほの人なのだろうか。

『なんですか？』

「いやいや」

笑顔で受け流す。どうやら思考がにやにやと表情に出てしまっていたらしい。

あんまり怒らせると死刑とか理不尽な事、言いかねないしなこの人……

『誰があほの人ですか！！！』

「まさかの時間差……！！！！」

『あなた先程から失礼な独り言が口から漏れていらっしやいますのよ！！！！』

「な、なんだって……！！」

『もう許しませんわ！！あなたをここへ招き入れたカルケイオス民の名前を教えなさい！！』

「ってそれ信じたんだ？さっきまでどうやって侵入したのか、やたら聞いてたのに」

『お黙り！』

「……………」

『早く仰いなさい!!』

めんどくさー！ー！！

とはいえ、ここでロイエの名前を出して大丈夫なのだろうか。

これだけ話の通じない人間なのだ。出会ってまだそう時間が経過していないとはいえ、少なからずロイエには情が移っている。

ここで下手に名前を出して、彼女に迷惑をかけるのも憚れると定臣は顎に手を当て思案する。

その定臣の仕草を見た女性は、その仕草こそが定臣の容疑を確定させたと言わんばかりに意地悪な笑みを浮かべ宣告した。

『言えないという事は、やはり先程までの証言は口からのでまかせでしたのね』

「いや〜……そういうわけじゃないんだけどな」

『あなた、このカルケイオス内でカルケイオス民である私に嘘をつく意味をご存知なのでしょうね?』

「嘘は言っていないけどその意味っていうのも知らないなあ」

『とぼけても無駄です。あなた……死刑ですわ』

なぜそうなる。

「意味が……」

『意味などありません。文字通り死刑ですわ』

「え〜と……抵抗しても？」

『……あはは、あははは！お〜ほっほっほっほー！』

なんか笑いだしたー！しかもお〜ほっほっほって！

『たまにいらつしやいますのよね〜……カルケイオス民と凡人との違いがわからない方が』

そう言うとその女性は徐に両手を広げ、なにやらぶつぶつと詠唱を始めた。それを定臣はいつでも抜刀できる心構えだけは忘れる事なく、じっと見つめる。

あれたぶん魔術唱えてるんだよなあ……

攻撃魔術は既にライアットのそれを見ている。それと目の前の女性とを見比べた定臣は明らかな違和感を感じていた。

ライアットさんって詠唱なんてしてなかったよなあ……

それにしても光の集束が異常に遅い。あれならば詠唱を終えるまでに百回は斬り伏せる事ができるなどと、定臣は半ば興を削がれた形でそれをぼんやりと眺めていた。

『さあ、準備ができましたわ！いつでも抵抗なさって下さいな！』

どうやら準備ができたらしい。見ればその女性はあの『ミスター
どや顔』ドナポス・ニーゼル顔負けのどや顔でこちらに向かって
人差し指を向けていた。

ああ頭痛くなってきた。

とりあえず適当に相手をすれば満足してくれるだろうかと、軽く
ため息をついた後に首をコキコキと鳴らしてみる。

『いいこと！あなたを拘束しなかったのも、武器を取り上げなかつ
たのも、その必要が一切無かっただけのことですわ！』

定臣のそんなやる気のない仕草をどう勘違いしたのか、その女性
は一人でボルテージを高めていった。

『このカルケイオス民である私の美しく素晴らしい魔術で塵と化し
なさいっ！』

どうやらやっつと向かってくるらしい。というかなんで戦つ羽目に
なつてんだよ。全くもって意味がわからん。

『ちよええええ！』

うわっ、なにその掛け声。

女性は謎の掛け声と共にこちらへ向かって猪突猛進。魔術はどう
した魔術は！

『私の素晴らしい体術と融合して初めてこの魔術は完璧！』

解説なしには語れないなにかがあるらしい。

とはいえ、このままじっとしていればあの変な魔術を食らう羽目になる。さすがにあんなのにやられるのは気が進まない。というか遠慮願いたい。

とうかあれを魔術と認めていいのだろうか。ライトさんあたりが見れば無言で殴り続けそうで恐ろしい。

まあ……

かわしてもいいよな？

なんとも言えない表情を浮かべた定臣が、首を傾げながら半歩だけ横に移動する。それとほぼ同時に定臣が先程までいた位置をその女性が『ほうはっああ！』などと謎の掛け声を上げながら通過していった。

『なっ！？回避ですって！？』

「そりゃかわすだろ……っていうかそっち壁」

『うえ！？……ほげっ！！』

ほげっって……っていうか今は痛いわ……受け止めてやった方が良かったか？

哀れみの視線を女性に送ってみる。見れば女性は両鼻から鼻血を噴出したまま仰向けに床に寝そべっていた。

うゝむ……もの見事に気絶してるなあ……

というか壁の血痕は実は全部、この人のものなんじゃないだろうか。自身の中で既に可哀想なキャラクターにカテゴリー分けされているだけに、そんな疑問すら浮かんでくる。

「まあ言ってる事は無茶苦茶だけど根は悪い人じゃなさそうかあ」

そう呟くと定臣は自身の服の裾を軽く破り、一応の手当てを女性に施すのだった。

うゝむ……今の状況をどう説明したものか。

起きたら牢屋で、目の前には変な女がいて、すぐに出されて取り調べを受けた拳句、襲われたので回避した。

『変な女』かあ……

思えば俺に最初にそう表現させた女は小波透哩だった。

あの帰り道、あの日も二十円を惜しんで遠回りして缶コーヒーを買いにいったさえいれば……俺はあいつに出会う事なく、今も平凡に暮らしていたのだろうか……

なんとなく思い出した過去の出来事。それと同時に思い浮かんだ黒い笑みに口元を吊り上げる透哩の姿によって、その思考は即座に否定された。

無理だな……あいつからは絶対に逃れられなかったはずだ。運命つてものが本当にあるのならば、俺はこうなる運命だったんだろう……

まあ火の国での出会いをへて、悲観していた自分の状況も、極めて前向きに捉える事が出来るようにはなっただけだな……

いや、小夜子と出会えたのはむしろ、透哩のお陰か……そうなると思しる俺はあいつに感謝していると言ってもいいくらいだ。

とはいえ……

目の前で先程から『およよ、およよ』と泣き崩れている女性と、小波透哩とでは『変』の本質が全くもって違うわけだが……

そう、目が覚めたその女性は俺に敗れた？事を知り泣きだしてしまったのだ。

『お〜よよっよよっ……お〜よよよ』

あれ泣いてるのか……およよって口に出して泣く人、初めて見たよ俺。

「まあ、まあほら、今のはあなたの負けじゃないって」

可哀想なので慰めてみる。俺のその声に女性は一旦、泣くのをや

め、こちらを見上げてきた。

「い、今のなしでいいって……ほら、俺なにもしてないしさ?」

『……なにもしてない方に私は敗れ去ったのですわ〜!お〜よよよよ!お〜よよよよ!』

また泣き出したー!ー!

う〜む、女の涙は最終兵器とはよく言ったものだ。出会って間もない自分を殺そうとした相手だというのにも関わらず、可哀想に思えてくるから不思議なものだ。

いや、まあかといって殺されてやるつもりはないわけだが……

顎の手を離し、もう一度、眼下に蹲るその女性に視線を落としてみる。すると自分の視線と蹲っていたはずのその女性の視線がもの見事に交差した。

いやいや、つい今しがたまでこの女性は派手に蹲って泣いていたはず。そう自分に言い聞かせて定臣は得意の笑顔でスルーを駆使しつつ、視線を元の天井へと戻しそつと顎に手を添えた。

『なにか仰いなさいなっ!』

なんか怒鳴られた。泣いてたんじゃないのか。

「ん〜……俺さあ、ちよつと人と待ち合わせしてて」

『?』

「すぐにカルケイオス出て行くから、解放してもらえるとありがたいんだけど」

もちろんダメ元で振ってみた話題である。何か言えと言われたのでとりあえず思い浮かんだ自分の願望を述べてみただけなのだが。

『……良いでしょう』

許可された。

『あら、ご自分で言うておいて不思議そうな顔をなさるのですねえ』

「そりゃ今の今まで殺されかけてたわけだし……な？」

俺のその言葉を聞くと女性は更に不敵な笑みを浮かべ、ビシッと効果音がつきそうな勢いで俺に向かって人差し指を向けてきた。と
いつか人を指さすなよ。

『それですわ!』

「な、なにですわ?」

『……まあいいでしょう。あなたは私が気絶している間も逃亡しなかった。それどころか……その……手当てまで……』

「あゝ……そりゃ目の前で女の子が気絶してりゃ手当てくらいするだろ」

見れば女性の顔は耳まで真っ赤になっていた。

『あ、ありがとうございます！……と言ってあげなくもない事もないです……わ』

ああ、やっぱり根は悪い子じゃないな。素直にお礼が言えるのはいい事です。

そう思いつつも うん、うん と一頻り目を瞑って頷いた定臣は、満面の笑みを浮かべて女性に向かって口を開いた。

「どういたしまして」

更に赤くなる女性。というかいつまでも、あんたとか、この人とか、この女性では拉致があかない。一応の信頼を得た今ならば名前くらいは教えてくれるかもしれないと、定臣は更に得意な愛想笑いに磨きをかけつつ、その女性に尋ねた。

「ねっ、そろそろ名前くらい教えてもらえないかな？」

『なっ！？なななななな前ですか！？……そう……そうですわね……』

なにやらえらい驚かれた。まあさすがに『もう一度、死刑ですわ！』な事態に陥りそうな空気ではない。そう結論付けた定臣は小首を傾げつつ、その女性に表情で先を促した。

定臣のその仕草に、女性の赤面度が更に増した事は言うまでもなかった。赤面度ってなんだ。

『……良いでしょう。名乗りますわ……ですがその前に』

そう言うと女性はパチンと指を鳴らした。すると定臣の着ている服が光輝いた。

見れば先程、女性を手当てするために破いた箇所が一瞬にして修繕されている。いや、新品同様に戻っていると表現した方がいいだろうか。

「おお!？」

思わず感嘆の声を上げた定臣をよそに女性は更にもう一度、指を鳴らす。すると今度は定臣の足元から水流が下から上へ、重力を無視した流れで吹き上げた。

「わぶつ!？」

完全に油断していた定臣はそんなまぬけな声を上げつつ、水流に飲み込まれてしまった。

これが攻撃魔術の類ならば完全にやられていただろう。しかしその心配は、水中ではつきりしない視界の中、あちら側に見えた女性の穏やかな笑みですぐに打ち消される事となった。

『仕上げですわ』

パチンッ

軽快な音が部屋に鳴り響く。その音を聞きつけた水流が『わかりました』と言わんばかりに定臣の足元へと帰っていった。

「ふう……」

大した事はなかったとは言え、完全に不意をつかれた上に一瞬、呼吸を止められた定臣は思わず大きく息を吐いた。

情けない事にパニックだった。過去の経験上、こういった事態に陥った時は一度、頭を冷やす意味で自分に起こった出来事を頭の中で整理してみるに限る。

この女性、魔術を行使する際には詠唱を必要としていた。更に発動までが異常に遅い。それに比べ、先程の発動までの工程の短さから発動までの速度……服を修繕した事もあるし、あれは恐らく便利魔法の類なのだろう。

魔術〃人に害を与える事の出来る不思議な力。

魔法〃人にとって都合が良い利益を与える不思議な力。

旅の途中にエレシと交わした何気無い会話の中で教えられた事が思い出される。

確かに水流に飲まれている間、視界は水中さながらに歪んで見えではいたものの、耳に水が入るような事は一切なかった。

恐らくは自分にかけられたのは魔法の類、そして慌てて、呼吸も止める必要は無かったのであろうと、このラナクロアにおける便利魔法のご都合つづりを思い出した定臣は、そう当たりを付けた。

「つて!？」

自身の中での分析が終わり、安心したのも束の間。今度は視界一

面が泡の様なもので一気に覆われる。それを『のわあー!』などと言情けない声を上げつつ、手で払おうとするものの、泡には触れる事すら叶わなかった。

『ご安心を、すぐに終わりますわ』

定臣を気遣った女性が落ち着かせる様にそう告げる。

しかしながら、慌てる必要は無いと知りつつも、慣れない魔法をすんなりと受け入れる事など、そう容易くは出来ない。

思わず強張った身体を、背筋を伸ばす事によって安心させようとした定臣が泡の中から、とても良い姿勢で現れた事を誰が笑えようか。

『ぷっ……あは、あはは、おっほっほっほ』

笑われましたよ？

「……むう、普通にびっくりしたんだよお」

どれくらい笑われただろうか。ようやく笑い終えた女性に向かって、定臣は不服そうにそう述べた。

『し、失礼しましたわ……先程、あなたに行使したのは魔法。壁の外ではあまりお目にかかる事の出来ない難易度の高い類のものでしたので、慣れないのも仕方のないことですよ』

「うーん……それは理解したけど、なんでその魔法を俺に使う必要があつたんだ？」

『それは……あなたがあまりにも汚らしかったからですわ！』

汚らしいとか生まれて初めて言われたよ……

シヨックでおもしろい顔になっている定臣を見て、慌てた様子でその女性は訂正する様に話を続けた。

曰く、自分の名を聞く人間の服が破れてはいけなとか。

曰く、自分の名を聞く人間の顔がすす汚れてはいけなとか。

ん？すす汚れ？……

そういえば、ロイエに爆発させられたんだっただな。その際にお気に入りの旅人の服（仮）を更に無残な事にされ、着せたとはい張られたロイエのローブを、エロティックに身体に巻きつけていたはず

……

先程、女性を手当てする際に何気なく破いた自身の着ている服を再確認してみる。見ればやはり自分が着ている服は天界産の旅人の服（仮）だった。

「なあ、もしかしてあんた」

『ルクエ・マリネ……それが私の名ですわ。あなたの名前も教えてくださいませんか』

「あ、悪い。俺の名前はサダオミ・カワシノ。定臣って呼んでくれ」

「な、名前ですか……それは私ともっと親しくしたいという表れ……良いでしょうサダオミ」

「ん、んで俺もルクエでいいか？」

「そ、その……」

む？何から更に真っ赤だ。

「よ、よよよ良いですわ！許可します！良いですわ！」

なぜ怒る。

「あ、ああよろしくな、ルクエ」

ぼつと音がでそうな勢いでルクエが更に赤くなっただが、話が進まないのとおりあえず見なかった事にしておく。

「は、はいいいい……」

「ん、それでさ、もしかして俺を牢屋に入れる前に服の修繕とかしてくれたのか？」

「……ああ、その事ですか」

そう呟くように言ったルクエの表情は先程までと一転して、つまらないと言った感じのものへと変化していた。

「このカルケイオスにも……相応しくない品位を持つ輩が残念な事に存在しておりますわ」

「？」

「半裸で寝そべる女性を見て、何か良からぬ事をしでかそうとしていた輩がいらっしやいましたのよ」

「！？……ルクエ、さんきゅ！まじ助かったよ……」

主に精神的に。

ルクエ曰く、牢屋に入れていたのはむしろ俺を避難させるためだったようだ。まあその後、殺そうとしたんだから大差無いとは思っただが。

『例え罪人であったとしても正規の手続きで裁かれるべきですわっ！』と即座にルクエによって熱弁された事により、定臣がその考えを口にする事は無かった。

「それにしても……あなた」

「ん？」

何気なく聞き返した定臣。そこに向かって放たれたルクエの一言

によって、定臣はラナクロア初のお決まりの台詞を絶叫する事となった。

「すす汚れて先程まで気がつきませんでしたけれど……とても美しいですわ！」

「……」

「これならば先程の男達の、あの行動も理解ができると言うもの！私、壁の外の人間に興味を持たれる方々の思考自体が理解できておりませんでしたの！」

「……俺は」

「それ！その『俺』という一人称には大いに否！と唱えたいですわ！それだけ美しいのですから然るべき言葉をお選びになるべきですわ！それだけ美しいのですから！あ、これはあれですわね！とても大事なことでしたので二回、申し上げましたのよ！？」

「だから俺は……」

「サダオミ！その『俺』と言うのをよして下さいと申し上げておりますの！」

「俺は男だあああああああああああああああああああああああ
！……！」

迫られる。

牢獄と大方代わらないこの暗寒い取調べ室の中で、俺は今も尚追
い詰められていた。

目の前に佇む女性……ルクエ・マリネはゼエゼエと肩で息を切ら
しながらも、機関銃のごとくその口から謎の説得用語を放ち続けて
いた。

『女は憤ましく、お淑やかに！美しい者はそれ相応の言葉遣いを！』
ご苦労様です。

当然のごとく、俺の口から告げた真実はいつもの様に信じてもら
えるはずもなく、それどころか今回に関してはスルーすらされず、
なにやらものすごく怒られた。

果たして俺の言い方が悪かったのだろうか。

少し首を傾げてはみたものの　やはり俺が男であるという真
実には嘘偽りの欠片も無かった。

それにしても憤ましくてお淑やかな女性がいきなり殺そうとして
くるなど……それになんか『ほうはっああ!』とか奇声発して襲っ
てきてたし……

あれはあれでルクエ的にありなのだろうか、などと思索している
俺の前でルクエの講義内容は『正しい女性の在り方』から『サブタ
イトル』その実演編』へと姿を変貌させ始めていた。

「き・い・て・ま・す・の!?!」

「ん、ああ聞いているよ。飽きてきたけど」

「んなああああ!?!」

んなあああて。

「あなた!あなたあなた!」

「定臣でいいって」

「サダオミ!サダオミサダオミ!」

「うわっ、丁寧に言い直すか普通」

「ですから私はあなたのために！」

うん、悪い子じゃない。

確かに悪い子じゃないんだが……くどい。

かまっであげたい気もしないではないが、今は少し巡り合わせが悪い。

俺には約束がある。

それは想像を絶する巨大生物『マノフ』と対峙した際に、一時期ではあるが命運を共にした男との約束。

マリダリフ・ゼノビアにシイラの酒場で待つように告げたのは俺だ。ならば少しでも早く駆けつけるのが筋というものだ。

お陰様でついつつかりと深入りしてしまいそうなの子との会話を終わらせる理由が見つかった。

「ルクエ、悪いんだけど」

コンコン

ルクエに別れを切り出そうとしたその時、背後の鉄扉が軽快な音を鳴らした。

重厚なその造りからは到底鳴りえない程の木筒を叩いたような軽

いその音は、次に扉を潜って現れる人物が『魔法』の使い手だという事を物語っていた。

「誰ですの！？取調べは終わってませんことよっ！？」

『ルクエ。その人、申請通ってるから……それを伝えに来たの』

扉から顔を半分覗かせると同時に来訪者はルクエにそう答えた。

その姿に思わず目を奪われる。

胸の奥にはかすかな痛みがあった。

気にしなければ気がつかない程のかすかな痛み。

扉から顔を半分覗かせるその姿が、再会を望む小夜子の姿に被って見えたのだと気がついた。

ああそうか　　世界は悪戯好きなんだったな。

いつかの日に、自身に降りかかった不幸を受け入れる時に覚えた魔法の言葉を思い出した。

夜の闇を模ったかのような黒髪はとても綺麗で、思わず見開いた目はもうその一点に奪われたままで。

凝視しているにも関わらず、ほんの一瞬目を離せばこの奇跡を見失いそう。

だから、ただじっとその少女が扉から入ってくるまで瞬きを我慢していた。

「あら、キカさん……申請は通っていても今は私の管轄ですわ！」

「でも……」

「べ、別に危害を加えようというわけではありませんのよ？」

「でも……その人、泣いてる」

そう　　泣いていた。

どこか虚ろなその瞳も。どこか人見知りを感じさせるその仕草も。聞けばそれだけで暖かくなれるその声色すらも。

なにもかもが小夜子と似ていた。

こんな奇跡的な偶然はありえない。

あるとすればそれは

世界の悪戯だ。

「ど、どうしましたの！？サダオミ」

「……あ、ああ、なんでもない」

他人の空似なんてレベルじゃないが、この子が小夜子のはずがな
い。何を泣く必要があるんだ……って　　ああ、ちくしょう。そ
の上目遣いも小夜子そっくりかよ……

「そう、ちょっとさ……その……ちょっと妹に似てて

「？」

「ああ、なんでもない、なんでもない。

俺の名前はサダオミ・カワシノっていうんだ。

君は？」

「……キカ・サミリアス」

「キカか……よろしくな！」

なるべく警戒されないように明るく振舞う。すつと差し出した手は案の定すぐにはとってくれなかった。

「……よろしく」

「お～よよよ！お～よよよよっ！」

何事かっ

俺とさよ……じゃなくてキカがせつかく握手を交わそうとしていたその時に、後ろで控えていたルクエが邪魔するように抱きついてきやがった。（小夜子至上主義な人）

「……どうしたの？ルクエ」

「お～よよよ！サダオミ！サダオミサダオミ！妹さんは亡くなっていますのね！？可哀想なサダオミ！キカでよろしければ束の間の代わりをして下さいますわ！お～よよよ！」

何その早とちり……っというか小夜子死なすな！およよ言っなっ！

「……そうなの？」

もちろん、ぶんぶんと大きく首を左右に即否定。それを確認したキカは『またいつもの病気ね』などと困ったように呟くと俺の手を軽く握ってくれた。

その際に、自身の早とちりに気がついたルクエが背後から真っ赤になって足元に滑り落ちていたりもしたが、今はこの素晴らしい時をじっくりと堪能させて頂きたい！

「ん……ルクエ、服汚れるよ？」

「ううううう！放っておいて下さいましっ！」

ほら、キカの呼びかけにもこの通り。

「……あっ」

しばらく困り顔でルクエの後頭部を見降ろしていたキカだったが、不意になにを思い出したように声を上げた。

「ルクエ」

「なんですのよおお！放っておいて下さいましっ！」

「……でも、申請が」

「死刑執行の権限は剥奪されますけれど、申請前に捕縛されたファ

ステル無しの処遇は捕縛者に一任されていますわよ！それがわからないあなたではないでしょう！？」

なにやら理不尽にルクエの口調が荒くなっている気がするが、対するキ力が余裕の笑顔なので傍観に徹してみる。

「ん……でも、申請通した子が」

「放っておきなさい！この私に口答えできる者などこの学……」
「ロイエなんだけど」

「ピッ！」

なんか『ピッ』って言った。

「うん、ロイエ」

「ピッ！……キユ……」

うゝむ……俺の背中から真っ赤になって落下したルクエさん。うつ伏せの状態から真っ赤なまま、しばらくアザラシよろしくな体勢でキカと言いついていたと思ったら。

今度は顔面蒼白になって、何故か半身ひねりを加えて仰向けに倒れた拳句、口から泡を……

「い、忙しい子だな……」

「ん、いつもの事」

優しい眼差しでルクエを見降ろしているキカのその姿に、やはり小夜子とはどこか雰囲気が違うなあなどと心の中で感想を述べてみた。

というか……

ロイエよ……お前、ルクエにいったい何をしたんだ？

さて現在、俺はキカ・サミアスの後ろについて取り調べ室を出て、地上への階段を上がっている。つまり、牢屋やら取調べ室やらがあるフロアは地下にあったわけだ。

両脇を肩すれすれまでレンガの様な壁で覆われた狭い階段は、異常な程に急斜な造りで一段、一段を上げるのになかなか苦勞させられる。

そういえば日本の城の階段が急斜な造りなのは、上階に逃げながら迎え撃つ際に振り返り様に敵の喉を狙える設計になっているとかどこかで聞いた記憶がある。

恐らくは牢屋から近いこの階段にもそういった意味合いがあるのだらうと、勝手にあたりをつけつつも、ひたすら上がっていく。

牢屋の暗さと寒さの演出は、どうやらこの段階で始まっているら

しい。

夜と間違う様な暗闇の中、視界の遙か右斜め上に見える開けた空間からは木漏れ日のように光が差しているのが見えた。

一歩一歩がいつもよりも重い。

やれやれと気合いを入れて、重心を少し低くする。

そんな俺の背中からは、不自然に巻き髪がぶら下がっていた。

まあ、正確には気絶したルクエを背負っているわけなんだが……

よいしょともう一度、ルクエを背負い直す。

見上げた出口はまだ遠く、階段を抜けるにはしばらく時間がかかりそうだった。

もう少しキカと対話を試みたいものの、先程から前方を歩き続ける彼女は、部屋を出てからというもの見事に無言を決め込んでいる。

さすがに初対面の人間に早々打ち解けられる程にフレンドリーでもないらしい。

それならば少し自分の置かれている状況を整理してみるのも悪くないと思いを巡らせてみる。

正直なところ、俺ははまだ状況を把握できていない。

とはいえ、ロイエから予め聞いていた説明に先程までの流れを足してみれば大方の予想はつくわけだが……

つまるところ？ファステル無し？には『人権』が与えられていないわけだ。

まあこのラナクロアにおいて『人権』という概念が存在するかどうかは知らないが。

城壁の内と外。

内には平和が約束され、外には富が約束される。

ではその外の富はどこからもたらされるのか……

それは他ならぬ城壁の内側からなのだろう。

ならば内に住まう人々は金銭面でかなりの負担を強いられているはず。

元々、内側の人間は富裕層が多くを占めると聞いた。

だからどうした。

他者より財産が多いからといって、自分達だけ多くの負担を強いられることに納得できる人間なんているはずもない。当然、不満は生まれる。

人間というものは実にわかりやすいもので、他者との違いには異常なまでに敏感なものだ。

それも残念な事に、そういった違いを探る感情は負の方へと傾きやすい。

そして負の感情は渦をなし、争いへと発展する。

それを様々な手段で制し、導いていくのが国家だ。

そしてその先導者はいつの時代も敗者を生み出してきた。

生かさず、殺さず……煙に巻いて誤魔化して

それではこのラナクロアにおいて、敗者とはいったい誰なのだろうか。

それは壁の中の楽観者達だろうか。それとも壁の外の蔑まれた者達だろうか。

そもそも敗者が何故存在する……？

いや

中の人も外の人も敗者である自覚なんてないわな。余所者の俺が勝手に決めつけるのは失礼極まりないか……

まあとりあえず自分達よりも『下』の人間を定められ、それに満足して何故か見下している節がある城壁の内側の連中の考え方は滑稽ではある。というか俺が気にいらぬ。

ってまてまて。そういうのには極力関わらないんじゃないか。俺が俺。

そこに考えた到達した時、ふと背中の中をルクエに視線をやる。

やれやれだ。

どうやら俺は既に関わっちまったらしい。

根っからの悪人なんて存在しない。

育った環境の違い。それにより形成された思考回路の違い。

違い。違い。違い。

それが悪だと教えられて育った人間がその悪を憎むのは悪い事なのだろうか。

むしろ悪と定められたものを憎める人間こそが、その環境において最良の正義なのではないか。

ああもう！なんだって難しく考える！

要するに俺はルクエや小夜子にそっくりなキ力がそういう考え方ののが嫌なだけなんじゃないか！

いや、まで。そもそもキカまでルクエと似たような考え方だなんて誰が言った？

いくらルクエみたいな考え方が集団心理の賜物だからといって、キカまでがそうだと決めつけるのは早計じゃないだろうか。

というよりも、中はこう。外はこう。という決めつけ自体が極論なんだ。

黒と白にはっきりと別れてくれる程、世界は単純で優しくは無い。

そもそもそういう決めつけこそが、俺が一番嫌いだった事なんじゃないのか？

だったらどうして俺は決めつけたがったんだ？

ああ　　そうだ。わかってる。

常に最悪を見越した考え方をしておいた方がショックが少ないんだ。

勝手に期待して裏切られて傷つくのは嫌だから

ああ　　もうやれやれだぜ。

嫌なものを嫌と言わずに、笑顔で煙に巻いてやり過ぎるのが大人なやり方だ。

そう定めて生きてきた俺がその実、一番やり過ぎさせてないんだからお笑い草だな。

ああ　　もうわかってる。どうせ関わった以上、放ってなんっておけない。

だから結局

なる様にしかならない。できる事をできるだけやる。たまに出来ない事もやってみようとする。

馬鹿っぽいけどこのスタンスを貫くしかないわけだ。

「　　ダオミく、サダオミく」

「ん…………あぁ、すまん小夜子」

景色が暗いせいか思いのほか考えふけていたようだ。

声に我に返ってみると小夜子が俺の事をつんつんとつついてきていた。

「…………小夜子って？」

じゃなくって。

「…………あ、わりい。キカ

…………だったよな？」

「そう、キカ・サミアス」

「どうも妹と似ててね」

「そ。　　だからさっき泣いたの？」

「う…………それは忘れて頂けるとありがたい…………」

「そう」

にしてもこの見た目は反則だろ！俺が見間違えるとかどんだけだよ！

そんな風になんか心の中でごちついていると、ようやく視界が開けてきた。

「げっ！」

「どうかした？」

開けた景色に擬音付の一声を放った俺にキカが首を傾げる。

そりや変な声も出したくなる。

昼過ぎに目覚めたはずの俺の時間は牢屋の中で随分と過ぎ去って
いたらしく、再び見た外の景色は既に夕暮れかかっていたのだ。

「まずったなあ……俺、約束あつてさあ」

「約束？」

「そうそう、人と待ち合わせてるんだよ……シイラまでってここか
ら結構かかる？」

「シイラ？……二日くらいかな」

「まじか」

そう言いつつも考えてみる。

確かカルケイオスに到着した際にロイエは『あの距離を一晩でと
かありえない』とか言っていた。

ということは俺が本気で走ればかなり移動できてるってことだよ
なあ

それならば夜明けまでにはシイラに到着できるか。などと顎に手

を当て思案する。

「んなああああ!!」

するとそこに奇声が聞こえてきた。

発信源は主に俺の背中。

その人となりを知ってしまった今では、優雅な見た目すらも悲哀の色に縁取られるあのお方『ルクエ・マリネ』様が起床なされたのだ。

「よっ!おはよ」

「起きたの」

とりあえず声をかけてみる。前方のキカもそんな感じの声色だった。

「あ、あああああの!あの!サダオミ!!」

わた、わたわたわたわた、私のですね?」

起きるなり忙しい人だった。

「いや、まあとりあえず落ち着こうかルクエ」

「あ、あああの……その……」

何かを訴えたかった様子のルクエだったが、俺に背負われたまますぐに萎んでしまう。

要領を得ないと首を傾げていた俺に、キカが話しかけてきた。

「サダオミ」

「ん？」

「たぶんルクエはあなたに対してひどい事を言ったと思う。それ、できればロイエには伏せてあげてもらえないかな？」

「ふむ」

黙っているって事は言うとまずいんだよなあ

そんな事を思いつつ、振り返ってルクエの様子を伺ってみる。背中の巻き髪さんはなんともバツの悪そうな表情を浮かべ俯いていた。

「ん、まあ黙っているのは別に構わないんだが……事情くらいは聞かせてくれるのかな？」

俺のその言葉にルクエの指先が強張ったのがわかった。

学校とは社会の縮図です。

昔、したり顔でそう語った教師の言葉が脳裏に蘇る。

キカに助けられながら、ぽつりぽつりと語ったルクエの話の内容は白じみたまものだった。

語る内容に比例して、その表情からは自信に彩られたいつもの光彩が抜け落ちていく。

人が集まれば派閥が生まれる。

朱に染まれない人間は孤立する。それは当たり前前の自然の摂理だ。

そしてそれはどこにでもありふれた話だった。

なんのことはない。自分色に染まってくれないロイエを、過去のルクエは異物として排除しようとしたことがあるのだと。

要するに？いじめ？を先導して行っていたらしい。

ふむ。

懺悔は続く。

自分の罪をすべて聞いてくれとルクエは言葉を吐き出し続ける。

その瞳から雫が溢れ、嗚咽から声を紡げなくなるまでそれは終わらなかった。

さて

足元で泣きじゃくるルクエを見下ろす。心配そうにルクエの様子を伺っているキカが横目に見えた。

性質が悪いのはその罪がすでに許されていることだった。

キカを仲介してすでにロイエに対する？いじめ？は解決されている。

ロイエとは出会ってそれ程、時間も経っていないが、あれは細かいことは気にしないタイプの人間だろうということくらいはわかる。

恐らく、謝罪したルクエを快く許したのだろう。

そしてそれこそがプライドの高いルクエ・マリネに一番の後悔をたらしめた。

優雅さにこだわる彼女が嫌いそうな？いじめ？という醜い行為に手を染めた理由はわからない。あえて理由を定めるのなら？魔が差した？のだろう。

時間が事柄を掘り下げ、明確化されていくことに後悔は大きくなる。

この少女は独りで何度謝罪を繰り返してきたのだろうか。

ルクエ・マリネを許していないのはもはやルクエ・マリネだけだというのに……

「まあでも、それとさっきまで俺に言ってた内容をロイエに黙って欲しいっていうのは繋がらないんじゃない？」

自覚している自分の嫌な部分が再び顔を出した。恐らく先程の一連の出来事はそれなのだろう。

自己嫌悪する度に思い出される過去の出来事。

結局、自分で自分を許せない限りその苦しみは続く。

だからこそあえて追求する。

「ロイエにいい格好したいから黙ってて欲しい？」

たぶんルクエには今それが必要だから

「そ、それは……」

飾らない言葉で投げかける。

「上辺だけ取り繕っても苦しいだけだと思っよ」

俺はこの子の味方でいよう。

「……」

だからこそ俺は

「ルクエ・マリネはプライドが高くて優雅で、そしてたまたまそのプライドが邪魔して暴走する」

かりそめの免罪符を提示した。

「え？」

「それでいいじゃん、格好つけてもしんどいだけだっつて」

「あ……」

ルクエ・マリネの味方として告げたその一言は、思いのほか彼女の心に響いたようだった。

再び泣き崩れた彼女に諭すように続きを告げる。

「それにさ」

城壁の外の人間って細かいこと気にしない、なんていうか気持ちいい連中なんだよ」

俺のその言葉にキカがふっと笑みを浮かべた。和らいだその空気に安心して続きを口ずさむ。

「俺のこと嫌いじゃないなら一度、外の連中と会ってみるのもいいんじゃない？」

そうすりゃ変な偏見とかなくなると思うし」

「あなたのこと嫌いだなんてそんな!」

「ん、それじゃ考えといてよ」

「は、はい……」

ルクエが赤くなり俯いた。どうやら話は終わったらしい。

その後、終始？熱を帯びた視線？をルクエが俺に送ってきていたのが気になったが、とりあえずは学院の用事があるということと彼女が渋々去っていった。

「サダオミ、さっきはありがとう」

二人になった途端にキカがそう言ってきた。

「いや、別に」

短くそう返答した後、目を瞑り先程までの出来事に思いを馳せる。

告白すれば俺は人間が好きだ。

同じ過ちを繰り返す。そしてその度に後悔する。

見栄もある。好きな人には自分のことも好きでいて欲しい。

自分の汚点は隠しておきたい。自分の良いところだけを見ていた
い。

なんともいじらしくて 愛らしい。

想いと想いの掛け合い。出会いと別れの繰り返し。紡ぎ続ける奇
跡の連鎖。

だからこそ俺は天使である前に人間でありたい

「考え込むと結構、人の話聞いてないね？」

気がつくとき力がじと目でこっちを見ていた。いちいち小夜子っぽいよこの子。

「すみません聞いてませんでした」

素直に謝った俺に『大事なことからちゃんと』と前置きしてキ力が語り始める。その内容に俺は思わず目を見開いた。

？カルケイオスに再び不穏な魔力が流れている？

うん、正直なんのこっちゃわからん。

「だからちゃんと聞いて」

表情に出ているらしい。また怒られた。

それから語られた内容は信じがたいものだった。

キカによると以前にも一度、カルケイオスで不穏な魔力を感知したことがあるらしい。

时期的には丁度、ロイエルのいじめ始まったあたりになるそう。

カルケイオスには魔力に長けた者が多く集まっていると聞いている。

それならばそういつた侵入者の類はすぐに捕まるんじゃないのかと尋ねた俺に

「私は特別、魔力の感知に長けてるから」

そうキカが答えた。

要するにカルケイオスで？何か？が起こっているのに気がついたのはキカだけだったわけだ。

ではその？不穏な魔力？はどんな悪影響を及ぼすのか。

それが信じられないことに先程のルクエの行動に関係しているようだった。

キカ曰く、人の負の感情を増幅する効果を孕んでいるとか。

魔力こえ〜！人の感情に介入とかまじこえ〜！

そこで気がついた。

「俺、なんともないんだけど？」

俺の疑問にキカは飛び切りの笑顔でこう答えた。

「あなたは鈍感なもの」

何気にショックなんだが。

おもしろい顔になっている俺をスルーしてキカは続ける。

前回同様に今回も？敵？の目的がわからないのだと。

前回は魔力の気配を消して探知し続け、尻尾を掴む寸前にロイエ

ルに対する？いじめ？に見かねて声をかけて目立ってしまったらしく、それと同時にこちらを警戒したのか不穏な魔力は消えてしまったらしい。

「ん、それなら前回の目的ってロイエをいじめさせることだったとか」

なんとなくそう呟いた俺にキカは

「ありえない。カルケイオスに侵入するリスクまで犯して、そんなしょうもない理由だなんて」

ぼそりとそう返した。

「今回は逃がさない。少なくとも前回はそのせいで友達が二人も傷ついた」

冷たくそう言い放ったキカのその言葉には、しかし言葉の温度とは裏腹に怒りと決意の熱が込められているのがわかった。

「まあ俺にできる範囲なら手伝うよ」

乗りかかった船ってやつだな。マリダリフはまあ……もうちょっと待ってもらおう。

「ん、ありがと。

それなら

「キカにもこの後、学院の用事があるらしい。

前置きした後、キカは俺にその用事が終わるまでの間ロイエルに

ついでいてくれと告げた。

俺はそれを承諾し、二人でロイエルに合流しにいったわけだが……

「なあ、ここ……」

「うん、カルケイオスの駄菓子屋」

連れてこられた先は明らかに周りの景色から浮いている不思議な建物だった。

何が不思議かと言えば、このラナクロアに？昭和？を感じさせる趣で縁取られた自身の記憶の片隅にある駄菓子屋と同じような造りの建物が存在していたことだ。

「で　あのチンチクリンは人のこと待たせてなんで駄菓子屋？」

確か手続きがどうのとかで待たされていたはずなんだが……

「たぶん少しは探したんだと思う」

「俺を？」

「うん。ルクエに連れ去られてたから」

「それでなんで駄菓子屋？」

「たぶん 飽きた」

ちよ！

思わず面白い顔になった俺と、笑うのを堪えている様子のキカを『カラン、カラン』と駄菓子屋の扉が音を鳴らして迎え入れた。すると同時に

「キカあああああー！」

涙目のロイエがキカに抱きついてきました。

「どうしたの？ロイエ」

「僕にお金かしてええええええ！財布落としたの忘れてたあ」

見ればその口元にはチョコレートのようなものが付着している。

大方、食べるだけ食べて支払いの段になって財布を落としたことを思い出して青ざめていたというところか。

まあ、なんとというか……くそつたれめ。

こうして再びロイエル・サーバトミンと再会した俺は、キカが戻るまでの約束つきで、またこの僕っ娘を護衛することとなった。

余談ではあるが、このチンチクリンがキカの背後に控えていた俺の存在に気がついたのは、キカが駄菓子の代金を立て替えて支払いを済ませた後のことだった。

もうなんというか帰っていいですかね!?

? 私にはその人の背に翼が在るのが視えた?

嫌な予感がした。

その日、キカ・サミアスは学院の?当番?開始までの空き時間を潰すため、自宅から学院までの間にある商店の立ち並ぶ区画をぶらぶらと歩いていた。

いつもと変わらない景色。そこにふと違和感を覚える。

「あそこは確か……? 魔示板?があるところ?」

視線の先には珍しく人だかりが出来ていた。

魔示板。

古くから、王国専用の広報手段として用いられてきた特別な魔法を施された看板。

本来、文字だけを表示していたその板は近年ポーター結社『サキユリアス』が？指名求人？に登用したことにより開発が進み、現在では立体映像に音声つきと豪華なものへと昇華されている。

もちろん内容により、表示される人物や音声ガイダンスは変わってくる。

例えば王国公布の場合は騎士団長『ドナポス・ニーゼルフ』がかついなりで出現し、野太い声で丁寧な。

指名手配犯の場合は犯人の顔が表示され、これまたドナポス・ニーゼルフの声で犯人の特徴や罪状、更には懸賞金の額までを伝える。

？魔示板？は基本的に一箇所につき設置されており、一つは王国専用。もう一つはサキユリアス専用である。

そしてこのカルケイス内には三つ目が設置されており、それはカルケイオス内の申請状況などの広報に用いられている。

基本的に二つで一对のそれらは、遠目にみれば全くの違いが見受けられない。

以前から存在するものと同一形状の物を近くに造りたがるのは、サキユリアス社長の悪癖か。

当然、サキユリアス側の？魔示板？からは社長である『クレハ・ラナトス』の姿や音声の流れ、内容が指名求人の場合には給与額と？熱いラブコール？をのたまわってくれるのだ。

そしてその給与額を定める傭兵ランクをサキユリアスは導入している。提示されたランクがそのまま野良の傭兵達のステータスになっていることは言うまでもない。

そういった一連の流れから？魔示板？はラナクロアにおいて民衆の娯楽の一環になっていた。

？やれ誰が強い？

？やれ誰が次はサキユリアスに囲まれるか賭けよう？

？今日のドナポス様は調子が悪い？

などなど。

人だかりが出来ているのはどの？魔示板？だろうか。いつもは気にもせず素通りするものの、その時だけは妙な？胸騒ぎ？がして覗き見ることにした。

人だかりに近寄るにつれて、なにやら学院の男子生徒達が興奮し

た声を上げているのに気がついた。

耳に入ってきた内容は？綺麗？や？強い？など。

噛み合わない二つの表現に首を傾げながらも人だかりを縫うように？魔示板？に近づいていく。

ようやく視界に捉えた？魔示板？の姿にその疑問は氷解した。

人だかりが出来ていたのは二つの？魔示板？。一つはサキュリアスでもう一つはカルケイオスのものだ。

視界の片隅の僅かに映りこんだ王国魔示板には、鉄壁ドナポス様がしょんぼりとした様子で浮かんでいて思わず笑いそうになる。

さて

まずはサキュリアスの魔示板を覗く。画面に表示されていたのは指名求人だった。

画面の一番上には初回ランクAの文字。

なるほど、これは確かに驚きだ。自身の記憶に間違いがなければ、サキュリアスの指名求人です初回ランクAを叩き出した傭兵など、生きる伝説とまで呼ばれている『シーザル・エミドウェイ』において他にいない。

一体どんな屈強な男が現れたのかと俄然、興味を惹かれ視線を画面の中央に落とす。

思わずじしじしと目を擦った。

画面の中央には美しい女性の姿。風で編まれたような美しく大人めのブロンドの髪を膝下まで伸ばし、その背には背丈よりも長い剣のようなものを背負っている。

なによりも気になったのは美しい見た目とは裏腹に、その女性が浮かべているなんともいえない微妙な表情だった。基本的にいわゆる？決め顔？で表示されることが多い魔示板の映像としては極めて異例と言える。

「なんでこんな顔……」

まるで嫌々撮影されたかのような……

キカ・サミアスは知る由もない。その映像の女性が真っ赤な服のもみあげのその人に「綺麗だねえ〜！」の掛け声で撮影されたことを。

人だかりの原因の一つは理解できた。なるほど確かにしばらくは町の噂の種には事欠かないだろう。

しかし？胸騒ぎ？の原因はもう一つの魔示板にあるようだった。

一般人にはただの？胸騒ぎ？で済まされるそれも？すべての感覚が鋭い特異体質である？と、あの『ミレイナ・ルイファス』に認められている自分のそれはただの？胸騒ぎ？では済まされない。

むしろ数日前から、再び漂い始めた不穏な魔力のこともある。この？胸騒ぎ？はもはや確信だとキカはもう一つの魔示板に目をやった。

「……え？」

思わず声が出た。

もう一度、先程見たサキュリアスの魔示板を見返す。

？サダオミ・カワシノ？間違いない。カルケイオスの魔示板にも同じ人物が表示されている。

これは一体どういうことかと目を凝らす。？彼女？を縁取っている枠組みには覚えがあった。

「……生存権獲得？」

？彼女？を誰かがこのカルケイオスへと迎え入れたということ？

胸騒ぎの正体はこれのことだったのだろうかと首を傾げる。ふとそこに同じクラスの男子生徒が声を上げた。

『あつ！さっきこの美女見たぞ俺！』

『まじかよっ！俺も一目みてえ！どこ？どこにいた？』

『いや〜それが……ルク工嬢が連れ去っていった……』

嫌な胸騒ぎの正体はこれかっ！

目を見開いて男子生徒に確認する様に視線をやる。すると男子生徒はとどめを刺すかのごとく続きを口にした。

『大丈夫かなあルクエ嬢……これ、申請通したのって姉御だろ？』
ドクンと心臓が鳴る。

姉御 ロイエ

一瞬で脳内変換を済ませ慌てて踵を返す。

連れ去ったということは今頃、地下牢屋か。

ルクエ・マリネはどこまでも純粹だった。悪く言えば単細胞ともいう。

華麗にこだわるあの君は純度100%で？不穏な魔力？の影響を受けやすい。

「傍についていれば大丈夫だと思っていただけれど……」

？不穏な魔力？を感知してから数日。少し、怒りやすくなった以外には気になる程の変化はまだ彼女には現れてはいなかった。

油断した。

そんな魔力のせいで自分が凶行に及んでいた等、プライドの高いあの子には告げるべきではない。秘密裏に処理しよう　そう思っていた。

もちろんロイエにも事は告げていない。告げれば大声で『出てきなさい！』コールを発するのは容易に想像できたから……なんて言うとなの子は怒るかな？

「どちらにしてもこれは 私のミスだ」

移動補助の魔法を足に行使用する。一足で数十歩分の移動距離を確保しつつ、人並みを掻き分けていくのは困難を極めた。時折、人とぶつかりながらそれでもスピードを加速していく。

やっと挨拶くらいは交わせるようになったんだ。

ロイエ本人にプライドが邪魔をして、謝罪できずに悔しそうに俯いているルクエをずっと慰めてきた。

もう少しで本当の友達になれるのに。

私は二人とも大好きなんだ。

もう邪魔なんてさせない！

唇をぎゅっと噛み締める。ようやく見えた地下への階段は相変わらずに細く、薄暗く、冷気を纏って行く手を阻んでいた。

気圧されている場合ではない。十歩も使わずに一気に階下まで駆け下りる。慌てて覗いた牢屋に姿は見受けられない。それならば取り調べ室か。

そして

コンコン

なるべく刺激しないように魔法を施した手で優しく鉄扉をノックした。

ルクエの怒声に迎えられ、思わず身構える。
扉を開く私を支えてくれたのは、被害者である彼女がもつサキユ
リアス傭兵ランクAの肩書きだった。

最悪の事態だけは実力で阻止してくれているだろうと

？私にはその人の背に翼が在るのが視えた？

そう　　確かに天使はそこいたのだ。

そしてその人の言葉に友達は救われた。

妙に人間くさい天使だった。

その口から紡がれた言葉は不器用だったけれど

？そこ？には確かな想いが込められていた。

気がつく私、私だけが知りえる？不穏な魔力？の存在を『サ
ダオミ・カワシノ』その人に告げていた。

それが　　私とサダオミの出会いだった。

カルケイオスの裏通りの一角。夕日に影を照らさしだされ一層、寂れた雰囲気の中に佇む不思議な趣のある建物の前に美女が三人いた。

掲げられた看板には？中村屋？の文字。定臣がラナクロアの文字を読めれば大層首を傾げそうなの看板であったが、解読されることはなく今は彼女達の頭上でただ、ただ夕陽と睨めっこしている。

どこの世界でも夕空が夜の闇へと役目を投げるのは早いらしく、僅かな時間で辺りの景色は色を変え始める。

そんな中、手の平に視線を落としたキカ・サミアスは少し焦った様子で別れを切り出した。

「いけない。もういかないよ……」

それじゃサダオミ　　ロイエのことお願いね」

キカ・サミアスのその言葉に音速を超えて了解を投げかける。背後でロイエが『どうしてサダオミにお願いなのよ』とか言ってるがそんなものは関係ない。

「あ　　キカ……今日は？当番？かあ」

久しぶりに聞いた単語に懐かしさを覚えた。そういえば二人はこの学院とやらの生徒なんだったな。

ふうん、となんとなしに聞き流しているとキカがロイエに呆れた様子で大きく息をついた。

「ふえ？どうしたのキカ」

「ううん……なんでもない。

それじゃ私もう行くから」

「おう！なにか知らないが頑張れよ！」

とりあえず声をかけておく。首を傾げ続けているロイエをスル―しつつ、軽く会釈をするとキカは去っていった。

次に会う時は、約束を遂げて自分がカルケイオスを去る時になるのかと思うと、僅かながらの寂しさが込みあげてきた。

それにしても　　あの見た目は本当に反則だ……

そう思いつつもキカの背中を見送る。そこに足元のチンチクリンが嘸みついてきた。

「ちょっとサダオミ！なんでキカと仲良くなってるのよ！」

「愛していると言ってもイイ！」

うつかり心の声が漏れた。

「…………えくと？」

「うん、まあ気にするな。」

「ちよっと友達になっただけだよ」

キカとの約束は守らないといけない。ルクエ・マリネとの一件はロイエには伏せておくことにする。

「う〜…………まあいいけどさ」

「ここは少し話題を変えようと、耳に残った先程の単語に話題の矛先を向けてみる。」

「そついえば？当番？つてなにするんだ？」

「ああ、それはね」

エドラルザ王国国立魔科学専攻学院。

ロリエル・サーバトミン。キカ・サミアス。ルクエ・マリネらが所属しているカルケイオス内部に存在する魔術師育成機関である。

世間一般的には？エドラルザの城壁？に使用されている素材はカ
ルケイオス民が造りだしていることになっている。

しかしその実、城壁素材は学院生の手によって造られていること
は以前にロイエル・サーバトミンが語っていた。

ついでに素材の原材料がマノフの外皮であるという国家機密まで
も、うっかりあっさり漏らしたことは記憶に新しい。

では学院生はどのようにしてその城壁素材を造りだしているのか

城壁素材造りに携わる者は五人一組。一日交代で予め定められた
順に巡っていくその役割をここでは？当番？と呼称しているのだと
ロイエル・サーバトミンは語る。

城壁素材は？ミレイナの窯？と呼ばれる大型魔法具の中で生成さ
れ、？当番？の者はこの？ミレイナの窯？に耐久維持の魔法を行使
し続けるのだという。

曰く、？造る？のではなく？維持する？のだと。

どうやら説明は終わったらしい。相変わらずに怒りながら丁寧な
ところに思わず笑みが零れる。

そしてまた

意味ガワカラン単語ガデテキタ。

これは天使の宿命か。別世界ごとに毎回苦勞させられるのには慣れるほかないだろう。

？わからない事があれば何でも質問して下さい？

一昔前に、そう笑顔で言った教師に本当に何でも質問してみたところ、笑顔で多数決で他に？わからない人？を募られた挙句に、『少数派なので切り捨てます』と言われたトラウマも無くはないが

幸いここでの？教師？は何でも答えてくれそうだ。それならば何事も勉強あるのみである。一つ一つ覚えていくしかない。

「んじゃあ、その？ミレイナの窯？つてのが無けりや城壁素材がでないってこと？」

「そうなるわね」

「ミレイナ……ミレイナ……どこかで」

その名が気になり記憶を探る。顎に手を当てかけた俺をチンチクリンが指差し、ぐわっと口を開いた。

「ミレイナ・ルイファス……！僕のお姉さまだよ！昨日、教えたでしょ……！」

そういえばそんな事を聞いた記憶がある。

「怒るなよ〜」

『怒ってないわよ!』と、ぴよこんと跳ねた仕草が可愛くて思わず頭を撫でる。サラサラの赤毛が妙に手に馴染んでやめられないとまらない。

それにしても? ルイファス? …… ロイエの苗字は? サーバトミン? だったよな?

確か実の姉と言っていたはず。

苗字が違うということは…… まあ人の家庭の問題ってやつには踏み込むべきじゃないよな……

そっともう一度、ロイエの頭を撫でる。

「なによ?」

「相談に乗れることがあったら何でも言ってくれよな」

とりあえず俺にできることはこれくらいか。

「……なに? なんで慈しむような顔になってるの? ……なに?」

「まあ強く生きるのじゃ。ロイエル・サーバトミンよ」

「なんで急に老人口調!? なんでフルネーム!?」

『意味わからないよ!?!』などと照れ隠しをしているカワイイ奴め。

(注 定臣はこの世界の苗字の理を知りません)

しばらく首を傾げていたロイエだったが、自分のその行動に先程のキカの去り際の態度を思い出したのか、自問するように呟きを漏らした。

「それにしてもさっきのキカ……なんでため息なんてついてたんだろ?」

「そりゃ無関係な俺の前で恐らく国家機密であるっ?当番?のことが口にしたからじゃないのか?」

笑顔でそう答え、素早く耳に手を当てる。心の中ではこのチンチクリンには隠し事は教えないでおこうと誓っていた。

「……きゃあああああああああああああああああああああああああああああ!」

カルケイオスに絶叫が木霊した。

さて

裏通り。夕暮れから夜を迎える時間帯。少女の絶叫。後はわかるな?

？それ？は素早かった。

ロイエル・サーバトミンがまたしても自身の不覚を嘆く絶叫を発してから僅か十数秒。魔術の街には到底そぐわれない筋肉隆々な大男達が数人群がってきた。

まあなんだ。警備のおじさま方だったわけだが。

さすがにこの時ばかりは嘆くばかりだった自身の見た目に感謝した。

もし？男？の姿だったのならば、間違いなくあらぬ疑いをかけられていただろう。

この見た目も幸いして適当な言い訳はあっさりと受け入れられ、すぐに開放された。

去り際に『またロイエル様か』などと警備の愚痴が聞こえた気がしなくもないが……まあ……

「このおおおおー！」

「きゃあああ」

わしゃわしゃと。

とりあえずはこれで許してやるう。

『禿げる！禿げる！』と半泣きなロイエを無視してさらにしばらく髪の毛を弄んでいると

「もうやめてって！」

……あ　　もう夜だね」

不意にロイエが空を見上げてそう呟いた。

同じく空を仰いでみる。夜の空は今日も快晴だ。
ぼつぽつと顔をだし始める星々。

願わくばこの？先？の世界にも同じ様に星々が輝いていま
すように

一瞥に想いを投げ、視線を元に戻す。

気がつくと辺りには人工であろう光が点々と灯り始めていた。恐
らくは便利魔法。魔法なのに人工とはこれ如何に。

裏通りである寂れたこの一角にも照明魔法の類は完備されている
らしく、夕暮れ時の夕陽よりも明らかに視界は見通しが良くなっ
ていた。

へえ〜と感嘆の声を上げつつ、しばらくカルケイオスの街を見回
す。そこにロイエが言葉を投げかけてきた。

「それじゃ、宿にいくわよ」

「へ？」

「だから宿よ宿！まさか僕の家に泊まるつもりなの？」

「いや、そもそも一泊するつもりがなかったわけだが……」

そこでぶと思い当たる。

そういえば？当番？は一日交代だと。

そうなるよキ力は明日までは戻ってこないということか。

これは全くもって安請け合いをしたとロイエに視線を戻す。

「なに？しまったあああ？って顔してるのよ？」

「しまったあああ！」

「口に出さない！」

「ふう……」

「なによ？」

確かに別れ際、マリダリフに明確な待ち合わせ時間は告げてはいなかった。しかしながらすでに一日が経過している。

「いや〜……人待たせてんのに悪いなあってな」

「う……それにはほんのちょびつと僅かながら微塵程に責任を感じるわ」

「それ感じてないってことですよね!？」

「わ、わかったわよ！宿代くらいだすわよ!！」

「ロイエ、財布ね〜じゃん」

「……………あ」

「ん〜……………まあ俺は野宿でもいいよ」

とは言ったものの

結局、ロイエの屋敷に招かれることになった。

そう、屋敷である。エドラルザ王国の中の小さな王国カルケイオス。その王である？ミレイナ・ルイファス？の妹は所謂？お姫様？であった。

表通りの最奥、エドラルザ王国国立魔科学専攻学院の真正面と抜群な立地条件と思われる位置に？それ？は建っていた。

むしろ俺が寝そべっていた芝生はロイエの家の庭だったらしい。校舎の一角だと思っていたんだが。

間違えるのも無理はない。この世界の住人ならば、細かい造りの違いなどで判別できるのであるが、異世界人である定臣から見たそのチンチクリンハウスは、校舎と全く同じ造りにしか見えなかった。

茶褐色な煉瓦とタイルを織り成したような造りの外壁は、照明魔

法の類でぼんやり照らし出され、人工にも関わらずどこか幻想的な雰囲気醸し出していた。

高層ビルから夜景を見下ろしている時の感動に近いものがある。

そう心の中で感想を述べつつ、しばらく立ち止まって観賞していたものの、すぐにロイエに急かされて中へと招き入れられた。

「あの」

「なにも言わないで」

使用人の？おかえりなさいませお嬢様？の挨拶の一つも期待していた俺を信じられない光景が迎え入れた。

赤い絨毯。

シャンデリアのような照明。

見るからに高価そうなアンティーク家具の数々。

そして趣ある内装。

リアルに初めて見たお嬢様の代名詞の数々の？それ？は黒煤にまみれ、無残に玄関ホールに積み上げられていた。
趣すぎた結果がこれなのか。しかし

「気のせいかロイエよ。俺はこの黒煤に見覚えがあるんだが……」

「言つなああああ！！」

ああ……容易に想像できるぞ……

ちよっと古くなったわね修繕しようかしら

ぼんっ

ちよっと！なんで爆発するのよ！？

ぼんっ

ああああ！これお姉さまが大事にしてた……

ぼんっ

きゃあああああ！

泣きたくなりました。

一頻り想像を終えた定臣は、かつて贅沢品であったそれらの墓標に軽く敬礼しつつ。

ロイエって絶対、？当番？外されてるんだろっちなあ

などと心の中で感想を述べるのだった。

？セキオスの間には化け物がいるのよ？

話題は遡る。ロイエル・サーバトミンの口からその単語が紡がれるまでに語られていた内容は、やはり？当番？についてのものだった。

？ミレイナの窯？それが安置されている場所が、学院内において最も重要な拠点であることは容易に想像できる。

学院最深部に位置する、直径五十メートル四方はあるだろうかというその空間の名は

セキオスの間。

そこにはカルケイオスにおいて唯一無二の？異質？な世界が広がっている。

？異質？とその空間が称されるには巨大魔法具の存在やそれを？維持？するために集束された膨大な魔力から醸し出される異様な雰囲気もさることながら、ここで特筆すべき点は他にある。

それでは他に何があるのか

このラナクロアにおいて唯一、治外法権が認められているカルケイオス。その内部にたった一点だけエドラルザ王国の？法？の侵入を許している空間が存在していた。

小さな王国の中の僅かな綻び。それこそがこの？セキオスの間？なのである。

「で　　なんでそこだけエドラルザ王国の？法？が適応されるの？」

現在、俺とロイエは瓦礫の山を通過し、部屋としてギリギリ機能している？空間？で過去に机だった物を挟み、かろうじて椅子であるものに腰をかけて話し込んでいた。

「刺々しいなにかを感じただけ？」

「キノセイ。続けて続けて」

まったくもう、などと口ずさみながらロイエは続きを話し始める。

「んつと、お姉さまが言うには」

？人は知らざるものには恐怖を感じる？

なるほど確かにその通りだ。

そしてこのカルケイオスは？力？を持ちすぎている。

ラナクロアの魔術の心臓部。

エドラルザ城壁の素材造りの独占。

そして何故か認められている治外法権。

少し話を聞いただけでも異常性は感じる。そして大きすぎる力は疑心を生む。

それが配下にいるのならばそれは尚更だろう。

わかりやすく忠誠を示すには貢物が必要なのだ。

そしてカルケイオスがエドラルザ王国に提示した貢物こそが城壁の名であり、法の一部介入とそれに伴う内部監視なのだろう。

ロイエルの噛み砕ききれていない説明から、あたりをつけた定臣は自分なりの解釈を踏まえてそう理解した。

それにしても……僅かそれだけの貢物でよく？あの？エドラルザ王国がよく納得しているものだ。

エドラルザ王国の？法？。

それはなにかと死刑の目立つ非常に物騒なものだった。

人を手っ取り早く縛るには残念ながら、いつの時代も暴力が有用だ。

その暴力の極みである？死刑？を振りかざせばさぞ人々を屈服させやすかったのだろう。

それが現王の意思からか、この国が長い歴史の中で創り上げたものかは知らないが、このラナクロアに降り立って僅か五日で何度も耳にしたその単語に、定臣は内心でうんざりとしていた。

しかしながら暴力だけでは人は支配できない。

暴力から得られた支配は瞬発的な効果は生むものの、持続力に欠ける。

それは歴史の教科書が証明している。

どれだけ強力な暴君が出現しようとも、飴と鞭をうまく使い分けた者こそがより長く、歴史に君臨し続けてきた事実は捻じ曲がらない。

そういつた意味ではこのラナクロアは最悪なケースといえる。

死刑が蔓延る法律。絶対的な鞭と思われる？それ？よりも更に強力な鞭が存在する。

魔族。そしてそれらが使役する魔獣。

その鞭に対してエドラルザが提示している飴は命そのものとも言える？城壁？の存在である。

鞭が？命？なら飴も？命？。

矛盾しているようで、しかし絶妙にバランスがとれている。

故に　　この支配は終わらない。

だからこそ？ミレイナ・ルイファス？はうまくやったと思う。

変わらないものを変わらないと受け入れ、自らが持ちうる手駒を最大限に駆使し、最大の利益を得た。その結果こそが現在のカルケイオスの在り方なのであろう。

そこに思考が到達した時、定臣はまだ見ぬその人にそう思いを馳せた。

「ロイエの姉ちゃんはすごいな」

「うん！すごいよ」

恐らくは自分などが想像も出来ない程、数々の苦渋の選択を強いられてきたのだろう。カルケイオス民の命と自分の思考を天秤にかければ、泣かされたのは一度や二度ではないはずだ。

そしてその果てに守り抜いてきたものが？この？笑顔なのだろうと定臣はロイエルの頭に手を添える。

なるほど　この笑顔のためなら頭を下げるのも容易いな。

とはいえ、セキオスの間に滞在しているのは王国の一般兵士。カルクエイオスの王である？ミレイナ・ルイファス？がそれに頭を下げてるとは思えないが　いや、わざわざ派遣されてくるくらいなのだから特別な地位でも与えられてるのか？……

そうなるとセキオスの間において？ミレイナ・ルイファス？と王国兵士はどちらが上の立場になるのだろう。

「やっぱ姉ちゃんもそのセキオスの間では王国兵達に頭下げてるのか？」

ふと思った疑問を口にするロイエの顔が驚愕の色に染まった。

「　びつくりしたあ」

「なにこ」

「あのねえ……お姉さまが人に頭を下げるわけないじゃん」

ロイエルのその言葉に自身が思い描いたミレイナ・ルイファスの？くえないけど世渡りの上手な人？という人物像に、些か思い違があるようだ。と定臣は首を傾げる。

そんな定臣などお構い無しにロイエル・サーバトンは誇らし気に続けた。

「そもそもセキオスの間に近づきもしないよ？」

？世の塵あくた共の自己満足のためにゴミ屑を我が家に招き入れてやっているのだ。これ以上、私になにをしろと言う？……フッフ、王国騎士の鎧を見ると思わず八つ裂きにしたくなるよ？

とか言ってたし」

声のトーンを落としてそう真似てみせるロイエルによって定臣が思い描いた？ミレイナ・ルイファス？その人物像は紙くずのごとく吹き飛ばされていった。

思わず透哩の姿を思い浮かべた。

世の中には思いのほか怖い女性が多いようです。

「それに兵士達じゃないよ」

「はてな？」

「カルケイオスに滞在しているのは一人だけよ。それがお姉さまの最大限の譲歩だったもの」

一人だけ？

それで勤まるのだろうか。少なくとも？ファステル無し？である
自分に対していきなり死刑宣告してくるような輩がいるカルケイオ
スである。

まあ全員がルクエみたいなのじゃないとは思っけども。それに？
ファステル無し？と壁の内側の王国騎士じゃ扱いが違うのも当然か
な。

首を傾げた定臣だったが、貢物としての目的で王国兵を受け入れ
ているのならば、排除しようとする者も現れるわけがないかと自身
の中でそう結論付けた。

「にしても一人でよくやるなあ」

なんとなしにそう呟いた定臣にロイエルは困り顔で呟いた。

「そうね……就任当時は毎日が死闘だったもの」

あんぐりと口を開くとはこのことだろうか。思わずカタカナで？
ナンデタタカウノヨ？と問いただした定臣に対して、ロイエルは姉
が王国に提示した受け入れの条件を示した。

『いいだろう。王よ　あなたにもプライドがある。』

受け入れは許可する。　ふんっ！私、自ら排除してやるのも
悪くはないが……』

「さて！ロイエまった！」

思わず声真似中のロイエを制する。なんというかロイエの姉ちゃ
んって……

「ええいつ！やかましいわ！今は私が話しているのだ！最後まで聞くがいい！」

「声真似したまま怒るなよ……まあロイエの姉ちゃんの人となりはなんとなくわかったよ」

自分の中の？ミレイナ・ルイファス？に対して小波透哩ラナクロア版と評価を下す。良く言えば？孤高？悪く言えば？傍若無人？。当たらずとも遠からずだろう。

恐らくは周りの人間は振り回されてばかりなのだろうと、ますますロイエルに対して親近感が湧いた。

ロイエル・サーバトミンの声真似は続く。

話の内容は？貢物をやるかわりに内容には条件をつけさせる？と要約すればそういうことだった。

王国からカルケイオスに受け入れる兵士は一名。

長である？ミレイナ・ルイファス？は手を下さないという条件ではあるものの、その一名にはカルケイオス内でいつ？不慮の事故？が起こるともわからないというもの。

要するにカルケイオスに一歩足を踏み入れた地点で、住人全員が命を狙う……と。

無茶苦茶だ。それでは貢物自体に意味がない。むしろ？力を示したければ条件をクリアしてみせる？というミレイナ・ルイファスの副音声すら聞こえてくる気がする。

いや……もしかすると彼女は エドラルザ王を手の平の上で
転がして遊んでいるだけなのかもしれない。

ともあれ、王はその条件を飲んだ。そして宣言通りに異物は排除
されようとしたのだ。

「ん、それじゃ今まで何人も ?セキオスの間?の兵士は殺された
ってことか」

「殺されたなんて物騒ね。公には事故と発表されるのよ
でも」

?セキオスの間には化け物がいるのよ?

そう続きを口ずさんだロイエの表情には恐怖の色が浮かんでいる
様に思えた。

?ルブラン・メルクロワ?

カルケイオスに介入するエドラルザの?法?の人型の名はそれだ
という。

貢物として?セキオスの間?が王国に開放されてからというもの、
一度も屈することなくその空間に君臨し続けているその騎士は、驚
くこと女性なのだという。

まったくもって女性に化け物とは失礼な話だ。一昔前、人間をや
っていた頃の自分ならば間違いなくそう思っていただろう。

しかし今は違う　　小波透哩をはじめ脳裏を過ぎ去っていく歴戦の猛者（女性）達。

うん、世界には強い女性が多いのです。

「なら王国兵は一人も殺されてないってことか」

それなら良かったと言いかけて慌てて口をつぐむ。返り討ちにあったカルケイオス民はどうなったのかと疑問が浮かんだからだ。

しかしその疑問は次のロイエの言葉で望む？方？に氷解してくれた。

「そうね。」

それに　　「

？ルブラン・メルクロワ？が化け物と呼ばれる所以。それはもちろん、この魔術達者が集うカルケイオスを敵にまわし、いまだに生存し続けていることが理由である。

そのことだけでも十分に化け物だというのに　　とロイエルは続けた。

それをさらに彩るエピソードとして、法の番人のその人は？ただの一人も殺さず？に襲いくる数々の殺意を撃退し続けているのだという。

考えてもみて欲しいとロイエルは語る。

二十四時間いつでも敵の襲撃があるのだ。

殺意は常に彼女の傍らに在る。それはほんの一息をついた瞬間であったり、王国から支給される食料品の中であったり、はたまた眠

りの最中にまで襲いかかってくるのだ。

殺意をこめられた攻撃。しかしそのすべてに、？ルブラン・メルクロワ？は手心を加えて返礼しているのだという。

？各員、一度はルブランの命を汲みにかかれ？

？ミレイナ・ルイファス？のその指示に従い、各々の手を尽くしたカルケイオスの民達も一月も経たずに制されてしまった。

結果として？ルブラン・メルクロワ？は？ミレイナ・ルイファス？に認められた。

？一度は？という彼女の指示に思わず笑みが零れる。？ミレイナ・ルイファス？はここでもまた？試した？のだろう。

これは相当な曲者だと定臣は内心で覚悟を決めた。

その後はロイ工得意の余談が続いた。内容的には？ルブラン・メルクロワ？についてまわる噂の否定。

曰く、本当は腕は二本だけだ。

曰く、本当は目は二つだった。

曰く、本当は人間だ。

いや……わかってるからと思わずつつこみたくなったのはいうまでもない。

「ああ確かにそりやすげ〜な」

ここはカルケイオス在住、ロイエル・サーバトミンさん宅の一室……の廃墟。日はとうに暮れてはいたものの、まだ眠るには早い時間帯。

定臣とロイエルの二人は会話を繰り返していた。

言葉を吐きながら、自分の周りに現れ続ける？規格外？な人間達に思わず肩を竦める。

？ミレイナ・ルイファス？の傍若無人さもすごいが？ルブラン・メルククロワ？の怪物っぷりもありえない。

とはいえ

まだ見ぬ？ルブラン・メルククロワ？その人が化け物染みていたお陰で、貢物の件に関しては誰も命を失わずに済んだのだ。

世界の価値観が違うとはいえ、それが良かったことであることに変わりはないと信じたい。

そこで一つ気になった。？ミレイナ・ルイファス？の命令は？各員、一度はルブランの命を汲みにかかれ？というもの。

それならばロイエル・サーバトミンも一度は指示通りに襲いかかったのだろうか。

疑問のままに質問してみる。しばらく？びゃ〜びゃ〜？と騒いだ

後にロイエはその時の結果だけを教えてくれた。

「思いつきりお尻ひっぱたかれたわよ!? 命をとりにかかるのなら本気でやりなさい! ? って怒声つきで!」

「そっか」

短くそう返答した俺の顔は間違いなくにやけていたはずだ。

? ミレイナ・ルイファス? の絶対命令。それに従うフリをして手抜きをしていたロイエ。恐らくはキカも本気なんてだしてはいないはずだ。

ルクエはまあ……本気でもいいや。

ルクエの名前をだせば何故かオチがつくが、カルケイオスの学生である娘達のその心意気がなんとも嬉しかった。

命を摘むことに対して、自分とは違う価値観をもっている城壁の内側の住人達。その世界の住人達に、自分と似通った点を見出せたことが嬉しかったのかもしれない。

悪戯な世界。

交差する人と人。

もしも王がミレイナの要求を飲まなければ。

もしもルブランが弱ければ。

もしもルブランが殺人狂であったならば。

? もしも? はどこにでも介在する。

わかっている。

すべてがハッピーエンドで終わるご都合主義な物語なんて、本当はどこにも存在しない。

だからこそ神は？主人公？を定めている。

？選ばれた者にとってのご都合主義を創りだせ？と。

でも だからこそ俺は強く望む

願わくば自分の手の届く範囲の人間には幸せでいて欲しいと。

ん？……………？主人公？？

「……………あ

」どうしたの？」

「ロ、ロイエさんや、今日は何日かね」

「なんでまた老人口調……………」

材料の納品期日が今日だったから、えつとお……………雷の日だね。

正確にはラナクロア暦635年、水の月三の雷の日」

「……………なんてこつたい」

時すでに遅し

ようやく思い出した主人公？ポレフ・レイヴァルヴァン？の願い。

それを果たす通過点と定めた勇者になるための公募。

その開始期日は……

「キョウダツタンダ」

俺は何をやってたんだと思わず自己嫌悪に陥る。確かにマノフの一件でポレフにまで気を配る余裕は無かった。そして、そのまま成り行きでカルケイオスマで来てしまったわけだが……
それにしても

完全に忘れてた。

いや、まあポレフにはもう不老不死を行使したし……うん、まあエレシがついてるから大丈夫だとは思……思っただけど

脳裏に笑顔のエレシの姿が浮かぶ。もちろん目が笑っていないなかった。

すいませんごめんなさい忘れてました！

とりあえず心の中で土下座しておいた。これはますます早くカルケイオスを出る必要がでてきたと、自身の中でとりあえずこれからすべき事を整理する。

- 1、とりあえず明日まではロイエの護衛。
- 2、護衛が終わり次第、ダッシュでシイラまで行ってマリダリフと合流。
- 3、ポレフ達と合流。

最短でも明日か……

これは俺が合流するまでに、勇者の試験が終わってないことを願うしかないな。

「どづしたのよ？」

ロイエの声に意識を引き戻される。

「いや……すつげえ大事なこと忘れてたんよ」

とはいえ、天使云々のこちらの事情は伏せておくに越した事は無い。エレシの意向がそうだったことからそれもそれは間違いなさそうだった。

定臣は得意の愛想笑いでその場を誤魔化すと、その後もロイエルの適当な会話でラナクロアの知識を深めつつ、時間を潰していくのだった。

夜も更け、窓から見える魔法灯がその日の役割を終えた頃、それと同時にようやく長かった雷の雨が終わりを迎える。

同じ部屋で寝ようと誘ったロイエルをかわし、背中に『なんで女同士なのに？』などと疑問符を投げかけられつつも？マシ？な部屋を探索する。

どこの部屋も廃墟度に違いは無かった。それならばキカの願いのこともある。護衛ならば近くににいるに越した事は無いと、結局ロイエルの隣の部屋で眠ることにした。

劉生の修行の一環に？眠りながら敵の気配を察知できるようにな

れ？というものがあつた。

体得するまでには夜中に額に何度、木刀をもらったことがその果てに体得した浅く、深く眠れる術。

眠りながら常に気配には気を配っておくことは忘れなかつた。にも関わらず先刻は魔法を駆使された拳句、気がつかない間に拉致されるという不覚をとつた。

起きたらロイエに害が及んでました。じゃキカに申し訳がたたない。

とはいえ、明日は今日以上に強行軍な予定を消化しなければならぬ。

ならばより一層、気を配りながら眠るほかにないだろうと定臣は大太刀？轟劉生？を抱き締めつつ、壁に背をもたれさせ座つたまま眠るのだった。

定臣とロイエルが眠りに堕ちたその頃、エドラルザ王国国立魔科学専攻学院最深部？セキオスの間？では一つの事件が起こっていた。

膨大な魔力で蠢くその空間には？当番？で任務にあたっているキカ・サミアリアスの姿があった。

整った目元と、丁寧に切り揃えた漆黒の前髪。笑顔が似合うはずのその顔はしかし、今は脂汗を浮かべた追い詰められたものへと変貌していた。

「油断した まさか私狙いだっ たなんて」

キカ・サミアリアスのその言葉に、彼女の正面の位置に佇む少女が口元を歪める。

気がつかなかったのも無理はない。私の記憶の中での彼女は、いつも人影に隠れているような大人しい子だった。

にやりと吊り上った口元に今でも違和感を感じる。

瘦身長躯の体型に藍色のポニーテールの少女は、正体が知れた今でもどこか怯える様に瞳を揺らしていた。

その瞳とは対称的に、凶悪に吊り上げられている口元が？セキオスの間？の異様な雰囲気と合わさって、なんとも奇妙な感覚に陥られる。

「でもなんであなたが……」

聞いてはみたものの、やはり返答は無かった。

そもそも外部からの？侵入者？という思い込み自体が間違いだっただけだ。彼女は三年前にはこのカルケイオスの住人になっていたのだから……

それにしても

他の？当番？の三人に視線を送る。案の定、全員が両手をだらりと垂らし、虚ろな瞳を浮かべて心ここに在らずといった状態になっていた。

わかってはいた。

通常、五人一組で割り当てられている？当番？には当然ながら五人必要な理由がある。

世紀の大天才？ミレイナ・ルイファス？が創り出した？ミレイナの窯？

それを？維持？するには常に学生三人が本気で魔力を注ぎ続ける必要がある。

恐らくは学生の實力を？試す？意味も込められたその魔力設定。

もしも實力が及ばず、魔力がボーダーラインを割り込もうものならば。

この？セキオスの間？にはエドラルザの？法？が適応される。

城壁関係で何かトラブルが起きようものなら、原因を作った人間はエドラルザ王国に送致された上で即、死刑となる。

その事情も踏まえた上で、三人で足りるところを五人制にしている理由。学生に高い魔力レベルを要求しつつも、まるで？間違ってもカルケイオスから死刑囚は出さん？と学長が副声音で語っているようだ、キカは受け取っていた。

しかし現在、？ミレイナの窯？に魔力を注いでいるのは自分一人のみ。悪意を自分に向けている者が目の前の少女以外にいない以上、他の？当番？の者達の状態は容易に想像できた。

時間は経つ。そう遠くないうちに魔力が底をつくのは目に見えていた。

「私　あなたに恨まれるようなことしたかしら？」

もちろん返答は期待していない。自分の言葉で彼女の心に隙が生まれればいいと、その程度の気持ちで放ったキカの一言はしかし、今は？敵？となった元クラスメイトの彼女の心を大きく揺り動かした。

「う、ごめんなさい！う、恨んでるとかそんなのじゃないの……」

その声は凶悪に吊り上る口元とは裏腹に、キカが知るいつも通りの臆病な彼女のものだった。

「……だっ たらどうして？」

少し間を空けて諭すような声色でキカがそう尋ねる。相手の様子から裏になにか事情がありそうだと察したからだ。

「こ、これは恩返しなの！だ、誰も殺されたりしないから！だからお願い！」

臆病に揺れていた瞳に芯が入る。そう言い放った彼女はなにかを決意したように見えた。

意識を集中して背後の扉を伺う。あの扉さえ開ければ？法？の番人？ルブラン・メルクロワ？その人が待機しているのだが……

残念ながら、彼女があの扉を開いて中に入ってくることは通常ではありえない。今は命を狙われることが少なくなっただとはいえ、このカルケイオスにはいまだに彼女の暗殺を諦めていない輩が数人いるのだ。

普段の彼女はあの扉の向こうから、気配だけでこちらを監視している。そして現在この？ミレイナの窯？周辺で起こっている事態は目視以外で察知できるものではない。

あの鉄扉が恨めしい。とはいえ気配を察知できないルブランを責めることは出来ない。

目の前の彼女の悪意は？特異体質？である自分でやっと察知できる程度の異常なのだから。

「き、聞かせてもらえるかしら？」

消耗が激しい。早くこの状況を打破しなくてはと、キカはさらに少女に意識を集中させた。

？すべての感覚が鋭い特異体質である？

キカ・サミアスはカルケイオスにおいて？ミレイナ・ルイファス？が唯一認めた？特異体質？の持ち主だった。

すべての音が一瞬消える。次の瞬間には、正面の彼女の息遣いが大音量で聞こえ始める。

さらに神経を研ぎ澄ませる。周囲の魔力の流れが鮮明に視え始めた。その中で彼女から流れ出ている魔力が明らかに周囲のものから浮いているのがわかる。

吊り上った口元を起点に流れ出ている？異質？な魔力。

そこに意識を集中させた瞬間

視界が弾けた。

それは誰もが予想していなかった出来事だった。

周囲の膨大な魔力にキカ・サミアスの？特異体質？。さらに目の前の少女が持つ？異質？な魔力。それらが織り成し合い初めて起こりうる奇跡だった。

「!?!?.....な、に.....こ.....」

キカ・サミアスは視界が弾けた感覚の中、自身が身体から抜け出し、正面の少女の身体に吸い込まれていくような感覚を覚えていた。

何が起こったのか理解できない。過去にこんなことは一度も無かった。

混乱に陥りかけた脳を必死になだめる。

ここは 彼女の中なの？

視界はまだ無い。しかし最後に覚えた感覚を頼りに、茫然とそんなことを思った。

オーネ・ネルビル。

いつもクラスで、影に隠れていたこの子の名前は確かそうだった。数回しか話した記憶は無いものの、悪事を働くような子には見えなかった。

思考がそこに到達すると、途端に視界に景色が写りこむ。再び視界に捉えたその景色は？セキオスの間？のものではなかった。

景色を認識する前に眼前に広がる光景から？色？が抜け落ちていく。モノクロになったその景色に目を凝らすと.....

?づう.....?

眼前に突然、泣きじゃくる少女が現れた。

この子は？オーネ・ネルビル？だ。何故か直感的にそれがわかった。

……昔のオーネ？

面影はあるものの、自分が知る姿よりも明らかに幼いその姿になんとなしにそう思った。それを口に出して咳いてはみたもの、声になることはなかった。

よくわからない状態は続く。

しばらくして、自分の姿は目の前の幼いオーネには見えていないようだと理解した。

？……どうして？？

尚も泣きじゃくる幼いオーネ。彼女の声だけは頭に直接、響くように伝わってくる。

どうやら今の自分には？彼女？を視ることしか出来ないのだと理解した。それならばとさらに少女に意識を集中させる。

まだ僅かにおぼろ気だった少女の姿が際立ち始める。

不意に　さらに彼女の中に潜るような感覚に襲われた。

？キカ・サミアス？？

再び弾けた視界の中で声を聞いた。

その声……オーネ・ネルビル？

？そう？

何が起こってるの？

？わ、私にもよくわからない……？

さつき幼いあなたが視えたわ。

？私にもあなたの視界を通して視えていたわ？

少し話して会話の必要がない事に気がついた。恐らくオーネも同じことを思ったのだろう。

お互いにお互いの意思がわかる。だからこそ伝えたいことがあるのだと理解できた。

？うん……いいよ。視て……キカ・サミリアス？

オーネのその声を聞いて、さらに意識を集中させる。集中するだけで、視界は水を弾くような音を鳴らして跳ね続けた。

意識が弛んでいく。霞む視界とは裏腹に、心は引き締められていくような不思議な感覚が身体を駆け抜けていく。

気がつくとも私は……

キカ・サミリアスでありオーネ・ネルビルだった。

感覚が語りかけてくる。

？私はあなたと同類だから？

その意味を探ろうとすると再び視界が弾けた。

？セキオスの間？で起こった不可解な出来事。その中でオーネ・ネルビルに意識を飲まれたキカ・サミアスは、一体化した彼女の記憶を遡る。

オーネ・ネルビルはキカ・サミアスになにを語るのか……

？私はあなたと同類だから？

視界が彼女の記憶に支配される寸前に、聞こえてきたその声が妙に印象的だった。

今は理解する必要はない。流れに身を任せていれば、それがすべてが理解できる。

不思議とそんな確信があった。

そして？私？は完全に過去の？彼女？になった。

幼い頃から何故か人によく殴られた。

記憶を遡れば、最初に手をあげたのは母だったように思う。

昔のことを思い出すのは嫌だ。私には泣いていた記憶しかないのだから……

私が私として本当に生まれたのは五年前のことだった。

それは降りしきる雨の中の出来事だった。

その日も私は殴られ、腫れ上がる頬を手で抑えながら道端で蹲っていた。

頭上からは雨音に混じり、今も誰かの猛る声が聞こえている。

どうして？

もう何度、自問したかわからない。

物心ついた時には私の周りには？悪意？が充満していた。？悪意

？は暴力を生む。

私の周りには暴力が充満していた。

それは時には直接私に降りかかり、時には周りの人間を飲み込んでいった。

私の周りには争いがつき纏っていた。いつしか私はそれが自分のせいなのだ と理解した。

？悪意は私と共に在る？

自覚してからはある程度、避ける術がわかってきた。

できるだけ目立たず影のようにしていればいい。そうしていれば殴られる回数も減っていった。

でも

その日はすっかりした……本当にすっかり……

素通りしていれば良いものを、財布を落とした子供に拾って手渡してしまったのだ。

その子は純粹に？ありがとう？と言ってくれた。それが嬉しくて、つい笑いかけてしまった。

私が笑つと？悪意？は鎌首をもたげるようにして現れる。わかっていたのに……

ああそうか……今私を足蹴にしているのはあの子の父親だったんだ。

痛いのに慣れている。うっかりの代償にしては、いつもよりひどい気もするけれど……それもすぐに終わってくれると思う。

明日からは失敗しないようにしよう。今日よりも生きなければ、明日は何事も無く生きていられる。

気がつくとも怒声が止んでいた。妙に耳障りな雨音のせい？暴力？が終わったことに気づくのが遅れたようだ、と。

ふと顔を上げる。

腫れ上がって見えにくい視界の中、自分を足蹴にしていた男が宙に浮いているのが見えた。

驚く私をよそに、男はこちらを向いたまま後ろ向きに飛ばされていく。

「魔法……？」

啞然とした顔のまま、こちらを向いたまま視界の彼方へ消え去った男。物理法則を完全に無視したその出来事に思わずそう呟いた。そんな私を覗き込むようにして

その人は現れた。

「違いますよ。純粹な？暴力？です」

爽やかな笑顔だった。

そのあまりの笑顔に？自分はもしかしたら助けられたのかもしれない？と、思わずそんな幻想を抱いた。

今までに人に助けられたことなど一度も無い。

だからこそ、今のこの気持ちは儂い幻想なのだ……

「まったく……やれやれですね。今の男……弱いのは勝手ですが
あなたの様に本当に強い方に蛮勇を披露するのは頂けない」
言葉の意味はわからなかった。
とにかくその人は私を殴らなかった。それが、ただただ嬉しかった。

「立てますか？」

ふむ

差し出された手を思わず拒んでしまった。

「ごめんなさい！」

それが申し訳なくて……哀しくて……

「あなたは……」

そう言つとその人は、目を見開いて私のことを見据えた。

殴られる。

咄嗟にそう思った。

「こんなに……綺麗なものは無い」

それは驚嘆と感嘆が入り混じつたような声だった。

哀しげに……でも、笑顔を絶やさずにその人はもう一度手を差し出して、今度は力強く私の手を取り、抱き上げてくれた。

「あなたは自分のことが理解できていない……」

人は今まであなたを意味もわからず憎んできたはずです」

その言葉の意味もわからなかった。

けれど

心当たりは嫌という程あった。

？悪意は私と共に在る？

そう自分に言い聞かせて、今まで生きてきた。

そこにいるだけで何故か殴られる自分。苛立ち始める周囲の人々。笑顔は特にいけない。私はきつと呪われている。世界は私を否定している。

選択肢なんて過去に一度も無かった。それを当たり前前なのだと思っていたし、これからもそうだと思っていた。

それなのに

突然現れたその人は、いとも容易く私に選択肢を与えてくれた。

「僕と一緒に来ませんか？

あなたがこのまま失われるのは実に惜しい」

是非も無かった。私を取り巻く環境はとうの昔に？悪意？の餌食
になっている。

着の身着のまま、すぐにその人に連れられることが出来た私は、
言われるがままに？保護？された。

オルティス・クライシス。

それが、とびきりの笑顔を携えて職業？影の支配者？を名乗った
私の恩人の名前だった。

「影の支配者ってなに？」

もう何度言ったかわからない。その疑問を口にする度に『ふふふ、
すごいでしょ』などとオルティスは決まっておどけて誤魔化すの
だ。

？保護？されてからというもの、目まぐるしく変わった周囲の環
境。見たことも無かった綺麗な服に豪華な食事。与えられた屋敷に
は使用人や警備兵までいる始末。

オルティスがどこか大きな組織の、重役であることはそのことか
らも容易に伺えた。

職業？影の支配者？

もしかしたら本当にそんな職業なのかもしれない。

でも

本当はオルティスの職業なんてどうでもよかった。

他人と会話する機会が少なかった私は、当然オルティスにもなかなか話かけられなかった。

そんな折に聞かされた職業？影の支配者？。

あまりにあまりな職業名について思わず質問をぶつけた。

それは彼が私に作ってくれた？きっかけ？だった。

オルティスは私が話かけるのを待っていてくれる。

それが理解できたからただ嬉しくて……

他人に拒否されないことがただ嬉しくて……

それから私が、彼に話かける時の最初の言葉はいつも？それ？になっただけ。

仕事の合間に、マメに訪問してくれる彼との他愛も無いやりとり。

その時間は私がようやく？人間？になる事を許してくれていた。

「最近、少し明るくなりましたか？」

数ヶ月が過ぎた頃、不意にオルティスがそんなことを言い出した。

「ここは……笑っても殴られないから」

そう返答した私に、オルティスは哀しそうな笑顔でこう告げた。

「そろそろ……お話ししようか」

あなたが何者であるのかを

私が何者であるのか

？悪意は私と共に在る？

恐らく私は人間ではなく？悪意？そのものなのではないか。

だから殴られる。蔑まれる。嘲笑われる。

私は？悪意？だから？人間？に蹂躪されてもそれは自然なことだ。

それが明日を生きるために、今日を生きない生き方を選んだ中で、私が辿り着いた結論だった。

だからこそ、彼の口から告げられた事実特に驚くこともなかった。

あなたは　　？特異体質？なのです。

首を傾げていた私に、オルティスは懇切丁寧に説明をしてくれた。

？特異体質？とは史上稀に出現する特殊な能力を持った人間のこ

とを指し示す言葉で、現在のラナクロアにおいては、公認されているものはカルケイオスに存在する一名のみとされている。

？特異体質？の持つ能力は、先天的に個人の総量が決まりがちな魔力に比べ、訓練次第でその上限を大きく引き上げることが可能である。

そしてあなたは

？悪意を司っている？

オルティスのその言葉は、私の胸の中にスツと入り込んできた。

ああ やっぱりそうなんだ……

「私はやっぱり人間じゃ「あなたは人間ですよ」

オルティスが私の声を声で阻んだ。阻んでくれた。

私は人間でいてもいいの？

声の代わりに溢れ出た私の涙を、そつと指ですくいながらオルティスは言ってくれた。

「人は 殴られれば傷つくものです。

そして……傷つけられれば憎む」

それなのに、と私の頭に手を添えながら。

「ずっと傷つけられてきたあなたは誰も憎んでいなかった」

「そ、それは！」

「いいえ。そのことは否定させません」

「……え？」

「あなたが自分のことをどう思い、世界の理不尽に耐えてきたのか……

それは、あなた以外の人間が理解できるものではありません。
しかし」

綺麗だったと。オルティスはそう言ってくれた。

憎まれ。蔑まれ。嘲笑われ。

？悪意？に翻弄され蹂躪され続けた中でも、あなたは決して人を憎まなかったと。

笑いかければ？暴力？が具現化すると理解していながらも？うつかり？と少年に微笑みかける。

そんな姿がとても綺麗だったと。

殴られたのは？

私は……？悪意？と共に在るから。

憎まなかったのは？

そうされることを？当たり前？だと思っていたから。
どうして？

私は……？悪意？そのものだから……

？悪意？がどうして人を助けた？

それは……だから？うつかり？

『それはあなたが？人間？だからです。』

あなたは　　気高く、美しく、そして何よりも強かっただけです。

あなたは？人間？です。？悪意？などでは断じてありません』

普通の人間が持ち得ない？強さ？。それをあなたは持ち合わせていただけです。と

だから頼むからその？強さ？を人間らしく無いなどと勘違いしないでくれ。と

彼は珍しく息を荒げて私に言ってくれた。

そうか　　私は？人間？だったんだ……

だから　　涙が流れてたんだ……

そしてそれは今も……

でも　　この涙は温かいなあ……

その日、私は私の在り方のすべてを否定され……

そして肯定された。

オーネ・ネルビルの思いが心に直接流れ込んでくる。

オルティスとの邂逅。それが？彼女？にとつてどれだけの出来事だったのか……

そしてオルティスからの？肯定？。

彼女の人生観が変わったのが、その瞬間であつたことは間違いないか。

それからの彼女は死に物狂いだつた。

彼に恩返しをしたい。

自分にしか出来ないこと……

考えに考えた結果、やはり彼女が彼のために出来ることは？能力？を使うことくらいだつた。

？能力？を？能力？と自覚し、努めて鍛錬に励む。次第に？能力？を自分の意思で制御出来るようになり、恩返しへの糸口を掴んだ彼女は、これならばとさらに鍛錬を積んだ。

それは血の滲むような努力だつた。鍛錬の中で、やはり笑顔がよ

り力を引き出すことを学んだ。
とはいえ？悪意？を使役する力である。その笑顔は自然と凶悪なものになる。

怯える瞳に勇気を携えて、口元に？悪意？を含ませ彼女は嗤う。

彼女がどんな想いで？能力？を行使していたのかを知つた今となつては？凶悪？と表現するのは申し訳ない気がするけれど。あれは

……

次第に大きくなっていく？能力？。その成長速度に、今度は制御が遅れ始めた。

その頃になり、密かに？能力？を鍛錬していたことがオルティスに発覚した。

彼は彼女の身体を気遣い、保護と同時に？能力？を抑制できる魔装具を手渡していた。

もつとも、保護された日に？記念に？と手渡された指輪にそんな役割があつたとは？特異体質？うんぬんの話が聞かされるまで彼女は知りはしなかったのだが……

それを知った時の彼女の落胆ぶりは痛い程伝わってきている。

まったく……よりにもよって指輪とは、このオルティスという人物もわかっていない。

とは言え、彼の気遣いに反した形で、？能力？の鍛錬を重ねてきたことが彼に発覚してしまったのだ。

発覚した原因は、自力の制御に魔装具の力を借りても足りず、彼女の？能力？が漏れ出始めたこと。

オルティスは彼女を咎めなかった。

とはいえ

「それ以上の魔装具となりますと……」

ふむ　カルケイオスの協力を仰ぐしかないですね」

それが丁度、三年前の出来事だった。彼女が転入してきた日のことは覚えている。

今を思えば確かに少しだけ違和感を感じていた。
とはいえ、私を欺き続ける程に彼女の自力制御と学長印の魔装具は優秀だったのだ。

故に誰も気がつかない。

影で糸を引くオルティス・クライシス。

結局

彼の？思惑？通りに事態は進んでしまった。

二年前の出来事

？悪意？の矛先は操作されていた。

おかしいとは思っていた。

学長の実妹、ロイエル・サーバトミンである。いくら周囲に？異質？な魔力が渦巻いていようと、後ろ盾も実力もある彼女が？いじめ？の標的であり続けることなどありえない。

とはいえ、当時の私は根源さえ絶てば問題は解決すると踏んでいた。
た。

あの時、もう少し？敵？の狙いについて考えておくべきだった……

脳内に流れ込んできたオーネの記憶。カルケイオスに転入後も頻繁に会いにくるオルティスに、それを心待ちにしているオーネ。

そんなオーネにある日、表情に影を落としたオルティスが会いに来る。

当然、オーネはどうしたのかと尋ね、それにオルティスは困ったことが起きたと答える。

「な、何か私に協力できること……ない？」

「実は……」

まるで授業で習った、城壁の外側に蔓延る詐欺集団の手口そのものである。

ここで金の無心でもしていれば、まさにそれそのものであったのだが……

その時のオルティスの願いは実に奇妙なものだった。

『ある生徒の友達作りに協力してあげて欲しいのです』

その？ある生徒？とは、もちろんこの数日後に、学院に転入してくる予定だったロイエル・サーバトミンのことである。

そしてその手段が……

？悪意の矛先を彼女に向け続けて欲しい？

というもの。

何故？

どうしてオルティスがそんなこと？

なんで？

それを聞いた直後に彼女の中に渦巻いた感情。しかしそれを凌駕したのは彼への愛情だった。

オルティスがそう言うなら……

と。

？あなたが直接手を下すわけではない？

依頼した内容に、似つかわしくない清涼な笑顔を浮かべ、オルティスはさり気なくオーネに免罪符を手渡した。

結局、オーネは言われた通りにロイエに？悪意？の矛先を向け、そして私もオルティスの思惑通りに？それ？を助けロイエの友達になった。

オルティスがそうした理由……

まさか？それ？が今日のこの時のための布石だったなんて……

恐ろしい。素直にそう感じた。

どこまでが本当かわからない。どこまでが彼の掌の上なのか先が見えない。

あの笑顔は？

オーネが大切じゃないの？

最初からこの時のためにオーネに近づいたの？

わからないわからないわからないわからない。

それよりももっと恐ろしいと思ったのは

オーネ自身が、オルティスの底知れない思惑に気が付いていることだった。

彼女は気が付いている。そしてそのすべてを受け入れている。

彼のためならば私は

と。

「そう、彼の願いなら私はなんでも聞く」

彼女の声が聞こえた。それは先程までの脳内に響く感覚ではなく、普段通りの耳に届く声だった。

その声にいつの間にか視線が、彼女のものから自分のものへと切り替わっているのに気付かされる。辺りの景色は今も尚、色が抜け落ちていた。

「そうみたいね……」

短く返答しながらオーネを見やる。恐らくは精神世界なこの場所、彼女の姿は先程までとは様変わりし、漆黒のドレスに袖を通しその手には大鎌が携えられていた。

「オルティスのことを知られたのは計算外だったけれど……
それもこれでおしまい。彼の願いさえ叶えられればいい」

むしろ、オルティスの存在を隠蔽したがつたのは彼女の意思だ。恐らくオルティス本人は自身の存在が知れようと別に構わないと思っっている。

細部まで彼女の思考が理解できてしまう。彼女の？能力？が理解できてしまう。

彼女の狙いは
オルティスの狙いは

はじめから私を介してロイエにあるというのに……
だからこそ、ここで負けるわけにはいかないというのに……

絶対に勝てない。逃れられない。

そもそも？能力？の相性が最悪である。
それに積み重ねてきたものが違いすぎる。
そして？想い？が違いすぎる。

ロイエは大切な友達だけれど……
そういう？想い？は比べられるものじゃないけれど……

それでも

オーネがオルティスを想う気持ちには届かない……

「それで……私のことをどうするのかしら？」

「あら？もう理解していると思うのだけれど」

そう言い放ったオーネの口ぶりには、先程まで見受けられた弱々しさは消え去っていた。

「……そうね」

想いを熱に、そして血を糧に日々研磨されてきた彼女の？能力？その果てに辿りついた究極の型。それは？悪意？による支配だった。

「そう、私は？悪意？で人を支配する。

最もその過程であるこの？作業？を人に見られるのは初めてのことなのだけれど」

標的は本来、支配されていることにも気が付かない。

そう言つと彼女は大鎌を握るその手に力を込めた。

「先に言っておくわ。今から私は？悪意？をもつてあなたに害を成す」

彼女が自らの？能力？を？悪意？を自覚して行使するのはこれが初めてのことだ。

前回は、少なくともオルティスが提示した免罪符が助けになっている。しかし今回の目的にはその免罪符も効果を発揮しない。

彼女は理解している。今から自分がすることは？悪いこと？なのだ。

故に彼女は自身に言い聞かせる。

もしも

もしも人の中に？魔王？というものが存在するのならば……それは間違いなく自分のことであると。

「この現象には驚いたけれど、結果としてあなたを支配できる……」

私があなただを支配できるのか……それだけが不安要素だった」

「……よく喋るのね。さっきまでとは大違い」

強がってはみたものの、もはや一刻の猶予も無かった。先程から足元がやけに重い。モノクロの景色の中、足元からは黒い影が触手のように伸び、そのツタをからめつけていた。

「あなたは私になったのだもの……自分のことは怖くないわ」

「……」

まずい。まずいまずいまずい。身体が硬直する。足は既にそこに在るだけのオブジェと化している。

「無駄よ」

絶対に勝てないと思った。そして逃げられないと思った。その地点で……

?あなたは綻んだ?

そう、私は?綻んだ?のだ。故に支配される。侵食される。

ザッ

彼女の言葉を理解した時、自身の身体が大鎌に引き裂かれていたことに気がついた。

「…………え？」

袈裟斬りにあつた自身の身体から、黒い霧のようなものが噴出している。それを確認するや否や、ぷつん、と視界が途切れた。

「ごめんね」

オーネのその声を最後に今度は意識が途切れた。

自身が？魔王？であると問い聞かせながら、私を切り裂いた少女のその声は……

やはり涙に濡れていたように思えた。

カルケイオス V

翌朝。

ラナクロア暦635年、水の月三の氷の日。

ロイエル・サーバトミン宅で一夜を明かした定臣は、その日の早朝から広すぎる庭を借り受け、剣の鍛錬に励んでいた。

そんな定臣の背後、ロイエル・サーバトミン宅の中では今もチビツ子暴走特急が一人眠っている。

日付が変わってから今朝方までに起きた事件のことなど、二人は知る由もなかった。

「
ふう
」

一通りの鍛錬を済ませた定臣は、手で汗を拭くと大きく伸びをし、
今日も快晴で朝を迎えた空に挨拶をする。

「ん〜、いい天気だねえ………ったく、こんないい天気なのにいつまで寝てんだよ

あのチンチクリンは〜」

背後の屋敷に目を見やりそう呟く。ふとそこに慌てた様子で、屋敷に駆け込んでいく少年の姿が目にとまった。

「待った少年！」

十数メートルの距離を瞬時に移動して少年の頭を背後から、むんずと掴む。

突然、現れた謎の手に頭を鷲掴まれた少年の顔は、明らかに驚きに染まっていた。

その姿に思わず透哩に出会った時のことを思い出した。

とはいえキカからの依頼のこともある。昨晚は何事も無くロイエの護衛を無事に果たした。しかしキカの言う？異質な魔力？などというものは魔法の類を使えない自分には一切感知出来ない。

それならば、ロイエに近づくものすべてを排除するほかにないと、気を張り詰めていたところへの来訪である。少々荒っぽい引き止めには、寛大な心を持って頂けるとありがたい。

「という事で許せ。少年」

少年は『なにが！？』などと驚きつつこみを披露してくれたりも

したが、今はそれよりも重要な用件があつてここに来たと、焦り気味の声色で事情を説明してくれた。

「このままだとキカが死刑になるんだよ!!」

まてまて。この少年はなんと言った？

？キカガシケイニナル？

キカ？俺の妹の？

「なんでやねん！」

思わず関西弁でつつこんだ。

焦りながら、そして何故か照れながらもじもじと詳細説明をする少年。その少年の説明は定臣にとってなかなか要領を得ないものだった。

少年からしてみれば正に時の人？サダオミ・カワシノ？とのまさかの邂逅である。しかも話すなりその美顔に吐息がかかる程の距離まで引き寄せられ、延々と詳細説明を求められたのだ。

それでも事態が事態だけにと顔に朱を走られながらも、懸命に説明を繰り返したこの少年を誰が責められようか。

「だあ〜！もうっ！何言つてんのかわかんねえ！」

ここにいた。

少年は知らない。目の前の美女にはカルケイオスの知識が絶対的に欠けていることを。少年にとっての不幸は、ロイエルを呼び出す前に定臣相手に『キカ』の名前を出してしまったことだった。

それで所謂？スイッチ？が入ってしまった定臣に容赦は無い。理不尽にも？戦力外通告？を言い渡される少年。ロイエルに伝言を頼んだ後、去り行くその背中がやけに寂し気だったのは言うまでもない。

「はあ！？」

文字のごとく跳び起きた。

？どうせ詳しいことなんて聞いても理解できてないんだろうし？などと失礼なことを口走りながらロイエルは定臣の背中に跳び乗った。

移動補助魔法の類を使うよりも、移動定臣を駆使した方が早い。いつも寝起きがスロリーなロイエル・サーバトミンだったが、事態が事態だけに脳の目覚めは一瞬だった。

ロイエルは馬の手綱を握るがごとく、定臣の両サイドの長髪をむんと掴むと即座にGOサインを出した。

そこまでが起床から僅か十五秒の出来事だった。内心で？お前はレスキュー隊員か？などつつこみつつも、ロイエルの指示のままに定臣は疾走する。

「その角！曲がって！」

「あいよ〜」

「止まらなくていいから、この通りを駆け抜けて！」

「りよ〜かい」

「あそこの看板の前！通れる？」

「ん、了解しましたよつと」

人ごみを駆け抜けるのはお手の物だ。定臣はロイエルの期待通りの動きで人並みをするすると駆け抜け、要望通りに看板の前を通り過ぎた。

気のせいか？今の看板に俺が映ってた気がするんだが……

横目で見えた看板にそんな感想を抱いていると、不意にロイエルの手に力が込められたのを感じた。

力が込められたのを感じ……

「痛い！痛いってロイエ！」

「あ……ごめん……」

意気消沈とは正にこのことか。背中の子ンチクリンは先程までの勢いもどこへやら、がっくしと額を定臣の首筋に埋め、ずくと効果音でもつきそうな程に沈みきっていた。

「ん？どした〜ロイエ」

「……………」

「ふむ」

沈黙の司令塔。このまま適当に歩みを進めても、見間違いの方角に向かうかもしれないと、定臣は一旦足を止めることにするのだった。

このままだとキカが死刑になる。

寝起きの僕に、サダオミが伝言として告げてきた内容はそれだった。

彼女にラナクロアの知識があまり無いのは、出会ってからやりとりで把握していた。だから彼女に尋ねるよりも、自分で直接確認した方が確実だとすぐに家を出た。

魔示板を見れば今のキカの状況が把握できる。そう思ってサダオ

ミに魔示板の前を通過してもらった。

そこに表示されていたキカ・サミアスの名と顔。それを囲む枠組みを見て僕は絶望した。

真紅に黒のぼってん模様。それが示すところは死刑確定の意。

キカが死刑……

意味がわからない。当番に出かけてなんで死刑になるの？

授業で習い、知識の上でしか知らなかった死刑確定の枠組み。それを目の当たりにした今でも現実感が無い。その枠組みが親友であるキカ・サミアスを囲んでいたのならそれは尚更だ。

駄目だ……冷静にならないと……

親友の死刑など受け入れるわけにはいかない。何かできることはないかと考えを巡らせる。

当番は通常五人。なのに死刑になるのはキカ一人……

当番に出かけたキカが死刑になるなら理由は？ミレイナの窯？に関するこの他には思い当たらない。

窯の維持失敗？それなら連帯責任で全員が死刑にならないとおかしい。でもそれ以外に死刑になる理由なんて思いつかない……

わからない。わからない……けど

伝言では？このままだと？ということだった。それならば

「まだ死刑確定から時間が経ってないってことよね」

「まだ死刑確定から時間が経ってないってことよね」

背中のチンチクリンさんはその声と共に復活した。

「ちょっと降ろして、サダオミ」

自分から乗っついておいて大した口ぶりではあるが、意気消沈されたままよりは百倍はいい。

「はいよ〜」

軽く返事をしてロイエを降ろす。すると正面に回りこんだ一寸ロイエさんは、俺をぴっと指差し高らかに宣言した。

「い〜い？サダオミ。今から作戦会議よ！」

「止まちなさい〜！」

で、俺達は？セキオスの間？まで来たわけだが……

声の主に視線を送る。まず目についたのは肩にかけられた大戦斧。次に頬に流れる様に沿った濃い桃色の髪だった。かつて見たドナポス・ニーゼルフとお揃いの鎧に、鼻から上をすっぽりと隠すように被られた西洋風の甲冑を纏っているため、それ以上の容姿は確認できない。

しかしながら鎧越しにも伺える女性らしいすらりとしたフォルムからは、とても肩にかけた大戦斧を扱えるようには見えなかった。

ルブラン・メルクロワ。

？セキオスの間？の化け物。？法？の番人。

さてさて、その化け物さんと真っ向から対峙しているわけだが……

ロイエの作戦……その内容を聞いた俺は、それを作戦と呼んでいいものかと思わず小一時間程問い正したくなった。

「い〜い？サダオミ。まず僕がルブランと話してみるから」

「ふむ」

「で、たぶん話、通じないから」

「ちよー！」

「あんたちよっと、僕の用事が終わるまでルブランのこと足止めしててよ」

「しててよと言われてもなあ」

「いいでしょ！あんた強いんだし！？などと有無を言わせぬ様子のプチ暴君に、やれやれと肩を竦めてその無理難題を承諾したわけだが……」

恐らくは対決する破目になる化け物さんに再度、視線を送る。やはり一際目を引くのは肩にかけられた大戦斧だった。

騎士と聞いていたがまさか巨大斧の使い手とはなあ。てつきり剣に盾でも持つてるのかと思ってたなあ

心の中でぼんやりとぼやく。そんな俺をよそにロイエはルブランに話かけた。

「こんにちは、ルブラン」

「帰りなさい！ここは現在、立ち入り禁止です！」

「キカ・サミアスに死刑確定のおふれが出ていたんだけど？」

「キカ・サミアスは？当番？の際、暴拳に及び他の四名を魔術で攻撃。更にその後、？ミレイナの窯？にも攻撃を加え維持臨界点を突破させた容疑が確定している」

「何かの間違いでしょ。それ」

「私が目撃している」

そこで何故かロイエが俺に目配せを送ってきた。

待てロイエ、俺の目には話が出来てたように見えてたんだが……

「は・や・く！」

まったくもってやれやれだ。

「へいへいっつと」

そして俺は大太刀『轟劉生』を抜刀した。

さてと

抜刀したまでにはいい。しかしその後が問題だ……

眼前にはルブラン・メルクロワその人の姿。手に持つは大戦斧。全員鎧づくめの彼女のことを人は？セキオスの間の化け物？と呼ぶ。

「ふむむ」

自らに与えられた任務を再確認する。

ロイエは扉の向こう側に？用事？があると言った。そして出された指示はルブランの足止めをすること。

恐らく、十秒も稼げばロイエを扉の向こう側へ通すくらいは出来る。しかし問題はその後だ。

「ロイエ、何分だ？」

「何が？」

「何がじゃなくてだな……何分稼げば？用事？つてのは終わる？」

「ん〜……三十分くらいかなあ」

しんどいなそれ。

「なによ？出来ないの？」

「出来ると思ったから言ってるんだろ？」

「そおいうこと！」

その声を合図にロイエルは一目散に扉の方へと走りだす。それを制止しようとすぐさまにルブランが大斧を繰り出した。

思わず連想したのは柳の様相。根である腕には怪力が込められている様子が伺えるものの、枝である斧自身は実に素早く、そしてしなやかに走り行く少女の背に迫っていた。

ギャン！

セキオスの間に鈍い剣戟が鳴り響く。

少女の背を追跡した？それ？が柳ならば、？それ？を制止したのもやはり柳だった。

化け物は自らの斧の舞が防がれたことに驚き、慌てて視線を背後の剣士へと向ける。

そこには不敵な笑みを浮かべる定臣の姿があった。

「やつ、あんた強いね」

「軽く止めておいてよく言う」

そんな定臣に対してルブランもニヤリと口元を吊り上げた。同時にその背後で鉄扉が開かれる。

ロイエルの背中が視界から消えると同時に、バタンと扉を閉ざす音が鳴り響く。慌てて力任せに閉ざされた鉄扉は、なかなか五月蠅く耳障りな鳴き声を周囲に撒き散らした。

しかしながらその騒音は、定臣にとっては最初の難関を無事突破したことを告げる祝音だった。

後を追跡されれば元も子もない。

なんとかこちらに気を惹かせようと、定臣は手に持つ大太刀に気を走らせる。

「一応、正当防衛ということにしたい。貴様の方からかかってきなさい」

どうやらその思惑は成功した様だった。しかしながら定臣の剣気は、ルブランの騎士としての食指を存分に動かしすぎた様である。

定臣の方に向き直り、大戦斧を持ち直したルブランの瞳には、なみなみと闘気が満ち溢れていた。

剣呑な殺気が空間を支配する。

強者だけが放つ独特の緊張感が場に拮抗する。

もはや枯葉一枚でも両者の間に舞うようなことがあれば、たちまちそれが戦闘開始の口火を切りそうな様相を呈していた。

とはいえ、定臣の剣気をルブランがどう勘違いしようが、当の本人にはまったくもってやる気が無いのである。定臣は張り詰めた空気の中、なんとも陽気な雰囲気のまま口を開いた。

「やくだねっ」と

KYここに極まれり。ルブランの甲冑で隠された額にピシッと青筋が浮かんだ。

「貴様……何を言っている？その剣は何だ？戦いを愚弄するということか？」

荒ぶるルブラン。しかしながら定臣の当初の目的は達成されつつ

あった。

出来ることならば戦闘は避けたい。手よりも、口を動かすことに時間を費やしてくれた方が好都合というものなのだ。

「聞いているのか！」

その声に思わずにんまりと笑う。戦闘スタイルが似通う二人であったが、ルブランにとっての定臣は口喧嘩の相手としては最悪の部類だった。

実直なルブランに対して口までが柳な定臣。ルブランから所謂、生粋のいじられキャラの片鱗を目撃くも見つけた定臣は、早くもいじめっ子モードに移行しつつあった。

「そう怒るなってルブルブ」

「誰がルブルブかつ！」

「いいじゃんルブルブ。可愛いし」

「き、貴様！早くかかってきなさい！」

「やだよ。俺、足止め委員の人だし」

「何ですか！それは！」

「ん、今考えた」

「くっ……」

定臣の戯れ。彼の悪癖である？それ？が策の意味を成している。それに気がついたルブランは口を噤み、苛立ちに苛まれ始めていた自身を戒めた。

なるほど確かに猛者である。簡単に翻弄されてはくれないようだ。定臣は内心でぼりぼりと頭を搔いた。

「公務執行妨害だ」

「あらら、新たな罪状追加かな？」

もう口もきいてくれないか。

ザッ

縦一閃。様子見するつもりもないといった勢いで、定臣の前髪を巨斧がかすめた。

半歩下がりそれを回避した定臣に、今度は返し手のままに横一閃の一撃が襲いかかる。

凡人であったならば、斬られたことにすら理解できないであろう十字斬。それを屈伸運動で掻い潜り、同時に下段から上段への斬り上げを見舞う。

あまりの一撃に、思わず手加減無しで反撃を放った定臣であったが、今度はそれをルブランが上体移動だけで回避した。

「確かにこりゃ化け物だな」

「貴様……何者だ？」

いや　　何者でも構わん！ここで死ね！」

その大声とは裏腹に巨斧は音もなく迫り来る。無音にも関わらず徐々に、速度と威力を増していく。

流麗な軌道を描きながら徐々に加速していくそれは、さしずめ無音の台風の様だった。

振り下ろす。

薙ぎ払う。

斬り上げる。

叩きつける。

そのすべてが一閃。そして一撃必殺。

連結の節目など到底見当たらない流麗さ

故にそれは　　斧の舞だった。

一撃でも触れようものならば、粉微塵と化す暴力を孕んだそれを、毛先程の距離で掻い潜る。

しかしながら、剛と柔の調和が見事にとれたそれを回避し続けることなど不可能だった。

チッ

巨斧の先端が僅かに頬を掠める。それだけのことだった。僅かそれだけのことで

「がっ……」

頬が破裂した。

左から右に強烈な拳を打ち抜かれた様な感覚が走る。右に流される顔に視線が置き去りにされる。同時に噴射装置さながらに、進行方向とは逆方向に向けて血しぶきが飛び散った。

痛覚が事態に追いつき、我が身に何が起こったのかをようやく理解出来たのは、床を転がり終え、壁に叩きつけられてからのことだった。

追い討ちと言わんばかりに、ガラガラと内壁が剥がれ落ち覆い被さる。カツカツと足音を鳴らし、巨斧の死神が距離を詰めてくる。

時間はどれくらい経っただろう。まだ五分も稼いでいない気もするし、とっくに三十分経った気もする。どちらにせよ眼前の死神は、時の経過を待ってくれそうにはなかった。

蹲っているところを、上から見下ろされると不思議と負けた気がしてくる。それにまた内壁が落ちてきて頭に当たりやがった。

踏んだり蹴ったりとはこのことか。衝撃で焦点を失っていた瞳に、正気を取り戻しながらそんなことを思った。

まあなんにしても

「このままじゃ詰むか」

手加減しないのと本気は違う。

舞いには舞いを。

相手が十、撃てば、こちらは二十、返せばいい。

同じ？武？の道を歩む者に対して、？轟流？に負けは許されない。

故に決意する。

この試合は今をもって死合と成った。

大きく息を吐く。

肩を落とし腹の中心に力を込める。

背骨の内側にすべてを引き締める。

そして死神に再び相対すべく立ちあが……

「……………」

ガクガクと。

膝、ガクガクと。

待てと。ルブランそこまで来てるんだぜと。

コツコツと響くルブランの足音をBGMに無性に泣きたくなった。

思い出したのは学生時代。『お前は秘密兵器だから！』と切り札に言い聞かせ、もったいぶったまま緒戦敗退を喫した、対戦校先生のなんともいえない間抜け顔。

次に師？轟劉生？による『最初から全力でやらんからだ！たわけが！』とのお叱りの言葉だった。

ってこれ走馬灯ってやつじゃね？

「終わりだ」

苦笑いしつつ、膝と睨めっこをしていると大斧ルブルブがそんなことを言い出した。

その声に顔を上げてみると……

「Wow That's great」

あまりの振りかぶり具合に、思わず出来もしない英語を口走った。

死ぬ。これは死ぬ。

もう何度死んだだろう

数秒後に訪れるであろう痛みを思う。

あれだけは何度経験しても慣れるものではない。

痛いのは嫌だ。

不老不死だろうが何だろうが嫌なものは嫌だ。

だから

「断固拒否する!!」

高らかに宣言する。

刹那

声はその場に姿はルブランの遙か後方に。

膝の回復と同時に繰り出した奥義に込めた剣技は十閃。

頭部。両肩。両膝。腹部。背部に計七閃。残りの三閃は大戦斧に叩き込んだ。

背後には、全力で巨斧を振り下ろすルブランの姿。しかしその斧は床に叩きつけられることなく、空中分解し、斧の主は撃たれた部分の鎧が砕け、啞然とした表情のままその場に崩れ落ちていった。

ここにセキオスの間での決戦が終結した。

「ふう……ルブルブつえくなあ」

疲れた様子でそう呟くと、定臣はルブランを介抱するためテクテクと歩み寄るのだった。

エドラルザ王国国立魔科学専攻学院内？医務室？そこに整然と並べられているベットのの上には現在、負傷した生徒が四名寝かされている。

生徒達の傍らには各一名ずつ、回復魔法を得意とする者がついており、その者達の真剣な表情からは、寝かされている生徒達の容態が急を要するものだということが伺えた。

そもそも？魔法？が存在するラナクロアである。多少の怪我などは、回復魔法を使える者の手によってすぐに処置されるために、医

務室はあまり必要とされず、普段はもっぱら暇を持て余した生徒達の茶飲み場と化しているのだが……

負傷している生徒達は？当番？についていた者達。内一名が凶行に及び、他の四名を負傷させた。

珍しく慌てた様子で医務室に駆け込み、そう告げたのはルブラン・メルククロワである。

あまりの容態に医務室に待機していた担当者は、他の担当者を緊急招集し、現在の状況に至った。

数分後。

「にしてもこりゃあ……誰がやったんだ？」

峠は越えたものの、なかなか癒えない魔術跡に一人の担当者がそうさがる。

「この破壊力は……学長の妹さんの、ほら」

「いや、あの子は？当番？外されてるだろ？」

「そうだったな……」

？なら他に誰がいるんだ？その場に居合わせた担当者達は一樣に、そう首を傾げた。

事実、ロイエル・サーバトミンと同等の魔術力を誇る生徒等、この学院には存在していなかった。しかしながらあのルブラン・メルククロワが嘘の報告をするはずも無いと、担当者達は存在するはずのその生徒に当たりもつかず、軽口を交わしながら回復魔法を行使し

続けるのだった。

失敗した。

覚醒しない意識の中、オーネ・ネルビルは自らの過ちを反省していた。

？能力者？である自分は？能力者？だけが持つ心の闇を一番理解していたはずなのに……

悪意の支配を受けたキカ・サミアスは、目論見通りに私の支配下に堕ちた。そして私は予定通りに他の三人の支配を解き、私を含めた四人をキカ・サミアスに攻撃させた。

そう　　攻撃させたのだ。

あの不可解な現象の中、私はキカ・サミアスの深層心理の中にある？魔術を行使することへの恐れ？を確かに感じとっていたはずなのに……

浅はかだったと言わざるを得ない。悪意に恐怖が重なり、キカ・サミアスは暴走した。その闇はもはや私の支配すら届かないところまで深く、深く堕ちてしまった。

薄れ行く意識の中、ルブラン・メルクロワに助けられたことだけは覚えている。

オルティス……ごめん……

最後の仕上げが出来なかった。ルブランを支配し、ロイエル・サーバトミンを窯の前まで誘導しなければならなかったのに……

恐らく、扉の前に立ちはだかったルブランの手によって、この作戦は阻止される。

彼のために何かしてあげたかった……

初めて彼が私に頼ってくれたというのに……

ようやく少しでも恩返しができるというのに……

ごめんなさい……

本当にごめんなさい……

「オル……ティ……ス……」

バァン！

背後でやかましく鉄扉が鳴った。どうやら背中を任せた彼女は、期待に伝えてくれたらしい。

それなら僕は、僕と彼女の二人の願いであるキカの救出に専念しよう。

？セキオスの間？最深部。そこに？ミレイナの窯？は安置されている。そしてその傍らには、ルブラン・メルクロワが持ち込んだ、魔術を無力化させる術式が組み込まれた鉄格子の檻が配置されている。

自身の命を狙ってきた生徒を、一時的に拘束するために使用されてきた？それ？は近頃はめっきりとその役目を果たすことは無くなっていた。

しかしながら今は違う。景色の一部に溶け込みつつあったそこに、思わず視線が釘付けになる。

「キカ……」

檻の中にはキカの姿があった。

でも　あれは本当にキカなのだろうか？

脳裏に浮かぶ優しく微笑みキカの姿。それと眼前のキカの姿を見比べてみる。

キカの髪はいつも綺麗に手入れされていてあんなにボサボサじゃない。

キカの瞳はいつも優しくてあんなにキラキラしていない。

キカの口元はいつも微笑みを携えていてあんなに吊り上っていない。

それにキカは……

「あああああああ！！あああああああ！！！」

突然の咆哮。それと同時にキカがこちらに向かって魔術を連続で

放ち続ける。しかしその魔術は牢獄の理によってすべて遮られ、飛散していった。

キカは……魔術は使えないはずなのに。

「キ、キカ？」

「ああああああ!!!!」

鉄格子を手で掴む。額を連続でそれにむかって打ち付ける。すぐに額が割れ、血液が周囲に飛び散り始めた。

「やめて！キカ！」

慌ててキカを止めようと、鉄格子を掴むその手に触れた。

直後

「あ……うぐ……」

ぎりぎり衣服が嫌な音を奏でる。地面から浮き上がった両足が一瞬パニックになった脳に今の事態を知らせてくれた。同じ目線にいたはずのキカが眼下に見える。

僕は今、キカに胸ぐらを掴まれ引きずり上げられているんだ……

ありえない。この力はなんなの。

肉体強化の魔法を駆使したとしても限度がある。元々が非力な者がここまでの怪力をだせるはずがない。

どこがおかしい。

いや　　おかしいのはわかっていたはずだ。キカが他人を攻撃なんてするはずがない。

どうセルブランの見間違いだろうと、勝手に希望的観測に身を任せた自分が悪いのだ。

しかしながらキカをした事が事実にしても無実にしても、どちらにしろ自分がやることに変わりはない。キカの死刑は確定している。それは少々の事では覆らない。

だからこそ僕は

？ここにキカの命を？回復？しにやってきたのだから？

「あ……………ぐ……………」

しかし状況がそれを許してくれそうにない。酸素をカットされた脳は次第に運動を停止して行く。先程から眼球が瞼の裏を見たいと上へ上へと押しあがってくる。それを制止しようと噛んだ唇の淵からは泡が漏れていた。

「う……………キ……………カ……………キカあ！」

私は何をしているの？

わからない。わからない。わからない。

オーネの支配下でも意識を保つことは出来ていた。その意識が途切れたのは……

そうか。魔術を使わされちゃったんだ。

それなら仕方ないかと納得する。どうして仕方ないのかは、考えない様にしなければこの？闇？は私を更なる深みへと誘うだろう。

とにかく魔術はいけない。それは私にとっての禁忌だ。

……危ない。危うく思い出すところだった。今は駄目だ。違うことを考えよう。

今の私はオーネの支配をまだ受けているのだろうか。支配されている時の記憶がある地点で、私は彼女にとって？異質？な存在であることは間違いない。通常は支配下に置かれている人物は、その時の記憶が一切残らない。それは？彼女？になった時に学んだことだった。

それにしてもここは……

とても寒くて暗い。まるで学院に入る前の私そのものを表したかの様な？闇？。

そんな？闇？を取り払ってくれたのは学長だった。

それなら暖かさを覚えたのはいつの事だっただろう。

「……う……キ……カ……キカあ！」

不意にロイエの声が聞こえた。

そっか……ロイエにルクエ。それに他の？友達？達。皆が私に暖かさを教えてくれたんだ。

私は……恵まれてるなあ……

不思議と周囲の闇が少し明るさを取り戻した気がした。

「う……げほっげほっ」

た、助かったあ……

意識が墮ちる寸前、キカはその手を緩めてくれた。一瞬、正気に戻ってくれたことを期待したりもしたけれど、眼前の彼女は今もどこか虚ろな瞳のまま無言で佇んでいるだけだった。

それでも鉄格子に頭を打ち付けるのを、やめてくれているだけマシだ。

猶予は三十分。キカの事は気になるけれど、ルブランを相手にしてくれているサダオミの事も気になる。

「キカ待っててね。僕は僕の？用事？を済ませるから」

そう言うと僕は？ミレイナの窓？に向き直った。

恐らくは膨大な魔力が暴走しているのだろう。振り返った先にある？ミレイナの窯？は怪しく、そして禍々しく発光し、なかなか有害そうな色で点灯していた。拳銃の果てに数秒間隔で煙まで出している始末だ。

「うへ……これは気がならないわね」

そう呟きながらも僕は窯に手をかざした。

オーネの目的は私を助けるためにロイエに過ちを犯させること。理由は彼女自身もわかってはいない。ただオルティスがそう願ったからという理由だけで、彼女は納得できていない悪事に手を染めた？ロイエル・サーバトミンの命は保障する？というオルティスの最後の免罪符を携えて……

そう、狙いは始めからロイエだったのだ。

いけない　このままだとロイエが……

先程聞こえてきたのは、間違いなくロイエの声だった。それなら近くにロイエが来てしまっているということ……

駄目だ。駄目だ駄目だ。

ロイエの思考回路は単純だ。彼女が私を生かすためにしようとす

ることなんて簡単に予想できる。そしてそれをすれば学長の実妹であるうが、問答無用で死刑になる。

ロイエ駄目！私のためにそんな……

手を伸ばしてみたものの周囲は？闇？に覆われたままだった。

この？闇？が邪魔だ。私はロイエを止めにはいかなければいけないのに……

魔術。

それは私にとっての禁忌だった。それを犯して出現したのがこの？闇？ならば、それを取り払うにはその禁忌と向き合う必要があるのかもしれない……

出来る事なら思い出したくもない。

しかし起こってしまった過去の出来事に捕らわれて、友人の命を危険に晒すなんて我慢できない。

だから認めよう。私は習ったばかりの魔術を無邪気に行使し

そして　　？両親を殺した。？

両親は元々エドラルザ王国騎士団の魔術師団員を務めており、魔術の扱いには長けていた。

そんな両親から『全力で撃ってきてごらん』と指示され、言われるままに全力で魔術を行使した。

それからの周囲の私を見る目とか、幼かったのだからという言い訳とか、怖いからもう魔術は使わないとか、今はそんな事は関係な

い。
魔術関係でこれ以上、私の周囲の人間がいなくなるのは我慢できない。

だから

？闇？に向かって手をかざす。

「そこ……どいて……」

私は呪われた？力？を自らの意思で？解放？した。

果たして魔術は？闇？に当たったのだろうか。

恐らくは命中したのだろう。

何かを劈く（つんざく）様な破砕音で今も耳鳴りがしているし、周囲を覆っていた？闇？の総量分の？光？が視界を覆ったことがその証明だった。

正気を取り戻した視界に映りこんだ最初の景色は、破壊された鉄格子。それを破壊したのは恐らく、今も手をかざしている自分なのだろう。

そしてその鉄格子の向こうにロイエの小さな背中が見えた。

「ロイ……ロイ？」

更にその背後にある物体を見て思わず硬直する。そこには先刻まで？ミレイナの窯？と呼ばれていた物体が？瓦礫？と名を変え崩れ落ちていた。

「お？キカ！正気に戻ったのね！」

陽気な様子でこちらに駆けてくる友人のその姿に、思わず肩ががつくりと落ちた。

「ロイエ、あなた」

「にひひ、不肖！ロリエル・サーバトミン！遅ればせながらキカ・サミアス殿の、命の回復に成功致しましたでありますっ！」

ロリエル・サーバトミンは顧みない。

たった今、自分の命と引き換えに私の命を救ったというのに……これから自分が死刑になるというのに……

「なんなのよ……その笑顔は……」

小さく敬礼し、満面の笑顔でそう言い放った友人の姿に思わず視界が歪む。

「おろ？キカ泣いてるの？」

「……ばか」

そう呟くと、私は大切なこの小さな友人をぎゅっと抱き締めた。

その日、二人が互いを想い繰り出した回復魔法と攻撃魔術は……やはりとてつもない破壊力を秘めてはいたものの……

どこか暖かさを孕んでいた。

カルケイオス VI

鉄扉の向こう側から轟音が響いた。

それを目覚まし時計かなにと勘違いしたのか、大人しく膝上で眠っていた？セキオスの間の化け物？ことルブラン・メルクロワその人が目を覚ました。

「う……ぐ」

「おっと、まだ寝てた方がいいんじゃない？」

仮にも轟流奥義を全身に浴びたのだ。鎧に包まれていたとはいえ、通常ならば即死していてもおかしくはない。そう気遣って声をかけたものの、どうやらそれが彼女の逆鱗に触れたらしい。

「ぐう……き、貴様！」

膝枕のお代は強烈な突き飛ばしと罵声だった。規格外の力で突き飛ばされ思わず、正座姿のまま壁まで吹っ飛んだ。

「いたた……やれやれ……まだそんなに動けないだろうに」

ガラガラと内壁を持ち上げつつそう呟く。

ふと顔を上げると僅か数cm先まで鉄拳が迫っていた。

「こわっ！」

反射的にそれを右手で受け、時計回りに反転しつつ受け流す。そのまま手首を極めつつ、出来る限り勢いを殺し、強襲者を地面にふわりと投げつけた。

「……二度目だ！どうして殺さなかった！」

地面に伏したままルブランが激怒している。

なるほど彼女は？敗者には死を？な考え方の人のようだ。

少し面倒ではあるが、こういう輩を丸め込むにはとっておきの呪文がある。詠唱の際にはできる限り見下した様な目を作り、悟った様な声色を出すのが効果的だ。

準備はOK。さあ詠唱開始だ。

「敗者をどう扱うかは勝者の自由。生かすも殺すも勝者の特権だ。俺は自分のエゴであんたを生かした。敗者はそれに従うべきじゃないのか？」

もつとも……納得いかないならあんたの気が済むまでやりあってもいいが……

結果は変わらないよ?」

「ぐっ……き……さま……」

「ごっかはばつぐんだ!」

思わずそんなテロップが見えた気がした。

まあそれくらい凹んでくれたってことで……

女性を凹ますのは趣味じゃないわけで……

俺が凹んできたわけで……

「……………」

「……………」

なんとも言えない沈黙が続く。しばらくしてその静寂を破ったのはルブランの方だった。

「……………賊がニー様と同じセリフを言うな」

「ん?ニー様?兄ちゃん?」

「ちがつ!」

まあ今を思えばそれが?きっかけ?だった。その人物の話の振るとルブランは突然饒舌になり、もじもじと顔を赤らめ語りだしたのだ。

話の内容は、要約すれば彼女が言うところの?ニー様?やら?あ

の方？とやらという人物がその昔、山賊をしていたルブランを討伐し、先程の俺と同じセリフを吐いたらしい。

ルブランは言う。？私もあの方の様になりたくて腕を磨いた？のだと。

それは恐らくはこの世界でも通用する簡単な理屈なのだ。

自身の信念を貫き通すには物理的な強さが必要になる。

もつとも、この物理的な強さというものも世界によって形を変えるのだが……

それは時に金であり、時に戦闘力であり、時に謀略であったりする。

ともかく、ルブランが貫き通したい信念には単純な力が必要だった。だからこそ彼女は鉄の意志を貫き通し、弛まぬ努力の果てに今の実力を手にいれた。

そして遂に自身の命を狙われ続けた中でも、相手の命を奪うことなくセキオスに君臨し続けた。

正直に言えば、俺は彼女のその実績が気に入っていた。

奥義を撃ち込んだ際、最後の瀬戸際で手加減したのはそのせいもある。

そして改めて彼女の信念を聞かされ、それは間違いじゃなかったと確信した。

だからこそ俺は声に出して言う。

想いは声にしなないと届かないこともあるのだから……

「いいね、その考え方。好きだよ俺」

「う……き、貴様は……！」

何故かルブランが更に顔を赤らめた。そして次の瞬間、俺は硬直することになる。

「貴様は！たらしだ！！！」

「なん……だと？」

？その美貌で、色んな男性にそう言って回っているのだろうか？との言いがかり。拳句の果てには？わ、私はこれでも女だぞ！のらんからなっ！？のおまけつき。

なんとというか……

「泣きたくなってきた！」

「な、泣いても駄目だからなっ！わ、私には好きな人がいるのだ！」

「あーうん、そだねー、ニー様好きだもんねー」

棒読みでそう呟く。案の定くわつと噛み付いてきた。

「だ、だれがそんなことを！……！」

「あーもうわかりやすすぎるから。もういいから。」

「き、ききききききまー……！！！」

恐らくは牢屋に入れられた時に負った傷なのだろう。キ力は歩くに不自由な程度に負傷していた。
もっとも、あの状態のキ力をこの程度の傷で、牢屋に拘束したのはすごいことだと思う。

扉の向こうにはその？すごい？ことをやってのけたルブランを相手に、今もサダオミが戦っているはず……

もしかしたら最悪の場合は……

大きく首を左右に振る。肩を貸しているキ力が？どうしたの？とこちらを覗き込んできた。

「大丈夫、サダオミだもん。あいつ強いんだから……」

自分にそう言い聞かせながら鉄扉にそつと手を添えた。

ギイイイイ。

ゆっくりと鉄扉が開いていく。

鼓動が早くなっていく。

最悪の事態を考え、ぎゅっと瞑っていた目をそつと開く。

そこには

「え……」

仲良さ気に会話を繰り広げているサダオミとルブラン、二人の姿があった。

「お？ロイエにキカってことは？用事？は終わったのか？」

こちらに気がついたサダオミが、なんとも陽気にそう話しかけてくる。その声に安堵すると共に思い出した。

？用事？はまだ終わっていない。

「ロイエ？」

さすがにキカには僕の緊張が伝わってしまったらしい。不思議そうな面持ちでこちらを覗き込む彼女をそっと抱き締め、僕はお別れを口にした。

「キカ、僕は君のこと……大好きだよ！」

ポケットからビー玉大の玉を取り出すと指をぱちんと鳴らす。それはお姉さま特製の？絶対安全テント？の発動の合図だった。

空間断絶効果を牢屋の役割として使用する。一定時間、絶対の安全を約束してくれる？それ？は言い換えれば一定時間、外に出られないということだった。

キカが突然、姿を消したことに啞然としているサダオミに向かって、もう一つテントを放つ。さすがに上体移動で回避されたものの、範囲外に逃げられなければ問題は無かった。

「サダオミ、ありがとね！」

ぱちんっ

「ロイエなにしゅ」

言い終わる前にテントが発動する。そして？セキオスの間？には僕とルブランの二人だけが残された。

「ロリエル・サーバトミン！何をした！」

「ん、ちょっと二人を拘束したの」

首を傾げるルブランの前に両手を揃えて差し出す。そして僕は僕が犯した罪を告白した。

「？ミレイナの窯？破壊しちゃった」

「なっ！？……………貴様、逃れられんぞ」

「いいよ、逃げる気ないし。」

窯が壊れればキカの罪状が確定して、エドラルザ送りだったんでしょ？「」

「その予定だった」

「壊れる前に壊した奴がいれば罪は全部そっちにいくよね？」

恐らくそうはいかない。でもルブランなら…………

「それは…………」

「お願い！ルブラン！僕だけがやったことだから……」

「……すぐに出るぞ。また邪魔をされてはかなわんからな」

うん、やっぱりいい人

「ありがとね ルブラン」

「……ふんっ」

一連の出来事に影で糸を引く者がいる事など知る由も無く。こうしてロイエル・サーバトミンはカルケイオスを去っていった。

静寂に包まれた？セキオスの間？には空間断絶の向こう側から必死に視えない壁を叩き続けるサダオミとキカ、二人の姿が在った。

そして物語はエドラルザに集束して行く……

言い訳するならば、俺はロイエのあの笑顔にもの見事に騙されていた。

女の笑顔はまったくもって反則的だ。その笑顔に男が手玉にとられるのは、もはや世の理なのだろう。

？キカを救う方法があるから？

満面の笑顔の裏に隠されたロイエの決意など知る由も無く、俺はロイエのその言葉を鵜呑みにした。そして言われるがままに手助けし……迎えた結末がこれである。

「まったく……あの馬鹿」

断絶された壁の向こう側、かなり窮屈なこの場所でそうこちったのはもう何度目だろう。

その間にも時間はただ虚しく過ぎ去って行く。ロイエの死期が刻一刻と迫って行く。

もどかしい。もどかしいもどかしい。

殺風景な？セキオスの間？が余計に時間の経過をわかりずらくし、苛立ちを募らせるのに貢献してくれやがる。

恐らくは視覚感知は出来ないものの、すぐ傍にいるはずのキカも同じような思いをしているはずだ。

勝手に引つ張りまわした拳句、最後の最後で？あなたにこれ以上、迷惑はかけませんか？それで納得できるかよ……あのちびっ子め。

ぐるぐる回る思考の中、何度も別れ際のお礼の言葉と笑顔が思い出される。

あの笑顔を失うわけにはいかない。

その心の中で強く宣言する。

ロイエルが死に、あの笑顔をもつ見ることが出来ない。その可能性が出ただけでも、これだけの後悔が押し寄せてきているのだ。

もしも

もう一度、別れ際の笑顔が脳裏に過ぎる。そのお陰で最悪の？もしも？を考えずに済んだ。

「にしても……最初から死ぬつもりであの笑顔はないわなあ……」

ファン

そう呟いた時、ようやくロイエの置き土産がその役割を終え、聞きなれない音と共に俺達二人を解放した。

それにさ、ロイエ

眼前に現れたキカの泣き疲れた姿に、思わず天を仰ぐ。視線を出迎えた単調な造りの天井に向かって、心の中で続きを語りかけた。

お前が身代わりになって

本当にキカが救われると思ってるのか？

恐らくは、キカの命を救うことだけを考えての行動。もちろん後のことなんて考えてもいない。

しかし厄介なことに、キカのために自分の命を投げ打つ覚悟だけは出来ているってところ……か。

「ふう……やれやれだね」

あゝなんていうんだろ……

なんというか……

まあ……

まったくもってあいつは……

？愛すべき馬鹿？ってやつだな。

まったく……あんな愛くるしい馬鹿たれのこと放っておけるかよ。

そつとキカの頭に触れる。不安そうな瞳でこちらを見上げてきたキカに、出来るだけ優しく笑顔を作ると俺は一つの約束をした。

『ロイエは死なせないから』

私は馬鹿だ。

こうなることはわかっていたのに……

ロイエは死刑になる。それは何があっても覆らない。

このラナクロアに生を受けた者にとって、エドラルザの法がどれ

だけの重みを有するものか。死を司るその理不尽な法を無抵抗に受け入れる程に、民達は飼いならされていた。

ましてやキカ・サミリアスの両親は軍属であった。法の侵食度は一般人のそれより遥かに重度なものである。

故に確信する

ロイエは絶対に助からない……

事が起こってからではどうあっても覆らない。それがこのラナクロアの理なのだ。

閉鎖された空間の中、キカ・サミリアスはただ、ただ後悔に苛まれるばかりであった。

絶望に支配され、自分の無力さを嘆き、涙が枯れ果てるには十分な時間が過ぎ去った頃、ようやく彼女は解放されることとなる。

茫然自失で座り込んでいた彼女の頭にそつと手が添えられた。

曖昧な思考の中、彼女は手の主のことを考えた。

サダオミ・カワシノ。

脳裏にその名が浮かんだ時、彼女の思考に一筋の光明が差し込んだ。

？彼女の背には翼が在る？

人外なる者

通常、恐怖するであろう未知なるその者に対して、彼女が抱いた感情は希望であった。

彼女には理解できる。この者が希望を司る存在であるということ
を……

自身の特異体質に今以上に感謝したことは無い。
私にはわかる。私が願えばサダオミはきっと願いを叶えてくれる。
だからこそ伝えなければならない。

ロイエを救って欲しい。

私の親友を救って欲しい。

本当はすべて仕組まれていたことなの。

影で糸を引く人物の名も私は知っているの。

声を出して伝えないと……

『ロイエは死なせないから』

それでももう駄目だった。

サダオミのその言葉を聞いて……

伝えたかったことのすべてが吹き飛んでしまった。

それでも

嗚咽を必死に我慢して声を押し出す。これだけは伝えないといけ
ない。

「サ……ダオミ……ロイエを……お、おねが……い」

「サ……ダオミ……ロイエを……お、おねが……い」

ったく……

「なにキカ泣かしてんだよエドラルザあああああああ……！」

自分でもびっくりするくらい大声が出た。

まあそれも無理はない。エドラルザはやっぱりやらんことをやりやがった。

俺の妹を連れ去った挙句、もう一人の妹を泣かせやがった。(お小夜子の言葉を借りるならば『馬鹿なの？死ぬの？』と言ったところだろうか。

なにせよこの瞬間に俺の怒りゲージはMAX振り切った。

そして

怒りのままにカルケイオスから西に駆け出し、我に返った時には見知らぬ景色が周囲に展開していた。

「え……」

セキオスの間に一人残されたキカ・サミアスは、音速で過ぎ去っていったサダオミの背中に一言そう告げることしか出来なかった。

定臣がカルケイオスを駆け出したその頃、エドラルザ城一室にて控えていたオルティス・クライシスの元には、極秘裏に一つの連絡が寄せられていた。

「なんですって！？オーネが負傷？

すいません、取り乱しました……

詳細を伺いましょうか」

カルケイオスにはサキュリアスの特殊要員、所謂ところのスパイが数人潜入している。とはいえ、そのスパイの主な任務はオーネ・ネルビルの近況報告である。

そう、監視ではなく、あくまで近況報告なのである。そしてそのスパイはミレイナ・ルイファスの許可のもと、配置されている。

彼女の許可無くして、カルケイオス内で外部の者が生き残る術は存在しない。それはカルケイオスの情報欲しさに潜入を試みた、様々な勢力が凄惨な結果を残したことで証明していた。

そのミレイナの許可を得てまでしての、明らかな私的な用件による人員配置。オルティスがどれけオーネのことを特別視しているのかは容易に伺えた。

「そう……ですか。それでは作戦は滞りなく……
はい、それよりオーネの容態はどうなのですか？」

そして一連の報告を受け終わると、オルティスの前に出現していた魔法球が消滅する。それを見送るや否や

ドゴッ

オルティスは壁を殴りつけていた。

「オーネ………すまない。僕のミスです」

ガチャ

『おいおい若あ、いくら防音魔法使つててもここは王城だぞお
カルケイオス出身者なら気がつくぞお今のお』

扉の音と共に入室し、オルティスを諭したのはクレハ・ラナトスだった。

「すみません、クレハ……」

「ふう……やれやれだねえ、若よお
珍しく自分の選択を悔いてるみたいじゃね〜かよお」

「僕は……」

「おっとお、その先は言いつこ無しだぜ」

「すみません……そうですね」

珍しく小さく映るオルティスのその背中を見つめながら、クレハ・ラナトスは思いを馳せる。

若よお……それは選ばされた選択肢なんだぜ

エドラルザ I

カルケイオスを出立したロイエル・サーバトミンとルブラン・メルクロワの二人は、カルケイオスの西部に位置する？シラトト森？を南側から迂回し、エドラルザを目指していた。

カルケイオスからエドラルザに向かう際、最短距離をとるには必ず？シラトト森？を通過する必要がある。

？ミレイナの窯？が破壊されるといふ緊急事態が発生し、先を急ぐはずのルブランがこの？シラトト森？を避けたのにはもちろん理由があった。

「？セキオスの間の化け物？さんでもあいつの相手は遠慮したいんだ？」

右手に見える？シラトト森？を眺めながらそう呟いたのはロイエル・サーバトミンだった。

「結果として迂回ルートを選んだ方が、短時間でエドラルザに辿りつけると思いなさい」

「ふ〜ん、噂でしか聞いたことなかったんだけど……相当面倒なのね？」

「騎士団の入団試験であの森で一週間過ごすというものがあるのだが……」

「うん」

「結果として私と同期の者は騎士団には存在しない

もつとも、あまりに入団者が選別されすぎるため、私以降の入団試験では廃止された項目なのだが」

「うへえ……そりゃそれだけ残らないんじゃないや騎士団潰れちゃうもんね……」

「騎士団は二ー様がいらっしやる限り、結果として決して潰れないと理解しなさい」

「ふ〜ん」

「?……言いたい事があるなら言いなさい」

「ん〜、ルブランって一途だなあ〜って」

「なっ!?!き、ききき貴様!それが今から死刑になる者の態度か?!?!」

「あはは、いいじゃん〜、まだルブランと二人きりなんだし」

死刑囚と護送の任に就く騎士。二人のそれぞれの立場からは到底ありえない、なんとも陽気な雰囲気のまま二人は順調にエドラルザへの歩みを進めていく。

実のところこの二人の関係は、単なる部外者とカルケイオス民のそれに留まっつてはいなかった。

ルブラン・メルクロワがミレイナ・ルイファスに認められる以前、ルブランの食料に毒を忍ばせ暗殺しようとしたやり方に異を唱え、食料を分け与え続けた者が一人だけ存在した。

それがロイエル・サーバトミンである。

もちろんルブランとしては、そんな手心など必要無かったのだが、ロイエルの純粋な良心から施されたその行為を嬉しく思う気持ちもあり、少しずつロイエルのことを受け入れていった。

とはいえ、当時のルブランの状況ではすぐにロイエルのことを信用できるはずもなく、ロイエルの手から食料を受け取る様になるまでには、二人の間で様々なやり取りが交わされることとなった。

その過程で得られた二人の信頼関係は並々ならぬものがあった。

公には口に出れないものの、ロイエルはルブランのことを友と呼び、ルブランはロイエルのことを照れからか、やはり貴様と呼んではいたものの、ロイエルから友と呼ばれることにはまんざらでもない様子であった。

そういつた経緯があり、多少のことには目を瞑ったルブランであったが、法の番人である彼女に公私混同は許されない。許されるぎりぎりの範囲までロイエルの意思を尊重したものの、この先に待ち受ける彼女の死を覆すことは出来そうにはなかった。

だからこそルブランはロイエルの陽気な雰囲気、不慣れながらも付き合っている。

小さな友への最後の手向けとして

正午から夕方に時刻が向かう頃、ロイエルはルブランに改まると、先を急ぎたい旨を知らせた。

「む？理由を言いなさい」

「ん、そろそろ空間断絶の効果がきれるのよ……
たぶん、来るよ。サダオミが」

ここで行く手を阻まれて自分が死刑にならなければ、他の当番の証言から罪がキカにいく恐れがある、とロイエルはルブランに告げる。

サダオミの名に一瞬、顔を顰め、迎え撃ちたい衝動に駆られたルブランであったが、ここはロイエルの意思を汲もうとその歩みを早めるのだった。

カルケイオスからエドラルザに辿りつくまでに要する時間はおおよそ二日。夜通し移動魔法を行使し続けたとしても、二人が到着するのは明日の夕刻過ぎになりそうだった。

「ねえルブラン」

「用件を言いなさい」

「シラトト森のあいつ、今のルブランならすぐに倒せる？」

恐らくサダオミは真つ直ぐ西に進み、エドラルザを目指す。彼女の移動速度を考慮するならば、どうあっても道中で追いつかれてしまうことは容易に想像出来た。

だからこそロイエルはルブランにそう質問したのだった。？シラトト森？の主がどの程度の時間、サダオミを足止めできるのかと。

「討伐に一日は要すると思いなさい」

「そっか、それなら……」

予め敵の手口を知っているルブランでも一日かかるのだ。初めて対峙するサダオミならば、それなりに苦戦するだろうとロイエルは安堵した。もちろんそれはサダオミが負けるわけがないと、確信した上でのことだったわけだが。

城壁に右手を添えて、ひたすら西に走れば迷うことなくエドラルザに辿り着くはずだ。怒りに身を任せながらも、それくらいは考えられる程には冷静だったらしい。

もつとも

「エドラルザごらああああああああ……!」

カルケイオス西部、城壁付近を疾風が駆け抜けて行く。背後に過ぎ去って行く空気が身体の熱を冷ますには、もうしばらくの時間が必要そうだった。

数時間後

個人の状況などお構い無しに、時間と共に日は落ちて行く。その日もやはり当然のごとく夜の闇は世界を侵食し、眼球の働きを曖昧にしていた。

闇は緑の不気味さを増長し、夜と共にどこからともなく聞こえ始めた獣の声と相まって、森はなかなか不気味さを増して行く。

シラトト森

ルブラン・メルクロワが避けたその森には、主と呼ばれる魔獣の亜種が存在していた。

狼の様な外見に身の丈十mを越えるであろう体躯を持ち、二mを越える五本二対の爪はその性質が極めて残虐であることを示していた。

今宵の主は虫の居所が悪いらしく、徘徊する足取りの先に運悪く、居合わせた生物はことごとくその命を狩り獲られていた。

雑音がする

我が縄張りであるこのシラトト森に、招かれざる客が存在している。

それが今宵の主がより一層、残虐性を際立たせている原因だった。

息を潜め、我を恐れおどおどしている存在。それが彼にとっての人間というものだった。

あくまで己は捕食者である。獲物は恐怖に慄き、最後の瞬間まで顔を引きつらせていれればいい。

だというのに

「なにが森じゃーごらあああああああああ！！」

不愉快な雑音が森に木霊する。

ザシユザシユと草木を踏み締め、獲物との距離を詰めて行く。人間としては極めて異例な移動速度を有してはいるものの、獣である自分のそれはそれを遥かに凌駕する。

彼はシラトト森の覇者である。故に縄張りであり狩場でもあるこのシラトト森のことは知り尽くしている。

獲物の進路の先、絶好のポイントで何も知らずこちらに向かってくる獲物を待ち受け、絶妙なタイミングでその爪をもって切り裂く。不愉快な思いをさせてくれたこの侵入者には、それなりの報いを受けてもらわねばならない。死に行く最後の瞬間まで、悲鳴を上げ地べたをのたうちまわらせてやろうと、彼は爪を研いでその瞬間を待ち侘びていた。

そして

「ガウツ！」

短い咆哮と共に、残像を残す程の勢いで巨獣が侵入者に飛びかか

る。獣特有のバネの様な飛び出しは、あらゆる生物の知覚を凌駕し、蹂躪するだけの瞬発力を秘めていた。

しかし

「ああああ！！ああああああ………」

何が起こったのか理解出来なかったのは彼の方だった。

絶妙なタイミングで獲物の身体を捕らえたであろう爪は空回りし、地面に彼が着地した時には獲物は進行方向のままに彼の遙か後方に過ぎ去っていた。

自らの予測スピードを、獲物が遙かに凌駕していたことに気がつくくと、彼は屈辱から湧き上がる怒りに身を任せ、即座に知り尽くした森を先回りし、再び獲物の前に立ちはだかった。

もはや彼に慢心は存在しない。手心を加えるつもりなど毛頭もない。

不愉快なこの侵入者を一刻も早く排除せねばと、向かい来る獲物に向けてその爪を振り下ろした。

「ガウ……ウ？」

「ああああ………」

捕らえられない 声はその場に姿は遙か後方に。

またしてもその不可解な現象に彼は見舞われることとなった。

思わずあんぐりと口を開いた彼の姿は、もはやシラトト森の覇者が持つそれには到底見えなかった。

風に靡かれ、カサカサと鳴る森の草木が自分を嘲笑っているかの様に錯覚させられる。

たかが人間に獣王としての誇りを傷つけられた。本能の奥底から湧き上がる怒りは並大抵のものではない。

尊厳を取り戻さねばならない。彼は独り決意する。

この瞬間、狩りは討伐と名を変えた。

「ガ……え？」

「お前さつきから邪魔なんだよおおおお！！！！」

バキッ

決意を新たに、再び侵入者に襲いかかるため、先回りしようとした矢先の出来事だった。

振り返り様に彼を打ち抜いたのは侵入者からの一撃。まさしく目にも留まらぬ速度で打ち込まれた一撃は、獣王である彼の意識を刈り取るには十分な威力を孕んでいた。

「なんかこいつ今、普通に喋った気がするんだが……」

慣れとは恐ろしいもので、すでに聖獣マノフとの戦闘を経験している定臣にとって、主の規格外であるこの体躯は特に気にならない程度のものとなっていた。

「まあいいや　　すう……エドラルザごらあああああああ

！！」

そうしてラナクロア暦635年、水の月三の氷の日は終わりを告

げていった。

翌日、土の日。勇者になるための第二の課題が発表されるその日に、物語はようやくしてエドラルザに集結するのだった。

ラナクロア暦635年、水の月三の土の日。

この日の正午過ぎ、王から直々に課題が発表されるとして候補者達、つまるところのラナクロア主人公、ポレフ・レイヴァルヴァン達とオルティス・クライシス達の二組は、然るべきその時を待つべくして謁見の間を集められていた。

828

「これは失念していました」

左手を頭に添え、若干の悲しみ成分を含有した声色でそう呟いたのはオルティス・クライシスだった。

「いや、まいったねえ……さすがに御前でこれはまっすぐいぞおエレシちゃん」

続いて事態の困窮さを訴え出たのは真っ赤な服のもみあげのその人、クレハ・ラナトスだ。

「しかし……」

二人の視線の矛先に気がついたエレシ・レイヴァルヴァンは表情を曇らせながら、一呼吸おくと哀しみに精彩を欠いた黄金と翡翠の瞳にすぐさま色を取り戻し、恍惚とした表情になり……

「こんなに可愛らしい寝顔なんですもの 起こせるはずもありません」

そう高らかに宣言した。

そう、ラナクロアの主人公であるポレフ・レイヴァルヴァンは現在ご就寝中。姉であるエレシの背にしっかりと背負われたままの姿で、この謁見の間までやって来たのだ。

そんな三人＋一人の背後では、事態を把握しきれていないシアとセナキの双子の二人が

『あれはどういうことなの？姉さま』

『さあ、知らない』

などと会話を繰り返していた。

そんな各自の事情などお構いなしに、時と事態は無情にも経過して行く。

玉座の正面、ポレフ達の背後に位置する大扉が仰々しく呻き声を上げながらゆっくりと開かれる。

続いてその大扉から姿を現したのは騎士団長、ドナポス・ニーゼルフだった。

「おほんっ！静粛に……うむ、まあなんだその……エレシ殿、今日も美しいですな」

「ドナポス様っそうじゃなくてですねっ」

お付の騎士に先を促されたドナポスは渋々と真顔を作ると仕切り直し、厳粛な雰囲気を纏って宣言した。

「王の御出座であるっ！」

エドラルザ・ゾルネバツハ・ドリヒルデ十四世。

世襲制であるエドラルザ王国に現在君臨している王の名である。

代々、魔族に苦しめられてきた人類であったが彼の代に完成させられた城壁により、未来を望める程には希望を見出すことが出来る様になっていた。

それに加え、特産品制度の確立や城壁外の町への騎士団の常駐等、民草にわかりやすい形で成果を挙げてきた彼の評価は『善王である』というものが大多数を占めていた。

しかしながらその実、彼が行ってきた政治というものは極めて？維持？することだけに特化したものであった。

悪く言えば世紀の大天才、ミレイナ・ルイファスが創り出した城壁を我が物にし、それを？維持？するためだけに様々な法や軍力を投与していっただけなのである。

そして？維持？するために彼が必要と判断した法には極めて死が付き纏う。それは長いエドラルザの歴史の中で育まれてきた帝王学の賜物であった。

人を支配するには暴力が最も成果を挙げる。

死とは最大の暴力である。それを絶対的な権力のもとに振りかざす。

それこそが彼の。エドラルザのやり方であった。

その絶対権力者の御前で惰眠を貪ること。即ちそれは死に直結する行為である。

ラナクロアの常識で考えるならば、そうなることこそが妥当であるはずのこの事態に、ラナクロア人の一同は固唾を飲んで二人の様子を見守った。

そんな周囲の様子などお構いなしに、当事者の一人であるエレシ・レイヴァルヴァンはここにこと優しい笑みを携えて、背中の弟の寝顔を眺めていた。

王の御出座しの際だけに用いられる特殊な魔伝音が謁見の間に響き渡る。

それを確認すると一同は臣下の礼をとるべく床に膝まづいた。

そしていよいよとして、姿を現したエドラルザ・ゾルネバッハ・ドリヒルデ十四世は、周囲に威厳を漂わせながら徐に玉座に着いた。

「面を上げよ。……うむ、まず確認する。」

今ここにいる者は候補者オルティス・クライシス、候補者ポレフ・レイヴァルヴァン両名の付き人で間違いないか」

『はっ』

小気味良い返事が謁見の間に木霊する。それを確認すると王は更に問いを口にした。

「セナキ・タダノ、シア・ナイ両名。お前達には候補者になる資格

があるが、辞退で間違いないか」

「はい」

「はい……」

ちなみにこの双子の苗字であるが。

苗字を尋ねたポレフに対してシアが頑なに

『ない……しつこい死ねクズ』

と繰り返した事でそのままそれが苗字になっていたりする。

片やオルティス側のセナキも似たような理由からタダノ等という苗字になっていた。

「うむ、認めよう。では早速ではあるが」

眠り続けるポレフのことには一切触れず、王が第二の課題を発表しようとしたその時のことだった。

バンツ！

謁見の間の大扉がけたたましく開かれ、その勢いのままに大音響を奏でた。

「何事かつ！御前であるぞっ！」

「賊です！」

控えていた騎士がお決まりの台詞を口にしたのと、駆け込んできた騎士がそう告げたのはほぼ同時のことであった。

予定より少し早い気がしますね。

駆け込んできた騎士を傍目に、片膝を地についたままそう思索していたのはオルティス・クライシスだった。騒然とするこの場において、端正なその顔には場に似つかわしくない笑みが浮かべられている。

『ふむ、警備兵をすべて下がらせよ。その賊、抗うだけ無駄である』
落ち着きを払った様子で王がそう告げた。

王のその言葉こそがオルティス自身が描いた謀が、いよいよ終局に突入したことを告げる合図だった。

僕は勇者になります。

実のところ、裏で描かれていた謀略の内容は事前にすべてエドラルザ王には知らせてあったのだ。

故に王は理解している。激怒のままにこのエドラルザに赴いた者の正体を

ふふ、さすがのエドラルザ王もあの方相手ではたじたじですね。

しかしながら今、この場での彼女の乱入には目を瞑って頂く他にはありません。彼女の加入無くして、エドラルザの未来を照らし出す勇者PTの完成は有り得ないのだから……

ミレイナ・ルイファス。

僕はどうしてこうまでして彼女を必要としているのだろうか。

もちろん職業『影の支配者』であった自分が、権謀術数の数々を用いることは日常茶飯事だった。

とはいえ、そこにオーネを近づける様な真似は決してしなかった。

彼女には幸せになる権利がある。理不尽に耐え、それでも生き抜いた先でようやく辿り着いた心落ち着ける場所。彼女にとっての僕はそうでありたかった……

その想いを凌駕する程に僕はミレイナを必要としている。本能の奥底からそう訴えかけられる様な奇妙な感覚さえ覚えている。

『渴望』

不意にそんな単語が思い浮かんだ。

「ふう……」

思わず溜息が出た。それに気がついたクレハが隣から軽く目配せを送ってきた。

「大丈夫です」

気遣ってくれる友に軽くそう返答する。それで決意が固まった。

過去のことを悔いても仕方が無い。オーネは怪我を負いながらも今のこの舞台を整えてくれたのだ。ならば自分はそのお膳立てを無駄にしないようにしなければならない。

『してオルティスよ。問題は無いのかな？』

王の声が謁見の間に響く。その声色はいつもの威厳に満ち溢れたものではなく、どこか恐怖を孕んでいる様に聞こえた。

「滞りなく」

その不安を払拭すべく、短く返答する。

さて

そろそろ準備をしなくてはならない。ここまでの彼女の進行速度は自分の予想を遙かに上回るものだった。ならばすぐにでもこの謁見の間に姿を現すことだろう。

自分は彼女をどんな表情で迎えるべきだろうか。数秒の間に様々なパターンを思考してみる。

男は背中で語るものだぜえ！

不意に隣に控える友の言葉が思い浮かんだ。

ふむ

クレハの人を惹きつける奇妙な魅力には目を見張るものがある。ならばここはその男の言にのってみるのも悪くはない。

自身の中でそう判断を下すと、すくと立ち上がった。

扉が開かれるタイミングで軽くマントを翻し、背中をアピールしつつ流し目で迎えよう。そんなことを考えつつ、背中を飾っている純白のマントに視線を落とす。

この日のために、マントを新調してくれたクレハには後でお礼を言っておかなければ。

耳を澄ませば、遠巻きに回廊を駆けている音が聞こえてき始めた。

そろそろか。マントを翻すべく、左手で内側を少し寄せ右肩にすつと添えた。セナキが不思議そうな視線を送ってきたりもしているけれど、今は気にしないことにする。演出というものはなかなか大事なものだ。

目を瞑りタイミングを計る。

5

4

にしても早いですね……

2

バン！

今だ！

扉の音とほぼ同時に、謁見の間にマントを翻す音が響く。

「ようこそ、エドラー」

『エドラルザごらあああああ！！！』

グシャ！

次の瞬間、用意していた口上と共にゆっくりと振り返ったオルテイスの背中を美女の咆哮と木製の靴裏が襲った。

天使、川篠定臣の到着である。

勢いのままに飛び込んだ大扉の先には、謁見の間と思しき空間が広がっていた。

それを証明するがごとく、正面の玉座には白髪白髭に偉そうな王冠を被っている見るからに王様な風貌の男が鎮座し、その正面、つまりまるところの自分とその男の間には左右に綺麗に分かれる形で片膝をついた者達が控えていた。

飛び込んでから数秒。広間は耳鳴りが聞こえてくる程の静寂に包まれていた。

……あれ？なんか妙に静かなんだけど

目的地に無事に到着した安堵感と夜通し全力疾走した疲労が相まって、ここにきてさすがに冷静さを取り戻した定臣は、思わず周囲を見回しながらそんな事を思った。

よく見れば王の御前に控える者達の中には見知った顔がいくつかある。

というかポレフまた寝てるよ……あつ、エレシが手振ってる。

思わず手を振り返そうかと思った矢先、真つ赤な服のもみあげのその人の視線が妙に気になった。

クレハ・ラナトスのその瞳は慈しみに彩られている。

あゝ……

なんだ……

なんとというかあれは……

あの目は知っている。広間の静寂と相まって記憶はより鮮明に思い出された。

それは学生時代のこと。

授業の際ついつつかりと先生のことを『お母さん』と呼んでしまった時に教室を包み込んだ静寂。そしてその際に自分に向けられた

友達の瞳に携えられていた色と酷似していた。

となると次にくるのは……爆笑か？などと相変わらずに場違いなことを考えつつも、あの時の恥かしさを思い出しつつ頭を掻いていると突然、足元の床が隆起した。

計算外でした。まさかいきなり足蹴にされるとは……

激怒の登場を演出するにはそれも有りか。そう自分の中で軌道修正する。

それにしても今の僕の姿はかなり惨めな姿なのでしょうね……

すべての民の注目的。誰しにも尊敬され常に光輝く存在。今日より勇者に着任する自分は他者からはそう見えなくてはならない。

その自分が不意打ちとはいえ、背中を踏まれた状態のまま地面に平伏している等もつての外である。

なんとも言えない感情に絆ほだされて左手がプルプルと震えている。肘についてそれを制しながらゆっくりと頭に添え、この後にどう挽回しようかと思案する。

それにしても、いつになったらその足をどけてくれるのでしょうか

か……

いっそのこと力技で吹き飛ばして立ち上がるうとも思いはしたものの、どうもそれは自身の美的感覚が許してくれそうにもなかった。

平常心に笑顔を装備する。

まずはゆっくりと立ち上がり、背中の埃を払おうではないか。そして次に先程遮られた口上の続きを述べよう。

何事も無かったかの様に。

違和感無く。

周囲の人間が先程起こった出来事の方こそが、何かの間違いであったと錯覚する程の態度をもってして。

心の中でそう決意し、ゆっくりと立ち上がる。もちろん踏まれていることを感じさせないため、笑顔のまま足には万力を込め、自然な動作に見せる演出を心がけるのは忘れない。

結果として僕を足蹴にした犯人は前のめりにバランスを崩し、慌ててこちらを振り返ってきた。僕はそれを感覚で確認しながら目を瞑り、左拳をぎゅっと握った。

本当に　　ここまでが長かった。

ミレイナ・ルイファスを口説き始めて三年。ようやく目処がたったのが数週間前のこと。

長くかかった分、ここからは一切立ち止まりはしない。

そう、ここからが僕の勇者としての覇道の始まり。

間にドナポス・ニーゼルフの野太い声が響き渡った。

一見、遅すぎるそのタイミングであったが、ことオルティス・ク
ライシスが冷静さを取り戻してからという意味合いにおいては、ド
ナポスのその一喝は絶妙なタイミングであったと言える。

『して……オルティスよ』

一喝から数秒、静まった謁見の間を一頻り見回し、重々しく口を
開いたのはエドラルザ王だった。その声にようやくその存在を思い
出し、定臣が声の方へ振り返ったのとそれが起こったのはほぼ同時
の出来事であった。

「問題ないで……」

オルティスの声が背後から聞こえる。

『問題ないです』

恐らくはそう言おうとしたのだろう。しかしその言葉は最後まで
音を紡がれることなく

ガシャン！

再び叫び声を上げた大扉によって掻き消された。

空気が強震する。大音響と共に圧倒的な力で吹き飛ばされた大扉
は、ただの物体と化してそのままの物量でオルティスの背中を巻き

込み、定臣越しで王へ向かって一直線に侵攻して行く。

それを半身を捻り咄嗟に回避した定臣は、尻餅をついたままの姿で事の経過をあっけにとられたまま見送った。

視線の先、大扉だった物越しに玉座が粉碎する。

続け様に砕け散った大扉の破片と玉座の背後で崩れ落ちた内壁が混じり、一瞬にして埃がたちこめ視界を奪っていく。

急展開した事態が、その場に居合わせた者達の意識を置き去りにしていったその最中。

『馬鹿者っ！未然に阻止出来ずになにが親衛隊であるかっ！』

騎士団長、ドナポス・ニーゼルフの怒号が響いた。

その怒号に払われる様にして砂埃が徐々に集束していく。その砂埃の中から両手を顔の前で交差させた姿でドナポスが現れた。それに驚いた一同は、先程までドナポスが控えていた玉座の遙か左脇に各々に視線を送った。

するとそこには

「お見事です」

先程、大扉と共に吹き飛ばされたはずのオルティス・クライシスが朗らかな笑みを携え、そう口ずさみながら佇んでいた。

襲いくる王への脅威を取り除きつつ、被害者であるオルティスをも救ってみせる。

エドラルザの盾、鉄壁のドナポス。その二つ名が伊達では無いことを身をもって証明してみせたその人は交差させた腕を解くと、謁見の間の入り口、先程まで大扉があったその場所を見やり、更なる大声と共に王を襲った犯人の名を口にした。

『ミレイナ・ルイファス！これは一体どういうことだっ！』

エドラルザ　　II

重大な事件が起きた直後、人は悪い冗談にでも見舞われた様な奇妙な感覚に陥る。

今の定臣は正にそんな状態であった。

突如、吹き飛ばされた大扉。自身をも巻き込んだその矛先は、ラナクロアの世界王へと一直線に侵攻していった。

それは　　正しく暗殺であった。

そう、この謁見の間であった今、起きた出来事はこの国を揺るがす程の大事件だったのである。

……今、王様殺されかけなかったか？

確か背後から大扉が飛んできて……

先程の光景を思い出す。咄嗟に回避運動を行えたのは、自分自身

がこの場において気を張り詰めた侵入者だったからに他ならない。

もしも直撃していたならば恐らく命は無かつただろう。吹き飛ばされた大扉にはそれだけの速度と質量が備わっていた。

背中に嫌な汗が伝う。常日頃から鍛錬を積み重ねている自分ですら、死を覚悟する程の威力を孕んでいたのだ。もしもそれが王に直撃していたのならば……

騎士としての務めを果たしたドナポスに視線を送る。

ドナポスさんいなければ王様死んでたよな……

そこに思考が到達した時、ようやく一種の金縛り状態だった身体が自由を取り戻した。

まずは落ち着こう。もう一度、先程の出来事を反芻しつつ、ゆっくりと心拍数を整えていく。

謁見の間。吹き飛ばされた大扉……あれ？前にもこんなことなかったか？

そう。あれは羅刹に初めて会いにいった時だ。あの時は大扉と一緒に師匠が吹っ飛んできた。

謁見の間の大扉が破壊されるのは世界の理なのだろうか。相変わらずに場違いなことをなんとなく考えてみる。思えばそれは無意識に行った現実逃避だったのかもしれない。

騎士団長ドナポス・ニーゼルフは先程からずっと一点を睨みつけている。自然の成り行きに身を任せるのであるならば同じくそちらに振り返るのが道理だった。

しかし振り向けない。不自然にそちらを見ないようにしていた自分に気がついたのは、背後から不機嫌そうに鼻を鳴らすその音が聞こえてきてからのことだった。

『ふんっ』

どうやら無視することは出来そうにない。そう、即座に判断を下した。

ある意味で観念し、ある意味で覚悟を決める。そしてようやくドナポスの視線の先、つまるところの謁見の間の入り口に視線を送る。

そこに

激怒の赤髪の姿が在った。

大気が震えている。遠目に見たその人の背後の空間が歪んで見える。

怒りで髪が逆立つことが本当にあるのだと初めて知った。その人の髪は神話のメデューサさながらにうねうねと戦慄きながら主が怒っていることを顕著に訴えていた。

よく見れば、身体の輪郭を縁取る様に一定の距離を保ち、火やら水やら風やら雷やら氷やら土やらが具現化して彷徨っている。

本能が震え上がる程の恐怖を覚えたのは何度目のことだろうか。

ミレイナ・ルイファス。

ここまで幾度となく名前を聞かされた？愛すべき馬鹿たれ？ことロイエル・サーバトミンの実姉であるその人は、ロイエによく似た赤髪と目元をしてはいるものの、しかしその表情は愛くるしい妹君

の表情からは想像もつかない程に怒り狂っていた。

平伏せよ。

思わずそんな幻聴が聞こえてきた気がした。

『答える！ミレイナ・ルイファス！返答次第では……』

よくあれに強気に出られるな……

素直な感想を心の中で述べつつ、さすが英雄ドナポス・ニーゼル
フだと背後の騎士団長殿に感嘆の念を抱く。しかしそれも束の間
のことだった。

『そこをどけ！ドナポス！貴様のモヒカン千切りたいかつ！』

『えっ、ちょ……それは困る！』

『私は怒っているのだ！』

うわ……

あまりに事前に聞かされていた情報通りの人物すぎて、思わず面
白い顔になった。

そんな定臣やポレフPT、オルティスPT更に親衛隊の面々を他
所に二人は会話を交わしていく。

『うむ、怒っているのは見ればわかる』

『まったく……君は変わらんな』

『うむ、そちらも壮健そうだなによりだ』

『さて　　君はそこを譲ってくれる気はなさそうだが』

……あれ？

突然、場に張り詰めていた空気が緩和した。

先程の激怒の演出もどこへやら、ドナポスと親し気に話し始めたミレイナに違和感を覚える。それと共にそれに応じているドナポスにも同じ違和感を感じた。

恐らくは立場ある者通し多少の面識はあるのだろうが、いくら何でも今しがた主の命を狙った者相手に気を許しすぎではないのだろうか。先程の攻撃には確かな殺意が込められていた。それは受けきったドナポス自身が一番把握出来ているはずだ。

だというのに……

ドナポスのあの余裕のある態度は王を守護する絶対の自信からなのか、はたまたミレイナの怒りを和らげるための狡猾な戦略からなのか……

どちらにせよあれだけの怒気を露にしていたミレイナが、それに応じているのがどうにも納得出来ない。先程の怒りは間違いなく本物だった。それならば謁見の間に入った直後にその怒りを和らげる？何か？があつたはずなのだ。

顎に手を当て思案する。

うっんと唸り始めた定臣に答える様に、突然ミレイナがその解答を提示した。

『まあいい。とりあえずの意趣返しは既に済んだ』

はてなと首を傾げながらミレイナの視線の先を見やる。その視線に気がついたドナポスも同じく自身の背後に視線を送った。

『アツーーーーー！！』

謁見の間に野太い叫び声が木霊した。

ドナポスの背後、つまりは先程まで玉座が存在していたその場所から、崩れ落ちた内壁までのそこには両鼻から鼻血を流出したままの姿で、白目を剥いて口をあんぐりと開き気絶しているエドラルザ王の姿があった。

それはそうである。迫り来る大扉を完全に防ぎきっていたのであるならば、玉座の背後の内壁が崩れ落ちるはずがないのだ。それが見事に崩れ落ちていたということは……

ドナポスプッシュ。大きなその背中であつかりと壁との間に標的を挟み、圧迫する重量級の成せる大技である。

思わず脳内にそんな解説が流れた気がした。

というかつつかりで許される範囲なのかこれは。

『馬鹿者っ！未然に阻止出来ずになにが親衛隊であるかつ！』

先程、格好良く決まったドナポスの決め台詞が脳内でリピートされる。恐らくは一喝された親衛隊の面々も同じ状態なのだろう。彼らの心の声が聞こえてくる気がした。

団長、駄目じゃん、と。

なんともいえない空気が場を支配する。もちろんその場に居合わせた全員の視線がドナポスに集中している。

そんな中、筋骨隆々なドナポス・ニーゼルフは一度、凜々しく胸を張り、謁見の間にゆっくりと視線を這わすと、くわっと眼を開き

『てへっ』

もじもじと両手を後ろに組み、片足を後ろで交差させ、そう言いつつ舌をぺろっと出した。

拝啓 小夜子様。

そちらはいかがお過ごしでしょうか？

こちらは……

俺は……

突如の大雪に見舞われました。現在進行形で。

「……………やだあああああああー！」

極寒の謁見の間。燃える赤髪の炎さえも凍りつかせた大事件は、こうして定臣の絶叫で締めくくられることとなった。

大丈夫。まだ軌道修正できる範囲です。

謁見の間で起きた一連の出来事。それを脳内で反芻しながらオルティス・クライシスはそんなことを思っていた。

ミレイナ・ルイファスの唯一無二の弱点。それは妹であるロイエル・サーバトミンである。彼女を攻略するには？そこ？を衝くほかには無かった。しかしそれは諸刃の剣でもある。

すべての人類を平等に見下す彼女が唯一、特別視している存在。それは彼女の弱点であり、それと共に逆鱗でもある。もしも取り扱いを間違えようものならば、逃れ様のない死がこの身に迫るのは火を見るより明らかであった。

故に事は慎重に運んだ。歳月をかけ、下地を着実に積み重ねてきた。

出来る事ならば自分の誠意に応じてもらう形で仲間を迎え入れたかった。しかしその願いは叶わぬまま、機会は訪れてしまった。

？私が欲しいのなら手段を選ばずに来い？

カルケイオスに通い詰めること三年。取り付く島も無かった彼女がある日、突然そう言った。

お前の本気を見せてみる。

言葉の裏に隠された彼女の真意をそう解釈した。

それまでの三年、僕は彼女に本気の誠意を見せてきたつもりだった。そしてその誠意は伝わったのだろう。だからこそ彼女はようやく態度を軟化させた。

その上で提示された課題内容。恐らくは僕に奥の手があり、それをまだ出し惜しみしていると看破されていた。

彼女はそれを使ってこいと言う。

しかしそれは

オーネに無理を強いるということだった。

東で偶然にも事件が起こり、ミレイナがカルケイオスを空けたのは邂逅だった。

言い訳はしない。結局、それを期に僕はその道を選んだ。

スツとミレイナを見据える。見れば彼女も腕組をしたまま、こちらに視線を投げかけて来ていた。

あなたには意地でも仲間になって頂きます。

さあて、どうでる小僧？

騒然とする謁見の間。両雄は視線でそう会話を交わした。その後、救護兵に慌しく連れられていったエドラルザ王がこの謁見の間に戻るまでには、まだしばらくの時間を要しそうであった。

これが鼻肩ってやつか。

自分よりも派手に、そしてついでにエドラルザ王の暗殺まで試みたミレイナ・ルイファスはお咎めなし。そして俺は

『無駄な抵抗はやめろ！貴様は完全に包囲されている！』

一連の出来事から数秒。慌しく運ばれて行くエドラルザ王を尻目に、定臣を取り囲んだ親衛隊は十数人。その誰もが只者ではない気配を身に纏っていた。

「まあ、こつなるわな」

ぼつりと呟く。むしろ今のこの状況よりも、ここまでの道のりに対しての方が違和感を覚えていた。

何故か邪魔されることなく通された城壁。半ば肩透かしにあった様な感覚に陥りつつも、それならそれで好都合だと目指した王城で受けた妨害……むしろあちら側からすれば警備なわけだが。

それも序盤だけで、後はここまで何の抵抗も受けずにやって来れ

た。

突破してきたというよりも誘い込まれた。自身を取り囲む兵の？質？がここにきて桁違いに上がっている。その印象はどうやら間違いではなさそうだと、定臣は刀の柄にそっと右手を添える。

『オホンツ！親衛隊。引け』

野太い声が謁見の間に木霊する。見ればそこには騎士団長、ドナポス・ニーゼルフの姿があった。

『その者、勇者候補ポレフ・レイヴァルヴァンの連れの者である。拘束する必要はない』

正に鶴の一声。英雄のその一言に場を支配していた剣呑な空気が霧散し、親衛隊の面子は銘銘に持ち場へと戻って行く。それを例の？どや顔？で大きく頷きながら見送るとドナポスは定臣に向き直り、改めて口を開いた。

「サダオミ殿、姿が見えぬので心配しておりましたぞ」

「ども、レイフキツザ以来ですね。ドナポスさんもお元気そうではないですよ」

一応の挨拶を交わす。どうやらドナポスは先程の失態を強引に誤魔化した様に、自分の乱入も？ただの遅刻？で誤魔化す気ではないだ。

しかしながら自分がここに来た目的は他にある。内心でドナポスの心意気に感謝しつつも、先程の？あれ？は誤魔化せる範囲なのかと首を傾げながらも定臣は本来の目的を口にした。

「ドナポスさん、すいません。実は俺、ここに脅迫にきたんです」

！？

軽い調子で真相を言い放つ。案の定、場の空気はがらりと変わった。

『よい！引け……どれ、ワシが一つ事情を聞こう』

再び剣に手を携えた親衛隊の面々を制しながらそう言い放ったドナポスの眼光は、先程までの優しいものから獲物を見据える狩人のものへと変貌していた。

引くわけにはいかない。いざとなればエドラルザごとぶつた斬るつもりでここまでやって来たのだ。

ぎゅっと握りこぶしを作る。その手を見つめながら思い出したのは、別れ際のロイエルの笑顔だった。

ドナポスの眼光に一瞬、ひるんだ定臣だったが自身の目的とそれが果たせなかった時のことを再確認し、瞳に力を宿らせる。再び顔を上げた定臣のその表情には確かな決意が見られた。

「実は妹が……いや、友達が死刑になることになりました」

「む……？ふむ、名と罪状を聞こうか」

「ロイエル・サーバトミン。カルケイオスにて？ミレイナの窯？を破壊したことになるはずですよ」

短く言い放つ。恐らくは英雄、ドナポス・ニーゼルフをもつても確定した罪状を覆すこと等、出来はしない。ならばこの場で強引にロイエをさらってでもその命を死守する。ほとぼりが冷めるまで十年でも二十年でも守る抜いてやると、定臣は再び刀の柄に手を添えた。

『それは私の妹だ!!』

謁見の間に透き通った声が響いた。

慌ててそちらに視線を送る。声の主はミレイナ・ルイファスその人だった。

そしてミレイナは定臣をじっと見据えると、他のものへの興味をすべて失ったと言わんばかりに、真っ直ぐとそちらに向って歩みを進め始めた。

そしていよいよとして対峙する侵入者二名。

片や金髪美人のその人ことサダオミ・カワシノは、啞然とした表情で対峙するその人と見つめ、片や怒れる赤髪の小霸王ことミレイナ・ルイファスは、先程の怒りもどこへやら、どこか慈愛に満ちた瞳をサダオミに向けていた。

「君は……ロイエのためにここまで来てくれたのかね」

先に口を開いたのはミレイナの方だった。

ここまでの道のり、人から聞かされたミレイナ・ルイファスについて様々な印象を受けてきた。

故に定臣は思考する。その言をそのままの意味でとってよいもの

かと身構える。

「ははは、いいな君。ただの馬鹿ではなさそうだ」

さて、どう対処したものか。なにやらご機嫌なわけだが……まずは

「ども、初めまして。サダオミ・カワシノと申します」

「ふむ……で、サダオミ君。私は君に質問したわけだが」

「ん、その前に名前乗ろうよ。こっちは名乗ったわけだしさ」

俺のその言葉に周囲がざわめいた。名前を尋ねただけでそんなに驚かれても困るわけだが。

「ほう……君は私を知らないのかね」

パリパリとミレイナの周辺で空気が弾ける音がする。どうやら怒っているらしいが、名前を尋ねただけで怒られても困る。

「ん、ロイエの姉ちゃんでしょ？ミレイナ・ルイファスだっけ。

でもまあ初対面なわけだし、名前くらい交わしてもいいんじゃないかい？」

もちろん、目の前の人物が何かとすごい人なのだということは知識の上で知っている。しかし自分としてはこれが初対面である。

周囲の騒然とする空気に圧されたこともあり、礼には礼を、無礼には無礼を返して何が悪いと、自覚している頑固っぷりがついっかかりと顔を出した。

しかしそれは結果として

「はっはっはっは！君は面白いな。」

この私と対等に口を聞こうとする者がまだこのラナクロアに存在していたとは「

この未来おひに待ち受けていた、最悪の事態を好転させる結果となった。

たった一つのやりとりで、すべてを超越した先で理解し合えることがあるんだと知った。

正直に告白すれば、俺のミレイナに対する第一印象はあまり良いものではなかった。

しかし

「はっはっはっはっ！いいな、君は実にいい」

臆することなくミレイナに対して、対等に口を聞いたことが何やら彼女の琴線に触れたらしい。

しばらくその場のすべてを置き去りにして笑い続けた彼女は、不意に真顔に戻ると綺麗な目元を意地悪く細めた。その表情はまるで子供が楽しい悪戯を思いついた時の様な？あの？顔つきだった。

来る。

咄嗟にそう思った。

ここまで聞かされてきた彼女に纏わる話。その内容から察するに恐らく彼女は、人を試すことに生き甲斐を感じている節がある。ならば初対面である自分に対しても恐らく？それ？をしてくるはずだと、定臣は身構えた。

さて、何をされるのやら。

気を張り詰める。如何なる攻撃が来ようとも、即座に対応できるだけの気構えをもって対峙する。

さあ、迎撃の準備は完了だ。

「ふふ、そう身構えるな。

愛しい妹のために命を賭して、ここまで駆けつけてくれた君を悪い様にするはずも無い」

定臣の緊張とは裏腹に、ミレイナが定臣に投げかけた言葉は実に友好的なものだった。

ミレイナは自分のその言葉に定臣の緊張が和らいだのを確認すると、用意していた次の言葉を紡ぎだした。

「さて、妹を大事に想ってくれる君に一つの真実を伝えておこう」

「なにかな？」

今を思えばミレイナの次のその一言こそが、彼女が俺を試した瞬間だったのだろう。

とはいえ次の瞬間

「ロイエの一人称が？僕？になるように躡けたのは私だ」

ガシッ

「姐さんと呼ばせて下さい！」

交わされた固い握手と共に

「許可しよう！」

俺に姐さんが出来た。

目の前で起こった信じられない出来事に、思わず目を見開きました。あのミレイナ・ルイファスが一瞬で他人を認めてしまうなど……

いえ、それ自体は構わないのです……しかしその理由が……

「納得出来ない！」

思わず心底思ったその言葉が口をついて出た。それを聞きつけたクレハがすぐ様に、諭す様にほんっと僕の肩に手を置いてきました。

「若、顔が残念なことになってる（ぼそっ）」

「し、失礼……しかしあの方は一体？」

「ああ、悪いね。まあだ報告してなかったなあ」

クレハ曰く、あのサダオミ・カワシノという人物はエレシさんの親戚にあたる方らしく、既に聞き及んでいたマノフとの一連の出来事において、最も貢献度が高かった人物なのだという。

「ふむ、それで指名求人の方は……」

「若に相談無しでわりいゝんだけど、破格の初回Aランク登録。

あの状況から生還したこともあるし、俺が確認したマノフの負傷っぷりが半端無かったからねえ」

「なるほど……しかしクレハ、少し腕が鈍ったんじゃないですか？」

「む？そりゃ聞き捨てならねえぞ若あ」

「あれは初回Aランクなどではありません」

「ほお……俺の評価にケチつけるなんて珍しいねえ……」

理由、聞かせてもらおうか？」

陽気な雰囲気身を纏ったままクレハの瞳の奥に鋭さが増す。仕事の話をしている時のこの人は相変わらずに真剣そのものですね。

だからこそ過ちは修正しなければいけません。

「あれは……あの方は初回Sランクです。そして僕はあの人欲しい……！」

「ほう……くく、くつくつくつ、実は俺様もそおう思ってたところなのよお若ぁ」

そんなやりとりを交わしているオルティスとクレハの通路を挟んだ右隣にはポレフPTの姿あった。

とはいえ、一連の騒動にも動じずにラナクロアの主人公ことポレフ・レイヴァルヴァンは今も尚、姉であるエレシの背に背負われたままの姿ですやすやと眠りこけている。エレシはエレシで案の定、そんなポレフの寝顔をにこにこ見守っているのだった。

そんなポレフとエレシの背後にはシア・ナイの姿があった。その脇にはどさくさに紛れて通路を横断し、こちら側へやって来たセナキ・タダノの姿も見受けられる。

二人のあまりの服装に見兼ねたクレハのプロデュースにより、早々にラナクロアに馴染んだ服装に着替えさせられた二人は、どこか神秘的であった雰囲気もすっかりと鳴りを潜め、傍目に見れば歳相応の少年と少女のもつ外見へとすり替わっていた。

とはいえ整ったその外見は、相変わらずに誰もが思わず振り返る

程の端麗さを兼ね備えてはいる。

そんな二人の視線はその人物が謁見の間に侵入して以来、その一点に釘付けにされていた。

「兄さま」

「うん、そうだね姉さま」

周囲の状況を一切、無視して二人は会話を交わしていく。そんな二人の間には他者が介入出来ない空気が流れていた。

表情の乏しいシアの顔に変化は見られないものの、笑顔がスタンダードなセナキの表情には珍しく険しい色が差し込んでいる。

「伝説の……類だと思ってた」

「僕もだよ姉さま。出会えたのは僕達が初めてのケースじゃないかな」

「そう」

「うん、とりあえずどちら側になるかわからないけれど」

「うん」

「各自対処ってことで。出来るだけお話す様に心掛けようね？」

「……わかった」

ミレイナと固い握手と共に姉弟の契りを交わしてから数十分後、ようやく復帰してきたエドラルザ王を前に、定臣は信じられない光景を目の当たりにしていた。

『オホン……してミレイナ・ルイファスよ。申し開きはあるか』

罪状の重い順に問い正していく。そう宣言した後、エドラルザ王はまず姐さんに向ってそう口火をきいたわけだが……

「なんだエドラルザ王。あなたはむしろこの私に言い訳をする側の人間だろう」

そう言い放った姐さんが現在座っているのは、魔法で早々に修復された玉座だった。当然ながらそこは本来、エドラルザ王が鎮座すべき場所である。対するエドラルザ王はというと、渋々といった様子で下座に佇んでいる。

ってこれいいのか！誰もつつこまなくていいのか！

エドラルザ王と共に謁見の間に戻ってきた親衛隊の面々に視線を振ってみる。見れば皆が皆、彼女のありえない行動に愕然と立ち尽くしていた。

腕を組み偉そうに鎮座するミレイナ・ルイファス。その正面には僅かに曲がり始めた腰に芯を入れ、佇むエドラルザ王。まったくも

つてどちらが王様かわかったもんじゃない。ミレイナのあまりにあまりな態度に思わず親衛隊よろしく、あんぐりと口を開く。

まあそもそも、出会い頭にいきなり暗殺しようとしていたわけだから今更、畏まるはずもないとは思っていたわけだが……

『言い訳とな？申してみよ』

後手で親衛隊を制しながらエドラルザ王が言い放つ。凜としたその仕草には貫禄が滲み出ているものの、現在の位置関係がそれらをすべて台無しにしていた。

「ふん、くだらん茶番を演じる必要は無い。あなたは私の用件だけ聞き入れればいい」

ぶった斬られるエドラルザ王。正しく絵に描いた様な傍若無人ぶりである。

周りのすべてを置き去りにするのはミレイナ・ルイファス、この人のアイデンティティか。またしても謁見の間は、彼女の彼女による彼女のための独壇場と化していた。

場の空気を完全に掌握した上でミレイナはしたり顔で口を開く。最早、この場でそれを制止出来る者は存在しなかった。

「さて」

ゆらりと立ち上がり腕組を解く。それをあっけに見守る周囲を他所に、すっと落とされた両手に光が集束していく。それを見たドナポスが慌てて王とミレイナの間に立ちはだかるよりも先に、ミレイナの宣告は下された。

「私はここに？戦争？をしに来たわけだが」

戦争。

このラナクロアにおいて、カルケイオスの長である彼女のその言葉は絶大な意味を持つ。

そしてその意味をラナクロアに住まう誰しもが理解していた。

？もしも？がここに介在していた。

エドラルザ王国とカルケイオスによる世界大戦。

数の利か質の利か。どちらにせよ人類は魔族に滅ぼされるのを待つことなく、自滅への一途を辿ることとなる。

？もしも？そうなれば城壁素材の支給は絶たれ、それを扱うためにカルケイオスで育成されている未来の人材も派遣されることはなくなる。それどころか現在、その任を担っている者もカルケイオスへ引き上げ、城壁は早々にその働きを無効化される。

それに伴い、劣化した城壁部位を修繕、補強も不可能になり、ついには城壁内部へ雪崩れ込む魔獣達。たちまちに世界を席捲して行く阿鼻叫喚。それは過去の暗黒時代の再来であった。

それを皆が想像し、謁見の間は水を打った様に静まり返る。

有無は言わさない。既に王の命は我が手中に在り。

悪戯に嗤う瞳が皆にそう告げていた。

『ま、待て！ミレイナ！わかっておるのだらう！』

ミレイナの溢れんばかりの殺意に中てられ、エドラルザ王が慌てて口を開く。それを蔑む様な瞳で眺めながらミレイナは冷酷にその続きを口にした。

「当然だ。誰に口をきいている。

その上で　　私は？戦争？をしに来たのだよ」

『し、しかし』

「あの子の命を狙う様な人類であるならば、いつそ滅んだ方がいい」

その瞳は怪しく光り、その手に集束された魔術は今にも発動しそうな様相を呈していた。そんな中、ミレイナ・ルイファスはにやりと嗤い、そして定臣の方へと向き直った。

「　と、脅迫とはこの様にするのだよ。新しい妹よ」

そこで俺に振られても心底困る。本気でそう思った。

とはいえ、先程までのやりとりが演技であったことには正直、胸を撫で下ろした。阻止するためには姐さんと対峙する破目になるかと、内心で覚悟していただけにその思いはひとしおだ。

ここに突撃した自分自身も、エドラルザ王のことは一発くらいぶん殴ってやるうと思っただけに、演技とわかった今となっては青褪めるエドラルザ王に含み笑いすら込み上げてくる。

しかし

「妹じゃなくて弟っすよ。姐さん」

これだけは言わせて頂きたい！

もみもみ

直後のことだった。瞬時に背後に回りこんだ姐さんに、背後から抱きつかれる形で両肩をロックされる。

もみもみ

「ちよっ……」

擬音をつけるのなら正に？もみもみ？

先程、撫で下ろしたばかりの自分の胸がミレイナ・ルイファスその人によって無遠慮に弄られていた。

「と、脅迫とはこの様にするのだよ。新しい？妹？よ」

妹の部分をやたら強調して同じ台詞を言われた。

それからしばらくの間、？弟？を強調する俺に対して同じやりとりが行われ、ようやく心が折られたその時には謁見の間に先程まで流れていた緊迫した空気は、もの見事に消失していた。

それはいいとして、オルティスがやたら前屈みになっているのやら、クレハがにやにやしているのやら、ドナポスさんが赤面しているのやら、エドラルザ王の口がやたら尖がっているのやら、親衛隊の面々の口元がやたら弛緩しているのやらが嫌に気になる。

先程、うっかり漏らした自分の声を思い返すと死にたくなってきた。

これが絶望ってやつか。虚ろになった瞳で恨めしく姐さんを睨んでみる。すると主犯であるその人は、相変わらずに周囲のすべてを置き去りにしたKY発言を繰り返してきた。

「ふむ……サダオミ・カワシノか……」

うむ。いつまでも？新しい妹？では味気ないではないか。

そうだな……よし、ここはこの私が親しみを籠めて愛称を名付けようではないか」

……好きにしてくれ

今この場でそれは必要なことなのかと、心底つつこみたい気持ちもあるにはあったが、今はそれよりももう少しの間この絶望に浸りたい気分だった。

絶望の最中、思考を切り替えて立ち直りを計ろうと過去に自分が呼ばれてきた？あだ名？を思い返してみる。

学生時代、基本的に名前をそのまま呼ばれる事が多かったが、当然ながら、あだ名で呼んでくる人もいるにはいた。

まず、一番多かったのが？川ちゃん？次点で？臣っち？あたりか。変わり種で？篠様？なんてのもあった気がする。

？様？なんてのはどうにも落ち着かない。エレシに様付けで呼ばれた時のあのむず痒さは、学生時代の古傷を刺激されたからだったのかと今更ながらに思い出してみた。

まあ妥当な線で？川ちゃん？あたりだろ。まだ聞かぬミレイナが名付ける自分の愛称にそう中りを付ける。

ようやく先程のショックから回帰し始めた頭で、ぼんやりとそんなことを思っていると不意にその瞬間は訪れた。

「チャッピーに決まりだな」

そうかチャッピーか。そういうのもあるか。なかなかキュートではないか。

「ってチャッピー!？」

「……………え〜……………チャッピーて……………」

「それでだな、チャッピー」

「え、ちよつと待って!それ決定なの!？俺の意思とか関係無いの!？」

「チャッピー」

「え〜……………」

俺に愛称が付いた。

泣いてませんよ？

エドラルザ エエエ

「さて、エドラルザ王よ。新しい妹に免じて？戦争？はやめにしてやるつもりだ。」

そうなるなら私はあなたに形式上の免罪を求めねばならないわけだが」

先程の珍事から数分後、ようやく再び改まった空気を取り戻した謁見の間にて、ミレイナ・ルイファスがそう宣告した。

現在の立ち位置はミレイナが下座。そして定臣による『話が進まないから』との半泣きの懇願を経て、玉座を取り戻したエドラルザ王が、ようやくとしてそこに座り込んでいる形である。

定臣はというと、そんな二人のやりとりを背後から眺める形でポレ陣営に待機していたりする。

『ふう………申してみよ』

なにやら疲れた口調でエドラルザ王がそう告げる。それを鼻を鳴らして一蹴すると、ミレイナは用件を口にした。

「まず我が愛しの末妹、ロイエル・サーバトミンの罪を帳消しにする」

それは懇願ではなく決定だった。その発言ににわかにはわめく場内を即座にエドラルザ王が手で制す。一呼吸の間を置いて王はミレイナにその発言の意味を問いただした。

『罪状は窯の破壊か。それを帳消しにするとは如何に』

「要するに窯を一つしか用意していないからそんな下らん？法？を創ったのだろう？」

ならばこの場に窯を提供しようではないか」

『あれは一つしか創れんと申したではないか』そうエドラルザ王が恨みがましくぼやく中、ミレイナは徐にローブのポケットに手を突っ込むとビー玉大の球体を十数個取り出す。それを無造作に空中に投げ出すと指を一つ鳴らした。

ぱちんっ

乾いた音が謁見の間に鳴り響く。その直後

ドオオオン

出現した？ミレイナの窯？は玉の個数分。それは一瞬にして謁見の間を埋め尽くした。ミレイナはそれをして顔で一通り眺めると、軽く一つ頷きエドラルザ王に視線を戻す。

「ふむ。これで妹の罪は帳消しになったわけだが」

『待て！もう少し場所を考えんか！』

エドラルザ王が思わずそうつつこむのも無理はない。見れば突如、出現した？ミレイナの窯？から逃げ遅れた親衛隊の者が数名、その下敷きとなっていた。

それを詫びるところか親衛隊の訓練が疎かではないかと指摘しつつ、ミレイナは次の用件を口にしようとする。それをエドラルザ王が救出が先だと制止し、難を逃れた親衛隊の者達によって救助が行われた。

その後に謁見の間を埋め尽くした？ミレイナの窯？に対して、王直々に？圧縮保存？の魔法行使の許可が発令され、再び球体化された後、ようやく謁見の間は元の様相を取り戻した。

余談ではあるがその際、下敷きにされた親衛隊の者が恨みがましく『？圧縮保存？の魔法が食料品以外に使用されている』とミレイナの？法律違反？を指摘するという一幕があった。

今更、法律違反もくそもないものであるが、彼とて親衛隊にまで上り詰めたエリートとしての自負がある。よせばいいのにという周囲の空気を肌で感じつつも彼の糾弾は続いた。

そんな彼を虫ケラでも見るがごとく、不機嫌そうに見定めるミレイナ・ルイファス。直後に面倒くさそうに申し開きをしたミレイナの姿に、謁見の間の者達は彼女の彼女たる所以を心底味わう破目となった。

この窯は食料であるわけだが……ふむ。勇敢な君はそれを忘却の彼方へと追いやってしまった様だ。ならばここは君が自ら確

かめてみるがいい。

ほうら、どうした。早く食さんか……ふふ、ふふふ、はっはっはっは

？だから言ったのに？もちろん誰もそれを口にしていないわけがあるが、一同の心の声は確かにそう告げていた。

『して、先程の続きを聞こう』

件の親衛隊騎士が同僚に肩を抱かれつつ退出していく後姿を哀れみの視線で見送ると、ようやくとして王がミレイナにそう切り出した。

「ふむ、ではもう一つの用件だが。そこにいるチャッピーの命を救って頂きたい」

ミレイナのその言葉に、背後で控えていた定臣があんぐりと口を開いて驚愕する。当の本人はまったくもって自分が死刑囚扱いになっているなど思いもよらなかったのである。

『ふむ、その代価に何を払う』

落ち着きを払った声でエドラルザ王が問う。その内心では脱線しかけていたシナリオにミレイナが回歸したことを秘かに喜んでいた。

「ふう……やれやれだな。茶番を再開しようか」

そんなシナリオなどお見通しである。副声音で暗にそう告げると、ミレイナは如何にも不機嫌そうに腕を組み直す。釘を刺される形に

なったエドラルザ王は一瞬、泳ぎかけた目でオルティスに視線を送ると、頷く彼の姿を確認し平静を取り戻した。

「確か勇者を公募していたな。その課題にカルケイオス民を同行者に加えるというものがあるのだろうか？」

ミレイナはそう言い放つと意地悪く嗤いながらオルティスに視線を送った。その視線を咳払いと共に引き戻すとエドラルザ王は話の続きを始める。

『如何にも。それを第二の課題とする心算であつたわけだが』

カルケイオス民の徴用には当然ながらミレイナ・ルイファスの許可が必要となる。それは事実上、限りなく不可能に近いことだった。

勇者候補の者達を大いに絶望させていたであろうその課題内容であるが、本来ここにいるはずの候補者五名はオルティスの大暴れにより僅かに二名に。内一名は現在も爆睡中。そして一名はシナリオ担当にして主演を演じているオルティス・クライシスであつたために、王のその発表に動じる候補者はいなかった。

「さて、とりあえず及第点ということにしておこうか。チャッピーに感謝するのだな」

またしても周囲を置き去りにしたミレイナ・ルイファスは僅かに口元を緩め、そう呟く。それを聞いたオルティス・クライシスとクレハ・ラナトス、更にはエドラルザ王までが隠そうともせず大きく息をついて安堵した。

そんな様子を背後からなんともいえない顔つきで見つめる瞳が二

つ。王とミレイナ、それにオルティスを交えたやりとりに先程から一切ついていけない定臣からすれば、目の前で投げ交わされている言葉の数々はまるでに暗号の類にしか聞こえていなかった。

振り下ろす先を見失った拳のからぶり感に、夜通し見知らぬ土地を駆け抜けた疲労感が相まって、その暗号は心地よい子守唄の様にも聞こえ始める。ここで定臣までもが眠りこける様なことがあれば、眠りのポレフPT?と後の世に名を残しそうな勢いであったが、幸いにもそれは次の王の言葉によって阻止されることとなった。

『ふむ。ミレイナ・ルイファス及びオルティス・クライシスはこの場に残れ。』

他の者、今日はこれにて解散とする。

尚、候補者PTは引き続き用意した部屋に待機するように。』

サダオミ・カワシノの処分は保留とする。その言葉を最後に突如として人払いされる謁見の間。呆けた表情のままエレシに手を引かれて謁見の間を去って行く定臣の姿は、なかなかシユールなものだった。

その後、罪人扱いである定臣には次の呼び出しまでの間、ドナポスが付き添うこととなり、通常ならば牢獄で過ごすはずのその時間を、ドナポスの計らいによりエレシPTと共に過ごせることとなった。

そこには確かに英雄、ドナポス・ニーゼルフの気遣いが感じられたものの、定臣はその気遣い以上にドナポスがエレシに対してでれでれしているのを見逃さなかった。

人払いが行われた謁見の間。そこには不機嫌さを隠すことなく佇むミレイナ・ルイファスト、その様子を青褪めた顔で伺うエドラルザ王の姿があった。そんな王の正面、ミレイナを挟んだその背後には爽やかな笑みを携えたオルティス・クライシスの姿がある。

「さて　候補者は二名。君は私が欲しいのだろうか？オルティス君」

「はい。この度はご足労頂き、ありがとうございました」

「採点は後だ。覚悟は出来ているのだろうか？」

「僕は三年前から覚悟していますよ」

「ふんっ……で　エドラルザ王よ。確認事項だが　」

謁見の間を追い出される形で退室させられたポレフPT。

ポレフ・レイヴァルヴァン

エレシ・レイヴァルヴァン

シア・ナイ

そして

サダオミ・カワシノ

その四名の後ろには英雄、騎士団長ドナポス・ニーゼルフの姿がある。

一行は寄り道することもなく、与えられた部屋へ向っていた。その最中、定臣はエレシに背負われるポレフを一瞥し『よく寝るなあ』などと感想を漏らしつつも、初対面であるシア・ナイの頭を『可愛いから!』との理由で撫でくりまわしたりしながら交流を図りつつ、マノフ戦で別れてからの互いの経緯をエレシと話し合ったりしつつ、今後の方針を固めていく。

部屋に到着した頃になり、話の内容は今後の定臣の処遇についてというテーマにまで及んでいた。通常ならば死刑。よくて無期懲役である定臣のその罪状であったが、いざとなれば定臣の正体を明かすつもりであったエレシに焦りは見られない。

にこにこ穏やかな笑顔を浮かべているエレシ。その笑顔に絆されていよいよ眠気がピークに達した定臣は、自身の置かれて状況も顧みずに大きく欠伸を一つすると、皆に断りを入れてから壁に背をかけ眠りに堕ちていくのだった。

「いやはや、まったくもって剛の者であるな。さすがはエレシ殿のご親戚!がははは」

睡眠妨害しそうな音量をもってしてそう言い放ったのはドナポスだった。

「言っておくが私はご機嫌斜めだ」

謁見の間。既に青を通り越して土気色になりつつある、エドラルザ王のその顔をキツと睨みつけながらミレイナ・ルイファスがそう言い放った。その背後ではオルティス・クライシスがご満悦といった様子で得意の笑顔を披露していたりする。

そう、オルティス・クライシスの交渉はこの場では一応の成功を収めたのだ。

サダオミ・カワシノの釈放、及び罪状の免除。それと引き換えに行われた交渉内容。

それはミレイナ・ルイファスの引き入れであり、共に勇者の道を目指すと決めたポレフPTへの支援であった。

交渉開始当初、ミレイナは定臣との出会いもあり、稀に見る機嫌の良さを披露し、オルティスPTへの加入に乗り気ではないもの前向きではあった。その態度を見誤ったエドラルザ王が秘められた目的であった、ポレフPT支援のために張り巡らせていた権謀術数をここぞとばかりに発動したのだ。

オルティスからすれば第一課題通過後に、加える形で修正した策である。急造された策は綻びやすく、ことミレイナに関してはそれは命取りになりやすいので事後承諾で。との方針を打ち出してはい

たのだが……

エドラルザ王も人である。やられたままでは我慢出来ない節もあったのだらうと、オルティスは笑顔でそれをスルーした。

ロイエル・サーバトミンの罪。いくら窯の提供が成されたからといって、それで無罪放免というわけにはいかない。苦渋を舐めさせられてまで得た？セキオスの間？での出来事まで揉み消される様であれば、それはもはや国の威信に関わるとエドラルザ王は口にする。

その時点でゆらりとミレイナの雰囲気は変わっていたのだが、一息で言い切ろうと口早にその先を言い切ったエドラルザ王はミレイナのその変化に気づくことはなかった。

一つ、ロイエル・サーバトミンをカルケイオスから追放すること。
二つ、罪を償うため、今後は候補者ポレフ・レイヴァルヴァンと行動を共にすること。

三つ、候補者が絶命ないし、目的を達するその日までロイエル・サーバトミンは執行猶予付きの罪人とする。

「なんだ？それは」

パチパチと空気が弾ける音が鳴る。凶悪をすぐ様に通り越して、極悪の域にまで到達したその面持ちがエドラルザ王の曲がり始めた背骨を垂直に迫り上げさせる。

『ひ……』

？やはり戦争をしたいのかね？？

底冷えする様な声色で宣戦布告が成されようとしたその時、背後に控えるオルティス・クライシスが少し焦りながら間に割って入った。

ぱんぱんぱんっ

拍手三唱。ミレイナの毒気を少しでも抜こうと、いつも以上の笑顔を送らせ歯を煌かせる。

「すみません、ミレイナさん。実は……」

『その指示は僕がお願いしたものです』そう告げた後、オルティスはミレイナに種明かしをする。

実はポレフPTの支援をしたいのだと。

そのために公にはロイエを特別罪人に仕立て上げ、その監視という形で王国より騎士を一名、ポレフPTに送り込みたいのだと。

そしてその騎士こそが

「ルブラン・メルクロワ。他は認めん」

「はい。もちろんそのつもりでした」

「ふむ」

それを聞かされたミレイナはしばし考えを巡らせる。

妹、ロリエル・サーバトミンに世界を巡らせる。確かにそれは見聞を広めさせるためには必要なことである。それにどうやらチャッピーはポレフPTとやらに所属しているようだ。更にはそのPTにはあのエレシ・レイヴァルヴァンまでいるとなると……

ふむ、ならばチャッピーを支援しつつロイエの成長を計るにはその提案は合理的であるか。ルブラン・メルクロフ。あの女の実力には目を見張るものがある。

そこに結論が達したミレイナは一応の理解を示した。しかしその後、それに安堵していたエドラルザ王を狂気の瞳が射抜く。

「しかし理解出来ないことがある。何故」

我が妹が罪人扱いでなければならぬのか。そこに含まれているエドラルザ王のちんけな意趣返しをミレイナ・ルイファスが見逃すはずもなかった。

「騎士を着けたいのであれば、あなたの指示でそう公言すればいいだけのことだろう！」

ずびしつと指差され一瞬、呼吸を忘れるエドラルザ王。それをミレイナの背後からにこにこ眺めながら？だから言ったのに？と内心でほくそ笑みオルティス。そんな二人を置き去りにして、言い淀むエドラルザ王に早速痺れを切らしたミレイナは脅迫紛いに言い放つ。

「言っておくが私はご機嫌斜めだ」

こうしてオルティスPTにはミレイナが、ポレフPTにはロイエールとルブランの二人が定臣達の与り知らないところで同行することが決定された。

尚、ロイエール・サーバトミン。サダオミ・カワシノの両名は完全

なる無罪放免となり、当然の様に当初予定されていたロイエルの罪人指定などは？無かったこと？にされていたのだが、当事者達がそれを知らなかった。

無茶苦茶が降ってきた。

エレシに連れられて案内された先の部屋。蓄積された疲労を少しばかりの睡眠で癒していた定臣が寝起きに抱いた印象はそれだった。

突然の殺気を感じて咄嗟に起き上がったのが数秒前。茫然としつつも、定臣は軽い現実逃避も兼ねて、とりあえずの大問題を丸投げにして部屋を見回す。

異常なこの事態をもってしてもポレフの睡眠が妨げられることはなかった様だ。ラナクロアの主人公、ボサボサ髪の少年ことポレフ・レイヴァルヴァンは姉であるエレシの膝を定位置に現在もすやすやと眠っている。そんなポレフに視線を釘付けにしたままに、エレシはドナポスと談笑していたりする。

唯一、定臣の方を見ていたのはシア・ナイだった。そんな彼女は先程からパクパクと口を開けたり閉じたりしながら放心していた。

うん、シア。君のその反応が本当は正しいんだよ。

内心で相変わらずすぎるメンバーに呆れつつも、定臣はシアに対

して『グッドラック』と親指を縦てながら、そろそろ目下の大問題を放置するわけにもいかないかと内心で諦めにも似た覚悟を決めた。そつと背後に視線を送る。そこは先程まで自分が背中を預けていた場所だった。

元内壁。しかし明らかにおかしい。窓の無いこの部屋から外の景色が拝めること自体がまずおかしい。
いや、それよりも

壁に出来た風穴。そこから見晴らせる景色に思わず目を細める。

「わあ、鳥が飛んでる、あっちの山は緑が綺麗だあ」

あまりの現実逃避したさに強引に？無かったこと？にしようとしてみた。

が

「ふむ、ようやく目を覚ましたか。チャッピー」

それを許してくれるこの人ではなかった。

「うっかり永遠に眠るところでしたよね!？」

そう、姐さんことミレイナ・ルイファスその人によって俺は強引に起こされたのだ。それもいきなり即死級の魔術をもってして。

大きく一つため息をつく。その内心ではカルケイオスでルクエに拉致された時のことを思い返していた。

？あれ？のお陰で気を張って寝てたんだもんなあ……

もしも気を抜いていたならば今頃は……そんなことを思いつつ、ゾツとしながらも殺害現場になり損ねたその場所を一目見ようと風穴から覗き込む。

とんっ

「姐さん事件です」

直後の出来事に思わずそう呟いた。

視線の高さは外に見える山の頂と変わらぬ高さ。背後から背中を思いつきり押されたことにより、現在俺はもの見事に空中に投げ出されたわけだが。

前にも似たようなことが……とか、むしろ姐さんが事件です。とか思いつつも重力には逆らえるはずもなく

「ああああああああああ」

また落下か。

迫り来る地面にやたら既視感があった。

それにしてもなんだって俺はこんな目にあっているのだろうか。姐さんとは姐弟の契りを交わしたはず……

死を直前に控えた際の脳の高速稼働。それを味わうのも何度目だ

ろつかなどつまらないことを考えるのももちろん忘れず、定臣は妙に遠く感じる地面から視線を手放し、ミレイナの先程の行動に疑念と些かの恨みを覚えつつも、頭上の風穴へと視線を送った。

「はっはっはっはっは！空の旅へご招待だ！チャツピー！」

頭上に見える風穴からそんなことを言い放ちながら赤髪のその人が飛び出す。思い切り踏み切られた外壁がバキリと鳴った音が定臣の耳に届いたのと、ミレイナが定臣の目線の高さまで降下してきたのはほぼ同時のことだった。

腕組をしたまま悠然に。その顔には不敵な笑みを携えたままミレイナは定臣と平行位置をキープしたまま地面に向かう。そんなミレイナの姿を間近でまじまじと見せられた定臣は心底思った。

この人なにがしたいんだあああああ！！！！

と。

「いや……もうほんとにいっすわあ……もういやっすわあ……」

惨劇から数分後、城の外庭に位置する拓けたその場所の片隅にはいじいじと地面を指先でつついている定臣の姿があった。

「いい加減に機嫌を直さんかチャッピー。私は君に爽やかな目覚めをプレゼントしてやっただけではないか」

そんな定臣の背後ではミレイナ・ルイファスが不服そうにそんなことを訴えていたりする。ちなみに先程の出来事の終点はそんな彼女の魔法により、実に緩やかな着地となった。

定臣からすれば寝起きをいきなり襲われた末の命綱無しのバンジージャンプである。その際に上げた奇声やら顔やらをその犯人である彼女に笑い飛ばされもすれば、不機嫌になるのも無理はないことである。

ミレイナ曰く、姉妹のスキンシップ。高笑いと共にそう宣言するミレイナの表情は実に機嫌の良いものとなっていた。そんな彼女をちらりと見上げた定臣は内心で『ロイエ、今までよく生きてこれたなあ』などと感想を述べるのだった。

「ふむ　上の部屋には他に人がいたのな」

定臣がようやく機嫌を直した頃合を見計らってミレイナがそう告げる。

国王を前にして自分のあだ名を考えだす様な自由っぷりを披露していた彼女である。その彼女がわざわざ自分と二人きりになるために手を煩わせるには何かがあると、定臣は真顔を作ると立ち上がりミレイナに向き合った。

「チャッピー、君に一つ質問があるんだ」

「う？」

定臣はミレイナが他人に質問することに一瞬、驚きもしたが小首を傾げ続きを促すと、背筋を伸ばしミレイナの真剣な様子に応じた。

「少年は いや、この場合は少女でもいいわけだが……」

ミレイナが定臣を連れ去った後の部屋、つまりはポレフPTとドナポスが控えるその部屋ではシアが風穴を指差し、ぶるぶると小刻みに震えながらエレシに対して「あ、あの、あれ、あ、あれ」などと呟き続けていたりもしたが、エレシはそれを「大丈夫ですよ」などとにこにここと制し、何事も無かったかの様にドナポスと談笑を続けるだけであった。

対するドナポスも落下していった定臣よりもエレシとの会話の方が優先度が高いらしく、特に気にした様子も無いままに今も「がははは」と笑い声を上げていたりする。

ドナポスからすればミレイナの意味不明な行動には手馴れたものであり、定臣に対して好意的であったことから問題は無いと判断したのであったが、そんなドナポスの心積もりを知らないシアからすれば目の前で起こった大事件を見て見ぬフリしている様に見えており、内心でこの騎士団長に不信感を抱き始めていたのだった。

そんな中、変わらぬBGMは今も鳴り続けている。そう、ラナクロア主人公、ポレフ・レイヴァルヴァンは何事も無かったかの様に今も眠り続けていた。当然のごとくシア・ナイの不信感を一番買っ

ているのはこの寝息の主だったりする。

ミレイナに少し待つ様に言われたオルティスPTの面々は、王から与えられた部屋にて三人の時を過ごしていた。

「死刑執行を待つ死刑囚とはこんな気持ちなんですね」

どこか青褪めた表情で椅子に座りそう言い放ったのはオルティス・クライシスだった。

「いやあそれにしても焦ったぞおゝ若あ」

その正面に机を挟んで座り、明るい調子でそう答えたのはクレハラナトスだ。セナキ・タダノはそんなクレハの両肩に肘を置いて『ふんふふゝん』などご機嫌に鼻歌を歌ったりしている。ちなみにその鼻歌はクレハの謎の鼻歌を真似たりしているわけだが、当のクレハがそれに気付くことはなかった。

「あれには本当に焦りました」

「終わったと思ったぞお」

そんなセナキを置き去りにして二人は二人でしかわかりあえない領域で会話を続ける。副声で話したその内容は謁見の間での出来

事についてであった。

まさかミレイナが戦争を始めるつもりで襲来しようとは……と。

派手なパフォーマンスとは裏腹にミレイナ・ルイファスの行動にはすべてに意味がある。その脚踏実地を絵に描いた様な彼女の裏を顔を知っている二人は『いくら妹であるロイエルが大事とあってもあの場では矛を納め、ロイエルの免罪を交換条件にこちらに降ってくるだろう』と、そう高をくくっていたわけであったが、その予想はもの見事に裏切られることとなった。

その予想を反した彼女の矛が納められたのはサダオミ・カワシノの存在があったからであり、あの場に？もしも？その偶然がなければ事態は間違いなく？戦争？にまで発展していたと、二人は互いの見解を合わせると共にその僥倖に感謝するのであった。

とはいえ、ミレイナのオルティスに対する心象は最悪である。あの場では預けてくれたものの、彼女の試練はまだ終わってはいない。『後で採点する。用があるので少し待っている』そう言い残し部屋を去っていったミレイナの背中では明らかな怒気を孕んでいた。

怒れるミレイナ・ルイファス。彼女を待つオルティスがそんな心境になるのも無理のないことである。

「まあ命までは獲られないだろう」

「気休め程度に心に留めておきますよ……」

陽気なクレハにそう返答したオルティスの顔色はやはり土気色になっっていた。

エドラルザ エイエ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております）．．．（ゞ

脚踏実地〓 足が地に付いて、着実に進む。危なげがなく、しっかりしているさま。仕事ぶりが堅実で真面目なこと。

エドラルザ エV

部屋に戻ったミレイナは、王から半ば強引に借り受けた別の部屋にオルティスを呼び出した。

客室のあるフロアから一層、上の階にあるその部屋は城の中でも身分の高い者が使用することが多く、その性質から特別に強い防音魔法が常にかけられている。

呼び出されたオルティスが扉を通った先には既にミレイナが待機しており、その脚は如何にも彼女らしく組まれ、机の上に投げ出されていた。彼女はオルティスを一瞥すると軽く目を閉じ宣言する。

「さて 採点を始めよう」

「はい……」

短くそう返答したオルティスの身体は見るからに強張っており小刻みに震えている。だがその顔には相変わらず爽やかな笑みを湛えていた。

そんなオルティスの様子などお構いなしに彼女は話を続ける。

「まずは評価できる点だが

」

そう言うとな彼女は予めオルティスが裏で描いていた計略をすべて指摘した上で、それらがカルケイオスにもたらした利益を挙げていく。

それはキカ・サミアス以来の特異体質であるオーネ・ネルビル
のカルケイオスへの参入から始まり、オーネを？研究？することに
よって彼女自身が得た新たな知識であり、オーネの？能力？がロイ
エルに向けられ生じた結果であると言いつつ。

オーネの悪意の矛先については、この後に指摘されるであろうマ
イナス要素として覚悟していたオルティスは、それを評価できる点
として挙げられたことに些か疑問を覚えたが、彼女の話途中で切
る様な無謀なことをする気にもなれず、今はただ聞き手に回った。

曰く、オーネの行動によって、保身のために個々の役割を全うに
果たせないカルケイオス民を洗い出せたのだと。更にはその際にロ
イエルに味方した者とロイエルとの間に真の友情が芽生えたのだ、
と彼女は柄にもなく一人の姉としての姿を覗かせた。

「しかし

」

声のトーンを落として彼女がそう続ける。僅かに緩んだ彼女の雰
囲気に一瞬、安堵したオルティスであったが次の瞬間には再び背筋
の凍る思いをすることとなった。

彼女は言う。愛しの妹を標的としたオルティスの策略は誠に遺憾
であり、それは如何なる利益をもってしても償える罪ではないと。

座る彼女と直立不動でその言葉を聞き続けるオルティスの二人の姿は、差し詰め裁判官と被告の様相を呈していた。

緊迫した雰囲気は時の流れを遅く体感させ、静寂を湛える様に自身の心音がBGMとして聞こえ始めていた。オルティスはそれを聞きながら、そつと拳を握り落ち着きを取り戻す。

そして彼女の審判はいよいよ下される。

「よつて君のことは死刑にしようと思うわけだが

」

「それは困ります。僕はこれから勇者として、このラナクロアの未来を救わなければならないのですから」

彼女の判決に対してオルティスは即座にそう宣言する。その言葉からは判決に対する不満の念は一切感じられず、そのことは『目的が果たされたその暁には好きなようにしてもらって構わない』と付け加えられたその言葉が証明していた。

オルティスは彼女をすつと見据えたまま綺麗に一礼する。願わくば今この時は見逃して欲しいと。それをミレイナは『君の台詞はいちいち綺麗すぎて信用ならない』と一度は一刀両断したものの、その言葉と自らが放つ圧倒的な殺気に中てられる中でも、変わらぬオルティスの懸命な姿に興が乗り、僅かに態度を軟化させた。

「ふむ　では一つ質問しよう」

「何でしょう?」

その言葉によつやく頭を上げたオルティスは、笑顔を取り払い真

剣な面持ちでそう答える。そんなオルティスを不機嫌そうに眺めながら彼女は一つ鼻を鳴らすと、すくと立ち上がる。

そしておもむろに腕を組み、自身に先刻の謁見の間での凶行を決意させる発端となった？その？事件の真相を問いただした。

「東の？あれ？は君の仕業で間違いないかね」

「え……東の……？」

オルティスからすれば彼女のその質問は想定外の範囲外のことだった。確かに彼女が東へ赴くためにカルケイオスを留守にしたのは把握している。それを期に仕掛けたのだからそれを知っているのは当然のことであつたわけだが。

「とぼけるなっ！？あれ？をやつたのは君だろうと言っている！」

声を荒げるミレイナ・ルイファス。オルティスはそれを両手の平を見せて落ち着くように促すと、彼女のその認識が間違いであることを告げた。

「それは買いかぶり過ぎですよ。ミレイナさん

僕は東へあなたが向つたことを知り、それに便乗して策を発動したにすぎません」

「……なに？……ならば　いや、まだ早計であるか」

珍しく何かを迷う仕草を見せるミレイナ・ルイファス。そんな彼女の姿に僅かに驚いたものの、オルティスは変わらぬ態度で次の彼女の言葉を待った。

そして次の瞬間、そんなオルティスを一瞬の安堵と絶望が襲うこ

ととなる。

「ふむ　　死刑はやめにしようと思う。しかし君の犯した罪はなかなか許しがたい」

だから罪を償ってもらおうと彼女は宣言する。オルティスはそれを甘んじて受けると言い、そして

「ならば腕の十本でも頂くとするか」

「……え？」

ドンッ

直後に室内に破碎音が鳴り響く。

「う……あ……」

激痛に視線を這わせたオルティスは思わず呻き声を上げた。視線を這わせた先、激痛の起点であるその箇所を見れば、そこに在ったはずの利き腕は既に破壊され肘から先が無くなっている。

「さて　　あと九本だな」

悪びれもせず高らかにそう言い放った彼女の無機質な表情に、オルティスはまるで自分が実験動物にでもなったかの様な錯覚を覚える。しかしこの？これ？は彼女を自陣に引き入れるために必要な儀式なのだと自身に言い聞かせ、僅かに芽生えた不快感と苦痛と屈辱を噛み殺し、額に脂汗を浮かべながらもにこやかに言い放った。

「あ、あと一本しかないわけですが……」

そんなオルティスに見定める様な視線を投げかけた彼女はやはり、僅か口元を緩め『くく』と嗤うのだった。

オルティスが出ていった後のその部屋にはクレハ・ラナトスとセナキ・タダノの二人の姿があった。オルティスが呼び出されてからというものの、赤い服のその人は落ち着かない様子で部屋の中をうろろと歩き回っている。そんなクレハを興味津々といった様子でセナキは鼻歌を歌いながら眺めている。

「ねえねえクレハ、何をそんなに怖れているの？」

「そお〜見えるかい？セナキっちい」

「うん そつとしか見えない〜」

「はっはっは〜！ならそうなんだろうよお〜」

出会って間もないこの二人の関係はいまだ微妙なものだった。互いに互いのことを信用しきっておらず、しかしながら互いに互いのことを悪く思っていない。この二人が仲間としての絆を深めていくにはまだ幾ばくかの時間を必要としそうであった。

ミレイナと別れた定臣は長い階段を経て、ようやく元居た部屋の
前へと帰還を果たしていた。

「うゝむ……さっきの質問はなんだったんだろう……」

そう呟きながら思い返していたのは先程のミレイナとのやりとり
についてだった。

『少年は

いや、この場合は少女でもよいわけだが

』

そこから続いたミレイナの質問は定臣にとってやはり要領を得な
いものだった。相変わらずに話にくいミレイナに対して、やはり
透哩に近いものを感じつつも定臣は自身が感じるままにその質問に
答えた。

『そうか …… 君がそう思うのなら？それ？に乗ってみるのも悪
くはないな ……』

定臣の？答え？を聞いたミレイナは瞳を閉じ僅かに独白する。そ
してそう言つと、そのまま一方的に別れを告げ、その場に定臣を置
き去りにしたまま去っていくのだった。

啞然としたままにミレイナの背中を見送る定臣。その内心で『な

にこの、ずっと姐さんのターン』などと愚痴をこぼしたのは言ってもない。

「ふう………ただいまあ」

「おかえりなさい」

「あ、生きてた」

「戻られましたか！定臣殿！」

扉を開くとそこには数分前と変わらぬ姿。迎えてくれたその声は上からエレシ、シア、ドナポスの順である。

定臣は入り口から見晴らしの良くなった部屋を一望する。虚ろな瞳で壁の風穴から外を眺めるその姿に、さすがに心配になったエレシは何があつたのかと問いかけた。そんなエレシに定臣は言う。断固としてはっきりと。

「わかんないです！」

と。

ボキリッ

室内に怪我の状態に見合わない軽快な音が鳴り響いた。

どうやら今度、行われる処罰は？骨折による腕の破壊？のようだ。

苦痛に顔を歪ませながらも、オルティスはありえない方角へと曲がっていく自身の左腕を凝視する。

パキリ。パキリ。指と指が丁寧に結ばれていく。オルティスにとって恨めしいのはミレイナ・ルイファスの正確無比な回復魔法だった。

回復魔法は怪我の程度に合わせた魔力を注ぐことによって発動される。そしてその？程度？を如何にうまく読むかが優秀な魔術師としての基準となる。

無論、魔力量が怪我の程度に満たなければ回復は満足に果たされず、逆に魔力過多であれば無駄な浪費となる上に対象に？痒み？？発疹？？発熱？などの副作用を及ぼすこととなる。その際の産物として一種の感覚麻痺が起こるため、優秀な魔術師は怪我の状態があまりに重度な場合は故意に魔力過多な回復を行い対象の痛みを緩和したりもするのだが、処罰として繰り返されているミレイナのこの回復行為にそんな優しい計らいは一切存在しない。

そして世界最強の魔術師である彼女に魔力の読み違いがあるはずもなく、施される完璧な回復魔法により完治したその箇所からは常に？新鮮？な痛みを提供される。

苦悶に顔を歪める中、オルティスは彼女の回復魔法の唯一の利点を発見し安堵していた。

大怪我をした場合、時を経て完治したように見えても必ずどこか

に後遺症が残るものだ。それと同様に回復魔法で回復された怪我も重度なものはやはり後遺症の類が残るのだが、彼女の回復魔法からはその憂いを一切感じることにはなかった。

オルティスは思う。この未来みらいの道を歩む上で後遺症などつまらない足枷あしかぎをされることがなくて良かったと。それは激痛のあまり現在いまを現実逃避させた結果に過ぎない。しかしその寄る辺は今のオルティスにとって唯一の救いとなった。

宣言通りの腕十本。それも毎度、違う形で同じ腕を失い続ける苦痛は並大抵のものではなかった。

純然たる痛みは『この人格破綻者を自分は本当に欲しているのか』と本能に訴えかけてきたりもしたが、親愛なるオーネに負担を強い事実がそれらを捻じ伏せ、オルティスは最後の瞬間まで意識を失うこともなく、その苦行をやり遂げるのだった。

「こ、これで……くっ……僕の仲間になってもらえますね？」

「くくっ……いいだろう」

ミレイナのその言葉に安堵したオルティスはその場に崩れ落ち、意識を手放すのだった。

「あれま、随分と老けちまってるまあ」

部屋に入るなりクレハ・ラナトスがそう呟く。視線の先には意識を失い横たわるオルティスの姿。その顔は血の気が失せ青褪めており、どこかやつれて見えるその姿からはいつもの覇気は一切感じられず、その身を襲った責め苦の激しさが窺い知れた。

「ふんっ」

そんなクレハを一瞥するとミレイナは如何にも不機嫌そうに鼻を一つ鳴らす。その姿にクレハはライアット・サリスを自社に迎え入れる際に我が身を襲った惨劇を思い出していた。

回想

「ってことでさあ、ミレイナちゃん！お願い！あの子うちにくれよ」

それは六年前のことだった。サキュリアス設立から一年が経過し、神が羨む程の商才を遺憾なく発揮した俺様はサキュリアスを軌道に乗せまくることに成功していた。

そんな折、増え続ける業務に人材が追いつかなくなりちよつとだけ頭を悩ませていたのよお。

特に足りないのは？魔術師？だった。俺様が考案する？陣形？を

敷くには？魔術師？の存在は必須だった。しかし当時のラナクロアで？魔術師？を個人雇用するのは難しく、その最たる才能の持ち主達は九割がカルケイオスに握られており、残りの一割は王国に採られてしまっていた。

ポーターに傭兵として雇われる魔術師達にサキュリアス出身者はおらず、独自に腕を磨いてきた者達ばかりだった。まあ中には王国引退後に？外？に流れてきて水が合ったのかそのまま傭兵魔術師になっちまった変わり種の元カルケイオス民の爺さんもいたにはいたんだが……

その爺さんの魔術を見た時に俺様は『これだ』と思ったね。カルケイオス民の魔術は文字通り、一つ次元が違った。早速その爺さんにサキュリアスで魔術を指導してくれと持ち掛けてみたんだが……

まあなんせこれが頑固な爺さんでねえ……

遂に諦めた俺様は、それならば大元まで出向いてもっとすごい奴を見つけてやるってことで躍起になった。

まず手を焼いたのがサキュリアスへ？入国？することだった。あえて？入国？と言わせてもらうぜえ、なんせエドラルザ王よりも遙かに偉そうなのが君臨してる独自国家だからなあそこは。

色々な？根回し？の末によやく交渉の席を設けてもらえるところまで漕ぎ着けた頃には、この一年での収益は大方吹っ飛んでったわけだが……まあ先行投資ってえことでそこは素直に諦めた。

『ふんっ、いいだろう。クレハ君、君はなかなかに見るところがある。』

その言葉と共にようやく取り付けた約束の内容は『カルケイオスより一名、個人雇用することを許可する』といったもの。早速、魔術の精度を見てから誰を貰い受けるか決めたいと言った俺様をミレイナちゃんは訓練場へと案内してくれた。

そう 案内してくれたのはミレイナちゃんだったわけだが

……

『ライアット！何故、君が今ここにいる！』

訓練場にはライアットの姿があった。ミレイナちゃんからすれば自分のとっておきであるライアットがここにいるとは思ってなかったらしく、本来なら俺様にその存在を知らせることなく、適当な子をあてがって追い払うつもりだったみたいだが……

その魔術に一目惚れした。

その子の魔術はすべてにおいて桁が違った。

そしてそれを見た俺様は

「決定！あの子に決定！あの子くれよおミレイナちゃん」

「駄目だ」

「え〜！頼むよお！」

「ライアットは駄目だ！あの子は私の後継ぎにするのだ」

世紀の大天才、ミレイナ・ルイファスの後継ぎだぞ？そんなの聞かされて諦められるかってえ話よお

「ほお……ほお、ほお、天下のミレイナ・ルイファスがまさか自分の言った言葉を違えるなんてえなあ！

そんなことあ言わないよなあ〜？」

「ぐっ……貴様あ！」

「っつてことでさあ〜、ミレイナちゃん！お願い！あの子うちにくれよ〜」

わなわなと震える彼女のその姿に俺様は内心で『勝った』と思っただね。後でライアットに指摘されたんだがその時の俺様は有り得ない程のどや顔になっていたらしい。そしてそんな俺様をこの人が見逃すはずもなく

ブチッ

「アッー！なんてことすんのよおおおお！」

「ええい！やかましいわ！なんなのだその顔は！」

怒声と共に彼女の右手に握られていたのは俺様の美しい？元もみあげ？。俺様はこの時、三日は寝込む覚悟を決めたね。

泣きそつな俺様を置き去りにして彼女はライアットと会話を交わっていた。

「ライアット・サリス。今日をもってカルケイオスを追放とする」

「え……？　意味がよくわからないのですが」

「その片もみあげに付き従い、カルケイオスの威光を世に知らしめてくるのだ」

片もみあげとか随分なことを言われた気もするが、自分の発言に責任を持つ彼女に俺様は好感を覚えた。まあいきなり？追放？とか言われてるライアットには同情したけどなあ

そして

「あなたは……誰なのですか？」

それがライアットが俺様に初めて話しかけてきた言葉だった。あの時の怪訝な顔を思い出すと今でもにんまりと含み笑いしちまう。なんせあの鉄面皮がもの見事に崩れてたんだからなあ

そして

ブチッ

「え？　……ええええええええええ！？　なにすんのよお

おおお！」

「ふんっ、バランスというものはなかなか大切だろう」

「ちぎらないでよ！　もおおおお！」

「やかましいわ！　そのもみあげを見ているとイライラするのだ

「!さっさと出て行け!」

その後、サキュリアスは俺のもみあげが生えそろうまで休業することとなる。そのことが世間には『カルケイオス民を一般雇用するという偉業を裏で支えた努力』として勘違いされたまま過大評価されていったわけだが、目立つことが大好きな俺様はそれを甘んじて受け入れた。

「いや、ほんと …… 今でも夢に見るのよ …… あの時のこと ……」

回想終了

「で? うちの若はお眼鏡に適ったのかい? ミレイナちゃん」

「…………… 保留だな」

ミレイナのその言葉を聞いたクレハは瞳を閉じ、穏やかな笑みを浮かべる。

「そおかい …… なら、これから先は? 仲間? として行動を共にしてくれるんだなあ?」

クレハのその言葉にミレイナは相変わらずに不機嫌な様子を隠さず答えた。

「行動は共にしよう。しかし」

「な〜か〜ま〜!」

「……………ふんっ、王の戯れに付き合っつてこの私に道化を演じると言うのか」

「チツチツチツ! 違うだろお〜? ミレイナちゃん」

「君はそういつ考え方だったな」

「そお! 俺達は輝かしい未来のために民を救う勇者ご一行になるのさあ!」

自信満々でそう宣言するクレハ。その姿を軽く一瞥するとミレイナは瞳を閉じ、僅かに口元を緩めた。

「まあ …… それもまた一興 …… か」

「あれま、今日はやけに素直じゃね〜の?」

「なに、ここにきて面白い芽が出てきた。

?あれ?はどつやら君寄りみたいなのだよ」

「くっくっくっ、いいねえ!いいよお!」

ミレイナの副声音が示す人物はサダオミ・カワシノその人である。それを即座に理解したクレハはミレイナの伝えたい事柄を把握し、陽気な様子でそれを受諾するのだった。

この時、この場でのミレイナ・ルイファスの決断こそが後のラナクロアの運命を大きく変えることになるのだが、会話を交わした本人達すらも知り得ないその事を知る者は、僅かに二名しか存在していなかった。

「で？ 本当に東の？あれ？にサキュリアスは関与していないのかね」

副音声での会話を終えたミレイナはもう一つの懸念をクレハに投げかけた。それを聞いたクレハは得心がいった様子で一つ大きく頷くと、右手の親指をぴつと立て、白い歯を煌かせながら言い放つ。

「もちろん何のことだかわからないぜえ！」

その言葉を聞いたミレイナが『やはり早計であったか』とぼつりと呟くのをクレハは見逃さなかった。

時刻は日が沈み、夕闇が世界を侵食し始める頃。連絡事項があるとして再び謁見の間に呼び出された候補者一行を出迎える形で、国王の前には片膝を地に跪き、なかなか面白い顔つきで首を傾げ続ける先客が約二名存在していた。

「げっ！ サダオミきてるし！ え？ お姉さま？ え？ え？」

国王を無視するのはこの姉妹の血の成せる技なのか。隣で青褪めるルブランなどお構い無しに思いつきり定臣達の方を振り返り、そんなことを口にしてるのはもちろんこの人。ロイエル・サーバトミンである。

さて
相変わらずなロイエのことはまず、置いておく
としよ。う。

恐らくは姐さんの仕業なのだろうが、うちの勇者候補様はどうやら寝ているだけで第二の課題を通過しちまったらしい。

第二の課題。つまりはカルケイオス民を同行者に加えるというもののらしいのだが……

「ロイエル・サーバトミン！ 今日をもってカルケイオスを追放とするー！」

高らかに相変わらずに国王を置き去りにして、腕組をした姐さんがそう宣言する。口をあめぐりと開いたままそれを茫然と見送るロイエなどお構い無しに、姐さんことミレイナ・ルイファスはその続きを口にした。

「そこにいるチャ…… サダオミ・カワシノと行動を共にし、そちらのPTに助力することを命ずる」

チヤ …… もはや何も言うまい。いつの間にやら俺やロイエが無罪放免になっていることには大いにつつこんだりしたかったわけだが、それもどうせ姐さんの仕業だろう。

まあそんなわけで、寝ているだけであっさりとカルケイオス民の同行者を獲得したうちのボサヘッド様は第二の課題を無事に通過なさったわけだ。

その後、自然な流れで第三の課題が発表されることとなったわけだが ……

いやあ、なんとというかものすごいヤラせでした。

『では第三の課題を発表する。これを最後の課題とし、合格者は？勇者？の資格を得るものとする』

ざわめく場内。もちろんついていけない俺。更には放心状態なロイエ。

そんなすべてを姐さんばりに置き去りにしたエドラルザ国王は続きを口にする。

『第三の課題は指名手配犯の確保、及び連行とする。』

尚、第一合格者には恩賞として同行者に騎士団長、ドナポス・ニ―ゼルフを加えることを許す』

もれなく付いてくる！ には少々、大物すぎはしないだろうか。そんなことを思いながらも視線をドナポスさんに振ってみる。すると

「エレシ殿〜！ 応援しておりますぞ〜！ 是非！ 一緒に旅をしたいですぞ〜！」

なにやら両手を天に突き上げながらドナポスさんが応援を始めました。そういえばエレシにゾッコンでしたね ……

しかしながらドナポスさんの淡い期待は、次の瞬間にはものの見事に裏切られることとなった。

「すみません、ドナポスさん。第三の課題、僕達が既に合格しちゃいました」

爽やかな笑顔でそう言い放つたのは先刻、うっかりと足蹴にした『がっかり美男子』さんだった。

そしてその人の拍手を合図に背後の大扉が開かれ、縄で縛られた人相の悪い男が数人の傭兵と思しき男達に連れられ、謁見の間へと入場する。

それを親衛隊の者が『A級犯罪者で間違いないです』などと確認し、がっかりなその人はその場で？勇者？へとジョブチェンジを果たした。どうでもいいがそこっ！ ドナポスさんあからさまに嫌そうな顔しないっ！

半ば呆れながらも、俺は『がっかり美男子』の背後に控えるその人のしたり顔を見逃さなかった。そこにいたのはクレハ・ラナトス。この一連の流れが所謂、大組織の長であるそいつの仕業だったことは容易に想像出来た。っていうかその顔っ！ あゝ！ むかつくっ！

まあそんなわけで謁見の間での出来事は一応の終局を迎え、開放された俺達は元いた部屋へと戻ったわけだが ……

「いやあ、巡り合わせって不思議なもんだね。ルブルブ」

「ルブルブはやめなさい！　　なんだって私が貴様と……　　ぶつぶつ」

奥でテーブルを挟んで優雅に紅茶と嗜むエレシとシア。もちろんエレシの膝にはポレフの姿。それに姐さんが開けた風穴付近には、体育座りでなにやら真っ白になっているロイエの姿があるこの部屋で、現在俺と話しているのは？セキオスの間の化け物？ことルブラン・メルクロワその人だったりする。

第三の課題の期限は無期限。国王から借り受けたこの部屋では、今日から明日にかけて一泊することを許されている。そしてそんな部屋に何故かいるルブルブは先程から愚痴を零してばかりなわけだが……

『ルブラン・メルクロワ。カルケイオスでの任、大儀であつた』

その後言い放たれた国王の言葉は『ポレフPTに同行し、助力しろ』というもの。恐らくは片方のPTにだけ王国騎士を派遣するのはフェアじゃない的な意味なのだろうかと思いつつも、妙に目を泳がせながらそう言った国王に違和感を覚えたりもしたのだが……

まあ、ルブルブ強いし。いてくれれば助かること間違いなし！

そんなわけで、またしても眠れる主人公様の知らぬところでPTメンバーが増えたわけだ。

ポレフ、これ起きたらびっくりするだろうなあ……　　まあ寝てる方が悪いか。

そして俺は嫌がるルブルブと強引に握手を交わし、部屋の片隅で一層ちんちくりんに磨きをかけているロイエの元へと向った。

「まあロイエ、命あつて良かったじゃん！ な？」

カルケイオス民であることを誇りに思っていた彼女にとって、長である姐さんからの追放勧告は思いのほか堪えたらしく、謁見の間で？それ？を言い渡されて以来、彼女は遠い彼方へと旅立ったままだっったりする。

「カルケイオスでキ力でサダオミがお姉さまと追放なのよ！？」

「うん、意味わかんないからね？ 落ち着こうね？」

ここで1つ考えてみよう。温室でぬくぬくと育てられた者が突然その温室を取り上げられればどうなるのか。

「死ぬの？ 僕死ぬのね？ サダオミがキ力でお姉さまと追放なのよ！？」

答：…こうなる。

よつです ……

『その者あおき衣を纏いて困惑の野原に降り立つ』

その姿に定臣は思わずそんなフレーズが思い浮かべたりもしたが、なにやら危険な気がしてそれを音声として発することはなかった。

ポレフの武器 I

翌日。

？ラナクロア初の勇者誕生する？

この一報は瞬く間にラナクロア中を駆け巡った。

その知らせに民達は様々な反応を見せる。なんとか取り入って同行者に加えてもらおうとする者。？勇者？に乗じて早くも商売を始める者。一目見ようと？勇者？の今後の動向を探る者。

それぞれがそれぞれの思惑を抱きつつも、ラナクロアの民達は――様に？勇者？の誕生を喜んでいた。

そもそも今ではすっかりと民の関心事となった？勇者？という存在ではあったものの、公募開始当初は？勇者？などという単語はあまり浸透しておらず、仮に資格を得ようと民達にとっては？少しばかり腕が立つ傭兵？程度の認識であった。

そんな中、あれ程までに応募が殺到したのは実のところ、またしてもというかなんというか裏で糸を引く存在があったからに他ならないのである。

まず恐るべきは？勇者支援？と称してサキュリアス提供にて贈与される仕度金の額だった。

ドリームジャンボ真つ青なその大金を手にできるのは先着一名。それはラナクロア初の勇者へと贈与される。

サキュリアス各支社に点在する？魔示板？でそう発表されたことよって一気に民の間に？勇者？という単語は浸透し、そしてその選抜試験への関心は高まっていた。

期は熟した。

民の関心が大いに高まりを見せたその時を見計らい、エドラルザ王国より次の発表が成される。

その？それ？こそがエドラルザが？勇者？に寄せる期待を民へと知らしめる決定打となった。

まず民を驚かせたのは？勇者PTにおける魔法制限の解除？である。それはすなわち、もろもろの大人の事情により、なにかと制限の多い便利魔法を自由自在に行使用することを許すというもの。

死刑に縛られた法律によって、それらを嚴重に制限されている民にとつて？それ？はとつてもない優遇措置であり、それと共になかなか魅力的なものであった。

それに加え、とどめとばかりに発表された王国からの支援内容に、またしても民は驚愕することとなるのだが、それはまた別のお話である。

？勇者になれば富と名声を得ることができる？

そうして煽りに煽られた関心は否応にも注目を集めた。そんな中、サキュリアス各支店で最初の課題が中継されることよって、その活躍をまざまざと民に見せ付け、いよいよ歴史の表舞台へと躍り出

てきたのがオルティス・クライシスその人である。

ただでさえ注目の的であつた彼が無事に？勇者？となり、その脇を固めるメンバーは誰もが？伝説？を持つ者ばかり。計らずとも、なんともわかり易い形でオルティスは勇者の勇者たる型を民に見せ付けることに成功したのである。尤も、計らずとも謀つたわけではあるが。

公式に？勇者？となつたオルティスとその一行は早速、国王の計らいにより祝典とお披露目の意味も兼ねて城下町をパレードを引き連れ闊歩する。

元々、派手好きが集うオルティス一行である。サキュリアスが演出を全面的に後押ししたことも重なり、パレードは王国史上稀にみる賑わいを博し好評の内に幕を閉じることとなつた。

勇者、オルティスの険の無い爽やかなその笑顔はたちまちに黄色い声援の的となり、その勇者然とした立ち振る舞いにラナクロアの民達は誰しもが未来に希望を抱いた

一方その頃。

候補者でありながらいまだに合格する目処すら立たず、王城を追い出される形で外に出されたポレフPTの面々は各々に会話を交わしながら隣町である服の町『ルツセブルフ』目指していた。

ちなみにこの目的地であるが、旅の仕度を整えるにも城下町はパレードで混むことが予想されるとエレシが言い、それに加えてすぐにもシイラに向いたいと定臣が訴え、それならばとりあえずはエドラルザとシイラの間にあるルツセブルフに向おうとポレフが決断

したことによって定められた経緯である。

ルツセブルフはあのクレハ・ラナトスの故郷であり、サキュリアス本社があるのもそこであるなどと豆知識を与えられながら定臣はポレフ達と共に西へと歩みを進める。

ルツセブルフは既に城壁に囲まれており、エドラルザからは城壁の内側を移動する旅になるため魔獣の襲撃は一切無く、その旅路は一行にとって改めて城壁の偉大さを知る良い機会となった。

時刻が昼に差し掛かる頃、エレシの提案で一行は小休止をとることとなった。

丁度良い木陰を見つけ、各々が適当に座っていく。PTのそんな様子をにこにこ眺めながらエレシは一人一人にビー玉大の球体を手渡していった。

レイフキツザにてエレシが大量に買い込んでいた料理はとても好評で、昨晚にも振舞われたこともあり、その中身を知る皆は嬉々としてそれを受け取っていくのだった。

和気藹々と食事をとるポレフ一行。エレシに振舞われた？謎の食事？に舌鼓を打ちつつも、定臣はシイラで待たせているマリダリフに思いを馳せ、謝罪を込めたその第一声を思案していた。

いやあ……正直、待たせ過ぎた。

マリダリフと別れてから既に六日が過ぎ去っている。流れ者の傭兵である彼が一箇所に留まり続け、今も自分を待ってくれているという保障は無いにしろ、とりあえずは待ち合わせ場所に顔を見せるのが筋というものである。

怒ってるだろうなあ……

とりあえず『ごめん！待った？』あたりでいいか……

いや、これだと恋人だろ！

マリダリフには何気に結婚を申し込まれていたりする。言動には気を配るべきだろう。なんだって？ら？とか？せ？とか？つ？とか名前に付く奴が前例にいるわけだしな……

にしても

もぐもぐもぐ

うんまいなあ！これ！

今、俺が手にしているのはエレシさん提供の謎料理第二弾。気になるその見た目は、なにやら青い鳥肉っぽいのに赤い星模様の斑点が散りばめられた、なんともアレな感じな料理である。

しかし相変わらずにその見た目を裏切ってうまいうまい。にしてもエレシの選ぶ料理はなんだってこう見た目が……

カルケイオスやエドラルザで振舞われた料理を思い出してみる。

名前のわからない食材がいくつか入ってはいたものの、その見た目はどれも嫌悪感を抱く程ではなく、地球のものと比べてもさして違和感を覚える程のものではなかった。

まあ……いいか！うまいし！

『とってもおいしいわ！ありがとう！エレシ！』

ふと、ロイエの声が耳に飛び込んできた。

声に視線を送ると、そこにはピヨコタンと跳ねながらエレシに喜びを伝えているロイエの姿。その背後には木に背を預け、腕を組んで遠巻きにそんな二人の様子を伺っているルブルブの姿も見える。

やれやれロイエよ。昨日の落ち込みぶりはどこへいった？

その姿に思わずそう問いかけたくなつたのも無理のない話である。なんせ昨日のロイエはひどかった。姐さんの宣告により、真っ白に燃え尽きたと言わんばかりに魂を手放した豆暴走特急様は話しかけても反応はないわ、手を引いて移動させようとすればそのまま軟体動物のごとく、だらりと崩れ落ちるわ、拳句の果てに辿りついた部屋では隅っこでシクシクとその有り余ってないサイズをさらに縮めて収納スペースに貢献し続けるわと、見るも無残な姿で落ち込み続けていたのである。

『お茶、いかがですか？』

それを一発で立ち直らせたのがエレシのこの一言だった。いや、むしろエレシだった。

紅茶っぽいその飲み物のいい匂いに絆されたのか、僅かばかりに帰還したロイエは虚ろな瞳をエレシに送った。そして直後にぴよこたんと跳ね上がったのである。

『エレシ・レイヴァルヴァン!?!』

謁見の間からずっと一緒だったろうにと、ささやかに頭の中でつつこみつつも俺はそれを傍観した。

はしゃぐロイエが口走った内容を整理してみると、マイスターとして名を馳せているエレシはその風貌も相まって、このラナクロアにおいてアイドル的な位置にいるらしく、若い女性の憧れの的なのだという。

なるほど。街中でいきなり憧れのアイドルが目の前に現れればはしゃぐ気もわからんでもない。

しかしなロイエよ。エレシはずっとお前の隣を歩いていたらぞ?むしる俺の反対側、お前の左手を引っ張ってこの部屋まで連れて来てくれたのはエレシだったんだ。それを今更……

にしてもやかましかった。『あらあら』などと微笑んでいるエレシに対して、そこからはずっとロイエのターンってやつだった。そして俺は騒ぎ続けるロイエに呆れてルブルブとでも交流を深めようかと試みたわけなんだが……

『あ、ああああれは!その!やはりエレシ・レイヴァルヴァンで間違いないか!?!』

振り返った先ではルブルブがこんな具合になっていた。

「そうだけどさ、ルブルブ。謁見の間からずっと一緒にいただろ？」

「ま、間違っていたら恥かしいじゃないか！」

やだなにこの子、可愛い。

もちろんその後、おちよくって遊びましたとさ。

まあそんな具合でロイエは立ち直り、ルブルブと若干仲良くなったりしつつ夜は更けていったわけだが……

なんとというか女、三つで姦しい（かましいい）とはよく言ったものである。エレシブランドについてキヤピキヤピと語り合う三人にはまったくもってついていく事が出来なかった。

いやあ……やっぱり女の子ってブランド物に弱いんだなあ

定臣がエレシとロイエルを眺めつつ、ぼんやりと昨晚のことを思い出しているその頃、珍しくエレシから少し離れた場所に陣取ったポレフは一人、首を傾げながら食事をとっていた。

朝、起きると定臣がいた。ロイエルがいた。ルブランがいた。

というか第二の課題が既に終了していた。しかも知らない間に通過してた。

幼い頃から周囲の時間に自分が置き去りにされているような感覚はあった。

？氷の日？と？火の日？の間に？土の日？なる曜日が存在しているのを知ったのはいつの頃だっただろうか。

週に一度。丸一日中、眠り続ける日が存在している。そんな嘘のような本当の話を当たり前のように信じたのは？風の日？に眠り続ける姉ちゃんの姿を見てきたからだった。

どうやら？うち？の家系は親父の代からそうらしいのだ。中でも俺は特にひどいらしく、頑張れば？風の日？でも起きていられる姉ちゃんに比べ、何があっても起きることがないらしい。

だから？火の日？の朝には姉ちゃんに前日あったことを教えてもらう習慣がいつしかついていた。

逆に？雷の日？の朝には俺が姉ちゃんに前日あったことを教える。そうやって二人で今まで暮らしてきたんだけれど。

『なに？元氣ない』

なんとなく一人で考え事をしていた俺にシアが声をかけてきた。どうやら俺は元氣がないように見えたらしい。

「いや、別にそんなことないよ?」

「嘘」

「いや……うん、なんか知らない間に話が進んじやったなあって」

「嘘をついてたポレフ・レイヴァルヴァンは死ねばいい」

「ちょ! シア、いきなり死ねとかひどいよ?」

「また呼び捨て。慣れ慣れしい」

「シアさん?」

「余所余所しい」

「シア様?」

「そんなに偉くない」

「シアちゃん?」

「殺す」

「シアぽん?」

「二回殺す」

「じゃ〜なんて呼べばいいんだよ!」

「……やっぱりシアでいい」

そう呟いたシアの顔は相変わらずに無表情で感情が読み取りにくく、その表情からはどうにも冷たい印象を与えられる。しかしこのシアという子は、こちらが勝手に抱くそういつた印象をことごとく打ち砕いてくれるのだ。

「そっか、じゃシアで！」

「呼び捨てにするな馬鹿」

ほら、このように。

……って泣いていいですかね？

この二日間……実質的には三日間になるんだが俺はどうもこのシアという人間が掴みきれていなかった。何故か俺についてくると言い、かといって好意的というわけでもなく、しかしながら避けられているというわけでもない。

そして何よりも

「聞いてるか？話を聞いてないポレフ・レイヴァルヴァンは死ねばいいと思う」

俺に対してだけなんでこんなに毒舌なんだあああああ！！

姉ちゃんに対しては猫撫で声で『お姉様』と朗らかな笑顔で言い、じゃあ他のメンバーにはどうなんだと言えば、ロイエには歳も

近いこともあってか既に仲良しの友達のように接し、ルブランに対しては丁寧な敬語を使い、定臣に対してなんかまるで仲の良い姉妹のようにしか見えない程に心を許している。

「納得いかね〜！」

「なにが？」

「シアって俺のこと嫌いなのか？」

「そんなことない」

「俺にだけなんか毒舌だし」

「被害妄想うざっ」

「ちょ！それだよ！そ・れ！」

「唾飛ばすなキモイ」

「泣いていいですかね!？」

「……ん、元気でたみたいだし。そろそろ行く」

「えっ？」

シアはどつやら俺を気にかけてくれていたらしい。そう言われるまでそれに気がつかなかった俺は、少し恥かしくなり慌ててシアにお礼を言った。

「ありがとな！シア！」

シアはそんな俺に振り返り、飛び切りの笑顔を披露し、そして

「キモイ、死ね」

ぼそりとそう呟いた。

「……にやろっ」

なんとというか笑顔が可愛かっただけに落差で余計にダメージが……

あまりのシヨックに思わず地面に両手をついてしばらくうな垂れてみる。すると今度はルブランが俺の所へやって来た。

「少年、どうかしたか？」

「俺は子供じゃね〜って……」

力無くそう返答するとゆっくりと立ち上がる。相変わらず無礼にそう返答してはみたものの、鎧の映えるルブランの騎士然としたその立ち振る舞いに自然と緊張感を与えられ、思わず背筋を伸ばす。

そんなポレフに名乗りを交わして以来、ずっと見定めるような視線を送り続けていたルブランは、相変わらずに甲冑の下の瞳を鋭く煌かせていた。

「少年。一つ質問をする。速やかに答えなさい」

「お、おう！」

基本口調が命令形なルブランに対し、些か苦手意識を覚えつつもポレフは懸命に取り繕う。そんなポレフなどお構い無しにルブランは出会って以来、自身が抱いていた疑問を投げかけた。

『どうして？君？がこのP.Tのリーダーなのだ？』

それは至極当然の疑問だった。

しかしルブランのその問いが余程に意外なことだったのか質問をぶつけられた当人、つまるところの勇者候補、ポレフ・レイヴァルヴァンはその表情を驚愕の色に染め彼女を見上げながら茫然と立ち尽くしていた。

一体どうしたというのだ……

私の目にはこのポレフ・レイヴァルヴァンという少年は？どこにでもいる普通の少年？にしか見えない。

聞くところによると最初の課題では？勇者オルティス？に圧倒され、打ち倒されたものの？たまたま？起き上がったというだけで通過したのだという。次の課題に至ってはミレイナ・ルイファスの力添え無しには合格など有り得なかったし、肝心の張本人は課題が提示されて通過するまですつと眠り続けていたというではないか。

それだけでも納得がいかないというのに……

勇者候補、ポレフ・レイヴァルヴァンの脇を固めるメンバーに順に視線を送る。最初に目に飛び込んできたのはエレシの姿だった。

エレシ・レイヴァルヴァン。

このPTでまず筆頭に挙げるべきはポレフの姉である彼女だろう。マイスターとしても高名な彼女は当然、魔術の腕も優れている。そしてその知名度はマイスターとしてのものだけに留まらず幅広い分野での支持を集め、既にラナクロア中の人に知れ渡っており、皆から愛されていると言っても過言ではない。

そんな彼女が勇者候補として名乗りを挙げるのならばまだ納得がいくのだが……

そのエレシが頑としてポレフ少年を勇者として推している。当初は姉の七光りのせいで皆が渋々、この少年をリーダーとして認めているのかとも思ったのだがどうやらそれも違うようだ。

次にルブランが視線を送ったのはサダオミ・カワシノその人だった。

ルブランが視界に捉えた定臣は丁度、ロイエルとシアの頭をとびきりの笑顔でわしゃわしゃと撫で回しているところだった。

やれやれ……なんなのだあいつは……

サダオミ・カワシノ。

あの緩い雰囲気はどうにも慣れない。あいつは自分とは対極にいる人間なのだと理解するほかにないようだ……しかし

ルブランは自身が定臣に敗れ去った時のことを思い出していた。

その流れるような剣技は緩やかで、それでいて力強くもあり、まるで舞っているかのような印象を受けたことは記憶に新しい。なによりも自分が敗れ去ったその瞬間に理解が追いつかなかったのは奴が初めてである。もっとも、自分を破った人間など定臣のほかには？二ー様？以外、存在しないわけではないがあるが。

それ程までに強い奴の口からも、この少年がこのPTのリーダーであると聞かされたのだ。自分のその疑問が膨らむのも当然のことである。

そして次にルブランは定臣の脇に控える二人の少女へと視線を送る。

シア・ナイ。

どこか不思議な雰囲気を纏っているその少女は、自分とロイエが同行することが決まるより僅かに早くこのPTに合流したのだという。

ルブランがシアに抱いた第一印象はやはり？普通の少女？というものだった。しかしその印象はここまでの旅路で思い直させられることとなった。

ルブランは王国を出立してからここに辿りつくまでの間、エレシ

の溺愛を掻い潜り、ポレフの脛を力強く蹴り続けていたシアの姿を思い出していた。

あのエレシ・レイヴァルヴァンに感付かれることなく、ポレフ少年に危害を加えるなど至難の業である。 あの少女、侮りがたし。

それがルブランがシアに抱いている現在の印象である。もっとも、自分に対しては実に礼儀正しく、朗らかな笑顔で話しかけてくるため、実のところシアに対しては好感をもっているわけではあるが。

そのシアはポレフ少年が最初の課題を通過した際に、その姿に？ 確信めいた閃き？を覚え、同行を決意したのだという。

この少年に一体なにがあるというのか。戦闘時になれば豹変するとしてもいうのだろうか。

そう思考を巡らせながらポレフの全体像を再び軽く見渡してはみたものの、自分が見たところではやはりどこにでもいる？普通の少年？にしか見えないのである。

ならば自分と同じ立場に置かれ、同じ疑問を浮かべているであろうロイエはこのポレフ少年のことをどう思っているのか。それを問いただすにはその小さな友人はあまりに楽観的で、そして浅はかだった。

「貴様はその少年をどう思う？思うままに答えなさい」

私がロイエにそう尋ねたのは数分前のことだった。それに対する彼女の答えは実に彼女らしく、ありのままの彼女でいてそして彼女

だった。

『え？このPTのリーダーなんでしょ？いいんじゃない？サダオミがそう言ってたし。それよりも僕の方が背高いよね？ポレフより。……え？……有り得ないわ！僕の方が高いわ！』

まったく、それで本当にいいと思っているのだから性質が悪い。背のことはともかく、あの何事も気にしない性格には毎度、毎度悩まされる。

しかしながら、ロイエはなしにしても他の全員がこの少年のことをリーダーと認めているのは間違いない。

やはりこの少年にはなにかあるというのか。

自分が山賊時代、リーダーとは最も強い者が務めるものだった。そして私は望まずして常にリーダーとして君臨していた。……もっとも呼称は？親分？ではあったのだが。

それを打ち砕き、力だけがすべてではないと私を諭してくれたのが他ならぬ？ニー様？だった。

その時のあの方の姿に私は自分に足りない？何か？を確かに感じた。だからこそ憎んでいた王国に自ら身を投じたのだ。

自分の上に立つ者ならばその証を示さねばならない。だからこそ私はこの少年に

さて、そろそろ答えを聞けるだろうか。眼下のポレフ少年は、先程の私の質問からばかんと口を開けたままこちらを見上げてきているわけだが……

「……俺、リーダーだったの!？」

「……………え？」

それはルブランにとって予期せぬ返答だった。

仮にも？勇者？として名乗りを挙げる程の者なのだ。年端のいかぬ子供とはいえその辺りの自覚はあるに違いない。それが彼女が大前提としてリーダーたる者へ求める最低限の？資質？だった。

しかしその大前提はもの見事に覆されたのである。それもこれでもかと言わんばかりのアホ顔をもってして……故にルブランは困惑した。

国王の命令で同行するとはいえ、肝心の勇者候補には勇者候補然としていてもらわねば格好がつかないというものである。

それだというのにこの少年は今、なんと言った？

ルブランはポレフのあまりの自覚の無さに軽い頭痛を覚えながらも、懸命に思考を巡らせる。そしてしばらく額に手を当てると一つの答えに辿りついた。

「も、もう一度言ってくれないか」

そう、ルブランがこの時、導きだした答えとは『聞き間違いだったらいいのにな!』という見るからに有り得ない希望的観測の元、限りなく現実逃避を試みるというものだった。

しかしその淡い期待は次の瞬間に、灼熱の海に放り込まれた一粒の氷のごとく消え去ることとなった。

「……俺、リーダーだったの!？」

このポレフの同じテンポによる同じ台詞によって。

「……………」

真っ白になって固まるルブラン。対するはアホ顔でそれを見上げるポレフ。なんとも言い難い難い空気が場を支配していた。そんな中、ルブランは脳細胞をフルに活性化させ、ここに至るまでのことを思い出していた。(ここから長いルブランのターンです)

え〜…………… 自覚がないって……………

いや、まずは落ち着こう私。相手は見るからに少年じゃないか少年じゃないか。あれ?なんで今、私は二回同じことを考えた?ああそうだ。今考えていることが所謂?大事なこと?だからなのか。そうか、そうなのか。そもそも?大事なこと?などというものは人によって異なるものではないか。では私にとって?大事なこと?とは一体なんなのか。

?それは二ー様よルブラン?

なんだ今の声は!?!……………はっ!?!明らかに私の声色だったじゃないか!駄目だ。落ち着け私。自演乙とか誰かが言った気がするが恐らくは気のせいだろう。そう、そもそも私は声に出してなどいない。思考の中で自分の声が聞こえてくるのはどうなのかと小一時間程、脳内の自分に問いただしたい気分ではあるが今はそれよりも?大事

なこと？があるのではないか。え〜となんだっけ、私はなにを考え
ていたのだ……そう少年だ。ポレフ少年のことだった。そうだな、
まずは冷静にポレフ少年のことを自己分析しようではないか。そう
だそうしよう。

1、なんかアホっぽい。

2、よく寝る。

3、ボサボサな頭。

4、チビ。でもロイエの方がチビ。

5、見るからに弱そう。でも姉は強そう。

6、やっぱりアホみたい。

つてろくな奴じゃないではないか！なんなのだこの少年は！大丈
夫か？大丈夫であるはずがない！……ああ陛下、どうして私にこの
ような任務をお与えになられたのか……待て、悲観している場合で
はない。ようやくカルケイオスでの任を終え、？ニー様？の顔を
拝見出来るようになったのではないか。ならばこの任務は喜ぶべき
ではないか。そうだ？ニー様？も謁見の間を出てからお声をかけて
下さったではないか。そう、確か

『無事に戻ったか！ルブラン！がははは！いや〜突然、カルケイオ
スへの左遷が決まった時は内心でハラハラしたのだぞ！うむ！お前
ならばやり遂げてくれると信じておった！』

気にかけて下さっていたのだな、あの方は……

ん？……………？左遷？……………？

おかしいと思っていたのだ！なにか扱いがひどいと思っていたのだ！アレは？左遷？だったのか！……………はあ、はあ、はあ……………って話が逸れているではないか。今はさせ……………ぐっ……………うう……………？左遷？など気にしている場合ではない！……………うう……………いいもん。？ニー様？は心配してくれたもん……………ってちが……………う！そう！ポレフ少年だ。この少年のことを考えなければ！そうだ、私はこの少年に一体どうして欲しいのだ？どう在って欲しいのだ？ふむ、この際この少年が？勇者候補？であることは一旦忘れようではないか。いや、駄目だ。それを忘れてはそもそも私がこの少年と行動をする意味がないではないか。理由はどうあれこの少年は今の私にとって主……………になるのか？って誰に聞いているのだ私は！いや、違う！こんな少年が私の主であるなど断じて認めん！だいたい弱そうではないか！……………む？強さ以外の？何か？を求めて私は騎士になったのではなかったのか。ならば強さなど関係ないのではないか……………いや、それはやはり違う。？ニー様？ですらその？何か？を私に伝える前提として一度は力をもつてしてこの私を打ち倒したのだ。それはサダオミにも同じく言えること。ならばやはり私は私が認めるだけの力を示さぬ者には従いたくないということか。ならば

「戦争だ！」

「どうしてそうなったの！？ねえ、どうしてそうなったの！？？」

眼下のポレフ少年が悲痛な叫び声を上げている。どうやら言葉が少し足りなかったらしい。

「だから戦争だ！」

「意味わかんないからね！？ついていけてないからね！？」

「何故わからん！私は貴様に納得していない！」

「それを最初から言ってくれてれば理解できてたよ？」

「む……ならば最初からそう言いなさい」

私がそう言うとポレフ少年は一瞬、何かを諦めたような表情を浮かべた。そして軽く溜息をつくとすぐに持ち直し、今度は何かを悟ったような表情になった。

「ルブラン……いや、ルブランさん」

「貴様が？さん？付けとは落ち着かない。今まで通り呼び捨てにしなさい」

「ん、んじゃルブラン。……俺に納得していないっていうのは勇者候補としてってことだよな？」

そう問いただしてきたポレフ少年は先程までのアホ顔もどこへやら、真剣な眼差しで私をじっと見据えていた。私もその眼差しに応えるようにして甲冑を脱ぎ、居住まいを正した。そして

「すまないがその通りだ」

短くそう言い放つ。先制の意味合いを兼ねた私のその言葉には明らかかな敵意が込もっていたように思う。年端もいかぬ少年が大の大人、それも騎士である私の敵意に中てられれば恐縮しそうなもので

はあったのだが。

「俺も自分に納得してない……」

短く、そして悔しそうに返答したポレフ少年のその言葉には、音量は小さかったものの確かな意思が籠められていた。だからこそ私はこの少年の言葉の続きに興味が湧いた。

「ではどうする？」

先を促す。するとポレフ少年は拳をぎゅっと握り、力強く私に宣言してきた。

『俺！頑張るよ！ルブラン！それで皆にも自分にも認めてもらう！』

こういう所……なのかもな。

「ふっ……素直で謙虚なところは認めよう。

せいぜい努力しなさい。私は簡単には認めない」

今の時点でまだこの少年に評価は下さない。もちろん認めてはいない。しかしながらもう少しこの少年の未来ゆくの姿を見てみたい。それが现阶段で私がこの少年に下した判断だった。

そんな私の内心を知ってか知らずかポレフ少年は満面の笑みを浮かべると

「にははは！改めてよろしくな！ルブラン！」

そう言って握手を求めてきた。

「「じついつのはあまり慣れていない」

そう返答しながらも差し出された小さな手をぎゅっと握る。

それが

私がポレフの仲間になった瞬間だった。

ポレフの武器 I I

一時の休憩を終えたポレフ一行は再び歩みを西へと進め服の町『ルツセブルフ』を目指す。道中は相変わらずに魔獣の襲撃も無く、長閑な陽気とPTメンバーの緩い雰囲気も相まって和気藹々と旅する姿は傍目に見ればどこか牧歌的な雰囲気を醸し出していた。

そんな雰囲気を手とするルブラン・メルクロワは口を真一文字に結び、心ばかりの抵抗を見せていたのだが、ルブランのそんな姿ににんまりと笑った定臣が例のごとく悪癖を発動させ、現在では一番騒々しく奇声を上げていたりする。

そんな二人の背後、姉であるエレシに頭を撫でられながらも慣れた様子でその隣を歩いていたポレフ・レイヴァルヴァンは王城を出立して以来、どこか落ち着かない様子でちらちらと右へ左へと視線を這わせていた。

ポレフの視線の先、右手にはシア・ナイの姿。左手にはエレシを挟みロイエル・サーバトミンの姿がある。

ぶっちやけどっちも可愛い！

実のところ絶世の美女であるエレシ・レイヴァルヴァンを姉に持つポレフであったが、幼い頃から姉の靴作りの手伝いをしてきたため、歳の近い女性と接する機会は無であった。

ただでさえ免疫がないというのに、突然訪れた機会にして同行することになった二人の少女は？美少女？と称して間違いない程の容姿を兼ね備えていたのである。年頃の男の子であるポレフが浮き足立つのも仕方のないことだった。

『うわー。引くわー。ちらちらきもいわー』

ぼそりと耳にそんな声が飛び込んでくる。眩きにして心が折れそうな破壊力を孕んだその声の発信源はもちろんシアだった。

「な、なんだよ」

「……」

ゴスッ

無言で脛を蹴られるのは何度目だろうか。正直、毎回痛いフリをするのがそろそろしんどくなってきた。

とりあえず痛みながらもシアに視線を向ける。

「あっち向けヴォケ」

怖かったのですぐに反対を向きました。

「ん？どうしたの？」

必然的に視界に飛び込んできたロイエが話しかけてきた。そういえばロイエの姉ちゃんはあるの？ミレイナ・ルイファス？なんだっけな。

「ロイエの姉ちゃんってさあ、どんな人なの？」

それは何気ない質問だった。そもそも出会って間もない人間相手に話題を振る時など、大抵は天気やら景気やら互いの共通点やらの話題を選ぶと相場は決まっている。

そしてロイエと俺の共通点はお互いに姉ちゃんが有名ってことだったんだが……

ロイエの表情が明らかに強張っている。よく見れば僅かにカタカタと震えているようにも見えた。

「どんな人……どんな人……」

しばらく黙り込んだかと思うとぶつぶつとそんなことを呟き始める。そのあまりに真剣な表情はまるで人生最後の決断を迫られているかのような様相を呈していた。

「い、いや、無理に答えなくていいよ？ロイエ」

「待って！今、大事なところなんだから！……ぶつぶつ……ぶつぶつ」

なにやら怒られた。しかしこの真剣な様子……姉ちゃんが怖いの

はロイエも同じみたいだな。

「あゝ……うん、ロイエわかったからもういいよ」

「ええい！黙らんかつ！今、私が考えておるのだ！」

「ええええええ！？なにその声色！？なにその声色！？」

「……え？……あゝごめんごめん。ちょっと姉さまになってた」

「そ、そうなんだ」

「この子もちよつと変わってる……のか？」

「それでさっきの答えなんだけど」

「うん」

「お姉さまはお姉さまなのよ。どんな人って言われてもミレイナ・ルイファスがお姉さまであつて、お姉さまがミレイナ・ルイファス。僕にとってそれがすべてだわ」

嬉しそうにそう言い放つたロイエの表情はとてにこやかで……
その……

「可愛い」

「へ？」

「あ……あああ！なんでもない！なんでもない！

確かにそうだよな！俺にとっても姉ちゃんは姉ちゃんだ！」

「うん！そうね！僕はお姉さまのことが大好きだわ！もちろん尊敬しているし！」

「俺も俺も！」

『気が合いそうね よろしくね』そんな言葉を期待するのはいけないことでしたか……

いや、恐らくは何もなければそんな言葉をロイエは言ってくれたはずなんだ。

そう

？何もなければ？

現在、俺の目線の高さは普通の三割り増し。眼下にはロイエとシアの姿。二人ともなんとも言えない微妙な顔つきで俺を見上げてきている。

そして

『ポレフ！私もあなたのことが大好きですよ』

間近には姉ちゃんの顔。先程の発言から一秒未満の速度でももの見事に抱き上げられた俺は、例のごとく熱い抱擁を見舞われていた。

「は、離して姉ちゃん……」

「あらあら 別に照れなくても良いのですよ」

「ちが……」

慌てて眼下の二人に視線を送る。するとロイエは相変わらず困ったような顔つきで、シアは既にいつもの無表情に戻っていた。しかし無表情にも関わらずシアの視線が妙に痛い。恐らくは呪いのなにかを視線に込めているに違いない。

目が合ったシアの口元がぱくぱくと動いている。何かを俺に伝えたいらしいと察した俺はその口の動きから音声を読み取っていく。

？し？　？ね？

「ちよ！」

相変わらずに敵しかった。

「ポ、ポレフの好きってそっちの好きだったんだあ……」

追い討ちのようにロイエがそう呟いたのを俺は見逃さなかった。そしてそれを『もちろんそうです』などとにこやかに肯定した姉ちゃんを更に俺は見逃さなかった。

「もう……やだあああああ！！！」

こうして俺は、僅かに仲良くなれたと思っていたシアとロイエの二人からもの見事に嫌われましたとさ。

「って嫌わないでよ!?!」

「な、なにが？べ、別に嫌ってないよ？……ちょっと。若干。僅かに。とても引いたくらいだわ」

「結局、引いてるんですよね！？」

「あ、あはは、大丈夫だわ」

「私は引いた。もうドン引き。(ぼそっ)」

「うわああああん！」

「あらあら ポレフ、随分と打ち解けることが出来たようですね
二人共、うちの弟と仲良くしてあげて下さいね」

先程の二人の喧きは姉ちゃんの耳には何故か届いていなかったらしく、相変わらずに朗らかな笑顔で姉ちゃんは二人にそう言った。

それにロイエは

「うん、エレシ！わかったわ！」

と満面の笑みで答え。

シアは

「はい お姉様 とても嬉しいです」

などとのたまいやがった。

お前、誰だよ！などというつつこみはこの際、置いておく。

「仲良くなれて嬉しいわ ポ・レ・フ」

「いやお前誰だよ!!」

心の底からつつこんだ。

そんな感じで他愛もないやりとりを交わしつつも、俺達はひたすら西へと進んでいった。そしてその日の夕方頃、先頭を歩いていた定臣が突然、驚いたような声を上げた。

「ないわー！ー！アレはないわー！ー！」

「うゝむ……噂には聞いていたのだが……」

それにルブランが困ったように続く。

「どうしたの？二人とも……げっ！」

不思議に思ったロイエが定臣の隣まで歩いていき、二人の視線の先を確認するとそんな声を上げた。さすがに気になったので俺も二人の視線の先を確認する。するとそこには

「あはは！あははははは！ー！」

思わず爆笑してしまった。

もはやラナクロアの常識の一つにして、ルツセブルフの観光名所として名高いその建造物は各々の心を様々な形で驚掴みにし、良い意味でも悪い意味でも記憶の片隅に鮮明に居座るといふ。

その建造物の名は？クレハ・ザ・ビューティー？

そう、クレハ・ラナトスの巨大な像である。

派手好きな彼が故郷に錦を飾る意味合いも込めて、ド派手に建造したその像には当然のことながら様々な逸話が存在するのだが、中でも夕暮れと共に発動する魔法効果によるライトアップは見る者を圧巻させるとして、なかなか悪評高いものだった。

その瞬間をもの見事に目の当たりにした定臣とルブランの反応が先程のものである。

しかしながら？不気味？として悪評高いそのライトアップも、夜の闇を照らし出す灯台的な役割を立派に果たしているため、建造当初から評判は決してよくはないものの撤去には至らず、現在ではルツセブルフの顔の一つとして世界に名を馳せている始末だった。

？クレハが見えたらルツセブルフが近い？

それはラナクロアを旅するものの常識の一つであり、実際に目の当たりにした者は生涯それを忘れることがないと口々にそう言う。

いつもは事前に必要な事柄を定臣に伝えるエレシが、悪戯心から定臣の反応見たさにそのことを黙っていたことは背後でクスクスと笑う、エレシの姿を見れば疑いようがないことだった。

「なに？なんでエレシ笑ってんの？」

ルツセブルフに到着する寸前、定臣がまぬけにそんなことを呟いたとか呟いてないとか。

不気味なクレハの巨像がにこやかに出迎えてくれればそこは服の町『ルツセブルフ』。

かつては落ち着きを払ったお洒落な景観を売りにしていたその町は昼の顔はそのままに、夜になると実に色鮮やかな魔法によるライトアップが施され、もう一つの顔を覗かせるようになっていた。

ルツセブルフの夜の顔を見事に仕立てあげたのは、もちろんあの
人？クレハ・ラナトス？である。

古き良きものは良きままに、そしてそれに固執せずに良いものは何でも取り入れていく彼の姿勢は保守派の多かったルツセブルフの住人達をすぐに感化し、この町の発展に大いに貢献していった。

『なにも服の町だからってえゝ服以外が駄目ってわけじゃないだろ
うよ〜？』

彼のその言葉をスローガンに、そして彼のサキュリアスを軸に新たに展開されたその事業は、サキュリアスが大量に抱え込む傭兵やそれを目指す若者達のニーズに見事にマッチし、すぐに軌道に乗り

成功を収めていた。

「なんかここ、旅行パンフで見たベガスみたいだなあ」

町に入るなり、そう呟いたのは定臣だった。

そう　クレハ・ラナトスが故郷の繁栄のために新たに立ち上げた事業とは若者をターゲットにしたカジノである。そしてクレハ・ザ・ビューティーの点灯を合図に毎夜、開店されるそのカジノを軸に展開された様々なサービス店はものの見事に顧客のニーズに対応しており、若者のハートを今も尚、鷲掴みにして離さない。

「カジノとカリアルに初めて見たよ」

そう呟くと定臣は景観を楽しむべく、ルッセブルフの町並みに視線を這わせていく。

ピンクを基調にした魔法効果によるイルミネーションは蛍光灯と大差がないように感じられ、人工ながらに見る者にささやかな感動を与えてくれる。そしてその景観を後押しするかのようどこからともなくトランペットのような音色が響きBGMの役割を買って出ている。

「なんかここ、首都より栄えてない？」

思わずそう言い放った定臣の視線の先には酒樽を囲み、軽快なダンスを踊る若者達の姿があった。その奥に見える大通りには、色鮮やかな装飾が施されたメヘ車がゆつくりと光の粒子を撒きながら進んでいるのが見える。そしてそれをうつとりとした表情で手を取り合っただけで眺めているカップルの姿が複数、見受けられた。

「ふふ、この町をこうしたのはクレハ様ですよ」

相変わらずに朗らかに定臣が理解しやすいように、そつと説明を付け加えたのはやはりエレシだった。

「ああ〜……ばいね……見るからにばい」

エレシの説明に？この派手さは奴の仕業で間違いない？と定臣は妙に得心がいった様子で大きく頷く、その隣では何故かポレフも腕を組みそれを真似て頷いていた。

「ポレフはここ、来たことあんの？」

「ないぜ！俺はレイフキツザから出たことなかったからなっ！」

「僕もないわ！」

「私もここは初めて来たと思いなさい」

「……私も」

ポレフに質問した定臣にエレシ以外の女性陣が三者三様に答える。ここまでの旅路で定臣はリーダーであるポレフ以上にPTメンバーと打ち解けることに成功していた。

無自覚に人と打ち解けていく定臣のそんな姿を間近で見てきたポレフは素直に尊敬し、少しでも自分もそうなれるようにと定臣の一挙一動をじつと観察する。定臣の仕草を真似てみせたのはそんなポレフが無自覚に出した一つの結論だった。

そしてそんなポレフの姿をエレシはただ優しく見つめている。それがここまでの旅路で自然と形成されたこのPTの在り方だった。

『うっそ！エレシじゃんあれ！』

その一声にほのぼのとした一行の雰囲気は突如として乱されることとなった。

大声で驚嘆の声を上げた一人の若者を中心にぞろぞろと、同じような格好をした若者達が集まり始める。そして瞬く間に定臣達を円陣を組むようにして若者達を取り囲んでいった。

『うっそ！モノホンじゃ〜ん！』

『まじかよ！う〜わ、超美人じゃん』

『お持ち帰りけつて〜い！』

『へいへいあざ〜す！』

若干、一名呂律がおかしいのが混ざっていた気もするが、酔っ払いにありがちな安易すぎる展開が一行に襲いかかったのである。そしてそんな展開に最も過敏に、そして過剰に反応してしまうのはやはりこの人

チャキ

「殺るか」

「待った！待った！ルブルブ！」

背中に携えた大戦斧の柄を力強く握り締めたルブランを力強く定臣が制止する。

「兄ちゃん達さ〜、お酒は綺麗に飲もうよ！」

そんな定臣を尻目に今度はポレフが若者達の前に歩み出た。しかしながら歳に見合わないその勇敢な姿も、酒の入った血の気の多い輩相手では悪い意味で刺激的なだけである。

『んだよガキ！ガキはお家でおねんねの時間だろうがよっ！』

案の定、勢いづいた一人の若者がポレフの胸ぐらを掴み、そう口走る。

「エレシストップ！！」

若者がポレフの胸ぐらを掴んだのと、定臣がそう叫んだのはほぼ同時のことだった。

定臣の視線の先には小刻みに震えるエレシの姿。そしてエレシが放つは周囲の空気を凍てつかせる冷気。その身体に纏うは灼熱の怒気。そして久しく炸裂したのは？につこり絶対零度？の瞳だった。

ポレフの胸ぐらを掴んだ哀れなその若者は『びっ！？』などと擬音を発した直後に硬直し、自身の中の時を停止してしまった。

「定臣様、何故止めるのですか？」

「いやいやいや、止めないと相手死んでたから！」

「……………それがなにか？」

「いえ！なにもありません！」

怒ったエレシに対して定臣はあまりに無力だった。

しかしながらこのまま放置すると、なにやら大変なことになりそうだと定臣は状況を打破すべく周囲に視線を這わせる。

まず目に飛び込んできたのは無表情に周囲の若者をぼんやりと眺めているシアの姿だった。よく見ればその口元はなにやらぶつぶつと言葉を紡いでいる。

「……………い……………ね」

聞き耳をたててみる。

「うざい死ねうざい死ねうざい死ねうざい死ねうざい死ねうざい死ねうざい死ね」

怖かった。

そして次に視界に飛び込んできたのは、おろおろと右へ左へ歩きまわるロイエの姿だった。その姿を見た定臣は何かを思いついたように、ぼんと手の平を打つ。

そして爽やかな笑顔を作ると

「ロイエその人達、悪酔いしてるみたいだから……？回復？してあげて」

軽やかにそう言い放った。

「うん！わかったわ！」

そう言つとロイエルが手をかざす。それを若者達が首を傾げながら見下ろす。

そして次の瞬間

チュドーン！

この日の夜、ルツセブルフの町はいつも以上に光輝くこととなった。

言つまでもなく、最も残酷だったのは天使、川篠定臣。その人である。

世間の見方つてのは時にこっちの事情などお構いなしに理不尽だ

ったりする。

例えば車が歩行者を跳ねた時、歩行者側にどれだけ非があるうが大抵は車側が悪いことになる。それは歩行者側が自殺志願者だったとして、車側が明らかにそのため利用されていたとしても決して変わることはない不文律だ。

いつの時代。いつの場所においても強者は悪者にされやすく、そしてその強者を裁くのは更なる強者だ。

まあ、なんだ……なにがいたいのかと言うと

ダンッ！

『まったく！！街中でいきなり魔術をぶっぱなすったあどついうことぞいでい！』

現在、俺達は交番的な場所に連れ込まれ、これまた町のお巡りさんのなおっさんになかなかに絞られていたりする。要するに酔っ払いにからまれたあの場において強者であり、車的立ち位置だったのが俺達。そして弱者であり歩行的立ち位置だったのがロイエの魔術によって戦々恐々と逃げ出していったあの酔っ払い達だったってわけだ。

ダンッ！

ってうっさいなあ。さつきから何回、机叩いてんだよこのおっさん。唾飛ばすし。

『いいか！俺あ別に降りかかる火の粉を払うなって言ってるわけじゃないんだ！やね〜んだ！』

そりゃ……おめえ、天下のエレシ・レイヴァルヴァンがいりゃく
若えのも浮き足立つつてもんだろぅがよっ！』

そう言うとおっさんはエレシの方にへらつと情けない笑顔を向
けると軽く会釈する。そんなおっさんを俺を含めた他のメンバーは
なんとも言えない微妙な顔つきで黙って見守っている。

ちなみにおっさんがこの顔つきになっている時に何か喋るうもの
ならば、吐き出される唾、三割増で怒鳴られることは先程から部屋
の隅っこでいじいじと小さくなっているロイエが証明済みだ。

そんなわけでおっさんの怒りのボルテージが上がりきる寸前にエ
レシの存在が緩衝材的な役割を果たすために、この説教はなかなか
に山場を迎えず、なんとも言えないぐだぐだな拘束状態が延々と続
いていた。

『だがいけねえ……』

きた。これで五回目の『だがいけねえ……』の件だ。くたじ

要するにおっさんが言いたいの？あれ？は正当防衛じゃなく過
剰防衛だったと。そして公共物を破損したのはまずかったと。そう
いう事らしいのだが……

いつも通りの笑顔で弁償する旨を伝えたエレシに対しておっさん
が言った言葉は『金払えばいいってもんじゃね〜！』的な内容。更
にそこから語られたのは『最近の若いもんは』で始まる人情道。恐
らく、求められているのは誠意ある反省なのだろうけども。

『うむ……まあその……天下のエレシ・レイヴァルヴァンが変装も

無しってのは……ねえ?」

威厳溢れる態度で語られた人情道も、おっさんのこのエレシに対するデレっぷりを見ると台無しというものである。そんなわけで真摯な態度でおっさんの苦言を聞き入れようとする者はこの場には存在せず……

『その金髪!お前の態度が一番気にいらねえ!』

「俺!?!」

『おめえだ!おめえ!綺麗な顔立ちで?俺?とか言ってるじゃねえぞったく!』

「ついでに因縁つけられたよ!?!」

『おめ!因縁っておめ!怒られてるって自覚あんのかおめ!』

「エレシにデレながら怒られても困る!」

『おめ!……そりゃおめ……しよゝがねえだろうっよ』

しよゝがないらしい。

「うゝむ」

一体、このおっさんは何がしたいのか。出来る事ならば今すぐに解放して欲しいものなのだが……

そんなことを思いつつ顎に手を当て、他のメンバーに視線を送っ

てみる。

見れば勇者候補にしてPTのリーダー、ポレフ・レイヴァルヴァンは先程からロイエの肩に手を置いて慰めているし、その姉であるエレシは困り顔でおっさんの話に合わせて頷いている。困りながらも笑顔を決やさない辺りはさすがといえるだろう。

そして化け物の二つ名で呼ばれていた純情ルブルブはというと？こちら側に非は無い？として拘束されて以来、おっさんを無視し続け、壁を背に腕を組んで佇んでいる。言うまでもなくルブルブのこの態度の悪さがおっさんの怒りに拍車をかけていたりする。

そこで気が付いた。

あれ？そういえばシアは……？

と。

シア・ナイ。

とりあえず可愛いので色々とあるつつこみ所を放置してきたこの子だが、ここまでの旅路である程度の人柄は把握した。

綺麗な銀髪はエレシよりも若干、青みがかかり、雪のような白い肌に宝石を彷彿とさせる大きな翠の瞳。そしてその綺麗な見た目とは裏腹に無機質な表情からは、まるで彼女が人形であるかのような錯覚を覚える。

だが実際は違う。大きく違う。

初めてポレフを蹴っ飛ばすその姿を目撃した時は、我が目を疑うと共に思わず？見なかったこと？にしたりもしたのだが、それからモエレシの目を掻い潜りひたすらポレフの脛を蹴り続けるその姿に俺のシアに対する印象は大きく変えられることとなった。

そう、このシア・ナイは人によって態度を？選ぶ？強かさを持ち合わせた小悪魔だったのだ。

そしてそのシア・ナイはというと

俺の正面。つまるところのおっさんの真後ろに控えていた。しかながらただ控えているだけではない。何故か蹲るように屈んだ彼女のその手には指鉄砲の構え。そしてその口はニヤリと釣りあがり、珍しく感情を訴え出していた。

そして次の瞬間

『まさむねっ！！』

何故か日本の名刀の名を綺麗な声色で紡ぐと、ぴよこたんと跳ね上がりおっさんの尻に指鉄砲をざっくりと突き刺した。

啞然とする周囲。

青褪めるおっさん。

「…………え〜と？」

俺がようやくそう声を出せたのは、おっさんが『ぬらばっ！？』などと奇声を発しながら気絶し、地べたに横たわった姿をじっくり

観賞し終えて数秒経ってからのことだった。

「ってシア！おっさんにいきなりカンチヨ」『違う。正宗。』

そうか。正宗か。そうかわかった。

それにしてもエレシのおろおろっぷりが見ていてなかなかにおもしろい。ルブルブは親指をびつと立てて『よくやったと思いなさい』などと喜んでいりし、ポレフに関しては『正宗怖いよ正宗』などとぶつぶつ言いながら指差して震えてるし、ロイエはロイエで落ち込んだまま事態の急変ぶりに気がついていなかったりする。

そんな皆の様子を眺めながら俺は思ったね。シアは只者ではないなと。

ポレフの武器 I I I

突如、国家権力を襲った鋭利な一太刀。成す術も無いままにヨイセル（43）は地に伏せる。

急転した事態に啞然とする一同を一瞥するとシア・ナイは無機質に嗤い、そして誇らしげに自身の凶器に軽く息を吹きかけるのだった。

で。

そんな前フリなどお構いなしに現在、俺達はポレフのための武器を購入しようと、エレシに連れられ、武器屋が建ち並ぶ区画まで来ていたりする。

サキユリアスを基点に発展したルツセブルフには、時間帯に関係無く働く傭兵をターゲットにしている店が多いため、すっかり日が沈みきった今の時間帯でも昼と変わらず営業している店舗が多々、見受けられた。

「にしても助かったなあ」

ラナクロアの武器や防具はルツセブルフより遙か北西に位置する『ピセオス』という街の特産品であり、既に城壁の内部の特産品であるそれらには？回復魔法？による耐久回復が許されている。

戦闘を終える度に？回復魔法？を使用することによって新品同然の状態を維持することが可能であるため、使用者のニーズは自然な流れで武器は耐久性を度外視し、その威力だけを追求したものにへと傾き、防具には値段を無視した材質への拘りを発揮する者が多く現れ、それによつて中途半端な物は自然淘汰されていった。

傭兵にとつて武器や防具は生活必需品の一つである。消耗品であるそれらを消耗する必要がなくなればどういった現象が起こるのか。

『ピセオス』が城壁に囲まれてからの数年。武器や防具は民の間で？一生物？としてすっかりと根付き、それによりその価格は想像を絶する高騰ぶりを見せたのである。それと共に戦闘を生業とする者にとつて武器や防具選びは重大な一つの儀式的なものへと昇華されていった。

目当ての武器屋へと辿り着くまでの間、定臣はそれらの情報をまとしてもエレシから与えられていた。自身の頭の中で情報をじつくりと咀嚼し、わかりやすい形に置き換えて理解していく。

そうしてようやく情報を整理し終えたその時、先程の事態の收拾へ至つた経緯へと思いを馳せたのである。

シア・ナイが放つた？まさむね？の威力は凄まじく、地べたに横たわる？お巡さんのなおつさん？の姿を見下ろした時には、晴れて

免罪されたエドラルザから次の街にして、またしても犯罪者に身を墮としたのかと覚悟した程であった。

こちら側に完全なる非がある時、瞬間的に言い訳や逃げ口を探そうとするのは人間の性さがなのだろう。自身が天使であることを自覚しながらも、まだまだ人間くさい定臣の思考も当然、そちら側へと傾いた。

騎士であるルブランはどうかできないものか。言われるがままに指示に従ってここまで連行された辺り、もしかしたら騎士と？お巡さんの？なこのおっさんとの役割は日本でいうところの自衛隊と警察の役割なのかもしれないと中りを付ける。

ならば素直に謝罪するしかないのだろうか。そもそも誠意ある謝罪を求められてここへ連行されて来たのである。そこで放たれたまさかのかn……？まさむね？である。これはさすがに言い訳のしようが無いと定臣は頭を抱え、髪の毛をわしゃわしゃとかき回した。

そこに

『失礼します。』

救いの女神は現れた。

薄い緑髪が特徴的なその人の名はライアット・サリス。言わずと知れたサキュリアス副社長である。

颯爽と現れた彼女は凜としており、その顔は相変わらずに無表情でシアとはまた違った意味で機械的な印象を受ける。

ライアットは室内に入るや否や、さらりと前髪を横へ流す。そし

て強調された左目で定臣を捕らえると僅かに表情を綻ばせた。

『クレハ様から連絡を受けてはいたのですが、やはり自分の目で確認すると安心できるものですね』

そう言つとライアットは定臣の方へと歩み寄る。

『ご無事で何よりです。 サダオミ様』

そんなライアットの言葉を聞いて定臣はようやく、自身がマノフ戦の折に知らずに皆を心配させていたのだと気付かされた。

「あ……連絡遅れてすいません！色々ばたばたしてて……」

定臣は素直に謝罪の意を述べつつも、不死であることに慣れ始め、細かな配慮が疎かになりつつあると自らを戒める。そんな定臣にライアットは詳細は聞き及んでいると告げ、次にマリダリフの安否を確認すると、ようやく地べたに横たわるこの部屋の主であるその人へと視線を落とした。

「どうしてヨイセルさんが横たわっているのかは理解しかねますが……」

「ほんとすいません!!」

「いえ、大方の予想はつきまますので」

あれは予想できないだろう。内心でそんなことを思いつつも定臣はライアットの次の言葉へと耳を傾けた。

絶賛気絶中のおっさんことヨイセル・バリアス（43）は元々、異常なまでにエレシの大ファンであり、ルツセブルフの街の所々に飾られているエレシの壁紙が他の宣伝で上書きされようものならば率先してデモ行進を行う程なのだという。

ファン倶楽部みたいなものか……会長みたいなものか……

そう、自身の中でわかりやすい形に置き換えた定臣は引き続きライアットの言葉に耳を傾けた。

「まあ天罰が下ったのだと理解して頂きます。」

最後にその言葉でライアットが説明を締めると思わず一同から溜息が漏れた。

結局のところヨイセルは少しでも長くエレシを引き止めたいがために、強引な理由付けで不当に長い拘束を強要していただけなのである。まったくもって傍迷惑な話だった。

「後の処理はこちらにお任せ下さい。」

疲れた様子の一団を気遣うようにライアットがそう申し出てくれる。当然のように満場一致でライアットの言葉に甘えることにした一同は、そのまま部屋を出ると当初の目的であった？旅の準備？をすることになったのである。余談ではあるが部屋を出る時に事後処理を円滑に進めるためにと、ライアットに差し出された色紙にエレシがサインを施すという一幕があったとか。

最終目標が魔王の討伐である以上、必須となってくるのはまずは武器である。そうして自然な流れでまずはリーダーであるポレフの武器をどうにかするべきだろうということになったわけだが……

必要なのはポレフだけだろうか。というかポレフはエレシを装備しているから武器とか必要ないんじゃないだろうか。

そんなことを考えつつ、他のメンバーの装備を確認してみる。

まず、一番目を引くのはルブラン・メルクロワ。通称ルブルブだった。

背負われた大戦斧はむき出しで、うっかりとすれ違う通行人を傷つけはしないかと不安になる程だし、全身を包む王国騎士鎧は金色で縁取られ、なかなか威厳を醸し出している。そして他の騎士とは一風違った甲冑の形には如何にも彼女らしい拘りがあった。

「どうしてルブルブの甲冑って他の騎士の人みたいなフルフェイスタイプじゃないんだ？」

なんとなしにそう尋ねた俺にルブルブははっとすると

「そ、その……え〜と……二ー様に……顔を……覚えてもらおうとだな……」

もじもじと赤くなりながらそんなことを言ったものだから、思わず背伸びして頭を撫で回したのは言うまでもない。

そして次に目を引くのはロイエル・サーバトミン。通称ちび……とか言う怒るのでロイエである。

カルケイオスの学生服である藍色のローブは所々に金糸で刺繍が施されており、なかなか高級感を漂わせている。そもそもカルケイオス民（今は追放されていることになっているけども）である彼女が外を出歩くこと自体が滅多に無いために、一目で彼女がカルケイオス民だと周囲に知らせるその服は身に纏っているだけでかなり目立っていた。

それに加えて特徴的な燃えるような赤髪は彼女がミレイナ・ルイファスの関係者であることを周囲に知らしめていた。

『お、おい……あれって……』

『カルケイオスの赤髪っていやぁ……ミレイナ・ルイファス!?!』

『いや?でもなんか小さいぞ?』

ここまでの旅路でそんな声が耳に飛び込んできたのは一度や二度のことではなかった。その度に凹むロイエを慰めるのはなかなか骨が折れたけども。

そして基本的に周囲を行きかう人々と変わらない服装をしているにも関わらず、異常な目立ちっぷりを発揮しているのがエレシ・レイヴァルヴァン。シア・ナイ。この兩名である。

なんせ目立つ。可愛いから。

お互いに色質は違えど綺麗な銀髪を携えた二人である。仲睦まじ

く微笑み合いながら会話する様は、遠目に見れば姉妹のようにも見えなくもない。

ただでさえ人目を引く容姿を兼ね備えているというのに、エレシに関しては既に超が付く有名人であるし、シアに関しても？あの？クレハ・ラナトスが数年ぶりに服を仕立て、それをプレゼントされたら、既にど派手に広告されているものだから、その注目の浴びせられぶりはなかなか容赦が無いものだった。

ちなみに俺の目には周囲の人と大差が無いように見えるシアの服装は、見る者が見れば斬新なアクセントが散りばめられた至高の一品なのだとか。

そして格好は平凡。武器は無し。おまけに華が無い我らのリーダー、ポレフ・レイヴァルヴァンである。喋らなければつつかり影になりそうなポレフではあるが、エレシが異常なまでに溺愛するため本人は望まずともなかなか周囲の視線を集め、ある意味では目立ってはいる。

そんなわけでまともなのは俺だけか。そんなことをぼんやりと思っていた俺の耳に信じられない一言が飛び込んできた。

「サダオミってさ、目立つよね」

「なん……だと？」

ロイエが言うには俺の得物である大太刀『轟劉生』はラナクロアには無い形状の武器らしく、身長に見合わないその武器は背負っているだけでかなり目立つのだとか。

それに加え容姿端麗。おまけにサキュリアスに大々的に宣伝されたせいで今や？時の人？なのだとか……

って待て！サキュリアスに大々的に宣伝ってなんだそれ！？

「あんのもみあげ！次に会ったら？まさむね？だ！」

ロイエから詳細を聞いた俺の第一声はそれだった。

いつの間にもやら撮影されていた写真的ななにかを魔示板なるものに掲載し、おまけに傭兵ランクなるものを駆使し、知らない間に有名人にされていた。

俺の与り知らないところで何してくれちゃってるんだよあのもみあげは……ったく。

話は逸れたが各自の装備はだいたいそんな感じだった。

あれ？……武器持ってるのって俺とルブルブだけ？

「なあ、武器持ってるのってさ」

「定臣様とルブラン様は物理的な武器。私やロイエちゃんは魔装具ですね」

すかさずエレシが説明を入れてくれる。本当に心読めるんじゃないのかこの人。

「それからシアちゃんは……」

そんなエレシの表情が一瞬、曇る。エレシの視線を追いかけるとその先には指鉄砲を構えたシアの姿があった。

「私にはこれがある。」

「まじか」

「まじ」

らしい。

ちなみに魔装具にはアクセサリーの類を用い、魔力を増強するものが多いのだとか。

要するにラナクロアの魔術師は見た目には武器を持たないのだそう。漫画やアニメに出てくるような、杖を手に魔法を詠唱とかそういう類のものを期待していただけにその事実にはがっかりだった。

「んじゃ、そうになると丸腰はポレフだけかぁ。シアは置いていて」

「ですね シアちゃんは置いていて」

「待つ。私にはこれがある」

「でもさ、ポレフはエレシ装備してるから武器とかいらないんじゃない？シアは置いていて」

「まあ まあまあまあ 定臣様 なんて素敵なことを仰るのでしょう シアちゃんは置いていて」

「ちょ！定臣！余計なこと言つなよ！俺も武器欲しいんだよ！……あ、シアは置いていて」

「ポレフは死ねばいいと思う（ぼそっ）」

「こわっ！！」

「ポレフ？どうかしましたか？」

「い、いや、なんでもないよ姉ちゃん」

「ふふ、でもやはり武器はあった方がよいと思いますので……あ、目的の店が見えてきました」

そう言うとエレシはポレフの頭を優しく撫でながら、視線を前方へと向ける。

そこには剣の絵が描かれた看板を掛けた建物が建っていた。

恐らくは魔力が切れかけているのだろう。夜の闇に存在を知らしめる役割を買って出ているその店の魔法灯は時折ちらちらと点滅しており、こちらの到着を『今か今か』と待ち構えているように思えた。

ルッセブルフの一角、傭兵が集う通称？勇者通り？の路地裏にその店は忍ぶようにひっそりと佇んでいる。

店の名は

ルイオアゲイル。

伝説のマーケット『ジョージ・カユラハ』が店主を務めるこの店は、名だたる傭兵達からこよなく愛されていることで有名だった。

ポレフ達が武器屋『ルイオアゲイル』に到着する僅か数分前、ジョージはその日、最後の客を愛想よく見送ると店内をくまなく掃除し、いつものように我が子さながら可愛がっている店の商品達に優しく微笑みかけていた。

「そうかい……今日はお前の友達が貰われていつちまったもんなあ……
なあに、心配無さ。あの傭兵さんならちゃ〜んと大事に扱ってくれる」

店内にはジョージ一人。先程からもっぱら彼の話し相手となっっているのは、綺麗に陳列させられた店の商品達だった。

初老と称して違い無い風貌の彼が夜な夜な店内にて、一人ぶつぶつと喋る様は一見すればなかなか不気味なものである。しかし彼の優しい眼差しを見ればその印象はたちまちに一変する。

？彼を見ていると自分の得物とも対話出来る気がする？

この店を訪れた傭兵達はこぞってそんなことを言う。ジョージ・カユラハとはそんな男だった。

「すまんなあ……お前達。こればかりは止められなくてなあ」

いつもの日課を終えたジョージはそう呟くとカウンターの奥にゆっくりと腰を据える。そして徐に懐からパイプを取り出すとそれをそっと口に啜えた。

シュボ。

魔法効果を付与された？それ？は火種が無くとも煙を揺らめかせる。

実につまそうに口からもくもくと白煙を吐き出しながら、今日もジョージはそれを一日の労いへと変えた。

つと不意に

重ねた年齢が織り成すその穏やかな笑みに陰りが落ちた。

「ふう……」

ジョージは軽く溜息をつくとしばらく独白する。そしてゆっくりと背後へと視線を送った。

そこには綺麗な鞄が額縁に納められた状態で展示されている。しかしその鞄に本来、納まるべき剣はどこにも見当たらない。

「なあに……誰にでも退くべき時は来るんだ。ワシにもその時が来たっただけさ」

ジョージは自嘲的な笑いを浮かべるとそんなことを呟いた。先程までの穏やかで優しい瞳は次第に深い哀しみに支配されていく。

その時

『幕引きは自分の意思で』 うんうん、実にあなたらしいよ』

不意に店内に軽い調子の声が響く。

「おお……おお、おお……これは久しい」

ジョージはその声の主に振り返ることなく嬉しそうな声色でそう答えた。

『うんうん、お久しぶりだね』 ジョージさん』

「ははっ……ジョージはよしてくれ」

声の主は親しげにジョージの背中を見つめると、その視線をそのままジョージの視線の先に合わせる。そして納得したように大きく一つ頷くと、ジョージにゆっくりと歩み寄りながら語りかけた。

『ん〜……そっかあ、ついにあの子のこと手放したんだ？』

声の主のその問いかけにジョージは肩を落とす。そして軽く首を振りながら自身に言い聞かせるようにぽつりと呟いた。

「……託した。……いや、託してしまっただなあ……」

そんなジョージの背中を優しく見つめながら、声の主は得心がいった様子で大きく頷く。

『おやおや〜……まったく、性質の悪いのに託したもんだねえ』

「ほお……誰に託したかわかるかい？」

ジョージの問いに声の主は少し苛立った様子で指先で頬を搔く。

そして肩を軽くすくめながら口早に返答した。

『アタイはね……マイスターにしろ、マーケットにしろ、もちろんポーターにしてもさ。』

一つの道を必死に走り続けている人間はみんな職人だと思ってる。あの男は性質が悪いさね。ほんと性質が悪い。

なにが悪いって職人ってものを骨の髄まで理解しているところさ！金で買えないはずの職人の大事な部分までちや～と価値を認めた上で値踏みするんだ。

そりゃ、周囲の人間から見れば金の使い所のおかしな男なんだからさ。

でも、違う。あいつは全部理解してるんだ。

金で絶対折れない職人の大事な部分を熱意でへし折っていくのさ。そしてへし折った傷には薬のようにして金を宛がっていく。

もちろん本人に悪気なんてありやしない。

あの男にとって金こそが職人に対する最大の敬意の表し方ってのもわかるさ……

だからさ……

だから余計に性質が悪いのさ、現にジョジさんもそうなってる『

「ふむ……」

『あの男に誇りを託した人間はこぞつてもぬけの殻にされちまうのさ。決して金に目が眩んだわけじゃない。でも自分を金で売り渡したような妙な錯覚に陥っちまう』

語りながら声の主はジョージに歩み寄る。そして

ポンッ

ジョージの両肩に優しく労うように手が添えられた。声の主はそのままぼんぼんとジョージの肩を数回叩くと、仕草のままに優しい声色で話の続きを紡ぎ始める。

『お疲れ様。でもねジョージさん駄目だよ？あなたは終わらない。終わらせない』

声の主のその言葉にジョージは眉をひそめる。そして一つ息を吐くと視線を鞘へと向けたまま徐に口を開いた。

「いや……あれの担い手はワシが見つかる。そう君に誓いを立てたはずだ……それを」

『まゝった！ジョージさん、あなたはマーケッターだ。マーケッターが物を売るのはこのラナクロアの常識さね』

自身の言葉を遮られたジョージであったが別段、驚いた様子も無くそのまま声の主の言葉にゆっくりと耳を傾けた。そしてその言葉を聞き終えると大きく頷きぽつりと呟いた。

「そうだな……それは確かにそうだ。

しかしワシは結局……望まぬ形であの子を手放した……そして拒否したとはいえ利益を得てしまった……」

そう言い終えたジョージの背中では声の主の目には更に小さく映っていた。

声の主はそんなジョージの背中を上機嫌な様子でじっと見つめると、鼻歌まじりでジョージの肩を揉み始める。そして先程よりも幾分か軽い調子でジョージに語りかけた。

『ふふん あれを利益と言えるジョージさんだから大好きなんだよア

タイは
』

「……やれやれ？全部？お見通しか……すまないなルン」

『その名で呼ばれるのは久しいね』

街のはずれに見ない孤児院が一軒

聞けば報酬を受け取らない困ったマーケットターのせいで建ったっていうじゃないか』

アタイは聞いた瞬間にぴゅんときたねえ』

「いらんと言ったんだがな……あれの店がある街には同じものが同じ数だけ建ったらしい」

『はん！高く見積もってくれるじゃないのさ！

あゝっもう！むかつくつたらありやしない！』

「ルン痛いぞ」

『つとと、すまないすまない。どくにもあの男のことだけは好きになれなくてねえ』

「やれやれ……マイスターとしての奴のことをあれだけ買っていたのはどこの誰なんだか」

『腕は認めてたさ、それに服のセンスだけはね……』

でもそれ以外は駄目さね、生理的に受け付けない。

なによりもあの男は服以外のすべてのセンスがぶっ飛んじまってるのさ！』

「はは……相変わらず手厳しいなルン。」

しかしこの街である男ことをあまり悪く言うもんじゃないぞ？」

「ああそうだろうさね、なんせこの住人はあんな嫌悪の塊みたいなものを許しちまう程あの男のことを愛してる」

「ふふ……それは確かにな」

「なぐにがクレハ・ザ・ビューティーだよ！言っつて恥かしくないのかねえ？」

「おいおい、ルン。ワシもこの住人なんだぞ？」

「つとと、すまないすまない。」

「……ねえジョージさん、それはそうとそろそろ顔くらい見せとくれよ」

陽気な様子で会話を繰り広げていた二人だったが声の主のその言葉聞いたジョージは不意に独白する。それは彼が僅かばかりの覚悟を決めるための時間だった。

不思議そうに小首を傾げジョージの返事を待つ声の主。ジョージはそんな声の主にゆっくりと振り返ると命一杯の優しさを瞳に宿らせながら微笑みかけた。

「やあルン。互いに顔を見るのは三十年ぶりか」

カチャリ。

ジョージのその顔を見た声の主は、僅かに驚いた顔を見せると無意識に自身の腰に帯剣していた剣の一本を隠す様にして手の平で奥

へと追いやった。

『そお……だね。そうか、そうだねジョージさん』

「……そうか、そうだったな」

声の主のそんな姿を見たジョージは僅かに目を見開くと少し頷き、そしてまた声の主に優しく微笑みかけた。

それからしばらく二人は互いに共にしなかった時間のことを語り合い、そしてどちらともなく別れを切り出した。

『ジョージさん、また会えて良かったよ。』

……うん、そしてあの子をあなたに託したのは正解だった』

「ありがとう、ルン」

ワシこそ君に出会えて本当に良かった」

『？また？会いに来るから……』

「そうだな……」

『アタイはもう行くよ。じゃね』

別れは颯爽と、 でないと後ろ髪を引かれちまうのさ』

そう言い残すと声の主は足早に？ルイオアゲイル？の扉を開く。そして振り返ることなく手をひらひらさせると、ゆっくりとその後姿を闇へと溶かしていった。

ジョージは彼女のそんな後ろ姿に深々と頭を下げると、数多の客に告げてきた一言をゆっくりとしかし、はっきりと言い放った。

「ありがとうございました」

ジョージの店？ルイオアゲイル？を後にした先程の声の主は、周囲の人の目も顧みず苛立った様子でガリガリと自身の頭を掻き回していた。

「まったく！なにが？現にジョージさんもそうなってる？だよ！アタイも耄碌もろろくしたもんさね！」

叫ぶようにしてそう言い放った彼女の瞳は涙に濡れていた。

「あの人は誰だい！？そうさ！ジョージ・カユラハだよ！！」

あの人が！！……あの人が誇りを見失うはずなんて……ないさね……うう」

ぐすぐすと鼻をすすりながら彼女が思い出していたのは先程のジョージの優しい瞳だった。

「が……がおをみででは、ばでどうとおぼっただんどおお」

(訳：顔を見せれば、ばれると思ったんだろ。と言っているらしい)

彼女が店の目と鼻の先で泣き叫んでいるその頃、先程中断された一服を再開したジョージはもくもくと天井を曇らせるスクリーン越しに、又しても額に飾られている鞘に視線を向けていた。

「まったく……ルンよ、相変わらず君は風さながらに掴みどころがないわい」

防音魔法が施されている店内である。まさか先程、颯爽と去っていった彼女が目と鼻の先で泣き叫んでいるとは思ってもよらずジョージはそんなことを呟いていた。

ゆっくりと晴れていく店内の天井をぼーっと横目で眺めながらジョージは思考を巡らせた。

先程は努めて気付かないフリを演じてはみたものの、彼の思考は望まぬともその事へと辿りついてしまう。

それは一振りの剣だった。

？ルン？

彼がそう呼んだ声の主が、無意識に彼から遠ざけるようにして見せた一振りの剣。視界に捉えたのは一瞬の事ではあったが、その一瞬が彼のマーケッターとしての？血？を大いに奮わせた。

「……なあルン」

ジョージは額に飾られた鞘を彼女に見立てて語りかける。

「さつきワシから隠した剣は……あの子を越えていたんじゃないのかい？」

「なあ、ルン……それを本当はワシに託しに来てくれたんじゃないのかい？」

ジョージが鞘に語りかけ始めたその頃、最後に大きく鼻をすすった彼女はようやく落ち着きを取り戻し、大きく天を仰いでいた。

彼女の視線の先には月が一つ。彼女は月に優しく手を伸ばすと、手の平で底をすくうようにしてそっと撫で上げた。

『ねえジョージさん』

彼女は月をジョージに見立てて語りかける。

今のこの時、二人にとって鞘と月は他ならぬ本人同士であった。

『隠し事をしたのはお互い様さね』

あなたは今もアタイが認めたマーケットターのままさね』

「ワシはあの子を望まぬ形で手放した」

『違う。あなたは手放さざるを得なかった。』

でもそれが何だって言うのさ？ ジョージさんはこの子を見て奮えて

くれた』

「ああ……血が騒いだよ。ルン、君は最期にとんでもないものを見せてくれた

正直、悔しい。ワシはその子を取り扱ってみたかった。心底そう思ってしまったよ」

『ありがとう。ジヨジさん』

「でもワシには時間が無い……あの子の担い手になれる者すら現れなかったんだ……

その子の担い手を見つけることなど……」

『ああそうさね……アタイはただ……それが哀しいのさ

アタイはジヨジさんが認めた者しか認めない……だからこの子は………』

「ありや？なあエレシ、なんか店の前で空見てぶつぶつ言ってる人がいるんだが」

「まあまあ」

「こちらに何かしてくるようならば私が切り伏せると思いなさい」

「ルブランはいつもそればかりだわ」

「……おい、馬鹿どこへいく(ぼそっ)」

「シア、俺、お前になんか悪いことしましたかね!？」

「あら?シアちゃんがどうかしましたか?」

「?何も?ありませんわ お姉様」

「ふふ、いつも可愛いですよ シアちゃんも」

「ありがとうございますお姉様」

「こ、こいつあああああ!」

「あら?ポレフ、どこへ行くのですか?」

「ちょっと待ってて姉ちゃん!俺、あの人に用事がある!」

そう言い残すとポレフは定臣が首を傾げていたその人物に向かって
駆け出していった。

「なあ!そこのあんた!」

『なんだい?人が感傷に浸っているってのにさ』

これがポレフと？ルン？こと伝説のマイスター？ルクセン・パロ
エ？との出会いだった。

ポレフの武器？

ポレフ達が目的の店？ルイオアゲイル？に到着した時、店の前には夜空を見上げる一人の女性が佇んでいた。

その女性を見たポレフは皆との会話を止め、一人その女性へと向って駆けて行く。

いつもならばポレフの単独行動を即座に制止するエレシであったが、その時ばかりは不思議と穏やかな笑みを浮かべたままポレフの背中を見送っていた。

珍しいこともあるもんだなあ……

視線の先に佇む女性のいでたちを再確認しながら定臣はそんなことを心の中で呟いていた。

闇に浮かぶように羽織られた白いマントに紺色の旅人服を着込んだその女性は、綺麗に切りそろえられた前髪から狐のような細い目を覗かせ、不機嫌そうにポレフに向かって何かを訴えかけている。

いつもならば、ポレフの無鉄砲ぶりなど慣れたと言わんばかりに、エレシがおろおろする姿を脇に傍観を決め込む定臣であったが、この時ばかりはその女性が視覚的に醸し出す、妙なアンバランスさに違和感を覚えたため警戒を解くことは無かった。

女性の腰には六本の剣。遠目ながらもはっきりと確認できるその得物は明らかに一人が所有するには多すぎる数だった。

「エレシ、いいのか？」

「ご心配には及びません。ありがとうございます。定臣様」

「そっか」

いつもとは違う反応を見せるエレシに内心で戸惑いながらも、定臣はポレフとその女性をじっと視界に捕らえ続けていた。

その時

『このつとおおおり！お願い！！』

不意にポレフの大声が耳に届く。前方のポレフは声と同時に両手の平を合わせ、女性に向かって大きく頭を下げていた。

恐らくはあれがポレフの精一杯の誠意の示し方なんだろうがあれは……

ポレフのその姿を凝視していた定臣が脱力する。
異様に直立に伸ばされた背筋に爪先。お辞儀開始当初はどこから

ともなく『ナマステ〜』と聞こえてきそうなカワイイ角度で重ねて挙げられていた両手は、いつの間にもやら天高く掲げられ競泳選手の飛び込み姿さながらに奇妙な体勢へと変化していた。

後にポレフは語る。あれは？超お願い？の構えなのだ。もっとも、その席に同席していたシアによつて冷たく『そのまま死ぬ』と言いつたことになるのだが、それはまた別のお話である。

ともあれこの場においてポレフのこの必死のアピールは功を奏することとなり

そして

『ぶっ……あはははは！なんだいその格好は！いいねえ、いいよ君
マイスター？ルクセン・パロエ？に大いに気に入られることな
った。』

なにやら無茶苦茶笑われたんだけどまあいいや。とりあえずウケたつてことは俺的解釈でOKつてことだな。

「つてことでそれ俺にくれるんだな！お姉さん！」

『あははは……とと、ちよいとお待ちよ少年。』

そりゃ、今のポーズには笑わせてもらった。

それにアタイのことをお姉さんと呼んだのも評価はできるさでもね、それとこれとは別さね。

だいたいなにさ、アタイと少年とはこれが初対面だよ。

それをいきなりその剣をくれとは何さね。

それにいくら小さいと言ってもらナククロアの傭兵にとって得物が
どいうものかくらいは知っているだろう？』

「なっが〜」

思わず思ったことが口を出た。

『はんっ！人の話を聞かない子は嫌いだよ！』

「ごめん！悪かったよ！」

『……よし、素直な子は好きさね。次は無し』

質問の答えを聞かせてもらおうか』

そついうとその人の雰囲気さがらりと変わった。でも俺は別段驚くことは無かった。なんせ俺はその人が身に纏う独特の空気に覚えがあつたんだ。

「ここはおふざけが許されるところじゃない。この人の誇りを穢すような真似をする程、俺は馬鹿じゃない。」

俺は背筋に芯を入れると慎重に言葉を選びながら答えた。

「ラナクロアの傭兵にとっての得物。それは人生を共にする相棒のようなもの。だからこそ得物選びは慎重に行われ、そして一度選ん

だ得物は余程のことがない限り変えることは無い」

『ふむ……歳の割りに理解してる方じゃないのさ
じゃあ少年。それを知っていてどうして人様の得物を欲しがるんだい？』

「それはお姉さんが傭兵じゃないからだ」

『どうしてそう思う？』

「わかるから……俺は一流のマイスターだけが持つ空気を知ってる！それは本物だけしか持つていないものなんだ！そしてマイスターは自分が認めたマーケット以外には決して自分の作品を託さないのも知ってる！」

俺のその言葉を聞いたその人は目を見開いた。細目の人が目を開くと普通の人よりも驚いてるように見えるから不思議だなあ

『驚いたねえ……少年、君の名を聞かせてもらおうかい』

「ポレフ・レイヴァルヴァン！それが俺の名前だ」

『ポレフねえ……じゃあさポレフ』

俺の名前を呼ぶとその人はにたりと笑った。

今までの人生の中で？レイヴァルヴァン？の姓を名乗って驚かれなかったのはこの時が初めてだったように思う。……あつ、定臣はノーカウトだ。あいつは人間じゃないしな。まあそれは置いておくとして、それからその人は自分の鼻を指先でとんとんと叩きながらこう言ってきたんだ。

『どうしてこの剣が欲しいんだい？』

その質問を投げかけられた俺はまた無い頭をフル回転させることになった。なんとたつて笑ってはいるものの、さっきよりもその人の瞳は真剣そのものになってたからだ。

「くくり

思わず生唾を飲み込む。ここからの選択に間違いは許されない。その人の纏う空気が否応無しに俺にそう伝えてきていた。

だから俺は決意した。一切偽らずに思ったことをこの人に伝えよう。と。

「一番なんだ」

『んんう？』

「俺が今まで見た武器の中でお姉さんの持つてるその剣が一番なんだ」

そう告げると俺はその人が腰に差している剣の一本を指差して見せた。というか俺は始めからずっとその剣のことは見ていなかった。

『ふ〜む……ポレフ、君はとても良い目をしてるねえ

アタイが選ばせなくてもこの子を選んでみせたわけさね

その目を培った土壌はなんだろうねえ

身につけようとして身につくものじゃあない。

こればかりは育った環境の賜物さね』

「それは」

『いや、それはいい。アタイが興味あるのは君のことさね。見たところポレフはこれから？ルイオアゲイル？に行くつもりだった。』

その目的を聞かせてもらおうか』

なにやら言葉を遮られた。どうやらこの人はせつかちな人みたいだ。下手なことを言っへそを曲げられても困るしなあ……ここは聞かれたことだけは答えた方がいいだろうなあ

「？ルイオアゲイル？には？ルクセン・パロエ？の剣を譲ってもらいに行くつもりだったんだ。

でも、もう行く必要が無くなっちゃった」

『それは？』

「魔法カタログで初めて？ルイオアゲイル？に展示されてるルクセン作品を見た時に一目惚れしたんだけど……会いに行く直前に運命の人に出会っちゃった！……そんな感じ！」

『ふむ……？ルイオアゲイル？にはジョジさ……？ジョージ・カユラハ？がいるさね』

あの店で取り扱っている武器はどれも超一流さ。ネフィルにロキネル、それに最近パインソンも腕を磨いてきてる。？ルクセン・パロエ？作品に拘る必要なんてないんじゃないのかい？』

ん、この人？ルクセン・パロエ？のこと嫌いなのかな？でも俺は好きだしなあ……同意したくないなあ

「ん〜……駄目かな。ネフィル作品にロキネル作品。それにパイネソン作品も確かに素晴らしいとは思っし、どのマイスターも一流だとは思う。でも切れ味だけに拘りすぎてしなやかさが無い。といひかなんだらう……ん〜ルクセン作品ってなんか違うんだ」

『なにか……ねえ……曖昧だねえ』

「ん〜……俺、馬鹿だから言葉でうまく言えないや！ごめん！」

『あははは！大丈夫さね 君が本物だったことだけは充分に伝わった。』

それじゃあ最期にもう一つだけ質問さね』

そう言うとその人は俺が指差した剣を鞘に納めた状態のまま取り外した。それから俺に魅せつけるようにして差し出すと嬉しそうに口ずさんだ。

『その他とは何か違うルクセン作品を差し置いて……この子を選んだのはどうしてだい？』

「だから一番なんだって！……ん？そう言えばその剣って？ルイオアゲイル？に展示されてる剣になんか雰囲気似てるような……」

チャキ。

俺のその言葉を聞き終えるとその人は剣を僅かに鞘から抜き出した。俺は鞘から僅かに覗いた刀身に描かれている刻印を見て思わずはっとした。

万物の象徴である太陽にすべてを斬り裂く意を籠めた一筋の雷。更にその亀裂から覗くは孤高を示す三日月。それは三大国家資格に携わる者ならば誰しもが知る、マイスター？ルクセン・パロエ？の作品を示す刻印だった。

驚く俺に意地の悪い笑みを見せるとルクセンは嬉しそうに言い放った。俺は啞然としたままそんなルクセンのことを眺めていた。言っとくけどまぬけに口なんて開いてないからなっ！

『「名答　まさかそこまで見抜くとはね〜

認めてあげるよポレフ、君の目は超一流さね　』

「じゃ、じゃあその剣！俺に譲ってくれるのか？」

『ふふん　考えてあげようじゃないか

そうさね　』

そう言つとルクセンは俺に二つの課題を提示してきた。もちろん俺はその課題を二つ返事で受けることにしたんだ。でも……その直後に俺は激しく学ばされることとなったんだ……

そのために払った代償は無茶苦茶痛かったけど……それはとても大事なことだった。

『まさむねっ！』

ズビシッ

「あ”っ……シ、シアナニヲスル」

「大丈夫！？』などのたまい、エレシの中での自分の株をしつかりと上げると、優しくポレフを抱き上げそのまま店内へと姿を消した。

その二人の後をエレシが追い、それに定臣とルブランが肩をすくめながら続く形でポレフPTの面々はいよいよ目的の武器屋？ルイオアゲイル？へと入店を果たした。

ちなみにロイエルはというと

「ちょ！？……あれ？皆どこ？あれ？もう店の中？

……待つて！待つてよ！僕を置いていくななんて酷いわ！」

思いつき置き去りにされていることに気付くと、半泣きになりながら店内へと駆けていったのだった。

「やれやれ……賑やかな連中だねえ……」

ポレフ達が立ち去った後、その場に残されたルクセン・パロエは閉められたばかりの？ルイオアゲイル？の扉を愛しそうに見つめていた。

「ジョジさん、アタイはね……奇跡なんてものは信じないさね。

だからさ……このタイミングであんな子が現れたのは必然なのさね」

そう呟くとルクセンはとんとんと鼻を叩いた。それは彼女が上機嫌な時に見せる一種の癖のようなものだった。

「そうさね…… ジョジさん、この必然はあなたが呼び寄せたのさ……
そう、一人の職人として…… マーケッターとして気高く生きたあなたの生き様に世界が応えたのさね……」

『いらつしゃい。今日は珍しい時間のお客さんが多いねえ』

入店から程なくして店内に穏やかな声が響く。扉から真正面に見えるカウンターにはこの店？ルイオアゲイル？の店主？ジョージ・カユラハ？腰を据えていた。

数十年にも渡り、そこで客を迎え続けてきた彼からは一目に見て感じ取れる程の貫禄が滲み出ており、名だたる傭兵達は入店するや否や緊張から背筋を伸ばさずにはいられなかった。

そんな傭兵達をジョージは品定めする。傭兵達はお眼鏡に少しでも叶おうと必死にジョージの観察眼に抗おうとする。客が入店すると同時に繰り広げられるマーケットと傭兵との競い合い。それが？ルイオアゲイル？におけるジョージと客との在り方であり、長年繰り返されてきたそのやりとりは、もはやここに来店する者の間で暗黙のセオリーと化していた。

ところが

そんなセオリーも今日この時ばかりは勝手が違っていた。

ジョージの視線の先にはだらりと頭を垂らした少年の姿。その隣には同じくらいの背丈の少女が肩を貸す形で寄り添っている。

これは可愛いお客さんだ。内心でそう思いつつも、ジョージは客に対する礼を尽くそうとカウンターの席を立った。

「お嬢さん、そちらの坊ちゃんはどこか調子でも悪いのかい？」

そう言うとジョージは心配そうな表情を浮かべ少女、シア・ナイのもとへとゆっくりと歩みを進める。そんなジョージを一瞥するとシアは無表情に隣の少年、ポレフに視線を送り

そして

「いい加減、起きんかい（ぼそ）」

そう呟くとポレフを床へと叩き捨てた。

「ぶっ！お嬢さん！あんたなんてことするんだ！？」

シアの突然の行動に思わず鼻水を吹き出したジョージは慌ててシアに聞いた。そんなジョージを無表情に見上げるとシアは

「ポ、ポレフ！？大丈夫！？今起こしてあげるからねっ」

などとのたまう。

「ええ!？」

「お邪魔します」

ジョージがあまりの展開にその声を上げたのと、エレシが入店を果たしたのはほぼ同時のことであった。

衝撃の入店から数分、店内には真剣な面持ちで睨み合つ、ポレフとジョージの姿があった。

事の始まりはポレフのこの一言だった。

「ルクセンに自分の最高傑作が欲しいならジョージさんに認められるって言われた」

それを聞いたジョージはしばし物思いに耽り、そしてにやりと嗤った。

風貌は変わらない。しかしながら明らかに身に纏う空気が変化している。

この時、この場においてジョージの変化に気付いていた者は、ポレフとエレシの二人のみであった。

ジョージの放つ独特の空気。それは一流の職人が、自らの仕事をする際に滲み出るようにして発せられるものである。一朝一夕に在らず。ジョージのこの変化を捉えるには、長年培われた職人として

の資質と気質が必要であり、そのそれこそがジョージがルクセンの剣を担う者に求める最低限の条件だった。

ジョージの課した課題を得るための課題。それを瞬時に感じ取ったポレフは真剣な眼差しでジョージを睨みつけた。こうして伝説のマーケッター？ジョージ・カウラハ？と勇者候補？ポレフ・レイヴアルヴァン？の一騎打ちは幕を開いた。

最初の課題は各マイスターの刻印の判別。次に提示されたのは五本の剣に優劣をつけ順に並べよというもの。そして次はその優劣の基準を事細かく述べよというもの。

そして今、ポレフは『この店で優れている武器を三つ持ってきてワシに提示しなさい』という課題を与えられ、二本の剣をジョージの前に提示している。

固唾を飲んで一同が二人の勝負を見守る中、ポレフは自信満々にジョージを睨みつける。そんなポレフを笑顔のままに睨みつけるとジョージは少し不満気に口を開いた。

「ワシは三つと言ったはずだが」

「これでいいんだ。後の一つはそこにあつたはずなんだ」

そう言うとポレフはジョージの頭上を指差した。そこには例の鞘が額に入れられた状態で展示されていた。

ジョージは鞘を一瞥するとポレフにゆっくりと視線を戻し、軽く目を瞑ると首を横に振った。

「確かに……あそこにあつた剣はこの店で最も優れていた」

「うん！」

「じゃが……あの子はもうこの店には無い」

売れた物を店の在庫として数には入れられない。どれだけ素晴らしい物を手に入れようとそのすべては商品であり、いずれは担い手が現れ手元を離れていく。

その事を理解していない者など取るに足らず。ここまでのやりとりですっかりとポレフのことを気に入っていたジョージではあったが、マーケットとしての彼がポレフに下した判定はやはり過去にルクセンの剣を求め、そして敗れ去っていった傭兵達と同様のものであった。

残念だが……そうジョージが口にしようとしたその時、不意に彼の脳裏に一つの疑問が浮び上がった。

彼の知る？ルクセン・パロエ？というマイスターは決して妥協を許さない。その彼女がこの少年に自分に認められてくるようにと指示を出し、差向けてきたのである。果たして自分が今、下そうとしていた判断は本当に正しいのか。

そこに思考が到達した時、ジョージの脳裏に懐かしい記憶が蘇る。それは彼とマイスター？ルクセン・パロエ？が出会った遠い日の記憶だった。

「あんたかい？ ジョージ・カユラ八つてのは？」

それは突然の来訪だった。

念願の店を構え、その店がようやく軌道に乗り、いつしか自分の名は世間で噂されるようになっていた。そんな噂を聞きつけて来たのだと彼女は言った。

彼女は一振りの剣を手にしていた。

そしてそれを鞘に納めたままの姿でゆっくりと差し出すところ言
った。

「あんたの目にはアタイの剣はどう映るさね？」

その剣は今までに携わってきたどの剣よりも素晴らしいものに見え
た。

それは間違いでは無かった。しかしその剣よりも一際、目を惹く
剣を彼女は腰に帯剣していた。

「どれも素晴らしい……君の剣は世界一だ……」

その剣も確かに素晴らしい。ワシの店に並ぶどの武器よりも素晴
らしい出来だ。

しかし……その中では三番手といったところかね？」

その言葉を聞いた彼女は自分の鼻をほとんど叩くとにこりと笑
い、そして握手を求めてきた。

「いいねえ、いいねえ……伊達じゃない。久方ぶりに？ 本物？ に出

会えたよ

「あんだ？よばわりして悪かったよ。あなたは素晴らしいマーケットターだ」

「マイスターが出会ったばかりの人間に手を差し出してくれるのかね……」

「こんなに光栄なことはそうは無い。それが君の様な素晴らしいマイスターならば尚更だ」

そしてワシと彼女はゆつくりと握手を交わした。

それがすべてだった。たったそれだけのことで互いに互いのことを深く理解した。

だからこそ、その直後の彼女の言葉にも頷けた。

『しばらくあなたを見極めたい』

そう言う彼女はそのまま居候する形で店に転がり込んできた。

こうしてワシと彼女の奇妙な共同生活は始まった。

素晴らしい時間だった。今になって振り返ってみればよくわかる。

あの時のあの時間こそが礎だったのだ。

孤高を目指し、研鑽し続ける職人同士の鬨せめぎ合い。

認め合う者同士にしか理解出来ない領域で二人は魅せ合った。

名は一流へ。想いは信念へ。

そして互いの信念は互いに互いを更に研鑽し高め合う。

だからあの時間こそがマーケットター？ジョージ・カユラハ？の礎だったのだ。

「ジョジさん、この子をあなたにお願いしたい」

数ヶ月後のある日、彼女はワシにそう告げてきた。

言わずともそれが別れを示す言葉だと理解できた。

彼女の手に握られていたのは初対面の時に目を惹かれたあの剣だった。

それを自分に託してくれることに喜びと重責を感じつつも、それを悟られないように取り繕った。

孤高には孤高で、気高い彼女には気高く接したかったのだ。

思えばそれは一人のマーケットターとしての他愛もない意地だった。

「それが君の一番だね。ルン」

「ああそうさね。この子が？今の？アタイの一番さ」

「？今の？か……互いに生涯その台詞を言い続けたいものだな」

「ふふん 良い出会いだっつたよ ジョジさん」

「ああ……良い出会いだっつた」

別れは互いに口にしなかった。ただ去り際に彼女はぼつりと呟いた。

「その子の担い手は苦労しそうさね。ジョジさん」

そんな彼女の背中にワシは一言だけ投げかけた。

「苦労してもらうさ。なんせこの子はとっておきだ」

彼女の背中が見えなくなるまでの間、ワシはある日の彼女との会話を思い出していた。

マーケッター？ジョージ・カユラハ？が求める理想の担い手とは。会話の始まりはそんな質問だった。

ワシはその質問に即答した。

一つ、担い手は良い目を持っていなければならない。

何故ならば価値のわからぬ者に得物の真価を引き出すことなど不可能だからだ。

マイスターに対する礼を欠くという意味合いをとってもそれは絶対条件だ。

一つ、担い手は弱くなければならない。

何故ならば弱者であればある程に得物に頼るところが大きく、マイスターが注ぎ込んだ得物の息吹が輝けるからだ。

また弱者であればある程に伸びしろは大きく、得物にとってそれは様々な場面に遭遇できるということであり、武器としての本来の役割を全うすることができる。

もっとも言うまでもなく、ここでの弱者とは常に向上心の翼を羽ばたかせているという前提条件ではあるが。

そして最後に一つ、担い手は多くの師を持たなければならない。

これには暗に？すべてを学び獲る意欲？を持つてという意味合いを籠めている。

その心持でいられるならば周囲の人間はおるか、道に転がる小石の一つまでもが己の師になりうるだろう。

言い終えたワシを、彼女は満足気に見つめながらこんなことを言ってきた。

「ジョジさん、あなたが求める担い手は傭兵っていうよりマーケットー寄りさね」

「ふむ、言われて見ればそうかもしれない」

「それにどちらかと言えば？心意気？に寄るところが多いさね」

「確かにな」

「まあアタイがなんて言ったって変えるつもりはないんだろう？」

「そうじゃな」

「さて、生きてる間にその子の担い手は現れてくれるんだろうかね」
え

「ワシは妥協する気はないぞ？」

「あははは！いいねえ その意気さね」

結局、生涯あの子の担い手が現れることは無かったか……

あつという間の人生だった。

医者に言い渡された余命は半年。

自分がこの世を去った後、綻びの目立ち始めた店の傍らで、あの子が埃に埋もれていくことを不憫に思い、遂には信念を曲げ、人の手に渡した。

このまま静かに最期を迎えようとしていた。

そんな最中、再び彼女に会えたのは僥倖だった。

彼女に許されたことで少しは気が晴れた。

そんな矢先に彼女は一人の少年を差向けてきた。

その意味は

彼女の言わんとするところは

『奇跡なんて信じない。あるのはいつも必然だけさね』

彼女の口癖が脳裏を過ぎる。

最後の判定を下さねばならない。

もう一度、少年を見る。

すると少年は

「うん！ やっぱりまだここにあるよ！ この剣がこの店で一番だ！」

満面の笑顔でそう言い放った。

少年は言う。その鞘には一人のマーケッターの生き様が詰まっていると。

少年は言う。その鞘には確かに剣は納められてはいないけれど、それでも自分の目には決して綻ばない剣が納められているように見えると。

「その歳でよくぞそこまで視えている……」

無意識にそう呟いていた。

まさか伝説と謳われる程にまで昇りつめた自分が、年端もいかぬ若者にここまで思い知らされることになるうとは想像もしていなかった。

慢心こそが自分が最も忌み嫌っていたものではなかったのか。

この歳で少年に学ばされるとはまったくもって人生とは楽しい。

認めねばなるまい。

失ったものなど本当は何も無く、自分はただ失ったフリをして楽になりたかっただけなのだ。

誇りはここに在る。ならば自分は死して尚、気高く生きようではないか。

この出会いは必然だった。

「坊ちゃん……名前を聞かせてくれるかね」

ならばこの少年には大いに期待させてもらおう。

「ポレフ！ポレフ・レイヴァルヴァンだ！」

なにせこの少年は

「ポレフか。ワシはジョージ……ジョージ・カユラハだ。」

ワシの人生の大半をかけて、ようやく選り抜いた？担い手？なのだから

「ポレフ……認めよう。君はルンの……？ルクセン・パロエ？の最高傑作を担う資格がある。」

合格だ。」

ルクセン・パロエの指示の下、勇者候補？ポレフ・レイヴァルヴァン？は伝説のマーケット、ジョージ・カユラハに挑んだ。

順調にジョージの出題する課題をクリアしていったポレフだったが、最後の課題でジョージの望まぬ答えを言い放つ。

マーケットとして失格を言い渡さざるを得ないポレフの答え。

ジョージがポレフに失格を告げようとしたその時、ポレフは自らの言葉で合格を掴み取ったのだった。

ん〜……自分の理解不能な世界での戦いつてのは見ているだけで結構疲れるなあ……

前方を歩くポレフのつむじを見下ろしながら、定臣は心の中でそんなことをぼやいていた。

先程の武器屋にて繰り広げられたポレフと店主との戦い。

それに店に入る前の狐目の女性とポレフとのやりとり。

前々からことマイスターに関しては妙に真剣な面持ちで語り始めるポレフである。

恐らくは先程のやりとりの中でも？その道？の者にしか理解しえぬ意思疎通が数多く交わされていたのだろう。

基本的に理解出来ぬことはそれが得意分野である人間に任せることを信条としている定臣は、そう適当に中りをつけると次の疑問へと思いを切り替えた。

そう　武器屋はまだわかる。勇者を目指す以上、武器くらいはあって当然だと思っし、むしろ今まで素手でよくやってこれたなおい！とつつこんでやりたい気持ちもある。

で、武器屋でその肝心の武器を買わずになんだってこんな所に来たのかってことだ。

「はあ……俺、マリダリフ待たせてんだけどなあ」

軽く溜息をついてそうごちった定臣の視線の先には、ド派手な建物があった。

「はあ……」

建物を再度見た定臣とロイエルの溜息がかぶる。

「あ、あそこに入るのか？」

そんな二人の背後であからさまに嫌そうに呟いたのはルブランだった。

ポレフPTの次なる目的地にして現在、眼前に佇むその建物の名は

カジノ？クレハの夢？

ルツセブルフの夜の象徴であるその建物は、当然のごとくサキユリアス社長？クレハ・ラナトス？の趣味が全面に押し出されており、聴覚的にも視覚的にも人々の記憶に鮮明に残るとして、これまた悪名高かった。

「エレシ……いつものように解説頼む」

げっそりとした様子でそう呟いた定臣に、エレシが微笑みながら困ったような顔をする。

「ここはカジノ？クレハの夢？です。ルッセルフの夜の顔はここを起源として成り立ちました。

そして私達がここを訪れた目的はポレフの武器を手に入れるためです」

そう、結局それが目的だった。

聞くところによるとポレフが欲しいのは武器屋の前で出会った狐目の姉ちゃんの剣で、その狐目の姉ちゃんは自分の剣が欲しいならとポレフに二つの条件を出したと。

その条件の一つがさっきの武器屋の店主に認められるというもの。そしてもう一つが、かつてその武器屋に展示してあった剣を手に入れて持つてこいってものだそうだ。

で、それが何だってカジノに来てるんだって話に戻るんだが……

その剣を手に入れた男の名は？クレハ・ラナトス？……

そう……？クレハ・ラナトス？だ……

泣きたくなってきたけど真っ赤な服のもみあげのあの男のことで間違い無いらしい。

で、ド派手好きなあの男はやらかしやがった。

『やっぱよお、ルクセン作品を扱えるような奴は強運じゃないといけねえよなあ！』

剣を手に入れたクレハは、いつものどや顔でそんなことをのたまうと全世界に向けてある宣伝を発信した。

『来たれ！強運の持ち主よ！』

ジョージ・カユラハ一押しのある名工ルクセン・パロエ十指の第一指、名剣？ビグザス？があなたの物になるかも！？

詳細はカジノ？クレハの夢？にて！』

それがこれである。

まあなんだ……要するにクレハの奴は手に入れたその剣をよりにもよってカジノの景品にしゃがったそうさ。

カジノの客層の九割は傭兵で占められているらしく、決して誰のものにもならないと噂されていたその剣を手に入れるチャンスとあって巷は大いに賑わったそうさ。

元々、大盛況だったカジノは剣の集客率が重なって過去に類を見ない大繁盛に。

わかるだろ??過去に類を見ない?……あの男の大好きな言葉だ。

職人の誇りうんぬんを重視する奴がそんな名剣を簡単に手放すわけがない。

その剣がカジノの景品にされてから約一月。その間、どれだけの客がカジノに金を落としていったことか。

皆、気付こうぜ……明らかな客寄せパンダだ。

いや、皆わかってるか……それでも他に手に入れる方法が無いんだよな……

現に……俺達もここに来ちゃってるわけだしな……

「?クレハの夢?ねえ……」

客を出迎えるようにして入り口の天井部を飾るレリーフを見る。

「はぁ……」

思わず溜息が出た。

そこにはまたしてもクレハの彫像。どうせまた変な名前なんだろうと頭痛を覚えつつもエレシに尋ねてみる。

「なあエレシ？あれ？つてさ」

「クレハ・ザ・ドリーム……それが？あれ？の正式名称ですね」

気のせいかエレシの笑顔が陰って見えた。

「そつかぁ……解説ありがと」

「いえいえ」

そして覚悟を決めると俺達はいよいよ店内へと足を踏み入れた。

その際、俺の背中に向ってエレシが呟いた一言を俺は聞き逃さなかった。

「悪夢ですよね（ぼそ）」

聞こえなかったフリをしつつも俺が内心で激しく同意したのは言うまでもないことだった。

にしてもエレシってたまにシアバリの毒舌吐くよなあ……

ポレフの武器？

ルクセン・パロエの傑作十指が一つ？名剣ビグザス？。

長年、ジージ・カユラ八の手元にあったその剣を入手していたのは、なんとサキュリアス社長、クレハ・ラナトスであった。

ポレフがルクセン・パロエの最高傑作を得るにはクレハの持つ？名剣ビグザス？を入手する必要があるという。

ジョージから？名剣ビグザス？の在り処を聞かされた一同は思わず頭を抱えた。

なんと、クレハはこともあろうに？名剣ビグザス？を自らが運営するカジノの景品にしていたのだった。

「ああ……そういえば天使っていい加減なんだつたな」

騒音鳴り響く場内の一角、エレシから手渡されたある物を凝視しながら、俺はそんなことをぼやいていた。

それはカジノに入店した直後のことだった。

嫌々ながらもカジノへと入店を果たした俺達を待ち受けていたのは、巨大魔法スクリーンに映し出されたエレシの姿だった。

数年前にクレハに執拗に頼み込まれたため、仕方無く引き受けたそのCMがいまだに流れ続けていることに溜息しつつも、エレシは俺達に数枚の紙切れを配り始めた。

エレシ曰く、軍資金。最愛の弟のお手伝いをして頂くのだから自分が負担して当然と、微笑みながら手渡された？それ？を見た直後に俺は硬直した。

数年前までは？我輩は猫である？と仏頂面を下げてこちらに語りかけてきていたその紙切れは、望む望まずを一切無視したモデルチェンジを果たし、今では野口さんちの英世くんが表紙を飾っている。

つまり。。。

「これ千円やん！どう見ても千円やん！」

俺はこの時、とても面白い顔になっていたと思う。

そんな俺の反応をどう勘違いしたのか

「すみません定臣様、一万円では心もとなかったですね」

などとエレシが慌てた様子で更に十人の野口さんを手渡してこようとしたが、とりあえずはそれを断り、いくつかの質問を投げかけてみた。

まず最初に尋ねたのは

「なあ、エレシ。ラナクロアの通貨って？円？なのか？」

それに対する答えは？はい　？という小気味良い返答。

困惑しつつも俺は次の質問を投げかけた。

「んじゃ、この千円に描かれてるおっさん。これって野口さんちの英世くんだよな？」

俺のその質問に対してエレシは困ったような顔をしつつ、「こう答えた。

「えっと……それが誰なのかは存じ上げませんが……」

そこに描かれている人物はミンミン・ゼハルダという人物ですね」

なん……だと？

この世界の英世はミンミンなのか！

可愛いなミンミン！

というかそれでいいのかラナクロア！

英世のラナクロアネームに妙にテンションが上がった。

その後、少し自分の中で考えを整理したいと皆と別れ、カジノの一角にてミンミンとの睨めっこを開始して今に至るのだが……

俺は天界におけるマイ師匠。小さな眼鏡っ娘？大宮るるか？の言葉を思い出していた。

『定臣さん、お金つてある意味では世界の？共通言語？ですよね』

つまりはこういうことか。

天使は降りた世界の言葉を理解する。

通貨を共通言語と言い張るならばそれが理解できるのも当然と……

「いやはや……」

「ご都合主義ここに極まれりだな……」

だったら文字も理解できるようにしてくれと、まだ見ぬ？神？とやらに注文をつけたい気持ちもあるにはあったが、とりあえずは通貨の価値がわかるのは何かと便利かと自身の中で落とし所を見つける。

天使は適当。いやむしるテケトー。

何事もはつきりさせずに逃げ口を作っておくのは日本人の専売特許だと思っていたのだが……

まったくもって上には上がいるものである。

にしても風情が無い。ラナクロアなどというRPGっぽい世界に紙幣はないだろう。

俺的にはもつところ、金貨や銀貨を袋に詰めて引っさげたりというのを期待していたのだが……

というか英世がミンミンなら一葉や諭吉はどんなラナクロアネームなんだろうか……

知りたいような知りたくないような……

うゝむ……そもそも俺が理解できるように俺にだけ日本円に見えるだけなのかもしれん。

待て、だとすると本当のミンミンはいったいどんな姿形をしているのか……

気になってきたじゃないか。

俺の仮定が正しいとして、ミンミンの真の姿を知るにはどうすればいいのか。

まずは自動的に自身に働きかけている神力とやらを解除しなければならぬだろう……

いや、まあそんなこと出来もしないし出来るのかもわからないんだがな。

にしてもミンミン……いや、うん、まあいいんだけどな……ミンミンか……

まあ結局

『貴様、先程から何をミンミン、ミンミンと連呼している？説明しなさい』

俺の思考はルブルブのこの一言で遮られたわけだが。

「ああルブルブ、もう負けたのか？」

「いや、そういうわけではないのだが……」

王国騎士としてギャンブルの類に興じて良いものかとな

「あゝ……もしかして禁止されてたり？」

「いや……別段、禁止されているというわけではない」

「ふむ……自主的にってやつかあ」

「ルブルブって元山賊のくせに妙に生真面目だよなあ
まあそれはさておき。」

「んじゃちよつと俺に付き合つてよ」

「なっ！？だから私はこれでも女だと！」

「いやいやいやいや！そうじゃなくてさ……」

あゝ、俺ってラナクロアのゲームよく知らないから
暇してるならご教授願いたいなあゝとだな」

俺のその一言にルブルブの甲冑から覗く顔が真っ赤に茹で上がった。

「は、ははははじめからそう言いなさい！」

「あゝ、ごめんごめん」

やれやれです。

とはいえこのやりとりが功を奏したのか。

「なにをしている！いくぞ！？カワシノ？！」

この時、俺は初めてルブランに名前で呼ばれたのだった。

カツカツと前を歩くルブランの背中を追いかけながら、きよろきよろと周囲を見渡す不審者が一名。
つまり俺なわけだが。

俺の願いを何故か怒りながらも聞き入れてくれたルブルブは、予想通りというか予想に反してというか実直な性格そのままに、細かく遊戯についての説明を施してくれた。

世界が違えど人が興じる遊びは似るものらしく、カードゲームを主体にスロットゲームやルーレットゲームなど、細かい絵柄は違えどその内容やルールなどはどれも俺が知るものに近いものだった。

カジノ内を大方回り終えた頃、ルブランの背後にうな垂れるロイイの姿を視界に捉えながらも、ふむふむと頷きながら説明を買って出してくれたルブランに対して礼を述べる。

そんな俺の言葉に何故か顔を赤らめながらそっぽを向けたルブランは、背けた視線の先に何かを発見したらしく

「なんだとっ！??ニー様？お気に入りのスロットだと!?
ええいつ！何をしているかカワシノ！早くあそこに行くぞ！ついできなさい！」

などと驚いているのか怒っているのかよくわからない声を上げると、カツカツと歩いていってしまった。

「あゝ……ルブルブいないとまずいなあ……」

まあ……「こうなることがわかってて反応が遅れた俺が悪かった。そこは百歩譲って認めようじゃないか。」

しかしだ

『なあ姉ちゃん、あんたサダオミ・カワシノじゃないのかい？』

俺を勝手に有名人に仕立て上げた真っ赤な服のもみあげの奴に、非があることは否めない事実だろう。

そりや今までも街中を歩けば声をかけられることは一度や二度のことじゃなかったし、俺だって自分と同じような見た目の女が歩いてりや声の一つもかける。

でもだ

声をかけてきた男とその背後にずらりと並ぶ行列に視線を送る。

思わず溜息が漏れた。

白状しようじゃないか。

はじめから気がついてたさ。

そりや皆と別れて以来、ずっと自分の後をついてくる行列があれば気がつかない方がおかしいだろう。というか女に声をかけるのにわざわざ行列を作る必要があるのか……いや、そもそも俺は男なわけだが。

なにはともあれ？あの馬鹿？のせいで見ず知らずの人達に顔に名前まで知れ渡っている始末である。とはいえ人の注目を集めること

に関しては既に火の国を経て、大いに経験している。

こういった連中の目的は大抵は二つに分けられる。

一つはただ話しがしたい連中。そしてもう一つはあわよくば、こゝによごによな連中だ。

王国騎士であるルブランが近くにいるだけで話しかけることすらままならなかった連中である。前者である可能性が高いと見てまず間違いないだろう。

ならばここはこの場に適した対処を心がけようではないか。

「と、いうことで

」

『おついええ！リーチってやつだあ！』

サキュリアス社長、クレハ・ラナトスの声が聞こえる。

俺は軽く舌打ちしつつも頭痛に悩まされ始めていた。

現在、俺が興じているのはスロットマシンである。

そしてそのスロットマシンこそが先程からの頭痛の種でもある。

便利魔法を大いに駆使された？それ？は俺が知る箱にリールが三つな？あれ？とは少々、形状が異なり、備え付けられた椅子の前の空間に半透明なリールが五つ浮かび上がっているだけという、なん

ともコストパフォーマンスに富んでそんな造りをしている。

そんなラナクロアのロットマシンは、右手に浮かび上がるレバー的役割を演じている、これまた半透明なタッチパネルを押しこ
とによって稼動する。

問題はそこからだった。

リールに描かれたラナクロアの数字や絵柄のそのすべてにはキラリと光る白い歯。もちろん描かれている人物が着込んでいる服は真っ赤であり、その金髪リーゼントの両脇には本人同様に自己主張の強いもみあげが存在感を誇示している。

それだけでもうんざりだというのに……

「パラパラ漫画かよっ！」

思わず俺がそうつつこんだのも無理の無い話である。

稼動と同時に望まずとも目に飛び込んでくるのはクレハの不思議ダンス×5。

ゆらゆらとリールの回転に合わせて踊り始めるそれらは、もちろんリールを停止させるまで罰ゲームのごとく、うっかりとレベルダウンしそうな変な踊りをやめてはくれない。

拳句の果てに……

『おついええ！リーチってやつだあ！』

これである。

リーチがかかる度に耳に飛び込んでくるこの音声は、もちろんク
レハのご機嫌な声。

ちなみにこの声……

『おういええ！リーチってやつだあ！……おっと違ったあ！』

たまにリーチじゃないのに出しゃばってきやがるのだ。

そんなわけでなかなかイライラさせられた俺は、不思議ダンス
を少しでも早く止めたい気持ちも相まって連打に連打を重ねた挙句、
エレシから貰い受けた軍資金を瞬く間に消費してしまった。

で、そんな俺がどうしていまだに遊戯を続けられているかとい
うと

『サダオミさん！次、俺のメダル使っておくれよ！』

その声の主は、ようやく自分の出番が来たとばかりに上機嫌な様
子で俺にメダル……つまるところのカジノ内通貨を差し出してくれ
た。

そんな彼の背後には今か今かと自分の出番……つまり俺にメダル
を差し出す順番を待ち構えている男達が列を成している。

誤解の無いように言わせて頂こう。これは俺が望んだことでは断
じて無い！

そう、俺がしたことと言えば、俺の後ろに金魚のフンの様にして
付き纏っていた彼らと軽く会話を交わした程度のことだった。

しまった。

にしても……

世界が変われど俺のギャンブル運の無さは変わらずか……

とほほ……

定臣がスロットマシンでイライラしたり、ロイエルが光の速さで軍資金を摩り下ろしリングしていたその頃、想い人のお気に入りフリーズに釣られて、ふらふらと歩いてきたルブランは、なんとも難しい顔でスロットマシンと睨めっこしていた。

「おい店員」

「はい、なんでもございましょう」

「こ、こ、これは本当に？ ニー様？のお気に入りなんだろうな！？」

「はあ………？ ニー様？………ですか？」

「ド、ドドド、ドナポス・ニーゼル様だ！！」

「ひっ………は、はい、確かにそうですぞございます」

「……よし！やるぞー！」

「ありがとうございます」

バキッ

「……おい！店員！！なんだ今の音は！！」

「あ、あの……お客様、もう少し力を抜いてお願い致します（魔法パネルって剥がれるんだあ……）」

「むっ、私は力を抜いている！ほら、このようにだな」

バキッ

「お、お客様！」

「なんだこのスロットマシンは！……はっ！？これは？ニー様？のお気に入り……つまり？ニー様？はか弱いものがス、ス、スキとということなのか！？つまりつまり……女性の好みもそうなのか！？……おい！店員！」

「は、はいいい！」

「そうなのか！！」

「わ、わかりませんんんん！！」

店員泣かせなルブランだった。

一方その頃、定臣達と別れた直後にカジノスタッフによりVIPルームへと連行されたエレシは、困った顔つきで先程から小言を訴えてくる緑髪の女性に眼差しを向けていた。

「エレシ様、お越し頂く際には予めご連絡して頂かないとこちらとしても困ります」

「はあ……申し訳ありませんでした」

「そもそも、あなたはご自分の知名度の高さを認識されていないように思います」

「すみませんライト様……ですがどうしてもここに立ち寄りななければならなくて……」

エレシのその言葉を聞いたライトは、すぐになにかに思い当たると頭を抱えた。

「はあ……？ビグザス？ですか」

「はい」

「まったく……あの方にも困ったものです。？あれ？に大金を積む著名人は後を絶ちません」

そう言つとライトはエレシに耳打ちする。

「エレシ様、ご内密にお願い致します。クレハ様に？あれ？を手放すつもりはございません」

関係者が語る！カジノの裏事情！などとスクープされそうなライアットの言ではあったものの、それを聞かされたエレシに戸惑いの色は見えない。

そもそも、お目当ての品、つまりはルクセン・パロエが第一指？名剣ビッグザス？を獲得するために必要なメダルの枚数からして無理難題な設定なのである。それに加えて日付を跨いでメダルの持ち越し等は、一切行われていない始末。素人目に見ても到底、ビッグザスには辿りつけそうにはなかった。

そしてなによりもマイスターを知り、誇りを重んじるあのクレハが、易々と託された誇りを手放すとは到底思えない。エレシの思考は既にその答えを導き出しており、今更その事実を聞かされようと驚くはずもなかった。

「はい そうだと思っております」

「やはりお気付きでしたか……」

「はい ……ですが」

そう前置きするとエレシは笑顔を弾けさせる。そして何かを確信したように一つ頷くと

「すみませんライアット様……？あれ？は私の弟が頂きます」

そう宣言したのだった。

店内のBGMが突如として変わる。その直後に大音量でベルが鳴らされる。反復される単純動作に、虚ろになっていた客達の瞳に驚愕の色が灯る。その視線を一身に集めたのは一人の少年だった。

そんな少年こと、ポレフ・レイヴァルヴァンの背後には大勢のカジノスタッフが控えている。

常連客でも滅多に耳にしないそのBGMは、カジノの？目玉品？が脅かされた際に流れるカジノ側の悲鳴であり、それと共に一夜の英雄誕生を告げる凱歌でもあった。

「もうちょっとだ！……それにしても思ったより時間かかったなあ……クレハの奴、設定渋すぎなんだよな……ったく」

負けがこんでいる客が耳にすれば、殺意の一つでも芽生えそうな言葉を呟きながらも、ポレフは手を休めない。定臣達と別れて以来、雪だるま式に増やしていったメダルは今や雪崩を起こしそうな程に積み上がっていた。

イカサマを疑い、ポレフの後ろを付いて回ったカジノスタッフではあったものの、今となっては彼らの瞳にもポレフを応援する光が灯っている。

観客の声援に応えるようにしてポレフは次々とドル箱を積み上げ

ていく。

そして観客の興奮が最高潮を迎えたその時

店内に？目玉品？の獲得を告げる祝音が流れた。

そういえばポレフの豪運設定を忘れていた。ドル箱をせっせと運ぶカジノスタッフの横で、所謂どや顔で踏ん返り返っている、うちの勇者候補様を見ながら俺はそんなことを思っていた。

別れる際にエレシがポレフに手渡していた軍資金は英世……ならぬミンミン一人だけだった。それを見た俺はてっきりお子様設定な金額なのかと思っていたのだが……

エレシの奴、どんだけポレフの豪運を信じてるんだよ。

そもそも明らかに未成年であるポレフやロイエ、それにシアの入場を許すどころか遊戯すらも許容しているラナクロアのカジノってなんなのだろうが。

『夢を見るのに大人も子供もないだろうがよお〜』

どこかからもみあげアンポンタンの声が聞こえてきた気がした。

それにしても……

「ロイエ、元気出せて！なっ、俺も負けたしさ」

足元のチンチクリンに声をかけてみる。

「定臣はいいわよう……色んな人から次々とお金貰ってさ、僕なんて全然遊んでないのよ！」

なにそれ、人聞き悪い。

「あれはまあ……不可抗力？……みたいなの？」

「うう」

さらにチンチクリンになられた。

話し相手が豆サイズになってしまったので、仕方なく周囲を見渡してみる。俺はエレシが消え去った方角へと視線を送った。

先程、どこからホールに現れたエレシは、早々にファンの波に飲まれて今ではどこにいるのかも確認できない。その際に、俺の取り巻き共も一緒に掻っ攫っていつてくれたので、秘かに喜んだのは秘密だ。

続いて背後へと視線を送る。俺の背後で壁に背を預けているルブは再会して以来、ずっとなにかをぶつぶつと呟いている。なにやらご機嫌ななめな様子なので、これは話しかけない方が得策だと判断する。

そこで気が付いた。

あれ？そういえばシアがない。

「なあロイエ、シア見なかった？」

「うう〜……見てないわよお〜……」

「ううむ、相変わらずの謎子ちゃんか」

「なによそれ」

「不思議ちゃんでもいいよ？」

「あんたも充分に不思議でしょ！」

「まあ……それはさておき」

「さておかないですよっ！」

「にしてもシアって謎だよな〜」

「話聞きなさいよっ！」

「にしてもロイエってチビだよな〜」

「うっさいわねっ！僕の身長がなんで急にでてくるのよっ！」

そうこうしてる内にアナウンスが流れた。

『さあ！今宵はカジノ？クレハの夢？にとって歴史的な夜となりました！今まさに彼の名匠、ルクセン・パロエが一指、名剣？ビッグザス？を手にしようとしているのは一人の少年です！』

カウンターには踏ん返り返ったポレフの姿。大勢の観客が見守る中、カジノスタッフのマイクパフォーマンスが光る。そして盛大な拍手に迎えられながら、ポレフに目当ての品が手渡されようとしたその時

事件は起きた。

『おめでとう！今宵、あなたはキングとなった！さあ、声援に応えてあご』ちよつと待った』

マイクパフォーマンスを遮ったその声に思わずロイエと顔を見合わせる。二人同時に振り返った先にはやはりシアの姿があり、そんなシアとその背後に控えるものを直視したポレフは、なんともまぬけな顔で金魚よろしく、口をパクパクとさせている。

『え、えつとお……？』

そんな眩きを漏らしたパフォーマンスに、シアの背後に控えていた別のスタッフが駆け寄り、耳打ちする。パフォーマンスは一瞬、驚いた顔を見せるがすぐに取り繕い、営業スマイルに戻る。そしてゆっくりとマイクのようなものをシアへと手渡した。

『あー……あー……まさむね青いなあいうえお』

「あいつなにやってんの！？あいつなにやってんの！？」

「わかんない！あの子がわかんない！」

あまりなマイクテストに思わず二人で叫んだ。

そんな俺達をよそにシアは淡々と告げる。

『とりあえずそれ四本』

静まり返る場内。

シアが指しているのはポレフが受け取るうとしていた名剣？ビッグザス？であり、そんなシアの背後にはポレフを遥かに凌駕するドル箱が積み上げられていた。

観客の視線がゆっくりとシアの指す先に移動する。それから今度はシアの背後へと移動する。

そして

『わあああああああああああああ！！！！！！！』

大歓声が沸き起こった。

唾然とする俺。なんか泣き出したポレフ。そして俺の足元のロイヤは

「シアが謎で不思議でシアなのよ！？」

なにか混乱していた。

主人公陥落。

床に寝そべるポレフの頭上にそんなテロップが見えた気がした。

今回、ポレフはよく頑張った。

忘れかけていた豪運設定を駆使して、不可能を可能にした。

踏ん返り返るポレフの姿には若干、イラッとさせられたりもしたが正直少し安心した。

なんせポレフは影が薄い。

というより他のメンバーが濃い過ぎるせいもあるのだが

ともあれ、ようやく主人公らしく目立ちかけていたんだ。

それなのに

「定臣、四本は無理って言われた」

如何にも不服そうにのたまったのは、我がPTの？謎子ちゃん？
シア・ナイだった。

「そりゃ、残念」

肩をすくめて見せる。

「二人ともポレフは放置！？ 放置なの！？」

「うん、残念」

「まあ、一本あれば目的達成だしさ、エレシも喜ぶよ、きっと」

「うん」

「僕も放置！？ 放置するの！？」

赤髪ちびっ子は今日も元気だった。

大戦斧が不機嫌そうにカツカツと歩いていく。

大歓声の中、お目当ての？ブツ？を手に入れた俺達は、どこかへ連れ去られたエレシを迎えに行くべくカジノ？悪夢？を後にした。

「ス、スロットのボタンを押せたからといって、貴様のことを認め
たと思うなよ！」

カジノを出る際、ルブルブはポレフを指差しこんなことを言っ
ていた。

どうやらそれが不機嫌の原因らしいのだが……

「ボタン押せなかったのか…… ルブルブよ…… いや、怪力よ」

「カワシノ！ なにか言っただか！？」

なにも言っていないことにしよう。

それから暫く歩くと、遠目に見ても『あつ、エレシあそこだ』と
わかる人だかりを発見した。

人だかりを掻き分ける。

途中、足を踏まれたルブルブが加害者を被害者に変化させたりも
したが、進行速度は概ね良好。

そしてようやくエレシの姿を視界に捉えたその時

凍てつく空気を肌を感じると共に、俺達は戦慄した。

「ポレフの活躍を見れませんでした」

潮らしくも怒気を孕んだ声色が大気を震わせる。

そんなエレシの周囲には男達が土下座する姿。

そこに向ってポレフが脊髄反射的にスライディング土下座する。
何故だ。

ともあれ、すべての事象に例外無く、解決策が存在するように、
このエレシ・レイヴァルヴァンにもなんとわかりやすい解決策が
存在していた。

まあ、ようするに

「ポ、ポレフ」

寂しかったですよ

「

カンフル剤は今日も快調だった。

一路、足並み揃えて名工のもとへ。

その人は酒場に居た。

いつ来るとも知れないポレフをそこで待ち続けると宣言したあたり、なかなか豪快な人のようだと判断する。

服の街？ルツセブルフ？の夜は、その肩書きを完全に手放すことに決めたらしく、今夜も謎パレードやらピンクの空気を漂わせたカップルなどが闊歩している。

それらを傍目に、ぼんやりと佇む。

カジノの騒音に慣れた耳は、街の喧騒を穏やかに捉えていた。

「エレシ、機嫌直せって、ポレフの意思なんだし仕方ないじゃん？」

酒場に入ったのはポレフ一人。なにかと知名度の高いエレシや、何故か知名度を高くされてしまった俺は、気性の荒い男達のためり場に不向きとあって、他のメンバーと共に酒場の影に隠れるように待機している。

「エレシ」……今生の別れってわけじゃないんだしさ？」

そんなわけで、ようやくポレフと再開したエレシは早々に離れることになり……といっても壁一枚挟んでいるだけなのだが…

…

「定臣様 …… 私はなにかいけないことをしたのでしょうか ……
私は …… 私は ……」

今生の別れだった。

「おやおや？ …… 随分と早いじゃないのさ」

カウンターが一番奥の席、その人はさも自分の家がそこであるかのように、悠然と寛くつろいでいた。

名工、ルクセン・パロエ。

巷では死亡説なんかも囁かれていたけれど、間違いない。この人は紛れもない本人だ。

一流の前に？超？がつく？マイスター？だけが醸し出す独特の雰囲気。物心ついた頃からずっと近くで感じてきたその雰囲気こそ告げていた。

「ん！約束の」

そう言って差し出す。ルクセンが受け取るうとしたその手を思わず凝視する。

「おや〜？ その子と交換じゃなかったのかい？」

どこか嬉しそうな、そんな声だった。

「やっぱりいい剣だよな！ ビグザスも！」

すくと立ち上がる。

「ふふんっ、ポレフ、君はやっぱり良いねえ」

がらりと変わった雰囲気思わず背筋を伸ばした。

「ここにその子連れて来たってことは……
そうかい。ジヨジさんは君を認めたのさね」

対するルクセンは壁に背を預けることを選んだ。

「さて、本題に入ろうじゃないか」

狐目が怪しく光る。綺麗に揃った毛先がさらりと流れる。

これから始まるのは儀式だ。

マイスターは担い手を選別する。

その代行者たるマーケットターを介して儀式は行われる。
それをマイスター自ら、行おうというのだ。

「うん！」

自然と大きな声が出ていた。

「ふふん、少年は元気が一番さね」

「俺は子供じゃないぞ」

「子供は皆そう言っつものよ」

そう言っつと差し出す。

鞘に納められているというのに？それ？は薄ら寒くなるような殺気を帯びていた。

それを差し出した彼女は薄い唇を指先でとんと叩く。
そして哀切とも慈悲ともつかない微笑を浮かべ。

「この子は……アタイの？禁忌？。そしてアタイの最後の作品だよ」

そう宣告した。

マイスターの覚悟。マイスターの誇り。
それは俺にとって特別なものだった。

それを特別にしたのは？誰？だっただろうか。
傍らでいつも微笑んでくれる姉よりも前に、その人は居た気がする。

ルクセンの表情があまりにもその人に似ていて。
俺は忘れた記憶を少し掘り返した。

「なんだい？ なんだ？い？ なにかお言いよつ、ポレフ！ つれないじゃないさね」

「え……あ、ああごめん！」

ポレフが酒場に入店してから十数分。もはやエレシは天寿をまっとうしそうな勢いで萎びていた。

「あっ、ポレフ」

「どこ！？ どこですか！？」

「いじめ、嘘」

「ずぞーっとこけられた。」

「定臣、お姉様をいじめないで」

「ひどっ！定臣ひどっ！」

「貴様の人をこけにするようなところだけは気に入らん」

「ものすごい悪者にされました。」

「うう、俺は少しでもエレシに元気を出してもらおうとだな」

「嘘」

その瞳の色に嫌な予感を覚える。
謎子ちゃんの目は笑っていなかった。

「ポレフ …… ポレフはまだですか？」

「あ、今度こそポレフ『まさむん』させないよ!？」

天下の名刀を不発に終わらせる。

エレシに気を取られた瞬間に背後に忍び寄ったシアは、案の定、
抜刀の構えをとっていた。

「 …… 不発 …… 不覚」

両肩を俺にがっしりと押さえつけられた謎子ちゃんは、なにやら
ものすごく残念そうだった。

でも仕方ない。無実の罪で？アレ？の餌食になるなんてまっぴら
ごめんだ。

視線を酒場の入り口の方へと向ける。

「皆！ お待たせ！」

我がPTの勇者候補様のご帰還だった。

勇者を目指して？

『いけー！ー！！ ビグザスー！！！！』

宿屋の裏手、深夜に傍迷惑な叫び声が木霊する。
声と共にへろへろと中空を漂ったひし形は、名剣ビグザスだった。

時は僅かに遡る。

それは宿に落ち着き、就寝を迎えようとした時のことだった。

コンコン。

「ん、開いてるよ」

「定臣！ やった起きてた！」

「ポレフか、珍しいな。というかエレシからよく脱出できたな」

「なんとか …… それより定臣！ いいもの見せてやるからちょっと来いよ！」

嫌な予感がした。

そもそもこの台詞を吐いた奴が本当に？ いいもの？ を見せてくれた例がない。

「あゝ …… パス。今日はもう寝ようぜ」

「……」

「ポレフ？」

「お、俺は手に入れちまったんだよ …… 姉ちゃんにはまだ言っていないんだけど、これは大きな力だ …… それもとんでもない力なんだ」

わなわなと手を見つめながら、そんなことをのたまった。

そして時は今に至る。

「どうだ！ 定臣！！」

どうだもクソもない。連れ出された先で待っていたのは、とびきりの厄介事だった。

酒場にてお目当ての剣を手に入れたポレフは、何故かビッグザスも譲り受け、二刀流となって帰って来た。

それはいい。

扱いは慣れるまでには相当な努力が必要だろうが、歳相応の実力しか兼ね備えていないポレフにとって、良質の武具は大きな味方になってくれるだろう。

でも、だ。

「これがあれば俺、魔王に勝てるだろ！」

無理である。

恰幅の良い商人が、戦闘とは畑違いの努力を重ねて名剣を手にいれようとも、楽になるのはせいぜいスライム戦くらいなものだ。そうだろう？ ポルネコよ。

よく、過ぎたる力は身を滅ぼすなんて言葉を聞くが、正にそれを

目の当たりにした瞬間だった。

「どっつしてそう思った!？」

思わず叫んだ。

「だってこの剣、飛ぶんだぜ!？」

確かに飛んでるな。へろへろと。

にしてもポレフのこの自信はどこから湧いてくるのだろうか。

調子に乗りやすいのは子供にはよくあることだ。しかしそれとは別に、なにかが引っかかる。

もしかして不死にしたのがバレた？

だとしたらあまり良くはない。ゾンビアタックに慣れられれば、後には本当のゾンビ化が待ち受けている。

それに

「なあポレフ、本気でそう思ってるなら俺と一度、手合わせしてみるか？」

根拠の無い自信は嫌いだ。

一度、身の丈を思い知らせてやるのがポレフのためになるだろう。

「え…… 定臣って戦えるの？ 背中の剣とか意味あったのか!？」

ものすごい意外な顔をされました。

やれやれ。

「実は結構、強いんだぜ？」

ゆるりと抜刀する。ポレフが呆けた顔でそれを見る。

それからすつと構えた大太刀の先端をポレフに突き出し、宣言した。

「さて どこからでも？」

僅かに痺れの残る手をじっと見据える。

あれからポレフは必死になってかかって来た。

初撃は腹に、蹲ったところを頭に一撃。

もちろん手加減はした。

それでも心を穿つだけの威力は籠めたつもりだった。

「女にやられっぱなしで終われるかよ!!」

二十回程、地べたに這い蹲った時には泣きながらそんなことを叫んでいた。

うん、男の子だねえ。まあ俺も男なわけだが。

それにしてもポレフのこの硬さは何なのか。手ごたえ的にはマノフの外皮よりも遙かにといったところだろうか。ともあれ、その硬さがあの自信過剰の温床となっていたのだろう。

と、いつこつで

徹底的に、完膚なきまでに、それが無意味であることを体に叩き込んでやったわけなのだが……

「フハハハハ！！！ 見る！！ 俺がゴミのようだ！！」

ジーザス。なにやら後ろ向きな大佐が出来上がってしまった。

にしても、諦めの悪いこと悪いこと。

その姿に思い出す。

確か小夜子と初めて手合わせした時もこんな感じだったっけ……

「おりゃあああ！！」

そうそう、気絶するまでかかって来たんだよなあ小夜子のやつ。

「くっそおおおお！！」

うん、うん。男の子だねえ。まあ小夜子とはびきり可愛い女の子だったわけだが。

その姿ににんまりと笑う。そして

「今日はここまでかな」

ザンツと胸払いを打ち込みポレフの意識を刈り取った。

翌朝。

「で、こうなったわけか」

目覚めの第一声はそれだった。

「よろしくおたの申します！　よろしくおたの申します！..!」

眼下に見えるはポレフの後頭部。その背筋はぴつと伸ばされていた。つまりは土下座状態である。

「定臣様、私の方からもお願い致します」

その隣には神妙な面持ちで同じく床に正座するエレシの姿があっ

た。

まあなんというか ……

「弟子って言われてもなあ …… 実は俺、心に決めた弟子がいるんだよね」

心に決めた弟子ってなんだ。呟いた自分に思わずつつこんだ。

にしてもポレフを弟子にねえ …… というか小夜子に会いてえ！
！すこぶる会いてえ！

「定臣様？」

「はっ …… ごめんごめん。まあそついうわけなんで」

「頼むよ定臣いー！」

「えー …… というか定臣の？み？の後ろに小さい？い？を付けるな！ それは小夜子の専売特許だ！」

「？」

「えっと、まあその …… ポレフのビッグザスってさ、どちらかと言えれば剣術というより魔法じゃない？」

へろへろと飛来するビグザスを思い出す。

ポレフの指示のままに中空を彷徨うそれは、剣というよりは担い手をサポートするサブ機能的な印象を強く受けた。

当たり前の話ではあるが、剣が空を飛ぶなんてことは有り得ない。そしてこのラナクロアにおいて、不可能を可能とする事象は？魔法？と相場は決まっている。

ならば

「剣じゃなくて魔法ならば、エレシに習うべきじゃない？」

その言葉がエレシに影を落とした。

「定臣様 ……」

そう前置きするとエレシは力強く言い放つ。ポレフには過去に何度も、それこそ何度も魔法を学ばせようとしてきたのだと。そしてそのすべてが徒労に終わったのだと。

魔法の使えない勇者とはこれ如何に。

自分の中の勇者の代名詞を思い浮かべてみる

器用貧乏。

それからポレフを見つめてみる

不器用貧乏。

あまりに不憫だった。

「えっと……ん、弟子かあ」

P Tの戦闘力ヒエラルキー最下層のポレフ。
勇者になって魔王を倒したい言ったポレフ。
人々に安寧の日々を約束したいと誓ったポレフ。

確かに今のままじゃ、きついかあ……
仕方がないか、ここは俺がひと肌脱ぐか。

「わかりました定臣様」

「う？」

「確かに下界の民に天界の技術を授けて欲しいなどと、無理なお願いでしたね」

あれ？ 今、俺結構ノリ気になってたよ！？

「そこで一つ提案がございます」

「？」

「私達、マイスターは定期的に技術交流を行い、より高みを目指して日々、研鑽を繰り返して参りました」

ですから、と

「私と技術交流を行って頂けませんか？ 私に天界の剣術を授けて頂く代わりに、私は定臣様に魔術、魔法の知識を提供させて頂きま

す」

いや、そもそも天界の剣術じゃないし。

とはいえ、それは願ってもない申し出だった。

任務とは別に定められた天使としての役割を思い出す。

スキルの習得。

降りた世界において新たにスキルを身につけ、そのスキルにおいて世界最強を目指す。恐らくはこの解釈で合っている。

そしてこのラナクロアにおいての新しいスキルとは、魔法ないし魔術のことで間違いないだろう。

というか

魔法使ってえ!!! かけー!!!

「えっと……」

「駄目…… でしょうか？」

渾身の上目遣いを見舞われた。

「い、いや、いいよ！ OKだよ！ OK!」

「本当ですか!？」

「わ、わかったから！ 近い！ エレシ近い！」

にしても

「なあエレシ、俺がエレシに剣術を教えて、それをエレシがポレフに教えるのか？」

「はい」

どこかで聞いた話に思わず笑みが零れた。

「定臣様？」

「いや、なんにもない、なんにもない」

「定臣！ なに笑ってんだよ！」

「ん、内緒だよ、ナ・イ・シヨ」

あ、…… 小夜子に会いたいなあ

そんなことを思いながら天井を眺める。

そこで気が付いた。

「あ！ …………… マリダリフ」

「おっほほ」

ポレフが定臣に弟子入りを果たしたその頃、隣部屋のロイエル・サーバトミンは手元の水晶玉に朝の挨拶を交わしていた。その顔には嬉しさが溢れ出している。

『め、珍しいね …… ロイエがこんなに朝早く起きてるなんて』

水晶玉が驚いた声を出す。その中に映し出されていたのはキカ・サミアリアスの姿だった。

「だって昨日はまともにお話出来なかったし」

その言葉に二人は昨日のやりとりを思い出す。何故か命を救われたロイエルはわけのわからないままに、とりあえずは、と僅かな気まずさを感じながらもキカに連絡をとった。

『もう …… 馬鹿』

「でもありがとね まさかキカがあんなに泣いてくれるなんて」

『 …… ロイエ、約束して』

「うっ」

『もう絶対に …… 自分の命を軽んじないで』

「ぼ、僕は別に……」

『いい？』

キカの声色が僅かに変わる。静かなその声には僅かな憤りと深い思いやりが含まれていた。

それをロイエルは静かに目を瞑り汲み取る。

思慮が浅く見えがちなロイエルではあるが、キカのためには自らの命を投げ打った？あの時？の決断は決して容易いものではなかった。その点においては反論したい気持ちはあったものの、ロイエルはその感情をそっと押し殺す。

彼女のためを思ってた自分の行動が、彼女をどれだけ苦しめたのか。

それは昨日、連絡をとった際の彼女の枯れた声に、疲れ果てた顔を見れば容易に想像できるし、その後の涙にあの嬉しそうな顔を見せられれば、もう何も言えない。

？ありがとうキカ あなたがいてくれてよかった？

ロイエルは心の中でそう呟くと笑顔を弾けさせた。

「うん！ 約束するわ！」

『うん、約束だよ？』

「うん！ …… キ力？」

『ん？』

「大好きだよ！」

『 …… それ、誰にでも言っちゃ駄目だよ？ 例えば今、後ろで驚いている子にとか』

「え？ 後ろ？」

言われて慌てて振り返る。ロイエルを迎えたのは、まぬけ面を口をぱくぱくさせているポレフの姿だった。

「ポ、ポレフ！？ いつからそこにいたの！？」

「い、いやぁ …… 俺、定臣の弟子になったからそれを誰かに伝えたくてロイエの部屋が近くて来てみたらロイエがなにやら可愛い女の子といちゃいちゃして俺まさかロイエがそっちの子だと思っ
てなかったからどうしたらいいかというかなんか ……」

「なんでそんなカタコトなの！？」

「俺、フラレターー！ー！！！」

ロイエのつつこみと共にそんなことを叫びながらポレフは走り去っていった。

「な、なに？」

『ふふ、少し安心した』

「よ、よくわからないんだけど」

『私はロイエが楽しそうならそれでいいから……あ』

キ力が何かに気付いたような声を上げる。

『（キカさん？ あら、魔法水晶なんて眺めてどうなさいましたの？）』

その直後、水晶玉の中から遠巻きに声が聞こえてきた。

「その声…… ルクエ・マリネ？」

『ロ、ロイエル・サーバトミン！？ 無事でしたのね！？』

「う、うん、お陰様で…… お姉様に聞いたわ。あなたが知らせてくれなければ僕は今頃、死刑にされてたって」

だからと、前置きするとロイエルは押し黙る。水晶玉の向こうではルクエも同じく沈黙していた。

ルクエは自分に負い目を感じている。それを認識しつつも、あえて気付いていないフリを続けてきた。そうすることでいつか自然に自分と接してくれるようになるものと思っていた。

しかし自分のその判断は逆にルクエを苦しめ続けていたのかも
れない。ここで普通にお礼を言えばまた彼女のプライドを傷つけて
しまうかもしれない。

だったら僕は

ルクエが求めるままにライバルでいることにしよう

「だから……そうね、これで今までのことはキャラにしてお
けるわ！」

「なっ!? ななななななんですって!! あなた!あなた!!あ
なた!!!あなた!!!!!」

「許してあげるって言ったの」

「わ、私は別にあなたなんてどうなっても構いませんでしたのよ!
? それをなんですの!? 少し甘いところを見せればすぐにつけ
あがって! 私は……そうですわね……私は……」

「僕に勝ち逃げされるのが嫌だったんでしょ?」

「か、勝ち!? 私は負けてなどいませんわ!!」

「『ほげっ!』とか言っつて気絶してたじゃない」

「そんな美しくない声なんて出しませんわ!!」

「ほげっ！」

『もおおおおおおおおっ！！！！！　なんですよなんですよ！　あなた！！』

「あはは、ルクエはそれくらい勢いがあった方がいいんじゃない？」

『！？　……　くっくっくっくっ！！！』

ルクエの絶叫が遠ざかる。話し相手はキカに交代したようだ。

『ロイエ、それは良い方法だと思うけれど、あまりルクエはからかわないであげてね』

「うん、それは大丈夫　私もキカと同じくらいルクエのことが好きだから」

『なああああああ！？　あなた少しサダオミに汚染されたんじゃない？』

「今、キカのこと押しのけたでしょ」

『（ほげっ！）　……　押された。　だから今、押し返しておいたわ』

「あ、あはは　（ルクエ大丈夫かなあ）」

『ロイエ』

「っっっ」

『これからもできるだけだけ連絡してね』

「うん！」

それからしばらくの間、キカの姿が消えた水晶玉をロイエルはここにこと見つけていた。

一路、西へ。

サキュリアス社長、クレハ・ラナトスが故郷？服と変な巨像の街？『ルツセブルフ』にて一夜を過ごした勇者候補ポレフと愉快な仲間達一行は、当初の予定通り？鞆の街？『シイラ』を目指していた。

ようやくここにきて希望が叶った定臣であったが、その表情は豪雨寸前の雨雲よりもどんよりと暗い。そんな定臣の傍らには、この世の終わりのような顔をしているポレフの姿があった。

「うゝ……」

「あゝ……」

どうにもテンションが上がらない。

というかポレフまでテンションが低いのは納得がいかない。

俺がこいつならば間違いなく有頂天になっている。というかなりたかった。

『ええいつ！ 貴様らっ！ 朝からなんなのだ！！』

なにやらブルブルに怒られた。それがどうかしたか。今の俺はその程度では動じない。

「定臣、いい加減に機嫌直しなさいよ」

テンションただ下がりの元凶がなにかを仰っています。ロイエル・サーバトミン。通称？豆？

「なにか今すごい馬鹿にされた気がするわ！」

地の文につっこむのはロイエの才覚なのだろうか。時折なにかを超越してくる彼女をじと目で見ながら

「はあ ……」

いつもより深い溜息をついた。

「もう！ 今度はちゃんと呼ぶから！」

そう、こともあろうに豆っ子ロイエは、俺のキカに連絡をとったのに俺を呼んでくれなかったという大罪を犯したのだ。俺のテンションが深海一万メートルの海よりも深く沈みこんだのも、致し方ないことだろう。

とうとうとで

「はあ ……」

本日の俺製二酸化炭素はいつもより哀しみ成分含有率アップである。

まあ、なんだ ……

こんな感じのことを繰り返していると、PTのジャスティスが天高く舞い上がりかねないのでこころいで

『まさむねっ！』

ほらね。

ひよいと回避して隣に目をやる。案の定、餌食になったのはポレフだった。

それにしても相変わらずにエレシの目を掻い潜っているのは、もはや神業としか思えない。

そんな感じで、お約束になりつつある、謎子ちゃんが謎子ちゃんたる所以を垣間見た俺達は、いつもの呑気な雰囲気を取り戻しつつ旅路を進めていった。

謎子ちゃん、つまるところのシア・ナイはこう見えてなかなかPTの？輪？を重んじている節がある。彼女のジャステイスソードが放たれる時、それはPTの雰囲気は乱れつつある時なのだ。

…… ジャステイスソードってなんだ。

時刻が昼を過ぎた頃、またしてもエレシの謎携帯料理を振舞われ

た一行は意気揚々と城壁に沿う形で西へと旅路を進める。

数時間後、一行は漆黒の城壁と城壁の継ぎ目、一目に厳重な警備が施されている区間へと到着する。

入壁の際には？ファステル？などを用いた厳重な入壁検査が必要であった？エドラルザの城壁？も、内から外へと出る際にはそれらが必要としない。

ここでのやりとりは、王国騎士鎧に身を包んだルブランが歩み出、見張りの任に就いていた騎士達に敬礼するだけに終わった。

「おでましってやつだな」

城壁の外へと歩み出せばそこは別世界。黒い城壁は生と死の境界線にして世界国家エドラルザの象徴。

否が応でも襲い来る魔獣達がそれを思い出させてくれた。

「ポレフ、とりあえず抜刀禁止な。最前線に突撃して魔獣の攻撃をひたすら回避すること」

俺、スパルタな。

剣術に関してはエレシづてに、実戦の指示はすべて俺に任せると
いうのが弟子入りの際に俺がエレシと交わした約束だった。

自分はポレフに甘すぎるからと、心を鬼にして俺にその提案を持
ちかけてきたエレシに軽く感動したのは言うまでもない。その心意
気を汲んでやらんでなにが？漢？か。

と、いうことで

「ぬるい。あと十歩は前に行こうか。あゝ、自分が人より頑丈
だから攻撃くらっても大丈夫とか思うなよ？」見る！俺が踏み
ちゃんちゃんこのぼろ雑巾のようだ！』って泣き叫んだのを忘れる
な！」

おー、おー、必死必死。

『ぼろ雑巾じゃねー！ゴミって言ったんだああああ！！』

馬鹿弟子の絶叫が木霊する。

「なんだ、まだ余裕か。んじゃ、さらに十歩前進！」

『鬼か！？ 急に鬼なのか！？』

「え？ なに？ 十歩じゃ物足りない？ 勇者候補様はさすがだな
」

『いやあああああああ！！』

まあ……

ポレフのレベルが5になった！

つてところかな？

鬼コーチと化した定臣の指導のもと、ポレフは魔獣の猛攻を回避し続ける。

その先に待つのは必然。本人の意思とは裏腹に体力は自ずと限界を迎えた。

襲い来るは魔獣の凶刃。息を乱し、その場に座り込んだポレフは、
為す術も無く、虚ろな瞳でそれらを待ち受ける。

その刹那。

轟いたのは雷鳴。

大地を走るは疾風。

嵐のごとく舞うは大戦斧。

あたふたと慌てるロイエル・サーバトミン。無機質な瞳と書いて、
どうでもよさそうな感じと読む。でポレフを見据えていたシア・ナ
イを置き去りに飛び出したのはエレシ、定臣、ルブランの三強だっ
た。

僅か数分。ポレフの息が整った頃には三人の掃討作業は終焉を迎
えていた。

…… 的なことが幕間にありましたとき。 by シア・ナイ

ポレフにエレシか ……

先程の光景に思いを馳せる。

予想通りにしよぼかったポレフに、予想を遥かに上回るエレシの圧倒的な実力。

恐らくはその圧倒的な実力に、あの溺愛っぷりを付与してエレシはポレフを鉄壁の過保護をもって育ててきたのだろう。

そのことは俺よりもルブルブよりも、早く飛び出した先程のエレシの行動が証明していた。

うゝむ ……

ポレフはあれで結構、根性が座っている。恐らくは多少、雑に鍛えてもついてくるだろう。

問題なのはポレフよりもエレシである。

さっきのでちょっと泣いてたしなあ …… エレシの奴。

これはエレシの方も少しずつ鍛えていくしかないか。主に精神的に。

あの溺愛っぷりがポレフにとって良くないって自覚してるだけに、なかなか厳しくも出来そうにないが……

まあそんなわけで……

小さな決意を胸に秘めつつ、魔獣が出現する度にポレフを突撃させる旅路を続けた俺達は、日が落ちる頃には目的の街『シイラ』へと到着を果たした。

情報収集するには、酒場だろうということだ『とりあえずビールね！』なノリで一路、酒場へ。

例によって俺とエレシはアレなため、そしてロイエとシアもなにかとアレなため外で待機することに。

そんなわけでここでは再び、リーダーにして最も知名度の低いポレフと、その保護者的役割としてルブルブが出陣することとなった。そして、もちろんエレシは号泣した。

しばらくして戻ってきたポレフとルブルブの話によると、待ち人ならぬ待たせ人？マリダリフ・ゼノビア？は律儀なことに、まだこの町に滞在していてくれたらしい。というか、むしろこの酒場がマリダリフの拠点だった。

やれやれ、ようやく再会か。などと安堵したのも束の間、残念なことにマリダリフは不在とのことだった。

むむむ。と顎に手をやる。そんな俺にルブルブは一つの情報を提供してくれた。

意外と気が利くんだよなあルブルブって。

ルブルブの話によるとマリダリフは現在、就業中とのこと。

情報によるとマリダリフは、毎夜毎晩、日銭を稼いでは傭兵仲間を連れ立っての大宴会を開いているらしく、割りの良い仕事が入った時は時間を問わず、飲み代を稼ぎに出かけているらしいとのことだった。

『宵越しの銭は持たねえ』ってか……　そういうノリは大好きだ。

そんなことを思いつつ、若干にやけていた俺に新たな情報がもたらされる。

「それとこんな言葉が口癖らしい」

その前置きに嫌すぎる予感がする。

一瞬、身構えた俺を気に留める様子も無く、ルブルブは無情にも告げた。

「定臣は俺の嫁」

ぼそりと。

「……いやあああああああああ」

頭を抱えてごろごろと転がった。

「お前は……」

そんな俺に蔑む様な視線を落としながらルブルブは

「たらしだ」

そんな理不尽なことをのたまうのだった。

さて、マリダリフに会いに行こうじゃないか。

傭兵の出先といえばこと決まっている。

遠目に見える二つの建物に果てしない既視感を覚えつつも、そこが目的の場所であることを確信した。

?旧?傭兵雇用所。

と、その隣にサキュリアス支社。

相変わらずに瓜二つである。この分だとクレハの幼稚な対抗心から始まった物真似建造は、鉄壁の拘りをもって全世界に散らばっているのだろう。…… やれやれだ。

まあ、アレは置いておくとして。

サキュリアスに与しない傭兵、つまるところの無所属なマリダリフは恐らく?旧傭兵雇用所?を利用しているのだろう。

……と、いつか、さっきからぶつぶつと念仏のようになにかが聞こえてくる。

「 がっのん …… 」

むむむ？

「 違っのん …… 」

違っのん？

「 俺、たらし違っのん) ぼそり) 」

念仏の正体は俺だった。

「 ほら、定臣！ いつまでぶつぶつ言ってるのよもっ！ 」

ふむ、ロイエの呆れ顔の度合いから察するに、なかなかぶつぶつ言っていたらしい。

恐るべしブルブ。何気に後を引くショックを与えてくれる。

ちらりと。

「なんだたらし。前を向いて歩きなさい」
たらして。

「……はあ」

「人の顔を見て溜息はやめなさい」

「ルブルブってさあ」

「なんだ」

「秘かに美人だよな」

「……!?」

ぼんつと音が出そうなくらい赤くなりましたとさ。

うむ、相変わらずに期待通りの反応をしてくれる。ルブルブいじりは趣味の一つになりそうだ。むしろ趣味だ。ライフワークだ。

……まあ、実際に美人だし。嘘は言っていないからokってやつだ。

などとにかくにやしていると

「クウ〜ワア〜シィ〜ノ〜」

怨嗟染みた声でブレンドの効いた感じで名前を呼ばれました。

「い、いやー！ やめてー！ 今のはほんのスキンシップよー！」

「やかましい！！　そこになおれ！！！」

大戦斧の嵐キターーーーー！！！！

つてな具合で、逃げるようにして……　まあ、実際逃げたわけだが。それも死に物狂いで。
なにはともあれ、そんな感じで勢いのままに旧傭兵雇用所の中へと突入したんだ。

そんな俺の後ろ姿を呆れ顔で眺めながら

「無駄に元気」

などとシアさんが仰ったとか仰っていないとか。

RPGあるある～！

イエーイ！　ドンドンドンドンパフパフ

再会を約束した人と一度会い損ねると、ひたすらたらい回しにさ

れる〜

あるある！

苦勞の末にやっと再会したと思ったら何故か敵になってる〜

あるある！

しょうがないから頑張って倒して仲間にしたら、敵の時より明らかに弱くなってる〜

あるある！

と、そんなことを脳内で口ずさみながら、先程から地べたに突っ伏したまま、悲しみオーラ全開なマリダリフへと視線を送る。そんなマリダリフの傍には不機嫌そうなルブルブの背中が見えていた。

いやはや、実に見事なビンタだった。

先程の出来事を脳内でトレースする。

勝負！ 勝負！ 勝負だああ！！

ええいつ！ やかましいわっ！ バシンー！！

終。

にしても懲りないなあ …… マリダリフの奴。

マリダリフがPTに加わってからの数日、この光景は幾度となく
見てきた気がする。

というか、再会するなり俺にまで挑んできやがった。

ん ……

そうだなあ

あれだけ引つ張りに引つ張られた末の再会だったわけだし、とり
あえず軽く振り返っておこうか。

まあ、軽くと言いつつ、それなりに長い話にはなるわけだが。

マリダリフに会うために？旧傭兵雇用所？に向った俺達を出迎えたのは閑古鳥だった。

いや、まあ実際にこのラナクロアにカツコウなんていないわけだが…… いや、いるのか？

まあそれはさておき、まずは寂れた？旧傭兵雇用所？の寂れたカウンターまで用件を尋ねるべく向かう。そんな俺の背中に 『思っ
ていても口にする奴があるかっ！』 などとルブルブが罵声を浴び
せてきたりもしたが …… って口に出してたのか俺！？ どうり
で受付のおっちゃん、むっすりしてたわけだ。ここにきて謎が解け
た。

で、受付のおっちゃん曰く。

『ふんっ！ マリダリフの旦那ならばらく戻らねーだろうよ。
今回の任務はちっと厄介でなあ』

とのこと。

仕方がないのですぐ様にPT会議を開催。話し合いの結果、満場
一致でマリダリフの帰りを待ってもらえることに。

で、始めの二、三日は各自、自由行動ってことになったわけだが

…… ここにきて一つの問題が発生した。というか、今までエレスに甘え過ぎていたツケが回ってきたと言っべきか。

事の発端はこうである。

「定臣、お金がないわ!」

言葉の内容とは裏腹に元気な声を響かせたのは、豆 …… ならぬロイエル・サーバトミンだった。

「大丈夫だロイエ。俺もない」

即座に切り返す。

俺の返答を聞いて 『全然大丈夫じゃないわ!』 などと既に涙目なロイエの頭を軽く撫でつつ、周囲を見渡す。そんな俺の視線と無機質な視線が交差した。

「私もない」

呟きの主はシア・ナイである。悪夢的な名前のカジノで大勝した

はずのシアは、ポレフにお目当ての剣を与えると、何故か残りの勝ち分をすべてをカジノへと返上していた。つまりは現在、銭なしさんだ。

にしても……いや、何故とは問うまい。シアの不思議ちゃんは今に始まったことじゃない。

「定臣！ お腹が減ったわ！」

そうこうしているうちに、雛鳥1が騒ぎだした。

「私も」

雛鳥2も静かに騒ぎだした。

「定臣！」

「定臣、定臣」

こんな時、いつもならエレシが謎玉をぽんつと炸裂させて謎ゲテ料理を振舞ってくれるのだが……

肝心のエレシさんは『私達は自由行動の間、近くの雑木林まで赴いてきます』などと言い残すと、ポレフを引き連れ、颯爽と去

っていった。トップマイスターとしての実力を維持するのもなかなか大変そうだ。

そんなわけでエレシとポレフは不在。そして次にお金を持ってそうなるブルブはというと

「私は騎士団の詰め所に挨拶に行く。そのまま自由行動の間は、この街の防衛に貢献しようと考えている。……カワシノ、二人の護衛は任せたぞ」

などと如何にも彼女らしい言葉を残すと、悠然と歩き去っていった。

そんなわけで今、この場に残っているのは一文無しの少女が二人と見た目は女、頭脳は男、というか男な俺、川篠定臣の三人だけだった。

ふむ、にしても今までの路銀のすべてをエレシに負担させていたとは、我ながらお恥かしい話である。

これはよくないなあ……

おかしかったことに気付けば後は至って単純な解決策だ。俺はそと二人の頭に手を置くと、にこやかに言い放った。

「お金がないなら稼げばいいわ」

「どこの女王かつ」

即座に様々なものを超越したつつこみが？まさむね？に乗って飛んでくる。それを軽く回避すると、そのままシアを抱き上げた。

「むう …… 不覚」

「いや、ほんと謎子ちゃんだわ、シア。もしかして地球人だったりする？」

「知らない」

「はい、嘘！今のつつこみは明らかにおかしいよ？」

「さあ、なんのことやら」

「シアさん？」

「…… きゃ~~~~~!!! 誰か助けて!!! 同性愛者の変態がワキワキと私の脇腹を撫で回してくる~~~~~!!!」

恐ろしい冤罪を見舞われた。

まあそれから……俺達は様々な金策を試してみることになったんだ。

え？ 泣いてないよ？

え？ うん、大丈夫。ちょっと後日、あのサダオミ・カワシノは同性愛者らしいって噂がラナクロア中を駆け巡ることになっただけだから。

うん、大丈夫だ。 あは、あははは！ あはははは！！

こほん。

さて、最初に試した金策はなんだったかな。

そうそう、まずはとりあえず腹ごしらえをしたってことで、お食事処チックなお店でウェイターの的なことでもすれば、まかない料理の一つにもありつけるだろうってことで適当な店を見繕ってお願いしてみたんだ。

にしても、我ながら無理のある話だった。普通に考えればいきな

り店を訪ねて、一日だけ雇って欲しいなどという要求が通るはずがない。

『ちよつと！？ あんたサダオミ・カワシノじゃないのかい！？
それに後ろの！ シア・ナイ！？』

ほらね。

…… あれ？

まさかの即採用。正直、この時ばかりはクレハの愚行に感謝した。無駄に高められた知名度に魔示板を駆使しての面割れ。よくTV番組で芸能人がご夫婦経営のお店に顔を出し、無理な要求を笑顔で承諾して頂いているところを見かけるが、それにかなり近いものを感じた。

そんなわけで、その日はその店でバイトしながら昼食、夕食をお世話になった。

にしても終始、営業スマイルなのはどうにも疲れる。それに従業員服が何故かメイド服なのも納得がいかない。加えて酒場から流れてきた酔っ払いのセクハラ…… は、シアさんの？まさむね？の餌食となったのでまあいいや。

ともあれ、サキユリアス印で売り込まれ済みな俺達の集客力はなかなか効果絶大だったらしく、一日限りのアルバイトは大盛況のうち幕を閉じることとなった。

閉店後、笑顔で見送ってくれた女将さんにお礼と別れを述べ、一日お世話になった店を後にする。

三人で談笑しながら消えていく街灯に追われるようにして、どことなく歩みを進めていると、話題は今晚の宿はどうしようかという話になった。

先程の報酬のお陰で一晩くらいなら宿屋を利用することもできる。しかしここで贅沢をして明日に不安を覚えるつもりは毛頭も無いと、俺達は意見を一致させた。

結局、その日の宿には星空を選ぶことにした。

ごめんなさい。野宿です。格好つけました。

勇者を目指して I I

翌朝。

鞆の町、シイラの外れに悠然と聳え立つ巨木の下、鮮やかに剣を振るう女性が一人。

一目に万人を魅了するその美しい剣技も、人通り皆無な早朝においては誰からも賞賛を得ることは無い。

凜とした静けさの中、女性の振るう剣の音だけが空気を裂いて木霊する。

その眼差しはどこまでも高く。そしてどこまでも未来を見据えていた。

どれくらい剣を振っていたらうか。不意に女性が剣を振るうその手を止め、そしてにやりと笑った。

「ん、一步前進」

自覚すると共に川篠定臣は小さくそう呟いた。

こと鍛錬において彼女 …… 彼はある種の枷を自分に課している。

そして自らの信念にも通づるその枷を、自身の満足がいく形で振り払えた時、彼はどうしようもなく上機嫌になった。

彼が鍛錬に求める唯一は進化。

求める歩幅は百分の一ミリにも満たなくて構わない。ただ維持ではなく常に進化することを。

彼はただそれだけを追い求め、日々を邁進する。

進化は時が進むにつれ、振り幅を小さくしていく。それは彼の剣技が完成形へと昇華されていく証明でもあった。

しかし

それを彼は赦さなかった。

こと鍛錬において、彼はどこまでも前向きであり、そしてどこまでも貪欲だった。

完成は終焉であり、進化の打ち止めを意味する。それは彼にとって実に残念なことであり、なによりも彼が愛する？面白いこと？に反して、面白くないことだった。

故に彼は口ずさむ。
昨日よりも僅かに進化した今日の自分に自ら太鼓判を押す。

「まだまだ面白いね」

と。

ふとその時、一陣の風が吹き抜けた。

さらりと流された前髪を手で掻き分けながら、定臣は空に向って刀を一閃する。

一瞬の反射を受けてきらりと光った刃は、次の瞬間には背中の鞘に納められていた。

「ん、そろそろ起こそうかなあ」

そう口にして巨木に振り返った定臣の背後に、はらりと木の葉が舞う。

次の瞬間、木の葉は縦二つに割れ、そして横に無数に分断され散り散りになった。

朝の鍛錬を終え、雛鳥達の下へと歩み寄る。

そこにはシイラの町並みを見下ろすかのようにして一本の巨木が聳え立っていた。

置いてけぼりな俺達 …… つまるところの俺、ロイエ、シアの三人組は話し合いの結果、昨晚の寝床にこの場所を選んだ。

それにしてもこの樹が在ってくれて良かった。

一晩、背中を与ってくれた場所にそっと手を添え、優しく撫でながら大きく頷く。

昨日は満天の星空を遮り、煩わしく思った青く茂ったその手も今はどこか愛おしく感じた。

お陰で雨を心配しなくて済んだ。

そしてなによりも？お前？のお陰で二人を護衛しやすかったよ。

どこか感傷的にそんな風に仕草で語りかけてみる。

「で、樹と友情を深めるところ申し訳ないけど」

不意に頭上から声が降り注いできた。

なんとか恥ずかしいです。子猫に優しく話しかけているところを目撃されたような恥ずかしさです。

「お、起きてたのかいい！？ シア」

見上げた先には無機質な瞳が体育座りをしていた。

というか目が合うなり、なにやら人差し指を立てて『チッチッチ』とか口ずさみながら左右に振り始めた。

「相変わらず朝から不思議ちゃんだなあ」

この謎子ちゃんの唐突な不思議動作はいつまで続くのか。呟きながら僅かに興味が湧いた俺は、しばらくその様子を観察してみることにした。

「チッチッチ」

「……」

「チッチッチッチ」

「……………」

「チツチツチツチツチツ」

「……………」

「チツチツチツチツがつ!?!」

「噛んだ!?!」

「うう……………」

「むしろどうやって噛んだ!?! 噛むほどのなにかがあったのか!?!」

「……………ちっ!」

「舌打ち!?! 今舌打ちした!?!」

「してない」

「ええ!?!」

「…………… そういえば先日、ポレフに 『お前、シスコンだろ』 と
言ってみました」

「え、いや、話題急にそれ」

「するとポレフは悪びれもせず、こつこつ言ったのです」

「まあなんとというかストレートに言いすぎだろう……で？　なんて言っただんだ？」

「そんなことよりも定臣、おはよう」

「ん、おはよ……って、ええ！？　今ので話終わり！？」

「とじろで定臣」

「会話が成立しないだ！？」

「……………」

「む？　どうしたシア」

「……………」

謎の沈黙きたこれ。

いや、待て。この沈黙の意味はなんだ？　もしかして今のつつこみがまずかったのか？

小首を傾げながらシアを見る。相変わらずに無表情ではあるが、口元が僅かに緩んで見えるあたり、どこか上機嫌なようにも見える。

ならばこの沈黙はなんだ。ますますわからん。

いや、むしろわからないからこそそのシアか？　ってなにが言いたいんだ俺。

「刀」

小首から大首を傾げそうな勢いだった俺の反転運動を止めたのは、シアのその一言だった。

次の瞬間、シアに意識を引き戻された俺は驚くことになる。

「綺麗だった」

シアは微笑んでいた。

わかるか？ あのシアが笑ったんだぞ？ それも余所行きのスマイルじゃなく？素？でだ。そりやもう俺は驚いたね。

どれくらい驚いたかって？ そりや次の俺を見てくれればわかる。

「見てたのがっ!?!」

「うん …… 噛んだ」

「そこ！ 自分もさっきやったんだから笑わない!」

「あははは」

にしても？剣？じゃなく？刀？ねえ ……

やはりシアはこのラナクロアの住人ではないらしい。この時、そう確信した俺であったが

「ん、それじゃそろそろロイエも起こそうか」

珍しく愛らしい笑顔を見せているシアにそれを告げるのもどこか野暮な気がして、なんとなしにそんなことを口にした。

のだが。

「…… ああ、あの不思議生物」

直後にぼそりと耳に飛び込んできたシアのその発言に、先程、反転途中で制止された大首になりかけた小首を大いに捻らされることになった。

にしてもシアに不思議と言わしめるロイエって一体……

捻った首のままにシアを見つめてみる。どこか虚ろな瞳でニヒルな笑顔を浮かべたシアは、次の瞬間、ゆっくりとある一点を指差した。

「ふおっ!?!」

シアの指差した方向を見た俺の第一声である。

そこに佇んで …… いや、ぷらんぷらんとぶら下がっていたのは、一見して巨大な芋虫のようで、やはりどう見ても芋虫だったわけ、いや、よく見るとあれは ……

「おい、その謎寝袋に包まったまま、何故か木から落下した挙句、安全ロープで危険な状態に陥ったまま半円運動を繰り返している少女よ」

そんな感じの状態に陥っているロイエだった。

「うう …… み、見つけたなら早く助けなさいよおおお!」

「むしろどうして今の今まで助けを呼ばなかった」

「そんなつつこみ今はどうでもいいのよおおお!」

「むしろどうして今の今まで助けを呼ばなかった」

「待って! ほんと助けて! 同じテンポで繰り返さなくていいから! そんな芸いらないから助けて!」

やれやれ、どうやら本気でやばい状態らしい。

まあそんなわけで、無事にロイエの救出を終え、その後、実は木から降りられないことを実に堂々と告白したシアさんを抱え降ろしたところで朝の一幕は終わりを迎えた。

え？　ロイエがじっと黙って我慢していた理由？　聞くなって、そりゃ野暮ってもんですぜ。

『は、恥ずかしかったのよおおおおおお！……！』

だそうです。

それは朝の一幕を終え、今日の稼ぎはどうしようかと、置き去り三人衆が井戸端会議を始めたその時になってやって来た。

「よ、ようやく見つけましたですー！」

息を切らしながら俺達の前に一人の少女が駆け寄り、そんなことを口にした。

はてさて、この少女はどのどちらさんなのか。三者三様に首を傾げる。

そんな俺達に、一言断りをいれると少女は口早に事の経緯を話し始めた。

「じ、実はこちらの手違いがありました」

聞くところによるとこの少女、この街のとある宿屋の従業員らしく、昨晚から今朝にかけて必死に俺達を探し続けていたそうなの。

「つまり、街に残す俺達を気遣ってエレシの奴が宿を予約しといてくれたってこと？」

「は、はい！ そうなんです！ 昨日、エレシ様よりそう託を承っていたのですが……」

「つまり、天下のエレシ・レイヴァルヴァンに実際に会ったことで舞い上がり、肝心の託を伝え忘れたと」

ぼそりと背後でシアがそんなことを言った。

「す、すみませんでした！ その通りです」

やれやれ、今日も騒がしい一日になりそうです。

昼を回って一息。

遅れてきたエレシの気遣いにより宿を得た俺達は、早々にそちらに拠点を移していた。

「ふい〜、食った食ったあ」

満足気にそんなことを口ずさみながら腹を擦りつつ、新拠点を見回してみる。

にしてもなあ ……

満腹感からくる緩やかな気だるさの中、俺は数分前の出来事に思いを馳せた。

到着前、街の景観から案内される宿は民宿風だろうと決めていた俺の勝手な想像は、到着早々に裏切られることとなった。

そこにあっただのは超一流ホテルそのものだった。

建物の入り口には赤絨毯。ずらりと並ぶスタッフが当たり前障りのない笑顔で丁寧にお辞儀をして客である俺達を迎え入れる。

呆ける一般庶民な俺。実に慣れた様子で迎え入れられるロイエ。何故かスタッフに紛れてお辞儀しているシア。

そういえばロイエはリトルプリンセスだったとか、なんでシアはそっち側の人間になるうとしているのかとか、様々な思考が浮かんでは消えていく中、あれよあれよと手を引かれホテルの中へと招き入れられる。

そして？御詫び？と称されて出された無駄に豪華な朝食。優雅な音楽鑑賞を経て、振舞われたのはこれまた豪華な昼食。

なんなんだこれは ……

超一流マイスター？エレシ・レイヴァルヴァン？御用達。

このフリーズが伊達ではないことをまざまざと見せつけられる」ととなつた。

「サダオミ！ それはさすがにはしたないわ」

ロイエのその声に意識を引き戻される。その隣ではシアが俺を真似て腹を擦っていた。

「ふい〜、くたくた」

若干違う。

「シアはなにを疲れてるのよ」

「にしてもロイエは元気だなー、飯食うなりよくそんなにつっこめるよ」

「別に元気とかあんまり関係ないわ」

「にしてもロイエはチビだなー、やっぱりチビだなー」

「シア、あなた僕と背、変わらないじゃない……」

確かに改めて言われてみると、ロイエとシアの身長差は大して違
うようには見受けられない。

にも関わらず、何故かロイエがチビに見えてしまうのは最早それ
が彼女のアイデンティティであるとした説明できないだろう。

そんなことを思いつつ成り行きを見守ってみる。

ロイエの素早い切り替えしに応じるようにしてシアが指を横に寝
かせる。そしてそれを徐にロイエの頭のとっぺんへと這わせた。

「うっ？」

惚けた声を上げたロイエを置き去りに、今度はその指を自分の顎
下へと寝かせる。

「身長差ほそ」

「ちよ！ 今、明らかに頭1つ分下がったわよ！？ そもそも僕と

君とじゃ指一本分くらいしか変わらないじゃない！」

なにやら愉快的やりとりだった。

そんな二人のやりとりをしばらく、ぼんやりと眺めてはいたものの、二人にとってその話題はなかなか譲れないものがあるらしく、まだまだ死闘は繰り広げられそうな様相を呈していた。

やれやれだな。

あたふたとシアに立ち向うロイエの頭を軽く撫でる。それからゆつくりと席を立ち、『この指は一本ではあるけれど、その差は天地よりもある』などと台詞だけ聞けば名言に聞こえなくもないシアの発言をBGMに散歩へと出かけることにした。

ああ、駄目だな。どうにもシアの謎行動や謎発言を語ると長くなつていけない。

確かマリダリフが合流するまでの経緯を話していたはずだった。

そう、マリダリフとはこの後に始めるアルバイトで再会を果たすことになったんだ。

まあなんだ。軽い腹ごなしのつもりで出かけた散歩先でファンだの、愛してるだのと見知らぬ男共に言い寄られた俺は、昨日のアルバイト（メイド服姿）を大いに後悔することになった。

そして戻るなり、次の金策は接客以外がいいです。と頑なに提案したわけだ。

で

『けっ！ てめえがサキュリアスのS判定じゃなけりや門前払いしてたところなんだがよっ！』

？旧傭兵雇用所？の受付のおっさんは相変わらずに不機嫌だった。まあ俺が原因なわけだが、その時の俺はそんなことに気付いていない。

「なんだよー。そんなこと言うなよー」

『とつとと行きやがれってんだっ！』

そんなわけで、受付のおっさんに嫌々感たつぷりに仕事を斡旋してもらった俺達は詰め所に待機しているルブルブに一言断りを入れて初の傭兵任務ってやつに挑んでみることにしたんだ。

サキュリアスSランク傭兵。

社長？クレハ・ラナトス？の独断と偏見により突如指名されるその特別な階級は副社長？ライアット・サリス？の徹底的な精査を経て、ある日、突然、もちろん本人の意思など関係なく各街のサキュリアス魔示板にて公表される。

そうだった理由から定臣は初回Aランクから突然、Sランクへと昇格させられていた。

その事実をここにきて初めて聞かされた定臣ではあったが、既にクレハ・ラナトスの人となり慣れ始めている彼の反応は『またあいつかあ』と実に淡白なものだった。

サキュリアス傭兵ランクがそのまま野良傭兵のステータスとなることは以前、記述した通りである。

その理に基づいて、嫌々ながらも？旧傭兵雇用所？の受付担当者は定臣達にいくつかの任務を提示した。

計十五種。こういった選択にはいつも苦勞させられる定臣はうんと頭を悩ませる。そこをすかさず『そのカードは私の物だ』と言わんばかりにシア・ナイが百人一首大会ばりの速度で任務内容が掲示されているカードを弾き飛ばす。

すこんと鳴る小気味良い音色。

弾き飛ばされた任務カードはものの見事にロイエル・サーバトミンの額に命中していた。

「シアはたまに酷いと思うわ！」

依頼人との待ち合わせ場所へ向う道中、ロイエルは不服そうにそんなことをぼやいた。

「今のロイエは私より背が高いかもしれない。もしかしたら」

「それたんこぶの分だよね!? しかもそれでも?もしかしたら?なの!？」

いつもと変わらない二人の様子をどこか嬉しそうに眺めつつも天使、川篠定臣は先程請け負った任務の内容を再確認していた。

ちなみに先程、ラナクロアの文字が読めない定臣のために呆れながらもロイエルが丁寧に任務内容を音読するという一幕を経ている。もちろん額を擦りながら。

?カテゴリー：討伐?

シイラから東へ半日程、進んだ先にて建設中の野営地を賊に占拠された。

貴社にはただちにこれの排除を依頼したい。

尚、我が社のBランク傭兵が一度、討伐に失敗している。賊の生死は問わないものとする。

以上を踏まえた上で適任者の派遣を希望する。

サキユリアス副社長　ライアット・サリス

カードには端的にそんな内容が記載されているらしい。

その依頼主には驚かされたものの、即座に得意の脳内変換を済ませて理解に努める。

要はサキュリアスは親会社。旧傭兵雇用所は子会社なのだ。そう置き換えれば、自社の尻拭いを即座にライバル会社である旧傭兵雇用所に依頼するのにも納得がいく。

図体がでかくなれば小回りが利きにくくなるのはどこの世界でも同じことだ。

ならば小回りが利くところに任せてしまえばいい。

サキュリアスのそんな姿勢は実に効率的であり、如何にもクレハらしいと苦笑する。ともあれ、そのお陰で仕事にありつけた。

そんなわけで、賊に傷つけられたサキュリアスの面子を取り戻すのが俺達の役目らしい。

「これは驚きました」

言葉とは裏腹の無表情で出迎えられる。

ライアット・サリスは一度、定臣達に確認をとると一呼吸置き、

実に事務的に話を進め始めた。

そんなライアットの姿に定臣は背筋を伸ばす。

「交わされたのは？契約？であり、これから自分達が従事するのは？仕事？であると。」

「そしてその？仕事？には？死？が付きものであるのだと。」

「一通りの指示を終えるとライアットは付き人に呼ばれ、去っていった。」

「凜々しいままに小さくなっていく背を見送りながら定臣は改めて気合いを入れる。そして両脇に控えていた二人の頭をわしゃわしゃと撫でながら東の方角へと歩み始めた。」

「さて、いつちよやりますか！」

「移動開始から僅か一時間。定臣達は現地に到着し、遠巻きに目的地である野営地を眺めていた。」

「ん、あれ相当、腕が立つなあ」

「野営地を占拠している賊を見て、定臣がそんな感想を漏らす。そんな定臣の背にはロイエルがおぶられたままの状態でガタガタと小刻みに震えていた。」

「ま、また……舌嚙んだわ」

「ロイ工は？きやああ？だの？ああああ？だのと叫びすぎ。そう
なつて当然だと思つ」

それを呆れ顔で見下ろしながらシアがそんなことを言う。

「というかサダオミは色々とおかしいと思つ」

「俺！？」

「肩車におんぶ。それであるスピード？意味がわからない」

「ちょ！？走るのめんどいつて言ったのシアじゃん」

「他に移動手段があつたと思つ」

「そうは言つがメへ車借りるの高かつたしなあ」

当然ながら依頼を受けた傭兵は現地まで自己負担の元、赴くこと
となる。その際、最も一般的な方法としてメへ車を利用する者が多
い中、定臣が選んだ移動手段はロイ工をおぶり、シアを肩車した上
でただひたすら走るといふ実にキテレツなものだった。

「さて」

一頻りの苦情を聞き終えそう前置きする。がらりと変わった定臣
の雰囲気。ロイ工とシアは目を見張った。

「んじゃ、ここでちょっと待ってて貰えるかな？」

「却下」

「なに言ってるの？」

予想通りの反応を示した二人に思わず困り顔をする。

こういった荒事は出来ることならば自分だけで引き受けたいものなのだが……

「ぐあっ」

顎に手を当て、そう思案していた定臣の首にロイエルのチョークスリーパーが鮮やかに決まる。

「僕達は仲間！ ボ・ク・タ・チ・ハ・な・か・ま！！ わかった？」

「わ”、わ”がっだ」

「よろしい」

やれやれだ。

しかしながらロイエルが充分に戦力になることは既に証明されている。ならばここは本人の意思を尊重しよう。それにロイエの口から自然にでた？仲間？というフレーズがなんともこそばゆくもあり、嬉しくもあると定臣は自分を納得させた。

「ん〜、でもシアは……ぐあっ」

言いかけた定臣の頭上から今度は鮮やかなチョップが降り注ぐ。見上げた先にはなんとも不服そうなシアの顔が浮かんでいた。

「定臣が私をハブにする。これはイジメにほかならない」

「そうは言うがシア、お前に戦闘は無理だつて」

「それは決めつけ」

「いや、でもほら、実戦で？まさむね？とかほんと無理だから」

「定臣はわかっていない」

「うっ？」

直後、定臣は思い知らされることとなる。

こいつを説得するのは無理だ。と

そしてその一言こそがシア・ナイがシア・ナイたる所以であった。

「私は戦闘は苦手だけれど」

「うっ」

「その気になれば私の？まさむね？は魔王すらも打ち倒す」

「ないわああああああああああああ」

どんと言い放たれたシアの爆弾発言にとりあえずのつつこみをいれる。それと共に妙な諦めがついた。

「わかったよシア。一緒にいくか！」

こうして置いてけぼり三人衆の放浪記は終局を迎えることとなった。

サキュリアス シイラ東野管建設予定地。そこには現在、縄で括られたサキュリアス社員と？賊？である男達の姿があった。男達は皆、敵つい身形をしており、武器を手に瞳に殺気を点しながら息を潜めてなにかを待ち構えている。

『で、アニキ。 本当にジョルジユの爺様が来るんですかい？』

不意に男の一人が言う。男の視線は奥のテントの方へと向けられており、その暗がりには大剣を携えた男が真剣な面持ちで鎮座していた。

『ああ、来るさ。 先刻、撃退したのがサキュリアスBランク。

次は特例でうちに頼る番だ。 で、近場に控えてるAランク以上となると ……』

そう言うと男は立ち上がり、そしてにやりと笑った。

『おゝ、おゝアニキ。 気合い入ってやすね』

『ああ、あの爺様とやり合うのは久方ぶりだからな。 お前らも真剣にやらねえと胴と頭が？さよなら？すんぞ！』

『うへえ …… たたく？賛成派？だの？反対派？だの俺はどっちでもいいつてのによお』

『そう言うなアイガ。 こういった仕事は？わかってる？傭兵が請け負わないとなにかとうまくいかない。 それに爺様はその点よくわかってるさ …… まあ、その上で本気だから性質が悪いんだがな』

『とか言いつつ嬉しそうだしなゝアニキ』
にやりと。

『くくつ、嬉しいぜ！ 血が滾る！ 傭兵冥利に尽きるってやつだ』

そう言う男は大剣を天へと突き上げる。そしてそのまま勢いよく地面へと叩きつけた。

『だあゝ！ アニキ！ またテント一つ吹っ飛んじまいやしたぜ！』

『やべっ！ 後で請求されるじゃねえか！』

『知らねーですよ！ アニキがやったんですよ！』

『え？ うそ？ あれ最初からああだったって』

『ばつ！ また悪い癖出たよ！ ああ〜もうこの人は！』

ふとその時、不意に大剣の男の表情が変わる。その意図するところを瞬時に察し、他の男達も表情を引き締める。

『…… 来たな。 今回は随分と早い御出座しだ』

『ええ、来したね』

『…… うし！ いっちょ、やったるかい』

そう言うと男は羽織っていったローブを翻す。その脇からはちらりと隻腕が顔を覗かせていた。

「…………… 気付かれたな」

昏倒する五人の男達を見下ろしながら定臣は小さく呟いた。

門番二人に警邏に当たっていた男が三人。それらを気配で探りながら一箇所に集まるのを淡々と待ち続けること十数分。好機の訪れと共に音も無く飛び出し、知覚される前に意識を刈り取る。それらの動きを完璧にやり遂げたはずの定臣の第一声が先程のものである。

「やれやれ、手練ばつかでヤになるね」

「ちょっと！ 定臣！ 僕も出番が欲しかったわ！」

「しっ！ ロイエ、声大きい…… にしても」

タイミングは完璧だった。にも関わらず先程の自分の動作に反応を示す者がいたことが気にかかる。

敵の眉を動かす程度の小さな反応に定臣は過敏なまでに警戒心を強める。そしてその警戒心は直後に野営地奥の気配が一瞬のざわめきを見せたことにより、一つの確信に変わった。

敵は強い！

だからこそ直後に自然と発せられた定臣のこの言は、自らを鼓舞すると共に自らが選択した？立ち位置？を切り替えるスイッチの役割を担っていた。

「ロイエ、シア」

「う？」

「なに？」

「超本気でいくわ。 お前らには指一本触れさせない」

その宣誓は？天使？川篠定臣の現在進行形の立ち位置を？助っ人？から？守護者？へと変えた。

『静かすぎる』

定臣の宣誓から数分後、野営地奥ではマリダリフ・ゼノビアが訝し気にそう呟いていた。

『確かに。あの？炎帝？の登場にしちゃ～お淑やか過ぎやすねえ』

『ああ……既に16人か』

『ええ。強さは間違いなくジョルジュの爺様級でしょ』

『くくつ、新参者で見所のある奴でも出てきたのか？楽しいねえ』

『あ～あ、めんどくさ～。話のわかる奴ならいいんですがねえ、つつかどうせすぐにサキュリアスに囲われるでしょうよ、いつものこと、いつものこと』

『その前に爺様に殺されるだろうよ。フリーにも最低限のマナーはある。？反対派？絡みの任務に新参者がしやしやり出るのはなにかとまずいだらうよ』

『あ～、確かに。ジョルジュの爺様はそのへん五月蠅いですからねえ』

『まあ、その前に』

マリダリフはにやりと嗤う。彼がこの顔を見せる時は決まって戦闘前のことだった。

『腕が無けりやここで終わりだ』

『あゝあ、その顔出ちゃったよ。こりやお相手可哀想だわ』

肩を竦めるアイーガを背にマリダリフは大きく息を吸った。

『よし！ お前ら！ そろそろ出番だ！ 出るぞ！』

『『『『『おっす！！』』』』』

その掛け声に呼応するように野宮地周辺の殺気が増幅していく。こうして？天使？川篠定臣と？隻腕の剛剣？マリダリフ・ゼノビアとの大一番は幕を……

『アイーガ』

『うっす』

『戦闘前にお前に一つ言っておくことがある』

『うっす』

『お、俺、この戦いが終わったら結婚するんだ』

『そうですかい』

アイーガはなんとも手馴れた様子でマリダリフの言葉を聞き流す。そして意気揚々と歩み出て行くその背中を虚ろな瞳で見つめながら

『っていつかアニキ、既にフラレてますって』

ぼそりと呟いた。

こうして改めて？天使？川篠定臣と？隻腕の剛剣？マリダリフ・ゼノビアとの大一番は幕を開けた。

最新話：その男、隻腕につき（前書き）

お気に入り感想ありがとうございます！（・・）
なんかノリノリに書き上がったちゃいましたのでアップします。

珍しく戦闘シーンなので少し長目になっちゃいましたが、ここは勢い重視で分割せずにいきたいと思います。

お楽しみ頂ければ嬉しいです！ ではでは

最新話：その男、隻腕につき

一対一への拘り。

そんなものはこの片腕と共にとっくに失っている。

マリダリフ・ゼノビアの名は残念なことに一時代の敗者として世に名を馳せた。

そしてその決戦の果てに俺が得た教訓とは……

『お前ら！ 陣形をしっかりと保て！ 敵の動きにいちいち翻弄されてやるな！ 崩してくる反対の方角が本当に攻め込みたい方だ！』

野営地内部に檄が飛ぶ。背水の陣で迎え撃ったはずの侵入者の姿を捉えられないことに、マリダリフは内心で焦りを感じていた。

『ちっ！ 魔法の類じゃねー！ すばしっこいだけだ！ しっかりと包囲していけ！』

声の傍から人垣が崩れていく。薙ぎ倒される人垣だけが侵入者の移動経路を知らせてくる。

『ぶざけたスピードだ』

そう呟くとマリダリフは熱くなり始めていた自分をゆっくりと宥めた。

敗戦の苦汁は一度でいい。剣士としての自分では未来永劫？奴？には届かない。だからこそ自分はこの？道？を突き進むと心に極めた。

頭の中で想いを反芻する。そして大きく息を吸うとマリダリフは倒れ行く人垣の先に殺気を迸らせた。

『その足が邪魔だろうがよ！！』

刹那。

叩きつけられた大剣は爆音と共に爆風を生み、砂煙を上げると侵入者の視界を奪った。

『まあ、これだけじゃ止まらね〜わなっ！』

続けざまに砂煙へと短剣を投げる。豪腕から繰り出された？それ？は唸り声を上げながら砂煙の中へと吸い込まれていった。

！？

ギイン

『つぎけんなよー！』

直後に鳴り響くはずの剣戟は、驚愕に怒声を混えたマリダリフの

声と共に彼の背後から鳴り響いた。

瞬時に繰り出されたマリダリフの連撃を回避し、その背後から一撃を繰り出した視えざる侵入者、川篠定臣。それに対し直感だけで反応し、後手のまま大剣で防いで見せたマリダリフ・ゼノビア。

それが両雄のこの戦闘におけるファーストコンタクトだった。

ギリギリと剣同士が悲鳴を上げる中、マリダリフは視線を背後へと振る。同時に定臣はマリダリフの横顔を確認した。

「ってマリダリフ!？」

『嫁!?!』

大慌てで二人が距離をとる。それと同時に定臣によって無力化された男達がどさり、どさりと倒れこんだ。

「賊ってマリダリフ………なのか?」

「おいおい、マジかよ。アイーガの奴まで瞬殺………いや、殺しちやいねえか」

「マリダリフ?」

「なあサダオミ、今は仕事の最中だ。妻としてはうちで旦那の帰りを待っていて欲しいんだが」

「それは思いつきり! 完膚無きまでに断つただろ!」

「へへっ、照れるなよ」

「つつつかなんてマリダリフが賊なんだよ、シイラで戻ってくるの待ってたんだぞ？」

「…… やれやれだ。なんでサダオミが傭兵やってんのかは知らねえが、どうやら何も知らずにここまで来ちまったらしい」

「む？」

「どれ、傭兵の流儀だ」

マリダリフが殺気を纏う。浮かべる表情からは見て取れない？それ？を瞬時に感じると定臣はさらに距離をとった。

「ちょ！ 待て、待った待った！ なんで俺とマリダリフg

！？？」

言い終える前に大剣が咆哮を上げる。それを即座に受け流しながら定臣は話を続けた。

「うわつとと …… 待てつて！ だからなんで ……」

「なんでもクソもねえよ！ お前はこの拠点を奪還しに来た！ 俺はこの防衛を依頼された！ 傭兵が戦うには充分過ぎる理由だろうがっ！」

痛烈な横薙ぎが飛ぶ。それを屈伸運動で回避しながら定臣は更にマリダリフに疑問をぶつける。

「いやいや、だからなんで傭兵同士が戦うんだよ？ 同じ会社に雇

われてるんだろ？」

「違うねえ …… なんだってそんな無知でここまで来ちまったんだよ、つたく」

縦一閃。苛立った様子で振り抜かれたマリダリフの一撃には明らかかな殺意が籠められていた。それを定臣は後方ひとつ飛びに回避する。

「なあサダオミ」

冷酷な瞳が定臣を捉える。

「可愛い後輩に先輩から一つだけ忠告してやる。傭兵は依頼人の意思を汲む。依頼人次第で悪魔にもなるものなんだぜ？」

自分に向けられたことの無いマリダリフの冷酷な瞳に定臣は思わず沈黙する。

「お前は確かにいい女だ。だがそれとこれとは別問題だ」

傭兵が敵同士として戦場で出会うこと。それがどういふことかをマリダリフは殺気で定臣に知らせる。それを肌で感じとった定臣の反応はやはり困惑したままの様子だった。

「マリダリフ ……」

訴えるような瞳でマリダリフを見つめる。普段ならばすぐに赤くなり、俯くであろう彼の反応は至って無反応に近いものであり、その冷酷な殺気を増幅させたようにも感じられた。

『プロはプロの仕事をしないとねえ』

不意に定臣はクレハのそんな言葉を思い出していた。

「なるほど」

小さく呟く。

応じるべきなのだろう。なによりも武人としてあの男と剣を交えたくもある。

自身の中に混在している修羅がそう語りかけてくる。同時にいつもそれを凌駕している自制心が働きかけてくる。そして葛藤の末に定臣はゆっくりと剣を下ろした。

そもそもがマリダリフと再会するまでの時間潰しの意味合いで、軽い気持ちで請け負っただけの傭兵家業である。その目的が果たされた上で？ 賊？ の正体が雇われただけの傭兵とわかった今、自分とマリダリフが戦う理由など皆無である。

しかしながら定臣の至って冷静なその判断は

「戦いにいちいち理由を求めるんだな！ はっ！ ど素人が！」

次のマリダリフの言葉で180度覆されることとなった。

「俺は依頼された任務を遂行するって言ってんだよ！ 守れと言われれば守る！ 殺せと言われれば殺す！ だから殺す！ わかってんのか？ お前を殺した後は遅れて近付いて来る二人も殺すって言

「ってんだぜ！」

言い放った直後、マリダリフは逃げ出したくなる程の悪寒を感じることとなる。対峙している定臣の顔からは表情が抜け落ちており、どこか能面にも似たその無表情はただひたすらに自分を捉えていた。

「こいつは今、なんと言った？」

血が

遅れて近付いて来る二人を殺す？ それってロイエとシアのことだよな？

血が冷めていく。

「そうか、マリダリフはなにかと死亡フラグを立てる奴だったな」

遠くから自分を見ているような感覚。

「そうだ。俺も一つだけ忠告しておくよ。俺は」

大丈夫だ。俺はすべてを記憶することを選んだ。もう自分の中の時？を止めたりはしない。でもな小夜子、今この時だけはお前のためじゃなくあの二人のために剣を振るうことを許してくれ。

「山賊は嫌いなんだよ」

「山賊は嫌いなんだよ」

対峙する剣豪がとてつもない殺気を放ってきやがる。

惚れた女を怒らせて喜ぶ程、幼稚なわけじゃない。だが俺はサダオミにあえて怒らせるようなことを言った。

一対一への拘り。

捨てたはずの信念が疼きやがる。望まずして遭遇した今の状況に血が滾る。

こいつの？本気？見てみたい。そしてそれを凌駕してみたい。

くくっ、心底そう思っぜ。お前は本当に最高の女だ。そしてそれ以上に好敵手だ。

「ほら、来いよ!」

大剣を肩に抱える。失ったはずの左腕がじくじくと疼き始める。それを庇うようにゆっくりと懐に忍ばせる。それで俺の臨戦態勢は整った。

「ほら、来いよ!」

「言われなくてもいく」

それは一瞬の出来事だった。

マリダリフは前方から聞こえた定臣のその声を同時に後方からも聞く。慌てて振り返ろうとした次の瞬間には視線は地面へと這わされていた。

「む…… 無茶苦茶なスピードだ」

常人ならば昏倒しているであろう定臣の一撃を唇を噛み切り、意識を繋いで凌ぐ。

「く…… くくつ、まあ代償は痛かったが…… とりあえずそのスピードを潰させてもらった」

ゆらりと立ち上がり言う。苦痛に片目を閉じながらそう言い放つ

たマリダリフの視線の先には、右脚からじわりと血を滲ませる定臣の姿があつた。

それは正に捨て身の攻撃だった。直感による反応で辛うじて定臣の動きを感知したマリダリフは一瞬の判断を余儀なくされる。一歩間違えれば終焉を迎えていたその賭けに彼は傭兵としての自分のすべてを託した。その結果、見事に定臣に一矢を報いたのである。

「つたく、無反応かよ」

常人ならば痛みに悶絶するであろう大腿部への一刺し。それに反応を示さない定臣に嫌な予感を覚えるとマリダリフは続け様に連撃を繰り返す。

「出し惜しみは無しだ!!!」

咆哮を上げる大剣。一撃は地面を爆ぜると無数の小石を流星と化する。そしてその流星群に向つて失つた左手を翳すとマリダリフは高らかに宣言した。

「次はその良すぎる？目？だ！なに、心配するな！今後のお前の人生、俺が面倒みてやるからよっ！」

射出される。無数に飛ばされた短剣は繊細に流星を弾き跳弾させる。そしてその一つ一つが後方へ回避する定臣を追走する。通常ならばそれすらも回避する定臣であつたが潰された足ではそれは叶わなかつた。

故に定臣は回避を諦める。そして一際、身に纏う剣気を増幅させた。

刹那。

迫り来る流星群。それを正眼の構えで迎撃する。僅か数ミリ単位の隙間を一瞬にして広げていく。一秒にも満たない時間でそれをやり遂げ潜り抜ける。

その先で柳の構えをとっていた定臣に続け様にマリダリフの一撃が襲い来る。

「爆ぜろよ!!」

頭上からの縦一閃。全体重を乗せたその一撃はあらゆる受け流しを無効にする。それを見上げると定臣を大きく体を沈ませた。

「……………」

痛がるのは後でいい。

剣を交わせば想いは自然と伝わってくる。想いには想いで応えなければならぬ。

だから

!?

一陣の風が空へと駆け抜ける。

「ちい！ 案の定、俺の負けかよ。　　ったく将来は尻に敷かれそう
だぜ」

地面を穿った直後、爆音と共に空を見上げるとマリダリフはそう
呟いた。

「がっ!?!」

天空を舞う定臣が剣を背に納めると、マリダリフの全身から鮮
血を噴出したのは同時の出来事だった。

「……………」

音も無く着地すると定臣は太股に刺さった短剣を抜く。

「つつう! …… ったく、マリダリフの奴。マジで手加減無し
なんだもんなあ」

背後に横たわるマリダリフを恨めしそうに見下ろしながら定臣は
そうごちった。

「あ、そうだ。一つ、つつこみ忘れてたわ」

そう言うと定臣はマリダリフの元へと歩み寄る。そして除にしゃ
がみ込むと、俯いている後頭部をぺしぺしと叩き始めた。

「お・れ・は! お・と・こ・だ!」

やれやれだね。

「ちよ、ちよつと〜! 定臣い! 置いていかないでよ〜!」
「速過ぎる定臣は死ぬばいいと思う」

そこによつやくロイエルとシアの二人が到着した。

「ちよ！ シアさん何気に酷いこと言いましたよね!？」

「言っていない」

「え〜」

「つて！ 定臣！ その脚大丈夫なの!？」

「う?？」

ロイエの促すままにゆつくりと視線を下ろす。

「!？ ソウイエバ」

「あ、面白い顔になった」

「い、痛そうね」

「いったああああああああい!!!!!!」

こうして俺とマリダリフの一戦は決着を迎えた。後になってわかったことだが、マリダリフの任務は俺が取り巻きを処理している間に契約時間を満了し、完遂されいたそう。

つまりだ。俺と戦う必要は全くもって無かったわけだ。ったく、こちらら熱いのは嫌なんだっての、これはあれか？言うべきなのか？

ふう …… 男の子だねえ ……

ってあいつはどっちかって言うとおっさんか。

ともあれ俺達はこの後、意識を取り戻したマリダリフ+傭兵達と一緒に和気藹々とシイラまで帰還を果たしましたとさ。

こんな感じで置いてけぼり三人の珍道中は終わりを迎えた。

シイラに戻った先ではまあ …… また厄介事が待ち受けていたわけだが、それはまた別のお話ってやつだな。

最新話：その男、隻腕につき（後書き）

今日もご一読ありがとうございます。しばしの時間、同じ世界を共有出来たことを嬉しく思います。

ご意見ご感想、各種批判などございましたらお気軽にお願い致します。

次回更新はやはり仕事と気力次第です（．．．）ゞ

一ヶ月は空けません！

空けません勝つまでは！（え

あつ、なんかゴロと勢いだけで言ってみましたすいません。

え？もちろん今は後悔している（キリッ

あゝ…… 時間的にテンションがおかしい！

誤字脱字あれば明日訂正していきます！

では、おやすみなさいませ！

ひゃゝ！三時間後には仕事だゝ！寝よ寝よゝ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3696/>

神様機構

～悠久なる歯車～

2011年10月7日09時19分発行